

ブラジル全史

佐藤常蔵 著





ブラジル発見の標柱

バイア南部、ポルト・セグーロのブラジル発見の標柱は、一五〇三年に、第二回ブラジル探検隊長のゴンサロ・コエーリヨによって建立された。それはポルトガルでつくられたもので、ポルトガル王室の紋章が二メートル半の高さの大理石に刻まれている。ポルト・セグーロは上町と下町から成っているが、ブラジル発見の標柱は上町にある。

まえがき

ブラジル史の研究をはじめてほとんど半世紀になるが、その間多くの史的雑文を書いた。それとは別に系統立った『ブラジル全史』の叙述を思い立ち、執筆にかかって数年がすぎた。しかし幾度か中絶している。

執筆に当って、かなり沢山の文献に眼を通すほかに、いまは故人となった著名の史家と史的人物に直接会って話を聴けたことはよい参考となった。

はじめポルトガルの古典、アレシヤンデレ・エルクラーノの『ポルトガル史』（三巻）を襟を正して通読した。そしてペンを進めるうちに前提のポルトガル史だけで一巻の書となることに気づき、概括的に叙すことにした。およそブラジル史の本筋はいずれの著者のものを見ても大同小異だが、歴史の流れに沿ってそれぞれの時代に登場する主要人物と史的エピソードを別に記述したのが本書の特色といえる。そのために部分的に重複するところもあるが、敢えてその筆法をとった。人物を知ること

よって歴史に親しみがわき、よりよく歴史が理解される
と思われたからである。

この広大無辺のブラジルは地域的に異なる社会、文化、
風物によって複雑なモザイク模様が織りなされている。
そのブラジルはもとを糺せせば一五〇〇年に発見された
にすぎなく、ヨーロッパやアジアの歴史よりはずっと新
しい。しかしその五百年の歴史は色彩と変化に富んでい
る。それは内に磨かれ、外に鍛えられた歴史でもある。
ブラジルを知るにはまずもってその歴史に学ぶ、とい
うのが私の持論である。

この度、トツパン・プレス印刷出版会社代表取締役の
奥山啓次氏の好意で本書が出版されることになり、感謝
と歓びにあふれている。

一九八四年八月

佐藤常蔵

目次

まえがき

第一章 ポルトガルの建国 23

ボルゴニャ王朝の誕生

十字軍とイスラム教徒

アヴィス王朝の創立とドン・ジョアン一世 27

大航海を生んだドン・エンリッケ王子

マデラ島の開拓 36

アソレスの拓殖 43

ドン・ジョアン二世とコロンボ

トルデシラス領土協定線

ヴァスコ・ダ・ガマのインド探検 52

詩人カモンエスと大叙事詩『オス・ルジアダス』 56

ドン・マヌエル一世 59

インド貿易の概況

大航海後期の記録 60

第一章 ブラジルの発見

62

ブラジルの発見

ブラジルの国名とパウ・ブラジル

69

カブラル以前のブラジル探検者

72

カブラル以後のブラジル探検者

アメリカ・ヴェस्पッチ

冒険家ハンス・スタデン

77

中米の探検者ヴァスコ・ヌーネス・バルボア

ヘルナン・コルテス

フェルノン・デ・マガリヤンエスの世界周航

81

ドン・ジョアン三世の植民政策

86

ドン・ジョアン三世の王子

第三章 ブラジルの開拓

91

ポルトガル人とインジオ

マルチン・アフォンソ・デ・ソーザのブラジル開拓団

サントスの創設者ブラス・クーバス

101

ジェズ会の創立

世襲カピタニア

総督府の設置

歴代の総督と副王

サンパウロ村の創設

マヌエル・ダ・ノブレガ神父

ジョゼ・デ・アンシエッタ

ジョアン・ラマリーヨ

リオ・デ・ジャネーロの建設とフランス軍の侵入 136

三代にわたるサルバドール・コレア・デ・サー

フランス人のマラニョン侵略

イギリス海賊の襲来 144

国土開発とジェズイット 150

北東部の開拓

ポルトガル人のアマゾン征服 163

砂糖農園（エンジエーニョ・デ・アスーカル）

第四章 スペイン統治

171

スペイン統治

スペイン統治下のブラジル

178

オランダの北東ブラジル侵略

180

フィリップ・カマロン夫妻

アンデレ・ビタル・デ・ネグローレス

マルチン・ソアーレス・モレノ

ポルトガルの自治権復帰

193

ドン・ジョアン四世

アマドール・ブエノ

セルヴァンテスの「ドン・ケシヨツテ」

第五章 バンデーラの世紀 199

バンデーラの世紀

フェルノン・ジーアス・パエス

アントニオ・ラポーゾ・タヴァレス

マヌエル・デ・ボルバ・ガット 211

ドミンゴス・ジョルジ・ベリーヨ

パスコアル・モレーラ・カブラル

バルトロメウ・ブエノ・ダ・シルバ・フィオーリヨ

黒人奴隷の歴史

215

奴隷の統計

奴隷解放の進展	
黒人文化の影響	224
黒人の宗教儀礼と民族祭り	230
黒奴の反乱（キロンボの歴史）	
ナチビズモ思想と反乱の発生	
ペックマン革命	234
パーデレ・アントニオ・ヴィエーラ	
ブラジル総合貿易会社	
マヌエル・ペックマン	
ゴーマス・フレレーレ・デ・アンドラーダ	
コロニア・ド・サクラメントの創設	241
ユトレシユト条約	
マドリード会議	
エルパルド条約	
サント・イルデフオンソ条約	
バタジヨス条約	
ビーラ・リーカ（オーロ・プレート）の創設	246
ビーラ・リーカの反乱	
アレジャジーニョ	
メストレ・ヴァレンチン	

第六章 反乱と革命

253

エンボアバスの乱

マスカッテの乱

スペインの継承戦争

258

メスエン条約

バルトロメウ・ロウレンソ・デ・グズモン

アレシヤンデレ・デ・グスモン

ポンバル政権と植民地統治

キヤプテン・クツクの探検隊のリオ寄港

266

ミナス革命の陰謀

チラデンテス

274

トーマス・アントニオ・ゴンザーガ

クラウジオ・マヌエル・ダ・コスタ

バイアの反乱陰謀

シプリアーノ・バラータ・デ・アルメーダ

第七章 ポルトガル王室の移転

ポルトガル王室の移転

284

ドン・ジョアン六世

291

ドーナ・マリア一世

297

ドン・ロドリゴ・アントニオ・デ・ソーザ・コウ

チーニョ

ドン・アントニオ・デ・アラウジヨ・アゼヴェド

ジョゼ・ダ・シルバ・リスボア

開港後のブラジルの貿易

303

フランス美術使節

ジャン・バチスト・デプレー

ビトリオ・グランジャン・モンチニー

科学者発明家ヘルクレス・フロレンセ

トウネ子爵

史家アフォンソ・デ・トウネー

ラングスドルフ男爵のアマゾン科学探検

イパネマ製鉄所

314

史家外交官フランシスコ・アドルフオ・デ・ヴヤ
ルニャーゲン

ブラジル地質学の始祖エシユージェ男爵

321

アレサンダー・フンボルトの中南米探検

327

前世紀にブラジルを訪れたイギリス人

第八章 ブラジルの独立 334

ドン・ペードロのフィコ宣言

リスボア議会に臨んだブラジル議員

マソナリア（秘密結社）のブラジルへの浸潤

ドン・ペードロ一世 341

レオポルジナ皇后

ジョゼ・ボニファシオ

イポリト・ジョゼ・ダ・コスタ

独立への道 355

マルケーザ・デ・サントス

ドン・ペードロの独立宣言 361

独立戦争 363

トーマス・コックレーン提督

ジョン・テイラー

ジョン・パスコー・グレンフェル

ペードロ・ラバトウ

修道院を死守したジョアナ・アンジェリカ

女性兵士マリア・キテリア

ブラジル独立の承認

374

フェリスベルト・カルデーラ・ブラント・ポンテス

第九章 第一次帝政

376

第一次帝政（一八三一―一八四〇）

ブラジル皇室の系図

379

ドン・ペードロ一世の第二皇后アメリア・ルーヒ

テンベルグ

ドーナ・マリア二世

385

アントニオ・カルロス・リベロ・デ・アンドラー

ダ

マルチン・フランシスコ・リベロ・デ・アンド

ラーダ

ニコラウ・カンポス・ヴェルゲーロ

フレール・カネカ

ミナスの金山とイギリス人

391

マリア・グレハムのブラジル旅行記	
ブラジルを訪れたチャールス・ダーウィン	400
医師新聞人リベロ・バダロ	
植物学者マルチユース	406
アウギユスト・サンチレール	
ドン・ペードロ一世の皇帝退位	

第一〇章 執政政府 415

執政政府（一八三一―一八四〇）

ジオゴ・アントニオ・フエーリョ	
エヴァリスト・ダ・ヴェーガ	
ラファエル・トビアス・デ・アギアール	422
ベント・ゴンサルベス・ダ・シルバ	
ファラポス革命の女傑アニタ・ガリバルジ	

第十一章 第二次帝政 432

自由党と保守党内閣

オノリオ・エルメット・カルネーロ・レオン	
第二次帝政の経済と文化	440
ドン・ペードロ二世誕生から君主制の終焉まで	
イザベル皇女	450
デュー伯爵	
ジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラニーヨス	
ウルグアイ	455
工業王マウア子爵	
パラグアイ	461
パラグアイの独裁者フランシスコ・ソラーノ・ロペス	
エリザ・アリシア・リンチ	
パラグアイ戦争	467
軍隊村ドウラドースの陥落	477
リアシュエーロの戦闘	
ラグーナの退却	
騎兵隊の父オゾリオ將軍	
タマンダレ提督	
ルイス・アルベス・デ・リーマ・エ・シルバ	
八人の元師の母ローザ・ダ・フォンセツカ	
アンナ・ネリー	493

ドン・ペードロ二世のヨーロッパ旅行 494

日本を訪れたブラジルの皇族ドン・アウグスト・
レオポルド殿下 502

ジョアキン・ナブコ

古生物学者ピーター・ルンド

ミナス鉱山学校の創立者アンリ・ゴルソアー

第一二章 第一次共和制 515

共和制宣言

デオドロ・フォンセツカ元師

ブラジル共和国国旗の制定

ライムンド・テーシエーラ・メンデス

ベンジャミン・コンスタン

キンチーノ・ボカユーバ

実証哲学の始祖アウギュスト・コント

新聞人ランジェル・ペスターナ 525

第一期大統領マヌエル・デオドロ・ダ・フォンセツカ
第一期（後期）大統領フロリアノ・ペーシヨット

フロリアノ・ペーシヨット

クストジオ・デ・メーロ提督

第二期大統領プルデンテ・デ・モラエス

デンテ・デ・モラエス

エウクリーデス・ダ・クーニャ

アントニオ・コンセリエーロ

第三期大統領カンボス・サーレス

534

第四期大統領ロドリゲス・アルベス

549

ロドリゲス・アルベス

科学者オズワルド・クルス

医学者カルロス・シヤーガス

農学者ルイス・ビセンテ・デ・ソーザ・ケーロス

ビタル・ブラジル博士

第五期大統領アフォンソ・ペンナ

565

ルイ・バルポーザ

第二回世界平和会議

第五期（後）大統領ニーロ・ペサーニャ

第六期大統領エルメス・ダ・フォンセツカ

571

シセロ神父

セオドール・ルーズベルトのアマゾン探検

第七期大統領ウエンセスラウ・ブラス 576

ピニエーロ・マツシヤード

アルベルト・サントス・ズモン

第八期大統領エピタシオ・ペツソア 582

ジョアキン・オゾリオ・ズツケ・エストラーダ

第九期大統領アルツール・ベルナルデス 587

第十期大統領ワシントン・ルイス・ベレーラ・デ・ソーザ

ワシントン・ルイス

ジュリオ・プレステス

第一三章

ブラジル外務省の巨人リオ・ブランコ男爵

ブラジル外務省の巨人リオ・ブランコ男爵 597

第一四章 第二次共和制 616

三頭軍事評議会

臨時政府元首ジエツリオ・ドルネレス・ヴァルガス

第一一期大統領ジエツリオ・ヴァルガス立憲政府

エスタード・ノーボ（新国家体制） 624

第一二期大統領エウリコ・ガスパール・ズトラ

第一三期大統領ジエツリオ・ヴァルガス

ジエツリオ・ヴァルガス

ジョアン・カツフエ・ファイリヨ

第一四期大統領ジュセリノ・クビチエツク・ 625

ジュセリノ・クビチエツク

第一五期大統領ジャニオ・クワドロス

ジャニオ・クワドロス

議会制大統領ジョアン・ベルシオール・マルケス・ゴラール
革命政権

カステロ・ブランコ元師

第一五章 産業文化概史 647

コーヒーの歴史

鉄道の歴史 654

サンパウロ鉄道

ソロカバナ鉄道

モジアナ鉄道

ノロエステ鉄道
マデーラ・マモレ鉄道

移民史

678

アソーレス移民

スイス移民村の建設

ポルトガル移民

686

ドイツ移民

689

イタジヤイ平原の開拓

科学者フリツ・ミューラー

ドイツ移民の裏面史・ムツケルスの反乱

イタリヤ移民

702

ポーランド移民

ウクライナ移民

オランダ移民

716

植民期のイギリス人

718

アメリカ移民

サンタ・バルバラのアメリカ移民

日本移民

729

ブラジルに導入された外国移民

ジエレミア・ルナルデリ

フランシスコ・シュミット

サンパウロの移民収容所

文学史

739

前期浪漫主義

浪漫主義

写実主義

自然主義

高踏主義

印象主義

象徴主義

新高踏主義

地域主義

市井文学

ミナス派近代主義

北東部文学

近代主義

後期近代主義

浪漫派詩人アントニオ・ゴンサルベス・ジーン・アス・

史学者カピストラノ・デ・アブレウ

近代芸術週間

音楽史

774

作曲家の巨星ジョゼ・マウリシオ・ヌーネス・ガ

ルシア

ブラジル国歌の作曲家

カルロス・ゴメス

エトール・ビラローボス

美術史（絵画）

789

ビトール・メーレレス

ペードロ・アメリコ・ファイゲラ・デ・メーロ

アルメーダ・ジュニオール

カンジド・ポルチナリ

コハン・モリッツ・ルゲンダス

教育史の点検

798

サンパウロ法科大学

科学史

809

天文地理と医学の進歩

818

ポルトガル史年表

824

ブラジル史年表

827

人名索引

参考文献

844

著者略歴

847

ブラジル全史

第一章 ポルトガルの建国

ボルゴ―ニヤ王朝の誕生

七世紀をとおしてアラビア人のイスラム教徒はシリア、メソポタミアから聖地エルサレムを征服した。八世紀にはアラビア人は北アフリカに侵入し、七一一年にジブラルタル海峡を越えてイベリア半島の大部分を占拠した。それらの失地奪回のためにキリスト教徒が十字軍を組織して遠征をはじめたのが一〇九六年である。キリスト教徒の国土回復運動はレコンキスタと呼ばれ、一四九二年のグラナダーの陥落によるアラビア人のイベリア半島からの撤退までつづいた。ポルトガルの建国はレコンキスタとの関連がある。

スペイン十字軍の騎士にフランス人の貴族エンリツケ・デ・ボルゴ―ニヤ（ボルゴ―ニヤ伯爵）がいた。彼は一〇九七年にレオンの王ドン・アフオンソ六世の息女テレザと結婚し、コンダード（伯爵領地）として授与さ

れたのがドウロ川とミーニョ川中間のポルツカーレまたはルジタニアといわれた古代ローマ領である。

それから四二年を経過し、一一三九年にエンリツケ・デ・ボルゴーニヤの子息ドン・アフォンソ・エンリツケがオウリケの戦闘でムーア人（アラビヤ人）を大敗させた。

同年、ローマ教皇イノセンシオ二世によってドン・アフォンソ・エンリツケの即位が認められ、ボルゴーニヤ王朝が誕生した。ここにポルトガルの建国史がはじまり、ドン・アフォンソ・エンリツケが初代王となった。

ボルゴーニヤ王朝は一一三九年から一三八三年まで、九代にわたって第一代ドン・アフォンソ（在位一一三九―一一八五）は征服王で知られ、もっぱらサラセン人（アラビヤ人）の駆逐に終始した。一一四七年にはパレスチナに向う十字軍の助勢を得て、サラセン人からリスボアを奪回してポルトガルの首都とし、次いでサンタレン、アルメーダ、アルカセル・ド・サル、エヴオラ、ベージヤを奪回した。

第二代ドン・サンショ一世（在位一一八五―一二二一）はアルガルベ地域のサラセン人との戦いをつづけ、ドン・アフォンソ一世によって奪回された土地の拓殖を進めた。

第三代ドン・アフォンソ二世（在位一二二一—一二三三）はアルカセル・ド・サルの奪回地を徹底的に固めた。第四代ドン・サンシヨ二世（在位一二三三—一二四八）はサラセン人の追放戦を根強くつづけた。

第五代ドン・アフォンソ三世（在位一二四八—一二七九）はアルガルベ地域のサラセン帝国の残党を追放しつつ拓殖に当たった。

第六代ドン・ジニス（在位一二七九—一三二五）は第五代王ドン・アフォンソ三世の王子で詩人であり、イスラム教徒討伐のためにローマ教皇公認のキリスト騎士団を設立した。

彼は農業の振興のために小自作農を督励し農業王といわれた。またドン・ジニスの治世の一二九〇年にヨーロッパで最初の大学をリスボアに創設した。それは一三〇八年にコインブラに移されてコインブラ大学となった。同大学には一六世紀から一九世紀末までに三〇〇〇人のブラジル人が学んでいる。

第七代ドン・アフォンソ四世（在位一三二五—一三五七）

第八代ドン・ペードロー一世（在位一三五七—一三六七）
第九代ドン・フェルナンド（在位一三六七—一三八三）
は財政難の打開のために商業を奨励し、貿易に当る船主

には免税の恩典を与えた。またセスマリア法令を發布し、食糧問題の解決に、無開墾の土地を封建領主から接收して小農に与えた。彼は二二才で即位し、狩猟を好み、女性漁りで有名であった。既婚の宮廷女官レオノール・デーレスとの結婚で醜聞をかもした。

十字軍とイスラム教徒

十一世紀にはじまる十字軍の遠征は商業を誘発し、ヨーロッパの各地に商業都市が現われた。その主なものはセヴィリア、トレド、バルセロナ、マルセイユ、ボルドウ、フロレンサ、ヴェニス、ジェノヴァなどである。特にヴェニスとジェノヴァは一五世紀から十六世紀に、東洋貿易の中継市場として繁栄した。

十字軍の敵、中世のアラビア人はモーロー人またはムーア人と呼ばれ、その大部分はイスラム教徒（回教徒）であった。彼らアラビア人は七世紀から数世紀にわたって北アフリカと地中海沿岸、イベリア半島、シリア、メソポタミア、パレスチナを征服した。

ポルトガルのアラビア人駆逐は初代王ドン・アフオンソ・エソリツケの治世にはじまる。

アラビア人はヨーロッパの国土侵略はしたが、イスラ

ム文化は産業と科学の進歩に多大の影響をおよぼしている。イベリア半島に農業をおこしたのはアラビア人であり、米と綿を栽培し、貯水池を築いて灌漑を普及した。

工業では製紙と製陶、特に青色タイルと武器製造、皮革加工などが挙げられる。またアラビア建築は広くヨーロッパに行きわたった。

地中海の沿岸航海はアラビア人によって始められたところから、海国ポルトガルの出現はアラビア人に負うところが大きい。ほかにもアラビア人によってヨーロッパの各地に図書館が設けられるなど、ビザンツ文化に発するアラビア文化はイベリア半島に深く浸潤している。

アヴィス王朝の創立とドン・ジョアン一世

ボルゴーニャ王朝最後の王ドン・フェルナンドは男子の嗣子なくして一三八二年に没したために、二人の王位継承の候補者が現われた。一人は第八代王ドン・ペードロ一世の庶子ジョアンで、他の一人はカステラ王のジョアンである。

ドン・フェルナンドの未亡人レオノール・テレースは摂政の任にあったが、女婿ジョアン（カステラの王）がポルトガルの王を兼ねることを望んで熱烈な政治工作を

した。他方、ドン・ペードロ一世の庶子ジョアン（一三五七―一四三三）はアヴィス騎士団長で、ドン・フェルナンドとは異母兄弟であった。彼はドン・ペードロ一世の落胤ながらも、貧家に生れて身をおこしたところから一般民衆に人気があつた。彼の母テレザ・ロウレンソは没落貴族の娘であつた。

アヴィス騎士団長のジョアンは市民と商人階級の支持をうけたが、特に富裕の貴族、軍師ヌーノ・アルヴァレス・ペレーラの援助を得てカステラに抗戦した。ポルトガルの王位継承をめぐるカステラの王ジョアンとアヴィス騎士団長ジョアンの闘争は二年におよんだ。ところがアヴィス騎士団長のジョアンに好運がもたらされ、リスボアに進攻したカステラ軍はペストに侵されて撤去した。

その間隙に乗じ、一三二八年四月六日、アヴィス騎士団長のジョアンは国民の頌揚によつてポルトガルの第一〇代王に即位し、ドン・ジョアン一世となつた。同年八月、彼はアルジュバロッタの戦いでカステラに圧勝した。この戦闘がポルトガルの運命を決し、アヴィス王朝の創立とともにポルトガルの新しい歴史がはじまる。

ドン・ジョアン一世は戦争中にカステラに忠誠と親近感をもつて逃避した封建諸侯の資産を没収し、商人階級を擁護して国家の発展を期した。

ポルトガルとカステラの戦争は一四一一年までつづいたが、ドン・ジョアン一世は親英政策をとってイギリスと接近し、エドワード三世の王子ランカスター公（ジョン・オブ・ゴント一三四〇―一三九九）の息女フィリッパと結婚した。一三八六年にはイギリスと軍事同盟を結び、その武力援助を得てアヴィス王朝を固め、絶対王制を確立した。



ドン・ジョアン一世

ドン・ジョアン一世とフィリッパ・ファンカスターとの結婚によって次の王子が生まれた。

ドン・ドアルテ一三九一年生

ドン・ペードロ一三九二年生

ドン・エンリッケー一三九四年生

イザベル一三九七年生

ドン・ジョアン一四〇〇年生

ドン・フェルナンド一四〇二年生

ドン・ジョアンは王位につくや、ポルトガルの発展はかぎられたイベリア半島ではなく海外貿易によって遂げられることを覚り、その実現第一歩として地理的に近い北アフリカに眼を向けた。当時アラビア人はマロッコのセウタと黒海沿岸のコンスタンチノーポールを基地として、地中海からダマスコ、バグダット経由のアジア貿易を独占していた。こうした状況にドン・ジョアン一世は異教徒討伐の名目で、北アフリカのマロッコ攻略の許可をローマ教皇グレゴリオ一二世から得ることに成功し、組織されたのが十字軍の性格を帯びるセウタ遠征隊である。

セウタはアフリカの北端、地中海の関門ジブラルタル海峡に面する要港で、一三世紀からアラビア人の勢力下におかれ、人口の大部分はモーロー人であった。

セウタの名称はアラビア語に由来し、よく防御された町を意味する。事実この港町は三方海に囲まれた半島の岩層地に形成されている。タンジールからの距離は五〇キロで、地中海と北大西洋をつなぐ要路にあり香料、貴金属、象牙、絹布などの東洋物産の集散市場であった。智謀に長けた政治家、軍略家のドン・ジョアン一世がポルトガルの海外発展の第一目標にセウタを挙げたことが肯

ける。

ペストと百年戦争

一四世紀から一五世紀にわたる大きな出来事にはペストの猖獗（一三四七―一三五〇）とイギリスとフランスの百年戦争（一三三七―一四五三）がある。

ペストは黒死病ともいわれ、ヨーロッパ全人口の三分の一が斃死した。

ポルトガルの王位をめぐるカステラの王ジョアンとアヴィス騎士団長のジョアンとの抗争に、ポルトガル軍が勝った要因は、ポルトガルに攻めこんだカステラ軍がペストに侵されたことにある。

大航海を生んだドン・エンリッケ王子

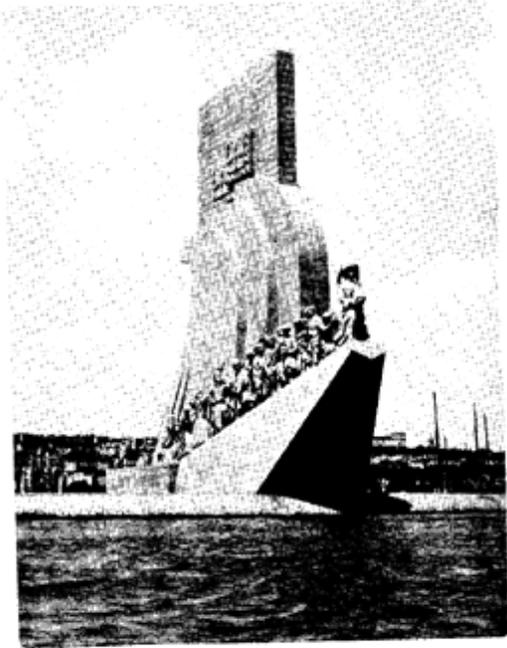
セウタ遠征にドン・ジョアン一世の第一王子ドン・ドアルテと第三王子ドン・エンリッケが参加した。一四一五年七月七日、貴族ドン・ヌーノを総司令官とする数十隻の大艦隊はテージョ河口に集中した。当日ドン・エンリッケの母フィリッパが逝去した。

「航海者ヘンリー」といわれ、大航海を生んだドン・エ

ンリツケはポルトガル人の強靱性に合せて剛健と科学性に富むイギリス人の血をうけていた。ドン・エンリツケがセウタ遠征に参加したのは二一才、父ドン・ジョアン一世は五七才であった。

ポルトガル軍がセウタ上陸を敢行したのは一四一五年八月二五日で、セウタ要塞の陥落の当日、マホメット教会で戦勝のミサを挙げた。セウタを完全に攻略したのは一四一六年一月で、それを機会にドン・エンリツケはポルトガルの西南端、サン・ビセンテ岬のサグレスに航海学校の設立計画を立てた。その目的はポルトガルの海外貿易と地理的発展のための航海家の養成にあった。

大航海を生んだドン・エンリツケ王子



大航海の象徴ドン・エンリツケの記念塔

ポルトガルのほかにヴェニス、ジェノヴァ、フロレン

サから傑れた数学者、地理天文学者、航海者、造船師、カルトグラフィオ（海図製作者）が招聘されてサグレス航海学校が開校されたのは一四一八年である。それは学校というほどのものではなかったが、航海術研究のための集会所というのが当たっている。

ドン・エンリツケはセウタ遠征の功勞でアルガルベの総督に任ぜられ、ビゼウ公爵に叙された。またドン・エンリツケはローマ教皇マルチーニョ五世からオルデン・デ・キリスト帶勲者の榮譽を与えられ、彼の統率する艦船に十字の帆印がつけられることになった。

ドン・エンリツケが設立した航海学校は優れた航海家と探検家を輩出したが、特に著名なのはアフリカ南端への回航を成し遂げたバルトロメウ・ジーアス、インド航路を開拓したヴァスコ・ダ・ガーマ、ブラジル発見のペードロ・アルヴアレス・カブラル、世界周航のフェルノン・デ・マガリャンエスなどである。アメリカ発見のクリストヴァン・コロンブスも短期間この学校に学んでいる。

サグレス航海学校が隆盛に赴きつつあるころ、一四三三年にドン・ジョアン一世が逝去し、長男ドン・ドアルテ（一三九一—一四三八）が王位についた。ドン・ドアルテは父の遺志を継いでマロッコのアンジール遠征を企

てたのが一四三七年である。この遠征にドン・エンリッケと五男のドン・フェルナンドが参加したが、非常な難戦でドン・フェルナンドがモーロー軍の捕虜となった。モーロー軍はセウタの返還を交換条件にドン・フェルナンドの釈放を提案したが、ドン・ドアルテが断固拒絶したためにドン・フェルナンドは獄死した。その翌年、一四三八年にドン・ドアルテも病没し、王子ドン・アフオンソ（ドン・アフオンソ五世、在位一四三八―一四八二）が即位した。

その後のドン・エンリッケはサグレス航海学校の経営に主力を傾倒した。同校の主要科目は数学、天文学、地理、造船学などであった。あたかもルネサンスの開花期で、巨匠ミケランジェロ、ダヴィンチ、詩聖ダンテ、ラファエロ、ペトラルカを生み、その進歩的風潮は火薬と羅針盤の発明をうながした。遠洋航海術の発達はルネサンスの科学の進歩に負うものであり、もし羅針盤の発明がなかったなれば新世界の発見はもっと遅れていたであろう。羅針盤に次いでドイツ人のヨハン・グーテンベルグ（一三九三―一四六八）の活版印刷の発明が新しい科学知識の普及を容易ならしめた。

サグレス航海学校の第一期生ジョアン・ゴンサルベ

ス・ザルコが北アフリカ探検の途次一四二〇年にマデーラ島を発見した。また一四二七年と一四三二年にアフリカ北西海岸の探検を企てたジオゴ・セルヴィルとゴンサロ・コエーリヨ・カブラルが前後してアソーレス群島を発見した。一四三四年にはジル・エネアスが航海の難所とされていたアフリカのポジヤドール岬に到達した。このポシヤドール岬の探検はドン・エンリツケの第一の念願だったのである。さらに一四三五年にドン・エンリツケの従卒アフォンソ・ゴンサルベス・バルダイアがポジヤドール岬を突破してオーロ河口に達し、黒人奴隷を積んでポルトガルに引揚げた。一四四一年から一四四三年にかけては、アントン・ゴンサルベス、ヌーノ・トリストン、ゴンサロ・シントラがオーロ流域の黄金探索をした。この探検で一四四三年にオルギン湾が発見された。一四四五年にはヌーノ・トリストンがセネガルに到達し、次いでジニス・ジーンアスはカーボ・ヴェルデ（ヴェルデ岬）を発見した。またルイス・カダマストロは一四五五年と一四五六年にカーボ・ヴェルデ島を探検して黄金を発見し、ポルトガルの黄金熱をわき立てた。これらの探検はドン・アフォンソ五世の治世で、ドン・アフォンソ五世はアフリカ王と呼ばれた。

ポルトガルの海外発展の第一計画だったアフリカ貿易が軌道に乗った一四六〇年にドン・エンリツケが逝去した。ドン・エンリツケはセウタとタンジール遠征のほかには遠洋航海の経験がなかった。それは彼が船旅に弱く船酔いのためだといわれる。それにもかかわらず「航海者ヘンリー」で世界に知られるのは彼がサグレス航海学校を設立して航海家を育て、十五世紀の大航海を生んだことにある。ドン・エンリツケの没後もアフリカ探検は継続され、アフリカ貿易はポルトガル王室が独占した。

ドン・エンリツケが逝去した一四六〇年にジオゴ・ゴメスがレオア山脈を発見し、一四六一年から一四六二年にペードロ・シントラがギネーの金鉱を発見した。一五世紀のヨーロッパは中世の封建性から近代化と資本主義経済に移行し、商業が勃興した。それは謂うところの商業革命であり、商品経済が発生して商品の買付けのために黄金が必要となった。特にドン・ジョアン二世以来は重商主義に傾いたのはそのためで、海外貿易に主力がおかれた。

マデレーラ島の開拓

マデレーラ島とアソールレス群島の発見は先きに述べたが、

カナリア群島もポルトガル人が発見した説がある。しかしこの群島は一二九一年にジェノヴァ人が発見したともいわれる。一四世紀となって同じくジェノヴァ人のマロチェリが発見し、次いでポルトガル人、フランス人、アンドンシア人、カタロン人が奴隷を求めてカナリア群島に立寄った記録もあつて、いずれが先きとも断定し難い。ところがイギリスとフランスの百年戦争のためにフランスは手を退き、カステラがカナリア群島の占有を宣言して拓殖に当った。それはカステラ人のピッテンコウ・エラサーレがカステラ王の命によつて一四〇二年と一四〇五年にカナリア群島を探検したことを根拠とするものであつた。

一四三六年のドン・ドアルテの治世にポルトガルはカナリア群島の領有権をローマ教皇に請願したが、カステラの抗議があり、教皇エウジェニオ四世はこの問題に裁決を下さずして保留することになった。カステラはそれ以外にアフリカ問題にも干渉し、一四三七年四月にローマ教皇を介してポルトガルの北アフリカ領地の棄権を強制した。このようなカステラの態度に刺激され、ポルトガルはマデーラ島とアソールレス群島の占有権を確保するべくその拓殖に着手した。

マデーラ島はマデーラ本島とポルト・サントから成り、

フンシャルが首都である。

アフリカ北西海岸からの距離は六一〇キロ、リスボアから八七五キロ、カナリア群島のテネリフエから三九四キロ、アソーレスのサンタ・マリアからは八六八キロである。

マデーラ島の拓殖が開始されたのは一四二三年で、最初に移住したのは同島の発見者ジョアン・ゴンサルベス・ザルコである。

マデーラ島の名称の由来は、島全体が天然林で蔽われていて木材が開拓資源となったことにある。

ジョアン・ゴンサルベス・ザルコはバルトロメウ・プレステロとトリストン・テーシェーラの協力を得て、ポルトガル本土からの移住者を募集し、ポルト・サントとマシコの開拓に当たった。当時マデーラ本島の入口にフンシャルと名づけたのは最初の移住家族の代表者の名をとったものである。マデーラ島の開拓初期にはポルトガルから送られた流刑者もあった。

マデーラ島は各所に断崖があり、深い谷川の流れが岩礁を洗って海に注いでいた。島から伐り出される木材は建築や造船資材となった。

ジョアン・ゴンサルベス・ザルコは長官代理として島

の土地の無償交付をし、種子、農具、家畜をポルトガルから取寄せて農業を指導した。ブラジルの植民期におこなわれたセスマリア（開墾を前提条件とする未開地の無償分譲）はブラジル発見前にマデーラ島で実施されたのである。

一四三三年にドン・ジョアン一世が逝去し後継のドン・ドアルテはマデーラ島の統治権を弟ドン・エンリツケに与えたが、それは同島の拓殖がはじめられて八年後である。

一四三九年のドン・アフォンソ五世の治世にはアソレス群島の拓殖が開始され、マデーラ島の物産がアソレスに送り出された。

ポルトガル政府はアソレスの開拓とマデーラ島の産業振興策として、マデーラ島からの輸出物資に免税の特典を与えた。

一四四〇年にはマデーラ島の一層の発展を促すべく、ドン・エンリツケは島の支配権をトリストン・デ・テューラに与え、さらに六年後の一四四六年にポルト・サントの支配権をバルトロメ・プレステロに委ねた。

一四五〇年にはマデーラ島にカピタニア制を実施することになり、フンシャルにカピタニア庁を設けた。その初代長官に任命されたのが、マデーラ島開拓の功労者

ジョアン・ゴンサルベス・ザルコである。彼には島の軍事民事、司法、行政の権限のほか徴税と塩の専売権が与えられた。

マデーラ島のカピタニア長官の権能のうちで最も重要性をもつのが未開地の無償交付であり、この制度が効を奏して島の著しい発展を見た。しかしカピタニア制は一五世紀末、一四九六年に廃止された。その理由はカピタニア長官から無償交付をうけた地主の或る者は、それを開墾せずして小作農に貸与し、その収益で自身はフンシャルやマシコに奢侈な生活をするようになったからである。

カピタニア制の欠陥というか、カピタニア長官の権限過剰の弊害を悟ったポルトガル政府はカピタニアに郡制を設けてそれぞれの郡長を任命し、島全体の統治権はリスポアに集中された。

マデーラ島の開発によってポルトガルが受けた恩恵はその天然資源にある。それは木材と海産物、野生藍などで、小麦、砂糖、葡萄酒は重要な輸出産業となった。

マデーラ島の農業は最初に多角農だったが次第に単一農に傾き、主産物は砂糖と葡萄酒となった。

はじめポルトガル政府のマデーラ島開拓の目的は小麦の生産であった。しかし岩層地形のマデーラ島には小麦

にかぎらず穀物の生産に困難があり、甘藷と葡萄栽培が主となった。

マデーラ島の穀物生産が減少する時に、アソーレスのサン・ミゲル島は穀物倉といわれるまでになった。

マデーラ島の甘藷栽培はドン・エンリツケによって試栽培されたのが端緒をなした。

一四五二年にはドン・エンリツケとジオゴ・テーベとの契約で最初の製糖工場が設けられた。マデーラ島の砂糖は品質優良で評判となり、ポルトガル人のほかにジエノヴァ人やユダヤ人が買付けに殺到した。一四六〇年から一四七〇年にマデーラ島の砂糖生産は最高潮に達し、甘藷栽培は全島に普及した。フンシャル港にはポルトガルと外国の船舶が砂糖積出しに寄港するようになった。

一六世紀初頭のマデーラ島の砂糖生産はカナリア群島を凌いだ、新天地ブラジルで砂糖が生産されるようになった。マデーラ島の砂糖は大して重要視されなかった。ブラジルで栽培された甘藷の苗がマデーラ島から入れられたところから皮肉な成行きといわざるをえない。しかしマデーラ島の葡萄酒生産は一六世紀からいよいよ隆盛となった。マデーラ島に家内工業のレース編みが起ったのは後のことである。

はじめての島の住民のほとんど全部がポルトガル人で、外国人との混血がなく、ポルトガル本国よりも血の純潔が保たれた。

ジョアン・ゴンサルベス・ザルコはマデーラ島の開拓のために数十名の名門の子弟を伴って移住したが、その中に次の人々がいた。

ゴンサロ・アイレス・テーシエーラ、フランシスコ・カルヴァリヤル、ジョアン・ロウレンソ、ルイ・ピレス、アントニオ・ガゴス、ロウレンソ・ゴメス、ヴァスコ・デルガード、アルヴァロ・アフォンソ、アイレス・ロルデロ、ヴァスコ・エステーベス、マヌエル・アフォンソ・デ・サーニャ、ジョアン・プラード。これらの子孫でブラジルに移住し、バンデーラを組織して奥地探検をした者がある。

マデーラ島に渡ったポルトガル人にはアルガルベの出身者が多く、一五世紀末には人口一万八〇〇〇人を示した。その中にはマデーラ島生れの二世が相当の数を占めていた。

一四六六年のころから砂糖産業の隆盛に伴ってアフリカから黒人奴隷が入れられた。また砂糖買付けのために渡来したジェノヴァ人やユダヤ人で、そのままフンシャルに住みつく者があって島の人種的構成に変化が見られ

た。ポルトガル人とモーロー人、或いはジェノヴァ人、オランダ人などとの混血児が現われるようになった。いずれにせよ、マデーラ島はポルトガルの植民地経営の試験場の役割をなし、その経験に徹してアフリカとブラジルの植民計画が立てられたのである。

アソーレスの拓殖

ドン・エンリツケ王子が設立したサグレス航海学校に学んだゴンサロ・ベリーヨ・カブラルが一四三二年にアソーレスのサンタ・マリア島を発見した。つづいてサン・ミゲル島とサン・ジョルジ島が発見された。

地図の上でイベリア半島に向って最も東寄りのサンタ・マリア島からリスボアまでの距離は一四三〇キロである。

アソーレス群島は北大西洋の北緯36・40度、西経24・32度に所在する九つの島から成る。それらの島の面積は次のようである。

サンタ・マリア 97 平方キロ

サン・ミゲル 747

テルセーラ 396

サン・ジョルジ	538
グラシオーザ	61
ファイアル	172
ピコ	432
フローレス	144
コルボ	17

計 2,605 キロ

大部分が火山質土で、標高の最高はピコ島の二三二〇メートルである。年中を通じての平均温度は摂氏一七、八度。住民のほとんどはポルトガルのアレンデージョとミーニョの出身者とその子孫である。彼らの生活様式、服装や伝統は昔の郷土そのままが保たれている。特に宗教行事にそれが見られる。

産業ではアソーレス最大の島サン・ミゲルが天然の牧場であるところから牧畜を主とし、また日本の宇治を思わせるような茶栽培が盛である。

サンタ・マリア島は漁業で成立っている。テルセーラ島には捕鯨基地があり、鯨の関連工業が主である。

グラシオーザ島では風車小屋が散見されるが、それはトウモロコシと小麦の製粉工場である。フローレス島は

その名のとおり花栽培が主産業で、昔から毎年花祭りが催される。

ファイアルとピコ島は煙草、甘藷、パイナップルの栽培を主とし、アルコール製造が盛である。

昔この群島にはアソーレス（隼の類の猛禽）が多く見られたのでそれが名称となった。

アソーレスからは一八世紀中期に家族移民がブラジルのサンタ・カタリナとリオ・グランデ・ド・スールに入られた。特にポルト・アレグレはアソーレスの夫婦移民によって開拓された町である。したがってポルト・アレグレの最初の名称はポルト・ドス・カザエス（夫婦者の港）である。

ドン・ジョアン二世とクリストヴァン・コロンボ

ポルトガルの第一三代王ドン・ジョアン二世（一四五五―一四九五）以来、東洋進出の目的はジェノヴァやヴェニスの中継市場を経ずして直接香料貿易に当ることであった。それは香料貿易の独占である。

中世の西ヨーロッパではおしなべて土地が痩せていた上に農耕技術に欠けて穀物の生産がすくなく、肉が主食物であった。そのために冬期に入る以前に家畜を屠殺し、

肉を塩漬けにして貯蔵したが、調味料や薬味なしでは味がまずくて食べられなかった。調味料とは胡椒、肉桂、丁香、生姜などで、これは西ヨーロッパ人にとって欠くべからざるものであった。しかしポルトガルが直接東洋貿易に乗出すには宿敵アラビア人との磨擦が不可避であった。ところが一四五三年にイギリスとフランスの百年戦争がおわり、トルコ人がコンスタンチノーブル（現在のイスタンブル）を占領してオスマン・トルコの首都を築いたために事情は一変した。一四五三年は世界史を大きく転換させたが、コンスタンチノーブルの陥落で東ローマ帝国が崩壊し、一〇〇〇年にわたった中世が終って近代となる。

ポルトガルでは一四六〇年にドン・エンリツケ王子が没して海外発展第二期に入るが、王ドン・ドアルテの後継ドン・アフォンソ五世（在位一四三八―一四八一）とドン・ジョアン二世（在位一四八一―一四九五）がドン・エンリツケの海外政策を踏襲した。航海家ジオゴ・コンとバルトロメウ・ジアスの現われたのはドン・ジョアン二世の治世である。前者は一四八二年にアフリカのサント・カタリナ岬とコンゴ河口を探検してアンゴラに到達し、後者は一四八八年にアフリカ南端への回航を成し

遂げた。それまでのアフリカ南端は苦難の岬といわれていたが、ドン・ジョアン二世は喜望峰と改称した。

ジェノヴァ人のクリストヴァン・コロンボの西インド諸島の発見もドン・ジョアン二世の治世である。

コロンボは一四五一年のころジェノヴァに生れ、一四七四年にフロレンスの医師、天文地理学者パオロ・トスカネリについて学び、世界が球形であるとの確信を持った。コロンボは一四七六年からポルトガルに住み、航海家バルトロメウ・プレステロ（マデーラ島の開拓者）の娘と結婚した。

コロンボの西インド諸島の探検はカステラ王室の援助でおこなわれた関係から、カステラ王国（スペイン）の成立ちを述べる必要がある。

八世紀以来モーロー人のイスラム教徒がイベリア半島に侵入したが、半島の北部に国土を占めていたカステラは次第に勢力を得てモーロー人を駆逐した。一五世紀末には南部のグラナダーだけがモーロー人の最後の牙城であった。

一五世紀のスペインはカステラ、アラゴン、ナヴァラの三つに分裂していたが、一四六九年にカステラの女王イザベル二世（一四五二―一五〇四）とアラゴンの王

フェルナンド五世との結婚によってカステラとアラゴンが併合され、スペイン統一に成ったのが一四九七年である。聡明で美貌のイザベルには数名の王や王族の求婚者がいたが、媚目秀麗で凛々しい男性美のフェルナンド王を選んだというエピソードがある。昔の王族のほとんどは政略結婚をしたが、イザベルの場合はフェルナンド王の男性美にひかれたのである。イザベル一世はポルトガルの第十三代王ドン・ジョアン二世の息女であり、一七才でフェルナンド王と結婚した。それがイベリア半島の歴史を変換させることになる。

カステラとアラゴンの結合で国力を増したスペインは一四九二年にグラナダを陥落させた。モロー人がイベリア半島から完全に撤退するまでに八〇〇年を要している。

グラナダの陥落した一四九二年はスペインにとって記念すべき年である。それはジェノヴァ人のクリストヴァン・コロンボがスペイン王室の援助でインド探検を企て、新世界アメリカを発見したからである。

コロンボは世界が球形であるから、大西洋を西方に進むことによってインドに到達し得ると信じていた。それをポルトガルの王ドン・ジョアン二世に陳べてインド探

検の後援を求めたが、既にバルトロメウ・ジーアスがアフリカ南端への回航を成し遂げ、インド航路開拓の可能性がついていたので、コロンボの提案は容れられなかった。そこでコロンボはスペイン王室との交渉に当たったが、それにもかなりの紆余曲折があり、一四九一年四月のスペイン政府評議会の承認のもとに彼のインド探検の援助が決定された。当時コロンボの計画を積極的に支持したのはイザベル女王でフェルナンド王は大して興味を示さなかった。コロンボはイザベル女王から次の三隻のカラベラ船を与えられた。

サンタ・マリア（船長コロンボ）

ピンタ（船長マルチン・アロンソ・ピンソン）

ニーナ（船長ビセンテ・ヤネス・ピンソン）

コロンボは八八人の乗組員をもってスペインのパロス港を出発したのが一四九二年八月三日である。航海中は前途不安のために乗組員の暴動がおこったが、コロンボは断固たる態度をもってそれを鎮圧し、一〇月一二日に陸地を発見した。それは西インド諸島の一つで、グワニヤニ土人はバハマ島と呼んでいた。コロンボはその島にサン・サルバドルと名づけ、インドの一部だと信じていた。次いで彼はハイチを発見し、ポルトガルを経てスペインに帰還した。リスボアではドン・ジョアン二世

から丁重に迎えられた。

コロomboの第二回の探検には船舶一七隻と一五〇〇人を率いて一四九三年九月二四日にカジスを出港した。この探検ではポルト・リコとジャマイカを発見したが、黄金の探索が主な目的だったにもかかわらず、それは発見されなかった。ほかに拓殖計画もあったが、コロomboは優れた航海家ながらも植民地行政の才覚はなく、不評をかった。

一四九八年五月、コロomboは第三回の探検に出発し、キューバ、ジャマイカとマヤ文化の栄えたホンジュラスを踏査した。大陸ではオリノコ河口のデルタ地帯に踏みこんでいる。当時コロomboは敵の術策に陥入り、罪人として捕縛されてスペインに護送された。

スペインではコロomboは法廷で王の特赦をうけ、第四回の探検のため一五〇二年五月にカジスを出発した。これが彼の最後の探検でキューバとホンジュラスを踏査するうちに土人の反乱や隊員の闘争を生じ、しかも病のためになつて、一五〇四年四月にスペインへの帰途についた。コロomboがスペインに帰着する以前に彼の後援者だったイザベル女王が他界し、情勢は彼にとって不利となつた。スペインに帰還したコロomboは不遇のうちに一五〇六年五月二〇日、スペイン北部のヴァラドリドに

死去した。

コロンボのアメリカ発見は世界球形説に基づくインド航路開拓の誤算による偶然の結果である。このコロンボの新陸地発見はポルトガルのインド熱を一段と高めることになった。

トルデシラス領土協定線

コロンボによって西インド諸島が発見されるや、スペインはその新陸地と将来発見されるべき土地の領有権をローマ教皇に請願した。

当時のローマ教皇アレキサンダー六世はスペイン人だったことから、アフリカのカーボ・ヴェルデ群島を基点とし、子午線に沿って西方一〇〇レグア（六〇〇キロ）のところ南北に直線をひき、その西側をスペイン領東側をポルトガル領とする決定がされた。それを知ったポルトガルは自己の権利を主張し強硬抗議した。そのため教皇アレキサンダー六世は問題の領土協定線をカーボ・ヴェルデ群島から西方三七〇レグア（二二二〇キロ）に変更した。

トルデシラス領土協定はコロンボの西インド諸島発見から二年後の一四九四年六月七日に、スペインのトルデ

シラスでスペインとポルトガルの代表によって調印された。

国際法のなかった時代には聖戦の名による異教徒の討伐やキリスト教布教の許可、新航路と発見地の占有を保証する権能はローマ教皇にあった。したがってローマ教皇の大勅書が絶対であり、すべての問題を決する鍵であつた。

トルデシラス領土協定線はカーボ・ヴェルデ群島の何処を基点とするかに第一の問題があつた。また当時の緯度と経度の測定技術が不完全だったので、そこにも疑問を生じた。後日に南アメリカにおいてのポルトガルとスペインの領土紛争が度々おこり、戦火を交えた根本原因はトルデシラス領土協定線の欠陥にある。それにしてもこの幾何学的な領土境界線の発想は当時としては実に奇想天外のものであつた。

ヴァスコ・ダ・ガーマのインド探検

コロンボのアメリカ（西インド諸島）発見はポルトガル王室を刺激し、インド探検隊の派遣が計画された。その準備中の一四九五年にドン・ジョアン二世が急逝し、王子ドン・マヌエル（一四六一—一五二一）が王に即位

した。

ヴァスコ・ダ・ガーマを第一回インド探検隊長に任命したのはドン・マヌエルである。

ヴァスコ・ダ・ガーマは航海王子ドン・エンリツケが逝去した一四六〇年にポルトガルの中南部アレンデージョのシーネスに生れた。

父エステーヴオン・ダ・ガーマは貴族で、地方長官であつた。母イザベル・ソドレもポルトガルの名門の出でヴァスコ・ダ・ガーマは航海家、軍人でドン・アフオンソ五世とドン・ジョアン二世の治世にマロッコ遠征に参加した経歴がある。

彼はバルトロメウ・ジーンアスの指揮によつて建造された四隻の船舶（サン・ガブリエル、サン・ラファエル、サン・ミゲル、ベリリオ）と一七〇人を卒いて一四九七年七月八日にリスボアを出発した。アフリカの西海岸から進路を西南に向けたが、貿易風の利用と新陸地の所在をさぐる意図があつたようだ。

アフリカ南端の航海の難所を経てからは、モザンビークとメリンデに寄港し、モンバサに着いたのは一四九八年四月七日であつた。

当時のガーマの冒険航海がカモンエスの大叙事詩『オス・ルジアダス』に謳われているわれている。

ガーマは一四九八年五月一日にインドのカリカットに到着した。彼はモーロー人の妨害を受けながらも、多量のインド物産を積んで帰途についたのは一四九八年八月二九日であった。リスボアに帰着したのは一四九九年三月二〇日で、出発当時の船舶四隻は二隻となり、乗組員一七〇人は四四人に減じていた。



ドン・マヌエル王がヴァスコ・ダ・ガーマのインド探検記念に建立したベレン塔

ガーマはリスボアで大歓迎を受け、王ドン・マヌエルからインド副王の称号を与えられた。彼がインドから持ち帰った香料はイスラム商人の中間搾取がなかったため王室は巨利を得た。王ドン・マヌエルは狂喜し、総力を挙げて喜望峰ルートの確保とインド貿易の独占を期した。同時にインドのポルトガル領地ゴアの防備を強化し、さ

らに東洋へのキリスト教布教の許可をローマ教皇から獲得した。

キリスト教の布教はジェズイットによつておこなわれたが、最初のポルトガル人の日本への来航は一五四三年（天文一三年）である。ヴァスコ・ダ・ガーマは一五〇二年に再びインドに向つたが、当時彼はカリカットで二日にわたつてイスラム教徒を虐殺した。それは彼が第一回のインド探検にうけた妨害の報復手段であつた。そのために彼はポルトガルに帰つて公職を追放された。

ガーマは第三回の大規模のインド探検を企てたが実現されず、彼に代つてドン・フランシスコ・デ・アルメーダ（一四五〇—一五一〇）が、一五〇五年に船舶二二隻と二五〇〇人による大探検を敢行した。

ガーマは後に二隻の船舶でカリカットに赴き、一五二四年にコシン（後の英領インド）に死去した。

ヴァスコ・ダ・ガーマはリスボアのジェロニモ修道院に詩人ルイス・デ・カモンエスと相並んで埋葬された。

リスボアのテージョ河港のベレン塔は、王ドン・マヌエルがヴァスコ・ダ・ガーマのインド探検の壮挙を記念して一五一五年に建立したものである。

詩人ルイス・デ・カモンエスと大叙事詩『オス・ル
ジアダス』

リスボアの河港を前面に、ポルトガルの大航海の象徴としてドン・エンリツケ王子の記念像が設けられている。

ドン・エンリツケによるサグレス航海学校の設立とアフリカ探検、それにつづくインド航路の開拓とブラジル発見はポルトガルに勃然と湧き起こった海外雄飛熟の所産にほかならない。当時のポルトガル人とヴァスコ・ダ・ガーマのインド洋航海の冒険を謳ったカモンエスの大叙事詩『オス・ルジアダス』の初版の出たのは一五七二年である。

カモンエスは一五二四年または一五二五年にコインブラに生れたと見られている。父シモン・ヴァス・デ・カモンエスはガリシアの貴族の末裔で、ドン・フェルナンド一世の治世にスペインからポルトガルに移住した。そしてドーナ・アンナ・マセドとの結婚によって生れたのが将来の大詩人ルイス・ヴァスニア・カモンエスである。

カモンエスは長じてコインブラ大学に入学したが中退し、一五四五年にリスボアの宮廷に仕えた。当時彼は宮廷女官のドーナ・カタリナ・デ・アタイデ（ナテルシア）

と相愛の仲となる。一説にはカモンエスの片恋慕ともいわれる。そのころ彼は或る政治犯罪に荷担したためにリバテージョに追放された。いうところの流刑である。

リバテージョにおいてのカモンエスは憤懣と無聊やるせなく、王ドン・ジョアン三世に直訴し、アフリカのセウタへの転居を嘆願したのが一五四九年である。しかしセウタでの彼の生活はリバテージョよりも少しも勝るところはなく、悲憤と上にもナテルシアへの思慕は募るばかりであった。彼は或る日、失意と懊悩の末、自殺をはかったが未遂におわった。彼にとってせめても救いは『オス・ルジアダス』の執筆をはじめたことである。

カモンエスはセウタの防衛戦に参加して右眼を失ない、片眼となって一五五一年にリスボアに帰還した。

彼は性格豪胆で時には粗暴のところがあり、反逆的だったために敵が多く、鬪争が絶えずして常に四面楚歌の状態にあった。

リスボアに帰っても彼の意欲は満たされずインドと支那の貿易船に乗ってテージョ河口を出発した。一五五三年九月にインドのゴアに着いた彼は著名の医師ガルシア・ダ・オルタの知遇を得た。それはいつも敵の中にあつた彼にとって唯一の理解者と誠実の友を得た思いであった。

ゴアに在つてのカモンエスは郷愁とナテルシアへの恋情をもちつづけた。

或る時、彼はマカオに向つて航海中にラオスのメコン河口で暴風に逢つて難船したが、『オス・ルジアダス』の原稿を片手に握りながら辛うじて陸地に泳ぎつくことができた。

彼はカンボジャに短期間留つて一五六〇年にゴアに帰着した。一五六二年には彼の政治犯に対する無罪が判決され、ポルトガル管理地の官職につくことができた。

その後はゴアからモザンビークに移り住んだが、過度の労苦と波瀾の生活は彼を著しく老けしめた。彼がリスボアに帰着した時には往年の冒険児の逞しさはなく、落魄の一老人と化していた。しかも彼のインドと支部の放浪中にナテルシアはこの世を去つていたのである。それにしてもカモンエスの長年の悲願が達成されて『オス・ルジアダス』がリスボアで出版されたのが一五七二年である。

『オス・ルジアダス』の初版が出て彼は一時的に有名となつたが、次第に世間から忘れられた。カモンエスは赤貧のうちにリスボアのサンタアナ修道院近くの一廢屋に病臥し、一五八〇六月一〇日に侘しく永眠した。

ドン・マヌエル（一四六九―一五二一）

東洋貿易を積極的に進め、冒険王といわれたドン・マヌエル二世は前後三回の結婚で二人の子を得た。最初の結婚でドン・ミゲルが生まれたが幼くして死亡した。二回目の結婚では二人の子が生まれ次の七人が成長した。

ドン・ジョアン（三世）、ドーナ・イザベル（サヴォイオ大公と結婚）、ドン・ルイス（ベージャ大公）、ドン・フェルナンド（マリアルバ伯の息女と結婚）ドン・アフオンソ（リスボア大主教）、ドン・エンリツケ（エヴォラの司教）、ドン・ドアルテ（ギマラソエス大公）。

第三回の結婚で二人の子を得たが成年に達せずして死去した。

インド貿易の概況

一四九八年のヴァスコ・ダ・ガーマのインド探検から一六一二年までに八〇六隻の船舶がポルトガルからインドに向った。その中でポルトガルに帰ったものは四二五隻、数回往復したものは稀で、大部分は平均二航海であった。

船舶一隻当りの建造費は二万クルザード、乗組員は100人から150人、毎年2000から3000人がポルトガルから海外に出たが、その三分の一が難破や海賊の襲撃で犠牲となった。当時のポルトガルには「航海することが必要なのだ。生きることが必要でない」が一つの標語であった。

大航海後期の記録（ポルトガル人を除く）

一四九二年 クリストヴァン・コロンボはスペイン王室の援助をうけてサン・サルバドル島を発見。

一四九三年 コロンボの第二回探検でアンチールを発見。
一四九七年 ジョバニ・カボットは子息セバスチオンを伴ってニュージールランドと北アメリカのラブラドル半島を発見。

一四九八年 コロンボの第二面探検でトリニダーデを発見。
一四九九年 スペイン人のアロンソ・デはヴェネズエラに到着。

一五〇〇年 スペイン人のビセンテ・ヤネス・ビンソンはブラジル海岸を通過。

一五〇二年 コロンボの第四回アメリカ探検。

一五〇五年 フアン・デ・エスキヴィルはジャマイカを

征服。

一五〇八年 スペイン人のポンセ・デ・レオンはポルト・リコを征服。

一五〇一年 スペイン人のジエゴ・ブラスケスはキューバを征服。

一五一二年 ポンセ・デ・レオンはフロリダを発見。

一五一三年 スペイン人のヴァスコ・ヌーネス・バルボアは太平洋を発見。

一五一六年 スペイン人のファン・ジーアス・ソリスはラプラタ川を発見。

一五一九年 フェルノン・デ・マガリヤンエスはスペイン王室の命をうけて世界周航に出発。

スペイン人のヘルナン・コルテスはメキシコを征服。

一五三一年 スペイン人フランシスコ・ピザロはペルーを征服。

一五三四年 スペイン人のアルヴァロ・ヌーネス・カベサ・デ・ヴァツカはメキシコに入る。

フランス人ジャック・カルチエーはセント・ローレンス河口を探検。

一五三五年 スペイン人のジオゴ・デ・アルマグロはチリを発見。

一五三七年 スペイン人のファン・デ・アヨラスはパラ

グアイに入る

一五四一年 スペイン人のフランシスコ・オレラナはアマゾン上流から河口に出る。

一五七七年 イギリス人のフランシス・ドレークは世界周航を開始。

一六一〇年 イギリス人のヘンリー・ハドソンはハドソン湾を発見。

第二章 ブラジルの発見

ブラジルの発見

イベリア半島の西端に所在する小国ポルトガルは天然資源に乏しく、農業生産も振わなかつたので海外貿易に傾くほかはなかつた。そこで距離的に近い北アフリカがその対象となり、ローマ教会擁護のための異教徒討伐を理由にマロッコ攻略となる。マロッコの住民のモーロ人はイスラム教徒だったからである。後にポルトガルがアフリカ貿易から東洋貿易に手を伸ばしたのは東洋の物

産が遙かに有利だったためである。

大西洋とインド洋航路の開かれる以前の西ヨーロッパ人は地中海の航路と近東の陸路を経てインドと支那に通じていた。しかし一四五三年にトルコ人がコンスタンチノーポリを占領して地中海の航路を封鎖したために事情は一変した。また近東の陸地にはアラビア人がいたので、ポルトガルはアフリカ南端回りの西方航路を開拓せざるをえない状況におかれた。それがヴァスコ・ダ・ガーマのインド探検となり、さらにカブラルの第二回インド探検がブラジルの発見をうながすことになった。

ドン・ジョアン二世の王子ドン・マヌエルが即位したのは一四九五年で、一四九七年にヴァスコ・ダ・ガーマをインドに派遣した。ガーマのインド航路の開拓で確信を得たドン・マヌエルは第二回の大規模のインド探検隊を繰出すことになった。それは船舶一三隻と一五〇〇人から成るもので、隊長に任命されたのが海軍大将のペードロ・アルヴァレス・カブラルであった。

カブラルは一四六七年または一四六八年にポルトガル北部のベーラ・バイシャのベルモンテに生れた。母はイザベル・ゴウベアで、父フェルノン・カブラルはベルモンデの巨人といわれたほどの巨漢だったが、ペードロも父に似て大きな体躯であった。

ペードロ・アルヴァレス・カブラルは一〇人兄弟の一人だが、長兄が死亡してカブラルの姓を名乗り、二頭の山羊の紋章をうけた。

彼は一才でアフォンソ五世の宮廷に仕え一六才ではドン・ジョアン二世の小姓となった。三〇才のカブラルは立派な騎士的風格を有し、航海術を会得していた。彼は海軍軍人であるとともに外交官の資質を備えていた。

そのカブラルの人物を見こんで第二回インド探検隊長に任命したのが王ドン・マヌエルである。



ペードロ・アルヴァレス・カブラル

一五〇〇年三月八日の日曜日、リスボアのノツサ・セニョーラ・ド・ベレン教会で、カブラルのインド探検隊出発のミサが挙げられ王ドン・マヌエルをはじめ政府高官と宮廷人が出席した。ミサの司祭ドン・ジェゴ・デ・オルチス僧の説教はカブラルのインド探検の成功を祈り、且つ激励に終始した。カブラル自らも敬虔な祈りを捧げ

た。

翌九日の月曜日、カブラルは一五〇〇人の隊員とともにテージョ河港に現われ、王ドン・マヌエルからキリスト十字旗を手渡された。港に待機する船舶には装飾が施され、教会の鐘の響きに和して群衆が歓声を挙げた。

三隻の船舶は一〇隻のナウ船（吃水線の深い四本マストの船）と三隻のカラベラ畢（吃水線の浅い三本マストの船）であった。

カブラルの船隊がテージョ河港を出発したのは三月九日の午前一〇時で、船舶それぞれの船長は傑れた航海家やパイロットであった。

アフリカ南端の喜望峰発見のバルトロメウ・ジーンアスとその実弟ジオゴ・ジーンアス、ニコラウ・コエーリョ、ペロ・デ・エスコバル（ヴァスコ・ダ・ガーマのインド探検に参加）、シモン・デ・ミランダ、ヴァスコ・ダ・アタイデ、ガスパール・デ・レーモス、サンショ・デ・トヴァール、ルイス・ピーレス、アイレス・ゴームス・ダ・シルバ、シモンニア・ピーナ、ジオゴ・ジーンアスなどである。ほかにフランシスカンのフレー・エンリツケ・コインブラと六人の僧侶、インドの土地管理所の書記たるベキペロ・ヴァス・カミーニャが参加していた。

カブラルの船隊がデージョ河港を出発して五日後にカナリア群島を望んだ。当夜はヴァスコ・ダ・アタイデの船舶が行方不明になるという不可解な事件がおこった。それは二日間探したが遂に見当らなかつた。

その後はアフリカの西海岸から遠くはなれて進路を西南に大迂回させたのは海の無風帯を避けて海流を利用することと、新陸地発見のためと思われる。カブラルは先にヴァスコ・ダ・ガーマから新陸地が所在する暗示をうけていたらしく、彼はそれを確かめるべく進路を西南に迂回させたことが想像される。

カブラルのブラジル発見については偶然の発見説が強かったが、近来は発見する意図のもとに発見された説が歴史家の間に多い。

カブラルはアフリカの西海岸から約一〇日をすぎて海面に浮く海草を見て陸地の近いことを知った。それから数日後に海鳥を見たが、同時に遙か遠くに陸地が望まれた。それが一五〇〇年の四月二一日で、翌二二日の払暁、山の形をなした陸地が眼前に現われた。それが恰も復活祭だったので、カブラルはその陸地にモンテ・パスコアル（復活祭の山）と命名した。さらに一〇レグア（六〇キロ）を進むうちに船舶の碇泊に好条件の天然の港を見出し、そこに上陸した。それは現在のバイアのカブラリ

ア湾である。そこには数十人のインジオがいたが、褐色の体に鳥の羽や動物の骨と牙でつくった飾りをつけていた。彼らはいぶかしげに新来者を見つめていたが、抵抗する様子もなく、親愛の情を示して物々交換をするまでになった。インジオがカブラルの探検隊に贈ったものはパパガイオ（オーム）であった。

四月二五日にカブラルはフレール・エンリツケ・コインブラに命じて新陸地発見のミサを挙げ、ポルトガル国王の名においてその占有を宣言した。つづいて五月一日、別の高地で第二回のミサを挙行し、その場所に新陸地発見の標柱を建てた。その時には約一五〇人のインジオの男女が周囲に集合していた。



ブラジル発見のミサ

当時の状況がパイロットのペロ・ヴァス・カミーニャ

の航海日記に綴られている。

カブラルは発見した土地を島と思い、イリア・デ・ヴェラ・クルース（聖十字島）と名づけた。それは四月二三日の聖十字祭が近かったからである。

五月二日、カブラルは新陸地の発見を王ドン・マヌエルに報告のために、ガスパール・デ・レーモスに書面を託して一隻の船舶をポルトガルに帰還させた。同日カブラルは二人の流刑者を残して本来の目的のインド探検に再出発した。

バイアを出発して二二日をすぎ、五月二四日にアフリカ南端近くでカブラルの船隊は暴風に逢って、バルトロメウ・ジーン・ルイス・ピーレス、アイレス・ゴメス・ダ・シルバ、シモン・デ・ピーナを船長とする四隻が難破した。一四八八年に喜望峰を発見したバルトロメウ・ジーン・ルイスにはその海洋が彼の墳墓となったのである。つづいてジオゴ・ジーン・ルイスの船舶が難破しカブラルは六隻をもってモザンビークに寄港し、インドのカリカットに到着したのが一五〇〇年九月一三日であった。

カブラルがカリカットに着くや、イスラム教徒に襲撃されて隊員三十数名が死んだ。カブラルは応戦し、イスラム教徒の船舶数隻を撃沈した。

カブラルはインドで友好協定を結び、多くの物産を積

んで一五〇二年一月一六日に帰途についた。帰航にはメリンデ近海でサンショ・デ・トヴァールの船舶が沈没し、リスボアに帰着したのは一五〇二年七月三一日であった。船舶一三隻は五隻、隊員一五〇〇人は三四〇人となっていた。

カブラルはリスボアに帰って大歓迎をうけたが、ブラジルの発見そのものはあまり喜ばれなかった。

一五〇二年に王ドン・マヌエルは二〇隻の船団のインド探検を企画し、その隊長にカブラルは再び選ばれたが、他にビセンテ・デ・ソドレ（ヴァスコ・ダ・ガーマの親戚）が任命され、二人の隊長のあることを知ったためにカブラルはそれを辞退した。

その後は王ドン・マヌエルはカブラルを呼ぶこともなく、彼は世間から次第に忘れられた。

カブラルはサンタレンの田舎にひきこもり農夫としての晩年をすごし、一五二〇年に死去した。翌一五二二年に王ドン・マヌエルも逝去した。

ブラジルの国名とパウ・ブラジル

カブラルは発見した土地を島と思い、宗教暦による聖十字祭が四月二三日日であるところからイリア・デ・

ヴェラ、クルース（聖十字島）と命名して王ドン・マヌエルに報告した。その後の探検家によりカブラルの発見した土地は島ではなく、かなり大きな陸地であることがわかり、テーラ・デ・サンタ・クルース（聖十字の土地）と改められた。更にそれが大陸であることが判明し、海岸の森林に染料となるパウ・ブラジルが豊富なためにブラジルとなった。ブラーザは真紅または赤い焰の意味である。

ブラジルの国名となったパウ・ブラジルはセザルピニセアの豆科植物で、東洋では蘇芳と呼ばれていた。

パウ・ブラジルの野生林はリオ（州）のカーボ・フリオからバイア、ペルナンブーコ、パライバ、リオ・グランデ・ド・ノルテの海岸に多く見られた。ブラジルのインジオはパウ・ブラジルをイビラピタンガ（赤い木）と称していた。

パウ・ブラジルは幹の直径七〇センチ、高さ二〇メートルに達する喬木で、暗褐色の荒い皮で包まれ、幹に鋭い棘をもつのが特徴である。

パウ・ブラジルを最初にイギリスに持ちこんだのはスペイン人の航海家ビセンテ・ヤネス・ピンソンで、イギリスは赤色の染料抽出材として一六世紀まで東洋から入

れていた。

北東ブラジルがオランダ軍の占領下にあつた当時、パウ・ブラジルの伐採と販売権は西インド会社が独占した。またポンバル侯（ドン・ジョゼ一世の政府首相）は一七五三年から一七六一年にわたつて、ブラジルのパウ・ブラジルの伐採権を有力な商人に与えて五分の一税を課した。

パウ・ブラジルの伐採はブラジル植民初期の原始産業で、これによつて富をなした者が多い。パウ・ブラジルの産業は一八世紀後半までつづいたが、濫伐のために野生林は著しく減じた。

ブラジル発見当時のフランスは東洋との直接の交易がなかつたので、ポルトガルが発見後のブラジルを放置状態においた隙きに乗じ北東部の海岸に侵入してパウ・ブラジルを伐り出した。ポルトガル王室はそれをフランス政府に抗議したが、なんらの回答もなく、依然としてフランス人のパウ・ブラジルの盗伐は継続された。

ポルトガル政府はフランス人の撃退のために一五一六年と一五二六年に、クリストヴァン・ジャツケスを司令官とする六隻の武装船隊をブラジルに派遣した。クリストヴァン・ジャツケスはブラジルの近海で、パウ・ブラ

ジルを積んだ数隻のフランス船を撃沈した。また海岸に侵入したフランス人を駆逐したがパウ・ブラジルの盗伐は防ぎきれなかった。

カブラル以前のブラジル探検者

カブラルの以前にブラジル沿岸を探検したフランス人、スペイン人、イタリア人、ドイツ人のいたことが伝えられている。その一例がフランス人のジャン・クーザンである。彼はルアン出身の海軍軍人で、一四四八七年七月にフランス北部ノルマンディのジイプを出発してアフリカのカーボ・ヴェルデから南端を経て西インド諸島に達し、更に南航してブラジルの沿岸を航海したのが一四八八年となっている。しかし彼はブラジルと思われる新陸地の発見を報告していない。

ジャン・クーザンはイギリスとの戦争の功勞でフランス王室から船舶を与えられ、アフリカとカリブ海の探検を企てた。しかも彼はポルトガルの航海家バルトロメウ・ジアスと同じ一四八八年にアフリカ南端を通過してスペイン人の航海家ではビセンテ・ヤネス・ピンソンが一四九九年に四隻の船舶をもってカナリア群島からカーボ・ヴェルデを經由し、西インド諸島を経て赤道直

下の半島に到達したのが一五〇〇年の二月となっている。彼はその土地にサンタ・マリア・デ・ラ・コンソラシオンと名づけたが、それはアマゾン河口に当る。カブラルのブラジル発見の二カ月前のことである。

ほかにカブラル以前にブラジルの海域を探検したドイツ人のマルチン・ベイハイム（一四三六〜一五〇七）がある。マルチン・ベイハイムがアフリカ西海岸からカリブ海にわたる探検をしたのは一四八五年から一四八八年である。それはコロンボのアメリカ探検よりも数年早く、カブラルのブラジル発見の十数年前である。

マルチン・ベイハイムのアメリカ探検の記録は彼の出身地ニューエンベルグに集められているといわれる。彼の探検区域は広汎にわたるのでブラジルの海域におよんでいることが想像される。このようにカブラルの以前にブラジル沿岸を航海した者はあるが、いずれもブラジルの陸地発見を宣言していない。

カブラル以後のブラジル探検者

ブラジルが発見された当時のポルトガルはインド貿易で多大の利潤を得ていたので、特に物産とてないブラジルには関心を示さなかつた。一五〇一年と一九〇三年に

ブラジルの所在確認と沿岸調査のための探検隊を派遣したにすぎない。

一五〇一年と一五〇二年にかけて航海家アンデレ・ゴンサルベスがフロレンス人の航海家、天文地理学者アメリコ・ヴェスプッチ（一四五―一五二二）を伴ってブラジルの沿岸をサン・ロッセ岬からサン・ビセンデにわたる調査をした。その途中サン・フランシスコ川（一五〇一年一〇月四日）とバイアのトードス・オス・サントス湾（一五〇一年一月一日）リオのグワナバラ湾（一五〇二年一月一日）を発見した。

一五〇三年のブラジルの探検家にはゴンサロ・コエーリョがある。彼もアメリコ・ヴェスプッチの協力を得てブラジルの沿岸調査をし、北東部の海岸に染料となる樹パウ・ブラジルの豊富なことを王室に報告した。同年、ポルトガルの豪商フェルナンド・デ・ノローニヤが北東ブラジルの海域を航海中に、サン・ジョアン島を発見した。それは群島の一つで、後に彼の名がつけられてフェルナンド・デ・ノローニヤ島となった。

フェルナンド・デ・ノローニヤは船舶数隻を所有するユダヤ系の大商人で、ポルトガル王室と契約を結び、三年の期限でブラジルを借地してパウ・ブラジルを伐採した。彼は王室にキント税（五分の一税）を払ったが、パ

ウ・ブラジルは王室の一つの財源となった。

一五〇四年にはフランス人のパルミエール・デ・ゴネヴィルがブラジル沿岸を探検し、土人カリジョ族と親交をもった。当時既にフランス人は北東部の海岸に侵入していた。彼らフランス人は土人に物品のガラクタを与え、それと交換にパウ・ブラジルを伐出させていた。

一五〇四年から一五二五年までにブラジルに采航した航海家と探検家には次のものがある。

ジョアン・コエーリョ（一五〇四年）

アフオンソ・デ・アルブケルケ（一五〇四年）

トリストン・ダ・クイーニャ（一五〇六年）

ジョアン・ジーン・ソリス（一五〇八年）

ジョルジ・ビシオルダ（一五〇九年）

バルトロメウ・マルシオネとベネジット・モレリ（一

五一一年）

エステヴァン・フロエス（一五一二年）

ドン・ヌーノ（一五一四年）

ジョアン・ジーン・ソリス（一五一五年）

クリストヴァン・ジャツケス（一五一六年）

ドアルテ・トリストン（一五一七年）

ドン・ルイス・グスマン（一五一九年）

フェルノン・デ・マガリャンエス（一五一九年）

ヒュー・ロジャース（一五二二年）

セバスチオン・カボット（一五二五年）

ジャン・パルミチエール（一五二五年）

このうちでジョアン・ジーン・ソリスはスペイン人で一五〇八年と一五一五年の二度ブラジル沿岸を探検し、一五一六年にラプラタ川を発見したが、ウルグワイ海岸で土人シャルア族に殺害された。

セバスチオン・カボットはイタリア人の航海家で、一四九七年にケープ・ブレトンを発見したジョバニ・カボット（一四五〇〜一四九八）の子息である。

アメリカ・ヴェस्पッチ（一四五四〜一五一一）

新世界アメリカの名称となったアメリカ・ヴェस्पッチは一四五四年にフロレンスに生れて、一五一二年にセヴィリヤに死去した。

彼は叔父ジョルジ・アントニオ・ヴェस्पッチのもとで養育され、長じて航海学と天文学を学んだ。

一四九一年にスペインのセヴィリヤに赴き同市のメジシー財閥（フロレンスの統治者）の貿易商館の支配人となった。

一四九二年のコロンボのアメリカ発見が彼の血を湧か

せ、一四九七年五月にコロomboの西インド諸島探検の協力者だったアロンソ・デ・オヘダとともに四隻の船舶をもつてカジス港を出発し、オリノロ沿岸からカリブ海域を探検し、一四九八年一〇月スペインに引揚げた。

一五〇一年三月、ポルトガルの王ドン・マヌエルの要請で、カブラルの発見した新陸地ヴェラ・クルースの所在確認と調査のためにアンデレ・ゴンサルベスに協力してアマゾン河口からプラタ水域までの探検をした。

アメリカ・ヴェスプッチは一五〇三年に航海家ゴンサロ・コエーリヨの探検隊に参加し再度ブラジル海域を探検し、ポルト・セグーロの近くにフェートリア（土地管理所）を設けた。

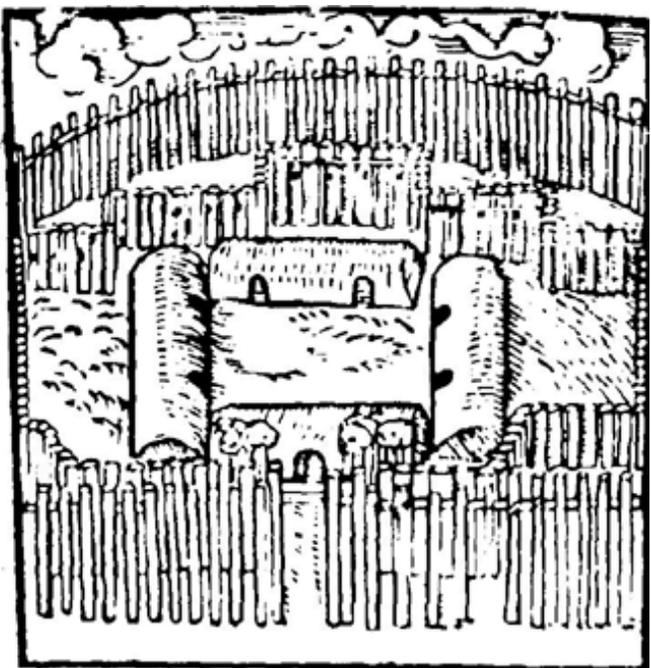
冒険家ハンス・スタデン

ドイツ人の冒険家ハンス・スタデンはポルトガル船でリスボアから八八日を要し、一五四八年一月二八日にペルナンブーコに着き、イタマラカのカピタニアに短期間をすごしてヨーロッパに引揚げた。

翌一五四九年にはスペイン軍艦の砲手となって再びブラジルに来航したが、サン・ビセンテ近海で難船し、土人ツピナンバ族に救助されて捕虜となった。彼はベルチ

オガの土人部落に九カ月抑留された。その間土人ツピナンバ族の生態を綿密に観察し、それに彼の空想を加えて冒険物語りを書き、ハンブルグで出版して当時のベストセラーとなった。

同書の挿絵はハンス・スタデン自らが描いたものである。この冒険物語りは二〇ヶ国語に訳されている。ハンス・スタデンはドイツのヘッセン出身だが、彼についての資料は少なく、不明な点がある。



ハンス・スタデンのブラジル
冒険航海記のさし絵

中米の探検者ヴァスコ・ヌーネス・パルボア

太平洋の発見者で知られるヴァスコ・ヌーネス・バルボアは一四七五年（推定）にスペインとポルトガル国境

近くのエストレマズールに生れた。

バルボアは一五一〇年にダリエソ（現在のパナマ地峡）のサン・ドミンゴに渡ってその統治者となった。一五一三年に彼はスペイン人と土人数百から成る探検隊を率いてダリエソの西方を探検して大海を発見した。それが後にオセアノ・パシフィコ（太平洋）と命名された。

その後バルボアはサン・ドミンゴの統治をスペインから派遣されたペドラリアス・デ・アヴィラと交代した。

バルボアはコロンビアとペルー海岸の探検に当たったが、彼の人気の高まることをアヴィラは嫉視し、スペイン王に対して反乱を企てていると讒言し、王の命を受けてバルボアを斬首刑に処した。それは一五一七年、バルボアは四二才であった。



ハンス・スタデンのブラジル
冒険航海記のさし絵

ヘルナン・コルテス（一四八五～一五四七）

メキシコの征服者ヘルナン・コルテスは一四八五年にスペインのエストレマズーラに生れ、サラマンカ大学に学んで後、一五〇九年にスペイン領のサン・ドミンゴスに向った。

彼の冒険は一五二一年にはじまっている。ジェゴ・ヴェラスケスのキューバ探検に参加し、一五一九年には五〇八人の兵員を率いてメキシコに上陸してアステカ王国に侵入した。当時ヘルナン・コルテスはタバスコに上陸し、北方に進軍してビーラ・リアル・デ・ヴェラ・クルースを建設して長官となった。彼はヴェラスケスとは別行動をとってアステカ王国に乗り込み、モンテズマ王の歓待をうけて血盟を結んだ。

その後、コルテスは策謀をもつてモンテズマ王を捕虜にし、彼がアステカの王となった。当時コルテスは自らが手を下さずして国民を煽動して土人との間に暴動をおこさせ、遂に国民によってモソテズマ王は撲殺された。一五二二年にスペイン国王カルロス五世はコルテスをメキシコの総督に任命した。

彼は一五四〇年にスペインに帰還したが、不遇の晩年

をすごし、六二才でセヴィーリヤで逝った。

フェルノン・デ・マガリヤンエスの世界周航

フェルノン・デ・マガリヤンエスは一五一九年一二月、世界周航の途次リオ・デ・ジャネーロに寄港した。

マゼランで知られるフェルノン・デ・マガリヤンエスのポルトガル語の文献が少ない理由は、彼がスペイン王室の命をうけて世界周航をしたためにポルトガル人に好感をもたれなかったことにあると想像される。

マガリヤンエスは一四八〇年にポルトガル北部のビブラ・レアルに生れた。父ペドロ・デ・マガリヤンエスは貴族であった。

少年期のマガリヤンエスはドン・ジョアン二世の王妃レオノールの小姓となった。

彼は後にドン・マヌエル王の侍従となったが、宮廷人としての境涯に飽きたらず、一五〇五年にドン・フランシスコ・デ・アルメーダのインド探検に参加して以来、海の男に終始した。彼は一五〇五年三月にカナノーレで戦傷を負い、翌一五〇六年にはヌーノ・ヴァス・ペレーラとともにソファアラに要塞を構築し、インドに到達したのが一五〇八年のはじめである。一九〇九年二月、マガリヤンエスはルーマスの戦闘で二度目の戦傷を負ったが、

マラツカへの航海をつづけた。当時ポルトガルの払った犠牲は大きく、隊員の大部分は戦死した。

マガリャンエスはアルブケルケやアントニオ・アブレウなどの名航海家とジヤバ海域の探検に数ヶ月を費やし、ポルトガルに帰還したのは一五一二年であった。次いで彼はマロッコ遠征に参加し、アザマールの攻略に奮戦した。このようにマガリャンエスには多くの功績があったが、彼の受ける年金は意外に少なかった。彼はそれをドン・マヌエル王に陳上すると同時に、ポルトガルのインドを越える東洋進出のためにマラツカ探検を提案した。

ところがマガリャンエスにはマロッコ遠征中にモロー人との内密の交易による不正所得があるとの風説が流れ、ドン・マヌエル王は彼の陳情と提案を拒絶した。マガリャンエスはポルトガル王室に仕えても将来性のないことを悟り、スペインのカルロス一世を訪れてマラツカ探検を提案した。スペイン王室はポルトガルに対抗してマラツカ探検を企画し、探検隊長にジョアン・デ・カルタジェナが内定していたが、カルタジェナの素行に疑いがあった、この計画は一時的に保留されていた。

このような事情からマガリャンエスの提案は容れられ、マラツカ遠征隊が組織されることになった。それは世界周航の企てでもあった。

マガリャンエスの世界周航隊は次の五隻の武装カラベラ船と二八七人の隊員から成るものであった。

トリンダーデ（船長フェルノン・デ・マガリャンエス）
サント・アントニオ（船長ジョアン・デ・カルタジエナ）

ビトリア（船長ルイス・デ・メンドンサ）
コンセプション（船長ガスバール・デ・ケサーダ）
サン・チアゴ（船長ジョアン・ロドリゲス・セロン）

マガリャンエスのマラッカ探検隊は一五一九年八月一日にスペインのセビーリヤを出発した。

五隻の船団はカナリア群島を通過し、アフリカのカーボ・ヴェルデから方向をブラジルに転じた。そのころからジョアン・デ・カルタジエナは探検隊長にポルトガル人のマガリャンエスが任命され、彼が単なる船長に左遷されたことを不満として反抗態度を示した。

遂にそれが謀叛となり、直ちにマガリャンエスの命でカルタジエナは捕縛された。一五一九年一月一三日にマガリャンエスの船隊はリオ・デ・ジャネーロに寄港し、二週間をすごした。その後はブラジルの沿海をすぎてパタゴニア半島づたいに南航する時に大暴風に逢って船舶

のほとんどが破損され、その修理のためにサン・ジョアン湾に数ヶ月碇泊した。

一五二〇年四月一日、ジョアン・デ・カルタジェナとコンセプションの船長ガスパール・デ・ケサーダの共謀による暴動がおこり、それに三〇名が加担した。その暴動はトリンダーデとビトリアに波及し、サン・チアゴだけが中立を固持した。その時にマガリャンエスは断固たる処置をとり、主謀者のカルタジェナとケサーダを斬首刑に処した。

サンタ・クルース湾では再度の船舶の修理をし、サン・ルカ・デ・バラメーダに向う途中またしても暴風のためにサント・アントニオが難破した。隊員は航海をつづける自信を失ない、恐怖にとざされる有様であった。その時に彼らの眼前に海峡が現われた。大部分の隊員はスペインへの帰還を哀願したが、マガリャンエスの確固不動の態度に動かされてその海峡に乗入れることになった。

海峡を進むうちに怒濤さか巻く難所がつぎつぎと現われ、船舶は奔浪されながら辛うじて航進した。または迷宮のような狭溢屈曲する水路があり、それを通過するには筆舌に絶する困難があつた。しかも残りの四隻のうちの一隻はマガリャンエスに反抗してスペインに帰還し、三隻をもって別の大洋に出たのが一五二〇年二月二八日

であった。

マガリャンエスはこの海峡六〇〇キロの通航に三〇日を費やした。

三隻の隊員はマガリャンエスの不屈の信念と勇氣にうたれ、遙かに大海原を望みながら感謝の祈りをした。その大洋は思いのほか穏やかだったのでオセアノ・パシフィコ（太平洋）と命名した。それがヌーネス・バルボアと一致している。それから後はチリー沿岸を北西に進み、一五二一年一月二四日に一つの島を発見した。二月一三日には赤道を通過し、三月はじめにマリアナ群島とグワム島を発見した。次いで三月一六日にフィリッピン群島のゼブーに着き、ハマバール王に丁重に迎えられた。それはセビーリヤ出発以来一九カ月目であった。

マガリャンエスは、ハマバール王にキリスト教徒の洗礼をし、互いに右腕の血をとって兄弟の血盟をし、スペイン王への忠誠を誓った。

ところがマガリャンエスにとって運命的の事件がおこった。それはマクタン島の土民の教化にあたり、或る誤解のために二〇〇〇人の土人の襲撃をうけたことである。マガリャンエスは部下を護りながら闘い、土人の毒槍に刺されて壮烈な死を遂げた。一五二二年四月二七日、マガリャンエスは四一才であった。隊長マガリャンエス

を失った探検隊はまったく無方針状態となった。三隻の船舶のうちコンセプションは焼かれ、トリンダーデは難破してビトリア一隻となった。しかしジョアン・セバスチオン・エルカノは勇を鼓して残存の隊員を激励し、辛うじてスペインに帰着した。出発当時の船舶五隻は一隻、二八七人の隊員は一八人となっていた。その一人がパイロット助手のアントニオ・ピカレッタ、後日の『マガリヤンエス世界周航記』の著者である。

ドン・ジョアン三世の植民政策

ドン・ジョアン一世は商人階級の支持を得てアヴィス王朝を創立して絶対王制を固めた。



ドン・ジョアン三世

ドン・ジョアン二世以後はアフリカ貿易を王室が独占して重商政策をとり、ユダヤ人に圧迫を加えた。当時の資本家と金融業者にはユダヤ人が多かったので、彼らに

改宗を迫り従がわぬ者は異端者として宗教審問をし、国外に追放した。

ポルトガルとスペインが宗教裁判を設定し、ユダヤ人を異端者として拷問にまでかけたことはイベリア半島の歴史に宗教的偏見と暴虐の記録を残した。老獪な政略家で知られたドン・ジョアン二世はユダヤ人の資本家を強く圧迫したが、それらのユダヤ人の大部分はオランダに逃れた。中には改宗したユダヤ人のキリストン・ノーボ（新キリスト教徒）でブラジルに渡って砂糖農園主となった者がある。

ポルトガルから追放されたユダヤ人は資本とともにオランダに移住し、オランダの海外企業に協力することになる。本来なればポルトガルの拓殖事業に投資或いは融資するはずのユダヤ人が反対にポルトガルの敵の立場になる。

ヴァスコ・ダ・ガーマのインド航路の開拓以後、ポルトガル王室はインド貿易を独占して莫大の利潤を挙げたが、損失と犠牲も大きかった。船舶の建造と乗組員の養成、貿易管理所の維持に多額の投資を要した。また航海中に海賊に襲撃され、或いは難破する船舶が意外に多かったのである。しかもインド貿易による利益の大部分は非生産的な面に浪費され、資金として蓄積されなかつ

た。加えて外国の金融業者マルシオネ、ウエルサー、フツガーなどからの負債の金利に追われる状態で王室の財政は窮乏そのものであった。

冒険王といわれたドン・マヌエル王はインド貿易を積極的に進めたが、患大な借金を残して死去した。その後を継いだドン・ジョアン三世（一五〇二〜一五六七）は王室財政の窮状打開に腐心した。

ドン・ジョアン三世はドン・マヌエル王の第一王子で、一五二一年に一九才で即位した。そのころはインド貿易行詰りの転換期でもあり、ブラジルの拓殖に着眼された。

ドン・ジョアン三世は植民地の経営に大いに意を用い、レー・コロニザードール（拓殖王）といわれた。したがってブラジルの開発はドン・ジョアン三世に負うところが多大であり、もし彼によってブラジルの開拓が着手されなければ、ポルトガルはこれほど広大なアメリカ領土を確保し得ずにスペイン、フランス、オランダ、イギリスなどの属領となったことが想像される。ドン・ジョアン三世はブラジルの拓殖第一歩として、一五三〇年に貴族マルチン・アフォンソ・デ・ソーザの開拓団を派遣し、サン・ビセンテ村を築かせた。

ドン・ジョアン三世の文化的功績も大きく、王室の負担による奨学制度を設けて有為の人材をコインブラやパ

リ大学に遊学させたことが挙げられる。彼はコンパニア・デ・ジエズス（ジエズス会）を援助し、一五四九年にブラジルの初代総督トメー・デ・ソーザとともに六名のジエズイットをブラジルに派遣して土民教化と布教に当らせた。

ポルトガルの最高学府コインブラ大学の根本的改革をし、リスボアからコインブラに移したのも彼である。

ドン・ジョアン三世は体躯中型で色浅黒くいかにもモロー人に似た拓殖王というにふさわしい風貌であった。

このようにドン・ジョアン一世からドン・アフオンソ五世、ドン・ジョアン二世、ドン・マヌエル一世を経てドン・ジョアン三世までの一四〇年のポルトガルの海国時代をとおしてブラジルが発見され、その拓殖がはじめられたのである。

ドン・ジョアン三世の王子

ドン・ジョアン三世には七人の子が生まれたが、長女ドーナ・マリアと五男のドン・ジョアン・マヌエルを除くほかは生後数年で死亡した。

ドン・アフオンソ（一五二五年生、数ヶ月で死亡）

ドーナ・マリア（一五二六年生、スペインのフィリップ二世と結婚）

ドン・マヌエル（一五三一〜三七）

ドン・フィリップ（一五三三〜三九）

ドン・ジニス（一五三五〜三七）

ドン・ジョアン・マヌエル（一五三七〜五四）

ドン・アントニオ（一五三九〜四〇）

五男のドン・ジョアン・マヌエルはスペインのカルロス五世の息女ドーナ・ジョアナと結婚し、生れたのがポルトガルの第一六代王ドン・セバスチオン（一五五四〜一五七八）である。その誕生日に父ドン・ジョアン・マヌエルが死去した。

第三章 ブラジルの開拓

ポルトガル人とインジオ

ポルトガル人を人類学的に定義することは困難である。およそポルトガル人の根源はケルト人に発しているが、フェニキア人、ギリシヤ人、ローマ人、スエビア人、モロー人（アラビア人）、ユダヤ人との混血系があるなど非常に複雑である。そのポルトガル人がブラジルに移住して土人や黒人と雑婚し、マメルツコとムラトを生んだ。したがって植民初期にブラジルに渡ったポルトガル人そのものが雑多の人種から成る上に、土人や黒人との混血児が生れた。

後にはヨーロッパから移民が入れられて、ブラジルの人種的構造は更に変化する。

最初のポルトガル人と土人との混血児はバイアのジオゴ・アルヴァレス・コレア（カラムルー）とパラグワースーとの結婚によって生れた。それとほとんど同時期にピラチニンが高原唯一の白人ジョアン・ラマーリョと土

人グワヤナゼス族酋長チビリツサの長女バルチラとの結婚で数人の混血児が生まれた。

一五五〇年以後は北東部の砂糖農園にアフリカから黒人奴隷が入れられ、それらの黒人女とポルトガル人との間に混血児ムラトが生まれた。

また土人と黒人との結婚ではカフーズを生み、さらにそれらの子孫の数代にわたる雑婚でブラジルの人種的人口構造は一層複雑となった。

熱帯圏植民地の経営でポルトガル人ほど成功を収めているものはないが、その根本原因は原住民の土人と融合し、同時に黒人奴隷を巧みに使役したことにある。しかもポルトガル人が血の純血に捉われずして、移住地の土人や黒人と雑婚したことは善悪の批判は別として一等地を抜いている。

民族構成の面から植民初期のブラジルを見るに、住民のインジオとポルトガル人との混血社会が海岸線とサン・フランシスコ流域に形成された。

ブラジル発見から半世紀を経た一五五〇年ごろの白人の数は約四〇〇〇で、その大部分が本国（ポルトガル）から女性を伴わずして移住したために、必然の成行きとして土人や黒人と雑婚しておびただしい混血児を生んだ。それらの混血児を典型的にカボクロ、クリオーロ、クリ

ボカ、カフーズ、パルド、カブラ、ムクーナなどに區別しているが、それについての学説は学者によって必ずしも一致していない。

カボクロは白人男性とインジオ女性との混血児である。別の学説は白人男性とカリリー族女性との混血児と限定している。

クリボカは白人男性とツピース女性との混血児、カフーズはインジオと黒人の混血児、カブラはムラトとカボクラまたはカボクロとクリボカの混血児、科学的には混血率を黒五〇、インジオ四〇、白一〇パーセントとされている。

ブラジルの民族構成について特筆を要するのはバンデーランデだが、彼らのほとんどが白人と土人の混血児マメルツコであった。

一六世紀末から一七世紀をとおしてのバンデーラ期に、バンデーランテと土人との雑婚で多くの混血系ブラジル人が現われた。

インジオの生活

ブラジルのインジオの種族は二百数十あるが、根幹をなすのがツピー・グワラニー、カリーブ、タプイア、ア

ラワーク、カリリーである。発見当時のブラジルは、北部のアマゾン河口から南部のラプラタ水域までツピー・グワラニーに属するツピナンバ、ポチグワラ、ツピニキンス、タパジャラ、カエテス、カリジヨス族がいた。海岸地帯を距る地域にはアイモレス、ゴイタカゼス、アルアケスとカライバ族が多く見られた。

ツピースとタプイアスはブラジル土人の代表的種族で、ほとんどブラジル全域と北はギヤナから南はパラナ盆地とパラグワイにおよんで存在する。そのツピー語はブラジル土民語の原型をなす。

タプイアスはジェス族ともいわれて内陸高地とシンダー下流またはリオ・ドーセ盆地に棲息する。

ほかにニャンビクワラス族があり、その部族のボロロとグワイクルースはマツト・グロツソ、ゴイタカゼスはリオ・デ・ジャネーロ州に多く生存した。

アイモレ部族はバイア南部からエスピリト・サント、リオ州の海岸に見られた。

アピナジェス部族はマラニョン、カイアポスはタパジヨスとマデーラ流域に存在した。

昔カライバ族はアルアコス部族と戦闘を交いながらアンチールまでも攻撃をつづけ、男性を殺して女性を捕えた。その事実を物語るものとして、コロンボの西インド

諸島発見当時、土人の男性と女性がそれぞれ異なる言語を話すのを奇異に感じたという。



人肉食のツピナンバ族

ポルトガル人と最初に接したのはツピースで、ジェズイットが土民教化のために基本語のツピー語を習得したことが肯ける。

ブラジルのインジオの大部分は狩猟採集生活をしている。現在は土地を耕作してマンジオカ、トウモロコシ、タバコ、綿などを栽培するものが多い。

種族によっては胸や手脚、顔面を植物の汁液で染め、耳、鼻、下唇に穴をあけて骨や石飾りを附すものがある。ほとんど全部の種族は木の幹や樹皮でつくったカヌー舟で魚を捕え、または物資を輸送する。

昔は他の種族との絶えざる戦闘があり、武器には弓矢、棍棒、吹矢、鋸が用いられた。

およそ全てのインジオは音楽と舞踊を好み、それが彼らの宗教儀式に現われている。楽器はフルート、木製の太鼓、瓢箪鈴などで、舞踊ではジュルパリが聖なる踊りとされている。儀式によっては女性の同席が禁じられ、もし女性が出席する場合は、その女性が生贅とされる。それは部族にふりかかる神罰を防ぐためである。宗教では或る部族は「全能の神」の存在を信じ、善の神をツパンと呼び、悪の神をアニヤンガという。

インジオは種族と部族の別なく、太陽COARACIと月JACIを崇める。

死人の埋葬式は厳粛におこなわれる。大部分は土製のカメに入れて葬るが、マラジョ島の土人の埋葬式が有名である。

部族または部落の首長はパジェPAGEといわれて医療の知識があり、病人には主に薬草を用いる。

儀式は野外で営まれるものが多い。人肉食の種族は捕虜を殺してその肉を聖壇に備え、それを食べながら儀式を進める。

昔のインジオは一夫多妻だったが現在は一夫一婦制が多く、しかも家父長制である。

ツピー語のタバまたはマロツカは部落または集落、集団生活の場所である。

集団住居は川の沿岸または大樹の下に設けられる。家屋は椰子の葉でつくられた円形のものが多く、敵の襲撃防禦のために木の柵で囲まれたのがある。

部落の首長はツビシヤバと呼ばれ、重要問題は各家族の家長とともに広場に集合して協議される。

或る部族は遊牧生活をし、転々と住居を変えるために家具らしいものをもたず、手編みのハンモックが唯一の所持品である。

おしなべてインジオは装身具に凝り、鳥の羽毛や動物の骨、牙、植物の種子でつくったものを頭と首に飾る。また体にウルクンやジェニパポの液を塗る。

中にはセラミック芸術に秀でる種族があり、黒と赤色で模様を描いた土器や陶器をつくる。

セラミックではマラジョ島のインジオが最も優れている。

インジオの食生活を見るに、マンジヨツカとトウモロコシ、野獣の肉と川魚が主食物である。特にマンジヨツカ粉は欠くべからざる食物であり、トウモロコシからはカウインという酒をつくる。

インジオ語は白人の生活にかなり影響している。ブラジルの地名、動植物の名称でインジオ語のつけられているものが多い。

州名ではパライー、マラニヨン、ピアウイー、セアラ、パライバ、ペルナンブーコ、アラゴアス、セルジッペ、ゴヤス、パラナは土民語である。また都市の街路名のほとんど三分の一は土民語である。

ブラジルのインジオの文献は沢山あるが、ベレンのアマゾナス博物館（ゲールジ博物館）出版部発行のものが最もすぐれている。

発見当時のブラジルのインジオは一二〇万と推定されたが、現在は四五万と見られている。

マルチン・アフォンソ・デ・ソウザのブラジル開拓
団

ドン・ジョアン三世はブラジルの拓殖第一歩として、一五三〇年末に貴族マルチン・アフォンソ・デ・ソーザの開拓団を派遣した。それはブラジルの拓殖と海岸線の防衛を目的とするものであった。

マルチン・アフォンソは実兄ベロ・ローペス・デ・ソーザと軍人、農夫、技術者、流刑人のほか少数のイタリア人、ドイツ人、ユダヤ人など四〇〇人を引き連れて一五三〇年一二月三日にリスボアを出発した。

船舶は六隻で、サン・ミゲル（ナウ船）、サン・ビセン

テ（ガレオン船）、プリンセーザとローザ（カラベラ船）に二隻の小型輸送船から成るものであった。このマルチン・アフォンソの開拓団がブラジル拓殖の萌芽となった。

マルチン・アフォンソ・デ・ソーザは一五〇〇年にポルトガルのビソーザに生れた。父ローペス・デ・ソーザはプラードの領主であった。



マルチン・アフォンソ・デ・ソーザ

マルチン・アフォンソは少年期にブラガンサ大公（後のドン・ジョアン三世）と交友をもち、スペインのサラマンカで中等教育をうけた。一五二一年にドン・マヌエル王の未亡人ドーナ・レオノールを護衛してスペインに赴き、カタリナ姫の女官ドーナ・アンナ・ピメンテルと結婚した。スペインではフランスとの戦いに参加し、戦

功を立ててポルトガルに帰還した。

マルチン・アフォンソはブラジルに出立するに当って、ドン・ジョアン三世から植民地行政のすべての権能を与えられた。

彼は一五三一年三月一三日にバイアに着き更に北航してマラニョン海岸で、パウ・ブラジルを積んだフランス船3隻を撃沈した。ついでリオのグアナバラ湾を経て南航、イリア・グランデ湾でアングラ・ドス・レースの入江を発見した。また、カナネーアに短期間碇泊し、土人の間でバシヤレール（博学者）と呼ばれていたフランシスコ・シャーベスに会い、パラナ奥地に金鉱のあることを聞かされた。

彼はラプラタ水域からの帰路、再びカナネーアに立寄り、ペロ・ローボを隊長に七〇人の探検隊をパラナ奥地に向かわせたが、土人カリジョ族に皆殺しにされたらしく、まったく消息が絶えた。マルチン・アフォンソは一五三二年一月六日にサン・ビセンテ湾に上陸し、一月二日にサン・ビセンテ村を創設した。当時彼はピラチニング高原唯一の白人ジョアン・ラマーリオの訪問をうけた。

マルチン・アフォンソはジョアン・ラマーリオに進められてピラチニング高原を視察しサント・アンデレ・ダ・

ボルダ・ド・カンポまで歩をのぼした。

マルチン・アフォンソはサン・ビセンテ村を創設すると同時に、マデーラ島で積みこんだ甘蔗苗を植え、製糖工場を設けた。それがブラジル最初の製糖工場で、エンジェーニョ・サン・ジオルジまたはエンジェーニョ・ド・ゴヴェルナドル（長官の製糖工場）と呼ばれた。それは後にドイツ人のエラズム・シューツ兄弟によって経営され、エンジェーニョ・デ・エラズムに変わった。

マルチン・アフォンソはリオ・デ・ジャネーロとサン・ビセンテの二つのカピタニアの領主に任命されたが、一五三三年に王室の命をうけてポルトガルに帰還し、一五三四年にはインド総督として赴任した。彼は一五六四年にリスボアにて死去した。

サントスの創設者ブラス・クーバス（一五〇〇—一五九二）

ブラス・クーバスはポルトガルの貴族で、ポルトの出身である。

ブラス・クーバスはマルチン・アフォンソ・デ・ソーザの妻ドーナ・アンナ・ピメソテルからサン・ビセンテのカピタニア領主たる委任をうけてブラジルに渡来した。

彼は一五四三年、サン・ビセンテのカピタニアに一つの村を設けてサントスと命名した。

同時に彼は病院を設けたが、それがブラジル最初の慈善病院となった。

その後ブラス・クーバスは一つのバンデーラ（探検隊）を組織して現在のモジー・ダス・クルーゼス地域を踏査し、パライバ川からサン・フランシスコ川に達して金鉱を発見した。

ブラス・クーバスは徳望高く、植民者から慈父のように尊敬され親しまれた。

彼は九二才でサントスで逝った。サントスのレプブリカ広場にブラス・クーバスの銅像が建てられている。

ジェズス会の創立

中世のヨーロッパに発した宗教改革の気運は十六世紀に入って熾烈となった。特にドイツのマルチン・ルーター（一四八三―一五四六）による宗教改革運動はカトリック教会に対抗してプロテスタント（新教）を打立てる結果となった。コンパニア・デ・ジェズス（ジェズス会）の創立は当時の宗教的風潮に起因するが、それはカトリックへの反抗ではなく、ローマ教会の名誉と権威擁

護のために興こされた聖道会である。開祖はスペイン人のイナシオ・デ・ロヨラ（一一四九―一五五五）で、彼がパリ大学在学中に六名の同志を得て発足したのがコンパニア・デ・ジェズスである。その創立は一五三四年だが、ローマ教皇パウロ二世によつて公認の宗教団体となったのが一五四〇年である。

イナシオ・デ・ロヨラを始祖とするコンパニア・デ・ジェズスはカトリックの教理を根本に峻厳な戒律のもとに軍律的な組織をもつて布教活動を開始した。ジェズス会士はキリスト教の布教のために困苦欠乏に耐え、忍従に終始することを鉄則とした。そのためにジェズス全土は榮譽に据われず、死をも怖れずに未開地の土民教化と布教に當つた。ジェズス全土の布教活動はアフリカ、東洋とアメリカ全域におよんでいる。

ジェズス会の始祖イナシオ・デ・ロヨラは一四九一年にスペインのギブスコアに生れ、貴族の家柄であるところから、少年期にはフェルナンド王の宮廷に仕えた。彼は若くして才幹すぐれ、また武人の素質を備えていた。一五二一年のパンプロナ戦に砲手として奮戦し、戦傷を負つた。彼は野戦病院に居る間、サキソン・ロドルフォの『キリストの生涯』を読んで深く感銘し、人生観が一変した。その後の彼は求道の旅をしてバルセロナからエ

ルサレムに至り、更にヴェニスを経てローマに向ったのが一五二三年である。

一五二四年にバルセロナに帰ったロヨラはラテン語と哲学、キリスト教教理の勉強に専念し、一五二七年にサラマンカ大学を卒業した。同年、彼はポルトガルの王ドン・ジョアン三世の設定した奨学制度の恩典をうけてパリ大学に入学した。その在学中にロヨラはイエズス会の創立者たるべき数名の同志を得た。

その中に東洋への伝道に挺身したスペイン人のフランシスコ・シャビエルをはじめフランス人のピエール・レフェブレ、ポルトガル人のシモン・ロドリゲスがいた。

イエズス会がローマ教皇によつて公認となるまでにはかなりの紆余曲折があつた。それを助言し、背後の力となつたのがポルトガルの王ドン・ジョアン三世である。

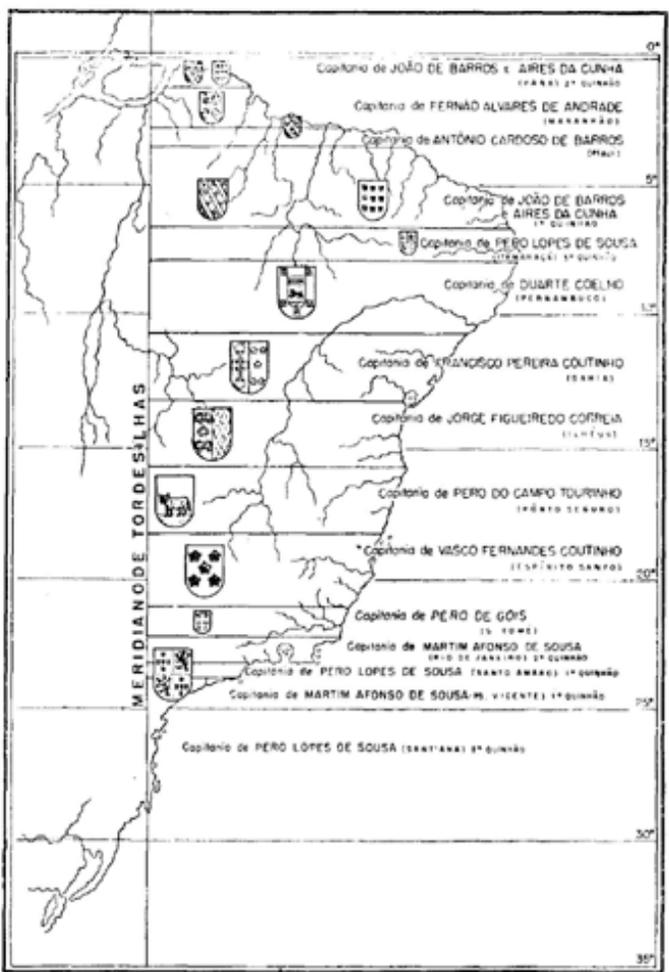
世襲カピタニア

時を経るにつれてブラジルは非常に広大な土地で、その防衛と管理はきわめて難事であることがわかつた。

ポルトガル政府はマデーラ島の拓殖はカピタニア制によつて好積を挙げたところから、その制度をブラジルに実施する決定をした。

それは海岸線を基点とし、トルデシラス領土境界線に向って一五に分割して領主を任命し、それぞれの自己能力によって防衛と開拓に当ることを原則とした。ポルトガル政府は直接投資せずしてブラジルを外侵から防御し経営する方策である。

それは世襲カピタニアと称されて親から子に継がれるもので、ポルトガルで功労あつた貴族が優先的に選ばれて領主に任命された。



15に分割された世襲カピタニア

カピタニア領主はドナタリオといわれて封建領主の性格を有し、軍事、行政、司法一切の権限が与えられた。またカピタニア領地を他の資格ある者に無償分譲する権能も認められた。これはセスマリアという開墾を前提条

件とする未開地の無償交付であり、ブラジルの大地主制発生の要因となる。

一五のカピタニアは各々幅五〇から一五〇レグア（三〇〇キロから九〇〇キロ）を有し、二つのカピタニアを授与された領主が三人いたために全部で一二人のカピタニア領主となった。その北から南にわたるカピタニアと領主の名を挙げると次のようである。

パラ―（ジョアン・デ・バツロスとアイレス・ダ・クーニャ）

マラニオン（フェルノン・アルヴァレス・デ・アンドラーデ）

ピアウイ（アントニオ・カルドーゾ・デ・バツロス）
リオ・グランデ（ジョアン・デ・バツロスとアイレス・ダ・クーニャ）

イタマラカ（ペロ・ローペス・デ・ソーザ）

ペルナンブーコ（ドアルテ・コエーリョ）

バイア（フランシスコ・ペレーラ・コウチーニョ）

イリエウース（ジヨルジ・フィゲレード、コレーア）

ポルト・セグーロ（ペロ・カンボス・トウリーニョ）

エスピリト・サント（ヴァスコ・フェルナンデス・コウチーニョ）

サン・トメー（ペ・デ・ゴエス）

リオ・デ・ジャネイロ（マルチン・アフォンソ・デ・ソーザ）

サント・アマロ（ベロ・ローペス・デ・ソーザ）

サン・ビセンテ（マルチン・アフォンソ・デ・ソーザ）

サンタアナ（ペロ・ローペス・デ・ソーザ）

問題はカピタニア各々の面積が広大にすぎて、他のカピタニアとの交通の便もなく、隔絶状態におかれ、その防衛と経営に絶大の困難を生じたことである。或るカピタニアは頻繁にインジオの襲撃をうけて施設を破壊され多くの犠牲を出した。

カピタニア領主にはその経営管理に全力を傾倒した者はあるが、中には大して熱意を示さず放置状態においた例がある。または他の代理に委ねてカピタニア現地に赴かない領主もあった。

マルチン・アフォンソ・デ・ソーザはリオ・デ・ジャネイロとサン・ビセンテの二つのカピタニアを与えられたが、ポルトガルへの帰還のために領主権をパーデレ・ゴンサロ・モンテローとベロ・デ・ゴエスに委譲した。

ピアウイのアントニオ・カルドーゾ・デ・バッロスは現地に赴任もせず、マラニョンのフェルナンド・アルヴァレス・デ・アンドラーデが代理した。

マルチル・アフォンソの実兄ペロ・ローペスにはイタマラカ、サント・アマロ、サンタアナの三つのカピタニアが授与され、その経営管理は事実上不可能で、イタマラカは他の者に委管された。

ポルト・セグーロのカピタニアでは領主とコロノ（農夫）との相剋が絶えず、宗教的には異端者問題がおこつて実績が挙げられなかった。

エスピリト・サントのカピタニア領主のヴァスコ・フェルナンデス・コウチーニョはポルトガルの貴族で、学識高い紳士だったが、部下と植民者に不良分子があり、あまつさえ土人の反乱で悲惨な状況におかれた。彼はカピタニアの維持経営に全資産を蕩尽し、老衰してリオ・デ・ジャネイロで哀れな死を遂げた。

バイアのカピタニア領主フランシスコ・ベレーラ・コウチーニョも不運の人で、幾多の難問題に逢着した。彼は甘蔗を栽培して製糖工場を設け産業開発につくしたが、度々インジオに襲撃された。彼は資金調達のためにポルト・セグーロを訪れ、バイアへの帰路インジオの攻撃で殺された。

ポルトガル政府はペレーラ・コウチーニョの後継の息子からカピタニア領地を四百ミルレースで買収し、総督直属とした。

結局は一五のカピタニアのうちで繁栄したのはサン・ビセンテとペルナンブーコの二つであつた。特にペルナンブーコは恵まれた自然条件と相まって領主ドアルテ・コエーリヨの植民地経営の傑れた才覚と努力によつて最高の業績を挙げた。

ドアルテ・コエーリヨは一五〇三年にブラジル沿岸を探検したゴンサロ・コエーリヨの子息で、ブラジル赴任前はインド貿易に携わつた経歴がある。彼はオリンダの建設者で、ペルナンブーコのカピタニアの開拓当初はかなりの困難に遭遇した。ドアルテ・コエーリヨは拓人の典型で剛健不屈、固い信念を持してすべてに慎重を期し、目的遂行に邁進するところがあつた。彼は土人タバジャラ族を懐柔し、精悍なポチグワラ族と闘いながらペルナンブーコを開拓した。彼はペルナンブーコの海岸地帯の豊饒なマッサペ土壤（有機質に富んだ黒色の腐蝕土）に甘蔗栽培を広めて、エンジュエーニヨ（砂糖農園）を建設した。

晩年のドアルテ・コエーリヨは病体となつてポルトガルに引揚げ、一五五四年にリスボアに死去した。彼がペルナンブーコを去る時には六〇以上のエンジュエーニヨが存在した。ドアルテ・コエーリヨがポルトガルに帰還し

た後はペルナンブーコ生れの子息ジョルジ・ドアルテ・デ・アルブケルケ・コエーリヨが父の遺志を継いでカピタニアの発展に尽した。

ブラジルの北東部の海岸地帯は距離的にポルトガルに近く、また地勢的には南部のような峻峽な海岸山脈はなく、しかも地味肥沃で甘蔗栽培に適していたことが砂糖産業を隆盛ならしめたのである。

総督府の設置

ペルナンブーコとサン・ビセンテを除く他のカピタニアは期待した成績が挙げらず、失敗に帰した観があった。そのため全カピタニアを統轄し且つ援助するべく、総督府の設置が決定された。その場所は地理的にポルトガルに近く、ブラジル海岸線の中央に位置する関係で、バリアのサルバドールが選ばれた。

また初代総督には貴族のトメー・デ・ソーザが任命された。

トメー・デ・ソーザは一五〇三年にポルトガルのミニョに誕生した。父ジョアン・デ・ソーザ・セアブラは貴族で、母メンシア・ロドリゲスも名門の出であった。

トメー・デ・ソーザは七人兄弟の三男で、マルチン・ア

フォンソ・デ・ソーザの従弟に当る。彼は一五才で宮廷に仕え、若人の鍛練試合で、ドン・マヌエルの王子ドン・ジョアン（ドン・ジョアン二世）と相識る機会を得た。王室で教育された若人はポルトガルのために他国遠征をしたが、それはアフリカと東洋であつた。

トメー・デ・ソーザは一五二七年のマロッコにおいてのモーロー人との戦いに参加した。一五三五年には軍艦の艦長としてインドのコシンに赴き、多大の功績を挙げた。貴族となつた。

トメー・デ・ソーザは六隻の武装船団をもつて一五四九年二月一日にリスボアを出発した。それはマルチン・アフォンソ以来の最大のものであつた。一行は七〇〇人で、軍人、官吏、技術者、農夫のほか流刑人もいた。

官公吏の中にはプロヴェドール（司法官）とアルカイデ・モール（財務官）が見られた。

またマヌエル・ダ・ノブレガ神父を団長とする次の五名のジェズイット（ジェズス会士）が加わつていた。

レオナルド・ヌーネス僧

ジョアン・アスピルクエタ・ナヴァアロ僧

アントニオ・ピーレス僧

ビセンテ・ロドリゲス修道士

ジオゴ・ジャコメ修道士

トマー・デ・ソーザはアフリカの西海岸、カーボ・ヴェルデで数頭の牛を積み、一五四九年三月二九日にバイアに到着した。彼はトードス・オス・サントス湾東方の要害堅固の高地を選んで保塁を築き、町づくりに着手した。建築資材一切は現地で整え、トマー・デ・ソーザ自らが工事監督をしながら粘土をこねた。この町がブラジル最初の首都であり、一五四九年一月一日の諸聖人の日を期して創設式を挙げた。町の名称はサン・サルバドールだが、後には単にサルバドールと呼ばれた。

トマー・デ・ソーザはバイアに着いてはじめて会った白人がカラムルーの綽名のジオゴ・アルヴァレス・コレアである。彼はジョアン・ラマリーヨと同時期の一五一五年ごろに二二才でブラジルの近海で難船してバイアに漂着し、土人ツピナンバ族の捕虜となった。

ツピナンバ族には捕虜を殺して食べる習慣があったが、ジオゴ・アルヴァレスは殺される前日、所持していた鉄砲を射ったところ、火を噴いて爆音が轟ろいたので、土人は驚ろいてカラムルーと叫んだ。カラムルーは火の神または雷の神の意である。

ジオゴ・アルヴァレスは鉄砲のおかげで死を許され、しかも酋長の娘パラグワスーの熱愛をうけて結婚する。

或る日、彼ら夫妻は偶然の機会に恵まれてフランス船でフランスを訪れ、王アンリ一世に謁見する。

後にパラグワースーはキリスト教の洗礼をうけてカタリナの洗礼名を与えられ、二人の間に数人の子が生れた。

晩年のカタリナ・パラグワースーは慈善事業につくし、彼女の寄進で一つの教会が建立された。同教会には後にイグレージャ・デ・カタリナ・パラグワースーの名称がつけられ、その中にカタリナ・パラグワースーが葬られている。

カラムルーはモエマという土人娘からも愛されたが、彼はパラグワースーと結婚したために、モエマは悲恋の情を抱いてトードス・オス・サントス湾に投身自殺をした。つまりカラムルーは二人の美しい土人の乙女から愛された果報者である。

トメー・デ・ソーザはポルトガルからブラジルに移住した独身の男子が土人との雑婚を避けるために独身の女性と孤児の送り出しをポルトガル政府に要請した。また彼の総督在任の一五五一年にサルバドールにカトリック教区が設けられ、翌一五五二年に初代司教ペロ・フェルナンデス・サルジーニャが着任した。

一五五三年にトメー・デ・ソーザはピラチニンガ高原

のサント・アンデレ・ダ・ボルダ・ド・カンポ村の創設式に臨み、ジョアン・ラマリーヨを村長に任命した。

トメー・デ・ソーザは四年の総督任期を終え、第二代総督ドアルテ・ダ・コスタと交代し、一五五四年九月一日にポルトガルに帰還した。

ドアルテ・ダ・コスタもポルトガルの貴族で、王室武官、スペイン駐在公使の経歴がある。彼はマリア・メンドンサと結婚して一〇人の子に恵まれた。

一五五三年五月八日にポルトガルを出発、三隻の船舶と二六〇人を率いて一五五三年七月一五日にサルバドールに到着した。彼には子息ドン・アルヴァロ・ダ・コスタと次の六名のジェズイットが同伴した。

ルイス・ダ・グロン僧

ブラス・ロウレンソ僧

グレゴリオ・セロン僧

アンブロジオ・ピーレス僧

アントニオ・ブラスケス修道士

ジョゼ・デ・アンシエタ修道士

ドアルテ・ダ・コスタの子息ドン・アルヴァロも軍人

で、マロッコ戦に参加したことがあり、ブラジルではエスピリト・サントの土人反乱の討伐に当った。しかし、彼はバイアの司教ペロ・フェルナンデス・サルジーニヤと意見相容れずして紛争を生じ、サルバトールの社会は二派に分れて葛藤がつづいた。それはドン・アルヴァロ派とサルジーニヤ司教派であり、双方からポルトガル政府に情報がもたらせられた。遂にサルジーニヤ司教は帰国命令をうけてバイアを出発し、リオ・グランデ・ド・ノルテ沖で難船して土人カエテ族に捕えられ、殺害された。ドアルテ・ダ・コスタの総督在任中の事件では、北東部糖業地においてのジエズイットと農夫の抗争、インジオの反乱、リオのグワナバラ湾へのフランス軍の侵入があつた。当時ブラジルの外侵防備は不充分だったので、フランス軍撃退の助勢を再三ポルトガルに求めたが叶えられず、ドアルテ・ダ・コスタは非常な苦境におかれた。彼はフランス軍と一戦も交えることができずして任期終了となり一五五七年にポルトガルに帰還した。

第三代総督メン・デ・サーは一五五八年二月二八日にサルバドールに着任した。当時はペルナンブーコ、ポルト・セグーロ、エスピリト・サント、リオ・デ・ジャネイロのカピタニアは土人の反乱や外国人の侵略をうけて

戦時状態にあった。

サンパウロではジェズイットとジョアン・ラマリーヨの闘争があった。

メン・デ・サーは一四九八年にポルトガルのコインブラに生れた。彼は貴族で、詩人サー・デ・ミランダの実弟である。



第三代総督メン・デ・サー

ポルトガルの女王カタリナ・デ・アウストリア（ドン・ジョアン三世の未亡人、第一六代王ドン・セバスチオンが未成年のため摂政の任にあった）によって一五五七年七月二三日にブラジルの第三代総督に任命された。

メン・デ・サーは着任早々、エスピリト・サントのカピタニア領主ヴァスコ・フェルナンデス・コウチーニョの乞いによつて、同地の土人反乱の討伐のため派兵した。その戦いで子息フェルノン・デ・サーが戦死した。ほかにメン・デ・サーは幾多の問題に直面したが、最大秒難事はリオ・デ・ジャネイロのグワナバラ湾に侵入したフ

ランス軍との戦いであつた。彼は甥のエスタシオ・デ・サー（リオ・デ・ジャネイロの初代長官）がフランス軍の追放戦で戦死して後、外侵防御のためにリオ市街をカラ・ド・コンからサン・ジャヌアリオ丘（現在のエスプラナーダ・ド・カステロ）に移した。

メン・デ・サーは産業開発にも尽し、ジェズイットの土民教化と布教を援助した。またサルバドールのセー教会と慈善病院を建設した。

メン・デ・サーは在任一一年、一五六九年に総督の辞表を王室に提出した。翌一五七〇年に新総督ルイス・デ・ヴァスコンセーロスが赴任の航海中にフランスの海賊に襲われて戦死し、その後任がないままメン・デ・サーは総督をつづけた。したがってメン・デ・サーの総督任期が最も長く、一四年にわたっている。彼は一五七二年三月一二日にサルバドールに病没し、ジェズイットの墓地に葬られた。

メン・デ・サーの死を機会にブラジルの総督区が南北に二分されて二人の総督が任命されることになった。北の総督府はサルバドールで、総督にドン・ルイス・ブリト・デ・アルメーダが任命され、南はリオ・デ・ジャネイロで、アントニオ・サレルマが総督となった。しかし

一五七七年四月一二日をもって、二総督制は廃されて単一総督となり、サルバドルに総督府が置かれて、アフリカとインド貿易の経験家ロウレンソ・ダ・ヴェーガが総督として来任した。

歴代の総督と副王

初代総督トメー・デ・ソーザ（一五四九―一五五三）

第二代総督ドアルテ・ダ・コスタ（一五五三―一五五八）

第三代総督メン・デ・サー（一五五八―一五七二）

第四代総督ドン・ルイス・フェルナンド・デ・ヴァスコ
ンセーロス（就任前死去）

第五代総督ドン・ルイス・デ・ブリト・エ・アルメーダ
（北方の総督一五七三―一五七八）

第六代総督ドン・アントニオ・デ・サレルマ（南方の総
督一五七四―一五七八）

第七代総督ジオゴ・ロウレンソ・ダ・ヴェーガ（一五七
八―一五八一）

第八代総督マヌエル・テーレス・バレット（一五八三―
一五八七）

第九代総督ドン・フランシスコ・デ・ソーザ（一五九一―

第一〇代総督ドン・ジオゴ・ボテーリョ（一六〇二―一六〇八）

第一一代総督ドン・ジオゴ・デ・メネーゼス・シケイラ（一六〇九―一六一三）

第一二代総督ドン・ガスパール・デ・ソーザ（一六一三―一六一七）

第一三代総督ドン・ルイス・デ・ソーザ（一六一七―一六二二）

第一四代総督ドン・ジエゴ・デ・メンドンサ・フルタード（一六二二―一六二四）

第一五代総督マチアス・デ・アルブケルケ（一六二四―一六二五）

第一六代総督フランシスコ・モウラ・ロリン（一六二五―一六七代総督ジオゴ・ルイス・デ・オリベ이라（一六二

六―一六三五）

第一八代総督ドン・ペードロ・ダ・シルバ（一六三五―一六三八）

第一九代総督ドン・フェルナンド・デ・マスカレーニャス（トーレ伯爵一六三九―一六四〇）

第二〇代総督ドン・ジョルジ・デ・マスカレーニャス（モントアルヴァン侯爵、第一代副王一六四〇―一六四一）

第二一代総督アントニオ・テーレス・ダ・シルバ（一六四二―一六四七）

第二二代総督アントニオ・テーレス・デ・メネゼス（一六四七―一六四九）

第二三代総督ジョアン・ロドリゲス・デ・ヴァスコンセーロス（カステロ・メーロ伯爵一六四九―一六五四）

第二四代総督ドン・ジェロニモ・デ・アタイデ（アトウギア伯爵一六五四―一六五七）

第二五代総督フランシスコ・バレット・デ・メネゼス（一六五七―一六六二）

第二六代総督ドン・ヴァスコ・デ・マスカレーニヤス（オビドス伯爵第二代副王一六六三―一六六七）

第二七代総督アレシヤンデレ・デ・ソーザ・フレレー（一六六七―一六七二）

第二八代総督フランシスコ・コレア・ダ・シルバ（就任せず）

第二九代総督アフォンソ・フェルナンド・デ・カストロ（バルバセナ子爵一六七二―一六七五）

第三〇代総督ロツケ・ダ・コスタ・バレット（一六七七―一六八二）

第三一代総督アントニオ・デ・ソーザ・メネゼス（一六八二―一六八四）

第三二代総督アントニオ・ルイス・ソーザ・デーロ（一六八四―一六八七）

第三三代総督マチアス・ダ・クニニヤ（一六八七―一六八八）

第三四代総督フレ・マヌエル・ダ・レズレーソン（一六八八―一六九〇）

第三五代総督アントニオ・ルイス・ゴンサルベス・ダ・カマラ（一六九〇―一六九四）

第三六代総督ジョアン・デ・ランカストレ（一六九四―一七〇二）

第三七代総督ドン・ロドリゴ・ダ・コスタ（一七〇二―一七〇五）

第三八代総督ドン・ルイス・セザル・デ・メネゼス（一七〇五―一七一一）

第三九代総督ドン・ロウレンソ・デ・アルメーダ（一七一〇―一七一七）

第四〇代総督ペードロ・デ・ヴァスコンセロス・ソーザ（一七一七―一七一八）

第四一代総督ペードロ・アントニオ・デ・ノローニヤ（第三三代副王一七一四―一七一八）

第四二代総督サンショ・デ・ファロ・エ・ソーザ（第四代副王一七一八―一七一九）

第四三代総督ドン・ヴァスコ・フェルナンデス・セーザ
ル・デ・メネゼス（第五代副王一七二〇―一七三
五）

第四四代総督ドン・アンデレ・デ・メーロ・エ・カスト
ロ（第六代副王一七三五―一七四五）

第四五代総督ドン・ルイス・ペレグリーノ・デ・カル
ヴァーリョ（第七代副王一七四九―一七五五）

第四六代総督ドン・マルコス・デ・ノローニヤ（アンコ
ス伯爵第八代副王一七五五―一七六〇）

第四七代総督ドン・アントニオ・デ・アルメーダ・ソアー
レス（ラブラジオ侯爵第九代副王一七六〇―一七
六三）

第四八代総督ドン・アントニオ・アルヴァレス・ダ・ク
ニヤ（クーニヤ伯爵第一〇代副王一七六三―一七
六七）

第四九代総督ドン・アントニオ・ロリン・デ・モウラ（ア
ザンブージャ伯爵第一一代副王一七六七―一七六
九）

第五〇代総督ドン・ルイス・デ・アルメーダ・マスカレ
ニヤス（第二代ラブラジオ侯爵第一二代副王一七
六九―一七七九）

第五一代総督ドン・ルイス・デ・ヴァスコンセーロス・エ・

ソーザ（ファイゲール伯爵第一三代副王一七七九—一七九〇）

第五二代総督ドン・ジョゼ・ルイス・デ・カストロ（レゼンデ伯爵第一四代副王一七九〇—一六〇二）

第五三代総督フェルナンド・ジョゼ・デ・ポルトガル（第三代レゼンデ伯爵第一五代副王一八〇一—一八〇六）

第五四代総督ドン・マルコス・デ・ノローニャ・エ・ブリト（第八代アルコス伯爵第一六代副王一八〇六—一八〇八）

一八〇八年三月八日から一八一六年三月二〇日まではドーナ・マリア一世病気のため摂政ドン・ジョアンの治世で、一六一六年三月二〇日から一八二一年四月二五日までがドン・ジョアン六世の治世である。

初代副王ドン・ジョルジ・デ・マスカレーニャス（モントルヴァン侯爵）はスペイン統治最後の1640年にフィリッペ四世によって任命された。

第二代副王ドン・ヴァスコ・デ・マスカレーニャス（オビト伯爵）は一六六三年から一六六七年まで四年在任した。

一七六三年にブラジルの首都がサルバドールからリオ

に移され、ドン・アントニオ・アルヴァレス・ダ・クニャ（クーニャ伯爵）が第一〇代副王に任命された。その任期（一七六三―一七六七）にリオの要塞を整備し、陸海軍工場を設けた。また療病病院を設け、南部に入植したアソレス移民に援助を与えた。

第二代副王ドン・アントニオ・デ・ロリン・モウラ・タヴァレス（アザンブージャ伯爵）の在任は一七六七年から一七六九年までである。

第三代副王ドン・ルイス・デ・アルメーダ・シルバ・マスカレーニャス（第二代ラブラジオ侯爵）の任期（一七六九―一七七九）にリオ市街の改良工事をなし、コーヒー栽培の普及につとめた。

第三代副王ドン・ルイス・デ・ヴァスコンセーロス・ソーザ（ファイゲイロ伯爵）の任期一七七九―一七九〇）にカリオカ水道を設け税関倉庫が増築された。

第一四代副王ドン・ジョゼ・ルイス・デ・カストロ（第二代レゼンデ伯爵）は一七九〇年に就任間もなく市庁の火災で重要文書を焼失した。その任期中の一七九二年にチラデントスがランパドールザ広場で処刑された。

第一六代副王ドン・マルコス・デ・ノローニャ・エ・ブリト（第八代アルコス伯爵）の任期の一八〇八年三月に摂政ドン・ジョアンがリオ・デ・ジャネイロに到着し、ポ

ルトガル王室を移したために副王制は廃された。

サンパウロ村の創設

サンパウロ・デ・ピラチニंगा村の創設に先立つこと八ヶ月、一五五三年五月に、マヌエル・ダ・ノブレガ神父はピラチニंगा高原の実地調査を完了した。

ノブレガ神父の調査の先導をつとめたのはジョアン・ラマーリオの長男アンデレ・ラマーリオである。

ノブレガ神父はチエテ川を下ってマニソバ（現在のイツー）に達し、具さに調査の結果ピラチニंगा高原のタマンドアチーとアニヤンガバウー小流の中間の高地を選定して土民教化村を設けることを決定した。その場所が現在のパテオ・ド・コレジオである。

ノブレガ神父の先導者アンデレ・ラマーリオはポルトガル人の父とグワヤナゼス族の母をもつ関係で、ポルトガル語とツピー語を話せることが好都合であった。

アンデレ・ラマーリオの父はサント・アンデレ・ダ・ポルダ・ド・カンポの創設者ジョアン・ラマーリオで、母バルチラはピラチニंगा高原の土民の酋長チビリツサの長女である。

ノブレガ神父は一五五三年六月にポルトガルの王ド

ン・ジョアン三世に書簡を送り、ピラチニンガ高原の調査によって最高の条件の場所を得、土民教化村の設立を決定した。その旨を了承許可ありたしと述べている。

それは海岸から一〇レグア（六〇キロ）距るピラチニンガ高原の丘陵地と記されている。

バイアから八人のパーデレと修道士が到着し、それにサン・ビセンテ駐在の四名を加え一二名がピラチニンガ高原の高台に学校と教会の建設に当った。その建物は長さ一四メートル、幅一〇メートルの土壁と藁葺きの粗野なもので、設計と施工担当がアフォンソ・ブラス僧であった。アフォンソ・ブラス僧は先頭に立って粘土をこね、大工仕事をやった。

サンパウロ村の建設に当ったジェズイットの僧と修道士を次に列記する。

マヌエル・ダ・ノブレガ僧

レオナルド・ヌーネス僧

アントニオ・ピーレス僧

グレゴリオ・セロン僧

アフォンソ・ブラス僧

デオゴ・ジャコメ僧

ガスパール・ロウレンソ僧

ペードロ・コレージャ僧

マヌエル・デ・シャーベス僧

ビセンチ・ロドリゲス修道士

ジョゼ・デ・アンシエタ修道士

アントニオ・ロドリゲス修道士

一五五四年一月二五日の聖徒パウロの受洗記念日を期して、サンパウロ・デ・ピラチニンガ村創設の野外ミサが挙げられた。ミサの司祭はマヌエル・ダ・パイバ僧で、補佐は当時二〇才のジョゼ・デ・アンシエタとアントニオ・ロドリゲス修道士であった。

このようにして創設されたサンパウロ村はその後しばしば土人タモヨ族に襲撃された。それはタモヨ族が、リオのグワナバラ湾に侵入したフランス軍と同盟を結び、ポルトガル人を敵として戦っていたからである。

ノブレガ神父はタモヨ族との和平交渉のためにツピー語に堪能のアンシエタ修道士を伴ってイペロイグ海岸の土人部落を訪れた。

或る日、ノブレガ神父は急用のためサン・ビセンテに帰ったが、その間アンシエタは人質となって土人部落に留まった。当時アンシエタは紙とペンを持たなかったので海岸の砂原に棒切れをもって聖母讃仰のラテン語の詩

を書き綴った。

土民教化村として築かれたサンパウロ村は遅々として発展もせず、一七世紀半ばからバンデランテスの奥地探検の基地となって人口が増えはじめた。それにしても将来のラテンアメリカ最大の工業都市サンパウロを誰が想像したであろうか。

マヌエル・ダ・ノブレガ神父

マヌエル・ダ・ノブレガはドン・マヌエルの治世、一五一七年一〇月一日にポルトガルのサンフィン地方のエソトレ・ドウロスに生れた。父バルタザール・デ・ノブレガは高等法院の判事であった。

マヌエル・ダ・ノブレガは少年期に家を出奔して流浪の旅をつづけた。一五三四年に一七才でスペインに赴きサラマンカ大学に入学して法学と哲学を学んだ。

やがて一五三七年にドン・ジョアン三世によってコインブラ大学がリスボアからコインブラに遷されるや、マヌエル・ダ・ノブレガは一五三八年に同大学に入学し、法学と神学部を席をおいた。かつての放浪児ノブレガはコインブラ大学入学と同時に心境が変わり、篤い信仰をもった。彼は一五四一年に二四才で優秀な成績でコイン

ブラ大学を卒業し、法学修士となった。彼の読書による最大の影響は、聖アヴグスチンの『懺悔録』からうけた。

ノブレガの恩師アスピルクエタ・ナヴァロは、彼に大学に留って教授となることを奨めたが、ノブレガは生来の吃り（ドモリ）のために教壇に立つことの不適當を悟り、また大学教授としての安逸な生活に飽き足らず、せつかくの好意を辞退した。彼はなにかしら人生至上の使命に邁進したい希望に燃えた。

ノブレガは深更眠りもせずに考えつづけ、聖アウグスチンや聖徒パウロの言葉を脳中に繰返し、遂に神の使徒として起つ覚悟を固めた。それは彼の前途に限りない苦難と犠牲と約束するものであった。かくしてヨーロッパ最高の学位をもつノブレガはすべての栄誉と地位を捨て、ジェズイット教団に入門して質素な聖衣を頂いたので一五四四年二月である。それ以来彼は貧者の慰問救済につとめ、哀れな病人、孤児、寄りべない老人や監獄の囚人を訪れて布教伝道に当った。彼の布教区はポルトガル北部の農村で、悩める著の相談相手となり、または罪人の弁護など 神学と法学を修めた彼はなすべきことが多くあった。

一五四九年、ドン・ジョアン三世はブラジルの初代総督トメー・デ・ソーザとともに、土民教化と布教のため

にジェズイットの派遣を決定した。それは植民者と土人との磨擦を避けるためでもあった。ドン・ジョアン三世はシモン・ロドリゲス師と相談の結果、マヌエル・ダ・ノブレガを団長にジェズイットをブラジルに送ることになった。

マヌエル・ダ・ノブレガの風貌を描けば、中肉中背で痩せ型、その額は理智と寛大を表わし、愛情と聡明の双眸と一直線にひく口唇は誠実を物語り、少し鋭さを帯びる鼻は不屈をあらわしている。



マヌエル・ダ・ノブレガ神父

シモン・ロドリゲス師から至急来訪ありたしの報をうけたノブレガは星の瞬く寒空のコインブラに向った。数年の布教で鍛練された健脚をもってモンデゴ河岸の丘に登りながら彼は胸の高鳴りを感じた。

コインブラに着いたノブレガはシモン・ロドリゲス師に面会し、ブラジルの初代総督とともに、土民教化と布教のために派遣されるジェズイットの団長に彼が推され

たことを知った。シモン・ロドリゲス師は徐ろに語った。『フランシスコ・シャビエルは既に東洋において伝道に当っている。貴下には新天地ブラジルに赴いて土民教化と布教に献身する使命が与えられている』。

ノブレガは感動の声を震わせ、『王の命とあらば名誉としてお受けする……』。シモン・ロドリゲス師とノブレガは固い握手をした。当時のマヌエル・ダ・ノブレガは三十二才、ジェズス会がローマ教会から公認されて八年目であった。

ブラジルに着いたノブレガは総督トメー・デ・ソーザに協力してサルバドールの町づくりをなし、土民教化区を三つに分けてそれぞれ二名のジェズイットに担当させた。

ノブレガはパーデレであるとともに法学者、教育家、文学者であり、時に臨んで卓抜する政治家、戦略家、探検家の素質を兼備していた。彼はサルバドールに神学校を設け、サンパウロ村を創設した後にリオ・デ・ジャネイロにも神学校を建設した。またリオ・デ・ジャネイロがフランス軍に侵略されるや、長官エスタシオ・デ・サーを授けてその防御と駆逐戦を指揮した。

さらに海岸線に蟠居する土人タモヨ族からサンパウロ村が襲撃された時に、ノブレガ神父は通訳としてアソシ

エタ修道士を伴ってイペロイグ（現在のウバツバ）の土人部落を訪れて和平工作に努めた。

ノブレガ神父はブラジルにおいての神の使徒としての生涯を終え、五三才でリオ・デ・ジャネイロに逝った。それは一五七〇年一月一日、彼の誕生日であった。

ジョゼ・デ・アンシエタ

ジョゼ・デ・アンシエタは一五三五年五月一日、スペイン領のカナリア群島、テネリフェ島のサン・クリストバル・デ・ラグーナに生れた。

父ジョアン・ロペス・デ・アンシエタはスペインのウレスチーリヤ出身の貴族の後裔で或る叛乱戦に参加して敗れ、カナリア本島に亡命した。母メソシア・ジーアス・ロレーナはテネリフェ島の開拓者ドン・フェルナンド・ロレーナの孫である。

ジョゼ・デ・アンシエタは幼にして神童といわれ、一五四九年に一四才でポルトガルに渡り、コインブラ大学の芸術学校に入学した。

彼がコインブラに数年をすごすうちに、スペイン人のイナシオ・デ・ロヨラによって創立されたイエズス会の熱烈な信仰と目的に感動し、忍従不屈の誓いを立てて同

教団に入門したのが一七才であつた。

ジョゼ・デ・アンシエタは生れながらにして體質虚弱だつたが、或る日の事故で脊髄障害をうけ、転地療養のためにもブラジル移住を希望したようである。彼はジェズイットの修道士として第二代ブラジル総督ドアルテ・ダ・コスタと同船でバイアに到着したのが一五五三年、一九才であつた。



ジョゼ・デ・アンシエタ

アンシエタはブラジルに着いて数ヶ月でツピー語のあらましを修得した。彼はノブレガ神父の命によってサルバドールからサン・ビセンテに向う航海中に難船したが寄蹟的に助かり、生涯をブラジルの土民教化と布教に捧げる決意を更に固めた。

一五五四年にマヌエル・ダ・ノブレガ神父の先見と英断で、ピラチニング高原にサンパウロ村が創設されるに当り、アンシエタは教会と学校の建設に協力した。彼はサンパウロ村の創設後、土民児童に読み書きを教え、またイタニヤインを拠点として海岸線の土民教化に當つた。

後にアンシエタはサルバドールに移転し、ノブレガ神父の死後はブラジルのジェズイット教団長となった。晩年のアンシエタはエスピリト・サントのレリチーバ（現在のアンシエタ）を土民教化の本陣とし、四四年の布教の生涯を終えた。それは一五九七年六月九日、六三才であった。

アンシエタの葬儀には教化されたインジオ数百が参列した。

レリチーバには紺碧の海原を臨む丘上にアシシエタの建てた質素な教会がいまも保存されている。

ジョアン・ラマーリョ

ジョアン・ラマーリョ（一四九〇―一五八〇）は一五一五年ごろサン・ビセンテに漂着した流刑著と見られている。彼はポルトガルのボウゼアの出身で、父はジョアン・ベーリョ・マルドナルド、母はカタリナ・アフォンソ・バルドネであった。

ジョアン・ラマーリョはポルトガルの女王護衛兵だったが、或る政治犯罪に加担したためにブラジルに流刑され、難船してサン・ビセンテに漂着したという説がある。または彼がユダヤ系だったので迫害され、ブラジルに流

刑されたともいわれている。

ジョアン・ラマーリオは郷土でカタリナ・フェルナンデス・ヴァツカスと結婚していたが、ブラジルに渡って以来は双方の音信が絶えた。彼がポルトガルを出る時には妻カタリナは妊娠していた。

サン・ビセンテに漂着したジョアン・ラマーリオは或る期間自給自足の生活をしたことは、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルソーの無人島漂流記』を思わせる。

後にジョアン・ラマーリオはピラチニガ高原の土民の尊長チビリツサと友好関係をもち、その長女バルチラと結婚する。彼はポルトガルに妻を残してあったので二重結婚だがマヌエル・ダ・ノブレガ神父の計らいで、正式にカトリックの結婚式を挙げ、バルチラにはイザベルの洗礼名がつけられた。

マルチン・アフォンソの開拓団がサン・ビセンテ村を創設するに当って、ジョアン・ラマーリオは協力した。彼はサンパウロ・デ・ピラチニガ村よりも一年早く、一五五三年に سانت・アンドレ・ダ・ボルダ・ド・カンポ村を設け、初代総督トメー・デ・ソーザに推されて村長となった。

サンパウロ村の創立当初からジョアン・ラマーリオと

ジェズイットと政治問題をからんで紛争を生じたが、それは一五六二年の土人タモヨ族の襲撃によるサント・アンデレ・ダ・ボルダ・ド・カンポ村の壊滅までつづいた。ジョアン・ラマーリオは失意のまま妻子を残して失踪し、海岸のツピナンバ族の土人部落を彷徨して一五八〇年に九〇才で死去した。

新聞人劇作家アントニオ・カラードの『殺教の町』にジョアン・ラマーリオの数寄の生涯が叙されている。

リオ・デ・ジャネイロの建設とフランス軍の侵入

一五〇〇年のブラジル発見後、三十数年におよんで北東部の海岸にフランス人が侵入して、染料のパウ・ブラジルを伐採した。それらのフランス人は主にノルマンジイとブリタニー出身の海賊であった。

北東部海岸のフランス人がようやく撃退されるや、一五五五年一月に別のフランス軍がリオ・デ・ジャネイロのグワナバラ湾に侵入した。司令官はエコラウ・デュラン・ヴィレギヤノンであった。ヴィレギヤノンはフランスの王安リ二世の要請で、一五五五年七月一二日に二隻の軍艦で、八〇名を率いてハーブルを出発してブラジルに来航し、グワナバラ湾のシリジペ島を占領してフ

ランス南極圏植民地の建設を企だてた。ヴィレギヤノン
はカルヴェイン派の新教徒だったので、フランスのカト
リックの圧迫を避けてブラジルに渡ったようである。彼
は軍人で、アルジールのモーロー人との戦い、ハンガ
リーのオスマン・トルコとの戦争、マルタのトルコ軍と
の戦闘に参加した軍歴がある。また彼はブリタニーの海
軍の副艦長の時イギリス艦隊の監視をくらまして、フラ
ンシスコ二世の婚約者マリー・スチュアート（イギリス
の女王、一五四二―一五八七）を護衛してフランスに送
り届けたこともある。

一五五五年はブラジルの第二代総督ドアルテ・ダ・コ
スタの任期で、二回目のフランス軍三〇〇人が到着して
シリジペ島に要塞を構築し、コリニー要塞と名づけた。
コリニーはフランスの新教徒の代表的人物である。

第二回のフランス軍の中に土木技師、画家のジャン・
デ・レリーがいた。彼は後に『ブラジル景勝地の旅』の
書を公刊して有名となった。

グワナバラ湾に侵入したフランス軍は、カノア戦術に
長けて強力な戦闘力をもつ土人タモヨ族と同盟を結んで
ブラジル軍に対抗しつつ植民地の建設を進めた。

それから数年をすぎ、一五六三年にフランス軍の追放
とリオ・デ・ジャネイロ市建設の使命を帯びて、エスタ

シオ・デ・サーがポルトガルから来任した。彼は同年の三月一日にボン・デ・アスーカルの岩山の麓近くのカラ・ド・コンに村を築いた。それがリオ・デ・ジャネイロ市の発祥である。

エスタシオ・デ・サーがリオの初代長官として着任した当時のリオは外侵に対する防備は皆無に等しく、一五六五年にサン・ビセンテの少数のポルトガル軍の参加を得てフランス軍との戦いを開始した。

エスタシオ・デ・サーは第三代総督メン・デ・サーの甥で、一五四〇年にポルトガルのコインブラに生れた。彼がリオの初代長官となったのは二三才である。

フランス軍との戦いは二年つづき、一五六七年一月二〇日にエスタシオ・デ・サーは総督メン・デ・サーの援軍とテミニノ族の酋長アラリボイアの土人軍の協力を得て、フランス軍を徹底的に撃退した。

フランス軍の追政戦が展開されたのはウルスミリン（現在のフラメンゴ海岸からグロリア丘にかけての区域）である。当日の激戦でエスタシオ・デ・サーは土人軍の毒矢で顔面を射たれ、三〇日後の二月二〇日に死去した。

フランス軍を撃滅駆逐した一五六七年一月二〇日は聖セバスチアンの祭日であり、またポルトガルの少年王ド

ン・セバスチヨンの誕生日だったところから、サン・セバスチヨン・ド・リオ・デ・ジャネイロと命名されたのが現在のリオ・デ・ジャネイロ市である。それ以来、聖セバスチヨンはリオ市の護神となった。

戦死したエスタシオ・デ・サーは彼が設立した小教会に葬られたが、後にモーロ・ド・カステロのサン・セバスチヨン教会に移葬された。更に一九三一年八月にハドック・ローボ街のカプシーニョ修道院に再移葬された。

総督メン・デ・サーはエスタシオ・デ・サーの死後、リオ市街をカラ・ド・コンからモーロ・ド・サン・ジャヌアリオ（現在のエスプラナーダ・ド・カステロ）に移したのが一五六七年三月一日である。先きにエスタシオ・デ・サーが村を設けたのも一五六三年三月一日であるところから、三月一日がリオ・デ・ジャネイロ市の創設記念日となった。

一月二〇日はリオ市の護神サン・セバスチヨンの祭日である。

エスタシオ・デ・サーが戦死して、リオの第二代長官に任命されたのが初代サルバドール・コレア・デ・サー・エ・ベネヴィデスである。サルバドール・コレア・デ・サーはエスタシオ・デ・サーの従兄に当る。

三代にわたるサルバドール・コレア・デ・サー

リオ・デ・ジャネイロの第二代長官サルバドール・コレア・デ・サー・エ・ベネヴィデスはポルトガル人で、彼から子息、孫の三代にわたってコレア・デ・サーの長官がつづいた。

初代コレア・デ・サーのリオ長官任期は一五六七一五七一と一五七七―一五九八の二回におよんでいる。彼はリオのパラナペクー島にエソジエーニョ（製糖工場）を設けた。その島は後にゴヴェルナドール島と改称されて現在に至っている。

初代コレア・デ・サーの子息マルチン・コレア・デ・サーは一六〇二―一六〇七と一六二三―一六三二の二度リオ長官となった。その子息（初代サルバドール・コレア・デ・サーの孫）サルバドール・コレア・デ・サーは一五九四年にリオに生れ、一六三七―一六四〇と一六二三―一六三二年にわたって長官の任についた。

第三代コレア・デ・サーはペルナンブーコのアランダ軍追放戦に参加し、一六四八年から一六五一年までアフリカのアンゴラ（ポルトガルの植民地）に留り、黒人奴隷の送り出しに尽した。

フランス人のマラニオン侵略

一五六七年のリオ・デ・ジャネイロの戦闘に敗北したフランス軍の残党で、カーボ・フリオに逃れてそのまま住みついたものがあるといわれるが、現在それらの後裔と思われるフランス系ブラジル人は見られない。

リオ・デ・ジャネイロから追放されたフランス軍の司令官ジャック・リファート・シャルル・デヴォーはフランスの王アンリ四世の承認の下に、一五九四年に三隻の船舶をもってディップを出発してマラニオンに来航し、土地の土人ツピナンバ族の援助を得ていとも容易にマラニオン島に上陸した。一五九五年のウオルター・ラレーのアメリカ探検の報告に、フランス人がアマゾン河口近くに植民地建設を進めているとあるが、それはマラニオン島に侵入したフランス人のようである。

一六一二年にはラジェリー領主で知られるダニエル・デ・ラヴァルデュエーとフランソア・ド・ラズイリー指揮の別の軍勢がマラニオン島に上陸してフランス植民地の建設に当った。それはマラニオン島の西側で、要塞を築き、当時のフランスの王ルイ一三世を記念してサン・ルイスと命名したのが現在のマラニオン州の首都で

ある。

ダニエル・デ・ラヴァルデュエーの探検隊に参加したクロード・ダベヴィルはマラニヨンのインジオと親交を保ち、同盟を結んだ。

ジェロニモ・デ・アルブケルケに率いられるブラジル軍はマラニヨン島の別の場所にカモシン要塞を構築してフランス軍の駆逐戦を開始した。フランス軍がマラニヨンから完全に撤退するまでには三年を要し、一六一五年にアレシヤンデレ・デ・モーラの軍隊の参加を得てようやく成し遂げられた。

ジェロニモ・デ・アルブケルケ・マラニヨン

初代ジェロニモ・デ・アルブケルケはペルナンブーコ
のアルブケルケ家系の根幹をなし、ペルナンブーコの初
代カピタニア長官ドアルテ・コエーリヨの義兄に当る。

ジェロニモ・デ・アルブケルケはペルナンブーコのア
ダムといわれたが、彼を始祖に沢山の子孫が生れた。

ジェロニモ・デ・アルブケルケは土人タパジャラス族
との闘いで捕虜となり、死刑に処されるところを土人の
尊長アルコベルデの娘に命乞いされて助かり、しかして
結婚する。

彼女はカトリックの洗礼によつてマリア・デ・エスピリト・サントの名前をうけ、二人の子を産んだ。その中にジェロニモ・デ・アルブケルケ・マラニオン（一五四八―一六一八）がいた。その妹ドーナ・カタリナ・デ・アルブケルケはフィリップ・カヴァルカンチと結婚して九人の子が生まれた。その子孫の一人がラテンアメリカ最初の枢機郷ドン・ジョアキン・アルコ・ヴェルデ・デ・カヴァルカンチ（一八五〇―一九三〇）である。

ジェロニモ・デ・アルブケルケ・マラニオンはオリンダに生れてジェズイットの学校に学び、父とともにパライバトリオ・グランデ・ド・ノルテの開拓に挑み、土人との戦闘を交いた。彼は一五九九年に現在のナタルの前身であるナタル村を創設した。一六一三年にはセアラに赴き、ノッサ・セニョーラ・ド・ロザリオを建設した。

当時ラヴァルジェーに率いられるフランス軍がマラニオン島に侵入してフランス赤道圏植民地の建設を企て、要塞を築いてフランスの王ルイ十三世を記念してサン・ルイスと命名した。

ジェロニモ・デ・アルブケルケ・マラニオンは一六一四年一月一九日のサン・ジョゼ湾のグワシエソゾーバの戦闘でフランス軍を大敗させた。

ペルナンブーコの大官アレシヤンデレ・デ・モーラは

リスボアからの援軍とジェロニモ・デ・アルブケルケの部隊をもってサン・ルイス要塞を占領したのが一六一五年一月四日である。

アレシヤンデレ・デ・モーラはジェロニモ・デ・アルブケルケをマラニヨンの防衛軍司令官に任命してペルナンブーコに引揚げた。ジェロニモ・デ・アルブケルケはマラニヨンの防衛に自己の全資産を投じ、晩年は所有する砂糖農園を抵当にするほど経済的に窮し、一六一八年二月一〇日に死去した。

ジェロニモ・デ・アルブケルケ・マラニオンはグワシエンズーバ戦の英雄と称えられている。

イギリス海賊の襲来

一四九七年にイタリア人の航海家ジョバニ・カボット（一四五〇―一四九八）がイギリスの王ヘンリー七世の要請で、アメリカ北部の探検をしてからイギリス人の大西洋と新世界に対する興味を湧かせた。

カボットは一四九七年五月、船舶一隻でブリストルを出発し、六月二四日にケープ・ブレトン島を発見した。その後、一五三〇年にイギリス人のウィリアム・ホーキンスが南大西洋の探検を企てた。彼はブラジルの土を踏

んだ最初のイギリス人である。

ハウキンスはプリマウス、サウザンプトン、ポルトガルを航海する貿易商だったが、機に臨んでは海賊となった。イギリスとブラジルの貿易に当ったことではハウキンスがはじめであり、彼はそれ以前にポルトガルとスペインでブラジルに関する予備知識を得、機会到来をねらっていたようである。

ハウキンスは一五三〇年、一五三八年、一五四〇年の三度ブラジルに来航したが、彼が用いた船舶は二五〇トンであった。彼は航海中にスペインやフランス船と戦ったために海賊として知られた。彼の第二回の航海ではブラジルのインジオの尊長を伴ってイギリスに帰り、王に謁見させた。第三回のブラジルへの航海には帆船『ポール・オブ・プリマウス』を用いた。彼はブラジルでは常にインジオと親交を保つことにつとめた。

ハウキンスより後にブラジルに来航したイギリス人はロバート・レナイジャーとトーマス・ボレーがある。この二人はサウザンプトンの貿易商で、ウィリアム・ホウキンスの『冒険旅行』の書を出版した。ほかにもパドシーというサウザンプトンの貿易商が一五四二年にバイアを訪れたが、当時のブラジルの産物はパウ・ブラジルとパPGAイオ（オーム）だけであった。

一五四〇年以後はイギリス人のブラジルへの来航が杜絶したが、それはイギリスとフランスが交戦状態となつたため、その間イギリスの貿易商は海賊に早変わりして航海中のフランス船舶を砲撃した。

エリサベス王朝となつてはイギリスの新世界アメリカ熱が高まり、スペインに桔抗して大西洋に眼が向けられ、イギリスの強力な海賊団の活躍がはじまる。

一五七七年にはフランシス・ドレークの統率するイギリス最大の海賊団が現われ、カリブ海を根拠として暴れまわり、多くのスペインの艦船を拿捕し、撃沈した。当時のスペインの航海家はドレークの名を聞いただけで戦慄したほどである。ドレークがスペイン船から掠奪した金銀と財宝はイギリスの財政を大いに潤した。エリザベス女王がドレークにナイト（騎士）の称号を与えたことが肯ける。

当時イギリスの航海家でサントスに来航した者がある。その一人がジョン・ワイタールであり、彼はロンドンの貿易商で、野望を抱いて帆船『ミニオン』でサントスに着いたのが一五八二年三月であった。彼はバイアに長期滞留して貿易で成功した。

ジョン・ワイタールの『ブラジル貿易成功譚』は冒険児の血を湧かせた。そこで現われたのがエドワード・

フエントン（？―一六〇三）とトーマス・カヴェンジツシュ（？―一五九二）である。

エドワード・フエントンはマルチン・フロビツシャー（一五三五―一五九四）の指図によって帆船『ガブリエル』でグリーンランドを探検したのが一五七八年である。エドワード・フエントンは一五八三年一月にブラジル南部の沿岸で、ジオゴ・フロレス・ヴァルデスのスペイン艦隊と会したが、戦闘を避けてサントスに入港した。当時フエントンはサントスの住民にいささかも挑戦的態度を示さず、必要物資は正当の価格で購入した。彼は高い教養人だったのでサントスの住民から尊敬された。

フエントンはサン・ビセンテを調査し、サン・ビセンテ湾は船舶の碇泊と物資の船積みに好条件を備えているためにブラジルの南方貿易の基地に最適であることを本国へ報告した。

ブラジルからイギリスに帰還したフエントンは一五八八年に戦艦『アンチロープ』の艦長としてスペインとの戦いに参加し、有名な無敵艦隊を撃破した。その後の彼は悟るところあって海の男の生活に終止符をうち、平和郷デッドフォードに余生を送り、そこに死去した。

フエントンと同時期の一五八三年にロンドンの商船『ロイアル・マーチャント』がペルナンブーコのオリンダ

に寄港し、数名の貿易商人が六ヶ月滞在して綿密な調査をした。当時のブラジルはスペインの統治下にあったので、スペインの海軍大将ジオゴ・フロレス・ヴァルデスはオランダのイギリス人を逮捕し、彼らの商品を押収した。『ロイアル・マーチャント』の損害はそれだけでなく、別の便船でイギリスからブラジルに送られた商品も全部押収された。このような苦い経験からイギリス人はその後の貿易にはつとめてポルトガルの商船を利用した。

エドワード・フエンTONの影響をうけて、南米の大探検をしたトーマス・カヴェンジッシュ（一五五五―一五九三）は世界周航をしたことで、フェルノン・デ・マガリャンエスとサー・フランシス・ドレークと共に名高い（トーマス・カヴェンジッシュは海財で知られ、その活躍は南大西洋の全域におよんでいる。彼は一五八六年に三隻の船舶と一二人の乗組員をもってプリマウスを出港、アフリカの西海岸を経てブラジルのカーボ・フリオに到達した。更に南航してマゼラン海峡を通過し、太平洋に出てメキシコとカリフォルニア半島を探検した。そこから航路を転じてフリッピン、マラッカ、ジャバを経由してアフリカの喜望峰を回航し、プリマウスに帰着したのが一五八八年一〇月であった。

トーマス・カヴェンジッシュは一五九一年から一五九

二年にかけてサントスを数回襲撃し、人家に放火して掠奪をした。

カヴェンジツシユは一五九二年末、二度目の世界周航で病死し水葬された。

ブラジルに來航した当時のカヴェンジツシユの部下にヘンリー・バーウエルとアンソニー・ナイトの二人の篤学者がおり、共著『ブラジルの旅行記』を出版して有名となった。

一五九五年にペルナンブーコを襲ったイギリスの海賊にはジェームス・ランカスター（一五六〇—一六一八）がある。ランカスターは一五九一年一二月に三隻の船舶をもつてプリマウスを出発、インドを経てセーロン、スマトラに到達した。大西洋に出てはポルトガル船数隻を撃沈或いは拿捕した。一五九五年四月、ランカスターはフランス人の海賊ベンネールを伴ってペルナンブーコを襲撃した。当時彼は一ヶ月レシフェで物資を掠奪した。レシフェの住民はオリンダに避難したが、二七五名から成る義勇団が組織されてランカスターの海賊団と闘い、多くの犠牲者を出した。ランカスターの部下数名が捕虜となった。ランカスターは残りの船舶をもつてレシフェを退去した。

その後ランカスターはオランダの東インド会社の船団

の司令官として活躍した。それは一六〇〇年から一六〇三年である。

一六〇四年にランカスターはイギリス王室からサーの尊称をうけてサー・ジェームス・ランカスターとなった。一七世紀以後にブラジルを訪れたイギリス人は海賊ではなく、貿易商、科学者、鉱山技師、宜教師、芸術家などである。特に一七〇三年一二月にメスエン条約が結ばれてからはイギリスは優位におかれ、ユニオン・ジャックを翻した船舶はブラジルの主要港に出入し、イギリス人は白紙旅行券をもって堂々と入国した。

国土開発とジェズイット

ブラジルのジェズイットの土民教化はバイアに始まるが、後続部隊の到来とともにその教化区は拡大され、北部はマラニョン、パラーから中南部はエスピリト・サント、リオ・デ・ジャネイロ、サンパウロ、パラナ、リオ・グランデ・ド・スールを経てパラグワイまでおよんでいる。それらの地域に分布する土人を種族別に挙げれば北部はツピナンバス、アレモレス、ツピニキンスで、中南部はタモヨス、カリジヨス、テミニノスなどである。

第一回渡伯ジェズイットのジョアン・アスピルクエタ・

ナヴァロ僧の土民教化区の如きはバイアを基点として遠くアマゾンのマラジョ島におよんでいる。



リオ・グランデ・ド・スールのサン・ミゲルのジェズイット・ミッションの廃墟

このようにジェズイットはバンデーランテスとは別の目的と手段によってブラジルの開発につくしている。バンデーランテスの探検は一七世紀初頭にはじまっているところからも、ジェズイットの土民教化活動はそれに先立つこと五〇年である。事実ブラジル各地を旅して眼につく最古の史蹟はジェズイット教会と修道院である。エスピリト・サント、バイア、マラニョン、オリンダを訪れて特にこの感を深くする。

またリオとサンパウロにしても然りである。特にサンパウロ市はジェズイットが創設した町であるところから、その歴史を学ぶにはジェズイット史を辿らねばならない。

わけでもサンパウロ州海岸地帯のイタニヤイン、ベルチオガス、ウバツ―バはジェズイットの土民教化区だったので、それに因む古蹟が存在する。

およそジェズイットが土民に文字を教え、宗教を説いたことにブラジル文化を発しているが、特に文学、音楽、演劇などはジェズイットの土民教化によってもたらされている。

ブラジル文学史の権威シルビオ・ロメロはブラジル文学はジェズイットの文学活動にはじまると述べている。その代表的のものかマヌエル・ダ・ノブレガ神父の書翰集とジョゼ・デ・アンシエタ修道士の詩作である。

少しく後年となつてはルイス・デ・グロン僧とフェルノン・カルジン僧の文学作品、シモン・ヴァスコンセルロス僧の史書、グレゴリオ・デ・マツトス、ベルナルド・ヴィエーラ・ラヴァスコスの詩集がある。またクリストヴァン・ゴウウェアとアレシヤンデレ・デ・グスモン僧も名文家で知られた。科学僧では航空原理の研究で名高いバルトロメウ・ロウレンソ・デ・グスモンシヤとモンテーロ・ダ・ローシヤがある。

法学者モンテーロ・ノローニヤはパラ―のジェズイット神学校に学んだ。

詩人クラウジオ・マヌエル・ダ・コスタ、アルヴァレ

ンガ・ペーシヨット、ジヨゼ・バジリオ・ダ・ガーマ、サンタ・リタ・ズロン僧はいずれもリオのジェズイット神学校に学んでいる。

ほかに有名なジェズイットの学僧にはギレルメ・デ・ポンペウとベルシオール・デ・ポンテスがある。

芸術面を見るとジェズイットの指導による土民の野外劇がブラジル演劇史の始めをなしている。音楽も同じくジェズイットが土民児童に器楽と声楽を教えたこ豆にブラジルの音楽史を発している。次ぎは建築だが、ジェズイットの教会と修道院建設がブラジルのバロック建築の最初ものである。現在ブラジルのジェズイット教会で昔からの原型を保っているものはバイア、レシフェ、オリнда、パラー、マラニョンに見られる。サンパウロ市近傍ではサン・ミゲル教会、サンタアナ・デ・パルナイバのノツサ・セニョーラ・ダ・コンセーション教会、イタペセリカ・ダ・セーラのノツサ・セニョーラ・ド・ロザリオ・デ・エンブー教会、イタニヤインのノツサ・セニョーラ・ダ・コンセーション・デ・イタニヤイン教会が挙げられる。

一八世紀中期までのブラジルの上層階級の子弟はジェズイットの学校に学んだ。当時はジェズイットの学校以外には学校がなかったために、必ずしも将来の聖職者な

らずとも同教団の学校に学ぶより途はなかった。またはポルトガルのコインブラ大学に入学する者があった。

ジェズイットの学校は知育に重きをおき、学科は修辞学（文学）、哲学、倫理、レトリア（法学）が主であった。したがって一六世紀半ばまでの教養人は文学、哲学、倫理を学んだ知識人を意味した。

一七五九年のジェズイットの追放から約半世紀はブラジルの各地に学校は設立されず、教育に関するかぎり空白期がすごされた。

進んで植民第三期ともいべき一八世紀末となり、フランスカン派の僧侶によって学校が設立されると同時に旧来のジェズイットの知育を脱却した科学教育に重点がおかれた。

それは一八〇〇年にペルナンブーコのカピタニア長官となったフランスカン派の司教アゼヴェド・コウチーニョに負うところが大きい。彼はオランダに神学校を設立して、経済、物理、化学、数学、植物学、鉱物学の科目を設けた。

およそ一九世紀までのブラジルの上層階級には生産活動に当る技術者を軽視する傾向があった。したがって手工職業は賤しむべきものとされていた。

しかしモンペリエールやパリ大学に学んだ新進の学徒

が現われるや、科学性に根ざした高度の国家意識からブラジルの発展を希うようになった。

社会史学者ジルベルト・フレレーは、チラデンテスを主導者とするミナス革命を、ヨーロッパに学んだ学徒の祖国愛の表われの影響にほかならないと述べている。

またジェズイットの追放前、同教団の教師だったグレゴリオ・エウゼビオ・デ・マツトスやアントニオ・ヴィエーラの如きは僧侶であるとともに傑れた科学者だったところから少なからぬ指導感化を門弟に与えている。

この二人の科学者の指導を受けた者で、ヨーロッパに遊学し、ブラジルに帰国しては農牧と製糖技術に改良を加え、カーザ・グラモア（大邸宅）に住みながら奴隷制度に反対を唱えるという皮肉な現象が生れた。

一九世紀となり、摂政ドン・ジョアンによるポルトガル王室のブラジル移転を機会に自然科学と美術教育が高揚され、ブラジルの文化面に新時代を画した。

ドン・ジョアン六世がブラジルに在った期間は一八〇八年から一八二一年までだが、バイアトリオに医学校と美術学校が設立された。

北東部の開拓

一五に分割されたカピタニアのうちペルナンブーコとサン・ビセンテ以外はその開拓に非常な困難があった。特に北東部の探検と開発には多大の犠牲が払われている。

セルジッペの征服

バイアとペルナンブーコの間地域、サン・フランシスコ流域には精悍な土人部族が住み、白人の侵入を不可能ならしめていた。ようやくジェズイットが土民教化活動をしていたにすぎない。それらのジユズイットの僧侶にはガスパール・ロウレンソとジョアン・ペレーラがいた。

その時に海岸線のフランス人が巧妙に土人を手馴づけ、て染料原木のパウ・ブラジルを伐採していた。

一五七七年に第五代総督（北方の総督）ドン・ルイス・デ・ブリト・エ・アルメーダ自らが軍隊を率いてセルジッペに向い、数百のインジオを殺致し、数百を捕獲した。一五八九年には臨時総督クリストヴァン・デ・バッロスが大規模の探検隊をもって、ポイペバを尊長とする土人部落を陥落させてサン・クリストヴァン・ド・リオ・セルジッペ村を設立した。後にその接続地に建設されたのが現在のアラカジュである。

セルジツペ地域には拓殖家ガルシア・ダヴィラが開拓を進めていたが、彼によって甘蔗栽培と牧畜が興こされ次第に発展した。

セルジツペはバイアのカピタニアに統轄された。

パライバの征服

パライバはリオ・グランデのカピタニアに所属し、カピタニア領主はジョアン・デ・バツロスとアイレス・ダ・クーニャであった。この二人はマラニヨンのカピタニア領主も兼ねていた。

パライバ地域には土人タバジャラスとポチグワラス族が住み、フランス人に従ってパウ・ブラジルを伐採していた。

カピタニア領主のアイレス・ダ・クーニャはポルトガルからバイアに派遣された軍隊とともにマラニヨンの探検に向ったが、途中で難船して犠牲となった。そこでジョアン・デ・バツロスが第二回の探検隊をくり出したがこれも失敗した。

スペイン統治の初代ブラジル総督マヌエル・テレース・ブリト（一五八三―一八七）は一五八四年にジオゴ・フロレス・ヴァルデスを司令官とする探検隊をパライバ

に差向け、ポチグワラス族を撃滅してタバジャラス族と和解することができた。

ポチグワラス族は頑強に抵抗したが、凄絶な戦闘を交いてそれを撃滅した。同時にフランス人を駆逐したが、それから一〇年間フランス人は執拗に失地奪回を企てた。

ジオゴ・フローレス・ヴァルデスはポチグワラス族を撃滅した場所に要塞を構築し、当時のスペインの王フィリップ二世を記念してフィリップ・デ・ノッサ・セニョーラ・ダス・ネーベス村と名づけた。それが現在のパライバの首都ジョアン・ペツソアである。

一五八六年にはパライバのカピタニアが設けられ、領主にフェリシアノ・コエーリヨ（ペルナンブーコの砂糖農場主フルツオーゾ・バルボーザの義弟）がスペインの王フィリップ二世によって任命された。

一五八六年にはパライバのカピタニアがもうけられ、領主にフェリシアノ・コエーリヨ（ペルナンブコの砂糖農園主フルツオーゾ・バルボーザの義弟）がスペインの王フィリップ二世によって任命された。

フェリシアノ・コエーリヨは彼の同僚であるフェリシアノ・コエーリヨは彼の同僚であるマヌエル・マスカレーニヤス・オーメンスとジェロニモ・デ・アルブケルケの実弟ジョルジニア・アルブケルケの協力を得てパライバ

地域の開発を進めた。

一五世紀最後のデカダ（一〇年）にパライバはポルトガルの植民地としてようやく安定した。

リオ・グランデの征服

リオ・グランデもパライバと同じ状態にあり、海岸にはフランス人が侵入して強固な地盤をもっていた。それはマラニオンまでつづいていた。

スペインの王フィリッペ二世からパライバのカピタニア領主に任命されたフェリシアノ・コエーリョはマヌエル・マスカレーニヤスとジョルジ・デ・アルブケルケと共にインジオと悪疫と闘いながら一五九七年にリオ・グランデ地域に入り、レース・マーゴの要塞を設けた。その場所が現在のナタールである。

フェリシアノ・コエーリョがパライバに引上げてからはジョルジ・デ・アルブケルケがレース・マーゴ要塞の守備に当たった。

一五九九年にようやくポチグワラス族との了解が成り、同時にフランス人を徹底的に追放した。

セアラの征服

セアラはピアウイのカピタニアに包含されその封建領主はポルトガルの貴族アントニオ・カルドーゾ・デ・バツロスであった。彼は同カピタニアを王ドン・ジョアン三世から授与されたことに満足せず、ポルトガルへの帰還を思い立ってバイアを出発した。その便乗船がアラゴアス沖で難破し、同乗のバイア司教ペロ・フェルナンデス・サルジーニャとともに土人カエテ族に捕えられて食べられてしまった。領主を失なったセアラのカピタニアはインジオの世界となった。

スペイン統治のフィリッペ三世の治世にアソーレス出身のペロ・コエーリョ・デ・ソーザが第一〇代ブラジル総督ドン・ジオゴ・ボテーリョの許可を得てセアラ地域の探検と開拓に着手した。彼は一六〇三年にリオ・グラндеを出発し、ジャグワリベ川を経てパルナイバ川に適したが、途中モンシエール・デ・モンビレーに率いられるフランス軍と土人ポチグワラス族との混成軍と闘い、多くの犠牲を出した。ペロ・コエーリョ・デ・ソーザは僅かの兵士をセアラに残して一応パライバに引揚げた。彼は一六〇六年に再度セアラの探検に当ったが物凄い早魘のために、これまた半ばにして帰還を余儀なくされた。

一六〇七年から一六〇八年にはジェズイットのフランシスコ・ピントとルイス・フィゲーラがセアラの土民教化をなすべくインジオとの接近を企てたがまったく不可能であった。パーデレ・フランシスコ・ピントはインジオに殺害され、パーデレ・ルイス・フィゲーラはアマゾン河口の探検中にマラジョ島近くで難船して土人に殺された。

一六〇三年のペロ・コエーリョ・デ・ソーザのセアラ探検に、当時一七才のマルチン・ソアーレス・モレノが参加していた。

マルチン・ソアーレスは土民語をよく解し、土人の尊長ジャカラナとの親交があつた。

マルチン・ソアーレスはインジオの協力を得てセアラに侵入したフランス人と闘って駆逐した。

マルチン・ソアーレスとインジオの乙女イラセマとの恋愛はジョゼ・デ・アレンカールの小説『イラセマ』のモデルとなっている。

マルチン・ソアーレス・モレノはサン・ペードロ要塞とノツサ・セニョーラ・ド・アンバロ教会を建設した。それがセアラの首都フォルタレーザの起源となつた。

マラニヨンの征服

セルジペ、パライバ、リオ・グランデ・ド・ノルテ、セアラからフランス人が駆逐されたが、マテニオンにはまだフランス人が根を張っていた。

フランス人のブラジルの海岸侵入は染料パウ・ブラジルの伐採にあったが、マラニヨンの場合は植民地建設が目的であった。

スペイン統治下のポルトガル政府（正確にはスペイン・ポルトガル政府）はブラジルの総督ガスパール・デ・ソーザにマラニヨンのフランス軍の追放を命じた。当時マルチン・ソアレス・モレノはそのフランス軍追放戦に参加すべくマラニオンに向って航海中に暴風に逢ってアンチールに流された。

一六一三年にジェロニモ・デ・アルブケルケはセアラの海岸に到着し、タルタルーガ海浜にノッサ・セニョーラ・ド・ロザリオ要塞を築いた。この要塞はフランス軍の撃退にブラジル軍の拠城となった。

一六一四年、ポルトガル・ブラジル・インジオの混成軍司令官ジェロニモ・デ・アルブケルケとジオゴ・デ・カンプレ・モレノによってフランス軍基地の前面グワシエンズーバにサンタ・マリア要塞が構築された。

スペインの王フィリッペ三世はマラニョンに援軍を送り、さらにアレシヤンデレ・デ・モーラの軍隊の参加を得て一六一五年にマラニョンから完全にフランス軍が追放された。フランス軍がマラニョンから撤去した後にはアレシヤンデレ・デ・モーラはフランシスコ・カルデーラ・デ・カステロ・ブランコとともに数隻の船舶をもってパラに至り、プレゼビオ要塞を築いたのがベレン市の発祥である。

ポルトガル人のアマゾン征服

最初にアマゾン全流を探検したのはスペイン人のフランシスコ・オレラナ（一五〇一—一五五〇）である。彼は一五四一年にゴンサロ・ピサロ（ペルーの征服者フランシスコ・ピサロの実弟）を伴って、エクアドールのキートを出発し、黄金と肉桂の郷を探し求めてコカ・ナポ川の盆地に着き、アマゾン本流を下って河口に出たのが一五四二年八月二日である。フランシスコ・オレラナは一度スペインに帰国してアドラントード（宰領）の称号をうけ、一五四五年に再びアマゾン探検に向ったが、河口で食糧の欠乏や病気で隊員の大部分が斃死した。彼自らも現在のモンテ・アレグレ近くで病死した。

一五六〇年から一五六一年にかけて同じくスペイン人のペードロ・デ・ウルシアの探検隊がペルーからアマゾン本流を下って大西洋に出たが、一五六一年一月一日に隊員の一人に暗殺された。

次ぎはペルーの王といわれたドン・フェルナンド・グスマンがヴェネズエラのマルガリーダ島で住民の大虐殺をし、アマゾン探検中にローボ・アギレに殺害された。

イギリス人ではサー・ウォルター・ラーレーが一五九五五年にオリノコ盆地を探検したがそれはアマゾンのエルドラド（黄金境）発見のためだったといわれる。ほかにイギリス人はオイアポック川の流域に侵入して村を築いたが、彼はポルトガル人のペードロ・テーシェーラの探検隊に撃退された。その後はオランダ人がギヤナ海岸の探検をした。またフランス人はアマゾン北部海岸の土人と友好を保ちつつ探検をつづけた。マラニオン島に侵入したフランス人のダニエル・デ・ラヴァルデュエーは一六一三年にほとんど一年間アマゾン河口の探検に当たった。

マラニオンからフランス人が駆逐されるやポルトガル人がアマゾン北部に進入した。一六一五年にフランス軍を追放したフランシスコ・カルデーラ・デ・カステロ・ブランコがサン・ルイスを出発してアマゾン河口に達し、一六一六年一月に保塁を構築してフェリス・ルジタニア

と命名した。それが後のベレン市である。

アマゾンの探検と開発はポルトガル人に負うところが大きく、それはマラニヨンのフランス軍追放の一六一五年にはじまる。

ポルトガル人はアマゾンの土人と闘い、またイギリス人やオランダ人の追放に多大の犠牲を出した。ポルトガル人がアマゾン流域に侵入した外国人を駆逐するに一〇年を要している。はじめフランシスコ・カルデーラ・デ・カステロ・ブランコとアレシヤンデレ・モーラによつて軍队的性格のアマゾン探検隊が組織された。探検隊長はポルトガル人のペードロ・テイシエーラ（一五八七—一六四一）で七〇人の軍人と一二〇〇人のマラジヨ島の土人を率い、一六一六年一月一二日にグワジャラ湾を出発した。ペードロ・テイシエーラはアマゾン流域の土人や外国人と戦いながらペルーを経てキートに達し、一六三九年二月に帰途についた。彼にはスペイン系のジエズイットのクリストバル・デ・アクナン僧とアンデレ・デ・アルチェダが同伴した。

クリストバル・デ・アクナン僧はペードロ・テイシエーラのアマゾン探検を叙し、『大江アマゾンの探検』の表題で一六四〇年にスペインの王フィリッペ四世に提出した。それはポルトガルがスペイン統治を脱して自治権を復帰

した年である。

ペードロ・テーシエーラのアマゾン探検はジャヴアリ上流までおよび、トルデシラス領土線を遙かに越えた。ペードロ・テーシエーラはアマゾン探検の功によつてグロン・パラーの長官に任命され、一六四一年にベレンに死去した。

一五六一年にはジェズイット、フランシスカン、カルメリッタなどの宗教団体がマデーラ、リオ・ネグロ、ソリモンエスの流域盆地に土民教化部落をつくりはじめた。一六六九年にポルトガル人のフランシスコ・ダ・モッタ・ファルコンが、サン・ジョゼ・ド・リオ・ネグロに要塞を築いたのが現在のマナウスの起源である。

一七二〇年のころ、フランシスカンのマヌエル・ダ・エスペランサ僧によつて野生のゴム樹が発見された。

一七五五年にはポルトガルの王室令によりサン・ジョゼ・ド・リオ・ネグロのカピタニアが創設された。

一八〇八年にビーラ・ダ・バーラ・ド・リオ・ネグロにカピタニア庁が設けられ、それ以後はマナウスと呼ばれた。進んで一八五〇年にカピタニア・デ・バーラ・ド・リオ・ネグロがパラーから離脱されてプロピンシナ、デ・アマゾナス（アマゾナス県）となった。

砂糖農園

ブラジルで最初におこった農業は甘蔗栽培で、一六世紀後半にバイアのトードス・オス・サントス湾の周辺からアラゴアスとペルナンブーコの海岸地帯に伸びた。それは有機質に富む黒色のマツサペ土壤と高気温、降雨量が甘蔗栽培に最適だったためである。

ブラジル北東部の拓殖は甘蔗栽培にはじまったが、それはモノカルチャー（単一農）の典型であった。

ブラジル最初のエンジェーニョ（製糖工場）は貴族マルチン・アフオンソ・デ・ソーザが一五三三年にサン・ビセンテに設けたエンジェニョ・デ・サン・ジョルジである。その製糖工場は後にドイツ人のエラズム・シューツ兄弟によって経営され、エンジェーニョ・デ・エラズムと称された。

サン・ビセンテにはじまったエンジェーニョはリオ・デ・ジャネイロとエスピリト・サントを越えてバイアとペルナンブーコに移った。

ペルナンブーコでは一五三五年にオリンダの近くにジェロニモ・デ・アルブケルケによってエンジェーニョ・デ・ノツサ・セニョーラ・ダ・アジュエーダが設けられた。

ペルナンブーコの甘蔗栽培とエンジェーニョの建設では、ペルナンブーコの初代カピタニア長官ドアルテ・コエーリョの功績が大きく、彼によって設けられた製糖工場は六つを数える。そのいずれもが好成績を挙げている。一五七〇年度のマガリャンエス・ガンダヴオ（文学者で、詩人ルイス・デ・カモンエスの友人）の調査によるブラジルのエンジェーニョの数は次のようである。

カピタニア・デ・イタマラカ	三
カピタニア・デ・ペルナンブーコ	二三
トードス・オス・サントス湾の周辺	一八
カピタニア・デ・イリエウース	八
カピタニア・デ・ポルト・セグーロ	五
カピタニア・デ・エスピリト・サント	一
カピタニア・デ・サン・ビセンテ	四

初期のエンジェーニョは牛馬の動力によるものをつらピシエスと呼んだ。水力応用のものは水の落下する高さによってコペーロス、メーヨ・コペーロス、ラステーロスと区別された。アラゴアスでは小規模のエンジェーニョはハンゲといわれ、それが広く慣用語となった。

植民初期におこった産業で砂糖農園ほど長く繁栄した

ものはない。もちろん盛衰浮沈はあったが、砂糖が国際産物であるおかげでヨーロッパの市場に輸出されて砂糖農園主を富ませた。エンジェーニョの年産高は三〇〇〇から一〇〇〇〇アローバ、ペルナンブーコの砂糖輸出高はおよそ年間二〇万アローバであった。

エンジェーニョでは動物または水力のモエンダ（搾汁器）で甘蔗が搾られ、ガラパ（搾り汁）は大釜で煮沸されて粗糖がつくられ、次いで別の処理法で半漂白され、五〇キロの箱につめられて輸出された。

砂糖農園は資本主義的企業で同時に自給自足制の性格があり、大資本を必要とした。



一七世紀の砂糖農園

甘蔗栽培から製糖工場とあらゆる生産設備住宅の建設、奴隷と家畜に莫大の投資を要した。一七世紀半ばのペル

ナンブーコの砂糖農園は小規模のもので、黒奴五〇人、牛一五頭を必要とした。

土地はセスマリア（開墾と生産を条件とする未開地の無償交付）の形式で獲得されたが、それが大地主制発生の要因をなした。

砂糖農園の高地には農園の大邸宅（カーザ・グランデ）と教会があり、遙か下方には奴隷小屋（センザーラ）が並んでいる。さらに距離をおいて製材所、煉瓦工場、製粉工場、運搬用の牛車の製造場などが見える。

雑作地と牧場の彼方には甘蔗畑が果てしなく続いている。それがノルデステ（北東）ブラジル）の砂糖農園の風景である。

砂糖農園主には貴族にも等しいセニョール・デ・エンジェーニョの尊称があり、家族と使用人、従属者に対する絶対権能を有していた。そのセニョール・デ・エンジェーニョを中心に家父長制の封建社会がつくられた。

カーザ・グランデには沢山の黒人系の女が家庭雇人として抱えられていたが、そのうちの標緻のよいものは主人の内妻をつとめた。

或るセニョールは十数人もの内妾をもつて多くの混血児を生ませ、さながらハレム（後宮）の観があつた。

主人の長男は家督を相続し、二男はヨーロッパに遊学

して法律家またはエンジニアロとなり、三男は神学校か修道院に学んで聖職者になるという仕来りが守られた。娘は特に教育ほうけなかつたが処女たることに誇りをもつて父の定める者と婚約し、結婚する習わしがあつた。

また砂糖農園主の使用人と従属者の結婚のパドリーニヨ（代父）或いはそれらの生れた子の名づけ親の習慣があるために夥しい一族郎党となる。

砂糖農園の労働者にアグレガードがあり、それは農園内に借地して甘蔗栽培や雑作をし収穫を歩合制で主人に収めるものである。アグレガードはモラドールともいわれ、奴隸ではないが、主人には絶対服従の不文律が固く保たれていた。

第四章　スペイン統治

スペイン統治（一五八〇～一六四〇）

一五五四年にドン・ジョアン三世の唯一の嫡子だった五男のドン・ジョアン・マヌエルが死去し、その直後にドン・ジョアン・マヌエルの子息ドン・セバスチオン（一

五五四〜一五七八）が誕生した。ドン・ジョアン・マヌエルはスペインのカルロス五世の息女ドーナ・ジョアナと結婚し、生れたのがドン・セバスチオンであった。一五五七年にはドン・ジョアン三世が逝去し、嗣子がなかったために令孫ドン・セバスチオンが三才で王位継承者となった。

ドン・ジョアン三世の未亡人カタリナ・デ・アウストリアは令孫ドン・セバスチオンが成年に達するまでの摂政となったが、短期間で亡夫の実弟ドン・エンリッケ（エヴオラの司教）に摂政を委譲して修道院に入った。それから一〇年が流れ、一五六八年にドン・セバスチオンは一四才で成年式を挙げて第一六代王に即位した。当時のポルトガルはドン・マヌエル以来の東洋貿易が裒潤し、王室の財政は逼迫していた。大航海を生んだポルトガルの国威は影うすれた観があった。



ドン・セバスチオン

このような状況にあつて、若年王のドン・セバスチオンは窮地打開策としてマロッコ遠征を画した。それはポルトガルのアフリカ領地セウタとタンジールがモーロー人によつて奪回が企てられ、絶えず脅かされていたからである。マロッコのモーロー人を徹底的に撃滅して、アフリカとインド貿易を復興することがドン・セバスチオンの少年期からの夢だったのである。

ドン・セバスチオンは金髪碧眼で長身、北欧人を思わせる美男子であつた。彼は極度に変人で、常に室に閉じこもつて黙想し、迷信的で女性を避け、結婚の意志はまったくなかつた。

一五七八年、ドン・セバスチオンは二四才で大軍を率いてマロッコに出立するに当り、側近の権謀政治家ドン・フランシスコ・デ・マスカレーニャが進言した。『王が如何にしてもマロッコ遠征をされるとあれば、死装束を準備して行かれたし』。果せるかなドン・セバスチオンの軍勢はアルカセル・キビールの激戦で惨敗し青年王はマロッコの砂漠を血に染めて散つた。

独身のドン・セバスチオンには世継はなく、彼の伯父ドン・エンリッケ司教が王位を継いだ。しかしこれまた老齡のため、在位二年で一五八〇年に逝去し、ドン・ジョ

アン二世以来のアヴィス王朝が絶滅した。しかも国力の衰えが原因してポルトガルはスペインに併合され、その支配下におかれた。スペインの王フィリップ二世はドン・エンリッケの甥であることから、武力を行使して容易にポルトガルをスペインに統合し、その王を兼ねてフィリップ一世となった。

スペイン統治は一五八〇年から一六四〇年にわたり、それをフィリップナ期という。

フィリップ二世（一五二七～一五九八）の父カルロス五世（一五〇〇～一五五八）はドイツの皇帝で、母イザベルはポルトガルの王ドン・マヌエルの長女である。したがってフィリップ二世はドン・マヌエルの孫に当る。彼はドイツ系ながらも最もスペイン的で、ハブスブルグ王家の代表的の王で知られた。

一五五六年に父カルロス五世の退位で、フィリップ二世は二九才で即位してスペイン・ハブスブルグ王家を継ぎ、ハブスブルグ家の世襲領ネーデルランド、シシリー、サルデーニャ、ナポリの統治権を帯びた。中でもネーデルランドはヨーロッパ第一の毛織物工業を有し、一六世紀後半にはハブスブルグ帝国の財政的支柱となった。フィリップ二世は冷徹且つ専制的で、重商主義政策をとって、植民地の搾取に徹底した。彼はカトリックの狂信的

信奉者で、著しい宗教的偏見があり、苛酷な新教徒迫害をした。

フィリップ二世の治世はスペインの全盛期で、メキシコとペルーを征服して多量の銀を奪取し、世界最大の富国となった。地理的にはイベリア半島からネーデルラント、アメリカ、東洋の一部を制覇し、海軍力を拡充して制海権を握った。しかしフィリップ二世の海外政策の推進には莫大の資金を必要とし、ネーデルランドの商人に重税を課した。しかも彼は属領国にカトリックを強制したために新教国ネーデルランドのウイレム・オランジェ公の主導のもとに反スペイン革命が勃発した。その革命に援助を与えたのがイギリスである。エリザベス女王はネーデルランドの海上遊撃隊に協力してスペイン軍への物資補給に妨害を加えた。ネーデルランドの北部の七州がホラント（オランダ）の名をもって独立を宣言したのが一五七九年である。

ポルトガルがスペインに統合されたのは、オランダの独立直後である。ドン・エンリッケの死を機会に、フィリップ二世はダルバ公の軍隊をポルトガルに派遣し、一五八〇年八月二五日のアルカンタラの戦闘で勝利を得、ポルトガルをスペインに併合した。

オランダに対してはスペインはその独立を認めず、報

復手段として貿易封鎖をなし、オランダの船舶のスペインとポルトガルの植民地への入港を禁じた。それは貿易立国のオランダにとって大打撃であり、イギリスと組んでスペインの属領地侵略を画した。

ポルトガルの植民地がオランダに侵略されたのは、ポルトガルがスペインの統治下におかれ、結果的にオランダの敵となったためである。

スペインはオランダの革命以来、強敵となったイギリスを破るべく、英本土の攻撃作戦のために無敵艦隊を嬢装した。それは一三〇隻の軍艦、二五〇〇門の大砲、兵力は海軍七〇〇〇、歩兵一万六〇〇〇から成るもので、一五八八年の七月末にイギリスに向ったが、カレー沖で暴風に逢った。その直後にドヴァー海峡でイギリス艦隊と相会し、戦闘を交いて惨敗した。イギリス艦隊にはジョン・ハウキンス、エドワード・フェントン、フランシス・ドレークなどの名提督が司令官として参加していた。この無敵艦隊の撃破によって情勢は逆転し、イギリスが世界の制海権を握ることになった。

またスペインはフィリッペ三世（在位一五九八〜一六二一）からフィリッペ四世（在位一六二一〜一六六五）の治世にわたり、ドイツに起った旧教と新教の宗教戦（三〇年戦争、一六一八〜一六四八）に介入し、旧教側に立つ

てイギリス、オランダ、スエーデン、フランスを敵として戦ったが遂に敗れた。加うるに一七世紀前半からのアメリカの金銀の減産でスペインの国力は衰退しかけていた。

ポルトガルが革命をおこしたのはスペインが三〇年戦争に敗れつつある一六四〇年、フィリップ四世の時である。

ポルトガルは反スペイン革命をなし遂げ、六〇年におよんだスペインの支配を脱して自治権を復帰した。しかしてブラガンサ大公がポルトガルの第二一代王に即位してドン・ジョアン四世を名乗り、ブラガンサ王朝の発生となる。

ポルトガルの自治制復帰と同時に王の権能が強化され、ブラジルの絡治に種々の変革がもたらされた。議会、判事、地方長官の権限が縮小され、ポルトガル政府のコンセーリョ・ウルトラマール（海外領評議会）に植民地管理が集中されることになった。ブラジルには王室直属の副王と裁判所判事が任命された。そこでジュイス・デフォーラ（外部から任命された判事）の名称が生れた。

宗教面ではブラジルの大司教は独自の権限を有していたが、エスタード・ド・マラニョンの司教はリスボアの司教区に従属された。ポルトガルのスペイン統治下の一

六二一年に、ブラジルはエスタード・ド・マラニオンとエスタード・ド・ブラジルに二分され、前者の首都はサン・ルイス・マラニオン、後者の首都はサルバドールとなった。当時のサルバドールはブラジル随一の富裕都市であった。

エスタード・ド・マラニオンとエスタード・ド・ブラジルにはそれぞれの長官が任命され、主要都市の郡会によつて補佐された。郡会は判事、検事のほか数名の議員で組織されその選挙は土地の特権者によつておこなわれた。

スペイン統治下のブラジル

スペイン統治下のブラジルを見るに、フィリッピナ期最初のブラジル総督としてマヌエル・デーレス・バレット（六〇才）が一五八二年に着任した。彼には判事マルチン・レートンとジェズイットの史家フェルノン・カルジン（一五四八〜一六二四）が随伴した。

判事マルチン・レートンはパライバの開拓者で名高く、彼はパライバ海岸からパウ・ブラジルを盗出していたフランス人を駆逐した。当時フランス人は土人ポチグワラスとタバジャラス族を手馴づけてパウ・ブラジルを伐採

していた。

総督テーレス・バレットは一五八七年にバイアに死去し、後任のフランシスコ・ジェラルデスはブラジルへの航海中に船舶に故障を生じてポルトガルへ引き返した。その後は一五九〇年まで臨時三人制評議会（司教ドン・アフォンソ・バレーロス、判事マルチン・レートン、財務官クリストヴァン・デ・バツロス）が設けられた。

一六世紀末には鉱業の専門家ドン・フランシスコ・デ・ソーザが総督として着任したが一六〇二年にドン・ジェゴ・ボテーリオと交代した。当時ドン・ジェゴはペルナンブーコに一年留り、またセアラの開拓者ペロ・コエーリョ・デ・ソーザは一六〇三年に現在のフォルタレザ地区の保塁を強化して海賊の襲撃に備えた。

一六〇八年のフィリッペ三世の治世にブラジルの総督区は再び南北に二分され、北はドン・ジエゴ・ボデーリョ、南はエスピリト・サント、リオ・デ・ジャネイロ、サン・ビセンテのカピタニアをふくめてドン・フランシスコ・デ・ソーザが総督に任命された。

この二人総督制は一六一三年にまたしても単一制となり、ドン・ガスパール・デ・ソーザが総督に就任した。その在任中にマルチン・ツアーレス・モレノとジェロニ

モ・デ・アルブケルケによってマラニョンに侵入したフランス軍が駆逐された。

ドン・ガスパール・デ・ソーザは長期間ペルナンブーコに留ったが、それは次期総督ドン・フランシスコ・ソーザの就任の一六一六年までつづいた。

オランダの北東ブラジル侵略

史実によれば西インド会社の艦隊の襲来前一五九八年にブラジルの東部海岸を訪れたオランダ人がある。それは航海家、海賊のオリヴァー・ヴァン・ノールドで、一五九八年二月にアムステルダムを出発して同年七月にバリアに到着し、リオ・ドーセ河口を経てリオ・デ・ジャネイロに寄港して物資を補給し、かつてのフェルナンデ・マガリャンエスと同じコースをとり、マゼラン海峡を通過して太平洋に出で、フィリッピンに到着した。その翌年、一五九九年にピーター・ヴァン・ドースが七〇隻の船隊をもってスペイン領のカナリア本島を侵略し、ついでアフリカのサン・トメーで物産を掠奪したが、船中に伝染病が発生して多くの隊員を失った。それは一六〇〇年のはじめであり、ピーター・ヴァン・ドースは船舶の半数をオランダに帰還させ、他の船舶をもってギ

ネーを経て西インド諸島に向った。当時その船隊の一部がブラジルの北東部を訪れている。ピーター・ヴァン・ドースの海賊団は西インド会社の前身ともいうべきものであった。

西インド会社にはスペインやポルトガルから追われたユダヤ人が参加していた。それらのユダヤ人は西インド諸島の製糖業に投資してポルトガル人の製糖業者の敵となった。

西インド会社のブラジル侵略の最初の目標はバイアであった。目的は砂糖の掠奪で、一六二四年にヤコブ・ウイルケンス・ピーター・ヘーンズを司令官とする二六隻の艦隊（大砲四〇〇門）がトードス・オス・サントス湾に侵入した。バイアの長官ジオゴ・デ・メンドンサ・フルタードは二日にわたって防戦したが僅かの兵力では如何ともならず、サルバドールはオランダ軍に占領された。長官は捕虜となり、住民は周辺の農地に避難した。

数隻のオランダ軍艦は掠奪した砂糖を積んで本国へ引揚げた。このオランダ軍のバイア攻略戦では、フランシスコ・パジリーヤのブラジル軍との戦いで、司令官ヨハン・ヴァン・ドースは悲壮な戦死を遂げた。

富裕の砂糖農園主マチアス・デ・アルブケルケがバイア長官の代理となってオランダ軍撃退の作戦を練り、義

勇軍を組織した。

一六二五年三月二九日にはドン・フラジケ・デ・トレド・オゾリオ司令官のポルトガルとスペインの編成艦隊がバイアに到着した。それにパライバのフランシスコ・ヌーネス・コエーリョの部隊とドン・フランシスコ・デ・モーラのバイア部隊にマチアス・デ・アルブケルケの義勇兵団を加えて、サルバドールを陸海から包囲した。

四月三〇月の戦鬪でオランダ軍は敗れ、サルバドール陥落後、一年の龍城でカルモ修道院において降伏調印した。それから二〇日後にオランダ軍はバイアから撤退した。

オランダ軍の降伏から四週間後に、西インド会社から派遣されたポールドウイン・ヘンドリックソン司令官の艦隊がサルバドールに着いたが、なす術もなく退去した。かくしてオランダ軍の第一回バイア攻略は失敗におわった。しかしこのバイア侵略の失敗に凝りず西インド会社は次の攻撃にペルナンブーコを選んだ。ベルナンブーコは砂糖産業で繁栄していたからである。

ヘン德里ック・コネリソン司令官の大艦隊が一六三〇年二月にペルナンブーコのレシフェを襲った。充分の防備力をもたないレシフェとオリンダは以前のサルバドールと同じように陥落した。同時に西インド会社の別

の艦隊が再度バイアを襲撃してサルバドールを占領した。つづいてフォン・ウエデンバー大佐の率いる三〇〇〇人の陸戦隊がオリンダ北部のパウ・アマレーロに上陸した。マチアス・デ・アルブケルケは数百の兵員をもって応戦したが敗れ、レシフェからの援軍も不可能と悟った彼は倉庫に放火して貯蔵物資が敵に奪取されるのを防いだ。マチアス・デ・アルブケルケはレシフェとオリンダの義勇兵によってカベリ川とベベリベ川に囲こまれる場所に野営陣を張り、ゲリラ戦を根強くつづけた。それがボン・ジェズスの野営陣といわれる。この野営陣には黒人と土人兵が参加し、奇襲と伏兵戦術をもって敵を悩ました。

一六三〇年の一二月と一六三一年の四月にオランダ軍の増員部隊がアドリアン・ジャンセン・ピーターとマルチン・テッセンに率いられて到着した。

他方、ドン・アントニオ・ケレンド司令官のポルトガル・スペイン軍が一六三一年九月一日に着いたが、オランダ軍が遥かに優勢であった。それに加えて土地の地理的事情に精通する半黒のドミンゴス・フェルナンデス・カバラールがオランダ軍の味方に肩替りした。

数において優勢のオランダ軍はカバラールの先導でイガラスー、イタマラカ島、リオ・グランデ・ド・ノルデ

のレース・マーゴ要塞の戦いで連勝した。

一六三二年にオランダ軍の占領圏はバイアからペルナンブーコ、セルジッペ、リオ・グランデ・ド・ノルテまで拡大された。一六三五年六月には遂にボン・ジェズスの野営陣も陥落した。ボン・ジェズスの野営陣を退出したマチアス・デ・アルブケルケはアラゴアスで挙兵し、オケンドの海軍と合せてポルト・カルヴオでオランダ軍を迎え討つ作戦を練った。

ペルナンブーコのブラジル軍がオランダ軍に敗れつつある報に接したスペインは、ドン・ルイス・デ・ロイジャを指揮官に大軍をペルナンブーコに向けたが、当のドン・ルイスには実戦の経験がなく、ポルト・カルヴオで大敗し、彼自らも戦死した。そのころ西インド会社はブラジルの占領地に総督の派遣を決定した。一六三七年一月二三日、初代総督ヨハン・マウリッツ・フォン・ナッサウ・サイゲン伯（一六〇四〜一六七九）がレシフェに着任した。（以下ブラジル書きのマウリシオ・ナッサウ伯とする）。

マウリシオ・ナッサウ伯はオランダのデルフト出身のドイツ系貴族で、ウルヘルム一世の甥孫に当る。彼はベルリンとジュネーブ大学に学び、フランダース戦争（ベルギーにおいてのスペイン戦争）に参加した。また一六

才で義勇兵として三〇年戦争にも従軍している。ほかに一六二五年のプレダ戦と一六三二年のメートリシエ戦に出た軍歴がある。

ナッサウ伯のオランダ総督としてのブラジル在住は一六三七年から一六四四年までの七年である。彼はレシフェに赴任するや、アントニオ・ヴァス島（後のサント・アントニオ区）を本拠として、新都市マウリシアナを建設した。その市街設計はブラジルでは類例のない卓絶するものであった。彼は先ず治安維持と衛生の改善につとめ、民兵隊の創設と砂糖産業の復興に尽した。また湿潤地の排水をして運河を握り、天文台、病院、図書館、寺院、宮殿、公園を設けた。また島と島、大陸とを結ぶ橋梁を架設した。南米のヴェニスといわれるレシフェの市街美はナッサウ伯の都市設計に負うものである。

一六三八年にナッサウ伯は西インド会社の命をうけ、艦隊をもってサルバドールを攻撃したが撃退された。

ナッサウ伯はレシフェに市議会を設け、議員はオランダ人とブラジル人それぞれ同数とした。彼はオランダから著名の科学者、医学者、画家を招聘して北東ブラジルの文化開発につくしたが、それらの主な人物を次に挙げる。

ギョルグ・マークグラフ（一六一〇～一六五四）

サキソニア出身の博物学者、レーダン大学で植物学を専攻。著書に『ブラジルの動植物』がある。

ウイルヘルム・ピゾ（一六一一～一六七八）

父母はドイツ人で、オランダのレーダンに生れた。レーダン大学卒、マークグラフの友人で、医師、博物学者。著書にラテン語とドイツ語の『ブラジルの博物誌』がある。同書は外国で出版されたブラジル博物誌の最初のものである。

フランツ・ポスト（一六一二～一六八〇）

オランダのハーレム出身の画家。ナッサウ伯とともに一六三七年から一六四五年までペルナンブーコに住み、北東部の風景、砂糖農園などを描いた。ポストの作品はブラジルに約七〇点存在し、多くはヘーグ、ベルリン、ウィーン、ロンドン、パリ、コペンハーゲン、プラターグに散在している。

アルバート・エックホート。

一六三六年から一六四四年までペルナンブーコに滞留し、実物大のムラタやムクーナ（白人と黒人、白人と土

人との混血女」と動物を描いた。彼の作品はフランツ・ポストよりは少なく、ブラジルには二〇点ほどあるにすぎない。アルバート・エックホートの実兄がレンブラントの弟子だった関係で、彼も間接的にレンブラントの影響をうけている。

皇帝ドン・ペードロ二世の第二回ヨーロッパ旅行（一八七七年）にコペンハーゲンの国立美術館を訪れて、エックホートの北東ブラジルの風俗画に強くひかれ、画家に依頼してそれを複写しブラジルに持ち帰った。

ザカリアス・ワグナー。

ドイツのドレスデン生れの画家で、主に黒人の生活やレシフェの奴隷市場などを描いた。

西インド会社のブラジルに望むところは徹底した搾取であつて、ナツサウ伯の政策とは根本的に相反していた。そのためナツサウ伯は在ブラジル七年でオランダに召還された。

ナツサウ伯がペルナンブーコを去ったのは一六四四年五月二二日である。彼の総督在任はオランダ占領下の北東ブラジルの黄金期だったといえる。

オランダ本国に帰還したナツサウ伯は一六四七年にク

リーベスの総督となり、更に一六六五年にオランダ軍司令部司令官の任についた。一六七一年にはスペイン戦争に参加し、それより三年後にユトレシユトの総督に就任、一六七九年にドイツのクレープに逝去した。

ナツサウ伯の退去後の西インド会社の北東ブラジルに対する搾取政策は露骨をきわめてブラジル人の反感を買い、遂に反乱となった。

マチアス・デ・アルブケルケをはじめアンデレ・ビダル・ネグレーロス、ペルナンブーコ長官のアントニオ・テレース・ダ・シルバ、砂糖農園主ジョアン・フェルナンデス・ヴィエーラが主導者として革命軍が結成された。この革命軍は次第に数を増し、極秘裡に武器弾薬を調達した。はじめにフェルナンデス・ヴィエーラの部隊がゲリラ戦術をもってレシフェに接近した。レシフェから一〇数キロのモンテ・デ・タポカスでオランダ軍との戦闘が開始されてビエーラ部隊の勝利となった。それについてカビベリ川右岸に再び野営陣を設けてアライアル・ノーボ・デ・ボン・ジェズと呼んだ。オランダ軍の敗北を決定的にしたグワララペス戦は一六四八年と一六四九年の二度にわたっている。第一次グワララペス戦は一六四八年四月一九日で、ブラジル軍の総司令官フランシ

スコ・パレットス・デ・メネゼス大將は二二〇〇人の兵力をもつて、シグモン・ヴァン・シュコップ大將の四五〇〇人のオランダ軍と対決した。この戦陣は五時間を要してブラジル軍は敵軍を撃破した。オランダ軍の戦死五一五人、戦傷五二三人、シュコップ大將と士官七三人が戦傷を負った。

ブラジル軍は戦死八〇人、戦傷四〇〇人であつた。敵軍は二三の軍旗と大砲二三門をもつて降伏した。

この戦鬪でのブラジル軍の黒人兵エンリツケ・ジーアスと土人兵フィリツペ・カマロンとその妻クララ・カマロンの奮戦が戦争美談となっている。

第二次グワララペス戦は一六四九年二月一九日で、ブラジル軍の総司令官は同じくフランシスコ・パレットス・デ・メネゼス大將、部隊長もほとんど第一次戦と同じであつた。

この戦鬪に土人兵のフィリツペ・カマロンは病体をもつて出陣し、戦場で病死した。

オランダ軍は三五〇〇人の歩兵に三〇〇人の海軍、四〇〇人の土人と黒人部隊から成るものであつた。

第二次グワララペス戦も凄絶な激戦で、オランダ軍の戦死八五〇人、戦傷二一〇人、九〇人が捕虜となつた。

ブラジル軍は戦死六〇人、戦傷二五〇人、黒人兵部隊長エンリツケ・ジーアスが戦死した。

ブラジル軍の総司令官パレット・デ・メネゼス大將はブラジルとオランダ双方の戦没軍人の冥福のために、グワララペス丘上にノツサ・セニョーラ・ドス・プラゼーレス教会を建立した。

グワララペス戦の後のオランダ軍残党の掃蕩戦は二年つづき、一六五一年に完全に撃退された。

フィリッペ・カマロン夫妻

グワララペス戦の土人部隊長フィリッペ・カマロンと妻クララはポチグワール族の土人で、リオ・グランデ・ド・ノルテ生れである。

フィリッペ・カマロン（一五九一〜一六四八）の土人名はポチーだが、一六一二年にカトリックの洗礼をうけ、スペインの王フィリッペ三世を記念してフィリッペの名が与えられた。

カマロンは土人ポチグワール族が植物ウルクルーの汁で皮膚を赤く染めて蝦に似るところからつけられた名前である。

妻クララも同じく洗礼名で、土人女性ながらも読み書

きを習得し、非常に怜側で人々から尊敬された。

フィリッペ・カマロンはマチアス・デ・アルブケルケを援け、ポチグワール族独特の伏兵戦術をもってオランダ軍と載った。

妻クララは馬術の名手で、悍馬に跨って槍をかざしながら奔馳する様に、敵味方の別なく感嘆した。

一六四八年の第一次グワラペス戦でフィリッペ・カマロンは戦傷を負った。

第二次グワラペス戦にクララ・カマロンは夫に代り、陣頭に立って土人軍を指揮した。

アンデレ・ビダル・デ・ネグレーロス（一六二〇

〜一六六〇）

オランダ軍追放戦の英雄アンデレ・ビダル・デ・ネグレーロスはペルナンブーコのコイアニアに生れた。ポルトガル以来の貴族の家系で、軍人に終始した。

彼はジョアン・フェルナンデス・ヴィエーラ、アントニオ・ジーン・カルドローゾ大尉とともにオランダ軍追放戦に参加した。

アンデレ・ビダルはフランシスコ・パレット・デ・メネズス大将を司令官とするブラジル軍の一部隊長として

一六五四年のグワララペス戦に特功を立てた。

彼はオランダ軍の追放後にポルトガルを訪れ、王ドン・ジョアン四世に謁見している。

ブラジルに帰国しては一六五七年三月、ペルナンブーコペルナンブーコの長官に任命された。

一六六一年にアフリカのアンゴラに行き、同地の長官としてロアンダの防衛を国めた。

ブラジルに帰った彼はペルナンブーコ、ゴイアニアのエソジェーニョ・ノーボに住み、オランダ軍追放戦の英雄として世間から尊敬され、一六八〇年に死去した。

ノルデステ防衛の英雄マルチン・ソアーレス・モレノ
ノルデステの防衛と開拓にマルチン・ソアーレス・モレノの名を逸することができない。彼はジョゼ・デ・アレнкаールの小説『イラセマ』の主要人物として登場する。

マルチン・ソアーレスは少年期にスペインからブラジルに渡り、セアラの開拓に当った。はじめペロ・コエーリョ・デ・ソーザの探検隊に加わり、土人ジャカウナ族の尊長の信頼を得て、マラニョンに侵入したフランス軍

と戦った。彼はマラニンからパラーに行き、帰路は風と海流に煽られてアンテールのサン・ドミンゴスに漂着した。アンチールからはスペイン船でスペインに赴き、一六一五年にマラニョンに帰着してフランス軍の追放戦に奮戦した。彼は再びパラーからサン・ドミンゴスを訪れ、スペインに向って航海中にフランス海賊に襲われ、捕虜となつてフランスのジイブに連行された。彼はフランス海賊との闘いで全身に二三カ所を負傷し、片腕を失った。フランスでは死刑を宣告されたが、スペイン大使に救われ、ブラジルに帰還してセアラの長官に任命された。當時彼は年俸四〇〇クルザードと六平方レグアの土地を授与された。

ペルナンブーコがオランダ軍に侵略されるや、マルチン・ソアーレスは一六三一年の戦いに参加し、ボン・ジェズ野営陣の戦闘で戦傷を負った。マルチン・ソアーレスはセアラの開拓者であるとともにマラニョンからのフランス軍追放の功労者である。一六三四年には土人兵士フィリッペ・カマロンとともにイタマラカ島のオランダ軍を駆逐した。

ポルトガルの自治権復帰

スペインは一六一八年にドイツに発した宗教戦争に介入して旧教徒の側となり、イギリス、オランダ、スウェーデン、フランスを敵として三〇年にわたって戦った。この三十年戦争ではドイツとスペインが敗北した。その機会に乗じてポルトガルは革命をおこしてスペイン統治を脱し、自治権を復帰した。それは一六四〇年一二月で、スペインのフィリップ四世の治世である。

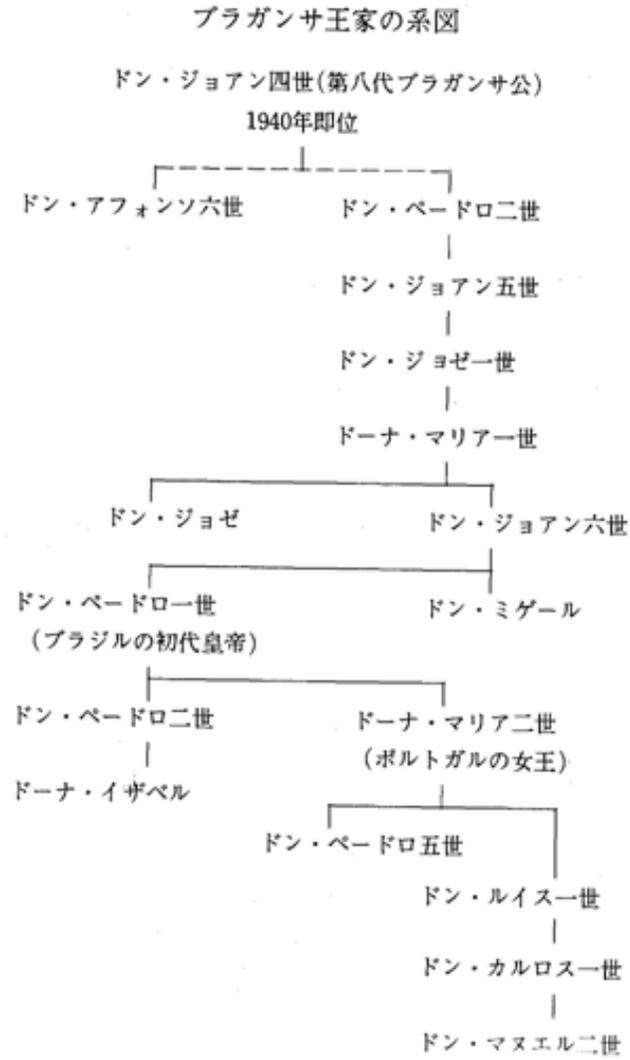
フラガンサ大公がポルトガルの第二一代王に即位してドン・ジョアン四世を名乗り、それがブラガンサ王朝の発生となった。

ポルトガルの自治権復帰と同時に王の権能が強化され、ブラジルの統治に種々の改革がおこなわれた。議会、判事、長官の権限が縮小され、ポルトガル政府のコンセルリョ・ウルトラマール（海外領評議会）に植民地管理が集中されることになった。ブラジルには王室直属の副王が任命され、裁判所判事もポルトガル政府が任命した。そこでジュイス・デ・フォーラ（外部から任命された判事の名称が生れた）。

宗教面ではブラジルの大司教は独自の権限を有していたが、エスタード・ド・マラニョンの司教はリスボアの司教区に従属された。

ポルトガルのスペイン統治下の1621年に、ブラジルはエスタード・ド・マラニオンとエスタード・ド・ブラジルに二分され、前者の首都はサン・ルイス・マラニオン、後者の首都はサルバドールとなった。当時のサルバドールはブラジル随一の富裕都市であった。エスタード・ド・マラニオンとエスタード・ド・ブラジルにはそれぞれの長官が任命され、主要都市の都会によつて補佐された。都会は判事、検事ほか数名の議員で組織され、その選挙は土地の特権者によつておこなわれた。

ドン・ジョアン四世（1604〜1656）



レー・レスタウラドール（復興王）といわれるポルトガルの第二一代王ドン・ジョアン四世はポルトガルのビーラ・ビソーザに誕生した。

彼の父ドン・テオドジオは第七代ブラガンサ公で、ドン・マヌエル王の第八王子ギマランセス公の曾孫である。

ドン・ジョアン（四世）は一六三〇年の父ドン・テオドジオの死によって第八代ブラガンサ公となった。彼はメジナ公の息女ドーナ・ルイザ・フランシスカ・グスモンと結婚し、ビーラ・ビソーザの宏大な邸宅に安逸な生活を送っていた。

彼がドン・ジョアン一世以来のブラガンサ家直系且つ唯一の後裔であるところから、ポルトガルがスペイン統治を脱し、自治権復帰と同時に王に即位してドン・ジョアン四世となり、ブラガンサ王朝が誕生した。

アマドール・ブエノをサンパウロの王に顕揚

一六四〇年一二月、ポルトガルの自治権が復帰され、ブラガンサ大公が即立してドン・ジョアン四世となった。そこでスペイン系のサンパウロ市民は、サンパウロで最も徳望あるアマドール・ブエノをサンパウロの王に顕揚した。当時のサンパウロのカピタニアにはミナス、パラ

ナ、マツト・グロツソが併合され、サンパウロ議会は政治的に大きな権能を有していた。議員はいずれも静々たる人物でサンパウロ議会は国会を支配するほどの政治力を有していた。そのサンパウロの王にアマドール・ブエノが推挙されたが、彼はそれを拒絶した。アマドール・ブエノは昂奮する群衆の前にポルトガル王への忠誠の誓いを立ててサン・ベント修道院に隠れた。その有様が歴史画家オスカル・ベレーラ・ダ・シルバによって描かれ、名画としてサンパウロ州政府に秘蔵されている。

アマドール・ブエノはサンパウロ人で、父はスペイン系、母はチビリツサの後裔である。

サンパウロ市民のアマドール・ブエノをサンパウロの王としての顕揚は、ブラジル人の自主精神の発露である。

セルヴァンテスの『ドン・ケーショツテ』

フィリッペ二世（一五二七～一五九八）の治世はスペインの全盛期で、メキシコとペルーを征服して多量の銀を獲得して世界最大の富める国となった。同時に海軍力を増強して世界の海を制覇したが、一五八八年に無敵艦隊がイギリス艦隊に撃破されて以来、情勢は逆転してス

ペインの衰退期に入った。

そのスペインの全盛期から衰退への過渡期に現われたのが小説家ミゲル・デ・セルヴァンテス（一九四七〜一六一六）である。

セルヴァンテスは幾つかの小説を書いたが不朽の名作は『ドン・ケーシヨッテ』である。それは風刺小説で、一つの騎士物語でありその奔放にして独創的な構想と筆致に魅せられる。

没落の郷士ドン・ケーシヨッテが世の不正を軋して虐げられた者を救うべく、祖先伝来の甲冑で身を固め、老いた馬に乗って、従僕のサンチョ・パンサとともに旅に出る。

その旅にはさまざまの事件に遭遇するが、誇大妄想のドン・ケーシヨッテが風車小舎を目がけて突進するところが興味ふかい。

第五章 バンデーラの世紀

バンデーラの世紀

一七世紀はバンデーラの世紀だが、実際には一六世紀末から一八世紀半ばまでの百数十年にわたっている。

初期のバンデーラはエントラーダといわれ、一五六二年のアフォンソ・サルジーニャ父子のカピタニア・デ・サンパウロのジャラグワ山麓での金鉱の探索にはじまる。または更に昔にさか上り、一五三一年のマルチン・アフォンソ・デ・ソーザの開拓団の別部隊が金鉱発見のためにカナネーアからパラナに向ったのがエントラーダの発端といえる。当時マルチン・アフォンソもラプラタ河口を探索したが銀は発見されなかった。それ以前スペイン人のファン・ジーン・ソリスが銀を求めてラプラタ流域を探検したことがラプラタ（銀川）の名称の起源となった。

バンデーランテは旗手または職印を掲げる者だが、一七世紀をとおしてのブラジル奥地探検者の名称であり、

先駆と開拓の象徴でもある。

初期のバンデランテはポルトガルから渡来した冒険児だったが、彼らは土人女と雑婚して混血児マメルツコを生み、後には探検隊員の大部分がマメルツコと馴化された土人となった。

バンデラーの大規模のものは数百人で構成され、一回の探検に数年をかけた。探検地では村落を築いて耕作し、食糧を自給自足した。このようにバンデランテは根強く探検をつづけ、トルデシラス領土線を越えてブラジルの領土を拡大した。

はじめバンデランテの奥地探検の目的は土人狩りであつた。彼らは土人を捕獲し、奴隷として北東部の砂糖農園に供給した。そのために土人を保護し、教化するジェイットとバンデランテとは目的が相反して常に対立し、抗争がつづいた。

十七世紀のバンデラーは主にサンパウロが基地となり、バンデラー・パウリスタの名称が生れた。しかしそれ以前、十六世紀後半のバンデラーにはバイアやポルト・セグーロのカピタニアから出発してバイア奥地とエスピリト・サント、ペルナンブーコ、セアラを探検したものである。それを年代順に挙げると一五六〇年のヴァスコ・ロドリゲス・カルダスのバンデラーはバイア北部海岸の

探検中に土人ツピニキンスに襲われ、隊員百人が犠牲となった。

一五六六年にマルチン・デ・カルヴァーリオの探検隊が六〇人のポルトガル人と二〇〇人のインジオをもつてポルト・セグーロを出発、八ヶ月を費やして僅少の金を発見した。

一五六八年から一五七二年にかけての、ポルト・セグーロのカピタニア領主セバスチオン。フェルナンデス・コウチニョのバイア奥地の探検には金も宝石も発見されなかった。

一六世紀の後半にバイアを拠点にバイア奥地からミナスのサン・フランシスコ盆地、パラグワスー、パルド、ジェキチニョラ、カラヴェラス、ムクリ、サン・マテウス、ジアマンチナの高地を探検して銀と宝石を発見したバンデーランテスには次の者がある。

フランシスコ・デ・エスビラノ（一五五四）

ヴァスコ・ロドリゲス・カルダス（一五六一）

マルチン・デ・カルヴァーリオ（一五六七）

セバスチオン・アルヴァレス（一五七四）

一五八九年にペロ・コエーリョ・デ・ソーサはセアラの

金鉱探索をしたが発見されず、それを断念して土人狩りにかわった。

サンパウロを基地とするバンデiraは第九代総督ドン・フランシスコ・デ・ソーザ（在任一五九一〜一六〇二）の金鉱発見の奨励にはじまる。最初のバンデira・パウリスタは一六〇一年のアンデレ・レオンの探検である。それにつづく一六〇二年のニコラウ・パレットのバンデiraはドン・フランシスコ・デ・ソーザの後援でおこなわれた。ニコラウ・パレットは白人と土人、マメルツコから成る三〇〇人の探検隊を率いてプラタ盆地を二年間探索して少量の銀を獲得した。それと同時期にアンデレ・レオンはチエテとパライバ盆地からマンチケira山脈を越えてサン・フランシスコ上流に達し、九カ月月を費やしたが何も発見せずしてサンパウロに帰還したか一六〇六年のジオゴ・クワドロスとマヌエル・プレート、一六〇七年のベルシオール・ジーン・アス・カルネーロのパラナ探検では金も銀も発見されず、土人を捕獲して連れ戻った。当時はイグアペ、カナネーア、パラナグワで金が発見されたが量が少なかったためにバンデiraランテは大して注目しなかった。

一七世紀中葉がバンデiraの全盛期で、サンパウロはバンデiraの基地であるとともにバンデira志望の若人の

養成の地ともなった。当時のバンデーラ・パウリスタは主に南部の探検をした。パラナ・バネマを越えてパラナ盆地に出で、更にリオ・グランデ・ド・スールのタペー地域からウルグワイとパラグワイにわたるプラタ盆地のスペイン系ジェズイットの土民教化区が探検の目標となった。この地域を探検したバンデーランテを年代別に挙げると次のようである。

マルチン・ロドリゲス・テノリオ・デ・アギアール（一六〇〇）

ペードロ・ヴァス・デ・バッロス（一六一一）

セバスチオン・プレート（一六一二）

クレメンテ・アルヴァレス（一六一二）

クリストヴァン・デ・アギアールとブラス・ゴンサルベス（一六一二）

ラザロ・ダ・コスタ（一六一五）

アントニオ・ペドロージ・デ・アルヴァレンガ（一六一五）

マヌエル・プレート（一六一九）

アントニオ・カスターニョ・ダ・シルバ（一六二二）

エンリツケ・ダ・クーニャ・ガーゴ（一六二三）

フェナンド・ソーアス・パエス（フェルノン・ジーア

ス・パエスの叔父一六二三)

マヌエル・プレート(一六二四)

アントニオ・ラポーズ・タヴァレス(一六二九)

一六一〇年のころスペイン系ジェズイットがパラナ川の東方、グワイラ地域に土民教化村を設けた。それらの土民教化村はジェズイット・ミッションまたはレズツソンといわれた。グワイラ地域はセルトン・デ・カリジョで知られ、ジェズイットの指揮で土人は野生馬を捕えて飼育していた。その土民教化区に最初に踏みこんだバンデーランテはマヌエル・プレートである。

一九二九年にはアントニオ・ラポーズ・タヴァレスとマヌエル・プレートが白人六九人、マメルコ九〇〇人、土人二〇〇〇人の大部隊をもってグワイラを襲撃し、数千の土人を捕虜にした。(二万以上の土人を捕獲したともいわれるがそれは誇張である)。

ポルトガルがスペイン統治下にあつた期間(一五八〇〜一六四〇)、スペインは専らペルーの銀鉱に眼を向けていた。その機にバンデーランテはパラグワイからアルゼンチンにわたるスペイン勢力圏のジェズイットの土民教化区に侵入した。

一六三六年にラポーズ・タヴァレスとジオゴ・コウチー

ニヨ・デ・メーロのバンデーラは白人一二〇人と土人一〇〇〇人を率いてパラグワイのジェズイットの土民教化村を侵略した。

一六三七年、フランシスコ・ブエノのバンデーラはリオ・グランデ・ド・スールのパトス地域を探検した。

一六三二年と一六三三年のラポーゾ・タヴァレスとアン・デレ・フェルナンデスのバンデーラはマット・グロツソ南西部、アキダウアナ上流のジェズイット・ミツシオンを襲撃した。またフェルノン・ジーアス・パエスのバンデーラは一六三八年にリオ・グランデ・ド・スールのタペーからウルグアイにおよぶ探検をし、ジェズイット一六四〇年にポルトガルはスペイン統治を脱して自治制を取戻したが、そのころからバンデーラは衰凋期に入り、南部のジェズイット・ミツシオンを襲撃したような大規模のものが見られなくなった。南部へのバンデーラの攻勢が下火となった原因は、ジェズイットの土民教化村が減じたこと、一六四八年の総督サルバドール・コレア・デ・サー・ベネヴィデスのアンゴラ征服で、同地からの黒奴の輸入が容易になったこと、北東部の糖業地が西インド諸島の砂糖生産に押されて不振状態とな、奴隷の需要が減じたことなどにあこうした状況でバンデーラの探検は土人狩りから黄金と宝石の発見にかわった。いま

三は土人は奴隷として使役して効果的でなかったことが挙げられる。

北東部の砂糖産業の不振にかわって鉱業が勃興し、金鉱地向けの奴隷の補給が増された。

一七世紀後半にはサンパウロのバンデیرهランデはミナス、ゴヤス、マツト・グロツソの金鉱探索に当たった。その代表人物は一六六八年にミナスのカタグワゼス地域を探検したロウレンソ・カスターニョ・タツケスとルイス・カスターニョ・デ・アルメーダ、一六七一年にマツト・グロツソ北部の探検に当たったマヌエル・デ・カンボス・ビクトド、一六七六年にゴヤスの探検を企てたバルトロメウ・ブエノ・ダ・シルバ（アニヤンゲラ）などである。また勇名高いアントニオ・ラポーゾ・タヴァレスは一六四八年から一六五二年にかけてパラグワイからペルー・アendesに達し、アマゾン本流を下って河口に出る大探検をした。十八世紀に入つてのマツト・グロツソの探検では一七一六年のアントニオ・ピーレス・デ・カンボスのバンデیرهがある。彼はクヤバからマルチリオ山脈一帯を踏査した。彼はそれ以前、一六七五年の少年のころ父マヌエル・デ・カンボス・ビクトドに伴つてクヤバ地域の探検をしたことがある。

一九一八年にパスコアル・モレーラ・カブラルがアント

ニオ・ピーレス・デ・カンボスと同じ道筋を経て探検をし、コシポ・ミリンの金鉱を発見した。

パスコアル・モレーラの探検は後期バンデーラのモンソン隊の時代となっていたが、彼はイツーとソロカバ出身のバンデーランデを率いてポルト・フェリスを出発し、チエテ川を下ってパラナ川に入り、更にパラグワイ川を航行してクヤバに到達した。

バンデーラ・パウリスタのゴヤス探検は一七世紀末までは土人狩りを主としたが、金鉱の発見に転換したのはバルトロメウ・ブエノ・ダ・シルバ以後である。バルトロメウ・ブエノは一五二人を引連れて一七二二年七月にサンパウロを出発し、ゴヤスの探検に三年を費やした。探検中に食料や物資が欠乏して困難をきわめたが、一七二五年に現在のゴヤス市から二四キロの地点で金鉱を発見し、ゴヤスの新時代が開かれた。

ミナスの探検では一六九三年にアントニオ・ロドリゲス・アルゾンがゴイタカ地域の川床で砂金を発見した。次いでフェルノン・ソーアス・パエスの女婿マヌエル・ダ・ボルバ・ガットがサハラ金山を発見してサハラ村首創設した。

ミナスではバンデーランテスの発見した金鉱地に冒険児が殺到して村落がつくられ、それが町に発展して都市

の発生となる。

エメラルドの探索者フェルノン・ジーアス・パエス（一六〇八〜一六八一）

フェルノン・ジーアス・パエスは最も著名のバンデーランテで、文学、絵画、彫刻のテーマとなっている。彼は傑れた探検家で徳望高く、英邁高潔な人柄であった。多くの公職を有ち、ブラジル南部を数回にわたって探検した。

ポルトガル王室とブラジル総督の要請をうけ、緑の宝石エメラルドの発見のために探検隊を組織してミナスに向った。彼はミナス探検の資金調達のために所有する家畜、金と銀を売却して六千クルザードを整えた。それは当時の巨額であった。

一六七四年七月二一日、六六才のフェルノン・ジーアスは二百数十人の白人とインジオから成る探検隊を率いてサン・ベント広場を出発した。その探検隊にはフェルノン・ジーアスの実子ガルシア・ロドリゲス・パエス、庶子ジョゼ・パエスと女婿マヌエル・デ・ボルバ・ガットが参加していた。

フェルノン・ジーアスの探検隊がサンパウロからアチ

バイア、エソバウー、パラオペバ、ジェキチニヨラを経てリオ・ダス・ベリーヤス上流のスミドーロに到達するまでに五年を費やしている。その間多くの隊員は悪疫に倒れ、毒蛇やインジオ襲撃の犠牲となった。

食糧、衣服、弾薬は欠乏し、隊員は希望を失ない、前途に不安を感じて逃亡する者もあつた。遂にはフェルノン・ジーアスの庶子ジョゼ・パエスが父フェルノン・ジーアスを暗殺してサンパウロに引返す陰謀を企てたが発覚した。フェルノン・ジーアスは他の者への見せしめと探検隊の秩序維持のためにジョゼ・パエスを絞首刑に処した。

このような悲惨な事件がおこり、歳月は過ぎ去つたが探し求めるエメラルドは発見されなかつた。ところが一七八一年三月の或る日スミドーロのサハラブスー湖畔で、フェルノン・ジーアスがマラリアに患り、高熱に呻吟している時に、数名の隊員の叫び声が聞こえた。それは緑色の石を発見したというのである。フェルノン・ジーアスは病衰の眼を輝やかせながら起き上り、緑色の石を見て歓喜の涙を流した。そして神に感謝しながら絶命した。彼はその緑の石をエメラルドと信じて死んだのである。

残存の隊員はフェルノン・ジーアスの遺体とともに難渋の旅をつづけてサンパウロに帰着し、緑の石を専門家

によつて調べたところそれはエメラルドではなく、価値のすくないトルマリンであつた。

フェルノン・ジーアスは七年の歳月をかけ、多大の犠牲を払つて結局は何を得たか。世の中にこれほど大きな無駄があるうか。しかしそれは表面的の結論であり、フェルノン・ジーアスの探検によつてサンパウロの二倍もあるミナスが知れわたり、その後の探検家によつて金鉱やダイヤモンドが発見されてミナスの各地に都市が形成された。

フェルノン・ジーアスは彼の寄進で建設されたサンパウロのサン・ベント教会に葬られている。

アンデスの征服者アントニオ・ラポーズ・タヴァレス

アントニオ・ラポーズ・タヴァレスは一五九八年にポルトガルのサン・ミゲル・デ・ベージャに生れ、二〇才でブラジルに移住した。

彼の父フェルノン・ビエーラ・タヴァレスはポルトガル以来の軍人で、サン・ビセンテのカピタニア長官となつた。

バンデーラの探検でラポーズ・タヴァレスほど広汎に

わたったものではなく、その踏破距離は二万数千キロで、パラナ、サンタ・カタリナ、リオ・グランデ・ド・スールからパラグワイ、ボリビアを経てペルー・アンデスに至り、アマゾン上流から河口におよんでいる。

一六二九年のパラナのグワイラ探検にはじまり、一六三二年にはリオ・グランデ・ド・スールのタペー地域の踏査をした。

一六三九年、彼は北東部を侵略したオランダ軍の追放戦に参加している。

ラポーズ・タヴァレスは一六四八年にペルー・アンデスに達し、”アンデスの征服者”といわれた。

彼はサンパウロの大地主で相当の資産があり、安逸な生活ができたがそれに飽きたらずまたしても探検に乗出し、数年後にサンパウロに帰着した時には妻や娘が彼を見違えるほど老衰していた。

彼の晩年は恵まれず、一六五九年に六一才で死去した。

マヌエル・デ・ボルバ・ガット

マヌエル・デ・ボルバ・ガットはフェルノン・ジーアス・パエスの女婿。

一六七四年のフェルノン・ジーアスのエメラルド発見

のミナス探検に参加した。

一六八二年にミナスのスミドウロでドン・ロドリゴ・カステロブランコ暗殺の嫌疑をうけてグワラテンゲタに隠れて十数年をすごし、無罪が判明して彼は再びミナスの探検をし、サハラ的全山を発見、サハラ村を建設した。サンパウロ市のブルークリン区にボルバ・ガットの巨大な像が建てられている。

ドミンゴス・ジョルジ・ベリーヨ

一七世紀著名のバンデーランテの一人、ドミンゴス・ジョルジ・ベリーヨはカピタニア・デ・サンパウロのサンタアナ・ド・パルナイバの出身で、ピアウイに牧場を経営し、当時最も富裕且つ権勢家といわれた。

彼はペルナンブーコの長官ジョアン・ダ・クーニャ・ソート・マイオールに乞われ、一六八七年三月に一三〇〇人の私兵を率いてアラゴアスのパルマーレス黒人共和国（キロンボ・デ・パルマーレス）の討伐戦に参加した。パルマーレス黒人共和国は五〇年余も持久戦を張ったが遂に敗れた。

バンデーランテ・パウリスタのドミンゴス・ジョルジ・ベリーヨは権力家であるとともに徳望家であった。

パスコアル・モレーラ・カブラル

マット・グロツソの開拓者で知られるバンデーランテのパスコアル・モレーラ・カブラルはサンパウロのソロカバ生れである。

彼は一六八四年にマット・グロツソのミランダを基地として、アントニオ・ピーレス・デ・カンポスの探検跡を探検し、一七一九年にコシポ・ミリンの金鉱を発見した。

マット・グロツソの探検に関するかぎり、パスコアル・モレーラ・カブラルほど広汎且つ綿密な踏査をしたものはない。後にフェルノン・ジーン・アス・ファルコンによって更に大掛りの探検が企てられマット・グロツソが広く知れわたった。

サンパウロのパウリスタ博物館には代表的バンデーランテの一人としてパスコアル・モレーラ・カブラルの像が見られる。

バルトロメウ・ブエノ・ダ・シルバ・フィーリョ

アニヤンゲラで知られるバルトロメウ・ブエノ・ダ・シ

ルバの子息バルトロメウ・ブエノ・ダ・シルバ（父と同名）は一七二二年七月三日にサンパウロを出発、ゴヤスに向った。彼は一二才で父に同伴してゴヤスの探検をした経験があり、一五二人の隊員を率いてサンパウロを出た。彼はこの探検に三年を費やしたが、隊員の大部分は病死、或いは四散し、ほとんど得るところはなく空しくサンパウロに引揚げた。

バルトロメウ・ブエノは失望することなく一七二五年七月、ミゲル・デ・バツロス、マヌエル・ピント・グエデス、パーデレ・アントニオ・デ・オリベ이라・ガールゴなどの豪者の参加を得て再びゴヤスに向った。

この探検では彼の父アニャンゲラを知る土人ゴヤゼス族の尊長の先導を得て奥深く踏みこみ、数カ所で金鉱を発見した。

当時バルトロメウ・ブエノはフェレーロス・バーラ、オーロ・フィノ、サンタアナに集落を設けた。彼がサンタアナに建設した小教会の場所が現在のゴヤス市の中心となっている。

バルトロメウ・ブエノは多量の金を獲得して一七二八年にサンパウロに帰着した。それが評判になり、ミナスから多くの冒険児がゴヤスにつめかけてゴヤスの黄金期を現出した。

黒人奴隷の歴史

植民期ブラジルの産業開発は黒人奴隷の労力でおこなわれた。それはカリブ諸島やアメリカのスペイン、イギリスの植民地にしても同様である。

ブラジルでは一五三二年にマルチン・アフォンソ・デ・ソーザの開拓団がサン・ビセンテで甘蔗を栽培し、製糖工場を設けるために黒奴を使役したことが奴隷史の発端となっている。

ブラジルに本格的に黒奴が入れられたのは一五五〇年以後、初代総督トメー・デ・ソーザの時代だが、砂糖農園主に対し年間一二〇人の黒奴の輸入権がポルトガル政府から与えられた。それらの黒奴の大部分がアフリカのギネーとサン・トメーから積み出された。

ブラジルに黒奴が入れられてから一八三一年の輸入禁止までにどれほどの数に達したかは判明していないが、およそ妥当と思われるのが五〇〇万である。ロベルト・シモンセンの『ブラジル経済史』には三八〇万から四〇〇万となっている。

ブラジルの奴隷資料に欠ける理由はルイ・バルボーザの蔵相任期（デオドロ臨時政府）、一八九〇年一二月四日

付の法令で一切の奴隷記録を義務的に徴集して焼却した
ことにある。それは人道に反する奴隷制度をブラジルの
歴史から抹殺するためであった。

北東部の砂糖産業の隆盛に伴って多量の黒奴が導入さ
れ、砂糖農園主の権勢と経済力は所有する奴隷で計られ
た。

ブラジルに入れられた初期の黒奴はアフリカ西海岸の
ギネーから船積みされて、北東部のバイアとペルナン
ブーコで売捌かれた。特にバイアはブラジル最大の奴隷
市場であった。

アフリカで船積みされる黒奴は鉄鎖でつながれて船倉
に投げこまれた。それらの黒奴には背や腕に烙印を捺さ
れたものがある。

一〇〇トンの船舶一隻当りの積載量は一〇〇から一五〇
人だが、三〇〇以上四〇〇人を積んだ記録がある。それ
は黒奴が重なり合っている状態で、生き地獄そのもので
ある。

アフリカのギネーからバイアまたはペルナンブーコま
での航海は二〇日から二五日で、その間の奴隷の食物は
一日一回か、全く与えられない日もあった。したがって
不衛生と栄養不良による死亡率が高く、航海中に積載量
の半数を失うことは稀ではなかった。中には自殺する者

もあつた。ブラジルで陸揚げされた奴隷の価格は種族、年齢、健康状態で決定された。植民初期の黒奴の平均相場は五〇ミルレースだったが、次第に値上りして一〇〇から三〇〇ミルレースとなり、奴隷輸送禁止令の出た一八三一年には一コントにもなつた。

質的にはスダーン地方の黒奴が最良で、主にバイアの市場で売られ、コンゴとアンゴラの黒奴は北東部の砂糖農園とミナスの金山、後にはリオとサンパウロのコーヒー耕地に売られた。

砂糖農園での黒奴の労役は早朝から夜まで一日に十数時間ともなつた。彼ら黒奴は監督の鞭の下に酷使され、怠惰または不従順、反抗などには重い刑罰をうけた。

女奴隷は主に農園主の家庭に使われ、或いは内妾の役をつとめ、健康な子有ち女は主人の子供の乳母となつた。

黒奴には酷使に耐えかねて逃亡する者があり、それを追跡して捕えることを専業とするカピトン・ド・マツトがいた。彼らは馬に乗って馳けまわり、逃亡奴隷の捕種に一人当り一ミルから二ミルレースの報酬をうけた。カピトン・ド・マツトが脱走奴隷を発見した時には既に樹の枝で溢死していることもあつた。

逃亡奴隷が連れ戻された時には、逃亡黒奴を意味するF（フジョン）の焼印が捺された。

老いた黒奴には酷使と刑罰のために体軀の崩れた者が見られた。

奴隷の統計

一七世紀がブラジルの製糖業の全盛期だがその百年間に糖業地だけに五二万の奴隷がいた。このうちでアフリカから輸入されたものが三五万と推定される。

北東部がオランダの占領下にあった期間には五万三〇〇〇の奴隷がアフリカから入れられた。また一七〇〇年から一八五〇年の一五〇年間に一三〇万の黒奴が砂糖生産に使役されたが、その四分の一はブラジル生れの奴隷である。したがって同期間に約一〇〇万の奴隷が入れられたことになる。更に一六〇〇年から一八五〇年の二五〇年では一三五万の黒奴が砂糖農園だけに入れられた。

一八世紀の黄金期、一七四一年から一七六一年にわたる金の生産は一万四六〇〇キロでそれに六万の奴隷が使役された。黄金の全盛期は比較的短かいが、一八世紀を通じて一年当り五万の奴隷が金鉱地に入れられた。当時の計算では奴隷一人当りの金の年産額を二〇〇グラムとして、一八世紀には八六万の奴隷が金鉱地に使用されたことになる。そのうちの六〇万がアフリカから導入され

た。



一八世紀ミナスの水流による
金の採取（ウゲンダ画）

一九世紀にはコーヒー産業が勃興し、それに多くの奴隷が使役された。

一八五〇年度には六〇〇万アローバのコーヒーが輸出されたが、奴隷一人当りの生産が一〇〇アローバと見られている。

一八三〇年以後はコーヒーその他の農業（砂糖農園を除く）に全奴隷の五割が使役された。

一七九八年度の人口調査によれば、三二五万の全人口に対して黒奴が一五八万二〇〇〇で、自由黒人が四万六〇〇〇となっている。また一八一七年には全人口三三〇万に対し、一〇三万の黒奴と八万の自由黒人がいた。

ブラジル独立後の一八三〇年度の推定では全人口の七一、三一パーセントが白人とカボクロで、二八、六九パーセントが黒人とムラトとなっている。更に奴隷解放三年

前の一八八五年度の調査では、ブラジル全土の自由黒人は一万八九〇〇である。ブラジルに入れられた黒奴を種族別に見れば、赤道アフリカのバンツー族が最も多い。西アフリカのスターン族は独立心が旺盛で、イスラム化した者があり、その多くは遊牧生活をしていた。一六四三年以後はモザンビークからも黒奴が入れられた。それらの黒奴はアフリカから物神崇拜のアミユニズモを宗教儀式としてブラジルに入れた。それは後に土人の宗教やキリスト教との混淆によつて、ブラジル独特の黒人の宗教儀式がつくり上げられた。

奴隷解放の進展

ブラジルで最初に奴隷制度の撤廃を提唱したのは、ブラジル独立の長老ジョゼ・ボニファシオで、一八二三年該案が議会上に提出され、一八二八年に法律化されたが実施には至らなかつた。

一八三一年の奴隷輸出禁止令と相まって、同年の二月以降のブラジル入国の黒奴の自由を認めることになったが、同法令も空文にすぎず、依然として奴隷の密輸送がおこなわれた。一八三一年以後にブラジルに入れられた黒奴は二〇万と推定される。

一八四五年八月八日、ロンドンでサー・ジョージ・ハミルトン・ゴルドン（アバーデン伯）提案の奴隷貿易禁止令が公布された。それはビル・アバーデン法令といわれたが、ほとんど効を奏さず、同令の公布以後の五年間にブラジルに入れられた黒奴は一二万五〇〇〇である。

およそ米州におけるの奴隷解放の気運は、文学に現われたのが最初である。まず詩によって奴隷に対する同情が表現され、また小説劇作のほか新聞の論説に奴隷制度への反対と義憤が見られるようになった。ブラジルではベルナルド・ギマランエスの小説『奴隷イザウラ』とカストロ・アルベスの詩作『奴隷船』『アフリカの声』などが代表的である。



奴隷によるコーヒー採集（ウガンダ画）

アメリカ合衆国ではハリエット・ビーチャー・ストウ夫人（一八一一〜一八六〇）の小説『アンクル・トムス・キャビン』（トム叔父の小屋）が一八五二年に出版されるや、空前の反響を呼び、それが南北戦争の動因ともなった。同書は二十三カ国語に訳され、当時これほど話題に上ったものはない。

さすがアメリカはデモクラシーを国是とするだけに、一七七七年にヴァーモントに奴隷制度への反対の声があがった。それがニュー・ジャーシーに波及し、一八二〇年にはミズリー、一八四五年にテキサス、一八五四年にはカンサスとネブラスカにおいて反奴隷制度の運動がおこされた。そのほか思想家エマーソン、詩人ロングフェローウなども評論詩作をとおして奴隷制度への反対を唱えた。

やがて南北戦争が勃発し、その五カ年の戦いで三十数万人が犠牲となった。

南北戦争の最中、一八六三年二月一九日に大統領エブラハム・リンカーンはゲッチスハーグの戦場跡でエマーンシペーション・プロクラメーションを公表し、ここにアメリカ全土の奴隷解放が実施された。その時のリンカーンの名演説がワシントンのリンカーン記念堂の壁に刻まれている。

ブラジルでは一八六五年にジェキチニョラ子爵によって奴隷解放案が上院に提出されたが、多数の反対のために立消えとなった。

一八六六年には連邦議貞タヴァレス・バストスの提議によって、政府および宗教団体の所有する奴隷に自由を与える法案が通過した。

また一八六九年に同じく連邦議員ジョゼ・デ・アレンカール（文学者）が黒奴の競売禁止令を提議し、これも通過して直ちに実施された。

一八七一年のリオブランコ子爵内閣では、イザベル皇女によってベントレ・リーブレ令が公布されて、ブラジル生れの奴隷の子の自由が認められた。同年、新聞人ジョゼ・ド・パトロシニオ、政治家ジョアキン・ナブコ、ジョアキン・セーラ、アンデレ・レボウサスを主導者とする奴隷制度撤廃組合が結成され猛烈な街頭運動が展開一八八三年にセアラ州が率先して単独で奴隷解放を声明し、それに刺戟されて一八八四年にはアマゾナス州も奴隷制度を撤廃した。

翌一八八五年、コトジペ内閣は六〇才以上の奴隷の自由を認める法令を公布した。

新聞ではジョゼ・ド・パトロシニオの主宰する『シダー

デ・ド・リオ・デ・ジャネーロ』が奴隷解放の論説を連載して世論を喚起した。

このように奴隷解放の気運は高まったが、保守党のコトジペ内閣（ジョアン・マウリシオ・ヴァンデルレー）は奴隷解放がブラジル皇室の命取りとなることを察知し、同時にコーヒー耕主擁護のためにも窮地に陥り、一八八八年三月に総辞職した。そこで同じく保守党のジョアン・アルフレドによって新内閣が組織され、外相アントニオ・プラードの起草した奴隷解放令（レー・アウレア）が摂政イザベル皇女によって公布されたのが一八八八年五月一三日である。

当時皇帝ドン・ペードロ二世は病氣療養のためヨーロッパに滞在していた。

奴隷解放は帝政崩壊の直接の原因となったが、一滴の血を流すこともなく、ブラジル全土七四万の黒奴が鉄鎖を解かれて自由となった。

黒人文化の影響

ブラジルでは無意識のうちに黒人文化の影響を受けた社会に生活している。黒人を素材とした文芸作品を読み、黒人音楽や舞踊をはじめ、黒人をモチーフとした絵画彫

刻を鑑賞している。または黒人料理を賞味する。

シダーデ・マラビリョーザのリオのよさはコパカバナ海岸やボン・デ・アスーカルだけではなく、黒人によつてかもし出されるものが多い。したがってリオから黒人を取去るなればいかにも味気がなく、世界に名高いカルナバル・カリオカの魅力は半減するであらう。特にムラタ（混血女）はリオの名物である。

ところでブラジルの黒人の文献はかなり多いが、そのほとんどが旧く、新しい研究はすくない。過去の黒人研究の泰斗はライムンド・ニーナ・ロドリゲスとアルツール・ラーモスであり、それに次いでマノエル・ケリーノとエジソン・カネーロを挙げねばならない。

ほかに文化人類学者ドナルド・ピアソン、ロケッテ・ピント、アルツール・ローボが名高い。また社会学者ロジャー・バスチーデス（フランス人）、フロレスタン・フェルナンデスとシルベルト・フレレーの著書は黒人文化の貴重な文献である。

アフリカから黒奴を入れたことでは西インド諸島、中米諸国、アメリカ合衆国とブラジルは同じだが、人種社会的の黒人との因果関係はブラジルとアメリカ合衆国ではかなり異なるものがある。同じくブラジルでも最も多く黒人文化の影響をうけているのはマラニョン、ペルナン

ブーコ、セルジペ、バイア、ミナス、リオ・デ・ジャネイロ、サンパウロである。それはアメリカの南部のルイジアナ、ジョルジア、アラバマ、サウス・カロライナ、ミシシピー、テネシーなどに相当する。

奴隷時代のアメリカの黒人州は南部にかぎられていたが、ブラジルはその反対で南三州にはほとんど黒奴は入れられていない。

アメリカでは北部と南部がデキシ―線で画然と区別されていたが、ブラジルにはそのような地域的人種差別線は設けられなかった。

ブラジルとアメリカでは植民初期の移住の形態からして異っている。一六世紀後半から一七世紀にブラジルに渡ったポルトガル人のほとんどが本国から女性を伴っていなかったために、当然の成行きとして土人や黒人と雑婚して多くの混血児を生んだ。

ブラジルに移住したポルトガル人にはモロー人（アラビア人）の血をうけて純白でない者がいた上に、土人や黒人との雑婚で、植民初期にして混血社会が形成された。一家の中に金髪や半黒が見られるのはブラジルの特異現象であろう。

一九二二年のブラジル独立百周年を機会に人類社会学者ロケッテ・ピントは次のようなブラジルの人種的人口

構造の比率を発表した。

白人	五一パーセント
ムラト（中間）	二二パーセント
黒人	一四パーセント
カボクロ	一一パーセント
インジオ	二パーセント

また同年、軍医大佐のアルツール・ローボの連邦現役兵壮丁三万人の調査によって次の結果を公表した。

ムラト（中間）	三〇パーセント
黒人	一〇パーセント
カボクロ	一パーセント

現在はこの人種的比率がどのように変わっているか不明だが、白人と黒人の中間的存在のムラトがかなりの高率を占めることが想像される。それらの黒人系ブラジル人から多くの英才が出ている。それは特に詩人、文学者、新聞人、芸術家に見られ、白人だと考えていた著名人が黒人系であることを知って意外である。その代表的人物を次に列挙する。

詩人

クラウジオ・マヌエル・ダ・コスタ（一七二九〜一七八九）

バジリオ・ダ・ガーマ（一七四一〜一七九五）
クルース・エ・ソーザ（一八六一〜一八九八）
ゴンサルベス・ジーアス（一八二三〜一八六四）

文学者

トピアス・バレット（一八三九〜一八八九）
リーマ・バレット（一八八一〜一九二一）
マツシャード・デ・アシス（一八三九〜一九〇八）

新聞人

エヴァリスト・ダ・ヴェーガ（一七九九〜一八三七）
ジョゼ・ド・パトロシニョ（一八五三〜一九〇五）

土木技師

アンデレ・レボーサス（一八三八〜一八九九）

地理学者

テオドロ・サンバイオ（一八五五〜一九三七）

大統領

ニーロ・ペサーニヤ（第七代一八六七～一九二四）

作曲家

ジョゼ・マウリシオ・ヌーネス・ガルシア（一七六七
～一八三〇）、フランシスコ・ブラーガ（一八六八～
一九四五）

彫刻家アントニオ・フランシスコ・リスボア（一七三
〇～一八一四）、ヴァレンチン・ダ・フォンセツカ（？
～一八二二）

医師

ジュリアノ・モレーラ（一八七三～一九三三）、アル
ツール・ネーバ（一八八〇～一九四三）

画家

ペードロ・アメリカ（一八四三～一九〇五）

黒人の宗教儀礼と民俗祭り

アフリカ伝来の黒人の宗教儀礼の主なものにマクンバとカンドンブレーがある。マクンバとカンドンブレーは元来は一つだが、バイアではカンドンブレー、リオではマクンバ、ベレンでシャンゴーとなっている。

ここではマクンバとカンドンブレーを別に説明するが、マクンバはシャマニズモ（シャマン教）の性格を帯びる物体崇拜の凡物教で善悪両方の神を自由にできるという原始宗教である。それが心霊術と結びつき、ツピー土人の迷信との混合宗教となって多分に妖術化、幻術化、魔術化されている。

マクンバにはウンバンダ（善行）とキンパンダ（悪行）の二つあり、その儀礼にはグロン・メストレ（司祭）パイ・サント（聖徒の父）、マエ・サント（聖徒の母）のほか水神、火神、森林の神など様々の神と介添が登場する。マクンバの信徒はマクンベーロと呼ばれ、儀式は夜、野外でおこなれる。

マクンバの呪狙術は夜間に町の広場や街角でおこなわれ、黒色のローソクと香料、花飾りが用いられる。

ウンバンダは降霊術ともいわれ、霊媒を介して死者と

の対話ができる。

人に呪いをかけるマクンバはキンバンダで呪われた人や家庭には不時の災厄がおこるのは、科学では解逐きれないものがある。

カンドンブレーの儀礼もマクンバのウンバンダに似て巫術、妖術、神秘化されている。

ブラジルではバイアがカンドンブレーの本場で、サルバドールにはカンドンブレーのテレーロ（拝殿）が数十もある。カンドンブレーにはオリシャ、エシユー、オシヤラ、オシユン、オグン、オムルー、ヤンサン、イエーマンジャなどの儀礼がある。

イエーマンジャは水神祭りで海でおこなわれる。儀式に現われる女性は白衣を着用して花飾りをつけ、無数の花が海に流される。

カンドンブレーは一つの巫術であって、独特の衣裳をつけた様々の神や、聖徒と乙女の巫子が現われる。

山羊や雄鶏が生贅にされ、その血を剃髪した巫子の頭に注ぐ儀式がある。またウンバンダと同じように隆霊術によって死者の霊を喚びおこすのは妖気漂う観がある。

カンドンブレーの儀礼には司祭、パエ・サント、マエ・サント、雷の神（シャンゴ）、狩猟の神（オグン）、オリ

シヤの母（ナナン）、神々の使者（エシユ）などが登場する。

奏楽には専ら打楽器が用いられる。

黒人の民俗祭りにはキンバテ、カテレテ、シヤンゴ、バツキ、アルジャ、サランブー、サランベツケ、ソランゴ、マラカッターがある。

特にペルナンブーコのマラカッターとミナスのソロンゴが有名であり、リオのサンバはバツキが原型である。

ほかに民話劇のブンバ・メウ・ボイがあり、これは一つの野外劇で仮装した牛が主役である。

黒奴の反乱

逃亡奴隷は群をなして隠れ場をつくり、それはキロンボと呼ばれた。特にオランダ軍の北東部侵略当時は、その混乱に乗じて多くの黒奴が砂糖農園から脱走してキロンボを築いた。キロンボにはそれぞれの首領またはリーダーがいて組織を保ち、持久戦を張った。

彼らは時に大挙して村や町、農園を襲って掠奪をした。キロンボの最大の規模のものは、アラゴアス北部のパルマーレスに形成されたパルマーレス黒人共和国である（それは一六三〇年から一六九七年まで六七年存続したこ

とで名高い。パルマーレスはアラゴアスのムンダウ平原ポルト・カルヴオの近くで、この一帯は野生のパルメーラス（椰子）が多いのでその名称が生れた。

パルマーレス黒人共和国は新旧二つから成り、総人口は六〇〇〇あった。それらの黒人は傑れた指導者の下に共同生活を営み、耕作して食糧を自給自足した。

パルマーレスの巨大キロンボは幾つかの区画から成り、約二〇〇〇戸の土壁の家屋が散在し、中央には教会と王城があつて数名の指導者がいたが、特に知られたのはズンビーと呼ぶ黒人であつた。

このパルマーレス黒人共和国の討伐には数度にわたつて軍隊がくり出されたが、犠牲のみ多くして不成功におつた。パルマーレスの黒人がいかに頑強に闘つたかがわかる。

遂にペルナンブーコの長官はサンパウロ著名のバンデーランテのドミンゴス・ジョルジ・ヴェーリオの協力を得、それにマラニョン警備兵同と地元アラゴアスの兵力を合せ、七〇〇〇の大軍をもつてパルマーレスを一斉に包囲攻撃した。

ペルナンブーコ部隊の司令官はベルナルド・ヴィエーラ・デ・メーロ、アラゴアス部隊司令官はセバスチョン・ジーン・アス、パウリスタ部隊の司令官はドミンゴス・ジョ

ルジ・ヴェーリヨであった。

パルマーレスの包囲戦は一六九七年一二月一日に開始され、四日を要して一二月五日に撃滅した。首領ズンビーは捕えられて斬首刑に処された。

ナチビズモ思想と反乱の発生

オランダ軍の北東部侵略の影響で、ペルナンブーコとマラニヨンのブラジル人の間にナチビズモ（ブラジル人の土着主義または自主思想）が芽生えた。それが一六四八年と一六四九年のグワララペス戦の勝利の要因となった。このナチビズモの思想は北東部からミナスの金鉱地に波及した。

ベックマン革命

一七世紀後半にマラニヨンの砂糖農園の労力問題とジェズイットの土民保護をからむ争闘がおこった。それがブラジル最初の社会革命である。当時のマラニヨンの砂糖農園はアフリカからの黒人奴隷の輸入が不可能のため植民はジェズイットに教化された土人を捕獲し、奴隷として使役した。そのためにジェズイットと植民との闘

争は一六六一年から一六八四年まで二〇年以上もつづいた。

ポルトガル政府は問題の解決策として一六八二年二月にグロン・パラ―・エ・マラニオン貿易会社を設立した。

その目的はマラニオンの砂糖農園に年間五〇〇の黒奴とその他の必要物資を供給することにあつた。しかしそれは一つの空文にすぎなく、約束の黒奴も物資も供給されをいまま歳月がすぎた。

マラニオンの砂糖農園主は遂に待ちきれずに反乱をおこしたのが一六八四年二月二四日である。反乱の主導者はマヌエル・ベックマン（一六三〇―一六八五）で、反徒はサン・ルイスのグロン・パラ―・エ・マラニオン貿易会社の倉庫を占領し、ジエズイットを捕えて追放した。同時にマラニオンの長官代理バルタザール・フェルナンデスを捕虜にした。

マヌエル・ベックマンはマラニオン長官の権能を帯びて革命達成た努力したが、事態は悪化して反徒の不満を買った。

ポルトガル政府はマラニオンに新長官ゴームス・フレ―レ・デ・アンドラーデを赴任させベックマン革命を鎮圧した。

パーデレ・アントニオ・ヴィエーラ（一六〇八—
一六九七）

パーデレ・アントニオ・ヴィエーラは説教師、布教師、外交官で、一七世紀の偉大なポルトガル系ブラジル人の博学者で知られた。

彼はポルトガルのリスボアに生れ、七才未満で父母とともにブラジルに移住し、バイアのジェズイットの学校に入学した。次いでジェズイット教団に入門し、一六才でジェズイット年誌を書いたが、それが彼の最初の文学作品である。



アントニオ・ヴィエーラ像

アントニオ・ヴィエーラは一六三四年にパーデレの資格を得、バイアとペルナンブーコのジェズイット学校で哲学と神学を講じた。

一六四〇年のポルトガルのスペイン統治の解除とともに

に、ヴィエーラは三才でポルトガルの王ドン・ジョアン四世に対するブラジル人の忠誠の意志表示の使命を帯びてポルトガルに向った。ポルトガルから帰国したヴィエーラは一六五三年から一六六一年にかけてマラニョンからパラーの布教活動をし、アマゾン奥地に進入して土民教化に当った。

一六五四年から一六六一年には、彼は二度目のポルトガルへの旅をしたが、その目的はブラジルの土人の奴隷制度の撤廃とユダヤ人の保護を提議することにあつた。当時ブラジルの砂糖農園では土人を捕獲して奴隷として使役していたからである。そのために土人の保護を唱えるヴィエーラと植民者とは対立的となり、ヴィエーラに対する強烈な排斥運動がおこつた。

一六五六年には王ドン・ジョアン四世が逝去し、ヴィエーラの立場は不利となつた。ヴィエーラは土人とユダヤ人保護者として、異教徒裁判（宗教裁判）によつて刑をうけ、二年間（一六六五―六七）監禁された。

ヴィエーラは恩赦をうけて出獄し、一六六九年にイタリアを遊説した。

ヴィエーラは新キリスト教徒の資本による貿易会社の設立を提唱した。それは主にブラジルのパラーとマラニョンを対照とするものでブラジル総合貿易会社の名称

がつけられた。後にはマラニオン貿易会社となったが実績が挙げらず、ヴィエーラは失望して一六七五年にリスボアからブラジルに引揚げた。

ブラジルに帰国したヴィエーラは主にマラニオンに留り、説教師として活躍した。晩年のヴィエーラは失明したが説教はつづけた。

その説教集は一五巻から成り、ブラジル古典の粹となつてゐる。

マラニヨンのサン・ルイスにヴィエーラが設立した教会の窓から遙か海原を望みながら説教をしたところから”魚への説教”といわれた。

コンパニア・ジエラル・デ・コメルシオ・ド・ブラジル（ブラジル総合貿易会社）

パーデレ・アントニオ・ヴィエーラの提案により、ポルトガルの王ドン・ジョアン四世はポルトガル系ユダヤ人の資本によるブラジル総合貿易会社の設立を決定した。それは一六四九年二月六日付の法令をもって、ブラジルの貿易会社に投資するユダヤ人の人権を認めてそれらの資産は押収せず、とされた。同貿易会社にはユダヤ人のほかに投資した者がかなりあった。

ブラジル総合貿易会社はポルトガルからブラジルに葡萄酒、小麦、オリーブ油、乾鱈を供給し、ブラジルからは砂糖、皮革、煙草、パウ・ブラジルをポルトガルへ輸送することが目的であつた。

同社は一六四九年から一六五一年までは好成績を見たが、それ以後は業績が挙げらず、ブラジル人の間に不満の声がおこつた。その理由はポルトガルからの輸入品が高価にすぎることであつた。

ドン・ジョアン四世はブラジルに調査員を派遣した結果、現地での汚職や不正が摘発され、ブラジル総合貿易会社は解体を命じられた。

マヌエル・ベックマン（一六三〇—一六八五）

マヌエル・ベックマンはポルトガルのリスボアに生れてマラニヨンのサン・ルイスで処刑された。彼の父はドイツ人で母はポルトガル人であつた。

少年期にブラジルに移住し、弟のトーマスとともに商業に励み、後にサン・ルイスにメアリン砂糖農園を設けた。

マヌエル・ベックマンはポルトガル系ブラジル人の間に非常な人気があり、ベキマンの愛称で呼ばれた。彼は

一六六八年にサン・ルイスの市会議員となり、市の発展に尽した。

砂糖農園主に対するマラニョン貿易会社の約束不履行とマラニョンのカピタニア臨時長官バルタザール・フェルナデスの悪政に反対して革命を主導したが、遂に政府軍に制圧された。

マヌエル・ベックマンは捕えられて斬首刑に処された。彼は処刑されるに当って「自分はマラニョン人のために喜んで死ぬ」と言い放った。

ゴーマス・フレレーレ・デ・アンドラーダ（ボバデラ伯爵一六八五—一七六三）

軍人にしてリオの名長官ゴーマス・フレレーレ・デ・アンドラーダは一六八五年にポルトガルのアレンテージョに生れた。父はベルナルジン・フレレーレ・デ・アンドラーダで、マラニョンのペックマン革命を鎮圧したゴーマス・フレレーレ・デ・アンドラーダ大将は父方の叔父に当る。つまり彼は叔父と同名である。

ゴーマス・フレレーレ・デ・アンドラーダは一七〇四年にコインブラ大学に入学し、卒業後は騎兵大尉としてアレンテージョに駐在した。

一七三三年七月、リオ・デ・ジャネイロの長官に任命されて赴任した。それ以来彼の長官任期は三〇年にわたっている。その間、彼はリオに幾多の改良施設をした。サンタ・テレザ丘からサント・アントニオ丘への水道管の設置、カリオカ水道の敷設、カルモ広場（現在のキンゼ広場）の長官公邸（後のリオ政庁）を設けた他、カトリック大聖堂の定礎式を挙げ、起工した。

リオ・グランデ・ド・スールのミッソンエス地域のグワラニー土人の追放戦にゴームス・フレレーは冷酷且つ残酷な処置をとり、非情の大將といわれた。それは彼にはやむを得ぬ手段であつた。

ゴームス・フレレー・デ・アンドラーダは一七六三年元旦、リオに死去した。

コロニア・ド・サクラメントの創設

一六七九年にポルトガルの王ドン・ペードロ二世は、リオ・デ・ジャネイロの長官ドン・マヌエル・ローボにラプラタ川左岸にコロニア・ド・サクラメントの建設を命じた。

ドン・マヌエル・ローボは一六八〇年一月二二日に五隻の船舶と二〇〇人の軍隊をもって、ラプラタ左岸のサ

ン・ガブリエル島の小湾に上陸し、要塞を構築してサクラメントの名称をつけた。同年、ブエノス・アイレスの長官ドン・ホセ・デ・ガールはアントニオ・デ・ヴェラ・ムヒカ大佐を司令官とする三五〇〇人の軍隊をコロニア・ド・サクラメントに差向けた。その八月七日の戦闘で少数のポルトガル軍は敗れ、コロニア・ド・サクラメントは占領された。その後はコロニア・ド・サクラメントをめぐつて、ポルトガルとスペインの間に一世紀におよんで度々戦闘がくり返された。またポルトガルとスペインの領地問題は数回の会議で討議されたが、それらの主なものを次に挙げる。

ユトレシユト条約

一七一三年四月一日、フランスのルイ一四世とポルトガルのドン・ジョアン五世の治世のユトレシユト条約で、フランスはアマゾン本流とオイアポック川との中間の領地を棄権し、それがポルトガル領となった。

同じく一七一五年二月六日のユトレシユト会議では、イギリスの女王アンの調停のもとに、ポルトガルとスペインの領地問題解決の調印がされた。それはコロニア・ド・サクラメントからスペインが撤兵し、ポルトガル人

の捕虜とともに同領地をポルトガルに返還する決議である。

しかしこのユトレシュト条約はスペインが履行せず、ブエノス・アイレスの長官に命じて一七三五年に再度サクラメントに派兵し、ポルトガル軍との戦いは一七五〇年のマドリード会議までつづいた。

マドリード会議

ユトレシュト条約が調印されたにもかかわらず、スペインとポルトガルの間には依然として領土闘争がつづいた。

スペインはラプラタ地域の領有を確立するため一七二六年にモンテビデオを創設し、ポルトガルはリオ・グランデ・ド・スールの拓殖を進めた。しかしスペインとポルトガルはこの領土闘争を終結すべく別の条約を調印した。

それが一七五〇年のマドリード条約で、アマゾンとマト・グロッソのスペイン領地とブラジルの領土境界が決定された。またポルトガルはラプラタ左岸のコロニア・ド・サクラメントを棄権し、それに代ってセーテ・ポソス・ダス・ミッソンエス地域が確保された。それはウルグワイ川左岸のスペイン系ジェズイットの土民教化区

で、現在のリオ・グランデ・ド・スールのサン・ニコラウ、サン・ミゲル、サン・ルイス、サン・ボルジャ、サン・ロウレンソ、サン・ジョアン、サント・アンジェロを包含する地域である。

マドリード会議ではブラジル人の名外交官アレシヤンデレ・デ・グスモンの活躍が目立っている。



アレシヤンデレ・デ・グスモン

エルパルド条約

マドリード条約はスペインとポルトガル双方の良識と好意に基づく協定であったが、その実行に当って多大の困難を生じた。それはセーテ・ポーボス・ダス・ミツソンエスの土人がジェズイットに従属することを望んで、ポルトガル植民地に所属することに応じなかつたためである。スペインとポルトガルは軍隊を派遣して土人を討伐し、残虐な殺教がおこなわれた。このような難問題の

ために、一七六一年二月一二日のエルパルド条約によつて、ポルトガルの王ドン・ジョゼ一世とスペインの王カルロス三世の立会のもとに、一七五〇年のマドリード条約が無効とされ、コロニア・ド・サクラメントは以前の状態におかれることになった。

サント・イルデフォンソ条約

ポルトガルのドーナ・マリア一世が王位につくと同時に、ドン・ジョゼ一世の政府首相ボンバル侯を退け、一七七七年一〇月一日にスペインとポルトガルのサント・イルデフォンソ条約が締結された。これによつてラプラタとウルグワイ川の北方から南方への航行権とともに同地域の領有権はスペインに帰属することが決定された。ポルトガルはコロニア・ド・サクラメントとミツソンエス領地を棄権することになる。

バダジヨス条約

一八〇一年六月六日のバダジヨス条約ではサント・イルデフォンソ条約を基本的に変更せず、ポルトガルはコロニア・ド・サクラメントを棄権する交換条件としてリ

オ・グランデ・ド・スールの領有権が確立された。

ビーラ・リーカ（オーロ・プレート）の創設

一六九八年四月、バンデーランテのアントニオ・ジオアス・デ・オリベーラの探検隊がサンパウロのタウバテを出発、ミナスに向った。その探検隊がミナスのイタコロミ山麓、トリプイ川の沿岸に達したのがサン・ジョアン祭の前日、六月二三日であった。探検隊員は厳しい寒さに震えていたが、翌二四日のサン・ジョアン祭日の早朝、寒さを忘れて歓声を挙げた。それは隊員の一人の黒人がトリブイの川底から暗色を帯びた砂金を発見したからである。

彼らバンデーランテには案外早く金の発見されたことが一層の歓びであった。そして黒人によって暗色の金の発見されたことがオーロ・プレート（黒色の金）の名称の起源となった。

アントニオ・ジオアスの探検隊の金の発見は直ちに知れわたり、多くの冒険児がイタコロミ山麓に乗り込んだ。

アントニオ・ジオアスの開拓した村は金の発見で有名

となり、一七一一年にサンパウロとミナスのカピタニア長官アントニオ・デ・アルブケルケの名を記念し、ビラ・リーカ・デ・アルブケルケの名称がつけられた。それが数年後にはビラ・リーカ・デ・ノッサ・セニョーラ・ド・オーロ・プレートに変わった。

一七二〇年にミナスはサンパウロから離脱されて独自のカピタニアとなり、同時にビラ・リーカがミナスの首都となった。それから数年を経て、黄金全盛期のビラ・リーカの人口は三万に達した。

ビラ・リーカの黄金期には富裕の奇篤家によって金泥装飾の華麗なバロック型の教会が建立され、それら特権人の権勢顕示とともに殺伐な金鉱地の空気を知げることになった。当時は金山をめぐる闘争と流血の惨事が相ついでおこったからである。

摂政ドン・ペードロによるブラジルの独立宣言後の一八二三年にビラ・リーカはオーロ・プレートと改称された。一八九七年にはミナスの首都がオーロ・プレートからベロ・オリゾンテに移された。それまでのベロ・オリゾンテはクラール・デルレー（王家の廐舎）と呼ばれていた。

オーロ・プレートには一三の教会と九つのカペラ（礼拝堂）がある。

ビーラ・リーカの反乱

ポルトガル政府はミナスの産金に対する課税を嚴重にし、密売を防ぐために、ビーラ・リーカにカーザ・デ・フンジソン（煉金所）を設けた。カーザ・デ・フンジソンでは生産金から五分の一の現物税を徴収し、所定の延べ棒として刻印を捺した。

そのカーザ・デ・フンジソンの設置は採金者にとって不都合きわまるものだったので、彼らはポルトガル政府に抗議した。それは一七二〇年で、抗議の代表人物がフィリップ・ドス・サントス（一六九一—一七二〇）であつた。フィリップ・ドス・サントスは群衆を従えてリベロン・ド・カルモ（現在のマリアナ）駐在のミナス長官アスマール伯爵を訪れて、税金の軽減とカーザ・デ・フンジソンの廃止を陳情した。群衆の来訪とその強硬な態度に怖れをしたアスマール伯爵は彼らの要求を容れる約束をした。その直後にアスマール伯爵は軍隊をビーラ・リーカに向けて抗議者を叛徒として逮捕し、代表人物のフィリップ・ドス・サントスを処刑した。このフィリップ・ドス・サントスの犠牲が一七八九年のミナス命の序曲をなした。

アレジャジーニヨ（一七三〇～一八一四）

アレジャジーニヨの本名はアントニオ・フランシスコ・リスボアで、一七三〇年八月二十九日にビーラ・リーカに生まれ、一八一四年一月一日に同じくビーラ・リーカに死去した。アレジャジーニヨは彼の持病（らい病に似た奇病）のために手と足の指を失ってからつけられた綽名で、愛称でもある。

アレジャジーニヨは彫刻家であり、建築設計家であった。彼が彫刻の大作を完成したのは父の死後、一七七一年の四一才のころからである。当時アレジャジーニヨに病の徴候が現われ、遂には足指が崩れて膝頭で歩行せねばならなかった。

アレジャジーニヨの父マヌエル・フランシスコ・リスボアは一七二四年にポルトガルから単身ブラジルに移住した。彼はポルトガル以来の大工、彫刻師で主にビーラ・リーカの教会建築の工事受講をした。

アレジャジーニヨの母は黒人奴隷だったために彼は半黒で、胴体と頭、耳が普通よりも大きく、容貌奇怪であった。

中年以後のアレジャジーニヨが熟読したのは聖書であ

り、手足の指を失ってからは一層信仰に燃え、祈りながらノミをとった。その事實は彼の晩年の作品に現われている。

ブラジルのバロック芸術は一七世紀のジェズイットの教会建築にはじまるが、それはポルトガルとスペインの建築様式の影響をうけている。ヨーロッパのバロック芸術はルネサンスの革新運動として一六世紀末にイタリアに発して全ヨーロッパを風靡し、一八世紀中期までつづいた。一八世紀後半はヨーロッパのバロック時代がすぎて、ネオクラシックに移行しつつあった。その時にアレジャジーニョが現われて彼独特のバロック彫刻が創造された。

アレジャジーニョがオーロ・プレートをはじめ、マリアナ、コンゴニヤス、サハラ、サン・ジョアン・デレールなどの教会に施した彫刻は入口、扉、聖壇、説教壇が主で、アンジョ（天使）を配したものが多い。

アレジャジーニョの畢生の大作はコンゴニヤスのボン・ジェズス・デ・マトジーニョ教会の外壁に配置された一二人の予言者の像である。また同教会の別館にある木彫りの殉難のキリスト像が名高い。

外国人でアレジャジーニョの研究者は多いが、特に有名なのはルーブル博物館の美術部長だったジェルマン・

バザンで、彼の著書に『アレジャジーニョの芸術』がある。

メストレ・ヴァレンチン（一八一三）

メストレ・ヴァレンチンで知られるヴァレンチン・ダ・フォンセツカ・エ・シルバの生年と誕生地が不明だが、一八二二年にリオ・デ・ジャネイロに死去した。

父はポルトガル人、母が黒人奴隷だったので彼は半黒であった。

彼は少年期にポルトガルに渡り、名工に師事して絵画と彫刻を学んだが、ブラジルに帰国しては専ら彫金師として多くの名作をなした。

メストレ・ヴァレンチンははじめリオのオルデン・テルセーラ・ド・カルモ教会の内部装飾と聖器の製作に腕を揮った。

一七八九年にノツサ・セニョーラ・ド・パルト教会が火災に逢い、その修復工事を当時の副王ドン・ルイス・デ・ヴァスコソセーロスに乞われ、聖壇と回廊をつくり上げた。

当時彼はマレツカス噴泉（給水所）の金属彫刻を完成した。次いでエコとナルシーゾの像、パセーオ・プブリ

コの有名なジャカレー給水所の彫刻をした。

リオのカルモ教会、サンタ・リタとサンベント教会にはメストレ・ヴァレンチンの作品が現在も見られる。

副王ドン・ルイス・デ・ヴァスコソセーロスが彼を“自分の右腕”だと世間に吹聴したほどである。副王がポルトガルに去った後までもメストレ・ヴァレンチンの生活のために送金した。しかし当のヴァレンチンには物欲がなく、彫金師としてのすぐれた腕をもちながらも資産を積むこともなくして赤貧のうちに死去した。

第六章 反乱と革命

エンボアバスの乱

エンボアバスは外来者、特に新来のポルトガル人の代名詞で、ブラジル人のポルトガル人に対する敵意と軽蔑がふくまれている。

一八世紀の初頭、ポルトガル政府は規定の税金を支払うかぎり、人種国籍の別なくミナスの金鉱探索を許可した。

エンボアバスの乱はサンパウロ著名のバンデira家系ジェロニモ・ペドローズ・バツロスと富裕のポルトガル人マヌエル・ヌーネス・ビアンナとのミナス金山をめぐる闘争に発している。

一七〇七年の或る日、ジェロニモ・ペドローズ輩下のジョゼ・パルドが外来者の一団によって暗殺された。下手人はヌーネス・ビアンナの一味であることは明白であった。この殺人事件からサンパウロ人のポルトガル人に対する反感はいよいよ高まり、激昂したサンパウロ人のグループはリオ・ダス・ベリーヤス沿岸の外来者を追放した。また別のサンパウロ人三〇〇名がリオ・ダス・モ

ルテス沿岸の原野に野営陣を張った。そこから少し距離をおいてポルトガル人の権力者ベント・アマラル・コウチーニョが一〇〇〇人から成る私兵を率いて待機していた。彼は謀略をもつてサンパウロ人に勧告した。『兵力はわが方が遥かに優勢である。もしわれわれに武器を渡せば汝らサンパウロ人の生命を保証する。今後はお互いに協力して金山を発見し、その経営に当ろうではないか：
：：：』

サンパウロ人はその好計にかかって武器をベント・アマラルに渡すや、彼は卑怯にも無防備のサンパウロ人を皆殺しにした。

三〇〇人のサンパウロ人が虐殺されたリオ・ダス・モルデス沿岸の原野はカポン・デ・トライソン（裏切りの原）といわれた。その跡に駆けつけた約三〇名のサンパウロ人は空しくサンパウロに引揚げたが、彼らの留守宅を守る老母や妻、姉妹は『何故にポルトガル人に復讐もせず帰宅したか』と詰問し、夫や息子、兄弟を家に入れなかったというエピソードがある。

サンパウロ人を殺戮したポルトガル人は自信満々としてヌーネス・ビアンナをミナスの長官に推挙した。当時のリオ・デ・ジャネイロの長官ドン・フェルナンド・マスカレーニャスはサンパウロ人とポルトガル人の闘争が

益々悪化するのを避けるべく、双方の和解につとめたが
なんら得るところがなかった。

サンパウロ人とポルトガル人の闘争はその後もつづき、
ポルトガル政府は政治家として名声高いアントニオ・
デ・アルブケルケ・コエーリョ・デ・カルヴァーリョを
リオの長官に任命し、ミナスの紛争解決に当らせた。コ
エーリョ・デ・カルヴァーリョはミナス現地に赴いて和
平工作につとめたが、それは表面的の解決におわった。

サンパウロでは徳望家の軍師アマドール・ブエノ・ダ・
ヴェーガがサンパウロ人の要望で、軍隊を組織し、ミナ
スのポルトガル人に対する復讐戦を敢行した。この戦い
は数日を要してポルトガル人は敗滅し、或いは四散した。
ここにエンボアバスの乱は終結した。

マスカッテの乱

ミナスにおいてのサンパウロ人とポルトガル人の争乱
が治まりきらないうちに、ペルナンブーコでも同じよう
な性格の動乱がおこった。それはマスカッテの乱といわ
れ、ペルナンブーコの旧地主と新来のポルトガル人の商
人との争いである。

オランダ軍の侵略ですっかり荒廃したペルナンブーコ

の砂糖農園の復興は容易でなかった。ところがポルトガルから渡来したポルトガル人は資本のあるにまかせて、立派な二階建の邸宅に住んで豪奪な生活をしていた。

当時ペルナンブーコの政治的中心はオランダで、レシフェには市議会がなく、レシフェに住むポルトガル商人には議員の選挙権すらなかった。オランダには貴族的な風格の旧地主や砂糖農園主が住んでいたが、その大部分は没落地主で経済力に乏しかった。なぜかといえば、オランダ戦争で荒れ果てた砂糖農園の復興資金もなく、また西インド諸島のオランダやイギリスの植民地において進歩的な資本家による最新式の生産設備で砂糖が多量生産され、ヨーロッパ市場の砂糖相場が暴落してペルナンブーコの砂糖農園主は惨めな状態にあつたからである。

オランダの旧砂糖農園主はレシフェのポルトガル商人をマスカッテ（行商人）と軽蔑しながらも経済力では頭が上らなかつた。

一七〇三年にはレシフェのポルトガル商人の運動でレシフェに町制を布くことに成功しオランダとは別に市議会が設けられた。その前面に市議会の権威の象徴であるペロウリーニョ（一つの石柱で市議会の決議が公示され、また罪を犯した黒奴を縛りつけて鞭打ちにした）が建てられた。同時にセバスチオン・デ・カストロ・カルダス

をレシフェの長官に任命した。それに対してオリンダのブラジル人は強硬に反対を唱え、セバスチオン・デ・カストロの長官任命の取消しをポルトガル政府に強要した。しかし一七一〇年二月五日にレシフェ市議会の創設式が挙げられた。そのためにペルナンブーコのカピタニアの司法官ルイス・デ・ヴァレンズエラとレシフェ長官との争擾を生じ、長官は暴徒に狙撃される事件がおこった。長官カストロ・カルダスは怖れをなしもバイアに逃れ、オリンダの司教ドン・マヌエル・アルヴァレス・ダ・コスタが長官代理となり、争乱の主謀者に対して特赦を發合した。

こうした状況にレシフェのポルトガル人は不満そのもので、内密に武器弾薬を整えて他からの加勢を得てのろしを挙げ、第一にオリンダの勢力者ベルナルド・ビエーラ・デ・メーロを捕縛した。オリンダの司教にはなんらの術がなかった。

オリンダのブラジル人はオランダ戦争の英雄クリストヴァン・デ・メンドンサ（アラゴアス人）を司令官としてレシフェに進軍して市街を包囲した。このオリンダのブラジル人とレシフェのポルトガル人の戦いは三カ月つづき、ペルナンブーコの新長官としてフェリス・ジョゼ・マツシャード・デ・メンドンサが着任した。そしてベル

ナルド・ビュエラ・デ・メーロと子息二人が逮捕された。マスカッテの乱はレシフェのポルトガル商人に有利の解決がされ、それを機にレシフェは隆盛に赴き、オリндаは一段と寂れることになった。

スペインの継承戦争

一八世紀はじめ、スペインとフランスがオーストリー、オランダ、イギリスと戦った。それはスペインの継承戦争といわれた。ポルトガルもイギリスの同盟国としての戦争に巻きこまれた。

ポルトガル・イギリス同盟の影響はブラジルにもおよび、ブラジルがまたしてもフランス軍の攻撃をうけた。さらにスペイン人は南部のプラタ地域に侵入してポルトガル人と戦うことになった。当時リオ・デ・ジャネイロは二度にわたってフランス艦隊に襲撃された。はじめは一七一〇年八月六日で、フランス軍は海賊ジャン・フランソア・デュクレール（一六七一〜一七一）の指揮でリオに侵攻したが、ブラジル軍に撃退された。

デュクレールは六五〇人の兵士とともに降伏し、ジェズイットの神学校に抑留されたが一七一一年三月一八日に覆面した二人の男に暗殺された。デュクレールはカン

デラリア教会に丁重に葬られた。

二度目のフランス軍の襲撃はジュゲー・トウリンを司令官とし、リオ市街に侵入して砂糖一〇〇箱と牛数十頭を掠奪した。それを積みこんだ艦船は仏領ギヤナのカインに向った。

南部ではスペイン人がコロニア・デ・サクラメントを攻撃し占領した。

ヨーロッパでスペインの継承戦争がつづいている時に、オランダのユトレシユトにおいて平和会議が開かれてポルトガルとフランス、ブラジルのポルトガルとスペインの領土問題の協議がされた。ポルトガルはユトレシユトで二つの条約に調印したが、一つは対フランス、他の一つは対スペイン問題であった。

フランスはアマゾン左岸の領地の占有を棄権してオイヤポック川をブラジルと仏領ギヤナの境界と認め、スペインはコロニア・ド・サクラメントを棄権する条約の調印であった。

メスエン条約

一七〇三年一月二七日、イギリスのポルトガル駐劄公使ジョン・メスエソ（一六五〇〜一七〇六）の提案で、

メスエソ条約が締結された。それはポルトガルと植民地は自国の工業生産を抑制して、毛織物を主とする工業製品をイギリスから輸入し、イギリスはポルトガル産の葡萄酒をフランス葡萄酒の三分の二の輸入税で輸入するという条約である。

同条約によつてイギリスはポルトガルに対して非常に優位におかれ、ポルトガルとイギリスの因果関係を生ずることになる。

バルトロメウ・ロウレンソ・デ・グスモン（一六

八五〜一七二四）

一八世紀初頭、ポルトガルで航空原理の研究をしたバルトロメウ・ロウレンソ・デ・グスモンは一六八五年にサントスに生れた。彼は一二人兄弟の一人で、郷土サントスで初等教育をうけ、ついでバイアとベレンのジェズイット神学校に学んだ。特に数学と物理に興味をもち、早くから将来の発明家たる素質を備えていた。

彼は二二才でベレンのジェズイット神学校の水道設計をし、その施工を担当した。

一七〇四年に一八才でポルトガルに渡り、コインブラ大学で法学を修めた。

大学を卒業したバルトロメウ・デ・グスモンはポルトガルの王ドン・ジョアン五世に謁見し、王室の科学顧問となった。彼はジェズイットの学僧で知られ、比類なき雄弁家であった。彼は宮廷礼拝堂の司祭も兼ねたが、ほとんど研究室に在って物理の実験に当った。特に航空原理の研究に没頭して軽気球を創案した。それは大型の風船に熱気を充満し、それに人間が乗って空間を飛ぶものであった。

バルトロメウが造り上げたのは空中を飛ぶ物体で、パッサロラ（大鳥）と呼ばれた。その第一回の試験は一七〇七年一月五日に、リスボアのプラサ・ダ・インジアでおこなわれた。当日は王ドン・ジョアン五世をはじめ、宮廷人、貴族、政府高官が列席した。

バルトロメウの操縦するパッサロラは十数メートルの高さを飛んだが、間もなく落下して炎上した。彼は別のパッサロラを製作し、第二回の試験は同年の八月八日に決行された。その試験飛行に成功したバルトロメウの名声は広まり、王の寵遇をうけたために宮廷人や高官の嫉視を買う結果となった。彼の発明したパッサロラで四万のモローロ人がポルトガルに襲来するなどの噂が流布された。

一七二〇年に彼は法学修士の学位をうけ、王立歴史科

学院の会員となった。その後バルトロメウは幾つかの別の発明をしたが社会を惑わす妖術著、潰神者として起訴され、裁判の結果投獄された。或る日に彼は牢獄を脱出してスペインのトレドに逃れたが、病を得て三九才の若さで死去した。

彼の郷土サントスのルイ・バルボーザ広場にその記念像が設けられ、詩人オラヴオ・ビラックによつて情熱の発明家バルトロメウ・デ・グスモンの劇的な生涯が謳われている。

アレシヤンデレ・デ・グスモン（一六九五―一七

五三二）

ブラジル外交官の父といわれるアレシヤンデレ・デ・グスモンは科学僧バルトロメウ・ロウレンソ・デ・グスモンの実弟で、サントスに生れてリスボアに没した。

少年期にベレンのジェズイット神学校に学び、ポルトガルに渡つて、コインブラ大学で数学と法学を専攻した。一七才でポルトガルの駐仏公使ドン・ルイス・マヌエル・グ・カマラの秘書としてパリに赴き、ソルボンヌ大学で法学を修めた。

一七二一年から七年間、ローマ法王庁にポルトガルの外

交官として駐在し、ポルトガルに帰ってはコインブラ大学の教授となった。

一七四〇年にドン・ジョアン五世の秘書官に任命され、結婚して二子を得る。

一七四六年、アレシヤンデレ・デ・グスモンの提案でブラジル南部にアソールレスから夫婦移民が入れられた。

一七五〇年二月二日のマドリード会議に活躍、コロニア・ド・サクラメントはスペイン領となり、セーテ・ポーボス・ダス・ミツソンエスのジェズイットの土民教化区はポルトガル領となる。同年七月、ドン・ジョアン五世逝去、アレシヤソデレ・デ・グスモンは宮廷を去る。ドン・ジョゼ一世が即位し、セバスチオン∴ジョゼ・デ・カルヴァーリョ・エ・メーロ（ポソバル侯）が政府首相となる。

一七五一年一月二二日の火災でアレシヤンデレ・デ・グスモンはリスボアの住宅と重要書類を焼失した。一七五三年一月三十一日、アレシヤンデレ・デ・グスモンは五八才でリスボアに死去。同年一月一日に大地震があり、リスボアの主要部分が破壊された。

ポソバル政権と植民地統治

一七五〇年のドン・ジョアン五世の逝去でドン・ジョゼ一世が即位するや、セバスチオン・ジョゼ・デ・カルヴァーリョ・エ・メーロ（ポンバル侯爵一六九九〜一七八二）を政府首相に起用した。

ポンバル侯の母方の祖父がブラジルの土人（インジア）だったためか、彼は植民地ブラジルの発展のために旧来の植民政策を改革した。ポンバル侯のブラジル植民政策の重要な変革は一七五一年にエスタード・ド・グロン・パラ・エ・マラニオンを設け、その首都をサン・ルイスからベレンに移し、また一七六三年にブラジルの首都をサルバドールからリオ・デ・ジャネイロに移すと同時に副王を任命して、ポルトガルのコンセーリョ・ウルトラマリノー（海外領評議会）直屬としたことである。

一七五五年にはグロン・パラ・エ・マラニオン貿易総合会社が設立され、更に一七五七年にペルナンブーコ・エ・パライバ会社が設けられた。この二つの会社はポルトガル政府に所属し、それぞれの地域の物産（綿、タバコ、皮革など）をポルトガルに輸出し、ヨーロッパの商品を同地域に供給するのが目的であった。

ポンバル侯はポルトガルの政治、経済、社会、教育の改革のために大鉄槌を下したので多くの反対と敵をつくった。当時ブラジルではジェズイットと農夫（植民者）

との抗争があつた。ジェズイットは宗教と教育面だけではなく、政治的にも権勢をもち、ポルトガル政府の命に服さなくなつた。そこでポンバル侯はジェズイットを退けるべく、ジェズイットがポルトガルの王の暗殺を企てていることを理由に、同教団をポルトガルとブラジルから追放したのが一七五九年である。それはポンバル旋風といわれる。

ブラジルではジェズイットの中学校や神学校に学ぶ者が多かつた関係で、ジェズイットの追放は教育面に一頓挫を采たした。必然、教育制の変改がされて別の学校を設け、新たな教師によつてジェズイットの学校とは異なる学科が取入れられた。それ以来、科学と技術教育に重きがおかれ、科学者、技師、芸術家を輩出するようになった。

ポンバル侯の政府首相在任中の一七五五年一月一日にリスボアに大地震があつて市街の大部分が破壊された。その復興をポンボル侯は短期間になし遂げて人々を驚嘆させた。

このようにポルトガルの政治経済を立直し、権勢を誇つたポンバル侯は、王ドン・ジョゼ一世の逝去で、ドーナ・マリア一世の即位と同時に政府首相を罷免され、一七八二年五月八日に病没した。

キャプテン・クツクの探検隊のリオ寄港

一八世紀のイギリスの探検航海家キャプテン・ジェームス・クツク（一七二八〜一七七九）の第二回太平洋探検の途次、リオ・デ・ジャネイロに寄港した。当時クツクの探検家のリオ入港にあたって、リオの長官はその探検隊が密輸団であるかの嫌疑を抱いて乗組員ほか二名の科学者の上陸を禁じた。クツクの通訳は『われわれの目指すのは南太平洋であって目的は科学調査である』と説明したが、リオの長官は半信半疑だったようである。そのころブラジル海域には海賊や密輸団が跳梁していたからである。

クツクの船舶の『リゾルーション』と『アドヴェンチュアー』の二隻はかつての石炭輸送船で、キング・ジョージ三世の海軍船としてはきわめて外観が振わなかった。結局上陸を許されたのはクツクと助手二名だけであった。それにしてもリオでは野菜と果物を積みこむことができた。長期の航海には敗血症を防ぐための野菜食が必要だったからである。

リオを抜錨したクツクの探検隊はケープ・ホーンを回

航して南端のフイエゴ島に短期とどまり、南極圏を探検した。つづいてイースター島、ノーフォーク島、ボーゲンビル島などを調査し、ニュージーランドとオーストラリアに着いたのが一七七四年五月であった。

クツクの探検隊が喜望峰を経由してプリマウスに帰着したのは一七七五年七月二五日で、この第二回の太平洋探検に約一千日を費やした。彼がイギリスに留った期間は一年足らずで、またしても第三回の太平洋探検が企てられた。それには『リゾルーション』と『デスカバリー』の二隻の帆船が当てられ、プリマウスを出発したのが一七七六年六月二五日である。その航海も喜望峰を通過し、南太平洋に出て幾つかの新しい島を発見した。

ハワイ群島を発見したのは一七七八年の二月である。当時ハワイ群島はサンドウィッチ島と呼ばれた。

クツクはハワイから北上してベーリング海に達し、アリューシャン列島からアラスカのユーコン河口北部の海岸を探検した。

一七七九年一月に彼は再びハワイに戻り、調査をはじめたが『デスカバリー』のボートがポリネシア土人に盗まれるという事件がおこった。それに端を発して問題が紛糾し、一七七九年二月一四月に土人群の襲撃をうけ、クツクは最後まで闘いつづけて悲壮な死を遂げた。

キャプテン・クックの太平洋探検は一七六八年から一七七九年にかけて三回にわたっている。太平洋の探検家では年代順にスペイン人のヴァスコ・ヌーネス・バルボア、世界周航で名高いポルトガル人のフェルノン・デ・マカリヤンエス、デンマーク人のヨナセン・ヴィッス・ベールリングなどが挙げられる。しかし探検の全長距離と多くの陸地を発見したことではキャプテン・クックが冠絶している。

ジェームス・クックは一七二八年一月二八日にイギリスのヨークシャー、クリーブランドのマートンに生まれた。

クックの将来を決する大きな影響を与えたのは漁業港のワイトバイであり、ここで彼は舟の操縦と航海術を学んだ。当時クックはクエーカー教派のジョン・ウォルカーという石炭輸送業者の斡旋で、ニューカッスルを基点とするバルチック・ノールウェー貿易船の船員となった。これが彼の海の男としての出発となる。一七五五年にクックは航海士の資格を得ると同時にイギリス海軍に所属し、順次に帆船『グランパス』『ガーランド』『ソルベー』の船長となった。

彼が『ソルベー』の船長だった時にカナダ探検の任務

を帯び、ケベックからセント・ロウレンスを経て海岸に通ずるチャーネルの調査に当たった。つづいて一七六二年にニューフォンドランドの海域調査をなし、一七六六年の八月にはブルジェオ島で日食の観測をした。

かくして一七六八年にイギリス海軍のアドミラルティ（海軍鎮守府）の要請で太平洋探検に当たった。クックの第一回太平洋探検には帆船『エンデヴァー』（三七〇トン）が用いられた。一七六八年八月にプリマウスを出港し一七六九年一月にタヒチ島で金星の観測をした。その後、天文学者ドムンド・ハーレーが同じタヒチ島でクックの科学調査を実証した。

一七六九年四月、クックの探検隊はタヒチ島からソサイデー島を経てニュージーランドに達し、六カ月の科学調査をした。ニュージーランドからはオーストラリアに到着し、東海岸の綿密な調査をし、大英王国の名においてオーストラリアの占有を宣した。同時にクックはオーストラリアに五〇〇〇万の人間の生存が可能であることを報告した。

クックの第二回太平洋探検には一七七二年七月一三日にプリマウスを出発した。この航海でクックはアソールスとアセンション、セント・ヘレナ島に寄港し、フェルナンド・デ・ノローニヤ島からリオに到着した。

ミナス革命の陰謀

一七世紀末から一八世紀前半のミナスは黄金景気を謳歌したが、その後は著しく金の減産を采たした。それは地表や川底の砂金採集だったためである。

ポルトガル政府はミナスの産出金に対して五分の一の現物税を課したが、一七六〇年にドン・ジョゼ一世の政府首相ボンバル侯は徴税の確実を期すべく年間一〇〇アローバ（一五〇〇キロ）の決定をした。それは当時のミナスの採金者には過重の義務で、税金の滞納者を続出した。

ドーナ・マリア一世の治世となって、ポルトガル政府はミナスの実状調査と滞納税の強制徴収のためにミナスの長官を更迭した。

クーニャ・メネゼス長官と交代してバルバセナ子爵（ルイス・アントニオ・フルタード・デ・メンドンサ）を赴任させたのが一七八八年である。バルバセナ子爵はこれに処するに冷徹で、非常に厳格な人物だったからである。当時ミナスの税金滞納額は三八四アローバ（六七六〇キロ）に達していた。その滞納税の強制取立てはデラーマ（流血）と呼ばれた。

一七二〇年のフィリッペ・ドス・サントスの処刑以来、ミナス人の間にポルトガル政府に対する反感と反乱の気運がおこりつつあった。その中心となったのがビーラ・リーカ（オーロ・プレート）で、十数名の上層知識人が革命の陰謀を企てて密会するようになった。それが次第に参加者を増して二十数名を数えたが、それらの人物を次に挙げる。

- 一、フランシスコ・パウラ・フレレー・デ・アンドラーデ（中佐）
- 二、イナシオ・デ・アルヴァレンガ・ペーシヨット（詩人、法学者）
- 三、トーマス・アントニオ・ゴンザーガ（詩人、判事）
- 四、ジョゼ・アイレス・ゴメス（大佐）
- 五、クラウジオ・マヌエル・ダ・コスタ（詩人、法学者）
- 六、ジョゼ・レゼンデ・マシエル（耕主）
- 七、ジョアキン・ジョゼ・ダ・シルバ・シャビエル（綽名はチラデンテス、元ミナス民兵竜騎兵士官）
- 八、ビセンテ・ヴィエーラ・ダ・モッタ（大尉）
- 九、ジョゼ・アルヴァレス・マシエル（学生）
- 一〇、サルバドール・グルジエル・ド・アマラル（耕主）
- 一一、フランシスコ・アントニオ・オリベラー・ロペス

(大佐)

- 一二、マヌエル・ロドリゲス・ダ・コスタ (資本家)
- 一三、ジョゼ・デ・オリベ이라・ロペス (資本家)
- 一四、ジョゼ・マルチンス・ボルジエス (耕主)
- 一五、ドミンゴス・デ・アブレウ・ヴィエーラ (中佐)
- 一六、ジョアン・ジーン・ダ・モッタ (中尉)
- 一七、ジョアン・フランシスコ・ダス・シャーガス (地主)

- 一八、ビトリアノ・ゴンサルベス・ヴェローゾ (地主)
- 一九、ジョアキン・シルベリオ・ドス・レーズ (金山主)
- 二〇、マノエル・ジョアキン・デ・ピント・レーゴ (大尉)

- 二一、ルイス・ヴィエーラ・ダ・シルバ (聖識者)
- 二二、ジョゼ・デ・オリベ이라・ロリン (聖識者)
- 二三、カルロス・デ・トレド・メーロ (聖識者)
- 二四、ジョゼ・ダ・シルバ・マッタ (聖識者)

以上のうちでフランシスコ・パウラ・フレレー・デ・ア
ンドラーデ中佐はミナス民兵竜騎兵司令官で、リオ・デ・
ジャネイロの名長官ゴーマス・フレレー・デ・アンドラー
デの甥に当る。

ジョゼ・アルヴァレス・マシエルは一七六〇年にビー

ラ・リーカに生れ、コインブラに遊学して化学を修め、パリのジョゼ・ジョアキン・ダ・マイアと交遊があつた。ルイス・ヴィエーラ・ダ・シルバ僧は一七三五年生れで、リオのジェズイット神学校で哲学と神学を学び、モントেসキウの影響を強くうけた熱血の説教師で知られた。

密会は主にフランシスコ・パウラ・フレレー・デ・アンドラーデ中佐とクラウジオ・マヌエル・ダ・コスタの私邸でおこなわれたが後にはサン・ジョゼ（現在のチラデントス）に特に密会所が設けられた。

当時ミナスとリオ・デ・ジャネイロ出身の数名の青年がパリ大学とモンペリエール大学に学んでいた。それらはジョゼ・ジョアキン・ダ・マイア、ドミンゴス・ビダル・バルボーズ、ジョゼ・マリア・レアル、ジョゼ・ペレーラ・リベローロなどである。この中でジョゼ・ジョアキン・ダ・マイアは、アメリカ合衆国の大使としてパリに駐在したトーマス・ジェファアソン（後のアメリカ第三代大統領）に面接して祖国ブラジルの実状を語り、共和国の理想を聴いた。

ジョアキン・ダ・マイアはブラジル人の留学生を組合して祖国ブラジル独立の氣勢を挙げるべく努力したが、病を得て再びブラジルの地を踏むことがなく異境に死去

した。その報がミナスに伝わるや、話し合わせたかのように独立の気運が高まっていった。



ビーラ・リーカで検挙されるミナス革命の主謀者たち

チラデントス

ミナス革命陰謀の主導者チラデントス、ジョアキン・ジョゼ・ダ・シルバ・シャビエルは一七四六年にサン・ジョアン・デルレーとサン・ジョゼの中間、ボンバル耕地に生れた。

それはリオ・ダス・モルテスの沿岸であつた。チラデントスには二人の兄と一人の弟がいたが、長兄ドミンゴスについて読み書きを習得した。二才の時に父母を失ない、行商となつてミナスを広く旅したことがミナスの地理的事情に精通するようになった。二〇代には鉱山を経営したが実績が挙げらず、齒科医の助手となつた。彼は齒

抜きが上手だったので評判になり、チラデンテス（歯抜き）の綽名がつけられた。

チラデンテスは馬匹商人となり、次いでリオに出て土木水道工事の受請もやったが、ポルトガル人の妨害で中断した。また彼はリオ・デ・ジャネイロとミナス間の運搬業にも手を出したが失敗におわった。

このようにチラデンテスは各種の職業についたが成功せず、ミナス民兵の竜騎兵士官の時が最もよかったといえる。彼は風采堂々として指導者的の風格を有し、勤勉にしてことに臨み勇敢な態度は民兵の模範となった。

チラデンテスはリオ・ミナス街道の警護社長に任命された。それはリオ・ミナス街道に野盗が跳梁していたためである。



ミナスのチラデンテス(チラデンテスの郷土)

チラデンテスには特に学問とてなかつたが独学で英語を習い、常にアメリカ合衆国の憲法をポケットに入れ、

暇があれば取出して読んでいた。彼はアメリカの独立とその共和制に憧れていたようである。

チラデンテスと十数名の同志はビーラ・リーカとサン・ジョゼに密会を重ねて革命の計画を練った。その目的はミナスに共和国を建設してサン・ジョアン・デラレーを首都とすること、ビーラ・リーカに大学建設、ブラジルの首都を内奥地に移すこと、奴隷制度の撤廃などであった。しかしミナスの新長官バルバセナ子爵によるデラーマの日を期して革命の煙火を挙げることが極秘のうち決定された。ところが、ミナス革命の陰謀は同志のジョアキン・シルベリオ・ドス・レースの裏切りのために事前に発覚した。

ジョアキン・シルベリオ・ドス・レースは金山を所有し、ポルトガル政府への二二〇コントスの税金の滞納があったので、その帳消しを交換条件にミナス革命の陰謀をバルバセナ子爵に密告したものである。

チラデンテスはリオのルア・ドス・ラトエーラス（現在のゴンサルベス・ジューアス街）の友人ドミンゴス・フェルナンデス・クルースの宅に寄寓していたが、そこで彼は捕縛された。それは一七八九年五月一〇日の早朝で太鼓の響きとともに兵隊が友人宅に進入し、『女王ドーナ・マリア一世の名において、チラデンテスことジョア

キン・ジョゼ・ダ・シルバ・シヤビエルを捕縛する』とて逮捕状をチラデンテスの面前につきつけた。チラデンテスは無言のまま手をさしのべて捕縛された。

偶然の一致か、ミナス革命の陰謀が発覚した一七八九年の七月一四日にパリのバスチュール監獄が陥落してフランス革命が勃発した。

チラデンテスほか二十余名の革命陰謀の同志はビーラ・リーカで一網打尽に検挙され、リオのグワナバラ湾の蛇島の監獄に監禁された。彼らの裁判はその後三年にわたった。

詩人法学者クラウジオ・マヌエル・ダ・コスタはビーラ・リーカの獄舎で自殺を遂げた。

裁判の結果、チラデンテスはミナス革命陰謀の全責任を一人で負い、死刑の宣告をうけた。他の者は聖職者をふくめてそれぞれアフリカに終身流刑された。

一七九二年四月二一日午前二時、リオのランパドーザ広場（現在のチラデンテス広場）の絞首台に立ったチラデンテスはパーデレの最後の祈禱をうけ、従容として死についた。

チラデンテスは三年間も獄屋に在ったために頭髮と髯が伸びて仙人のような風貌に変わっていた。

彼の最後のことばは『自分は人間が求める自由のため

に死ぬ……』であった。

チラデンテスにはインコンフイデンテ・ミネーロ（ミナスの不忠者）の汚名がつけられ、子孫三代にわたる公職追放の制裁をうけることになった。

チラデンテスの屍体は八ッ裂きにされて、リオ・ミナス街道とビーラ・リーカに晒された。それが却てブラジル人を刺戟し、独立の気運がもり立てられることになった。

トーマス・アントニオ・ゴンザーガ（一七四四～

一八一二）

法学者詩人トーマス・アントニオ・ゴンザーガはポルトガルのポルトに生れ、少年期に父母とともにブラジルに移住した。彼の父ジョアン・ベルナルデス・アゼヴェド・ゴンザーガはポルトガル人で、母トマジア・イザベルはイギリス人であった。

トーマス・ゴンザーガはポルトガルのコインブラ大学で法学を修め、ブラジルに帰国してビーラ・リーカ（オーロ・プレート）の判事となり、同じく法学者詩人のクラウジオ・マヌエル・ダ・コスタと親しく交遊をもった。

当時のトーマス・ゴンザーガは四〇代の独身で、一九

才の乙女マリア・ドロテア・ジョアキナ・デ・セーシャスと識り合つて熱烈な恋愛をつづけ、婚約した。そのころのトーマス・ゴンサーガはチラデントスを主導者とするミナス革命の陰謀に参画して度々の密会に出席していた。

遂にその革命の陰謀は発覚して主謀者は捕縛され、裁判の結果トーマス・ゴツザーガはアフリカのモザンビークに終身流刑された。それは一七九二年五月である。

彼はモザンビークでポルトガル人の商人アレシヤンデレ・ロベルト・マスカレーニヤスの知遇を得、その娘ジュリアナと結婚した。その結婚生活は幸福ではなく、トーマス・ゴンサーガはビーラ・リーカに残した婚約者マリア・ドロテアを思いつづけ、『マリリア・デ・ジルセウ』の詩集を書いた。マリア・ドロテアはマリリア・デ・ジルセウと呼ばれていたからである。

トーマス・ゴンザーガは終身流刑が一〇年に減刑されたが彼はブラジルに帰る意思もなく、一八二一年に六六才でモザンビークに死去した。

クラウジオ・マヌエル・ダ・コスタ（一七二〇〜

法学者詩人クラウジオ・マヌエル・ダ・コスタはミナスのマリアナに生れ、ミナス革命の陰謀に加担したかどで逮捕され、獄舎で自殺を遂げた。

クラウジオ・マヌエル・ダ・コスタはリオのジェズイット神学校に学び、次いでポルトガルに渡り、コインブラ大学で法学を専攻した。彼はコインブラ在学中に詩集を出版した。

ブラジルに帰国後も彼は詩作をつづけてミナス派詩壇を飾った。彼の詩集は六冊あるが一七七三年に書かれた『ビーラ・リーカ』が多くの人に読まれた。

クラウジオ・マヌエルの妻は非常な愛郷者で、ミナス革命の企てに共鳴し、『自由、平等、友愛』の頭文字を配した革命旗を考案したほどである。

バイアの反乱陰謀

一八世紀末にはフランス革命にはじまり、南アメリカの各地に革命や反乱を生じた。

ブラジルではミナス革命の陰謀発覚の後、一八九八年にバイアの反乱陰謀があった。

ミナス革命の主導者は上層知識人だったがバイアの反乱陰謀は半黒の下層民が大部分を占めていたのが特徴を

なしている。

このバイアの反乱陰謀はコンジュラソン・バイアーナまたはコンジュラソン・ドス・アルファイアデス（仕立師の反乱陰謀）ともいわれ、フランス革命の影響をうけていた。したがって社会革命の性格を帯び、自由、平等、友愛を標榜し、奴隷解放と階級差別の撤廃を唱えるものであった。

ところでバイアの反乱陰謀の直前、一七九七年に薬剤士ファイゲレード・デ・メーロによって『カヴァリエーロ・ダス・ルス』（光の紳士会）という結社が発足した。それは啓蒙と社会向上運動である点においてマソナリア（秘密結社）に似ていた。同結社には著名人のシプリアノ・ジョゼ・バラータ・デ・アルメーダをはじめアゴスチーニョ・ゴームス僧、フランシスコ・モニス・パレット、ジョゼ・デ・オリベーラ・ボルジエスなどの知識人とカルメリッタ派の僧侶ダニエル・ダ・シルバ・リスボア、エルモジェネス・デ・アギラール・パントージャ中尉が参加していた。

このようなバイアの社会的雰囲気は黒人系の下層民が生活苦のために『われらに機会と食を与えよ』を叫んで反乱を画した。それを援助したのが「光の紳士会」である。

バイアの反乱陰謀の中心人物にはルイス・ゴンザーガ・ダス・ヴィルジェンス（民兵三六才）、ジョアン・デ・デウス・ナツシメント（仕立師二七才）、マヌエル・ファウスチーノ・ドス・サントス（仕立師二三才）、ルカス・ダントス・デ・アモリン・トーレス（民兵二四才）がいた。この四人はいずれも半黒であった。

一七九八年八月一二日、サルバドールの教会の壁や広場に掲示がされた。それは自由と平等のためにバイア政府を打倒して新しいバイア共和国の建設を唱えるものであった。

バイアの長官ドン・フェルナンド・ジョゼ・デ・ポルトガルは反乱陰謀の主導者が誰であるかが不明のためにその検索を命じた。

それが民兵大尉ジョアキン・ジョゼ・デ・サンタアナの密告によって、最初に捕縛されたのがルイス・ゴンザーガ・ダス・ヴィルジェンス、ジョアン・デ・デウス・ナツシメント、マヌエル・ファウスチーノ・ドス・サントス、ルカス・ダントス・デ・アモリン・トーレスであった。この四人は裁判も経ずして処刑された。他の者はトードス・オス・サントス湾周辺の砂糖農園に逃れたが、そのほとんどが捕縛されて処刑或いはアフリカに流刑された。

反乱援助者のシプリアノ・バラータ・デ・アルメーダ、アゴスチーニョ・ゴームス僧、フランシスコ・モニス・パレット、ジョゼ・デ・オリベ이라・ボルジエスなどは一応は検挙されたが、裁判ともならず釈放された。

シプリアノ・ジョゼ・バラータ・デ・アルメーダ
(一七六二〜一八三八)

シプリアノ・バラータ・デ・アルメーダはバイアのサルバドールに生れ、リオ・グランデ・ド・ノルテのナタルに没した。

彼はコインブラ大学で哲学と医学を修め、ブラジルに帰国しては郷土バイアの貧民救済につくして非常な人気があつた。一八一八年のバイアの反乱陰謀の連座で逮捕されたが、彼の人気高く直ちに釈放された。

一八二一年に彼はブラジル代表議員としてリスボアの議会で、ブラジルの自治権を主張し、議場混乱のためにイギリスに逃れて帰国した。その後の彼はレシフェに住し、新聞人として活躍した。彼が主に執筆したのは「ガゼッタ・デ・ペルナンブーコ」である。

一八二三年には国会議員に選ばれ、憲法起草委員の一人となつたが、ドン・ペードロ一世による議会解散のた

めに郷土に引上げた。

晩年のシプリアノ・バラータ・デ・アルメーダはナタルに住み、長年の自由主義著としての闘いに疲れ果て、病を得て死去した。

第七章 ポルトガル王室の移転

ポルトガル王室の移転

フランス革命の影響で、風雲児ナポレオン・ボナパルテが現われ、小市民階級の支持のもとに外国の干渉を避けて新フランスを建設し、コンサルに就任して政権を掌握した。

一八〇五年にオーストリーはイギリスと同盟を結んだためにナポレオン軍に攻撃されることになる。後にナポレオンはオーストリーのフランシスコ一世の王女マリア・ルイザと結婚して政略的に優位におかれる。当時スペインはフランス側につき、ポルトガルは中立を守って

イギリスとの友好関係を持続した。

一八〇五年一〇月二一日のトラファルガーの海戦でフランス艦隊がネルソン提督のイギリス艦隊に撃破され、イギリス本土襲撃が不可能となったナポレオンは方向を転じてイギリスの同盟国プロシアとオーストリーに矛右向け、アウステルリッツの戦闘で勝利を得た。

プロシアを破ったナポレオンはベルリンに入城してイギリスに対する大陸封鎖を公布し、ヨーロッパの諸国にそれぞれの港を閉鎖することを強制した。

ポルトガルの摂政ドン・ジョアンはイギリスとの伝統的友好関係を持続すべきか、ナポレオンの命に屈すべかに逡巡した。

ドン・ジョアンは母ドーナ・マリア一世が精神病のため一七九二年以来摂政の任にあった。

一八〇七年一〇月二七日にナポレオンはフォンテンブロウにおいてスペインとの条約を結んだが、それにはポルトガルがフランスに加盟せぬ場合は、ポルトガル本土と植民地ブラジルはフランスとスペインに分割される各項があった。その最後の通牒はポルトガル王室を震撼させた。時を同じくしてアンドシェ・ジュノー大將に率いられる二万五〇〇〇のフランス軍はポルトガルに向って進軍しつつあった。そこでリスボア駐在のイギリス公使

ストラングフォード卿は、ドン・ジョアンに王室を植民地ブラジルに移すことを提言した。

その時リスボアの港外にはイギリス艦隊が待機し、もしドン・ジョアンがフランスに加盟する場合はリスボアを艦砲射撃する体制を整えていた。

ドン・ジョアンはブラジルへの逃避を決意し、三日間に移転準備をしたことはヨーロッパの歴史に空前絶後のことである。そのブラジル移住団は一万五〇〇〇人で王族、貴族、政府高官、官僚、軍人、陸海軍兵学校の教官と学生それらの家族から成り、三〇隻の船舶に分乗した。一八〇七年一月二九日午後、イギリス公使ストラングフォード卿は帆船『メドーザ』に國務大臣アントニオ・デ・アラウージョ・アゼヴェド（バルカ伯爵）を訪れて航海中の打合せをした。同時にシドニー・スマイス提督はナウー船『プリンシペ・レアル』のドン・ジョアンにいんぎんに別れの挨拶をし、イギリスの護衛艦隊に出発の命令を發した。

このポルトガル王室のブラジル移住に対するイギリスの配慮は後日まで紐をひき、ポルトガルの多大の負担となる。ブラジルの場合は本家ポルトガルがイギリスからうけた恩恵の代償というか、後遺症を継がされる破目となるのである。

イギリス艦隊に護衛されたブラジル移住船団がリスボアを出発した直後に、ジュノー大将のフランス軍が難渋の行軍をつづけてリスボアに侵入した。フランス軍の到着が予定よりも後れたのは、ポルトガルとスペイン国境の橋が破壊され迂回路を経たためである。

フランス軍がテージョ河港に着いた時にはブラジル移住船団が遥か水平線上に没せんとしていた。ジュノー大将が歯を食いしばって憤怒した様が見えるようである。

ブラジル移住のドン・ジョアンの家族を次に挙げる。

摂政ドン・ジョアン（四〇才）

ドーナ・マリア一世（ドン・ジョアンの母・七三才）

ドーナ・カルロッタ・ジョアキナ（ドン・ジョアンの妻。

スペインのカルロス四世の息女・三三才）

ドン・ペードロ・カルロス（ドン・ジョアンの甥・二〇才）

マリア・テレザ（ドン・ジョアンの長女・一四才）

ドン・ペードロ（長男・一〇才）

マリア・イザベル（二女・九才）

マリア・フランシスカ（三女・八才）

イザベル・マリア（四女・七才）

ドン・ミゲル（二男・六才）

マリア・アスンソン（五女・二才）
アンナ。ジェズス（六女・一才）

ドン・ジョアンに随伴した主な政治家は次の人達である。

ドン・フェルナンド・デ・ポルトガル（アギアール公爵）
ドン・ロドリゴ・ソーザ・コウチニョ（リニャールレス伯爵）

アントニオ・デ・アラウージョ・アゼヴェド（バルカ伯爵）

トーマス・、アントニオ・デ・ビラノーバ（アナジア子爵）

一万五〇〇〇人の大勢が三〇隻の船舶に分乗したために不自由と混雑は推して知るべしである。食料と用水は欠乏し、不潔で船内にノミやシラミがわく状態となった。ドン・ジョアンは風呂嫌いだったので、水不足のために風呂に入れないことは苦痛ではなかったが好物のニワトリが食卓に出ないのが不満であった。彼は大食家で毎日ニワトリを二羽食べていた。

このような窮屈きわまる航海をつづけ、リスボア出発から五二日を経て、一八〇八年一月二二日にバイアのサ

ルバドールに到着した。当日は暴風で海が荒れていたの
で一行の上陸は翌二三日の午後となった。

サルバドールに上陸したドン・ジョアンは群衆の歓呼
のうちに、バイアの司教の前に膝まじいて感謝の祈りを
した。彼はブラジルに上陸第一歩を印して、ここにはナ
ポレオンの脅威もイギリスの圧迫もないことを感じた。

ドン・ジョアンはサルバドールに留るあいだ、一八〇
八年一月二八日に政治家経済学者ジョゼ・ダ・シルバ・
リスボア（カイル子爵）の提案によつてブラジルを友
好国に対して開港した。友好国とはイギリスを意味し、
ブラジルは三〇〇年の植民期をとおして鎖国されていた
のである。



ドン・ジョアン六世

ドン・ジョアンがサルバドールに在る時、リオ・デ・
ジャネイロでは街路を清掃し、広場の除草をするなど大

騒ぎである。リオ市民がドン・ジョアン一行を迎えるための準備で大狼狽の中で、ブラジル最後の副王ドン・マルコス・デ・ノローニャ・エ・ブリト（アルコス伯爵）は困惑の面持ちでつぶやいた。『摂政殿下が一万六〇〇〇人を率いて来られる。その人達の住居はどうするのか』。

ドン・ジョアン一行のリオ到着は一八〇八年三月八日で、当日は要塞砲が轟き、グワナバラ湾に碇泊する艦船は満艦色をもって摂政を迎えた。

リオの市街は美しく飾り立てられ教会の鐘は鳴り響いて摂政王子の歓迎一色を呈した。ドン・ジョアンと家族はリオの旧埠頭から上陸し、市民が花を投げつつ歓呼する中を満面に微笑みをうかべて歩を進めた。

リオでのドン・ジョアン歓迎のお祭りは四日つづいた。

しかしドン・ジョアンは真先きに住宅問題に悩まされた。ドン・ジョアンはポルトガル人の豪商アントニオ・ユリアス・ローペスからサン・クリストヴァンのキンタ・ダ・ボアビスタ荘園の提供をうけ、それに王居を構えた。彼は他の移住家族のために住宅の提供をリオ市民に訴え、或るものは接收した。中にはそれを名誉として自発的に住宅を提供した者がある。ドン・ジョアンはそれらの家屋の入口にPRの印を付した。それはプリンシペ・レアール（摂政王子）の略字であった。ところが時を経るにつ

れて住宅を提供した人々に後悔と不満を生じ、PRの略字はポーニャ・セ・ア・ルア（外に追い出せ）とプレジオ・ロウバード（盗まれた家屋）にかわった。このようにポルトガル王室のリオ移転はものすごい住宅払底を采たした。

ドン・ジョアン六世

ポルトガルの第二七代王ドン・ジョアン六世は一七六七年五月一三日にリスボアに誕生した。父はドン・ペードロ三世、母はドーナ・マリア一世で、長兄ドン・ジョゼの死によって王位継承者となった。

一七九二年、母ドーナ・マリア一世の精神病のために摂政となり、一八一六年の母の逝去で、一八一八年にポルトガル連合王国の王に即位し、ドン・ジョアン六世となった。

ドン・ジョアンは一七才でスペインのカルロス四世の息女カルロッタ・ジョアキナと結婚した。当時のカルロッタ・ジョアキナは一〇才であった。

ドン・ジョアン夫妻は九人の子を得たが、長男ドン・ペードロが後のブラジルの皇帝ドン・ペードロ一世である。

ドン・ジョアンは、ポルトガル王室をリオ・デ・ジャネイロに移すと同時に一七八五年一月五日付のドーナ・マリア一世の法令を無効としてブラジルの工業を解禁した。それまでポルトガルとブラジルはイギリスとの通商協定によって印刷工場をはじめ一切の工業が禁じられていた。

またドン・ジョアンは一八〇八年五月一日にフランスに対して宣戦布告し、仏領ギヤナに派兵して首都カインを占領した。当時マヌエル・マルケス・エルバス中佐に率いられる五〇〇〇人の部隊はカインに進軍し、数日にわたる戦闘で陥落させたのが一八〇九年一月二二日である。カインの総督には判事ジョアン・セヴェリアノ・マシエル・ダ・コスタが任命され、当のフランス人が賞讃するほどの良政を布いた。仏領ギヤナはナポレオン戦争の終俣後のウィーン会議により、一八一七年にフランスに返還された。

一八〇八年九月一〇日には新聞『ガゼッタ・ド・リオ・デ・ジャネイロ』が発刊された。それ以来九月一〇日はブラジルの『新聞の日』となった。

ドン・ジョアンはリオに植物園、天文台、図書館、美術学校、陸海軍兵学校、外科病院、ブラジル銀行を設立した。そのほかドン・ジョアンによって創始されたもの

は多く、リオは政治文化の中心として著しく発展した。

一八一〇年二月二九日にリオにおいてドン・ジョアンとイギリス公使ストラングフォード卿との間に重要な協定が調印された。それは互惠同盟条約ともいふべきもので、イギリスがポントガル本土に駐留するフランス軍の追放を約束し、その交換条件としてブラジルに輸入されるイギリス商品の関税を一般外国商品に対する二四パーセントから一五パーセントに引き下げることで、イギリスは非常に優位におかれた。またブラジル在住のイギリス人には他の外国人にない特権が与えられた。そのためにもリオには多くのイギリス船舶が出入し、あたかもイギリスの港のような観を呈した。

ポルトガル本土にはダリンプル大將を司令官に三万のイギリス軍が上陸し、スペイン国境の戦場でフランス軍を駆逐した。

一八一五年六月一日、ナポレオンはワータルローの戦いでウェリントン公のイギリス軍に敗れてセント・ヘレナ島に流刑され、ナポレオン戦争は終熄した。

ブラジルでは一八一五年二月一六日付法令により、ブラジルはポルトガル連合王国として旧カピタニアはプロピンシア（県）に改められ、それぞれのプロピンシア長官はポルトガルの地方長官と同様の権能を帯びることに

なった。

一八一六年三月二〇日にドーナ・マリア一世が逝去し、ドン・ジョアンは一八一八年二月六日に即位してドン・ジョアン六世を名乗った。即位が遅延した理由はペルナンブーコに共和革命がおこり、その討伐に一年余を要したことにある。

同じく一八一六年にジョアキン・レブレトンを団長とするフランス美術使節を招聘したことがリオの著しい文化開発を促がした。この美術使節には有名な歴史画家ジャン・バチスト・デプレーとアントアン・トウネーが参加していた。

一八一七年一月、ドン・ジョアンはプロビンシア・デ・シスプラチナ（後のバンダ・オリエンタル・ド・ウルグワイ）に出兵し、占領した。カルロス・フレデリコ・レコール大将（一七六四～一八三六）を司令官とするブラジル軍がモンテビデオに入城したのは一八一七年一月二〇日である。

一八一九年にはリオ・デ・ジャネイロ県のノーバ・フリブルゴにスイス移民を導入して最初のヨーロッパ移民村を設けた。

支那のクーリー移民を入れて茶栽培をはじめたのもドン・ジョアンである。

他方、ポルトガルではフランス軍を追放したイギリス軍はそのまま引揚げもせず、恰も占領軍の形で駐留し、ポルトガルの行政権をもつまでになった。

リスボアはドン・ジョアンのブラジル亡命以来、王不在の状態となり、しかもナポレオン戦争による荒廃、商業の不振、イギリス駐留軍の施政に対する不満などが原因してポルトで反乱が企てられた。それはポルトの判事マヌエル・フェルナンデス・トーマスを主導者とし、十数名の秘密結社員によるもので、実業家、地主のほか三名の軍人が参加していた。

一八一九年三月、イギリスのポルトガル駐留軍司令官ウイリアム・カー大将（ベレスフォード卿）はポルトガルの実状を伝え、善後策を講ずるためにブラジルのドン・ジョアンを訪れた。そのウイリアム・カー大将の不在中にセバスチオン・カプレーラ大佐の軍隊はリスボアの議会を占領し、一五名の代表者によってポルトガル王国臨時政府を組織し、憲法が起草されることになった。それより一カ月後にウイリアム・カー大将はブラジルから帰着した。彼は事態の成行きから抵抗を示さず、駐留軍を率いてイギリスに引揚げたのでポルトの革命は成功した。その報がリオに伝わったのは一八一九年一〇月一二日である。

ポルトに勃発した革命は自由革命または憲法革命といわれた。それはドン・ジョアンにポルトガルへの帰還を促がし、立憲政体を要望しておこった革命だからである。

ドン・ジョアンは長男ドン・ペードロをポルトガルに差向けて、彼自らはブラジルに留る意向であつた。ところがポルトガルから臨時外相のパルメラ伯爵がリオを訪れ、その諫言に動かされてドン・ジョアンはポルトガルへの帰還を決意した。

ドン・ジョアンのポルトガルへの引揚げが伝わるや、政府要人の間にリスボアとリオのいずれがポルトガル連合王国の首都たるや、国会は何処に設けられるかの議論がわいた。

ドン・ジョアンはブラジルに住むこと一三年、その間に長男ドン・ペードロがオーストリーの王女マリア・レオポルジナと結婚して既に長女マリア・ダ・グロリア（後のポルトガルの女王ドーナ・マリア二世）が生れていた。ドン・ジョアン自らが植えた植物園の木はすすくすく伸びて大樹となっていた。一八〇八年のリオの人口は六万だったが、一八二〇年には一五万に達した。ドン・ジョアンはブラジルに深い愛情をもち、特にリオを好んだ。彼にはポルトガルへの帰国の意志はまったくなく、いつまでもブラジルに住みたかった。しかしポルトガルの政

治社会事情は彼をして帰国を余儀なくした。

一八二一年四月二二日、ドン・ジョアンは長男ドン・ペードロを摂政に任じてブラジルの統治権を委ねた。その時のドン・ジョアン曰く、『ペードロよ、もしブラジルがポルトガルから離脱する場合は他の野心家によらずして汝によってされることを希う』

ドン・ジョアンは一八二一年四月二六日に四〇〇〇人を伴ってポルトガルに去ったが、出立に当り、国庫から五〇〇万クルザード相当の金とダイヤモンドを持出した。彼には愛するブラジルながらも背に腹は代えられぬものがあつた。

一八〇八年三月に彼がリオに到着した時とは異なり、送別の宴も催されず、少数の市民が埠頭に見送つたにすぎない。

一三年ぶりにポルトガルに上陸して喜んだのはドーナ・カルロッタ・ジョアキナであつた。彼女は穿いていた靴を脱ぎ『ブラジルの土を踏んだ靴とはこれでお別れだ』とて海に投げ捨てた。それとは対照的にドン・ジョアンは眼に涙を湛えていた。

ポルトガルの女王ドーナ・マリア一世は一七三四年にリスボアに生れ、一八一六年、リオ・デ・ジャネイロに逝去した。

父はドン・ジョゼ一世、母はドーナ・マリア・ビトリアで、一七七七年に父王の死によって王位につき、直ちにドン・ジョゼ以来の政府首相ポソバル侯（セバスチオン・ジョゼ・デ・カルヴァーリオ・エ・メーロ）を罷免した。

ドーナ・マリアは叔父ドン・ペードロ三世と結婚したが、夫は一七八六年に死去した。

それから二年後にドーナ・マリアの長男ドン・ジョゼが死亡した。そのころからドーナ・マリアに精神病の徴が現われ、それが次第に昂じたために二男のドン・ジョアン（後のドン・ジョアン六世）が摂政となった。

ドーナ・マリア一世はポルトガルの王位に在った一五年間に王立科学院、王立海軍兵学校、慈善産院カーザ・ピア、王立図書館を設立した。またブラジルからポルトガルに遊学したジョゼ・ポニファシオ、アレシヤンデレ・ロドリゲス・フェレーラ、マヌエル・ガルヴオン・ダ・シルバ、ジョゼ・ジョアン・デ・ソーサに命じてヨーロッパ各国の科学調査（主に地質鉱物）に当らせた。

一八〇七年十一月、ナポレオン軍のポルトガル攻撃を

避けて、ドン・ジョアンは王室をブラジルに移したが、当時のドーナ・マリア一世は七三才であった。

ドーナ・マリア一世はブラジルに八年をすごし一八二八年三月二〇日、リオに逝去してアジューダ修道院に葬られた。後にリスボアのエストレラ教会に移葬された。

ドン・ロドリゴ・アントニオ・デ・ソーザ・コウ

チーニョ（リニャーレス伯爵一七五五〜一八一二）

外交官、政治家リニャーレス伯爵はポルトガルのシヤーベスに誕生、ドン・ジョアン（六世）とともにブラジルに移住するまでは外交官としてヨーロッパ各国に駐在した。

一七九五年、彼は海相に就任、ドン・ジョアンがリオにポルトガル連合王国の政府を設けてからは外相となった。

リニャーレス伯爵は陸軍兵学校の設立を提案し、一八一一年一〇月に開校された。

また彼の提案で陸軍最高裁判所、陸軍文書局（アルキボ・ミリタール）、科学博物館『カーザ・ド・トレン』、竜騎兵団が設けられた。ほかにロドリゴ・デ・フレータス所有の農園を接收して火薬工場が設置された。

リニャーレス伯爵は五七才でリオに死去し、サント・

アントニオ修道院に葬られた。

ドン・アントニオ・デ・アラウージョ・アゼヴェ
ド（バルカ伯爵一七五四〜一八一七）

外交官、政治家ドン・アントニオ・デ・アラウージョ・アゼヴェドはポルトガルのポント・デ・リーマ出身で、リオ・デ・ジャネイロに死去した。

彼はコインブラ大学に学び、ポルトガルの特命全権公使としてローマ、サン・ペトログラード、パリに駐在した。

一八〇八年に摂政ドン・ジョアンとともにナポレオン軍の侵略を避けてブラジルに移住したが、彼はパリ駐在中にクレラン公と親交があったためか、埠頭で民衆から石を投げられたりした。

アントニオ・デ・アラウージョはリスボアから沢山の図書を持参したが、それがリオの国立図書館に収められた。

彼は植物を愛好し、多くの植物を南洋から取入れて植物園をつくった。また彼の提案でフランスの美術使節が招聘され、美術学校が設立された。

新聞『ガゼッタ・ド・リオ・デ・ジャネイロ』が創刊

されたのもアントニオ・デ・アラウージョの提言によるものである。

リオのルア・ド・パセーオに建てられた彼の邸宅は後に官報局となった。

リオに設けられた文化施設のほとんどはバルカ伯爵の創意による。

彼は痛風に患り、一八一七年六月一三日に死去し、サン・フランシスコ・パウラ教会に葬られた。

ジョゼ・ダ・シルバ・リスボア（一七五六〜一八

三五）

ジョゼ・ダ・シルバ・リスボア（カイルー子爵）は一七五六年七月一六日にバイアのサルバドールに生れた。父はポルトガル人で母は生粋のバイア人であった。

彼は八才にしてカルメリッタ派の僧侶についてラテン語を学び、その後は数年間にイギリス、フランス、イタリア、ギリシャ、ヘブライ語を習得した。このように各国語に通じ原書によってあらゆる学科を学んだことが彼をして博学者たらしめた。彼は経済学者だが法学、哲学者でもあり、あわせて傑れた政治的才覚を有し、新聞人、著述家としても知られた。

ジョゼ・ダ・シルバ・リスボアは一八才でポルトガルのコインブラ大学に入学して哲学と法学を修めた。大学を卒業した彼は祖国ブラジルに帰ったが、感ずるところあつて再びポルトガルに渡つて十数年をすごした。その間イギリスを訪れ、アダム・スミスの自由経済論の研究に當つた。後に彼はアダム・スミスの”国富論”(THE WEALTH OF NATIONS)をポルトガル語に訳した。

一七九七年にブラジルに帰つた彼はバイアの農務局長となつたが、それが官職についた最初である。やがて摂政ドン・ジョアンがポルトガル王室をブラジルに移すや、ジョゼ・ダ・シルバ・リスボアの提言によつてブラジルの開港が実現された。

彼はドン・ジョアンの要望でリオ・デ・ジャネイロに移転して政府の枢要の職につき、多くの著述をした。それは商品経済、社会経済学、金融論などである。また彼の新聞人としての功績も多大であり、幾つかの新聞を主宰した。

ジョゼ・ダ・シルバ・リスボアは猫背で風采があがらず、しかも神経質な一徹者だったために一般人と相容れないところがあつた。したがつて彼は変人として世間から敬遠され一八三五年八月二〇日に七九才で他界した。

彼の誕生日の七月一六日はブラジルの『商業の日』と

なっている。

開港後のブラジルの貿易

一八〇八年、摂政ドン・ジョアンによるブラジルの開港後の貿易は顕著の進歩を見た。次に年度別の外国船舶のリオ入港を示す。

年度	ポルトガル船舶	他国の船舶
一八〇五	八一〇	
一八〇六	六四二	
一八〇七	七七九	
一八〇八	七六五	九〇
一八一〇	一二一四	四二二
一八一九	一三一三	三四〇
一八二〇	一三一一	三五四

ポルトガルからの輸入品目は乾鱈、葡萄酒、塩、小麦粉、オリーブ油、酢が主で、イギリスからは織物（毛織物と綿布）、鉄、陶器、銃、鉛、亜鉛、靴であり、フランスからは家具、香水、酒類、薬、絵画など。オランダか

らは硝子と紙、オーストリーからは時計、猟銃、ドイツからは加里、上質皮革、家具。

ブラジルからの輸出品目は砂糖、綿、コーヒー、煙草、皮革、甘蔗酒、カカオ、乾肉、パウ・ブラジル、木材、薬用草根（主にイペカクアソニヤ）。

同期間のブラジル対ポルトガルの貿易額を次に挙げる。

年度 対ポルトガル輸出 ポルトガルよりの輸入
(単位ミルレース)

一八〇八	546,800	1,510,800
一八〇九	4,819,200	3,437,600
一八一〇	3,683,200	2,932,400
一八一一	3,663,200	2,792,400
一八一二	3,987,600	2,463,600
一八一三	4,797,400	3,587,200
一八一四	7,005,600	6,691,200
一八一五	9,059,200	8,233,600

フランス美術使節

國務大臣バルカ伯爵(アントニオ・デ・アラウージョ・エ・アゼヴェド)の提言によって、ドン・ジョアン六世

がフランス美術使節を招聘したのが一八一六年三月一六日である。

同美術使節はジョアキン・レブレトンを団長とし、次の芸術家で構成されていた。

ジャン・バチスト・デプレー（歴史画家）

ニコラウ・アントアン・トウネー（風景画家）

アウギュスト・マリア・トウネー（彫刻家）

ビトリオ・グランジャン・デ・モンチニー（建築設計家）

シモン・ブラジュー（彫金師）

フランシスコ・オヴィデ（機械学教授）

フランス美術使節の来伯を機会にリオに国立美術学校が設けられ、団長レブレトンが初代校長に任命された。またニコラウ・アントアン・トウネーが絵画教師となった。

一八一九年に校長レブレトンが死去し、同年ニコラウ・アントアン・トウネーの弟アウギュストも病死した。ニコラウ・アントアンはフランスに帰国するに当って子息二人（兄フェリス・エミール、弟アマド・アドリアノ）をブラジルに残した。

その子息二人のうち、アマド・アドリアノは一八二八年にラングスドルフ男爵のアマゾン探検に参加し、北

マット・グロツソのグワポレ川で溺死した。

兄フェリス・エミールは一八三四年から一八五一年まで国立美術学校の校長となり、その間皇帝ドン・ペードロ二世の家庭教師をつとめた。彼はリオの都市計画にも参画し、チジュカの森の保護に尽した。当時彼はチジュカの森に住み、森林の一木一草に愛情を注いだ。彼はそれらの功績によって男爵に叙された。チジュカの森にはかつての彼の住家が保存され、トウネーの滝とともに有名である。

画家フェリス・エミール・トウネーがブラジルのトウネー家の根幹をなし、子息アルフレド・デスクラノレ・トウネーが著名の文学者トウネー子爵である。またトウネー子爵が不世出の史家アフォンソ・デ・トウネーの父であり、エコラウ・アントアン・トウネーから四代にわたる芸術と文学家系であることはブラジルに稀有の例である。

ジャン・バチスト・デプレー（一七六八〜一八四八）

フランスの歴史画家、パリに生れて同市に死去した。一八二八年にジョアキン・レブレトンを団長とするフラ

ンス美術使節に参加してブラジルを訪れ、一五年をすごした。その間沢山の歴史画を描いた。ドン・ジョアン六世の肖像画が多く、ドン・ペードロ一世の即位式とマリ
ア・レオポルジナ妃（ドン・ペードロ一世の皇后）のリオ上陸を描いたものが有名であり、リオの国立美術館に秘蔵されている。

テプレーはリオ美術校の絵画教師となり画家アラウー
ジョ・デ・ポルト・アレグレやシンプリシオ・デ・サー
を育てた。

デプレーの著書『ブラジル景勝地の旅』には多くの彼のスケッチ（風景と風俗画）が挿入され、一八三四年にパリで出版されてベストセラーとなった。外国人の画家でデプレーほどブラジル人に親しまれているものはなく、彼の画帖はブラジルで数十版を重ねている。デプレーはドン・ペードロ一世の退位の一八三一年にフランスに帰還した。

ビトリオ・グランジャン・デ・モンチニー（一七

七六〜一八五〇）

建築設計家グランジャン・デ・モンチニーはパリに生れてリオ・デ・ジャネイロに死去した。

モンチニトはフランスで幾度か建築設計で入賞している。一七九九年からローマに住み、フロレンスのメジシー宮の修築を担当した。一八一〇年にはジェロニモ・ボナパルテの要請でカッセル宮の修復と凱旋門、噴水の建設に当たった。

一八一六年にフランス美術使節に参加して来伯し、美術学校の教授となった。

ドン・ペードロと結婚したオーストリーの王女マリア・レオポルジナのリオ到着には歓迎門を建設した。ほかにモンチニーはリオの国立美術院、コメルシオ広場の証券取引所、ガヴェアのフランシスコ・ジョアキン・ビツテンコウの邸宅（現在のリオ・デ・ジャネイロ・カトリック大学）の設計をした。

モンチニーはエステーロ・インペリオ（帝政型）の権威で、それに用いる煉瓦工場を設けた。それにリオのオラリア区の名称を発している。

モンチニーは常に頑健そのものでかつて臥床したこともなかったが、七四才でカルナバル（イソツルード）の見物に出かけて人群にまざれこまれ、水をかけられて風邪をひいた。それが原因で肺炎を併発して死去した。

グランジャン・デ・モンチニーはフランスからリオに渡って以来、リオに住みつづけて死んだのである。彼の

希いによってサント・アントニオ修道院に葬られた。

彼はイタリアとブラジルの建築に関する数冊の著書を残した。

科学者文化人ヘルクレス・フロレンセ（一八〇四～
一八七九）

ブラジルに永住した著名の外国人で、この国を祖国以上に愛しつづけたものは少なくないが、ヘルクレス・フロレンセがその一人である。彼のような幅広い知識人は稀だが、土木技師、地理、人類、民族、博物学者に加え、画家、音楽家、新聞人で、しかも旅行家であった。

またヘルクレス・フロレンセは写真の原理研究に当たるところから、カメラの発明家の一人として新しい百科辞典に載っている。

ヘルクレス・フロレンセは一八〇四年二月に南仏のニースに生れ、大学卒業直後ブラジルに移住した。はじめ彼はリオのフランス人ピエル・プランシエーの経営する印刷工場で働いた。ピエル・プランシエーはリオの大新聞『ジヨルナル・ド・コメルシオ』の創立者である。

ヘルクレス・フロレンセは一八二五年から一八二九年にかけて、ロシアの駐伯領事ラングスドルフ男爵のアマ

ゾン科学探検に博物標本図の画家として参加した。後に彼はこの探検記を書き、『チエテからアマゾンの河川旅行』の表題で出版した。同書は史家トウネー子爵によって葡訳された。

本の表題の示すとおり、河川航路によるアマゾンの科学調査旅行で、ヘルクレス・フロレンセのスケッチ（風景と風俗面）が挿入されていて興味深い。

この探検にはフランス美術使節の一人だった画家ニコラウ・アントアン・トウネーの二男アドリアノ・トウネーも参加していたが、グワポレ川の激流に吞まれて溺死した。

ヘルクレス・フロレンセが最も長く住んだのはサンパウロのカンピーナスで、彼自らをカンピネンセと称したほどである。

当時、彼はカンピーナス近傍の砂糖農園、ソロカバの馬市、イトーの市街、モンソン隊のマット・グロッソ探検、サンパウロ西部のコーヒー耕地、カミーニョ・ド・マール（旧サントス街道）、アバニャンダーバの滝などの風景画を描いた。それらの或るものはパウリスタ博物館に所蔵されている。

ヘルクレス・フロレンセは一八七九年四月二九日、七五才でカンピーナスに逝った。彼の墓はいまもカンピー

ナスの墓地に見られる。

トウネー子爵（アルフレド・デスクラノレ・トウ
ネー、一八四三〜一八九九）

トウネー子爵はフェリス・エミール・トウネーの子息で、一八四三年二月二日にリオ市に誕生した。彼はリオの陸軍兵学校で数学と物理を専攻して軍属土木技師となった。彼は土木技師であるとともに文学者であり、パラグワイ戦争には少尉として従軍した。

アルフレド・トウネーはブラジルの写実主義文学の魁けをなした。彼の作品は年代的にはパラグワイ戦争取材した『ラグーナの退却』が最初で、その初版はフランス語で一八七〇年に出版された。一八七二年には小説『イノセンシア』が出版され、各国語に訳されて声価を高めた。ほかに彼の著作には『パラグワイ戦従軍記』『ブラジル陸軍史』『心の涙』『トラジャノーの青年期』など八冊ある。

アルフレド・トウネーはパラグワイ戦争から帰還し、サンタ・カタリナとパラナの州統領に就任した。サンタ・カタリナの州統領在任中の一八七六年に首都デステロ（フロリアノポリス）で、子息アフォンソが生れた。

アルフレド・トウネーは皇帝ドン・ペードロ二世と親交があり、帝政が終焉してドン・ペードロがヨーロッパに追放された後までも文通がつづけられた。

アルフレド・トウネーは美術と音楽の評論家でもあり、彼自らもピアノの奏者であった。

史家アフォンソ・デ・トウネー（一八七六—一九五八）

アフォンソ・デスクラノレ・トウネーは一八七六年七月二日、サンタ・カタリナのデステロ（フロリアノポリス）に生れた。彼は一九〇〇年にリオ工科大学の土木科を卒業し、サンパウロのエスコーラ・ポリテクニカ（サンパウロ工科大学）の教授となった。

一九二三年には州統領ワシントン・ルイスの要請でパウリスタ博物館長に就任した。彼のパウリスタ博物館長の在任は二八年におよぶが、その期間が同博物館の最も輝やかしく、充実した時であった。

彼はその間サンパウロの史料を蒐集し、サンパウロとバンデira史の著述に没頭した。

彼の著書は一〇〇以上あるが、代表作は、『サンパウロ史（五卷）』『バンデira・パウリスタ史（三卷）』『ブラ

ジルのコーヒー史（二〇巻）』である。

アフォンソ・デ・トウネーの私生活は著名の史家文学者とも思われぬ素朴さで、家庭の良き夫、点き父であつた。何ごととも家庭本位で、常に家庭に在って読書し、執筆することを好んだ。

アフォンソ・デ・トウネーはサンパウロ歴史地理学会の第四代名誉会長である。

ラングスドルフ男爵のアマゾン科学探検

ドイツ人の探検家、外交官ラングスドルフ男爵（一七七四〜一八五二）の本名はギョルグ・ハイリヒ・フォン・ラングスドルフでゴツチンゲン大学で医学を修めた。

ポルトガルに天然痘予防の種痘を最初に入れたのはラングスドルフ男爵である。

彼はロシア政府の要請で一八〇七年にカムチャツカ半島の科学調査をし、一八一三年にはブラジルを訪れている。

一八二一年から一八二六年にかけてはロシアの総領事としてリオに駐在したが、その間彼はアマゾンの科学探検に当つた。

そのアマゾン探検に、フランス美術使節として来伯し

た画家エコラウ・アントアン・トウネーの子息アドリアノ・トウネーと同じくフランス人の画家、発明家、旅行家のヘルクレス・フロレンセが参加した。

ラングスドルフ男爵のアマゾン探検はヘルクレス・フロレンセによって叙述され『河川航路によるアマゾン探検』の題名で出版された。

イパネマ製鉄所

イパネマ製鉄所はドン・ジョアン六世によって創設され、レアル・フアブリカ・デ・フェロ・サン・ジョアンド・イパネマと命名された。

イパネマ製鉄所の歴史はバンデーランテのアフォンソ・サルジーニャ父子が一五八九年に金鉱探索の目的で、サンパウロからピエダーデ、イビウナを経てソロカバのモーロ・デ・アソエアバに達し、金鉱ならない鉄鉱を発見したことにはじまっている。当時のブラジルはポルトガルとともにスペインの統治下にあつて、ドン・フラシスコ・デ・ソーザが総督であつた。

アフォンソ・サルジーニャの報告に接したドン・フラシスコ・デ・ソーザは直ちにアソエアバに調査隊を派遣した。その後は政府と民間の共同出資でイパネマの鉄

鉍採掘をやったが実績があがらないまま放置された。

一八〇八年に摂政ドン・ジョアンがポルトガル王室をリオに移してから、イパネマが話題に上り、鉄鉍採掘と製鉄計画が立てられた。しかししてヨーロッパから招請されたのがスイーデン人の鉍山技師グスタフ・ヘッドブルグで、彼は数名の製鉄技術者を伴ってブラジルに着いた。

アソエアバ現地でのヘッドブルグはまず動力問題のために、アスーデ（人工沼）を掘って水力を利用することになった。次いで熔鉍炉を構築したが、それに要した建築資材、機械、耐火煉瓦一切はフランスとイギリスから輸入された。それらの資材はサントス港から牒馬で海岸山脈を越えてイパネマまで運ばれたが、いかに難渋をきわめたかは想像のほかである。

このようにして熔鉍炉が築かれ、第一回の製鉄試験をやったのが一八一一年だが、結果は失敗であった。しかも熔鉍炉はフルナ河畔だったので、雨期の河水氾濫で浸水するという手違いを生じた。

ヘッドブルグは製鉄所長を辞任し、部下をひきつれてヨーロッパに引揚げたが、そのうちの一人の青年が責任を感じて自殺を遂げた。

ドン・ジョアン六世の失望は大きかったが彼はイパネマ製鉄所の夢を捨てることができなかつた。そこで第二

代イパネマ製鉄所長として囑目されたのがドイツ人の製鉄技師フリーデリヒ・ルドウイグ・ウイルヘルム・フォーン・ヴァンヘーゲンであった。(以下ブラジル読みのヴァルニヤーゲンとする)ヴァルニヤーゲンはドイツ陸軍機関中尉でポルトガル政府の委嘱技師としてリスボア滞在中にナポレオン戦争となった。

ドン・ジョアンがブラジルに王室を移した翌年、一八〇九年にヴァルニヤーゲンはリオに移住した。はからずもヘッドブルグの辞任によつて、ヴァルニヤーゲンはイパネマ製鉄所長の候補に挙げられ、リニヤーレス大臣を介して相談をうけた。

ヴァルニヤーゲンはジョゼ・ボニファシオの令弟マルチン・フランシスコとともにイパネマの実地検分をし、製鉄所長として赴任したのが一八一四年である。

ヴァルニヤーゲンはイパネマ赴任後、ソロカバの名門フラビオ・デ・サー・マガリヤンエスの息女マリアと結婚した。そして一八一六年二月一七日に生れたのが将来の史家フランシスコ・アドルフオ・デ・ヴァルニヤーゲン(ポルト・セグーロ子爵)『ブラジル全史』の著者である。

ヴァルニヤーゲンはヘッドブルグの失敗に鑑みて慎重を期し、鎔鋳炉の構築とその他の準備に三年余をかけ、

一八一八年一月一日の諸聖人の日に製鉄試験をおこなった。この試験によってイパネマ製鉄所最初の銑鉄が生産された。

ヴァルニヤーゲンはイパネマ製鉄所の再建に最善をつくし、相当の業績を挙げたが鉄鉱の質を変えることは不可能であった。

一八二一年にドン・ジョアン六世はポルトガルに帰還し、その後の事情のためヴァルニヤーゲン夫妻も子息フランシスコを伴ってポルトガルへ引揚げた。

ヴァルニヤーゲンの退任後はイパネマ製鉄所は陸軍省の統轄下におかれ、一八二一年から一八三四年までレフィノ・フェリシアノ・コスタ大尉とジョアン・フロレンシオ・ペロア大佐が前後して所長となった。

一九三四年以後はジョアン・プロエム少佐が所長に赴任したが、彼は直ちにヨーロッパの著名製鉄所を視察し、執政官ジオゴ・フェージョの後援を得てイパネマ製鉄所の経営に当たった甲斐あって、ヴァルニヤーゲン以来の好積を挙げた。プロエム少佐の所長任期は一八四三年までおよんだが、その間大砲と砲弾を製造した。

一八四二年のサンパウロ自由革命には革命主導者ラファエル・トビアス・アギアールの命によって口径三吋砲を三門製造したが、一度も使用されることがなく、革命軍

はカシアスの政府軍に制圧された。

一八四三年から一八六五年までに数名の所長が任命されたが、大して業績挙がらず、時には全く操業が停止された。

一八六五年となって陸軍機関大尉ジョアキン・ソーザ・ムルサが所長に就任したが、その在任期が最も長く、三五年におよんだ。

ソーザ・ムルサはすぐれた軍人で教養高く工場経営の実務にも精通していたので、赴任短期間にして最大限の生産を挙げた。鎔鉱炉の改良と鉄鉱石搬出の能率化を計り、年産八〇〇トンまで引上げることに成功した。彼の所長時代に多量の砲弾が铸造されたが、それは一八九三年の海軍の反乱にフロリアノ軍（政府軍）に使用された。またサンパウロのルス公園の鉄柵とポンテ・グランデの橋梁もソーザ・ムルサのイパネマ製鉄所長の任期につくられたものである。

ソーザ・ムルサの在任期にイパネマ耕地に鉄道が敷設されて鉄鉱石が搬出された。

一九〇四年、ロドリゲス・アルベス大統領の命をうけてイパネマ製鉄所の現地調査に当った国务大臣ジョアン・パンジア・カロジェラスの報告はまったく絶望的の

ものであった。

更にエルメス・ダ・フォンセツカ大統領任期の一九一一年にイパネマ製鉄所は最終的に操業を停止した。

イパネマ製鉄所は一八二年以来、ドン・ジョアン六世と皇帝ドン・ペードロ父子（一世と二世）の熱望によって二十数名の歴代の所長が畢生の努力を払ったにもかかわらず、遂に失敗におわった。帝王三代にわたる【鉄の夢】が実現されなかったのである。現在は廢墟と化した製鉄所が昔の物語りを秘めている。

史家外交官フランシスコ・アドルフオ・デ・ヴァルニャーゲン（一八一六～一八七八）

ブラジル史の父といわれるフランシスコ・アドルフオ・デ・ヴァルニャーゲンは一八一六年二月一七日にサンパウロのソロカバ郡サン・ジョアン・デ・イパネマに誕生した。

彼は史家外交官で、ブラジル全権公使としてウィーン駐在中の一八七八年六月二九日に死去した。

父フリーデリヒ・ルドウイグ・ウイルヘルム・ヴァンヘーゲンはドイツ系オーストリー人の鉱山製鉄技師で、ポルトガルに長く住み、ドン・ジョアン六世の招聘でブ

ラジルに移住し、イパネマ製鉄所の所長に就任したのが一八一四年である。彼が第二代所長としてイパネマ製鉄所に在る間に、将来の史家フランシスコ・アドルフ・オ・デ・ヴァルニャーゲンが生まれた。

フランシスコが六才の時に父がイパネマ製鉄所長を辞任してポルトガルに帰還したので父とともにリスボアに住み、高等学校を経て陸軍兵学校の機関科に入学した。彼の兵学校在学中にドン・ミゲル（ドン・ペードロ、一世の実弟）のポルトガルの王位横奪の反乱がおこり、その討伐戦に参加した。その後、彼はポルトガル王立科学院に学び、陸軍中尉の資格に合せて軍属機関技師となった。

フランシスコ・ヴァルニャーゲンは一八四一年にブラジルに帰国し、一八五一年以後はブラジル帝国の外交官としてリスボアとマドリードに駐在した。その間『ブラジル全史』の第一巻を刊会した。つづいて彼はアメリカ合衆国に赴任し、さらにパラグワイ駐割公使となった。一八六八年からはウィーンに駐在し、多くの著述をした。当時彼は『ブラジル全史』著述の功績によって授爵されてポルト・セグーロ子爵となった。彼は叙述に先立って史実の探究と資料蒐集に万全を期し、正確な記述のために原稿は数回におよんで訂正加筆された。しかも正しい

ポルトガル語に重点をおき、豊富な語彙を駆使しつ徹宵書きつづけることは稀でなかった。それなればこそ六二才で世を去ったが、大小併せて数十の著作を残した。次にヴァリニャーゲンの主な著書を挙げる。

ブラジル全史（五巻）

ブラジルの独立史

オランダの侵略史

航海家アメリカ・ヴェस्पッチ

ガブリエル・ソアレス・デ・ソーザカラムルー

グワラニの芸術

オイアポックとアマゾナス川

いま一つヴァリニャーゲンの功績は、ブラジルの発見者ペードロ・アルヴァレス・カブラルの葬られた場所が不明だったので、長期間をかけて探索し、ポルトガルのサンタレンのグラサ致会の墓地で発見したことである。

ブラジル地質学の始祖エシユージェ男爵（一七七七

—一八五五）

ブラジル植民期以来の産業と文化開発にドイツ人の貢献は多大だが、特に科学の面に顕著のものがある。その

一人がエシユージェ男爵で、外国人で彼ほどブラジルの基幹産業の製鉄と鉱業の発展に先駆的功績を残したものはない。エシユージェ男爵はブラジル地質学の始祖といわれるが、彼によってミナスからエスピリト・サント、バイアにわたる地質調査がされ、精細な地質図が作製された。

エシユージェ男爵のブラジルでの活躍は多岐に亘るが、地質鉱物調査と相並んで山嶽、湖沼調査、製鉄所の建設、リオ・ドーセの航路開拓、インジオの教化（主にリオ・ドーセ盆地のポトクードス族）にまでおよんでいる。ほかに彼のブラジルに関する著書は二〇を数える。エシユージェ男爵がブラジルに住んだのは一八一〇年から一八二一年の一年で、その比較的短かい期間に絶大の働きをなし得たのは以前彼がポルトガル政府の委嘱をうけて、ポルトガルの鉱物調査に当り、ポルトガル語を会得していたことにある。いま一つはエシユージェ男爵のブラジル移住に先立って、ポルトガルの摂政ドン・ジョアンがブラジルを開港し、経済政策を一変したことも挙げられる。ポルトガルは一七〇三年以来、イギリスとのメスエン条約によってポルトガル本国と植民地の工業を禁じ、一切の工業製品はイギリスから輸入されていた。

それが一八〇八年のポルトガル王室のブラジルへの移転と同時に解禁された。そこでブラジルに農工具と鉱山

の採鉱機具の製造のための製鉄と金属工業がおこった。エシユージェ男爵のブラジル移住は時宜を得たといえる。

エシユージェ男爵の本名はウイルヘルム・ルドウイグ・フォン・エシユージェで、一七七七年一月一日にドイツのカッセル地方、ヘッセル大公領地のエシユージェ（彼の姓と同名の町）に生れた。彼はゴツチソゲソ大学卒業後、クロウスター科学院で地質鉱物学を学んだ。当時ポルトガル政府の要請があり、彼はポルトガル陸軍大尉の資格で鉱物調査官として赴任したのが一八〇三年である。それから数年を経てナポレオン戦争はイベリア半島におよんだ。エシユージェはポルトガルの第二砲兵旅団に参加してフランス軍と闘った。そのころエシユージェはポルトガル王室の科学顧問のジョゼ・ボニファシオと相識り、親交をもった。

ジョゼ・ポニファシオは一八〇三年にブラジルか、ポルトガルに遊学し、サキノニラのフライブルグ科学院で鉱物学を修め、ナポレオン戦争に大学生の義勇軍を指揮していた。

他のブラジル人でフライブルグ科学院に学んだ者にミナスの鉱山総監となったマノエル・フェレーラ・ダ・カマラ・ビッテンコウ（ウジミナス製鉄所の名称の人物）がいた。

イベリア半島でのナポレオン戦争の終焉後にエシユージェはドン・ジョアン六世の招聘でポルトガルからブラジルに渡ったのが一八一〇年である。

エシユージェはドン・ジョアン六世と政府首相リニャーレス伯（ドン・ロドリゴ・コウチーニョ）の要請で、ミナスの鉱物監督官としてビーラ・リーカ（オーロ・プレート）に駐在した。

エシユージェよりも先きにブラジルに帰国したマノエル・フェレーラ・ダ・カマラはミナスのリオ・ダス・ベリヤスの上流モーロ・ド・ピラールにガスパール・ソアレスの名称の製鉄所の建設を進めていた。同製鉄所は一八〇九年に建設工事に着手したが、技術問題で意外に多くの費用と歳月を要し、実際に鉄の生産を開始したのは数年後である。しかも操業短期にして経済事情のために閉鎖された。

ミナスの鉱物監督官として現地に赴いたエシユージェは金山での採鉱技術が想像以上に原始的であることにおどろいたが、極度に保守的なミナス人を納得させ、指導するには非常な困難があった。鉱山の作業に機械や水力の応用もなく、専ら奴隷の労力で不能率的な方法がとられていた。

エシユージェはジアマンチナ地域のダイヤモンド鉱とア

ハエテ流域の方鉛鉱の調査をし、最初に設けたのが鉛の精練工場であった。彼がその銘の精練工場の経営のためにビーラ・リーカから悪条件の道を通いつづけた。

エシューゲがミナスのカピタニア長官パルマ伯爵（ドン・フランシスコ・デ・マスカレーニヤス）を主とする一〇名の出資者によりコンゴニヤス・ド・カンポに製鉄所建設に着手したのが一八一一年八月である。彼がコンゴニヤスを選定した理由は近くに豊富な鉄鉱床と木炭の原料となる森林があり、動力用の水流に恵まれていたためである。そのコンゴニヤスの製鉄所の高炉の構築はおどろくべき速度で完了した。動力には水力を応用し、鍛鉄と鑄造工場も設けた。しかして一八一二年一月一七日に銑鉄の生産を開始した。これがブラジルにおいての工業スケールの最初の鉄の生産である。それ以来一回も中絶することなく、年間一〇〇〇アローバ以上の鉄の生産をつづけた。この製鉄所にはファブリカ・パトリオチカと命名された。パトリオチカ製鉄所の実績で確信を得たエシューゲは他の製鉄所建設の指導にも当たった。しかしエシューゲにとってすべてが順調だったのではなく、幾度か困難に遭遇した。一つの大きな打撃は彼の後援者の国務大臣リニャーレス伯爵と後任のバルカ伯爵が相次いで死去したことである。これはエシューゲの計画

遂行に一頓挫を来たすことになった。彼は挫折することなく、奔走の結果リオで三〇名の出資者を得、三万クルザードの資本でソシエダーデ・デ・ミネラソソを設立した。これがブラジルで最初の株式制鉱業会社であり、良好の業績を挙げて相当の配当を続けた。

エシユージェはそのような多忙のうちにもブラジル鉱山法の編纂にも協力し、絶えざる地質調査によって完璧な地質図をつくり上げた。

前世紀にエシユージェほどミナス全域をくまなく踏査したものはなく、専門の地質鉱物のほか気象観測をなし、土地の風物、住民の生活風習を観察して旅行記を綴った。一八二一年四月にドン・ジョアン六世はポルトガルへ引揚げたが、エシユージェも同年七日にヨーロッパに去った。

ヨーロッパに帰着したエシユージェは再びポルトガルに留り、軍属鉱山総監となったが、一八二八年二月のドソ・ジョアン六世の死で事態は変った。一八三五年にはドーナ・マリア二世（ドン・ペードロ二世の第一王女）の治世となり、エシユージェは乞われてシントラ城閘の修復工事を担当した。

ドン・ジョアン六世の死後はポルトガル政府のエシユージェに対する不条理の処遇による不満はあったが、彼がポルトガルに住んだ期間は前後を通算して三〇余年

にわたっている。

晩年の彼はポルトガル陸軍中將の地位を与えられ、一八五五年二月二日にドイツのウォルフサンクに没した。

エシユージェ男爵のブラジルに関する著書のうち次の三冊が特に知られている。

JORNAL VON BRASILIEN (ブラジル旅行記)

BRASILIEN DIE NEUE WELT (新世界ブラジル)

PLUTO BRASILIENSIS (この書は二巻から成り、ミナスを

主とする地質鉱物調査とブラジルの鉱業史が叙されている。)

アレキサンダー・フンボルトの中南米探検

近代地理学の泰斗アレキサンダー・フォン・フンボルト(一七六九—一八五九)は”博学者”の代名詞となっているが、彼の研究分野は地理、博物、天文物理、生物、気象、考古学、山岳湖沼学におよんでいる。

フンボルトが一九世紀初頭に中南米の科学探検をしたのは三十代であった。その踏査区域はキューバ、メキシコ、ジャマイカ、ヴェネズエラ、コロンビア、エクアドー

ル、ペルーで、探検の全長距離は五万キロである。しかしフンボルトはアルト・ペルーのアマゾン上流に達しながらブラジルには踏みこまなかった。もし彼がブラジルの科学探検をしたなれば、ブラジルの科学的進歩に新時代を画したであろう。

フンボルトはスペイン王室との了解のもとに中南米のスペイン領の科学調査を企画した。それをポルトガル政府はフンボルトがスペイン王室との密約によって中南米の探検を企てたとの疑惑をもち、彼のブラジル入国を禁じた。そのためフンボルトはペルーのアマゾン上流から探検の歩を転じた。

フンボルトの誕生は一七六九年で、チャールス・ダーウィンよりも四〇年早い。彼は九〇年の長寿に恵まれ、ヨーロッパとアジアのほか広く米州を探検したので、科学者とともに世界旅行家で知られている。特にアンデスの東方、ヴェネズエラとブラジルの国境にわたるオリノコ盆地一五〇〇マイルの調査を遂げたことではフンボルトが最初である。またチリーの鳥糞層グワノを燐肥としての使用、奥アマゾンの天然ゴムと薬用キニーネを広く紹介したのもフンボルトである。

フンボルトは一七六九年九月一四日にベルリンに生れた。父アレキサンダー・ギョルグ・フォン・フンボルト

はフリーデリヒ大帝に仕えた貴族、陸軍少佐でスペイン戦争の殊勲著であった。母マリア・エリザベスはフランスのボルゴニユ家の血統で、戦乱を逃れてドイツに移転したものである。

アレキサンダー・フォン・フンボルトは幼少にして自然科学に興味をもった。彼の少年期にジャン・ジャック・ルソーの思想がヨーロッパを風靡し、フランスでは進歩派による社会革新の胎動期にあった。

フンボルトは一八才でフランクフルト大学に入学し、後にゴッチンゲン大学に転校した。彼はゴッチンゲン在学中にイギリスに旅してジョージ・エーデン・フォスターの面識を得た。ジョージ・エーデンはキャプテン・クックの第二回太平洋探検に参加し、その冒険航海記の著者として有名であった。

フンボルトは大学卒業後、ベルリン地理学院の委嘱をうけてスイスとオーストリー・アルプスの科学調査をした。やがて一七八九年となってフランス革命の煙火があがった。しかして風雲児ナポレオン・ボナパルテが現われてオーストリーとイタリアを席捲し、エジプト遠征を画している時に、フンボルトはパリを訪れた。科学と芸術の都パリは戦争一色を呈し、勇壮な軍隊行進曲が奏されていた。当時ナポレオンは知名の学者を動員してナポ

レオンの遠征隊がマルセーユを出発する直前、イギリスのネルソン提督がアブキールにフランス艦隊を撃破して地中海を封鎖した。その時、フンボルトはエジプトに出発する予定だった青年医師、植物学者アイメーボンプランと相識した。ボンプランはフンボルトの熱心な勧めに動かされて中南米の科学調査をする決意をした。

フンボルトは出発前、スペイン宮廷にカルロス四世を訪れて中南米のスペイン領地探検の許可を得た。

フンボルトとボンプランはスペインのコルナン港から帆船『ピザロ』に便乗して出発したのが一七九九年六月五日であった。彼ら二人は同年七月一五日にヴェネズエラのクマナに到着し、ノーバ・アンドンシアの総督の歓待をうけた。そこに十一月まで滞在し、フンボルトは海路、ボンプランは陸路を経てカラカスに向った。更に彼らは舟によってグロリコとカブルタ河口をすぎてアラグワ盆地に達した。カラポーズに着いて意外な発見をしたが、それは電気鰻であり、フンボルトによって

ELEKTROPHARUS ELETRICOSの学名がつけられた。

一八〇〇年の三月上旬にはオリノコ川に到達し、アプレ川との合流点から一三〇キロ航行してスペイン人の僧侶による土民教化村を訪れた。

彼らがオリノコ盆地とアマゾン境界に達したのは一八

〇〇年三月二〇日だが、当日ナポレオンがフランス国民の歡呼のうちに第一コンサルに就任した。

その後のフンボルトとボンプランは二〇〇〇キロの陸路と三〇〇〇キロの河川旅行をつづけ、数千の植物、鳥類、哺乳動物、昆虫、鉱物標本を採集した。その間ボンプランは悪性のマラリアに患って高熱に坤吟したが、彼らの調査はつづけられた。

一八〇〇年十一月から一八〇二年一月まで彼らはキューバの旅をし、砂糖と煙草の産業を具さに視察した。キューバの旅行を終えた二人は再び南米に向い、コロンビアのカルタジェナに上陸した。ついで標高三〇〇〇メートルの山岳地帯を踐渉し、一八〇二年九月にはエクアドールのキートに着き、数名の科学者と会談した。当時、フンボルトは海拔五六〇〇メートルのシンポラゾを征服した。

彼ら二人の再度の南米旅行はコロンビア、エクアドールとアルト・ペルーであり、それに一年半を要した。

南米の科学調査を遂行したフンボルトとボンプランはメキシコを訪れて一年余滞在し、科学調査の傍らアステカ文化の研究をした。

メキシコから彼らはアメリカ合衆国に入りジェファースン大統領と会談した。

このように米州の科学調査に六年を費やしたフンボルトは五万点の博物標本と福大な資料を携えて帰国の途についた。

フンボルトは一八〇八年から一八二七年にかけて中南米の科学調査の記録をまとめ、三〇冊から成る章を刊行した。また彼は七六の高齢となって『コスモス』の表題の書を執筆したが、その最後の巻の出版を見ずして長逝した。それは一八五九年五月六日、八〇年の栄光に満ちた生涯であった。

前世紀にブラジルを訪れたイギリス人

一六世紀から一七世紀にわたってブラジルを訪れたイギリス人は航海家、探検家、科学者、軍人、貿易商、旅行家、鉱山技師、鉄道技師、画家、宣教師、拓殖家などである。

植民初期ブラジルに来航したイギリス人のほとんどは海賊であった。その主なものはウィリアム・ホーキンス、トーマス・カヴェンジツシュ、エドワード・フェントン、ジェームス・ランカスターなどである。

次に前世紀のブラジルを訪れた著名のイギリス人を挙げる。

ジェームス・クック（航海家探検家）
エドモンド・ハーレー（天文学者）
チャールス・ダーウイン（博物学者）
ジョン・モウ（地質鉱物学者）
ジョージ・ガートナー（旅行家鉱物学者）
トーマス・コックレーン（海軍提督）
ジョン・テラー（海軍軍人）
ヘンリー・ウォルター・ベーツ（博物学者）
アルフレド・ルツセル・ウォーレス（生物学者）
リチャード・フランシス・バートン（探検家著述家）
マリア・グレハム（旅行家著述家）
ウィリアム・ヘンウッド（鉱山技師）
フレデリック・ジェームス・スチブソン（鉄道技師）
ダニエル・フォックス（鉄道技師）
チャールス・バrinton（地質学者）
ヘンリー・ウィットマン（植物学者）
ウィリアム・ウェブスター（海洋学者）

第八章 ブラジルの独立

ドン・ペードロのフィコ宣言

ドン・ジョアン六世がポルトガルに帰還するに当り、一八二一年四月に長男ドン・ペードロを摂政としてブラジルの統治権を委ねた。当時のドン・ペードロは二三才未満であった。

ドン・ペードロのブラジル残留はリスボアの政府を失望させた。

なぜならば王族が全部ポルトガルに引揚げることによってブラジルを海外領評議会の統轄下におくことが可能だったからである。

父ドン・ジョアン六世の去った後、ドン・ペードロは空となった金庫の前に留め息をついた。

一方、ポルトガルに帰還したドン・ジョアンは王としては象徴的な存在となり、政治の実権は政府首相と閣僚に振られていた。

リスボア議会においてのブラジル代表議員のジオゴ・アントニオ・フェージョ、アントニオ・カルロス、マル

チン・フランシスコ、ニコラウ・カンポス・ヴェルゲーロの発言は無視され、議会の空気は悪化して彼ら議員の身辺危険なまてになった。これらの議員はイギリスに逃れてブラジルに帰国した。

このようにドン・ジョアンの帰還後はポルトガル政府のブラジルに対する態度は一変した。



アビレス大將に退去状を手渡すドン・ペードロー世

一八二二年一二月九日、リオ・デ・ジャネイロにポルトガルの軍艦『インファンテ・ドン・マヌエル』が入港した。同艦の艦長にはリスボア政府の二通の法令が託されていた。それはブラジルの自治機能の縮少、高等裁判所の閉鎖と摂政ドン・ペードロのポルトガルへの帰還を命ずるものであった。

当時リオとニテロイの秘密結社の首長ジョゼ・ボニファシオと政治家新聞人のジャヌアリオ・ダ・クーニャ・バルボーズ、ゴンサルベス・レードがそれぞれの主宰する新聞に、ブラジルの植民地化反対の論説を掲げ、同時にドン・ペードロがブラジルに留ることを強調した。ジョゼ・ボニファシオはドン・ペードロをブラジルに留らしめる要望書にサンパウロ人二〇〇〇名の署名を得た。それが上院議長ジョゼ・クレメンテ・ペレーラによってドン・ペードロの面前で読み上げられた。

ドン・ペードロは少しく躊躇したが『ブラジル国家の安泰と国民の幸福のために余は留ることを決意した。その旨を国民に伝えよ』と陳べた。それが一八二二年一月九日のドン・ペードロのフィコ宣言で、これによってブラジル独立の第一歩が踏み出された。

ドン・ペードロのフィコ宣言が伝わるや、ポルトガルのリオ駐屯軍の兵士が巷間に現われ、ドン・ペードロ引留めの請願書に署名した者を逮捕すると叫んだ。それを知ったドン・ペードロは軍艦ウニオンのジョルジ・デ・アビレス大将に速かにポルトガルに退去するよう命じた。一月一六日にはドン・ペードロは内閣を組織したが、それは次の人物からなるものであった。

ジョゼ・ボニファシオ・デ・アンドラーダ・エ・シル

バ（内務、司法、外務）

カエターノ・ピント・デ・ミランダ・モンテネグロ（蔵相）

ジョアキン・デ・オリベ이라・アルベス（陸相）

マヌエル・アントニオ・ファリナ（海相）

それより七カ月後のポルトガル政府からの通告で、ブラジル駐屯軍の増補部隊の派遣されることを知った。この通告はブラジルに対する威嚇であり、ドン・ペードロを焦立たせた。ドン・ペードロはリオとサルバドール要塞と港の防備を固め、ポルトガル軍艦の入港を禁ずる布令をした。またドン・ペードロは独立工作のためにサンパウロ訪問を思い立った。もっぱらサントス港の防備点検とボニファシオ家を訪れることが彼の予定であった。

リスボア議会上に臨んだブラジル議員

一八二一年三月七日付のドン・ジョアン六世の発令に基づき、リスボア議会上に臨むブラジル議員が一八二一年九月三日に選出された。それらは次の人物である。

ジオゴ・アントニオ・フェジョ（上院議員）

アントニオ・カルロス・リベイロ・デ・アンドラーダ

（上院議員）

エコラウ・カンポス・ヴェルゲーロ（上院議員）

ジョゼ・フェリシアノ・フェルナンデス・ピニエーロ
（サン・レオポルド子爵、上院議員）

ペードロ・デ・アラウージョ・リーマ（オリンダ侯爵、
上院議員）

ルカス・モンテロー・デ・バツロス（コンゴニーヤス・
ド・カンポ子興、上院議員）

フランシスコ・ヴィレラ・バルボーザ（パラナグワ侯
爵、上院議員）

ドン・ジョゼ・デ・アゼヴェド・コウチニョ（上院議
員）

ペードロ・モニス・タヴァレス（下院議員）

ジョゼ・セザリオ・デ・ミランダ（下院議員）

ドミンゴス・ボルジェス・デ・バツロス（下院議員）

シプリアノ・バラタ・リベロー（下院議員）

ジョゼ・エロイ・オトニ（下院議員）

ジョアキン・ジョゼ・ダ・ローシヤ（下院議員）

アントニオ・ダ・シルバ・ブエノ（サンパウロ）

フランシスコ・パウラ・ソーザ（サンパウロ）

ドン・ロムアルド・デ・ソーザ（パラ）

ジョゼ・マルチニアノ・アレンカール（セアラ）

フランシスコ・アルーダ・ダ・カマラ（パライバ）

ペードロ・バウリーノ・デ・オリベーラ（バイア）

ジョゼ・リーノ・コウチーニョ（バイア）

ノエリス・タヴァレス・デ・リーラ（ペルナンブーコ）

マソナリア（秘密結社）のブラジルへの浸潤

フリーメイソンで知られるマソナリアの起源は遠くエジプト時代にさか上るといわれるが本格的なおこりは中世末から一七世紀にかけてヨーロッパの石工組合員の自由人の相互扶助と友愛を基調とする社会向上運動に発している。それが次第にヨーロッパの各国に広がり、ロンドン、パリ、ベルリン、ヘーグ、リスボアが主な結社所在地となった。

ポルトガルにマソナリアの結社が設けられたのは一七三五年から一七四三年にかけてである。創設者はスイス人のジャン・カストンとフランス人のジャック・モウトンだが、彼らは宗教裁判にかけられ、せつかくのマッソン運動は中絶された。

ドン・ジョゼ一世の治世にはマッソン運動に寛大となり、リスボアとコインブラならびにマデーラ島のフンシャルに結社が設けられた。しかしドーナ・マリア一世の治世となって秘密結社に圧迫を加えた。

ナポレオン軍のポルトガル侵略当時（一八〇七〜一八一〇）はリスボアにおいてのマツソン運動は活気を呈し、著名の自由主義者がそれに参加した。

一八世紀末にマソナリアの思想はアメリカに普及された。特に独立運動の主導者はこの思想に共鳴した。それらの主要人物にはベンジャミン・フランクリン、トーマス・ジェファソン、フランシスコ・ミランダ（ヴェネズエラの独立主導者）、ベルナルド・オヒツギンス（テリー独立の主導者）とホセ・デ・サンマルチン將軍などである。これらアメリカの自由主義者はイギリスの工業都市リヴァプールやバーミンガムに勢力を張った秘密結社の影響をうけていたようである。

ブラジルにマツソン活動が侵潤したのは一七八八年のころで、ヨーロッパに遊学した学生によってもたらされた。それはパリ大学やモンペリエール大学に学んだジョゼ・ジョアキン・デ・マイア、アルヴァレス・マシエル、ドミンゴス・ビダル・バルボーザなどである。

一八二一年三月にはノーブレ・オルデン・ドス・カヴァレーロス・デ・サンタ・クルースの名称の結社がジョゼ・ボニファシオとゴンサルベス・レードによって設けられ、同年七月、ドン・ペードロをグロン・メストレ（首長）に推した。当時ドン・ペードロは黒衣をまとって夜間の集

会に出席した。

ドン・ペードロ一世

ドン・ペードロ一世は一七九八年一〇月一二日にリスボア近郊のケールスのケールス宮に生れた。父ドン・ジョアン（六世）はポルトガル人で、母ドーナ・カルロッタ・ジョアキナはスペイン人だった関係で、彼は典型的南欧人の感受性の強さに合せ、物事に熱中し、且つ陽気ながらも変り易い性格であった。

彼は極度に自我本位で、すこしも譲歩するところがないが、時によっては寛容で誠実あふれ、犠牲もあえて辞さない一面があった。そうかと思えば激烈粗暴で、その激昂の前には如何ともする術がなかった。場合によっては慈愛に満ち、温情そのものとなるが、善悪を問わず頑として意をまげないところがあった。非常に独断的で、人の意見を容れない反面、気が向けば温順で繊細典雅の貴公子になるという両極端を併せもつ性格であった。また理想と目標に向っては全力を傾倒してやまない気質であった。それが彼をしてブラジルの独立を実現させたのであろう。

ドン・ペードロは両親の情愛をあまり受けずして育つ

た野生的のところがあつた。それは炎天と嚴寒にも耐える野生味である。彼は優れた芸術的才能をもち、詩を綴り、美術を愛し、音楽を好み、作曲するという器用さがあつた。このようにドン・ペードロの人柄は並外れといふか、不可解の点が多々あつた。彼は豪華な宮廷に育ちながらも青白い貴公子ではなく、野生動物のようなどころがあつた。

彼は幼くして馬術にすぐれ、長距離を一気に駆けることを得意とした。

ドン・ペードロはナポレオンのヨーロッパ制覇による英雄崇拜の風潮に嚴格な軍事訓練をうけている。彼は父ドン・ジョアンとともにブラジルに移住したのは九才だったが、既にフランス語とラテン語を会得していた。彼は早熟だったが特に語学におどろくべき進歩を示した。ドン・ペードロは詩人でもあり、折にふれての感懷をいとも容易に詩に綴つた。彼はギリシヤの古典とポルトガルの修辞学を学んだためか一言一句が名文である。

彼はブラジル移住後、ポルトガル、デンマーク、アルゼン駐在公使の経歴をもつ博学者ヨハン・ラデメカーの指導をうけて歴史、地理、倫理博物学を学んだ。

ドン・ペードロは音楽の技能にもすぐれ、ブラジル移住後はポルトガル人の作曲家マルコス・ポルトガルに師

事して作曲を学び、ミサ曲、カンタータ、ミヌエット、歌謡曲を作曲した。彼はムラト（混血児）の声楽隊を組織し、合唱を指揮する時には満足そのものであった。彼は画道にも通じていたが、漫画ではアマチュアの域を越えていた。彼は絵画とともに彫刻もした。彼自身の彫像を製作しそれを新造船の舳先につけ、処女航海を楽しんだりした。

ドン・ペードロは機械芸術家といわれたほどあらゆる種類の機械の操作、組立て、分解修理までやった。彼はキンタ・ダ・ボアビスタの一隅に仕事場を設け、そこで機械の組立てや修理と大工仕事もやった。

二〇代の彼は鍛えられた鉄のような体質で連続的に長途の旅をしても疲労も見せなかった。一八二二年六月二五日のことだが、彼は荒馬を馴らしながら、落馬して筋骨を二本折った。それにもかかわらず、人の助けも求めずに一人でサン・クリストヴァン宮に帰りついた。そして平然としてフランス大使に謁見した。

ドン・ペードロは植物を愛し、庭園の手入れまでやった。或る日、マリア・グレハムがはじめてサン・クリストヴァン宮を訪れたところ、大きな帽子をかぶった背丈高い園丁が働いていた。彼女はその園丁になにかを訊ねたが、流暢な英語で答えたのでおどろいた。その園丁が

ドン・ペードロだったのである。またマリア・グレハムは後に宮廷教師となった。

ドン・ペードロは一八二六年の父ドン・ジョアン六世の死により、ポルトガルの王に推戴されてドン・ペードロ四世となったが、長女マリア・ダ・グロリア（後のドーナ・マリア二世）に王位を譲って退位した。しかしマリア・ダ・グロリアは未成年だったので、実弟ドン・ミゲルを保護者に任じた。

一八三一年四月七日、ドン・ペードロはブラジルの社会政情の悪化で皇帝を退位して、急遽ポルトガルに向った。ポルトガルに着いたドン・ペードロは息をつく暇もなく、実弟ドン・ミゲルと闘わねばならなかった。それはドン・ミゲルがマリア・ダ・グロリアの保護者でありながら、ポルトガルの王位横奪を企て、反乱をおこしたからである。

少年期から肝臓病をもつドン・ペードロは陣中での不規則な生活と過重な働きで、強烈な苦痛を感じるようになった。ようやくドン・ミゲルの反乱を制圧した一八三三年の一月にドン・ペードロは病臥し、高熱に呻吟する様は見ると哀れであった。彼の病床にあつて手厚い看護をしたのが妻アメリカであつた。息女マリア・ダ・グロリアはまだ一五才で父のやつれ行く姿を見て泣くばか

りであつた。

一八三四年九月二四日、午後二時半、ドン・ペードロは三六才を一期として息をひきとつた。そのケールス宮の彼の死の間は三六年前の彼の誕生の間だったのである。

レオポルジナ皇后（一七九七〜一八二六）

オーストリーの王女レオポルジナがドン・ペードロと結婚したのは一八一七年、二〇才であつた。またドン・ペードロは一九才であつた。

レオポルジナ王女とドン・ペードロとの縁談をまとめるために奔走したのはポルトガルの駐仏大使マリアルバ侯爵で、彼はそのためにパリとウィーンを数回往復している。



レオポルジナ皇后

当時オーストリーの王族、政府首相メッテルニツヒ公とマリアルバ侯との執拗な交渉の結果、レオポルジナ王女とドン・ペードロの婚約が成立した。

レオポルジナ王女とドン・ペードロの結婚式は当のドン・ペードロの出席なく、委任状によって一八一七年五月一三日にウィーンで挙げられた。同年九月にレオポルジナはブラジルのリオに到着してドン・ペードロと岳父ドン・ジョアンに初対面した。当時の有様が歴史画家ジャン・バチスト・デプレーによって描かれ、ブラジルの名画となっている。

レオポルジナ皇后の全名はマリア・レオポルジナ・カロリナ・ジョゼファ・フランシスカ・フェルナンダ・ベアトリス・デ・ボルボーンで、一七九七年一月二〇日、ウィーンに生れた。父はオーストリー王家のフランシス三世で、母はマリア・イザベル・ボルボーン・デ・ナポリスである。レオポルジナの生れたオーストリー王家の系図は一二直紀のスラビア地域、ゲルマン系ハブスブルグ家に流れを發している。ハブスブルグ家の始祖アルバート・ハブスブルグはスイスとアルザスとの中間地域の領主で、ハブスブルグ王家を創立したのが一一八六年である。

レオポルジナ王女の父フランシスコ一世は前後三回結婚したが、最初の妻エリザベス・デ・ウエーテンベルグとの間に子がなく、二度目の妻マリア・イザベル・ボルボーン・デ・ナポリスによって七人の子が生れた。レオ

ポルジナはその二女である。長女は一七九一年生れのマリア・ルイザで、ナポレオン一世の第二皇后となった。

レオポルジナの母方の祖母はオーストリー・ハンガリーの女王マリア・テレザ（一七一七〜一七八〇）である。

フランス革命で断頭台の露と消えたマリア・アントニエタ（ルイ一六世の王妃・一七五五〜一七九三）はマリア・イザベル・ボルボーン・デ・ナポリスの姉である。したがってマリア・アントニエタはレオポルジナの叔母に当る。

レオポルジナが幼年から少女時代をすごしたのはウィーンの新ブルン宮であり、姉のマリア・ルイザとともに送った年月が最も幸福であった。

ドン・ジョアンはブラジルが早晚独立国となることを予見し、長男ドン・ペードロの配遇者としてオーストリー王家のレオポルジナ王女に白羽の矢が立てられた。ドン・ジョアンはマリアルバ侯爵をウィーンに差遣し、オーストリー王家との交渉に当らせた。当時はまだ写真がなかったので、ドン・ペードロとレオポルジナ双方の肖像画の交換で話が進められた。ドン・ペードロの肖像画の額様には数十の宝石がちりばめられていた。

結婚後、ブラジルに渡ったレオポルジナは豊かな語学

の才能をもってブラジル語の習得につとめ、数カ月で普通会話ができるようになった。またヨーロッパから渡来した科学者を援助してブラジルの科学調査に当らせるなど、男勝りのところがあつた。それら科学者の主なものがフリーデリヒ・フォン・マルチユースやヨハン・バチスト・スピックスである。フローラ・ブラジレーラの植物図鑑のつくられたのもそのころである。

一八二二年九月七日午後、ドン・ペードロがサントスからサンパウロへの帰路、イピランガ丘上でリオから派遣された急使と相会し、ポルトガル政府の公文書とレオポルジナの添書を読んだことによつて独立宣言となつた。いわばレオポルジナの一通の書面がブラジルの歴史を大きく変えたのである。

ブラジル独立の英雄ドン・ペードロは家庭的には暴君のところがあり、しかもドミチラ・デ・カストロ・カント・エ・メーロ（サントス女侯爵）を愛人として宮廷に招じて女官長とするなど、必ずしも良き夫ではなかつた。そのためにレオポルジナ皇后はどれほどか苦悩と憂悶の生活をつづけたか知れない。

レオポルジナ皇后は一八二六年九月に八回目の妊娠をし、十一月からは肝臓炎を病み、流産の後、十二月一日に二九才で長逝した。その時のドン・ペードロ・デ・ア

ルカンタラ（ドン・ペードロ二世）は生後一カ月であった。レオポルジナ皇后はドン・ペードロ・デ・アルカンタラの生れる以前に二人の王子を産んだが、第一王子ドン・ミゲルは出産直後に死亡、第二王子ドン・ジョアン・カルロスは生後一〇カ月で死亡した。次に成長した四人の息女と一人の王子を挙げる。

マリア・ダ・グロリア（一八一九〜一八五三・ポルトガルの女王ドーナ・マリア一世。）

ジャヌアリア・マリア（一八二二〜一九〇一・ボルボーン・ナポリス王家のルイス・カルロスと結婚。）

パウラ・マリアナ（一八二三〜一八三三・一〇才で死去。）

ドーナ・フランシスカ（一八二四〜一八九八・フランスの王族ジョインビーレ公と結婚。）

ドン・ペードロ・アルカンタラ（ドン・ペードロ二世・一八二五〜一八九一）

レオポルジナがドン・ペードロ一世の妻としてブラジルに在ったのは九年にすぎないがその間妊娠八回で七人の子を産み、内外ともに多事多端の日をすごしたことが死期を早めたといえる。

レオポルジナ皇后が死の床に在る時に、ドン・ペードロはシスプラチナ戦にブラジル軍の陣頭指揮をしたが戦いに敗れ、悄然とリオに帰還した。そして彼はレオポルジナの遺体の前に身をふるわせて慟哭した。

レオポルジナ皇后はリオのサント・アントニオ修道院に葬られていたが、一九五四年のサンパウロ創設四〇〇年を期して、イピランガの独立記念塔の王室霊廟に移葬された。また一九七二年のブラジル独立一五〇年禁にはポルトガルからドン・ペードロ一世の遺体が同じくイピランガの王室霊廟にレオポルジナ皇后と相並んで移葬された。

ジョゼ・ボニファシオ（一七六三〜一八三八）

ブラジル独立の元勳ジョゼ・ボニファシオ・アンドラーダ・エ・シルバは一七六三年六月一三日にサントスに誕生した。

ジョゼ・ボニファシオの家系は一六四〇年のポルトガルのスペイン統治解放のころに発している。彼の祖父は、ポルトガルの自治権復帰のスペインとの戦闘に参加したところから、彼は愛国の革命児の血をうけていたといえる。

ジョゼ・ボニファシオは勉学のために父祖の国ポルトガルに渡ったのが一七八三年、二〇才であった。彼はコインブラ大学で法学と哲学を学んだ。

ジョゼ・ポニファシオがポルトガルに遊学した当時のブラジルの人口は四〇〇万で、ポルトガルの女王ドナ・マリア一世の発令で一切の工業が禁じられていた。産業では農業と原始的な鉱業があっただけで、織物その他の工業製品は、ポルトガルとイギリスの通商協定によつてイギリスから輸入されていた。

コインブラ大学を卒業したジョゼ・ボニファシオはリスボアの王立科学院会員となり、同時に王室顧問としてヨーロッパ各国の科学調査に当った。彼は一七九〇年にマヌエル・フェレーラ・ダ・カマラ・ピッテンコウ・エ・サー（ミナス製鉄工業の創始者）とともにフランスを訪れ、鉱山調査をした。当時彼はドイツのフライベルグ科学院で鉱物学を学んだ。



ジョゼ・ボニファシオ

ジョゼ・ボニファシオはヨーロッパの各地でフランス革命による思想的革新の動きを目撃した。彼はフランス

滞留中はブラジルのダイヤモンドに関する研究論文をフランス科学院に提出した。一七九四年から一七九六年にかけてはサキソニア、ボヘミア、ハンガリーを訪れた。当時、彼は著名の科学者の面識を得たが、その中に近代地理学の泰斗アレキサンダー・フォン・フンボルト（一七六九―一八五九）がある。

ジョゼ・ボニファシオはヨーロッパの科学調査を終えてから母校コインブラ大学の鉱物学の教授となった。そのころナポレオン戦争は全ヨーロッパにおよび、ポルトガルにもナポレオン軍が侵入した（ジョゼ・ボニファシオは学生の義勇軍を組織して指揮に当たった）。

彼は二〇才から五七才まで、三七年をヨーロッパにすごし、その間祖国ブラジルを客観的に観察し、その独立の必要性を痛感した。彼は思想的に急進的のところはあったが、左翼ではなかった。性格は剛直清廉で、ことに臨んで一步も譲らない頑固と一徹さはあった。それが同志に誤解され、政敵をもつ原因となった。

彼がブラジルに帰国して政界に投じたのは六〇代であった。摂政ドン・ペードロの要請で閣僚となり、内務、外務、司法相を兼摂した。

ジョゼ・ボニファシオはブラジル独立の大業成就の後、皇帝ドン・ペードロの専制政治を糾弾したために、皇帝

の怒りを買ひ、実弟アントニオ・カルロス、マルチン・フランシスコとともに国外に追放され、フランスのボルドーに六年をすごした。しかしドン・ペードロ一世が皇帝を退位するに当り、彼は追放を赦免されてブラジルに帰り、当時五才の幼君ドン・ペードロ・デ・アルカンタラの保護者に任命された。

その後はドン・ペードロの復位運動をめぐって政争を生じ、ジョゼ・ボニファシオは幼君保護者の職を刺奪されてパケタ島に蟄居を命ぜられた。後に彼は二テロイに住居を移し、一八三六年四月六日に七五才で長逝した。彼の郷土サントスにはボニファシオ三兄弟の銅像が建てられている。

イポリト・ジョゼ・ダ・コスタ（一七七四〜一八二
三）

ブラジル最初の民間新聞『コレーオ・ブラジリエンセ』はイポリト・ジョゼ・ダ・コスタ・ペレーラ・フルタード・デ・メソドンサによってロンドンで発行された。同紙は週刊で、一八〇八年六月一日から一八二二年一二月まで一回も休刊することがなく刊行された。

論説はイポリト自らが執筆し、ブラジル独立の必要性と奴隷解放、自由経済を根強く主張した。特にブラジル

独立の気運促進が主眼だったので、それが摂政ドン・ペードロによつて実現された一八二二年末の第一七五号をもつて最終号として廃刊された。しかして翌一八二三年九月一日に、使命を達成したイポリト・ジョゼ・ダ・コスタはイギリスのケンシントンに死去した。彼は名実ともにブラジル操縦界の先駆者であり、終始一貫、主義主張を固持したところに新聞人の面目躍如たるものがある。

『コレーオ・ブラジリエンセ』発行の目的はブラジルの独立促進にあつたためにポルトガルでは購読が禁じられた。このような状態にイポリト・ジョゼ・ダ・コスタは万難を排して新聞をポルトガルとブラジルに送った。

イポリト・ジョゼ・ダ・コスタは一七七四年八月一日にコロニア・ド・サクラメント（現在のウルグワイ領）に生れた。彼は一七九八年に二四才でブラジルとアメリカの経済関連性を調査するためにアメリカ合衆国を訪れている。一八〇一年に彼はポルトガルに渡り、更にフランスとイギリスに旅行したが、その間友人とともにマツソン運動（秘密結社）に参加し、ポルトガルの植民政策を批判したために、リスボアに帰着すると同時に逮捕され、三年の禁錮刑の宣告をうけた。しかし彼はイギリスに逃れ、ロンドンで翻訳の仕事をして生活した。当時彼

はイギリス婦人と結婚し、スセックス卿の後援で新聞『コレーオ・ブラジリエンセ』を発刊した。

彼は印刷工場を有たなかつたので他の印刷所で新聞を刷つたが、常に発行日の正確が保たれた。

このように彼はイギリスのおかげで新聞を出しながら、折にふれてイギリスの貿易政策を批判し『イギリスの帝国主義は背後の砲門を開くことなくして他国を經濟侵略するにある』と書き立てている。またそれを平然と許容しているところにイギリス人の老櫓さというか、大国民の襟度がうかがわれる。巖正にはイポリト・ジョゼ・ダ・コスタはブラジル人を父母として外地に生れて外国に死去したことになるが、彼ほど愛国の新聞人はない。

独立への道

ドン・ペードロは一八二二年八月一四日にリオのサン・クリストヴァン宮を出発してサンパウロに向つた。護衛兵とてなく、秘書フランシスコ・ゴメス・ダ・シルバ（シヤラサ）侍従長ルイス・サルダーニャ・ダ・ガーマ、宮廷武官フランシスコ・デ・カストロ・カント・エ・メーロほか従卒二人、全員六名であつた。

第一日（八月一四日）のドン・ペードロの宿所はサンタ・

クルース農園（旧ジェズイット教団所属農園）であった。
第二日（八月一五日）はイタグワイを経てサン・ジョアン・マルコスのカピトン・エラリオ・ゴームス・ノゲラの農園がドン・ペードロの宿所となった。

第三日（八月一六日）は同じくカピトン・エラリオ・ゴームスのトレス・バラス耕地にドン・ペードロは宿泊した。
第四日（八月一七日）ドン・ペードロはサン・ジョゼ・ド・バレロのパウ・ダリーヨ耕地に迎えられ、そこが宿舎となった。

第五日（八月一八日）ドン・ペードロ一行はロレーナから四キロ手前のランシヨ・デ・モレーラに向った。

第六日（八月一九日）ドン・ペードロはグワラチンゲタに着き、市民の熱烈な歓迎をうけ、カピトン・マノエル・ジョゼ・デ・メーロの邸宅が宿舎となった。グワラチンゲタを出たドン・ペードロはノツサ・セニョーラ・アパレシーダ教会に参拝した。

第七日（八月二〇日）ドン・ペードロの宿所となったのはピンダモニャンガーバから六キロ手前のアグア・プレータであった。ここでドン・ペードロはピンダモニャンガーバの代表人物コロネル・レーテ・ローボ・マルコンドレス（ピンダモニャンガーバ男爵）をはじめ土地の有力者と会見した。ピンダモニャンガーバにおいてもド

ン・ペードロは市民の熱意あふれる歓迎をうけ、同時に二名の名家の子弟が護衛兵として参加した。それらの名を刻んだオベリスクがピンダモニャンガーバの公園に建てられている。

第八日（八月二一日）のドン・ペードロの宿泊地はタウバテであり、ここでも住民の熱狂的な歓迎をうけた。当時のタウバテはバンデーランテの発祥地であるほか、パライバ平原の首都としての重要性をもち、著名人物が集中していた。タウバテでも五名の名家の青年がドン・ペードロの護衛兵に加わった。

第九日（八月二二日）の宿所はジャカレエーであった。第一〇日（八月二三日）ドン・ペードロの宿所はモジー・ダス・クルーゼスで当日彼は重要な公文書に署名した。

翌八月二四日はペーニャに到着して一夜をすごした。

明くる八月二五日の早朝、ノッサ・セニョーラ・ダ・ペーニャ教会のミサに出席したドン・ペードロは駒に跨がるや、平坦な湿潤地を通って一直線にサンパウロに向った。彼は沿道の市民の歓呼とともに出迎えの騎馬隊の先導で、旧ジェズイット学校のサンパウロ政庁に着いた。当時のサンパウロの人口は奴隷をふくめて一万二〇〇〇であった。

ドン・ペードロがサンパウロの主要人物と会談し、そ

の後サントスを訪れたのは九月四日であった。

マルケーザ・デ・サントス

皇帝ドン・ペードロ一世の愛人として、善悪いずれの意味にも有名だったドミチラ・デ・カストロ・カント・エ・メーロ（サントス女侯爵）は一七九七年一月二七日にサンパウロに生れた。

カストロ家はポルトガル以来の貴族の家系で、父ジョアン・デ・カストロ・エ・メーロは退役のコロネル（大佐）であった。

ドミチラは数人の兄弟姉妹の末娘で、一五才となった時には朝露をふくむバラのつぼみのような天成の美しさがあつた。彼女は一八一三年一月三日に一六才で、ミナス人の軍司令部づき士官フェリシオ・ピント・コエーリョ・デ・メソドンサと結婚した。その結婚披露宴はサンパウロのカストロ家で張られ、サンパウロはじまつて以来の豪華なものであつた。

しかしドミチラの結婚生活は数年で破綻し、彼女は夫と離別してサンパウロの実家に戻った。

一八二二年九月七日、摂政ドン・ペードロはサンパウロのイピランガ丘上でブラジルの独立宣言をし、当夜は

カーザ・デ・オペラでドン・ペードロの歓迎と独立宣言記念のオペラが催された。それに臨んだドン・ペードロは隣接の特別席の絶世の美人ドミチラを見て息づまるほどの昂奮を覚えた。当日の深夜、ドン・ペードロはドミテラの邸宅に忍び込み彼女と燃えるような抱擁をした。その時のドン・ペードロは二四才、ドミチラは二五才であつた。

その後ドン・ペードロはサンパウロからリオに帰着し、一二月一日に皇帝即位式を挙げた。その光栄の絶頂に在って『いま自分に不足するものはドミチラのみだ』と側近者にもらした。ドン・ペードロは侍従フランシスコ・ゴメス・ダ・シルバ（シヤラサ）の提言により、ドミチラを宮廷に招じ、女官とした。

ドミチラはドン・ペードロの寵愛を一身にうけて女官長となり、侯爵に叙されてマルケーザ・デ・サントスとなつた。

宮廷でのドミチラは政治にも干渉し、ジョゼ・ボニファシオをはじめマルチン・フランシスコ、ゴンサルベス・レードなどの怒りを買った。しかし彼女の強い個性はそれらの重臣は眼中にもないところがあつた。

ドン・ペードロはドミチラを公けの愛人とし、白昼彼女の莊園を訪れる傍若無人の振舞をした。

ドン・ペードロとドミチラとの間に次の三人の息女が生れ、いずれも授爵された。

ゴヤス女公爵

セアラ女公爵

イグアスー女伯爵

ほかに男児が生まれたが生後三カ月で死亡した。

一八二六年一月一日、ドン・ペードロの妻レオポルジナ皇后は流産が原因で逝去した。

一八二九年八月二日のドン・ペードロの再婚（相手はバヴァリア王家のアメリカ・デ・ルーヒテンベルグ姫）で、事情は一変した。

ドミチラはドン・ペードロに絶縁されてサンパウロに帰り、一八四二年のサンパウロ自由革命の主導者ラファエル・トピアス・アギアール少将とソロカバで結婚した。一八五七年に夫ラファエル・トピアスは病死し、寡婦となったドミチラはサンパウロの自邸にひきこもり、苦学生の援助と慈善事業につくした。彼女は奴隷解放の実施前、自発的に所有農場の奴隷に自由を与えた。

一八六七年、ドミチラ・デ・カストロ・カント・エ・メーロ、サントス女侯爵は七〇才でサンパウロに逝った。

ドン・ペードロの独立宣言

ドン・ペードロはリオからサンパウロへの道中、いたるところで大歓迎をうけた。しかもサンパウロ滞在中に絶世の美人ドミチラ・デ・カストロ・カント・エ・メーロ（後のサントス女侯爵）と相識る機会に恵まれていても満悦であった。

一方、リオのサン・クリストヴァン宮ではドン・ペードロの不在中に一大事がおこった。それはポルトガル政府からの最後の通牒を意味する公文書が着いたことである。公文書の内容はブラジルの自治権を撤回し、単なる植民としてポルトガルに隷属せしめ、ドン・ペードロの速刻ポルトガルへの帰還を強制するものであった。

レオポルジナ妃とジョゼ・ポニファシオはこの重要性から、早速サンパウロのドン・ペードロにポルトガル政府の公文書と添書を届けることを決定した。

ジョゼ・ポニファシオはペンを執るや

『摂政殿下、ポルトガル政府はいよいよ最後の切札を投じたり。われわれはこれ以上待つにおいてはポルトガルの奴隷たるはかなし。殿下よ、一刻も早く帰着の上決断を下されたし。寸時の遅れはブラジルの一大不幸を招く

であろう。ジョゼ・ボニファシオ。』

なおレオポルジナ妃の書面にはドン・ペードロの決意をうながす熱意あふれるものがある。『この愛するブラジルの運命を左右する重大事に臨み、いまほどわが夫の不在を嘆かわしく思うことなし。この上は速刻帰られブラジルのために処決されたし。いまや汝の勇氣と英智、英断によつてのみブラジルは救わるべし。庭の果物は既に熟したり。急ぎてそれを採り給え。レオポルジナ。』

ジョゼ・ボニファシオから急使の命をうけたアントニオ・ラーモス・コルデーロ少佐とパウロ・ベルガロ中尉は緊張のうちに駒に鞭あてて馳け出した。

一八二二年九月七日の早暁、ドン・ペードロ一行はサントスを出発し、海岸山脈の岐路を越えてピラチニンガ高原に近づきつつあった。その日のドン・ペードロは栗色の駿馬に乗り、軍服を着用して長靴を穿き、帽子には青赤の飾り毛がつけられていた。

恰も同時刻にサンパウロの政庁に到着した急使二人は、摂政ドン・ペードロはいまごろサントスからの帰路にあると聞き、直ちにサントス道に向つた。そして彼ら急使がイピランガの小流にさしかかった時、遙か丘上にドン・ペードロ一行が現われた。

ドン・ペードロはパーデレ・ベルシオールとカント・

エ・メーロ少佐を先頭に、十数名護衛兵がつづいていた。リオからの急使二人は息をはずませてドン・ペードロに三通の書面を渡した。その一通はポルトガル政府の公文書、他の二通はジョゼ・ボニファシオと妻レオポルジナの添書であった。それを読むドン・ペードロの表情は硬張り、

『ポルトガル政府はあくまでもブラジルを奴隷の境涯におくことを望んでいる。それなればブラジルはいま直ちにポルトガルから離脱する』とて青と赤色のポルトガルの肩章をむしり取って地上に投げつけ、つづいて『独立か、死か』の叫びをした。時刻は午後四時半、イピランガの草原には風が吹きつけて赤い土埃が立っていた。

当夜はサンパウロのカーザ・デ・オペラで独立宣言記念のオペラが上演された。劇場に臨んだドン・ペードロは観衆の拍手に応えて会釈した。観衆はドン・ペードロに向って一斉に『ビーバー・プリメーロ・インペラドール・ド・ブラジル』（ブラジル初代皇帝万才）を連呼した。

独立戦争

ドン・ペードロはサンパウロでの独立宣言の後、五日を要して九月一四日にリオに帰着した。閣僚と宮廷人は

黄緑のリボン章をつけて摂政を歓迎、上院は一〇月二日のドン・ペードロの誕生日を期して皇帝に顕揚する決定をした。

ドン・ペードロは一八二二年一月一日にリオのカテドラル（現在のカルモ教会）で皇帝即位式を挙げ、制定されるべき憲法の遵奉を誓約した。その即位式はナポレオン一世のノートルダムにおいての戴冠式を模倣した豪華なものであった。

ドン・ペードロによる独立宣言の後は或るプロビンシア（県）はそれを認めるに相当の期間を要した。何故かなるにブラジルの独立は国民の総意でなし遂げられたものでなく、摂政ドン・ペードロと一部の政治家によつて実現されたために、一般民衆には独立の実感がなかった。

またドン・ペードロの独立宣言後はブラジル駐留のポルトガル軍総司令官イナシオ・ルイス・マデーラ・デ・メーロ將軍（一七七五―一八三三）はリオ・デ・ジャネイロ政府の発令を認めず、反乱をおこした。このポルトガル軍の反乱はバイアを中心にマラニョン、ピアウイー、パライー、南のシスプラチナにまでおよんだ。それは独立戦争と呼ばれ一八二三年七月二日までつづいた。

ブラジル軍は民兵と義勇兵で構成され、特に海軍が重要な役割をなした。当時ブラジルの海軍は急速に編成さ

れたが、それはイギリス人のトーマス・コックレーン提督によってなされた。コックレーン提督はそれ以前、チリーの独立戦争を指導し、ドン・ペードロの招聘でブラジルの独立戦争を指揮した。

ポルトガル軍は数において優勢で、マデーラ將軍は自信満々として一八二二年一月八日、バイアのピラジャの戦闘に臨んだが、ブラジル軍に敗れた。ブラジル陸軍部隊の総司令官はフランス人のペードロ・ラバトウ大將だったが、後にジョゼ・ジョアキン・デ・リーマ・エ・シルバ將軍と更迭した。

一八二三年七月二目のサルバドールの激戦でポルトガル軍が大敗し、ブラジル軍の勝利を決定的とした。

マデーラ部隊は長期の戦争に疲れ果て、加うるに物資欠乏で戦闘氣力を失ない、艦隊を率いてトードス・オス・サントス湾を撤退した。ジョン・テラー提督の旗艦『ニテロイ』は敗走するポルトガル艦隊をテージョ河口近くまで追撃した。それ以前、北部ではマラニョンとピアウイー駐留のポルトガル軍がブラジルの民兵軍に挑戦した。ドン・ペードロはマラニョンとピアウイー急接のためにコックレーン提督の艦隊を派遣した。コックレーン提督はジョン・グレンフル大將（一八〇〇〜一八六九）の協力を得てマラニョンのポルトガル軍との戦闘に圧勝し

た。その戦功によりコックレーン提督は授爵されてマラニオン侯爵となった。

ジョン・グレンフェルの部隊はマラニオンからパラーに進撃し、ベレン地域のポルトガル軍の掃蕩戦を敢行した。

一方シスプラチナの状況も険悪となり、カルロス・フレデリコ・レコール大将の占領軍をめぐって住民はブラジル派とポルトガル派に対立して反乱がおこったが、ドン・アルヴァロ・ダ・コスタ・デ・マセド司令官による一八二三年一月采の戦闘でブラジル軍の勝利となり、独立戦争は終末した。

トーマス・コックレーン提督（一七七五～一八六〇）

トーマス・コックレーン提督は一七七五年にスコットランド、アンスフィールドの名門ダンドナルド伯爵家に生れた。父はアーチボルド・コックレーン卿であった。

トーマス・コックレーンは一七九三年にイギリス海軍に入籍以来、海軍軍人に終始した。

一七九八年から一八〇〇年に彼はナポレオン戦争に従軍し、一八〇一年に捕虜となった。

一八〇二年にエジンバラ大学に入学し、一八〇六年

にはイギリス国会議員の席を占めた。

一八一四年にはイギリス海軍部内での或る汚職事件の容疑者として追放され、チリーに渡った。当時彼はホセ・デ・サンマルチン將軍の要請でペルー探検に参加し、一八一九年にはチリー独立戦争の指導者として活躍した。チリー独立戦争でのコックレーン提督の功績を知ったドン・ペードロは彼をブラジルに招聘して独立戦争の指揮を委ねた。

コックレーン提督はブラジルの海軍を組織し、バイアにおいてのポルトガル軍との戦闘にはじまり、マラニョン、ピアウイーの戦いに目覚ましい戦功を立てた。彼は授爵されてマラニョン侯爵となった。

コックレーン提督は一八二五年にブラジルを去り、再びブラジルを訪れることがなかった。

彼の全名はトーマス・アレキサンダー・アーチボルド・コックレーンで、一八六〇年にケンシントンに死去し、ウエストミンスター・アベーに葬られた。

ジョン・テイラー（一七九六〜一八五五）

トーマス・コックレーン提督と相ならんでブラジル独立戦争の功労者にイギリス人のジョン・テイラーがある。

独立戦争の勃発当初ジョン・テイラーは既にリオに居住していたがドン・ペードロに乞われ、旗艦『ニテロイ』の艦長となってバイアに向った。つづいて一八二四月三月、ペルナンブーコに赴いてブラジル艦隊を指揮して武名を高め、独立戦争の英雄と讃えられた。

ジョン・テイラーはイギリスのグリーニッチに生れ、海軍士官となって間もなくブラジルに渡った。

彼がブラジル海軍の艦長となった報に接した父は彼に一シリングを送金し、これで綱を買って首を吊るべしと書かれてあった。

ジョン・テイラーは戦後もブラジルに住みつづけ、一八五五年一月二六日にリオに死去した。

ジョン・パスコー・グレンフェル（一八〇〇〜一

八六九）

ジョン・パスコー・グレンフェルは一八〇〇年九月三〇日、イギリスのサーレーに生れた。

彼は一八一九年から一八二〇年に、トーマス・コックレーン提督とともにチリーの独立戦争にスペイン軍と闘い、スペインの旗艦「エズメラルダ」の拿捕に戦傷を負った。

一八二三年六月、グレンフェルはブラジル海軍に入籍し、艦長としてバイアをはじめマラニョン、ペルナンブーコ、パライー、シスプラチナの独立戦争に奮戦した。彼はシスプラチナの戦闘で戦傷を負い、片腕を失なった。

ジョン・グレンフェルは独立戦争後もリオ・グランデ・ド・スールのファラポス戦と一八五二年のローザス軍との闘いにも参加した。

グレンフェルはリヴァープールのブラジル領事として在任中の一八六九年に死去した。

ペードロ・ラバトウ（一七六八〜一八四九）

ペードロ・ラバトウはフランス軍人で、フランスに生れてブラジルのバイアに逝った。

彼の生涯は冒険に満ちており、ナポレオン戦争に参加して後に南アメリカに渡り、コロンビアとチリーの独立戦争にシモン・ボリバルに協力して闘い、カルタジェナに住んだが追放されて仏領ギヤナのカインに逃れた。

カインからはモンテビデオを経て一八一九年にリオ・デ・ジャネイロに着き、ドン・ペードロに乞われて独立戦争にブラジル軍総司令官となってバイアのポルトガル軍と闘った。

当時ラバトウはバイアのフェーラ・デ・サンタアナを本営として、イナシオ・ルイス・マデーラ・デ・メーロ大を司令官とするポルトガル軍とのピラジャの戦闘（一八二二年一月八日）に大勝した。

その後はブラジル軍の部隊長との間に給料を生じ、ラバトウ大將はジョゼ・ジョアキン・デ・リーマ・エ・シルバ大佐と交替してリオに引揚げた。

彼は一八三九年に元帥となり、リオ・グランデ・ド・スールのアラポス革命討伐のためにヴァカリアに向った。それから二年後にリオに住み、更にバイアに移転してピラジャ戦の英雄として迎えられた。

晩年のラバトウは恵まれずしてバイアのサルバドールに没した。

修道院を死守したジョアナ・アンジェリカ

一八二二年二月一九日のバイアのサルバドールにおいてのできごとである。

ブラジル独立の気運が高まりつつある時、イナシオ・ルイス・マデーラ・デ・メーロ大將に率いられるポルトガルの駐留軍の一部隊が、サルバドールのブラジル軍第三部隊を襲撃し、部隊長を捕虜にした。

勝ち誇ったポルトガル軍の兵士は市街を進軍し、住宅や商店に乱入して暴挙を敢てした。そしてラバ修道院が眼につくや、斧をもって門を破り、内部に闖入した。同修道院は童女ばかりで、荒れ狂う兵士には如何ともすることができなかつた。その時、両手を広げて兵士らの前に立ったのは修道院長のジョアナ・アンジェリカであつた。

『ここは神の在す聖なる場所である。もし汝らが一步でも内部に侵入するには、この一人の女性の屍を越えて行くべし』と敢然と云い放つた。さすがに気味悪いまでに静かとなつたが、閃光一瞬、ジョアナ・アンジェリカは上人の兵士の剣に胸を刺され、血に染まって倒れた。それを見たポルトガル軍の兵士は恐れをなし、上官にうながされて退去した。それから二時間後にジョアナ・アンジェリカは神に感謝し、祈りながら絶命した。

ジョアナ・アンジェリカの貴い犠牲によつて、数十名の童女とラバ修道院が護られたのである。

ジョアナ・アンジェリカ・デ・ジェズスは一七六二年にサルバドール著名の一素封家に生れた。父はカピトン・ジョゼ・タヴァレス・デ・アルメーダ、母はカタリナ・マリア・ダ・シルバでポルトガル以来の名門であつた。

篤い宗教的雰囲気に育ったジョアナ・アンジェリカは一七八二年三月に二〇才でノツサ・セニョーラ・ダ・コソセーション・ダ・ラパ修道院の童女となった。司修道院はマリアナ派所属で、一七三三年のドン・ジョアン五世の治世に建設された。

ジョアナ・アンジェリカは一七九八年にサルバドールのマリアナ聖道会の書記長に任命され、一八〇一年にはラパ修道院副院長となった。しかし一八一七年にマール・デレ・トマジア・ダ・コソセーションの後継として修道院長の任についた。

一八二三年七月二日、サルバドールの戦鬪に敗れたポルトガル軍はポルトガルに撤退した。そのポルトガル艦隊がトードス・オス・サントス湾を抜錨、退去するに当たって、兵士らはラパ修道院の乱行を悔え、ひそかにジョアナ・アンジェリカの冥福を祈った。

女性兵士マリア・キテリア

サンパウロのパウリスタ博物館の栄光の間に軍服姿の女性兵士の肖像画が異彩を放っている。それは男装して独立戦争に従軍したマリア・キテリアの勇姿である。

マリア・キテリアがバイアの義勇兵を志願して独立戦

争に参加した動機は、百年戦争に神の啓示をうけ、祖国フランスを救うべく、敢然起ったジャンヌ・ダークを思わせるものがある。ブラジルの独立戦争はサルバドールに発し、ついでピラジャとカブリト、パラグワス―河口に激戦が展開された。

マリア・キテリアの父はカシヨエーラの農場主で、非常な徳望家だったが既に老齢で、しかも一人の男子もなく、独立戦争に参加し得ないことを歎いていた。せめて自分がもつと若ければ、と歎息する父を見たマリア・キテリアは秘かに従軍の決意をした。彼女は父に内密で男装してカシヨエーラの義勇軍司令部を訪れ、義勇兵を志願した。幸い彼女は射撃術に長じていたので直ちに採用されて戦線に向った。それがトードス・オス・サントス湾のパラグワス―河口、ピツバとイタブアンの戦闘である。マリア・キテリアはそれらの戦闘に果敢の奮戦をし、著しい戦功を立てた。それが皇帝ドン・ペードロの知るところとなつて、彼女に最高勲章オルデン・インペリアル・デ・クルゼーロが授与された。

マリア・キテリアは宮廷に伺候して皇帝ドン・ペードロに謁見の栄を得た。当日ドン・ペードロはマリア・キテリアの乞いに応じて彼女の父宛に一過の手紙を書いた。それはマリア・キテリアが、父の許可なくして兵士を志

願して戦地に向ったことを詫びるものであった。カシヨ
エーラの農場で、皇帝ドン・ペードロの書面を読むマリ
ア・キテリアの老父は感涙にむせびながら彼女を迎えた。

ブラジル独立の承認

ジョゼ・ポニファシオはポルトガル、イギリス、フランス、オーストリー、アメリカ合衆国、ローマ教皇庁にそれぞれ全権公使を差遣してブラジル独立の承認を求めた。

アメリカには外交官ジョアン・シルベストレ・レベロが赴き、一八二四年五月二六日付をもってブラジルの独立が承認された。外国ではアメリカ合衆国がブラジルの独立承認の最初である。

ヨーロッパ諸国のブラジル独立の承認は容易ではなかった。特にポルトガルは一八一五年のウィーン会議で、自由主義に反対し、絶対王制による植民政策を主張した関係からもブラジルの独立を認めるに相当の期間を要した。イギリスの干渉と圧力で、一八二五年八月一日によりやく承認された。当時のブラジル全権公使はバルバナ侯爵（フェリスベルト・カルデーラ・ブラント・ポンテス）、イギリスの仲介公使はサー・チャールス・スチュ

アートであった。このようにブラジルの独立承認に好意的態度を示したイギリスは友好国ポルトガルに義理を立てると同時にブラジルとの貿易を有利に保持する二重の気配りをした。

一八二五年八月二十九日、ポルトガルのブラジル独立承認の調印がされたが、ブラジル国内のポルトガルの施設物の破壊と焼失に対する賠償として二〇〇万ポンドの支払いの義務がブラジルに負わされた。それについてローマ教皇庁は一八二五年一月二六日、フランスは一八二六年六月七日、オーストリーは一八二七年六月一七日にブラジルの独立を承認した。

フェリスベルト・カルデーラ・ブラント・ポンテス（バルバセナ侯爵一七七二〜一八四一）

フェリスベルト・カルデーラ・ブラント・ポンテスは初代バルバセナ侯爵の孫に当る。

彼は軍人、政治家、外交官で、ミナスのマリアナに誕生、リスボアの海軍兵学校に学び一九才で海軍大尉となり、アンゴラの長官補佐として赴任した。ブラジルに帰国してはバイア連隊の司令官となった。当時バイアに蒸気機関を導入し、ブラジルで最初の蒸気船を建造した。

イギリス政府にブラジル独立の承認を交渉し、成功したのも彼である。

ドンペードロー世の二度目の結婚では、バヴァリア王家のアメリカ・ルーヒテンベルグ姫を候補に挙げ、婚約を成立させた。

バイア選出連邦議員とアラゴアス選出上院議員を歴任、軍人としてはブラジル軍総司令官としてシスプラチナに遠征した。

第九章 第一次帝政

第一次帝政

一八三二年一月一日のドン・ペードロの皇帝即位から一八三一年四月七日の皇帝退位までが第一次帝政である。

ブラジルの独立宣言をした当時のドン・ペードロは国民の絶大の信望があつたが、それは永続性がなかつた。彼が政治的に行詰り、退位を余儀なくされたのは次の理

由による。

ドン・ペードロの専制政治

ドン・ペードロの独断による議会解散

国内の反乱主導者に対する過酷な処罰

ポルトガルの王位継承への干渉

対アルゼンチン宣戦布告

シスプラチナの敗戦

第一次帝政の経済は金融の逼迫と貿易の不均衡のため
非常な難局におかれた。

ドン・ペードロの父ドン・ジョアン六世のポルトガル
への帰還に際しては、国庫から五〇〇万クルザード相当
の金と宝石を持ち去られ、また独立によるポルトガル政
府への賠償金の支払い、徴税組織の不備、シスプラチナ
戦と赤道連盟革命の討伐などの莫大の出費で国家財政は
枯渇状態にあった。貿易面では法外に高価な外国製品の
輸入に対し、低価の国内産物（主に農産物）の少量輸出
で、著しい入超を示した。輸出品物の主位を占める砂糖
は西インド諸島の砂糖とヨーロッパの甘菜砂糖との市場
での競走があり、きわめて低相場で輸出されていた。綿
花ではアメリカ根という強敵があり、煙草と皮革の生産
高はラプラタ諸国よりも少なく、輸血量も僅かであった
唯一つ主要産業となりつつあったコーヒーがブラジル経

済の支えとなったのは第二次帝政である。

ドン・ペードロが憲法制定議會を召集したのは一八二二年六月三日だが、実際に議會が成立して憲法起草に着手されなのは一八二三年五月である。議員には各界の代表人物が選ばれ、憲法内容が審議されたが、閣僚と地方長官の任命と罷免の権能は皇帝にありの条項で、議會はドン・ペードロと正面衝突した。それは絶対王制を意味し、根本的に国民の意志に反するものであった。遂には議會は混乱状態と在り、激昂したドン・ペードロは軍隊をもって議會を包囲させ、解散を命じたのが一八二三年二月である。

かつての独立運動の主導者ジョゼ・ボニファシオはドン・ペードロと意見相容れず、内閣を去って野党にまわった。そこでドン・ペードロはジョゼ・ボニファシオとその実弟マルチン・フランシスコほか数名の政界の重鎮の国外追放令を発した。ボニファシオ兄弟はブラジルの去ってフランスのボルドーに住むことになる。

ドン・ペードロは別の憲法制定委員を任命し、一八二四年三月二五日に憲法が発令された。憲法の骨子はブラジル帝国の立憲政体は司法、立法、行政、統師の四権から成り、閣僚と議員、地方長官の任命と罷免、議會解散の権限は皇帝によって掌握されるとあった。

地方長官の任命と更迭権が皇帝にあることを知った北東部に直ちに悪反響がおこった。特にペルナンブーコ人はオランダ軍の侵略以来、郷土防衛と自由のために闘い、またポルトガル人に対抗したところからも、ドン・ペードロの専制政治に真向から反対し、地方長官の任命はそれぞれのプロビンシアに委任せよと叫んだ。

憲法発布直前の一八二四年六月、ペルナンブーコに革命が勃発した。それはコンフエデラソン・ド・エクアドール（赤道連盟）と称され、セアラ、リオ・グランデ・ド・ノルテ、パライバ、アラゴアスに波及した。

ドン・ペードロは軍隊を差向けて革命を鎮圧し、主導者を捕縛して処刑した。その中にカルメリッタ教派のフレ・カネカ（ジョアキン・ド・アモール・デヴィノ・ラベロ）がいた。

ブラジル皇室の系図

ブラジルの初代皇帝ドン・ペードロ一世の父はドン・ジョアン六世、母はドーナ・カルロツク・ジョアキナであり、祖父はドン・ペードロ三世（ポルトガル）、祖母はドーナ・マリア・ビトリア・デ・ボルボーソ（ドーナ・マリア一世）である。

ドーナ・マリアは父ドン・ジョゼ一世の死によって女王に即位してドーナ・マリア一世となった。

ドン・ペードロ一世はドン・ジョアン六世の第四王子だが、その兄弟姉妹を次に挙げる。

- 一・ドーナ・マリア・テレザ（一七九三―一八七四、スペインの王子ドン・ペードロ・カルロスと結婚）
- 二・ドン・アントニオ（一七九五―一八〇一、六才で死亡）
- 三・ドーナ・マリア・イザベル（一七九七―一八二七、スペインの王フェルナンド七世と結婚）
- 四・ドン・ペードロ（一七九八―一八三四、ブラジルの初代皇帝、ポルトガルのドン・ペードロ四世）
- 五・ドーナ・マリア・フランシスカ（一八八〇―一八三四、スペインの王ドン・カルロスと結婚）
- 六・ドーナ・イザベル・マリア（一八〇一―一八七六、一八二六年にポルトガルの摂政となる）
- 七・ドン・ミゲル（一八〇二―一八六六、ポルトガルの王位横奪を企て、兄ドン・ペードロと闘う）
- 八・ドーナ・マリア・ダ・アスンソン（一八〇五―一八三四、独身で死去）
- 九・ドーナ・アンナ・ジェズス・マリア（一八〇六―

一八六五、フランスの貴族ローレンソ侯爵と結婚)

ドン・ペードロ一世とマリア・レオポルジナ皇后との間には次の子が生まれた。

一、ドーナ・マリア・ダ・グロリア(一八一九〜一八五三、ポルトガルの女王ドーナ・マリア二世)

二、ドン・ミゲル(一八二〇、出産間もなく死亡)

三、ドン・ジョアン・カルロス(一八二一〜一八二二、生後十一ヶ月で死亡)

四、ドーナ・ジャヌアリア(一八二二〜一九〇一、アキラ伯爵と結婚)

五、ドーナ・パウラ(一八二三〜一八三三、一〇才で死亡)

六、ドーナ・フランシスカ(一八二四〜一八九八、フランスの王族ジョインビーレ公と結婚)

七、ドン・ペードロ・デ・アルカンタラ(一八二五〜一八九一、ブラジルの第二代皇帝)

ドン・ペードロ一世の第二皇后アメリア・ルーヒテンベルグ

ドン・ペードロー一世は一八二六年一二月一日にレオポルジナ皇后に死別し、一八二九年八月二日にバヴアリア王家のアメリカ・ルーヒテンベルグ姫と再婚した。

アメリカ皇后（一八一二―？）の全名はアメリカ・アウグスタ・エウジェニア・ナポレオナ・ボルネー・デ・ルーヒテンベルグで、父はフランスの貴族エウジェニオ・デ・ボルネー侯、母アウグスタ・デ・ルーヒテンベルグはバヴアリア王家の息女であった。

エウジェニオ・デ・ボルネーの父アレキサンダー・デ・ボルネー子爵は軍人で、フランス国会の議員であった。そのボルネー子爵が病死し、寡婦となった美貌のボルネー夫人がナポレオン一世と再婚してフランスの皇后となったジョゼフィン（マリー・ジョゼフィン・タツチャー、一七六三―一八一四）である。

アレキサンダー・デ・ボルネー子爵と妻ジョゼフィンとの間にエウジェニオとオルテンシアの二人の子があった。この二人の子を連れてジョゼフィンはナポレオンと結婚した。自身の子のなかったナポレオンはエウジェニオを実子同様に愛した。そのエウジェニオが成長してバヴアリア王家のアウグスタ・デ・ルーヒテンベルグ姫と結婚した。結婚式に臨んだナポレオンは最大の祝福をして新夫婦の幸福を希った。やがてアウグスタ妃が懐妊し

たと聞くや、ナポレオンは大いに喜び、男の子の与えられることを希った。しかし生れたのは玉のような女兒であつた。その女兒はナポレオンにとっては義理の孫娘であり、将来のブラジル皇帝ドン・ペードロ一世の第二皇后たるべきアメリカ姫である。

アメリカ姫は一八一二年七月一二日にイタリアのミラノに生れた。

ナポレオン軍のポルトガル攻撃を避けて、ブラジルに王室を移したドン・ジョアン六世の長男ドン・ペードロがナポレオンの孫娘アメリカ姫と結婚するとは運命の皮肉である。

ドン・ペードロはレオポルジナ皇后に死なれて二年が過ぎたので軍人外交官のバルバセナ侯爵（フェリスベルト・カルデーラ・ブラント・ポンテス）をヨーロッパに差向けて第二の嫁さがしをやった。

バルバセナ侯爵は以前にウィーンのハブスブルグ王家、フランシスコ一世の息女マリア・レオポルジナとドン・ペードロの縁談をまとめるためにマリアルバ子爵とともに奔走した人物である。つまり彼はカザメソテーロ（仲人）としての経験者である。

バルバセナ侯爵はヨーロッパ各国の王女や王族の中からドン・ペードロの第二皇后の候補者を物色して交渉に

当った。ところがドン・ペードロの評判は頗る悪く、どこでも相手にもされず頭から拒絶された。

しかし或る日、バルバセナ侯爵から快報がもたらされた。それはバヴァリア王家のアメリカ姫とドン・ペードロとの婚約が成立したということである。しかもアメリカ姫は芳紀一七才の絶世の美人とのこと。バルバセナ侯爵の書面は宮廷侍従のフランシスコ・ゴメス・ダ・シルバ（シヤラサ）に宛てられたが、シヤラサが読み上げるのを聞くドン・ペードロは少年のように躍上して歓声を挙げた。彼の眼中にはもはや愛人のドミチラ（サントス女侯爵）はなく、若く美しいアメリカ姫の容姿が描かれていた。

それから数日を過ぎてドン・ペードロはドミチラに離別を宣言した。ドン・ペードロには愛する女性を冷酷にあしらって快感を覚える性癖があった。

気丈のドミチラはかつて涙を見せたことはなかったが、ドン・ペードロと別れて宮廷を去るに当り、一人侘しくすすり泣いていたようであった。

ドン・ペードロとアメリカ姫の結婚式は委任状によって一八二九年八月二日にバヴァリアの首都ミュンヘンで挙げられた。そして同年一〇月一六日にアメリカ姫はブラジルから差遣された軍艦でリオに到着した。

礼砲の轟きとともに美しい人形のようなアメリカ姫が上陸するや、緑色の燕尾服を着用したドン・ペードロがアメリカ姫の手をとって車中に入ろうとした時にそれを遮ったのがバルバセナ侯爵であった。

『皇帝、アメリカ姫の母君アウグスタ妃からの懇篤な伝命ですが、教会での結婚儀式が済んだ後にアメリカ姫を皇帝にお渡しするようにとのことです。』
とてバルバセナ侯爵はアメリカ姫と車に乗り、皇帝を残したまま馳け去った。ドン・ペードロは一人でその後から教会に向った。

結婚式を終えて祝賀舞踏会が催されたが、それに出席した上流婦人は全部バラ色の夜会服をつけ、眼を奪うばかりの絢爛さであった。それはアメリカ姫の好みがバラ色だったからである。またドン・ペードロとアメリカ姫の結婚記念にローザ勲章が設定された。

ドーナ・マリア二世（一八一九〜一八五三）

ドーナ・マリア二世（マリア・ダ・グロリア）は一八一九年にリオ・デ・ジャネイロに生れた。父はドン・ペードロ一世で母はマリア・レオポルジナである。

マリア・ダ・グロリアが七才の時、一八二六年に祖父

ドン・ジョアン六世が死去し、父ドン・ペードロ一世がポルトガルの王に推戴されてドン・ペードロ四世となった。

しかし、ドン・ペードロはブラジルとポルトガルの王を兼ねることの不合理から、一八二六年五月二日にポルトガルの王位を長女マリア・ダ・グロリアに譲って退位した。

ドン・ペードロの意向はマリア・ダ・グロリアと実弟ドン・ミゲルとを婚約させ、マリア・ダ・グロリアが成年に達するまでドン・ミゲルを保護者とすることになった。

マリア・ダ・グロリアはブラジルからウィーンに赴き、彼女の亡母レオポルジナの父フランシスコ一世の許で教育をうけた。その間ドン・ミゲルは反乱をおこして強引にポルトガルの王位についた。その期間は一八二八年から一八三三年である。

ドン・ペードロ一世は一八三一年四月七日にブラジルの皇帝を退位してポルトガルに去り、実弟ドン・ミゲルと闘って彼を王位から追放する。

一八三四年九月二四日、ドン・ペードロはケールス宮に死去した。同年マリア・ダ・グロリアは一五才で成年式を挙げて即位し、ドーナ・マリア二世となった。彼女

は一八三六年四月にサキセ・コブルゴ・ゴッタ公と結婚して十一人の子を得た。そのうちのドン・ペードロとドン・ルイスが前後してポルトガルの王位についた。

ドーナ・マリア二世は一八五三年にリスボアに逝去し、サン・ビセンテ・デ・フォーラ教会に葬られた。

アントニオ・カルロス・リベロ・デ・アンドラーダ（一七七三〜一八四五）

一七七三年にサントスに生れ、コインブラ大学で法学と哲学を修めた。帰国して郷土サントスの判事となり、一八一七年にはオリンダの判事として赴任し、一八一九年以後は政界に投じた。

一八二一年にブラジル代表議員となってリスボアの議事に臨み、ブラジルの自治制を強調した。その勇氣と卓抜する雄弁はミラボーに比肩するといわれた。

ブラジルの独立後は自由党のリーダーとして活躍したが、ドン・ペードロと意見相反し、議会解散後は兄ジョゼ・ボニファシオ、実弟マルチン・フランシスコとともにフランスに追放された。

彼はドン・ペードロ退位後の執政政府の閣僚とはならず、ドソ・ペードロ・デ・アルカンタラの皇帝即位を早

める政治工作をした。後にアントニオ・カルロスはペルナンブーコ選出上院議員となり、一八四五至一二月五目にリオ・デ・ジャネーロに没した。

マルチン、フランシスコ・リベロ・デ・アンドラーダ（一七七五年～一八四四）

ジョゼ・ボニファシオの実弟、サントスに誕生。コインブラ大学で数学と哲学を専攻、大学卒業後は兄ジョゼ・ボニファシオとともにヨーロッパ各国の科学調査に当る。

一八二〇年にブラジル帰国後もサンパウロの鉱物調査を担当する。次いで政界に入り、ドン・ペードロの組閣に当って蔵相となったが間もなく辞任して下院議員の席を占める。その後ドン・ペードロによって議会は解散され、兄ジョゼ・ボニファシオ、アントニオ・カルロスとともに国外に追放され、フランスに五年をすごした。

一八二八年に特赦をうけて帰国し、ミナスから立候補して再び下院議員となる。

ドン・ペードロの皇帝退位後は執政政府の閣僚たることを拒絶し、自由党政府の最初の閣僚となり、ドン・ペードロ・デ・アルカンタラ（ドン・ペードロ二世）の成年

式を早める運動をおこす。

一八四二年のサンパウロの自由革命には参加しなかったが、間接の責任者として皇帝の侍従を罷免されて下野した。マルチン・フランシスコは実弟ジョゼ・ボニファシオの娘（彼の姪、ドーナ・ガブリエラ・フレデリカと結婚した）。

マルチン・フランシスコは初代から三代にわたる法学者政治家として名高い。

ニコラウ・カンポス・ヴェルゲーロ（一七七八～一八五九）

政治家、法学者、耕主ニコラウ・カンポス・ヴェルゲーロは一七七八年にポルトガルのトラス・モンテスに生れ、一八五九年リオに死去した。一八〇八年、コインブラ大学の法科を卒業して直ちにブラジルに移住、サンパウロに法律事務所を開設し、同時にビラシカバトリメーラに耕地を設けた。

ニコラウ・カンポス・ヴェルゲーロはポルトガル人だが、サンパウロのプロビンシア議員に選ばれ、次いでブラジル代表議員としてリスボアの議会に臨み、ブラジルの自治制を強調して論陣を張った。

一八二三年に国会議員となったが、ドン・ペードロによる議会解散で、ジョゼ・ボニファシオ兄弟とともに国外追放された。追放が赦免されて帰国しては、自由党に所属して再び政治活動に入った。

一八二八年には上院議員となり、ドン・ペードロの退位後は一八三一年六月まで三頭報政官の一人となり、次いで蔵相の任についた。

一八四二年のサンパウロの自由革命にはジオゴ・フェージョとラファエル・トビアスを支持し、ソロカバに陣容を構えた。

ニコラウ・カンポス・ヴェルゲーロは一八四〇年に、黒奴に代る自由労働移民八〇人（ドイツ人とポルトガル人）をリメーラのイビカバ耕地に導入して分益制を試みたが好結果を生まなかった。いずれにしてもヨーロッパから自由労働移民を入れたことではヴェルゲーロ上院議員が最初である。

彼は一八五九年に一才でリオに逝った。

フレール・カネカ（一七七九〜一八二五）

カルメリッタ教派の僧侶フレール・ジョアキン・ド・アモール・ジビノ・ラベロ・エ・カネカはレシフェの出身

で、オリンダの神学校に学んだ。彼はすぐれた人格と博
学に合せ、稀有の論客であった。自由主義著の彼はドン・
ペードロ一世の専制政治に反論を唱え、新聞『チフィス・
ペルナンブカーナス』を発刊して世論を喚起した。

遂にはフレ・カネカが主導者の一人としてコンフェ
デラソン・ド・エクアドール（赤道連盟革命）がおこつ
た。この革命はセアラ、ピアウイ、リオ・グランデ・ド・
ノルテ、パライバ、アラゴアスに波及した。

しかし赤道連盟革命は政府軍によって制圧され、フ
レー・カネカは捕縛され、処刑されたのが一八二五年一
月一三日である。

ミナスの金山とイギリス人

一九世紀ミナスの鉱業開発にはイギリス人が大きな貢
献をしている。ミナスの金鉱採掘を企業化し、いうとこ
ろのゴールド・マイニングの先鞭をつけたのがイギリス
人である。しかし彼らイギリス人がミナスの金山経営で
全部が必ずしも成功していない。或るものは多額の投資
をし、犠牲を積んで、失敗におわった例がある。
一八〇七年来、ナポレオン軍の侵略を避けてポルトガル
王室がブラジルに移されるに際し、護衛に当たったのがイ

ギリス艦隊である。そのイギリス艦隊に便乗してブラジルに渡った鉱山技師と称する者が数人いたようである。それらはミナスの金鉱地に向った。

ミナスの黄金期は一七世紀末から一〇〇年余にわたるが、一八世紀末の金の産出高は著しく減じた。その主な原因は原始的な地表採鉱がつづけられたことにある。つまり機械力応用の地下採鉱が行われていなかったため、そこに眼をつけたのがイギリス人である。

ポルトガル王室がリオに移されて二年後の一八一〇年二月十一日にポルトガルとイギリスの友好通商条約が締結された。当時のポルトガル政府代表は外務大臣リニャーレス伯爵で、イギリス政府代表はストラングフォード卿であった。特にブラジルとイギリスは友好の名において通商的に強く結ばれたのである。ユニオン・ジャックを翻した船舶が堂々とブラジルの港に出入し、白紙旅券のイギリス人がどしどし入国したのもそのころである。

それらのイギリス人には山師や冒険児はいたが、ブラジルの産業開発に尽した者もあつた。特に鉱業、重工業、鉄道、港湾の建設にはイギリス人の功績が無視できない。

ここではミナスの金山とイギリス人について語るが、一八二五年発刊のバークレー・モンチニーの著書『ミナ

スの金山』が大きな反響を呼んで多くのイギリス人がミナスにつめかけた。ミナスで最初のイギリス系資本の金山はカエテとサンタ・バラバラの中間に設けられたゴング・ソコ金山である。同金山は一八世紀半ばに採鉱をはじめて所有主が幾度もかわり、一八二三年にビーラ・リーカ在住のエドワード・オクセンフォードの斡旋でイギリス資本団に買収され、一八二六年に二〇〇キロの金が産出された。更に一八三〇年にはオクセンフォードを代表者とするインペリアル・ブラジリアン・マイニング・アソシエーションが資本金三五万ポンドで組織され、ゴング・ソコ金山の経営に当たった。名称はブラジル帝国鉱業社団だが、本質的にはイギリス人の会社で、ブラジル政府に対しては規定のキント税（現物五分の一）納入の義務を負うただけである。

コンゴ・ソコ金山の初代社長はジョージ・フランシス・ライオンで、順次ジョージ・ビンセント、ウイリアム・ヘンウッド、ジョージ・モーガンに代った。このうちウイリアム・ヘンウッドはブリチッシュ・ロイヤル・ソサイティ会員で、一八四三年にブラジルに移住し、ゴング・ソコ金山の経営に顕著の業績を挙げた。その間、彼はミナスの金鉱調査の著述をした。

鉱山技師ではオルコック・バーレー、ブラネー・コリ

ンス、カーチス・ギブソン、ベングリー・ウォルカーなどが挙げられる。

著名の科学者ジョージ・ガートナーがゴongo・ソコ金山を訪れた時は地下九〇メートルから一五〇メートルや良質の金鉱を採掘していた。また有名な探検家サー・リチャード・フランシス・バートンが同金山を訪れたのは一八六九年で、その訪問記がイギリス人の注目をひいた。ゴongo・ソコ鉱業会社は後にアグア・ケンテとカタ・プレータ鉱山も買収して良好の成績を挙げた。

一八三二年にはナショナル・ブラジリアン・マイニング・アソシエーションが設立されてコカエス金山の採鉱を開始した。この金山は数十年前に黒奴が発見し、主にジャクチンガの川床の採鉱をやっていた。イギリス人がそれを買収してからは三〇〇の奴隷を使って地下九〇メートルの採鉱で最高の生産を記録した。後にブラジリアン・マイニング・アソシエーションはサハラ近くのクヤバ金山も買収したが、それは意外に貧鉱で期待ほどの業績は挙がらなかった。それから一〇年を経て、クヤバ金山はセント・ジョン・デルレー・マイニング会社に合併された。

ブラジリアン・マイニング・アソシエーションの後に設立されたものには一八四四年創立のカンドンガ・ゴ

ルド・マイニング会社がある。同社の代表者はアレキサンダー・ジョン・カーセリーで、ジョゼフ・ツリー会社との共同出資でジャクチンガ地帯の採鉱をやったが、貧鉱のため一八五〇年に操業を中止した。

一八六一年度の創立のものにはイースト・デルレー・マイニング会社がある。その場所はサラブスーとリオ一・ダス・ベリヤス流域で、バンデーランテのマヌエル・デ・ボルバ・ガットの探検区であり、豊富な金鉱地で知られていた。同社は資本金一九万ポンドでロンドンに本社を置き、ミナス現地に数名の技師が派遣されたが、採算不能で失敗におわった。

一八六二年に資本金十五万ポンドで設立したドン・ペードロ・ノース・デルレー・ゴールド・マイニング会社はマリアナ近傍のモロー・デ・サンタアナで採鉱した。その操業開始から一八六七年までに二四二七キロの金を生産した。しかし、それ以後は鉱石ト当りの生産量は一五グラムに低下した。一八七八年には鉱坑の深さが二一二メートルに達し、浸水のために採鉱を中止した。

同じく一八六二年度の創立ではサンタ・バルバラ・ゴールド・マイニング会社がある。同社はピラシカバ左岸サンタ・バルバラから東方二一キロの地点で採鉱した。この鉱山は一二〇から三三〇メートルの地下採鉱したこ

とで名高い。一八九三年には鉱石270、660トンから2、624、430グラムの金を産出した。それは鉱石トン当り10グラムである。

一八七六年にはビタンギー・ゴールド・マイニング会社が設立された。その鉱山はカタス・アルタスでサンタ・バルバラから南西二キロのジャクチンガ流域である。同鉱山は全長三〇〇メートルの坑道を掘削し、鉱石トン当り15・6グラムの金を生産したが、浸水のため採鉱に難渋をきわめた。それにしても約一〇年間に二八五キロの金を生産した。

今世紀に入って設立されたものにはアングロ・ブラジリアン・ゴールド・マイニング会社がある。同社は一九〇六年にサンタ・バルバラ郡のサンタ・キテリア鉱山を買収した。この鉱山は以前のアフォンソ・ペンナ家の所有だったが、浸水で採鉱が困難のために長いあいだ放置されていた。後日に再び採鉱をはじめたが、結局は貧鉱が理由で操業を停止した。

これと前後してイギリス人によって設立されたミナスの金鉱会社は十指を屈するものがある。

前世紀にブラジルを訪れたイギリス人は数十名あるが、それは軍人、宣教師、科学者、鉱山技師、画家、著述家、新聞人、貿易商、探検家などである。その中に紅一点として女性の名を見るが、それはマリア・グレハム（一七八五〜一八四二）であり、彼女は一八二一年から一八二三年にかけて二度ブラジルを訪れている。

マリア・グレハムはイギリス女性の範といわれたほど聡明且つ知性豊かで、天賦の文才に恵まれていた。特に地質植物学に造詣が深く、ロンドン地理学会員であった。

彼女はブラジルからイギリスへ帰国後、一八二四年に『ブラジル旅行日記』を刊行したが、当時この書ほどイギリス朝野の注目をひき、評判に上ったものはない。

マリア・グレハムは一八二一年にイギリス海軍の軍艦『ドリス』に便乗して南アメリカ巡航の旅に上った。その艦長トーマス・グレハムが彼女の夫であった。

マリア・グレハム（夫妻）は一八二一年のクリスマス前日にレシフェに到達し、ペルナンブーコの長官ルイス・ド・レーゴ・バレットに賓客として迎えられた。

軍艦『ドリス』は天然の岩礁から成る防波堤に囲まれる内海に碇泊した。その内海の穏やかなことは湖水のようだと、マリア・グレハムの旅行日記に書かれている。

溝はレシフェの名称のとおり部分的に珊瑚礁で形成され、岩には沢山の牡蛎が密着しており、このあたりは眼に入るものすべてが貝であると記している。

マリア・グレハムは運河と橋梁から成る市街の美景に見とれ、オランダ総督マウリシオ・ナッサウ伯によるレシフェの都市設計に感嘆した。彼女はレシフェ滞在中に長官ルイス・ド・レーゴ夫妻の歓待をうけ、別れに際しては美しい紫水晶を寄贈された。

レシフェからリオに着いたマリア・グレハムは最初に国務大臣ジョゼ・ボニファシオに敬意を表した。当時のジョゼ・ボニファシオは内務、外務、司法の三大臣を兼撰していた。マリア・グレハムはジョゼ・ボニファシオが政界の重鎮であるとともに、長い歳月をヨーロッパに学んだ傑れた科学者としての風格に深い感銘をうけた。その折、大臣の広大な書架にはドイツ、フランス、スイーデン語の地質、鉱物学の専門書が見られた。

リオの滞在を終えたマリア・グレハムは夫トーマスとチリーに向うべく、ケープ・ホーンを経て太平洋に出るにおよんで夫は急死した。若くして寡婦となったマリア・グレハムは航海をつづけてバルパライゾに上陸し、イギリス海軍の提督トーマス・アーチボルド・コックレーン脚に面会した。コックレーン提督はチリーの独立

戦争を指導し、皇帝ドン・ペードロ一世の招請でブラジルに出立する直前であった。マリア・グレハムはコックレーン提督の保護のもとに再びブラジルに赴くことになった。

再度リオに到着したマリア・グレハムはイギリス海軍の南米艦隊総司令官トーマス・バーデイの紹介で皇帝ドン・ペードロ夫妻に面謁した。その時にレオポルジナ皇后はマリア・グレハムから非常な好印象をうけ、彼女に宮廷教師たることを懇望された。マリア・グレハムはレオポルジナ皇后の乞いを快諾して幼い王女たちの教育に当たった。当時の第一王女マリア・ダ・グロリア（後のポルトガルの女王ドーナ・マリア二世）は五才であった。

マリア・グレハムは宮廷教師としての傍らレオポルジナ皇后の援助を得て地質、植物研究にも励み、沢山の標本採集をした。彼女はスケッチをよくし、旅行中はその土地の綿密な観察と同時に風景や風俗画を描いた。それらの絵が『ブラジル旅行日記』に挿入されている。『ブラジル旅行日記』の原稿と挿入されたスケッチ（原画）はロンドンの大英博物館に所蔵されている。

マリア・グレハムの『ブラジル旅行日記』に、一八世紀のブラジルの黄金期について次のような記述が見られる。

『ミナスには黄金時代が到来し、人口は日を追うて激増して各地に村や町が現われ、他の家父長制社会には見られない都市発生の現象がおこった。一獲千金を夢みてミナスに殺到する冒険児は多く、金山をめぐる鬭争と流血の惨事は絶えない。ミナスの金鉱地では惨殺死体が随所に見られ、放火による火災が相ついでおこった。このように誰もが金の探索に熱中し、土地を耕作して食糧の生産に当るものがなく、黄金を抱えて餓死する状態ともなった。一朝にして巨富をなす反面、一夜にして屍と化する著もある。そうした殺伐たる空気を和げるためか、金鉱地には富裕の寄篤家によって教会が建立された。特にきらびやかな泥金装飾の教会の建設は特権者の権勢顕示の手段でもあったようだ。』と鋭い批判を加えている。

マリア・グレハムはイギリスに帰って後、サー・アウガスト・コールコット卿と再婚してレーデイ・コールコットとなった。彼女の郷土はカンバーランドのベープカッスルであり、一八四二年一月二八日に五七才でケンシントンに逝った。

ブラジルを訪れたチャールス・ダーウイン（一八

博物学者チャールス・ダーウインの第一回ブラジル訪問は一八三二年、二二才の時である。ダーウインがフイツ・ロイ船長の帆船『ビーグル号』で世界周航の旅に出たのは一八三一年であった。その航海はビスケー湾にはじまり、カナリア群島とアフリカ西海岸を経てブラジルに到着した。

ダーウインは地質学を専攻した関係からブラジルのフェルナンド・デ・ノローニヤ島が火山質土から成り、数億年前の海底火山だったことを発表した。

彼は世界一周旅行に五年を費やしたが、三年余を南アメリカにすごした。ダーウインはフェルナンド・デ・ノローニヤ島からバイアに着いて感嘆したのは深緑したたるばかりの樹林であった。彼のブラジル旅行中は至るところでカボクロとも語り合い、そこに宿泊したこともあった。彼はバイアの人情風俗に多大の興味をひかれた。その後、リオ滞留中にはニテロイやカーボ・フリオで博物調査をした。彼がコルコバド山頂からグワナバラ湾の景観に感嘆するあたりはまことに名文である。

ダーウインはリオ近傍で昆虫と地質標本の採集をし、ブラジルの森林には樹木が密生して非常に温度が高く、降雨の後にはおどろぐべき水分を蒸発させる、と日誌に書かれている。彼のブラジルでの科学調査の大きな収穫

は多種の昆虫を発見したことである。特にサウバ（赤蟻）とクモ、野蜂の習性については綿密な観察をしているが、クモと野蜂の闘いがおもしろく叙されている。それは科学的な記述のうちにも軽妙な諧謔が盛られている。

ブラジルの科学調査を終えたダーヴィンはアルゼンチンを経て、マゼラン海峡を通過して太平洋に出で、ペルーとペルーを踏査した。ペルーのアマゾン上流では猿類を主とする動物が彼の研究の対象となった。それらが後日の進化論『種の起源』の骨子となっている。

ダーヴィンが南アメリカから太平洋のタヒチ島、ニュージランド、オーストラリアを訪れてイギリスに帰着したのが四年二カ月目であった。若冠二三才の科学者ダーヴィンが五年にわたる博物調査にうちこんだ情熱と勇氣にうたれる。彼がイギリスに帰った一八三六年から更に二〇余年の研究をつづけ一八五九年、五〇才の時に『進化論』を発表した。その初版一二五〇部は発売当日に売りきれ、第二版の三〇〇〇部が数日で売りつくされたことは当時として稀のことであった。それは生物学界の革命的学説で、まさに一世を風靡したといえる。当時、ダーヴィンの進化論はガリレオの地動説にも匹敵するといわれた。

ダーヴィンの少年期を見るに、彼に大きな影響を与え

ているのは地質学者サー・チャールス・ライエル（一七九七―一八七五）の著書である。また彼が二〇代となつてからは経済学者ロバート・マルサス（一七六六―一八三四）の『人口論』にすくなからず学んでいる。それがダーウインをして博物学者たる決意をさせたようである。ブラジルではサンタ・カタリナの開拓につくした博物学者フリツ・ミューラーがダーウインの学説支持者だが、フリツ・ミューラーの博物研究については『種の起源』の所々に記述されている。

チャールス・ダーウインは一八八二年に七三才でケントに逝き、ウエスト・ミンスター・アベーにサー・サイザック・ニュートンと相並んで葬られた。

医師新聞人リベロ・バダロ（一七九八―一八三〇）

ジョアン・バチスタ・リベロ・バダロはイタリア国籍の医師新聞人で、二七才でブラジルに移住し、三十二才の若さで世を去った。彼は新聞人として言論の自由のために闘い、それが原因で暗殺された。

リベロ・バダロは一七九八年にイタリアのジェノヴァ管区のリグエリアに生れた。

リグエリアからは傑れた天文地理学著、科学者、芸術

家が規われているが、航海家ではクリストフオ・コロンボとジュリアノ・ロベロが挙げられる。

リベロ・バダロはパピア大学で医学を専攻する傍ら、哲学と植物学を修めた。彼は長身瘦型で、額が広く、やや蒼白でいかにも聡明理的であることを示していた。

彼は新興国ブラジルに非常な興味をもち、その将来に期待してブラジルに渡ったのが一八二六年である。

リベロ・バダロはリオに着くや、リオ周辺の植物研究に没頭した。当時、彼はレオポルジナ皇后の好意で、科学調査のために種々の便宜を与えられた。彼はリオに在る間に、新しく生れたブラジル帝国には幾多の政治社会問題のあることを知った。また彼は住むにつれてこの国土への愛情がわき、ブラジルの発展には国民の良識と愛国心を養うことが肝要であると悟った。そこで彼は若い学生層に呼びかけて世論を喚起すべく、新聞の発行を思い立った。それにはサンパウロが適切であるところから、一八二八年五月にサンパウロに移転した。

職業の上でリベロ・バダロは医師であり、思想的には自由主義著であった。彼はサンパウロではサンパウロ議員ジョゼ・ダ・コスタ・カルヴァーリオの宅に寄寓した。コスタ・カルヴァーリオはバイア出身の富裕人で、一八二七年二月に新聞『オ・ファロル・パウリスターノ』を

発刊した。それがサンパウロにおいての最初の新聞である。後にリベロ・バダロはノーバ・サン・ジョゼ街（現在のリベロ・バグロ街）に一家を構え、新聞『オ・オブゼルヴァドル・コンスチツイシヨナル』を発刊した。その創刊号は一八二九年一〇月二三日付となっている。

彼は新聞の刊行に当りながらも、医師の立場から人々の医療の相談にも乗り、必要に応じて臨床医としても働いた。彼は天然痘予防の種痘を奨め、エドワード・ジェンナー創始の種痘を取寄せて配布するなど、寄篤な働きをしている。

一方、皇帝ドン・ペードロ一世は議会を解散して専制政治を張り、政界の元老の反感を買った。それらのことは一般庶民の関知するところではなかった。

こうした状況に、リベロ・バグロの血は燃えた。彼は言論人としてドン・ペードロの専制政治を根強く糾弾した。特に一八三〇年九月一七日付の『オ・オブゼルヴァドル・コンスチツイシヨナル』の論説が彼の命取りとなった。彼は九月二〇日（土曜日）の夜、友人宅から帰ってノーバ・サン・ジョゼ街の自宅に入ろうとする時に二人の凶漢に襲われ、ピストルで腹部を撃たれた。それは右翼の過激分子だったのである。

リベロ・バダロは狙撃された翌日、午後九時、『一人の

自由主義者は死んでも自由は滅びない』と叫びながら絶命した。

リベロ・バダ・グロの告別式はカルモ教会で営まれ、サンパウロのあらゆる階層の代表的人物が列席して彼の死を痛惜した。

このリベロ・バダロの暗殺が、ドン・ペードロの皇帝退位の一因ともなっている。

植物学者マルチュース

前世紀にブラジルを訪れた外国人の科学者は多いが、特にブラジル人に深い印象を与えたのは植物学者カール・フリーデリヒ・フィリップ・フォン・マルチュースである。

マルチュースはブラジル滞在三年間に植物研究をつづけ、至るところで土地の住民と親しみ、その風土と社会
マルチュースは”調子の父”といわれたほど椰子科研究の権威であり、彼によって多くのパルメーラスの新種が発見され、学名がつけられた。

マルチュースの著書 REISE IN BRASILIEN (ブラジルの旅行)を一読して彼がいかに愛情をもってブラジルの風物に接し、綿密な観察をしたかがわかる。

マルチユースは一七九四年四月一七日にバヴァリアのアーランゲンに誕生した。大学で医学を専攻したが後に植物学に転向し、ミュンヘン動物園長の助手となった。

マルチユースは一八一七年にオーストリーの王女マリア・レオポルジナと同船で、科学調査団長としてブラジルを訪れた。当時の彼は二三才の青年科学者であった。

マリア・レオポルジナはドン・ジョアン六世の王子ドン・ペードロ（後のドン・ペードロ一世）との結始式を委任状によつて一八一七年五月一二日にウィーンで挙げ、同年ブラジルに渡った。

マルチユースがバヴァリア王室派遣のブラジル科学調査団長に任命されたのは、バヴァリアの王マキシミアン・ヨセフと親交があつたためである。マキシミアン・ヨセフは博物学に造詣が深く、南アメリカの科学調査に多大の興味をもっていた。偶々オーストリーの王女マリア・レオポルジナがドン・ペードロと結婚してブラジルに渡るのを機会に、バヴァリア王室派遣の科学調査団が組織されたのである。

マキシミアン王はマルチユースをブラジル科学調査団長に任命し、植物調査を担当させた。同時にヨハン・バチスト・スピックスをマルチユースの協力者として動物調査を依頼した。

マルチュースは一八一七年七月、リオに到着し三年にわたってリオ・デ・ジャネイロ、サンパウロ、ミナス、バリア、ペルナンブーコ、ピアウイー、マラニョン、パラートの科学調査をした。その間、彼によって採集された植物標本は莫大なものである。

マルチュースのブラジルの植物研究の著述はバヴァリアに帰国後二〇年つづけられ、はじめに『ブラジルの旅行』が刊行されて非常な評判になった。

彼の巨作『フローラ・ブラジリエシス』は四〇巻から成るが、そのうちの二〇巻を書き上げて一八六六年にミュンヘンに没した。

他の二〇巻はマルチュースの死後、十数名の科学者の協力によって完成出版された。

ミュンヘンにはマルチュースの名を冠した科学院が設けられている。

アウギュスト・デ・サンチレール（一七七五〜一八五三）

アウギュスト・フランソアー・セザール・プロヴァンサルが本名だが、アウギュスト・デ・サンチレールで知られている。

一八一六年にフランスのルックサンブール公のブラジル科学調査団に参加して来伯した。

一八一六年から一八二二年にわたってリオ・デ・ジャネイロ、エスピリト・サント、ゴヤス、ミナス、サンパウロ、パラナ、サンタ・カタリナ、リオ・グランデ・ド・スールを踏査し、沢山の動植物の標本を採集した。それらのものであるものはパリの自然科学博物館に所蔵されている。

サンチレールは数冊のブラジル旅行記を書いたが、それには科学者としてのブラジルの山河風物に対する愛情があらわれている。

サンチレールは植物学者だが昆虫と動植物の調査をするほか、ブラジルの地域的特異性と住民についての綿密な観察をし、評論も書いた。

カチンゲーロ・ローシヨ（俗名カピン・ゴルズーラ）の牧草としての優秀性を広く紹介したのも彼である。

サンチレールはブラジルの農業振興のために種々の観点から忠告している点に学ぶものがある。

アウギュスト・デ・サンチレールはフランスのオルレアンに生れて同地に逝った。

ドン・ペードロ一世の皇帝退位

一八二六年三月一〇日のドン・ジョアン六世の死により、臨時の措置としてイザベル・マリア（ドン・ジョアン六世の二女）が摂政となり、ブラジルのドン・ペードロ一世が王位継承の候補に挙げられた。ドン・ペードロの実弟ドン・ミゲルは父ドン・ジョアン六世に対する逆行行為のためにウィーンに追放されていた。

ポルトガル政府は国民の総意としてブラジルのドン・ペードロ一世をポルトガルの王に推戴し、ドン・ペードロ四世とした。しかしブラジル国民の懸念と、二国の王を兼ねることの不可能を悟ったドン・ペードロは、長女マリア・ダ・グロリアにポルトガルの王位を譲って退位した。ドン・ペードロの意向はマリア・ダ・グロリアと実弟ドン・ミゲルを婚約させ、マリア・ダ・グロリアが成年に達するまでドン・ミゲルを保護者とすることであった。ウィーンに在ったドン・ミゲルはそれに賛意を表し、ドン・ペードロへの誓約をした。

マリア・ダ・グロリアはポルトガルで教育をうけるべくリオを出發したが、事情あつてウィーンに赴いた。その間にドン・ミゲルはクーデターをおこして王位についた。マリア・ダ・グロリアはドン・ミゲルの姪であり、そ

の保護者たるべき彼が王位を横奪した。こうした状況に、ドン・ペードロはポルトガルの王位継承に干渉と屈託をもちつづけたことが彼に対するブラジル国民の感情を悪化させた。国民の間に『ドン・ペードロはブラジルとポルトガルの何れに眼を向けているのか』の批判の声がおこった。

いま一つドン・ペードロの信望失墜の原因にシスプラチナの敗戦がある。

シスプラチナは一八二一年にドン・ジョアン六世が派兵してブラジル領に併合し、カルロス・レコール將軍を長官に任命した。しかしシスプラチナの社会にはスペイン色が強く住民の思想と生活様式からしてブラジルとは同調し難いものがあつた。それにしても一八二五年までは平和の状態がつづいた。

レコール將軍はシスプラチナの権力者フルツォーゾ・リヴェラの抱き込みに成功したが、一八二五年四月一日、旧コロニア・ド・サクラメント近傍のコロニアに、ラヴァレージャを領袖とする軍隊が上陸して反乱を画した。それはシスプラチナのブラジルとの併合への反対運動であり、フルツォーゾ・リヴェラがこれに参加した。

ラヴァレージャはシスプラチナとアルゼンチンの結合を唱え、アルゼンチン政府の援助のもとにブラジルに挑

戦した。当時アルゼンチン政府は海賊や野盗の跳梁を黙認し、ブラジル南部の海岸地帯、特にリオ・グランデ・ド・スールが脅かされていた。

ドン・ペードロはアルゼンチンに宣戦布告し、艦隊を派遣してブエノス・アイレスを包囲した。このアルゼンチンへの宣戦布告はドン・ペードロの行きすぎ、とブラジル国民は解した。

シスプラチナ戦にはドン・ペードロ自らが陣頭指揮に当たったが、戦局は不利となった。ドン・ペードロはバルバセナ子爵をシスプラチナ遠征軍司令官に任じてリオに帰還したがその直前にレオポルジナ皇后の病が高じて逝去した。

一八二六年にはパッソ・ド・ロザリオで、ブラジル軍とアルゼンチン軍との戦闘があったが勝敗は決せられなかった。同年、アルゼンチンの特使がリオ政府を訪れてシスプラチナの独立を提案した。それに対しブラジル政府は賛成したが、シスプラチナ現地での戦争は継続され、リヴェラ軍はミッソンエス地域に進駐した。

翌一八二八年、ブエノス・アイレス駐在のイギリス公使の仲介で、ブラジルとアルゼンチンはともにシスプラチナから手を退き、レプブリカ・オリエンタル・ド・ウルグワイ（東部ウルグワイ共和国）の名称のもとに独立

を承認した。同時にブラジルに対しては、ラプラタ川の自由航行権が認められた。この平和条約は一八二八年八月二七日にリオで調印された。

ブラジルがシスプラチナ戦のために払った人的と物質的犠牲は絶大であり、それがシスプラチナの独立によつてすべてが無に帰したためにブラジル国民の失望は大きく、必然ドン・ペードロへの反対氣勢が高められた。

独立当初はドン・ペードロに全幅の支持を与えた言論機関は、ドン・ペードロの施政を厳しく批判した。その主な新聞人にはエヴァリスト・ダ・ヴェーガとリベロ・バダロがいた。エヴァリスト・ダ・ヴェーガ（一七九九―一八三七）はリオ出身で、大学卒業後は新聞界に投じ『アウロラ・フルミネンセ』の主筆となった。彼は自由主義に徹し、風格の高い新聞人で知られた。

サンパウロではドン・ペードロの専制政治を根強く糾弾した新聞人にリベロ・バダロがある。リベロ・バダロは一八二九年に新聞『オブセルヴァドル・コンスチツィショナル』を発行して論説を書きつづけた。その彼のドン・ペードロ攻撃が害いして、右翼の過激分子の兇弾に斃れた。このリベロ・バダロの暗殺も、ドン・ペードロを退位の窮地に追いつめた一事件である。

新聞人リベロ・バダロが暗殺された直後、ドン・ペー

ドロはミナスが政治的に重要性があるところから、政治工作のためにミナスを訪れたが市民の歓迎も受けず、冷い眼で見られた。しかしミナスからリオに帰ったドン・ペードロはドン・ミゲル反対派のポルトガル人から大歓迎された。それがブラジル人との騒乱となり、市街で互いに瓶を投げ合って多数の怪我人を出した。それがノイテ・ダス・ガラファードス（瓶投げ騒ぎの夜）といわれる。

このようにリオではブラジル人とポルトガル人の感情的対立が高まり、いまにも社会動乱がはじまりそうな空気がとなった。ドン・ペードロはそれを和らげるべく二度内閣を更迭させ、ブラジル人の議員で固めたがなんらの効果を奏さなかった。

最終的にドン・ペードロの皇帝退位を決意させたのは、近衛兵団が反乱をおこしたことにある。皇帝を護衛すべき近衛兵団が皇帝に反旗を翻したので、さすがのドン・ペードロもすべては終わりと覚悟し、退位を表明したのが一八三一年四月七日である。

ドン・ペードロは当時五才のドン・ペードロ・デ・アルカンタラに帝位を譲った。彼はそれ以前、かくなることを予想してか、国外追放したジョゼ・ボニファシオを赦免してフランスから呼び戻し、ドン・ペードロ・デ・ア

ルカンタラの保護者に任命した。

一八三一年四月一三日夜、ドン・ペードロは単にブラガンサ大公として妻アメリカを伴ってポルトガルに向った。ドン・ペードロ夫妻はリオを去るに当って、幼いドン・ペードロ・デ・アルカンタラに別れを告げた。

ドン・ペードロ・デ・アルカンタラはすやすや眠っていたが、その枕元に置かれたドン・ペードロとドーナ・アマリアの惜別の書は人々の胸をうつものがある。

第一〇章 執政政府

執政政府（一八三二〜一八四〇）

ドン・ペードロ一世の皇帝退位の当日、（一八三一年四月七日）上院において二六人の上院議員と三六人の下院議員が集合し、緊急措置として臨時三人制執政官の選挙がおこなわれた。当時五才の幼君ドン・ペードロ・デ・アルカンタラは成年に達するまで皇帝即位ができなかったためである。

議長はカラヴェラ侯爵で、最初にブリガデーロ・フランシスコ・デ・リーマ・エ・シルバによってドン・ペードロの皇帝退位書が読み上げられた。つづいて投票となり、カラヴェラ侯爵、ブリガデーロ・リーマ・エ・シルバとココラウ・カンボス・ヴェルゲーロが当選し、直ちに就任した。

同年六月一七日の議会では新たに常任三人制執政官の選挙で、ブリガデーロ・リーマ・エ・シルバ、ジョアン・プラウリオ・ムニスとジョゼ・ダ・コスタ・カルヴァーリョ（モンテ・アレグレ侯爵）が当選した。同執政政府の内閣は次のようである。

内務、ジョゼ・リーノ・コウチーニョ

司法、ジオゴ・アントニオ・フェージョ

外務、フランシスコ・カルネーロ・デ・カンボス

財務、ベルナルド・ペレーラ・デ・ヴァスコンセーロ

ス

陸海、マヌエル・ダ・フォンセツカ・エ・リーマ

これは自由党内閣で、別の政党にジョゼ・ボンファシオの主宰するカラムルー党がありドン・ペードロの復位を唱えていた。

司法大臣に推されたジオゴ・フェージョは絶大の権勢を有し、内乱の平定と政争の解決に当った。

ジオゴ・フェージョはジョゼ・ボニファシオの牽制策をとり、サン・クリストヴァンの宮廷をキンゼ広場の政庁に移した。それはジョゼ・ボニファシオが幼君ドン・ペードロ・デ・アルカンタラの保護者だったので、距離的に近く監視が容易のためである。

ジョゼ・ボニファシオの逆行的な行為は政界を混乱させるところから、幼君の保護者に不適當であることと、政府打倒の陰謀を企てている理由で、ジオゴ・フェージョは彼を政治追放する提案をした。下院ではフェージョの提案に多数の賛成を得たが、上院においてはジョゼ・ボニファシオの影響力が強く、一票の差でフェージョ案は否決された。その後は議会の情勢の変化でジョゼ・ボニファシオは幼君の保護職を剥奪され、パケタ島に蟄居を命ぜられた。

一八三五年四月七日に憲法追加法が設けられて単一執政官の選挙があり、ジオゴ・フェージョが当選した。自由党のフェージョは同党の議員新聞人エヴァリスト・ダ・ヴェーガの支持を得て行政手腕を發揮し、反乱と革命の平定に挑んだ。

自由党の主要人物にはジオゴ・フェージョとエヴァリスト・ダ・ヴェーガほかアンドラーダス兄弟（アントニオ・カルロスとマルチン・フランシスコ）がいた。

ドン・ペードロ・デ・アルカンタラの皇帝即位後の自由党の代表人物はマヌエル・アルベス・ブランコ、フランシスコ・デ・パウラ・ソーザ、アバエテ子爵、アンジェロ・ムニス・ダ・シルバ・フェラーズ、シニンブリー子爵、ジョゼ・アントニオ・サライバ、マルチーニョ・デ・カシボス、オーロ・プレート子爵であった。

一八三六年にはベルナルド・ペレーラ・デ・ヴァスコンセーロスとオノリオ・エルメット・カルネーロ・レオン（パラナ侯爵）によって保守党が生れた。以後は自由党と保守党の対立が一八七〇年の共和党の出現までつづくことになる。

一八三七年五月一二日にエヴァリスト・ダ・ヴェーガが死去し、フェージョは他の言論機関の支持を得られなかったことと、パラーのカバナージェンの乱、ならびにリオ・グランデ・ド・スールのファロウピーリヤ革命を制庄し得なかったことが主な理由で、一八三七年九月一九日に執政官を辞任した。

ジオゴ・フェージョの高邁直裁の人柄は政界では尊敬されながらも反面敵が多く、彼の失脚を望む者がかなりいた。

フェージョの後任のペードロ・デ・アラウージョ・リーマ（オリンダ侯爵一七九三〜一八七〇）は高潔な人格者

で徳望高く、最難の政局に対処しすぐれた施政をした。しかし社会的動揺は避けられず、パラーのカバナージェンの乱はつづき、またバイアのサビナーダとマラニヨンのバライアーダ革命があつた。

ペードロ・デ・アラウージョ・リーマは教育制度を改革し、一八三八年にリオのドン・ペードロ二世高等学校を創設した。

反乱の続発

ドン・ペードロ一世の皇帝退位から約四年間はペルナンブーコが反乱の中心となつた。それらの反乱はアプリーナダ（四月の乱）、セテンブリーナ（九月の乱）、ノベングリーナ（十一月の乱）など反乱のおこつた月が名称となっている。或る反乱はドン・ペードロ一世の復位、または前皇帝への忠誠派の政府高官の辞任とポルトガル人の公職追放を唱えるものだったが、それぞれ執政政府の軍隊によつて鎮圧された。

次に国内の各地に発生した反乱を列举する。

セアラの反乱（一八三一〜一八三二）

反乱の首領は一人の陸軍大佐とカトリック僧で、ド

ン・ペードロー一世の復位を叫んで強硬に闘ったが政府軍に征圧された。

ミナスの反乱（一八三三〜一八三五）

同じくドン・ペードロー一世の復位を唱える反乱で二年後に政府軍に鎮圧された。

パラーのカバナージェン革命（一八三五〜一八四〇）

貧しい市民によっておこされた革命で、主導者のクレメンテ・マシエルとペードロ・ビナグレ・アンジェリンが粗野な茅屋に立籠って革命戦をつづけたのでカバーノス（茅屋に住む者）の名称を生じた。反徒の望むところは第一次帝政以来の政府高官と高位軍人の辞任であった。この革命は激烈をきわめ、一八四〇年に制圧された。

バイアのサビナーダの乱（一八三七〜一八三八）

バイアの医師フランシスコ・サビノ・アルヴァレス・ダ・ローシャ・ビエーラが反乱の主導者だったので、サビナーダの名称がつけられた。反乱の目的は執政政府に反対し、ドン・ペードロ・デ・アルカンタラが帝位にくまで、バイアの独立を望むことにあった。しかしサルバドールは政府軍に包囲されて革命の反徒は降伏した。

マラニヨンのバライアーダ革命（一八三八〜一八四一）マラニヨンの軍隊と市民による革命で、サン・ルイスに発して次第に拡大された。革命の主導者ライムンド・ゴームス・ヴィエーラ、コスメ・ベント・デ・シヤーガス、マヌエル・ドス・アンジヨス・フェーレーラは黒人系の籠造り職人だったので、バライアーダが名称となった。バライオは大籠である。目的はポルトガル人の公職追放にあったが、他の政治問題をからみ、反乱戦は三年つづいた。

バライアーダ革命はルイス・アルベス・デ・リーマ・エ・シルバ（後のカシアス公爵）を司令官とする政府軍によつて討伐された。

ジョゴ・フェージョの剛直清廉の人柄はややもすれば人の誤解を招き、政敵も多かつたが、彼の高潔な人格は誰しもが認めた。

自由革命に敗れたジョゴ・フェージョはエスピリト・サントに蟄居を命じられ、特赦をうけて再び上院議員となったが、短期にして郷土サンパウロに戻り、六〇才未満で死去した。彼はサンパウロ人であるところから、サンパウロ大聖堂の霊廟に葬られている。

エヴァリスト・ダ・ヴェーガ（一七九五～一八三七）

新聞人、議員、論客エヴァリスト・ダ・ヴェーガは一八二七年、まだ若くして新聞『アウロラ・フルミネンセ』を発刊した。その公明不偏の論説は高く評価された。

エヴァリスト・ダ・ヴェーガは皇帝ドン・ペードロ一世の専制政治を批判し、糾弾したが、そこには少しも私心はなく、新聞人としての公正の立場からペンを執った。

彼は広義の愛国者であり、彼の詩作によってドン・ペードロ一世は『独立の歌』を作曲した。

一八三二年二月三日にエヴァリスト・ダ・ヴェーガは極右の暴漢に狙撃されて顔面を負傷したが、そのために主義主張をまけるところがなかった。彼は自由党に所属し、二回国會議員に当選している。

ドン・ペードロ一世の皇帝退位後は執政官ジオゴ・フエージョの人物に心服して強く支持した。

ラファエル・トビアス・デ・アギアル（一七九四～一八五七）

ラファエル・トビアス・デ・アギアルはソロカバ出

身、富裕の農園主の子息で、早くから軍籍に入り、二六才で独立戦争に従軍し、ジョルジ・デ・アビレス大将の部隊と闘った。

彼は二度サンパウロ・プロピンシア議員の席を占め、次いでプロピンシア統領となった。

若くして少将（旅団長）に昇進し、サンパウロ州警兵団（フォルサ・プブリカ）を創立した。

自由党に所属し、一八四二年のサンパウロ自由革命を主導、ソロカバを本拠に政府軍と闘い、戦いの最中にドミチラ・デ・カストロ・カント・エ・メーロ（サントス女侯爵）と結婚し、五男一女を得た。

革命はカシアス司令官の政府軍に制圧されトビアス・デ・アギアールはリオ・グランデ・ド・スールに逃れ、ヴァリアで捕虜となった。彼はラージエ要塞に幽閉されたが、特赦をうけて郷土に帰った。

その後、彼は汽船『ピラチニンガ』でサントスからリオに向う航海中に急逝した。

ベント・ゴンサルベス・ダ・シルバ（一七八八〜一八四七）

フアラポス革命の主導者ベント・ゴンサルベス・ダ・シ

ルバは一七八八年にリオ・グランデ・ド・スールのトリウフォに誕生、一八四七年に同州のペードラス・ブランカに病死した。

ベント・ゴンサルベスは聖職者たるべく教育を受けたが軍人を志望し、一八一一年にドン・ジェゴ・デ・ソーザ旅団に入隊して第一回シスプラチナ戦に従軍した。次いで一八一六年から一八二一年にわたり、アレグレッテ侯爵を司令官とする部隊に大尉となって参加し、第二回シスプラチナ戦に奮戦した。

一八三四年にリオ・グランデ・ド・スールのプロビンシア議会が開かれるにおよんで彼は自由党議員として臨んだ。

一八三五年九月二〇日、革命の煙火が挙がるや、ベント・ゴンサルベスは司令官としてリオ・グランデ・ド・スールのプロビンシア政庁を占領して統領ロドリゲス・フェルナンデス・ブラーガを罷免し、マルシアノ・リベロを新統領に就任させた。

ファラポス革命（一八三五〜一八四五）

ファロウピーリヤス革命ともいわれ、一八三五年から一八四五年の一〇年間にわたり、リオ・グランデ・ド・スールにおこった革命である。革命の原因は複雑だが、

経済的にはリオ・グランデ・ド・スールの牧畜家に対する租税の不满、北東ブラジル向けの乾肉の政府の公定価が安価に過ぎること、また皮革相場がアルゼンチンやウルグワイとの対抗が不可能なことであった。政治的にはリオ・グランデ・ド・スールがウルグワイ、パラグワイ、アルゼンチンの実例にならって一つの独立共和国となることを望んだ。

革命の首領ベント・ゴンサルベス・ダ・シルバはリオ・グランデ・ド・スールの首都ポルト・アレグレを占領して、プロビンシア統領アントニオ・ロドリゲス・フェルナンデス・ブラーガを辞任させ、別の統領を任命した。

アラポス革命は一八三五年九月に勃発し、一八三六年九月一日にピラチニにおいてピラチニ共和国の創立を宣言した。

一八三九年にはサンタ・カタリナのラグーナを占領して、ジュリアナ共和国の樹立を宣言した。それはジュリョ（七月）だったからである。

中央政府軍は数度にわたってリオ・グランデ・ド・スールに派遣されたが、その都度革命軍に敗れた。その主なものは一八三八年四月三〇日のリオ・パルドの戦い、一八〇四年七月一六日のサン・ジョゼ・ド・ノルテの戦闘である。一八四三年以後はルイス・アルベス・デ・リー

マ・エ・シルバ（カシアス）の政府軍はトリウンフォ、カクアン、ポンシェ・ヴェルデ、ピラチニ、カングスーの戦鬪で連勝した。

ベント・ゴンサルベスはファンファの戦鬪で捕虜となりバイアのサン・マルセロ要塞に抑留されたが脱出して再び革命軍の指揮に当った。後にベント・ゴンサルベスはダビー・カナヴァロと司令官を交代した。

フアラポス革命にはイタリア人の革命児ジウゼペ・ガリバルジと妻アニタが参加して、革命軍を指導した。

カシアスはウルグワイからの革命軍への物資補給路を速断した。

一八四四年一月二十九日、ウルグワイ領のクワロに逃れた革命軍の掃蕩戦を最後とし、一八四五年二月二八日に革命軍は遂に降伏した。当時カシアスの提案により、政府は革命軍の兵士を処罰せずして特赦を与えた。

フアラポス革命はジオゴ・フェジョの執政官任期に勃発し、ドン・ペードロ二世の治世に征圧された。

フアラポは檻樓の意、革命軍は一〇年の持久戦で軍服がボロボロになるまで闘ったことを意味する。

ジオゴ・アントニオ・フェージョは一七八四年八月一七日に洗礼をうけている。したがって彼の誕生日はそれより約三〇日前と想像される。誕生地はサンパウロのコチアで、生れて間もなく教会の戸口に捨児されたために両親が誰かは不明である。

彼を拾い上げて養育したのはパーデレ・ジョアン・ゴンサルベス・リーマである。

ジオゴ・アントニオ・フェージョは聖職者たるべく教育され、一八〇九年二月にパーデレの資格を得た。当時彼はサン・カルロスに住んだが、一八一八年にイツイに移転した。イツイでは茶栽培の普及につとめた。

ジオゴ・フェージョはパーデレながらも政治にひかれて政界入りをした。以後彼はパーデレの袈裟をまとったことがなかった。一八二一年にはブラジル代表議員としてリスボアの議会に出席し、ブラジルの自治制を主張し、熱弁を揮った。

皇帝ドン・ペードロ一世の退位後、ジオゴ・フェージョは司法大臣を経て執政官となり、政局の難関に対処した。彼は自由党だったので、アラウージョ・リーマの保守党内閣となるにおよんで下野し、ブリガデーロ・ラファエ

ル・トビアス・アギアルに協力して一八四二年のサンパウロ自由革命を主導した。フアラポス革命の目的は中央政府から離脱してリオ・ケランデ・ド・スールが独立することであり、一八三六年九月一〇日にピラチニ共和国の設立が宣言された。

ベント・ゴンサルベスはジャクイ川のファンファ島の戦場で政府軍の捕虜となり、バイアのサンマルコス要塞に監禁されたが脱出し、一八三七年九月一日にリオ・グランデ・ド・スール共和国大統領に就任した。

ベント・ゴンサルベスは後に革命軍司令官をダビー・カナヴァロと交代したが、革命軍はカシアス司令官の政府軍に制圧され、三月一日に休戦調印がされた。革命参加の兵士には恩赦が与えられ一人も刑罰をうけなかった。

ベント・ゴンサルベスは一〇年におよんだフアラポス革命にすべてのものを失ない、ペードラス・ブランカスの友人ジョゼ・ゴメス・デ・ヴァスコンセーロスを訪問して病を得、肺炎を併発して死去した。それはフアラポス革命終結から二一年後の一八四七年である。

ベント・ゴンサルベスはリオ・グランデの町に葬られ、その場所に彼の銅像が建立された。

リオ・グランデ・ド・スールのファラポス革命に関連して、女傑アニタ・ガリバルジが想起される。

アニタ・ガリバルジは稀代の革命児ジウゼツペ・ガリバルジと意気投合して、ファラポス革命に参加した。後にウルグワイからイタリアに渡ってイタリア愛国運動に投じ、フランス・オーストリー軍の政略に対するローマ防衛戦にガリバルジが奮戦中、アニタは肺疾患で三〇才未満で死去した。それはいかにも革命児の妻らしい最後であった。

アニタ・ガリバルジは一八一九年にサンタ・カタリナのラグーナに生れた。彼女の洗礼名はアンナ・マリア・デ・ジェズス・リベロで、一六才でマヌエル・ドアルテ・デ・アギアルという靴職人と結婚したが、その夫の平凡きわまる人柄と結婚生活に不満を感じていた。やがてベント・ゴンサルベスを主導者とするファラポア命が勃発し、リオ・グランデ・ド・スールにピラチニ共和国建設の理想がうち出された。一八三六年には一帆船の船長として漂然サンタ・カタリナに着いたのがイタリア人のジウゼツペ・ガリバルジ（一八〇七〜一八八二）であった。ガリバルジはベント・ゴンサルベスからファラポス革命の参謀たることを乞われて受諾した。

ジウゼツペ・ガリバルジは偶然の機会にアンナ・マリ

アと相識った。アンナ・マリアはジウゼツペ・ガリバルジの革命児としての逞しい気魄と男性美にひかれた。二人は語り合ううちによく理解し、相通ずるものがあつた。アンナ・マリアは自ら決意し、夫マヌエル・アギアールと離別してガリバルジと行動を共にし、フアラポス革命の指導に當つた。

革命の主導者ベント・ゴンサルベスはアンナ・マリアの英愼にして男子勝りの働きに驚嘆した。彼女には戦略の才能もあり、時には砲手となつて政府軍に弾丸を浴びせた。

アンナ・マリアは一八四二年にウルグワイでガリバルジと正式に結婚して、アニタ・ガリバルジを名乗つた。一〇年におよんだフアラポス革命は遂に政府軍に征圧され、ガリバルジ夫妻はリオ・グランデ・ド・スールのパンパス草原の一農園に住み、そこでアニタは出産した。その生れた男児が後のメノッチ・ガリバルジ大将である。

ガリバルジ夫妻はウルグワイに移住し、一八五一年のウルグワイ戦争に、ウルグワイ国民のためにアルゼンチンのマヌエル・ローザ軍と闘つた。当時ブラジル政府はウルグワイのブラジル人の牧畜家擁護のために出兵した。ウルグワイ戦争の後はガリバルジ夫妻はモンテビデオに住み、土木技師、学校教師、商店経営などに當つた。

ジウゼッペ・ガリバルジは一八〇七年に南仏のニースに生れ、成長してはサルデーニャで船乗りとなり、マジニに率いられるイタリア青年運動の闘士となったのが一八三三年である。そのころ彼は或る政治犯罪に巻きこまれて逮捕され、死刑の宣告をうけたがフランスに逃れ、更にブラジルに渡ったのが一八三六年である。

ガリバルジ夫妻は一八四八年六月にウルグワイからイタリアに着いた。ガリバルジはピエモンテの義勇兵団の司令官となってローマ共和国のためにフランス軍と闘ったが、ローマは陥落した。その戦闘中にアニタは病死した。

愛妻に先立たれたガリバルジは一時アメリカ合衆国に亡命したが、一八五四年にイタリアに帰国し、一八五九年のオーストリーとの戦争にアルプス部隊長として闘った。

その後のガリバルジはビトリオ・エマノエルのイタリア統一戦に参加し、また一八六六年のオーストリーとの戦い、一八七〇年のプロシア・フランス戦争にも参加し、革命児としての寧日ない生涯をすごした。それらの野戦に在ってガリバルジが常に想起したのは、彼とともに戦場を疾駆し、若くして世を去った妻アニタの英姿であった。

アニタ・ガリバルジの郷土サンタ・カタリナのラグーナには彼女の記念像と博物館が設けられている。

第十一章 第二次帝政

自由党と保守党内閣

頻発する内乱と革命の平定に執政政府の実力およびない観があった。結局は執政政府をもつては国家と社会の安寧を期されないことを悟り、自由党政府は協議の結果ドン・ペードロ・デ・カルカンタラの成年式を早めて、皇帝に即位せしめることに意見が一致した。それを成年派と称し、次の政府要人から成るものであった。

ジョゼ・マルチニアノ・デ・アレンカール僧

アンドラーダス兄弟

スアスナ子爵

テオフィロ・ベネジット・オトニ

ジョゼ・フェリシアノ・コエーリョ

フランシスコ・デ・モンテズマ

アントニオ・パウリーノ・リンポ・デ・アブレウ（アバエテ子爵）

ニコラウ・カンポス・ヴェルゲーロ

フランシスコ・デ・リーマ・エ・シルバ

上院の代表は当時一四才のドン・ペードロ・デ・アルカントラに政府の意向を述べ、『王子は皇帝即位を望まれますか』と質問したところ、彼は『ケーロ・ジャ 直ちにそれを希う』と返答した。

ドン・ペードロ・デ・アルカントラは一八四〇年七月二三日に成年式を挙げ（戴冠式は一八四一年七月一日）翌二四日には閣僚を指命した。それはアンドラーダ兄弟（アントニオ・カルロスとマルチン・フランシスコ）、オランダ・カヴァルカンチ兄弟（フランシスコとアントニオ・フランシスコ）、パウリーノ・リンポ・デ・アブレウ、アウレリアノ・コウチーニョなどである。この第二次帝政の第一内閣は家族内閣といわれたほどアンドラーダとカヴァルカンチ兄弟が主役だったが、就任短期にして政治的難局に逢着し、総辞職となった。これをはじめに第二次帝政の内閣は三六回更迭された。そのほとんどが短命内閣で、最も長くつづいたのはリオ・ブランコ内閣の一八七一年三月から一八七五年六月の四年三カ月である。また最短期はザカリアス・ゴエス・ヴァスコンセーロス

内閣の一八六二年五月二四日から三〇日までの僅か六日間である。

次に第二次帝政の内閣を順番を迷って挙げる。

第一内閣（自由党）一八四〇年七月二四日就任、中枢人物はアンドラーダス兄弟、カヴァルカンチ兄弟、アウレリアノ・コウチーニョ。

第二内閣（保守党）一八四一年三月二三日就任、政府首相アラウージョ・ビアンナ（サブカイ侯爵）

第三内閣（保守党）一八四二年一月二三日就任、政府首相オノリオ・エルメット（パラナ侯爵）

第四内閣（自由党）一八四四年五月二日就任、政府首相アルベス・ブランコ（カラヴェラス子爵）

第五内閣（自由党）一八四五年五月二六日就任、政府首相アルメーダ・トーレス（マカエー子爵）

第六内閣（自由党）一八四六年五月二日就任、政府首相アルブケルケ子爵）

第七内閣（自由党）一八四七年五月二二日就任、政府首相カラヴェラス子爵

第八内閣（自由党）一八四八年三月八日就任、政府首相マカエー子爵

第九内閣（自由党）一八四八年五月三十一日就任、政府首

相パウロ・ソーザ・エ・メーロ

第一〇内閣（保守党）一八四八年九月二九日就任、政府
首相オリンダ侯爵

第十一内閣（保守党）一八五二年五月一日就任、政府
首相イタボライ子爵

第一二内閣（保守党）一八五三年九月六日就任、政府首
相パラナ侯爵

第一三内閣（保守党）一八五七年五月四日就任、政府首
相オリンダ侯爵

第一四内閣（保守党）一八五八年一月一二日就任、政
府首相アハエテ子爵

第一五内閣（保守党）一八五九年一月一〇日就任、政
府首相アンジェロ・フェラーリス（ウルグワイアナ子爵）

第一六内閣（保守党）一八六一年三月二日就任、政府首
相カシアス公爵

第一七内閣（自由党）一八六二年一月二四日就任、政
府首相ザカリカス・ゴエス・ヴァスコンセーロス

第一八内閣（自由党）一八六二年五月三〇日就任、政府
首相オリンダ侯爵

第一九内閣（自由党）一八六四年一月一五日就任、政府
首相ザカリカス・ゴエス・ヴァスコンセーロス

第二〇内閣（自由党）一八六四年二月三十一日就任、政

府首相フルタード子爵

第二一内閣（自由党）一八六五年五月二一日就任、政府
首相オリンダ侯爵

第二二内閣（自由党）一八六六年八月三日就任、政府首
相ザカリカス・ゴエス・ヴァスコンセーロス

第二三内閣（保守党）一八六八年七月一六日就任、政府
首相イタボライ子爵

第二四内閣（保守党）一八七〇年九月二九日就任、政府
首相サン・ビセンテ侯爵

第二五内閣（保守党）一八七一年三月七日就任、政府首
相リオブランコ子爵

第二六内閣（保守党）一八七五年六月二五日就任、政府
首相カシアス公爵

第二七内閣（自由党）一八七八年一月五日就任、政府首
相シニブー子爵

第二八内閣（自由党）一八七八年三月二八日就任、政府
首相ジョゼ・サライバ

第二九内閣（自由党）一八八二年一月二一日就任、政府
首相マルチーニョ子爵

第三〇内閣（自由党）一八八二年一二月三日就任、政府
首相パラナグワ子爵

第三一内閣（自由党）一八八三年五月二四日就任、政府

首相ラファエツテ・ベレーラ

第三二内閣（自由党）一八八四年六月六日就任、政府首相パウロ・デ・ソーザ・ダンタス

第三三内閣（自由党）一八八五年五月六日就任、政府首相ジョゼ・サライバ

第三四内閣（保守党）一八八五年八月二〇日就任、政府首相ジョアン・マウリシオ・ヴァンデルレー（コトジペ子爵）第三五内閣（保守党）一八八八年三月一〇日就任、政府首相ジョアン・アルフレド・デ・オリベーラ

第三六内閣（自由党）一八八九年八月七日就任、政府首相アフオンソ・セルソ（オーロ・プレート子爵）

以上の内閣のうち第二内閣（保守党）は、法学者パウリノ・ジョゼ・ソアーレスの提案によって国家顧問会を設け、中央集権強化の政策をとった。この保守党内閣の施政に反対の自由党員は一八四二年にサンパウロとミナスで自由革命をおこした。サンパウロの自由革命の主導者はラファエル・トビアス・デ・アギアール少将とアントニオ・ジオゴ・フェージョであり、フェージョはソロカバで政府軍に捕縛され、叛徒の判決が下された。またミナスではテオフィロ・ベネジット・オトニが頑強に闘ったが、これも政府軍に敗れ、後に特赦を与えられた。

一八四三年七月に組閣された第三内閣も保守党で、オノリオ・エルメット・カルネーロ・レオン（パラナ侯爵一八〇一〜一八五六）が政府首相であった。カルネーロ・レオンはミナス人で、国家の重要問題に対処して調停にとめ、調停内閣といわれた。

第一〇内閣（保守党）はオリンダ侯爵が政府首相で、その任期中にペルナンブーコのプライエーラ革命（一八四八〜一八四九）があつた。また同内閣によって土地法が設定され、大地主に占められる無開墾の土地解放の拓殖計画が進められた。

一八五〇年には黒奴の輸送禁止令が出たがその徹底は期されず、一八五四年（第一二内閣、政府首相パラナ侯の司法大臣エウゼビオ・デ・ケーロス法令によって奴隷貿易禁止が実施に入った。

一八五三年の第一二内閣（政府首相パラナ侯爵）はナブコ・デ・アラウージョ、リンボ・デ・アブレウ（アバエテ子爵）ジョアン・マウリシオ・ヴァンデルレー、コート・フェラーズ（ボン・レチロ子爵）などの静々たる顔ぶれを擁した。

一八五六年にはパラナ侯爵が死去し、首相はルイス・アルベス・デ・リーマ・エ・シルバ（カシアス）によって継がれた。

オノリオ・エルメツト・カルネーロ・レオン（パラナ侯爵一八〇一〜一八五六）

オノリオ・カルネーロ・レオンはミナスのジャクイに生れ、コインブラ大学で法学を専攻した。二六才でブラジルに帰国して高等裁判所判事となった。

一八〇三年にミナス選出議員として登場し一八三二年には三一才で三頭執政政府の司法大臣となった。

オノリオ・カルネーロ・レオンは保守党の創立者の一人で、一八四〇年まで、下院のリーダーであった。一八四一年以後は上院に所属し、卓絶する行政手腕を発揮した。

一八五一年のウルグワイ戦争には外交的使命を帯びて、エソトレ・リオスの長官ホセ・デ・ウルキーザと折衝し、ローザス軍の追放に成功した。

ウルグワイから帰還しては保守党内閣の首相となり、爵位をうけてパラナ侯爵となった。

オノリオ・カルネーロ・レオンはカシアス公爵、リンポ・デ・アブレウ（アバエテ子爵）、ジョアン・マウリシオ・ワンデルレー（コトジペ男爵）と相ならんで第二次帝政の代表的政治家である。

オノリオ・カルネーロ・レオンは金融機関の設立、鉄道建設、蒸気船による河川航路の開拓、移植民事業での功績も多大である。

彼は一八五六年に五五才でリオに長逝した。

第二次帝政の経済と文化

第二次帝政はドン・ペードロ二世の治世、一八四〇年から一八八九年までの四九年である。その間ブラジルは完全に植民地の境涯を脱して政治経済を確立した。同時に内外ともに多事多端、対内的には数度の反乱と革命がおこり、対外的にはウルグワイ戦争とパラグワイ戦争があった。

ドン・ペードロ二世は如何なる重大事に臨んでも、一国の元首として確固不動の態度を持し国家の方針をまげるところがなかった。

第二次帝政の政府組織は皇帝を元首として立法、行政、司法の三府から成り、さらに皇帝直属の調整府があり、その上に内閣評議会が設けられ、同議長は皇帝によって任命された。

産業経済面を見るに、北東部の砂糖や綿花は国際競走には勝てない状況にあったが、生産設備の機械化、特に

旧来の水力や動物による動力から蒸気力に代って生産能力は著しく増された。

中西部は革命や内乱の影響が少なく、乳製品と豚脂工業の発展を見た。

鉱業ではイギリス資本の投下が目立ち、セント・ジョン・デルレー・マイニング会社やブラジリアン・アンド・ナショナル・マイニング・アソシエーションが挙げられる。

農業は新産業のコーヒー栽培がリオ州に勃興し、プランテーションとしての大規模のものが各地に見られた。甘蔗国からコーヒー栽培にかわる者も現われ、一八三五年ごろのパライバ平原（リオ州）では樹数五〇万から八〇万のコーヒー園が見られるようになった。コーヒー栽培の隆盛に伴って、労働力供給のためにアフリカから多量の黒奴が入れられ、リオは大きな奴隷市場となった。

南部ではアラポス革命のために主産物の皮革の生産が減じ、隣接国に輸出市場を奪われる結果を招来した。

南部を除く他のプロビンシアもおしなべて輸出は不振状態だったが、コーヒーだけが輸出のトップを占め、第二次帝政の確固たる輸出産業となった。パラグワイ戦争にブラジルが勝ち得たのはコーヒー耕主の多額納税と政府献金に負うところが大きい。

パラグワイ戦争後のブラジルの発展は目覚ましく、とくに重工業と鉄道建設にイリネウ・エヴァンジェリスタ・デ・ソーザ（マウア子爵）は不滅の功績を示した。

政界にはイタボライー子爵、コンセリエーロ・サライバ、リオブランコ子爵、ジョアキン・ナブコ、ジョアン・アルフレド、ルイ・バルボーザ、コトジペ男爵などの偉材が現われた。

詩人文学者ではゴンサルベス・ジーアス、カストロ・アルベス、カジミロ・デ・アブレウ、ジョゼ・デ・アレンカール、ファグンデス、ヴァレラ、ジョアキン・マノエル・マセド、アルイジオ・デ・アゼベド、マッシヤード・デ・アシス、コエーリョ・ネット、トウネー子爵などが挙げられる。

画壇ではペードロ・アメリカ、ビトール・メーレレス、アルメーダ・ジュニオールなどの巨匠を生んだ。

また数学者土木技師アンデレ・レボース、法学者クロヴィス・ヴェビラツクワの現われたのも第二次帝政である。

ドン・ペードロ二世誕生から君主制の終焉まで

（一八二五～一八九一）

ドン・ペードロ二世（ドン・ペードロ・デ・アルカンタラ）は一八二五年一月五日、リオ・デ・ジャネイロのサン・クリストヴァン宮に生れた。父はドン・ペードロ一世、母はマリア・レオポルジナ皇后である。

宮廷侍医ドミンゴス・ギマランエス・ペーシヨットの報告によれば、生れた嬰兒ドン・ペードロ・デ・アルカンタラは身長二三ポレガーダ（インチ）、肩幅六ポレガーダ、しかも稀な逆児だったので、レオポルジナ皇后には非常な難産であつた。

ドン・ペードロ・デ・アルカンタラは生れながらにして、将来のブラジルの帝王たる運命を担っていたが、家庭的には幸福でなかつた。生後一年で母レオポルジナに死別し、五才の時に父ドン・ペードロ一世が皇帝を退位してポルトガルに去り、それが生別となつた。

彼は一八四〇年七月二三日に一五才で成年式を挙げ、一八四一年七月一日、一六才で皇帝に即位し、一八四三年五月三〇日に一八才未満でイタリアのトレス・シリア王家の息女テレザ・クリスチナと結婚した。そして四人の子が産れたが、長男アフォンソと二男ペードロは一年前後で死亡し、長女イザベルと二女レオポルジナが成長した。

ドン・ペードロ二世は一七才で結婚し、息女二人も早

く結婚した関係で、彼は四〇才にして祖父となった。

彼は哲人皇帝といわれたほど科学と芸術を愛し、読書を好んだ。その私生活は簡素で、皇室予算の大部分を苦学生の援助や人材の育成に当てた。

ドン・ペードロ二世の治世の五年にわたったパラグワイ戦争による精神的打撃は大きく、戦争が終熄した一八七〇年に彼は四五才だったが、頭は総白となり六〇才以上の老人に見えた。

ドン・ペードロ二世は直情経行の人で、常に正邪の別を明かにした。その彼の性格を如実に物語るものにクリスチー問題がある。

一八六一年九月、リオ・グランデ・ド・スールの沿海でイギリス商船『プリンス・オブ・ウェールズ』が座礁し、積載する荷物を陸揚げしたところ、一夜にして盗まれるという事件がおこった。それをブラジル政府の責任として、リオ駐在のイギゾス公使ウイリアム・クリスチーが損害賠償を請求したが、ドン・ペードロは断固拒絶した。(その損害賠償金は後にイギリス政府に支払われた)。

つづいて一八六二年に、イギリス海軍の士官三名がリオで泥酔して乱行を働き、警官に逮捕されて収監された。

クリスチー公使はその海軍士官の釈放と、彼らを逮捕

した警官の処罰ならびにイギリス政府への謝罪を強調した。

しかしドン・ペードロ二世の命によって政府はクリスチー公使の要求を容れなかったので、グワナバラ湾に碇泊するイギリス軍艦はブラジルの商船三隻を舎捕した。そこでドン・ペードロ二世はイギリスに対し国交断絶を宣告した。当時のイギリスは国威隆々、世界の七海に覇を唱えていたが、ドン・ペードロ二世は些もその権勢に屈するところがなかった。ビクトリア女王はドン・ペードロ二世の人柄にうたれ、ブラジル政府に謝罪の意を示して円満な解決を見た。

帝政打倒の気運が高まった直接の原因は奴隷解放にあるが、それ以前の教会問題（司教問題）とケストン・ミタールといわれた軍人問題もかなり影響している。それに合せて独立後のアメリカ合衆国の繁栄、フランスやアルゼンチン共和国の発展がブラジルの指導階級に強い刺激を与えていた。あまつさえ皇帝ドン・ペードロ二世の健康は衰ろえ、万一の場合はその後継の男子がない。皇帝の女婿デュー伯爵（イザベル皇女の夫）はフランスの貴族であることがブラジル国民の杞憂となった。

帝政崩壊の要因の一つとなった教会問題を取上げるに、ドン・ペードロ一世の独立宣言前から博愛と社会向上を

標榜するマツソン運動（フリーメーソン）に多くの有能人材が参加して、政治と宗教面に著しい勢力を有していた。マツソン運動は中世ヨーロッパの石工組合に発した秘密結社の社会向上活動で、ブラジルではリオ、ニテロイのほかレシフェとベレンにその結社があった。政界の重鎮ジョゼ・ボニファシオはリオの秘密結社のグロン・メストレ（首長）であり、摂政となる以前のドン・ペードロも秘密結社員として夜間の集会に出席していた。ドン・ペードロ二世の治世にはカトリック教会のパージェレにもマツソン運動に参加した者があった。

ローマ教会はブラジルに隆盛となりつつある秘密結社を威圧すべく、ローマ教皇の名において、その旨をブラジル政府に強要した。しかし現実にはマツソン運動はブラジル社会の向上に顕著の実績を示していたので、政府はローマ教会の要請に応じなかった。ところがレシフェの司教ビタル・マリア・ゴンサルベス・デ・オリベiraとパラの司教ドン・アントニオ・デ・マセド・コスタがローマ教会の伝達を遵奉し、秘密結社員を有する団体に圧力を加えた。それを知ったドン・ペードロ二世はローマ教会に対してすこしも仮借することがなく、レシフェとパラの司教の逮捕を命じ、法の裁きをもって投獄した事件がケストン・レリジオーザ（宗教問題）である。

それは一八七五年のできごとで、ブラジル全国の注目をひいた。ブラジルは宗教の自由を認めながらも、カトリックは隠然たる勢力を占め、ことの如何を問わず、カトリック教会に楯突くものは必ず制裁をうけた。

次ぎはケストン・ミリタールといわれた軍人問題だが、ドン・ペードロ一世以来、軍人が政治に介入することが禁じられていた。しかしパラグワイ戦争を契機として軍部に共和思想が芽生えた。それはリオのプライア・ベルメーリヤの陸軍士官学校の教官ベンジャミン・コンスタンの指導理念に負うところが大きい。ベンジャミン・コンスタンはフランスのコント学派の実証哲学（人道主義と啓蒙を基調とする社会哲学）の熱心な信奉者での思想が軍人と学生層に深く浸潤していた。それが時には政府攻撃にも現われたが、或る時センナ・マドレーラ中佐が新聞の論説欄で痛烈な政治批判をした。それは一八八三年九月のことである。当時、政府は軍人が陸軍大臣の許可なくして政府批判をすることを厳禁していたが、センナ・マドレーラ中佐はか数名の陸軍士官が違法行為をあえてし、言論機関による政府攻撃をした。それらの軍人が処罰されたために軍部の政府に対する反抗氣勢が沸騰した。つづいてリオ・グランデ・ド・スールの陸軍士官の連署で政府への弾劾文が寄せられ、また地元リオの陸

軍士官の政府への強硬を抗議文がルイ・バルボーザによって書き上げられた。

軍人の帝政政府に対する不満はパラグワイ戦争の後に発している。パラグワイ戦争に従軍した軍人は多大の犠牲を払ったが、戦後はそれら軍人の待遇が期待に反したことが共和思想に傾く原因ともなった。

長いあいだ萌芽をはらんでいた共和運動が表面化したのは、一八七〇年二月にリオに『共和クラブ』が創立されてからである。同年一月三日に機関紙『ア・レプブリカ』が発刊されたが、そのマニフェスト（声明）にはキンチーノ・ボカユーバ、サルダーニャ・マリーニョ、クリスチアノ・ベネジット・オトニ、アリスチーデス・ロボ、ラファエッテ・ロドリゲス・ペレーラ、サルバドール・デ・メンドンサ、フランシスコ・ランジェル・ペスターナ、ローペス・トラヴオンなどの名が連ねられている。この『共和クラブ』のマニフェストは共和運動の魁けををし、これにつづいて国内の各地に共和運動の新聞が現われた。

一八七三年にサンパウロにパウリスタ共和党が生まれ、その第一回共和会議が同年イツイで開かれた。同会議にはフランシスコ・グリセリオ、アメリカ・ブラジリエンセ、ベルナルジノ・デ・カンポス、プルデンテ・デ・モ

ラエス、アメリカ・デ・カンポス、カンポス・サーレス、ルイス・ガーマ、ベント・ビクード、ジュリオ・デ・メスキータなどの共和主義者が出席した。

このように共和運動は日を追うて広く行きわたり、一八八八年には全国に一八三の共和クラブが存在し、それぞれの機関紙が発刊された。それらの新聞の主なものにはリオの『オ・グローボ』と『オ・コンバテ』サンパウロの『ア・プロビンシア・デ・サンパウロ』（現在の『オ・エスタード・デ・サンパウロ』）、リオ・グランデ・ド・スールの『ア・フェデラソン』などがあつた。

究極はリオとサンパウロの共和主義者の代表数名がデオドロ・ダ・フォンセツカ元帥を説得して共和宣言に踏みきつたのである。それはデオドロ元帥自らの意志よりは、周囲の状況から担ぎ出されたというのが当たっている。他の共和主義者にしても個人的にはドン・ペードロ二世を傑れた君主として尊敬し、叛意を抱いていた者はほとんどなかった。一八八九年一月一五日早朝、遂に軍部クーデターがおこつた。

当日のデオドロ元帥は病弱の身をおして馬に跨がり、数名の共和主義者の先頭に立ってサンタアナ広場（現在のレプブリカ広場）の陸軍省の前面で、馬上から軍帽をかざしてビーバー・ア・レプブリカの叫びを挙げた。

その時、陸軍省の内部ではアフォンソ・セルソ内閣が緊急会議を開いていたが、軍部革命になんらの抵抗も示さず、総辞任した。

ペトロポリスの離宮に在ったドン・ペードロ二世はその急報に接して、急拠リオに降りキンゼ広場の政庁に到着した時には既にブラジル皇帝の王権は失なわれていた。

ドン・ペードロは無言のまま皇帝退位書に署名した。またデオドロ元帥からドン・ペードロに提出された通告書には、十一月一五日から向う三日以内に前皇帝は家族とともに国外に退去する旨が強制されていた。その書面を持参したソロン・リベーロ少佐（エウクリーデス・ダ・クーニャの岳父）は沈痛の表情だったが、ドン・ペードロは半ば怒気をふくみ『ノン・ソウ・ネーゴ・フジード』（余は逃亡黒奴ではない）と口吻をもらした。

デオドロ元帥の共和宣言から二日後の十一月一七日夜、ドン・ペードロと家族は海防艇でリオの海軍埠頭を出発し、イリア・グランデ湾で商船『アラゴアス』に乗換え、ポルトガルに向った。

イザベル皇女（一八四六～一九二一）

イザベル皇女は一八四六年七月二九日にリオのサン・

クストヴァン宮に誕生した。彼女には二人の兄（ドン・ペードロ・アフォンソとドン・アフォンソ）がいたが、いずれも幼にして死亡し、妹レオポルジナと二姉妹であった。

イザベル皇女の全名はイザベル・クリスチナ・レオポルジナ・アウグスタ・ミカエラ・ラ・デ・ゴンサーガである。

一八六四年一〇月十五日にフランスの王族ルイ・フィリップ・ガストン・ドオルレアン（デュー伯爵）と結婚し、その後はイザベル・デ・オルレアン・ブラガンサの略名を用いた。



イザベル皇女

父ドン・ペードロ二世は前後三回ヨーロッパ旅行をしたので、その都度皇帝代理として摂政の任についた。彼女が最初に摂政となったのは二五才であった。それは一八七一年五月から一八七二年三月までであり、政府首相はリオ・ブランコ子爵であった。その間、イザベル皇女は外国人帰化令、パラグワイとの平和条約、ベントレ・リーブレ令（ブラジル生れの奴隷の子の自由を認める法

令）を公布した。

第二回の摂政任期は一八七六年三月から一八七七年九月までだが、選挙改正法と教育制改革令が公布された。第三回の摂政任期は一八八七年六月から一八八八年八月までであり父ドン・ペードロ二世のヨーロッパ滞在中に奴隷解放令が發布され、全国七五万の黒人奴隷が自由となった。当時のイザベル皇女は四一才であつた。

一八八九年十一月一五日、デオドロ・ダ・フォンセッカ元帥による共和制宣言から三日目の十一月一七日に父ドン・ペードロとともにブラジルを去つたイザベル皇女は三二年をヨーロッパにすごし、再び祖国ブラジルの土を踏むことがなく、七五才でパリのデュー城閣に逝つた。それは一九二一年十一月一四日である。当時のパリの新聞によれば、イザベル皇女の葬儀はノートルダムで営まれたとある。

イザベル皇女の訃が伝わるや、ブラジル全国は三日間の喪に服した。

一九二二年にブラジル独立百周年を記念するに先立つて、大統領エピタシオ・ペッソアは元ブラジル皇族の追放解除令を發布した。

イザベル皇女は祖国ブラジルに帰れることを乙女のように喜んだが、心臓病のために長途の航海に耐えられな

いと侍医の意見で取止めとなった。それから間もなく、イザベル皇女は数人の孫に囲まれて世を去った。

イザベル皇女はパリに葬られたが、一九五三年に巡洋艦バローゾ号で遺体がブラジルに運ばれ、ペトロポリスのカテドラル（サン・ペードロ教会）に父母（ドン・ペードロ二世夫妻）と相並んで移葬された。

デュー伯爵（一八四二〜一九二二）

ルイ・フィリッペ・マリア・フェルナンド・ガストソ・ドオルレアン（デュー伯爵）は一八四二年四月二八日、フランスのネウリーに誕生。フランスの王ルイ・フィリッペの令孫で一八六四年一〇月一五日にドン・ペードロ二世の長女イザベルと結婚、同時にフランス国籍を喪失してブラジル国籍となった。

彼はフランス以来の軍人であり、一八六九年にはカシアス総司令官とともにアスンションに入城、同年カシアスのパラグワイ遠征軍総司令官の辞任のために後任となり、カンポグランデの戦闘に目覚ましい戦功を立てた。それにしてもデュー伯爵はフランス人であるために、陸軍部内での偏見があり、岳父ドン・ペードロは常に心を砕いた。

デュー伯爵は一九二二年八月二八日、汽船『マシリア』でヨーロッパからブラジルへの航海中に急逝した。

ジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラニョス（リオ・ブランコ子爵一八一九〜一八八〇）

リオ・ブランコ男爵の父ジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラニョスはバイアのサルバドールに生れてリオに逝った。

彼は海軍兵学校（一八三六〜四〇）を経て中央工学校（一八四一〜四四）を卒業し、同校の数学教師となった。



リオ・ブランコ子爵

一八四七年にリオ・デ・ジャネーロのプロビンシア副統領となり、一八五一年にはオノリオ・エルメット・カルネーロ・レオン（パラナ侯爵）の秘書としてラプラタ問題の折衝のためにウルグワイに赴き、一八五三年までモンテビデオに駐在した。一八五七年にはパラグワイ政府との折衝によりブラジル商船のパラグワイ川の航行条

約が調印された。

一八六一年にリオ・デ・ジャネーロ選出議員を振出しに五度閣僚（海相と外相）の席を占め、一八七一―七五年の保守党内閣の首相となった。その間ベントレ・リーブレ令（ブラジル生れの奴隷の子の自由を認める法令）が公布された。次いで彼は上院議員となり、リオ中央工科学学校の校長の任についた。

リオ・ブランコ子爵は有名な喫煙家で、それがために肺ガンで死去した。

ウルグワイ

ウルグワイの昔の住民の大部分は半遊牧民のシャルラス族と白人との混血児であった。彼らは非常に好戦的で武器にはボレアデーラという投げ縄を用い、主に蛇鳥と野生馬を捕獲していた。

ラプラタ地域の最初の探検家はスペイン人の航海家ファン・ジーアス・ソリスで、彼はラプラタ河口の探検中土人に殺害された。

一五二〇年にフェルノン・デ・マガリャンエス（マゼラン）も同じ水域を通航している。またイタリア人のセバスチヨン・カボット（ジヨバニ・カボットの息子）は

ウルグワイ川からサン・サルバドル河口の探検をした。

一五七四年にはファン・オルチス・デ・サラータがサン・サルバドル（現在のドロレス）を創設した。

ブエノス・アイレスとアスンシオンを開拓したスペイン人はラプラタ川北部の地域に侵入して土人シャルア族と闘ったが失敗した。

一六二四年に辛うじてサント・ドミンゴとセリアノにキリスト教の布教陣を築いた。そのころからスペイン人とポルトガル人とのパンダ・オリエンタル（ウルグワイの旧称）の争奪戦がくり返された。

一六八〇年にリオ・デ・ジャネイロの長官ドン・マヌエル・ローボはノーバ・コロニア・ド・サクラメント（現在のコロニア）を創設した。この要塞は数回にわたってスペイン人に攻撃され、占領された。

ポルトガル人は現在のモンテビデオ地域に町の建設を企てたが実現されず、一七二六年一月二四日にスペイン人がサン・フェリペ・デ・モンテビデオを創設した。一七七六年にはブエノス・アイレスの副王がパンダ・オリエンタルをその支配圏に入れた。翌一七七七年のサンダ・オリエンタルの領有権を認めた。一八〇七年二月から九月までは、イギリス人が一時的にモンテビデオを

占領した。

一八一一年、ウルグワイ人のホセ・アルチャーガスがラス・ピエドラスの戦いでスペイン人に勝ち、同時にアルチャーガスはコリエンテスとエントレ・リオスの長官の援助を得てパンダ・オリエンタルの大部分の統治権を固めた。一八一四年にスペイン人はモンテビデオを撤退し、その後はポルトガル人との戦いで、一八一七年にモンテビデオは陥落した。敗戦したアルチャーガスはパラグワイの独裁者ジョゼ・ガスパール・トーマス・ロドリゲス・フランシア（一七五六〜一八四〇）の救いを求め、パラグワイで死去した。

一八二一年六月一日にパンダ・オリエンタルはブラジルに併合されてプロビンシア・デ・シスプラチナとなった。

一八二五年にはプロビンシア・デ・シスプラチナに、フアン・アントニオ・ラヴァレージャによる革命がおこったが、プラタ連合県とイギリスの仲介で革命が中止され、一八二八年に独立を宣言した。

ブラジルとアルゼンチンはウルグワイから手を退き、一八三〇年七月一日にブラジルとアルゼンチン政府の承認のもとに最初の憲法が發布され、フルツオーゾ・リヴェラが大統領に就任した。

しかしウルグワイの独立後も流血の闘争がつづいた。それは主にリヴェラを宰領とするコロラド党とマノエル・オリベを首領とするブランコ党との抗争である。

工業王マウア子爵（一八一三〜一八八九）

工業王マウア子爵の本名はエリネウ・エヴァンジェリスタ・デ・ソーサで、一八一三年にリオ・グランデ・ド・スールのウルグワイ国境近くのアロイオ・グランデに生れた。

郷里で初等教育を受けたエリネウはリオ市に出て或る呉服店の店員となった。その商店が破産し、主な債権者のリチャード・カルツサーというイギリス人が債務整理に当り、エリネウを自身の商館に雇い入れた。それがエリネウが己れの才能を發揮する絶好の機会となった。エリネウのパトロンのカルツサーは傑れた実業家だったので、エリネウの人物を信頼し、その将来を囑目した。数年がすぎてカルツサーはイギリスに帰国することになり当時二六才のエリネウにカルツサー商会の全責任が委ねられた。

エリネウはカルツサー商会で熱心に英語を学び、イギリス型の紳士教育を受けたことが後日に彼が国際人として活躍することに大いに役立っている。彼が商業英語の

ほかにシエクスピーアやジョン・スチュアート・ミールの実利哲学を学んだのは二〇才前後のことである。カルツサー商会の経営に尽したエリネウの努力は酬いられて業績は大いに挙り、雇人の数は以前の数倍となった。彼は雇人各々の人格を尊重して協力者、紳士として接し、彼の商館には和気満ちて一つの大家族の観があつた。リオのサンタ・テレザの彼の邸宅は事業本営であるとともに多くの従業員の休息場でもあつた。人はよりよく働いて能率を挙げるには充分の休養をとる必要があるとして土曜日の正午から日曜日に休業する制度を彼が卒先して実行したのがブラジルのセマーナ・イングレーザ（イギリス週間）の始まりとなった。



マウア子爵

エリネウ・エヴァンジェリスタ・デ・ソーザは一八五四年（安政元年）にリオのエストレラ海岸からペトロポリス山麓への鉄道を建設した。それがブラジル最初の鉄道である。その功によって彼は爵位をうけ、マウア子爵となった。また一八六七年に開通したサントス・サンパ

ウロ鉄道（サンパウロ鉄道）もマウアの創意によるもので、イギリスの資本と技術で建設された。あの海拔八〇メートルの海岸山脈を越えるインクライン式の鉄道は当時世界の視聴を集めた。

マウアがリオ州、ニテロイのポンタ・ダ・アレーアに設立した造船所はブラジル最初の重工業で、ここで建造された蒸汽船がパラグワイ戦争に出動した。そのほかマウアはリオ市にガス灯を設け、アマゾン河川航路の開拓ブラジルとヨーロッパをつなぐ海底電信線の架設、マウア銀行の設立など、人間一代の事績としてはその広汎且つ規模の大きさに驚嘆する。

彼は精力絶倫の努力家で、創意と識見、非凡の実践力にあわせて傑出する人格が多く、偉業を完成させたといえる。

彼は運邦議員に選出され、議会ではナブコ・デ・アラウージョと相並ぶ論客であった。

隣邦ウルグワイで彼の軍事、外交、経済活動も目覚ましく、まさにマウア王国の観があった。ウルグワイでのマウアの努力と信用は絶大であり、彼の肖像入りの紙幣が発行されたほどである。

晩年の彼は金融恐慌のために破産を余儀なくされ、債務整理に全資産を投げ出し、一八八九年一〇月二一日に

ペトロポリスの私邸で七六年の生涯を終えた。

パラグワイ

パラグワイの原住民は土人グワラニー族でその大部分がチャコ地域に集中し、それぞれの尊長を中心に自治制の集団生活を営んでいた。彼らは農作し、音楽を愛し、議論を好み薬草療法に長じていた。性格はおしなべて好戦的であった。

パラグワイの最初の発見者はポルトガル人のアレシヨ・ガルシアで、一五二五年にアンデス山系の探検中にパラグワイのアスンシオン地域に到達して土人に殺害された。次ぎはイタリア人のセバスチヨン・カボットで、スペイン王室の命をうけてラプラタ盆地の探検をし、パラグワイに踏み込んだ。それにつづくパラグワイの探検者にはスペイン人のファン・デ・アヨラス、ドミンゴス・マルチネス・デ・イララ、ファン・デ・サラザールなどがある。このうちファン・デ・サラザールが一五三七年八月一五日にパラグワイ河畔に要塞を構築してヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・アスンシオンと名づけた。それが現在のパラグワイの首都アスンシオンである。

グワラニー土人は彼らの娘をスペイン人に提供してお

びただしい混血児が生まれ、それがパラグワイの人口を構成することになった。一五七五年にはアスンシオンに二八〇人のスペイン人と一〇、〇〇〇人の混血児が存在した。

ウルグワイにキリスト教の布教をしたロツケ・ゴンサルベスト、六期にわたってアスンシオンの知事となったヘルナンド・アリアス・デ・サヴェドラはいずれもアスンション生れである。サヴェドラの知事任期中にパラグワイの産業が興されたが、その主なものはエルバ・マテ（マテ茶）、砂糖、綿花、タバコ、木材などである。特にエルバ・マテはパラグワイの主産業となった。

一五四七年にフランシスカンとジェズイットによつて土民教化部落が設けられ、その教化区は一七世紀初頭にパラグワイからタペー（リオ・グランデ・ド・スール）とパラナに拡大された。

一八一一年五月一四日、パラグワイはスペインから離脱して独立国となり、ホセ・ガスパール・ロドリゲス・フランシアが国民に選ばれて執政官の任につき、一八四〇年まで政治を執った。フランシアの死後は憲法を改正して大統領を選挙し、法学者のカルロス・アントニオ・ソラノ・ロペスが当選した。以後一八年のカルロス・ソラノ・ロペスの大統領任期中にパラグワイは社会、経済、産

業の著しい進歩を見た。

大統領カルロス・ソラノ・ロペスは一八六二年に死去し、子息フランシスコ・ソラノ・ロペスが後継独裁者となるが、その時代にパラグワイ戦争がおこった。

パラグワイの独裁者フランシスコ・ソラノ・ロペス（一八二六〜一八七〇）

地図に見るとおり、南アメリカで海に面していない国が二つある。それはボリビアとパラグワイであり、特にラプラタ圏に在るパラグワイは隣接国に戦乱がある度にその煽りをうけて脅威を感じていた。したがって地理的に悪条件におかれるパラグワイは海に通ずる領地を求めてやまないものがあつた。しかしパラグワイの大統領カルロス・ソラノ・ロペスは隣接国とは友好関係を保つことを希い、武力を行使する領土侵略の意志はなかつた。彼はそのことを子息フランシスコに常に語り、如何なる問題も隣接国とは話し合いで解決すべきである。特にブラジルとは然りだと言ひ聞かせた。

フランシスコ・ソラノ・ロペスが二〇才の時にヨーロッパ各国の視察のためにパラグワイを出発した。当時、彼は主にパリに滞留してフランスとドイツの軍事施設と

軍需工業を見学した。その間彼はパリ社交界の花と謳われた一女性と相識る機会を得た。それはアイルランド系のマダム・エリザ・アリシア・リンチであった。彼女は世に稀な美貌をもつてパリの多くの男性を脳殺し、何かとスキヤンダルとゴシップの種となっていた。

一方フランシスコ・ソラノ・ロペスは軍人ではあったが、別に教育とてなく、剛放粗暴でパリでは人々からパラグワイの山猿と軽蔑されていた。そのような彼とエリザ・リンチの交際がつづけられ、遂に結婚して世間をおどろかせた。エリザ・リンチにはフランシスコ・ソラノ・ロペスがパラグワイの大統領の子息であることに対する野心があつたのである。

結婚した二人は相携えてパラグワイに向つた。その後父カルロスが他界し、フランシスコが後継独裁者となるや、猛烈な軍備拡充に乗出した。

やがてパラグワイにとって運命の日が到来した。一八六四年十一月一〇日、南マツト・グロツソに向けてパラグワイ川を航行中のブラジル商船『マルケス・デ・オリ ندا』をパラグワイ軍は拿捕し、十一月一三日にブラジル政府に対して戦宣告した。しかして五カ年にわたるパラグワイ戦争となり、一五才から八〇才までの全男子が動員され、国を挙げて戦争している時にフランシス

コ・ソラノ・ロペスの妻エリザは華美と贅沢三昧の生活を
した。

夫フランススコの戦死によってパラグワイ戦争が終熄
した時に、エリザ・リンチは全部の金をさらえてヨー
ロッパに帰った。しかし既に容色擢せて人々から相手に
もされず、寂しい晩年をすごして死去した。

エリザ・アリシア・リンチ（一八三一〜一八八六）

パラグワイの独裁者フランススコ・ソラノ・ロペスの
妻エリザ・アリシア・リンチは一八三一年にアイルラン
ドのコークに生れた。

父はイギリス系の鍛治工で母はフランス系の裁縫女で
あった。

生れながらの美貌のエリザは一六才のころは花のよう
な美しさで人々の注目をひいた。しかも聡明で英語とフ
ランス語を流暢に話した。

彼女は一七才でイギリス人の貴族の一青年と恋愛し、
ヨーロッパ各国を旅したが、短期にして双方の別れと
なった。その後エリザはフランス人の富裕の青年医師と
結婚したが、青年の両親の反対のためにアルジェリアの
フランス植民地の軍医として赴任した。当時エリザはフ

ランス駐屯軍の士官との間に醜聞をかもし、二人の将校が決闘する騒ぎまでひきおこした。

エリザの夫は彼女を置いたまま姿を消した。エリザは単身パリに戻り、以前同様の華美な生活に入った。当時エリザはフランス訪問中のフランシスコ・ソラノ・ロペスと知り合った。エリザはパラグワイの大統領夫人たることにひかれてフランシスコと結婚した。

二人は一八五四年にロンドンで建造されたパラグワイの軍艦『タクワリー』に乗り、ボルドーを経てブエノス・アイレスに向った。

フランシスコとエリザはブエノス・アイレスに六ヶ月滞在したが、その間に長男ファン・フランシスコ・ロペスが生まれた。

彼ら二人はパラナ川をさか上ってアスンシオンに到着した。それを苦々しく迎えたのがフランシスコの父カルロス・ロペス大統領であった。カルロス・ロペスはいかなる場所にもエリザと同席することを避けた。

やがてカルロス・ソラノ・ロペスが死去し、フランシスコが後継大統領となるや、一八六四年二月ブラジルに宣戦布告した。その後五カ年、パラグワイが国を挙げて戦っている時にエリザは美衣美食の生活をした。

一八七〇年、セロ・コラの包囲戦でフランシスコ・ソ

ラノ・ロペスは戦死し、パラグワイ戦争は終熄した。

夫ソラノ・ロペスを葬ったエリザ・リンチはイギリス船でフランスに去った。途中リオに寄港し、皇帝ドン・ペドロ二世に謁見を求めたが拒絶された。

彼女はパリのブルヴァー・ペレーラ街二七番に住み、世間からも忘れられ一八八六年に貧困のうちに死去した。

パラグワイ戦争（一八六五〜一八七〇）

十九世紀半ばにパラグワイは自国の海軍工廠で、蒸気力応用の軍艦を建造するほか大砲との他の兵器工場を所有していた。特に現役兵力は六万、予備兵力は二万八〇〇〇であった。

このように地理的に海に面していないパラグワイが南アメリカ第一の海軍力と陸軍の精鋭を保持していた。

パラグワイには戦争開始前、既に十一隻の軍艦があった。パラグワイ戦争勃発当時の連合国の兵力はウルグワイ一〇〇〇、アルゼンチン六〇〇〇、ブラジルは二万足らずであった。いかにパラグワイの軍備が優勢だったかがわかる。

一八六二年にパラグワイの大統領カルロス・ソラノ・ロペスが逝去し、子息フランシスコ・ソラノ・ロペスが

後継独裁者となってからは九万の常備兵と軍艦一四隻を
目指して全力を挙げた。

パラグワイがブラジルに宣戦布告したのは一八六四年
二月一三日だが、ブラジルがパラグワイ戦線に派兵し、
交戦状態となったのは一八六五年一月である。

この戦争は一八六五年から一八七〇年まで五年におよ
んだが、ブラジルとウルグワイ、アルゼンチンが軍事同
盟を結んで戦ったので三国同盟戦争ともいわれる。ラテ
ンアメリカの歴史にこれほど大規模の戦争はない。

パラグワイと連合国の戦死者は九万人、ブラジルだけ
の戦死者（病死者をふくむ）は三万で、六〇万コントス
の戦費を要した。

三国同盟とはいえ、ウルグワイは開戦間もなく同盟を
脱退し、アルゼンチンの軍備は弱少だったので、結果的
にはブラジルが単独で戦ったことになった。

五年間には四十数回の戦闘があつたがその主なものを
年代順に挙げる。

一八六五年一月二日、パイサンズーの戦闘

一八六五年六月一日、リアシュエーロ戦

一八六六年五月二日、エステロ・ベラコの戦闘

一八六六年五月二四日、第一回ツユチーの戦闘

一八六六年九月一日、ウルグワイアナにおいてのパラ

グワイ軍の降伏

- 一八六六年九月二二日、クルパイチーの戦闘
- 一八六六年九月二四日、クルズーの占領戦
- 一八六七年二月〜五月、ラグーナの退却
- 一八六七年十一月三日、第二回ツユチーの戦闘
- 一八六八年二月一九日、ウマイタの通航
- 一八六八年七月二五日、ウマイタの占領戦
- 一八六八年一二月六日、イトロロの戦闘
- 一八六八年一二月一日、アバイーの戦闘
- 一八六八年一二月一九日、ローマス・ヴァレンチナの戦闘

闘

- 一八六九年一月五日、カシアス軍のアスンシオン入城
- 一八六九年八月一二日、ピリベブイーの戦闘
- 一八六九年八月一六日、カンポ・グランデの戦闘
- 一八七〇年三月四日、セロ・コラの包囲戦、フランシスコ・ソラノ・ロペス戦死

戦争の要因

パラグワイ戦争を語るには、戦争勃発の要因となったラプラタ地域の社会と住民について知る必要がある。

一八世紀から一九世紀にかけて、パンパス地域といわ

れるリオ・グランデ・ド・スール西部とウルグワイにはブラジル人と土人との混血系ガウーシヨが住み、野生馬を捕獲して牧畜を営んでいた。中には数千アルケールスの大規模の放牧も見られた。

またパラグワイからアルゼンチンのパンパス草原にはスペイン人と土着人との混血系がウーシヨが勢力を張り、別の牧畜社会を形成していた。それらのガウーシヨが政治的に勢力を占めて特権社会をつくり、政党の宰領となる者が現われた。その豪族や特権人はカウジーリヨと呼ばれた。カウジーリヨは私兵や軍隊をもって革命、反乱を指導し、時には戦争までおこした。その代表的事件がリオ・グランデ・ド・スールのファラpos革命とウルグワイ戦争である。しかもウルグワイ戦争はパラグワイ戦争の導火線となった。

ウルグワイの二大政党のブランコ党とコロラド党は常に対立して勢力争いをしてきたがそれがウルグワイ戦争を誘発し、ひいてはパラグワイ戦争となった。

ラプラタ地域の領土闘争は一〇〇年以上もつづいたが、その間暗躍していたのがブランコ党とコロラド党である。

コロラド党はリオ・グランデ・ド・スールからウルグワイ在住のブラジル人牧畜家の味方であり、ブランコ党は敵であった。

ブランコ党とコロラド党の政争はいろいろの形でつづいたが、一八三八年にブランコ党のマヌエル・オリベ大統領をコロラド党のフルツオーゾ・リヴェラが打倒してからウルグワイは鬪争の坩堝と化した。その機に乗じてウルグワイ攻略を企てたのがアルゼンチンの独裁者ドン・マヌエル・ローザスである。それはウルグワイで失脚したマヌエル・オリベがアルゼンチンに逃れてローザスの助援を求めたことにはじまる。

ここでドン・マヌエル・ローザスの人物について説明すれば、彼はブエノス・アイレス郡の民兵士官から出発して政界に乗出し、知事となった。一八三二年には再選挙を拒絶し、一八三五年に独裁権を確立して反対派を徹底的に制圧した。当時マヌエル・ローザスは自身の肖像画をカトリック教会に掲げさせ、アルゼンチンの国旗にフェデラソン・オウ・モルテ（連合か死か）の標識を記させるという専制ぶりを發揮した。彼はアルゼンチンにパラグワイ、ウルグワイ、ボリビアを併合する大プラタ帝国の建設を意図していたのである。その第一歩としてコロラド党から追われてアルゼンチンに亡命した元ウルグワイ大統領マヌエル・オリベと結托してウルグワイ攻略の手をさしのべた。それは一八四三年で、以後ウルグワイの首都モンテビデオはローザスの征服下におかれた。

その間ウルグワイのブラジル人の牧畜家はローザス軍に
圧迫され、掠奪された。そこでウルグワイのブラジル人
救援に活躍したのがエリネウ・エヴァンジェリスタ・デ・
ソーザ（マウア子爵）である。当時の彼はウルグワイに
確固たる勢力地盤を有していた。マウアはコロラド党に
経済援助を与えると同時にローザスの反対派であるアル
ゼンチンのエントレ・リオスの知事フスト・ホセ・デ・ウ
ルキーザに協力してウルグワイに出兵させ、ローザス軍
を撃退したのが一八五一年である。同年末にブラジルは
コンフェデラソン・アルゼンチナとともにローザス政府
に宣戦布告し、一八五二年二月七日のモンテ・カゼロの
戦闘でローザス軍を撃滅した。

マノエル・ローザスは戦いに敗れて彼の野望は消え失
せ、イギリスに亡命し、二五年をすごしてサウザンプト
ンに死去した。

ローザスのウルグワイ攻略戦が終わってからはマウアは
倍旧の権勢を有し、彼はマウア銀行の紙幣を発行してウ
ルグワイの金融界の王座を占めた。それはまさにマウア
王国の観があった。

その反面、ウルグワイの土着人とブランコ党のブラジ
ル人に対する敵意は募るばかりであった。そのブランコ
党の政略によって、一八六四年にはまたしてもブランコ

党の大統領アギレが登場した。アギレ政府はコロラド党とブラジル人に強い圧迫を加えた。ブラジル政府はブラジル人の牧畜家保護のために出兵し、リオ・グランデ・ド・スール出身の革命家ヴェナンシオ・フローレスの協力を得てアギレ政府を打倒した。

パラグワイ戦争の直接の原因は、ウルグワイのフローレス軍に武力援助を与えるべく、ブラジルが出兵したところにある。ブラジルの武力干渉を予知したアギレ大統領は、それを牽制すべくパラグワイに軍事協力を求めた。

パラグワイの独裁者フランシスコ・ソラノ・ロペスはブラジル政府に対し『如何なる理由にせよ、ブラジルがウルグワイに武力干渉することを認めない』という通告をした。

ソラノ・ロペスはかつてのローザスの野望を継承し、その実現の機会をねらっていたのである。彼はプラタ帝 国建設の夢を抱いて軍備拡充を進めていた。

記述が逆転するが、ウルグワイのローザス軍を撃滅したブラジルはマツト・グロツソ向けの通路確保のために、パラグワイ川の航行権の承認をパラグワイ政府に交渉した。それは一八五〇年の外交条約で一応は決定されていたものであった。ところがパラグワイ政府はブラジル政府の要求を拒絶し、アスンシオン駐在のブラジル公使

フェリツペ・ジョゼ・ペレーラに旅券を交付してパラグワイからの退去を強制した。そのようなパラグワイ政府の意向を理解しかねたブラジル政府は誤解を求めべく、ペードロ・フェレーラ大佐を全権公使としてアスンシオンに差遣した。

ソラノ・ロペスはブラジル公使の便乗艦にパラグワイ領域外のパラナ川に停泊を命じ、そこから別の船でアスンシオンに到着するように通告を發した。フェレーラ大佐は汽船『アマズナス』でアスンシオンに向ったが途中で挫礁したために、文書をもってその意を伝えた。

ソラノ・ロペスは感ずるところあつてか、代表をリオに送り、ブラジル政府の要求するパラグワイ川の航行権を承認したのが一八五六年四月六日である。しかしその後、ソラノ・ロペスは幾つかの附加条件をもち出したがそれは明らかに協定の破棄を意味するものであつた。ブラジル政府は外相リオブランコ子爵をアスンシオンに派遣し、重ねて折衝の結果、パラグワイ川の航行権の復効されたのが一八五八年二月一二日である。それから後、ブラジルがウルグワイに武力干渉したことが動機となつて、パラグワイ川の航行条約がくずれ、ブラジル政府はモンテビデオ駐在の公使ジョゼ・アントニオ・サライバを特使としてアスンシオンに差向けた。同時にアルゼン

チンの外務省とイギリス政府の仲介で、第三次パラグワイ川通航権の承認されたのが一八六三年である。

進んで一八六四年十一月十一日、遂に運命の日が到来した。当日マット・グロツソのプロビンシア統領として赴任するカルネーロ・デ・カンポス大佐の便乗船『マルケス・デ・オリンダ』がパラグワイ川を航行中に、パラダリイ軍に拿捕された。それから二日後の十一月一三日にパラグワイはブラジルに宣戦布告した。

同年の一二月一四日にはビセンテ・バリオス大佐に率いられる四二〇〇のパラグワイ歩兵部隊はマット・グロツソのノーバ・コインブラ要塞を襲撃し、占領した。またレスキン大佐を司令官とする五〇〇〇の騎兵部隊は南マット・グロツソに進撃してドウラードスのコロニア・ミリタールとミランダ、ニオアクを占領した。

さらにパラグワイ軍はリオ・グランデ・ド・スールに攻進すべく、アルゼンチンのコリエンテスの通過をアルゼンチン政府に交渉した。それに対し、コンフエデラソン・アルゼンチーナ（アルゼンチン連邦）の大統領バルトロメウ・ミトレは文書をもって拒絶した。

しかるにソラノ・ロペスの命でパラグワイ軍はコリエンテスに不法進軍して兵力を集中した。このようにパラグワイがアルゼンチンの中立を侵したためにアルゼンチ

ン、ウルグワイ、ブラジルの三国軍事同盟の締結されたのが一八六五年五月一日である。そのころパラグワイのエスチガリビア大将の陸軍の精鋭はウルグワイ川の左岸を経てリオ・グランデ・ド・スールに侵入し、サン・ボルジャ、イタキ、ウルグワイアナを占領した。それは一八六五年の六月から八月にかけてである。

同年の六月一日にはパラナ川のリアシュエーロで戦闘があった。それがパラグワイ戦史に名高いリアシュエーロの海軍戦である。

一八六六年にはツユチー、クルズー、ウルグワイアナの戦いがあった。九月一六日のウルグワイアナにおいてのパラグワイ軍の降伏には、皇帝ドン・ペードロ二世が立会っている。

パラグワイ軍は開戦当初、南マット・グロツソを占領し、リオ・グランデ・ド・スールに進攻するまでは破竹の勢いだったが、それ以後はほとんどブラジル軍が連戦連勝した。

アスンシオンを撤去したフランシスコ・ソラノ・ロペスは最後の牙城ソラ・コラでアントニオ・コレア・ダ・カマラ將軍のブラジル軍に包囲され、アキダバン河畔で戦死した。後にソラノ・ロペスはアスンシオンの英雄霊廟に葬られた。

結局パラグワイは独裁者フランシスコ・ソラノ・ロペスのラプラタ帝国建設の野望実現のために国力を過大視した戦争をして遂に敗れた。人口一三〇万の半分に相当する一六才から五〇才までの男子は死滅し、老人と女性子供だけが残った。この敗戦による喪失は以後数十年も癒やされなかった。

ブラジルとパラグワイの講和条約は一八七二年に締結されたが、ブラジルは賠償金を一切とらなかった。

軍隊村ドウラードスの陥落

パラグワイ戦争の勃発当初、パラグワイのビセンテ・バリオス大佐の部隊は一八六四年十二月二十九日にマツト・グロツソのノーバ・コインブラ要塞を襲撃し、占領した。同日、フランシスコ・イジドロ・レスキン大佐の分隊は南部マツト・グロツソのドウラードスの軍隊村を攻撃した。コロニア・ドウラードスにはアントニオ・ジョアン・リベロ騎兵中尉と一五人の兵士が駐屯していたにすぎない。パラグワイのレスキン大佐の分隊五〇〇名がコロニア・ドウラードスに向って進軍しつつある報をうけたジョアン・リベロ中尉はコロニア・ドウラードスの住民八〇名に他に避難するように警告した。八〇名

の住民の中にはジョアン・リベロー中尉の妻と二才の男児がいた。

ジョアン・リベロー中尉はミランダ駐屯のジョゼ・アントニオ・ジーン・デ・シルバ騎兵大佐に、鉛筆で走り書きの書面を一人の使によつて届けた。それには『われわれはパラグワイ軍に降伏することなく、コロニア・ドウラードスを死守する』とあつた。

ジョアン・リベロー中尉と一五名の兵士はパラグワイ軍と最後の一弾が尽きるまで闘い抜き、戦死した。

リアシユエーロの戦闘

パラグワイの独裁者フランシスコ・ソラノ・ロペスがブラジルに宣戦布告したのは一八六四年一月一三日である。翌一八六五年六月一日にはパラナ川のリアシユエーロでブラジル艦隊とパラグワイ艦隊の戦闘があつた。その数時間にわたる戦闘でブラジル艦隊が勝利を占めた。ブラジルに宣戦布告した当時のパラグワイは三八〇〇〇の現役兵、六四〇〇〇の予備兵と十数隻の軍艦を保有し、南米最大の軍備を誇っていた。

パラグワイ軍は宣戦布告と同時にブラジルのマツト・グロツソ南部のノーバ・コインブラ要塞を占領した。次

いで兵力をリオ・グランデ・ド・スールに向けるにはパラナ川を航下し、アルゼンチン領地を通過せねばならなかった。パラグワイはそれをアルゼンチン政府に交渉したが拒絶された。そこでパラグワイ軍はアルゼンチンのコリエンテスに不法侵入して兵力を集中した。事態の成行きからアルゼンチンはブラジルとウルグワイとの軍事同盟を提言し、三国の兵力をもってパラグワイに抗戦することになった。しかし連合国の全兵力は二万数千にすぎなかつたので、ブラジルは義勇兵を募って戦線に派遣した。

マット・グロツソ南部のコインブラ要塞とドウラードス、アルゼンチンのコリエンテスを占領したパラグワイ軍は確信を得、ウマイタまたはリアシユエーロでブラジル艦隊を撃破する作戦を練った。

一八六五年六月九日、ソラノ・ロペスの命令によつてパラグワイ艦隊はウマイタ近くのトレス・ボツカスに達した。その時にブラジル艦隊はコリエンテスから五マイル隔るところに待機していた。

ブラジル艦隊は旗艦アマゾナスを先頭にイピランガ、ジェサニョラ、ベベリベ、ベルモンテ、パルナイバ、アラグワリ、メリアンなどの海防艦と武装船から成るもので、司令官はフランシスコ・マヌエル・バローゾ提督で

あつた。ブラジル艦隊はパラナ川を封鎖して敵艦隊の通路を遮断する戦略をとつた。

パラグワイ艦隊はブラジル艦隊と相会して一挙に撃滅するべく、堂々とパラナ川を下りつつあつた。敵艦隊はタクワリー、アラグワリ、イグアシー、イポラ、ジジュイ、サルト・オリエンタル、ブラベベ、イピラの他に六隻の改造艦とブラジルから拿捕したマルケス・デ・オリンダの一五隻から成るものであつた。そのパラグワイ艦隊がウマイタを出発したのが一八六五年六月一〇日の夜一二時であつた。

パラグワイ艦隊司令官ペードロ・イナシオ・メーザの作戦は、翌十一日早暁ブラジル艦隊を包囲し、一隻づつを目標に砲火を浴びせることであつた。ブラジル艦隊はリアシュエーロから三マイルのところ集中していたが六月十一日午前九時、敵艦見ゆの信号が挙げられた。バローゾ提督は直ちに戦闘開始を命ずるとともに『ブラジルは各員がその任務を完うすることを希う』のZ信号を旗艦アマゾナスに掲げた。このZ信号は一八〇五年一月二一日のトラファルガー海戦にイギリスのネルソン提督がビクトリー艦上に掲げたものと同様である。異なるのはイングラントがブラジルとなつただけである。

これがブラジル軍の士気を高揚して果敢な奮戦をなさ

しめた。

リアシユエーロの戦鬪は午前九時から午後四時までつづき、パラグワイ艦隊を完全に撃破した。

ブラジル軍は撃沈された艦船から水中に投じた敵軍を可能な限り救助した。当時の光景が画家ビートル・メーレスによって描かれ、史的名画となっている。

ラグーナの退却

マット・グロツソ南部を脅かしつつあったパラグワイ軍の拠点ラグーナを攻撃すべく、一七〇〇人の部隊がジョゼ・ダ・フォンセツカ・ガルヴオン大佐に率いられてミナスのウベラバを出発し、ミランダを経てパラグワイ国境の近くに達した。そこでフォンセツカ・ガルヴオン司令官が病死し、カルロス・カミゾン大佐が司令官となった。

同部隊はニオアツクに着き、そこから先きは地理的事情に不明のためジョゼ・フランシスコ・ロペスの先導でパラグワイに侵入した。そのころから連日の降雨で、部隊は泥濘路を難渋きわまる行軍をし、ようやくラグーナに到達した。その時にパラグワイ軍は家屋とすべての物資を焼き払って奥に退却した後であった。ブラジル軍は

弾薬と食糧が欠乏し、しかも風土病で倒れる者が続出した。その惨状は形容の言葉もなく、部隊は引き返す他なく、ラグーナからアキダウアナまで二一六キロの退却をした。

ブラジル部隊がミランダを出発したのは一八六七年三月五日で、三五日を要し、四月八日にアキダウナに帰着した。このラグーナ進軍で、九八〇人の兵士が死亡し、七〇〇人が生き残った。当時の言語にも絶する有様が文学者軍属土木技師トウネー子爵によって叙され、『ラグーナの退却』の題名で出版されブラジル戦争文学の白眉となっている。

騎兵隊の父オゾリオ將軍（一八〇八〜一八七九）

マヌエル・ルイス・オゾリオ將軍の誕生地はリオ・グランデ・ド・スールのコソセーション・ド・アロイオ（現在のオゾリオ）である。

オゾリオ將軍は一四人兄弟の四男で、父と祖父もリオ・グランデ人であるところから、彼は生粋のガウーンヨである。彼は陸軍兵学校も出ずして、一八二三年に一五才でサンパウロの第三騎兵連隊に入隊した。それ以来五六年の軍人生活に数十回の戦火を経験した。軍人とし

ての最高の地位である陸軍大臣と元帥府に列し、侯爵と
なったことでは同郷人のタマンダレ提督と好一對をなす。

オゾリオ將軍はカシアス侯爵と相ならんで武人の鑑と
いわれるのは、その輝やかしい勲功に合せて崇高な人柄
にある。

オゾリオは一八二三年に一五才でシスプラチナ載（独
立戦争）に初陣の功を立てた。その後、彼はリオ・グラ
ンデ・ド・スールのフアラポス革命（一八三五〜一八四
五）に、カシアス部隊に参加して闘った。

フアラポス革命が終るや、一八五一年に元ウルグワイ
大統領マヌエル・オリベとアルゼンチンの独裁者マヌエ
ル・ローザスの野望によるウルグワイ攻略載となった。
ブラジル政府はウルグワイ在住のブラジル人牧畜家の擁
護のために出兵した。当時オゾリオは中佐としてウルグ
ワイ遠征に参加し、一八五二年二月七日のモンテ・カゼ
ロの戦いでローザス軍を撃滅した。その功で彼は大佐に
昇進した。

ウルグワイ戦争につづくパラグワイ戦争（一八六五〜
一八七〇）にブラジルはウルグワイ、アルゼンチンと三
国同盟を結んで戦った。

一八六六年五月二四日にはパラグワイ戦史に特筆され
るべきツユチーの戦鬪が展開された。パラグワイの独裁

者フランシスコ・ソラノ・ロペスは自信をもって二五〇〇〇の精銳をツユチーに集中した。ブラジル軍にとってツユチーはパラグワイ領で、地理的事情に不明だったが、オゾリオ將軍はいとも慎重且つ緻密な作戦を練った。

ツユチーの戦鬪はラテンアメリカ史に類例のない大激戦で、パラグワイ軍の戦死六〇〇〇、戦傷七〇〇〇、ブラジル軍の戦死七一九、戦傷二一九二が記録されている。

ツユチー戦のブラジル軍の勝利はオゾリオ將軍の騎兵隊と砲兵隊による挟撃作戦が功を奏したことにある。

ツユチー戦につづくエステロ・ベラコの戦いでオゾリオ將軍は銃傷を負い、一時的にポリドロ大将と交代した。

一八六八年一月十一日のアバイーの戦鬪でオゾリオ將軍は弾丸の炸裂で顔面に戦傷を負ったが指揮を続けた。

オゾリオ將軍はブラジル騎兵隊の父であるとともに剛健不屈のガウーシヨの象徴である。

タマンダレ提督（一八〇七〜一八九七）

一二月一三日を最終日として『海軍週間』が記念されるが、それはブラジル海軍の父タマンダレ提督の誕生に当るからである。当日はリオのボタフォーゴ海岸通りのタマンダレ提督の銅像前面で海軍の分列式がおこなわれ

る。そのタマンダレ提督の銅像は、イギリスの護国の象徴としてロンドンのトラファルガー広場に立つネルソン提督の像を思わせる。

タマンダレ提督は海軍の志願兵となって戦火の洗礼をうけて以来、九〇才で逝去するまで七四年を海軍軍人に貫ぬいたのである。彼は幾多の功勞によって侯爵に叙され、マルケース・デ・タマンダレとなった。

タマンダレ提督の本名はジョアキン・マルケス・リスボアで、一八〇七年一月二三日にリオ・グランデ・ド・スールの港町リオ・グランデに生れた。ジョアキン・マルケスは幼にして舟遊びを好み、将来の海の男の素質を備えていた。少年期には父と兄の指導で船の操縦と航海術を習得し、ラゴア・ドス・パトスの入江と外海を航海した。

やがて摂政ドン・ペードロによってブラジルの独立宣言がされ、海軍の組織に当って軍艦の乗組員が募集された。ジョアキン・マルケスは早速それに応募し、旗艦『ニテロイ』の見習い兵としてバイアの独立戦争に初陣の功をたてた。当時のジョアキン・マルケスは十六才であった。旗艦『ニテロイ』の艦長ジョン・テイラー提督はジョアキン・マルケスの賢明且つ勇敢な働きを見て将来のネルソンとなるであろうと語った。

ジョアキン・マルケスはトーマス・コックレーン卿の奨めにより、ドン・ジョアン六世が創設した海軍兵学校に入学した。その同期生にジョアキン・マヌエル・バローゾ（提督）がいた。

ジョアキン・マルケスが海軍兵学校在学中にペルナンブーコに赤道連盟革命がおこり、その討伐に向った。彼は一八二六年に海軍兵学校を卒業して少尉となり、ジャセグワイ大将の海軍部隊に参加してシスプラチナ戦に赴いた。つづいて一八三五年、パラーのカバナーダの乱、一八三七年、バイアのサビナーダの乱、一八三八年、マラニヨンのバライアーダの反乱、一八四八年、レシフェのプライエーラ革命の鎮圧にカシアス軍に協力して戦った。

ジョアキン・マルケスは一八五七年から一カ年、イギリスのリヴァプールに滞留してブラジル海軍の軍艦建造の監督に当った。彼のイギリス滞在中に軍艦でリスボアを訪れたがビスケー湾を航海中に、火災をおこして沈没しつつあったアメリカの商船『オーシャン・モナーク』の乗組員を救助したことを、ヨーロッパの新聞は挙って称讃した。

イギリスから帰国したジョアキン・マルケスは大将に昇進した。

ウルグワイ戦争では戦艦『ベラ・マリア』の艦長とし

てモンテビデオを包囲した。それにつづくパラグワイ戦争に連合艦隊司令官となり、華々しい戦果を挙げた。

タマンダレ提督は皇帝ドン・ペードロ二世と公私ともに親密だったので、帝政が終焉してドン・ペードロの国外追放が決定した時に遺憾の表情で『既に来たことはやむをえない。これからはブラジル国家のために尽さねばならない』と語った。

一九世紀末にリオのガヴェア区に住んだ人はタマンダレ提督が早朝散歩する様をよく見うけた。それは多くの戦火を経験した老提督とも思われぬ温顔で、がっしりと歩を運ぶ姿は誰からも親しまれた。ところが或る日、リオ市民はタマンダレ提督の訃に接して愕然となった。それはタマンダレ提督が公職を退いて二十数日後のことである。彼こそ全生涯をブラジル海軍に捧げた人である。

ルイス・アルベス・デ・リーマ・エ・シルバ（カ

シアス公爵一八〇三〜一八八〇）

ブラジル陸軍の父ルイス・アルベス・デ・リーマ・エ・シルバは一八〇三年八月二五日リオ・デ・ジャネイロ県のエストレラ（現在のカシアス）に誕生。彼の生家は祖父以来三代にわたる武人家系である。

ルイス・アルベスは一八〇九年、五才で陸軍兵学校に入学、一八二三年に二〇才で少尉としてバイアの独立戦争に従軍、初陣の功を立てた。

一八二五〜二八年のシスプラチナ戦には大尉として奮戦、帰還後は少佐に昇進し、近衛兵団長となる。

一八三一年にはリオ・グランデ・ド・スールのフアラポス革命の討伐に向う。次いでマラニヨンのバライアダス革命（一八三九〜四〇）を制圧し、その功によつて男爵に叙された。

一八四二年にはサンパウロの自由革命を鎮撫し、ソロカバの革命軍本営で主導者ジオゴ・フェージョを捕縛する有様はまことに劇的である。

一八五一〜五二年のウルグワイ戦争には、マヌエル・オリベとローザス軍をモンテ・カゼロの戦闘で敗った。一八六五年に皇帝ドン・ペードロ二世の要請で組閣して政府首相となり、同時に保守党総裁を兼任した。

一八六七年、六四才でパラグワイ遠征軍総司令としてウマイク、イトロロ、チャコ、アバイー、ローマス・ヴァレンチナの戦闘での輝やかなしい戦功により、公爵に叙され、ズツケ・デ・カシアスとなった。

一八六九年一二月五日、アスンシオンに入城したカシアスは直ちに社会の秩序維持と治安につくし、戦争避難

民に安んじて各々の家庭に帰るよう勧告した。

カシアスの剣は平和の剣といわれ、常に平和建設のためのみ抜き払われた。

カシアスはリオ・デ・ジャネイロのプロビンシア統領、陸軍大臣、上院議員、政府首相、保守党総裁を歴任し、一八八〇年五月八日、リオ・デ・ジャネイロ県ヴァソラス郡のサンタ・モニカ荘園に長逝した。

カシアス公爵の誕生日、八月二五日は”軍人の日”となっている。

八人の元帥の母ローザ・ダ・フォンセツカ

パラグワイ戦争の最中、一八六五年九月下旬のできごとである。リオ・デ・ジャネイロの市民は九月二二日のクルハイチー戦のブラジル軍の勝利を祝って市街行進をし、ビーバー・ブラジル（ブラジル万歳）を連呼していた。それ以前ブラジル軍はパイサンズー、ウルグワイスマ、リアシュエーロ、ツユチー、クルズーの戦闘に連勝したが、さらにウルハイチーの戦勝で国民の歓喜は絶頂に達した。

喜びに湧き立つ群衆はローザ・ダ・フォンセツカ夫人の住宅の前に着くや、一斉に歓声を挙げて視意を表した。

それはローザ・ダ・フォンセツカ夫人の八人の子息が全部パラグワイ戦争に出征していたからである。

ローザ・ダ・フォンセツカは二階の窓から姿を現わして群衆の歓呼に応えたが、悲喜交々の心境であつた。あたかも当日はローザ・ダ・フォンセツカは二人の子息、イポリト大尉とアフォンソ見習士官がクルパイチーとクルズーの激戦に前後して戦死した報に接していた。それにつづくイトロロ戦では六男のエドウルド・エミリオが戦死を遂げた。つまり三人の子息を失つたのである。

ローザ・ダ・フォンセツカは熱狂する群衆の歓声をうけながら微笑をもつて会釈し、親しい人に静かに洩らすに『今夜は皆さんとともに戦勝の祝いをし、明日は一人で泣かせて頂きます』と。

ローザ・ダ・フォンセツカの全名はローザ・マリア・パウリーナ・ダ・フォンセツカでアラゴアスの出身である。彼女の夫マヌエル・メソデス・ダ・フォンセツカ・ガルボンはマセーオの市会議員、軍人で、プロビンシア政府の施政と相容れず、反乱を企てて政府軍に追われ、セルジペに逃れた。

彼は妻ローザ・マリアと八人の子供をおいて单身セルジペに去り、病死した。

ローザ・マリアは八人の子を抱えて寡婦となつたが、

全部を立派に養育した。

八人の子息はそれぞれ最高地位の大将、元帥、陸相、または大統領、プロビンシア統領、上院議員、男爵となった。そのためにローザ・ダ・フォンセツカには”八人の元帥の母”の名称がつけられた。

次にフォンセツカ家の八人兄弟を列举する。

長男エルメス・エルネスト・ダ・フォンセツカ（一八二四～一八九一）ウルグワイとパラグワイ両戦役に出征。元帥、後にマツト・グロツソの州統領となる。

二男セヴェリノ・ダ・フォンセツカ（一八二五～一八八九）ウルグワイとパラグワイ戦に出征。元帥、授爵されてアラゴアス男爵となる。

三男マヌエル・デオドロ・ダ・フォンセツカ（一八二七～一八九二）ウルグワイとパラグワイ戦争に従軍、元帥、ブラジル共和制宣言者、初代大統領。

四男ペードロ・パウリーノ・ダ・フォンセツカ（一八二九～一九〇二）上員議員、アラゴアス州統領。

五男イポリト・ダ・フォンセツカ（一八三一～一八六六）大尉でパラグワイ戦争に従軍、クルハイチー戦で戦死。

六男エドアルド・エミリアノ・フォンセツカ（一八三三～一八六八）少佐でイトロロ戦に戦死。

七男ジョアン・セヴェリアノ・ダ・フォンセツカ（一八三六〜一八九七）軍医大将としてパラグワイ戦争に出征、後に上院議員となる。

八男アフォンソ・アウレリオ・ダ・フォンセツカ（一八四五〜一八六六）見習士官、一九才で連隊旗手として出征、クルハイチー戦で戦死。

第八代大統領エルメス・ダ・フォンセツカ元帥（一八五五〜一九二三）は長男エルメス・エルネスト・ダ・フォンセツカの子息であり、ローザ・ダ・フォンセツカの孫、初代大統領デオドロ・ダ・フォンセツカ元帥の甥に当る。

マヌエル・デオドロ・ダ・フォンセツカは三五才で大尉としてパラグワイ戦争に出征、イトロロ戦で腹部を負傷した。その傷は癒えることがなく、遂に彼の命取りとなった。デオドロは五カ年パラグワイ戦線にあり、ソラノ・ロペス最後のセーロ・コラの包囲戦に参加した。彼は戦争が終熄した一八七〇年三月に大佐に昇進してリオに帰還した。

「八人の元帥の母」ローザ・ダ・フォンセツカの肖像画は陸軍博物館（旧陸軍省）に秘蔵されている。

アンナ・ネリー（一八一四〜一八八〇）

パラグワイ戦争勃発当時のブラジルは各地で義勇兵を募って戦線に派遣した。戦いは苛烈をきわめて戦傷兵士と疾病患者を続出し、加えて医薬と看護班の不足のため惨状は眼を覆うばかりであった。

それを知ったアンナ・ジユスチナ・フェレーラ・ネリーは自ら決意するところがあり、看護婦を志願して戦地に向った。彼女はそれ以前に夫と死別し、二人の息もパラグワイ戦争に従軍して戦死を遂げた。そのやるせない気持をひたすら祖国愛に向け、戦場にあつて戦傷軍人と病める者の看護につとめた。

アンナ・ネリーは単なる看護婦ではなく、戦傷兵士と病人の枕頭に彼らとともに祈り、それぞれの郷里への手紙の代筆をした。彼女が夜半に灯をかざして兵士達の病床を巡回する姿は神々しく、クリミア戦争でのフロレンス・ナイチンゲールを思わせるものがあつた。そこで誰いともなく、アンナ・ネリーを「ブラジル人の母」と呼ぶようになった。アンナ・ネリーは戦地に在ること四年、その間数回の激戦を経験した。

アンナ・ネリーは一八一四年十二月一三日にバイアのカシヨエーラ・ド・パラグワースーに生れた。彼女は海軍

大尉イジドロ・アントニオ・ネリーと結婚したが、夫は三人の子を残して一八四四年に死亡した。そしてパラグワイ戦争となり、彼女の兄弟マヌエル・ジェロニモ・フレータスとジョアン・マウリシオ・フェレーラ（いずれも中佐）が従軍した。また彼女の三人の子息のうちジュスチニアノ・デ・カストロ・ネリー（軍医少尉）とペドロ・アントニオ・ネリー（陸軍士官候補生）が戦死した。

リオ・デ・ジャネイロ連邦大学医学部所属の看護婦学校にはエスコラ・デ・エンフェルマージェン・アンナ・ネリーの名称がつけられている。

ドン・ペードロ二世のヨーロッパ旅行

パラグワイ戦争の終熄した翌年、一八七一年五月二五日にドン・ペードロ二世はヨーロッパ旅行のため、イギリス船でリオを出發した。一行はドン・ペードロ夫妻ほか一三名、全員一五名であった。随員には親友ボン・レチロ子爵、フォンセツカ子爵夫人、イタウナ子爵、宮廷侍医ノゲラ・ガーマ夫妻がいた。

リスボアに到着したドン・ペードロはポルトガル政府の特別の配慮や儀礼一切を辞退し単なる旅行者として規

則通り検疫をうけた。当時ブラジルに黄熱病が流行していたからである。ドン・ペードロ一行はホテル・ブラガンサに授宿したが、ホテルの台帳に個人名のドン・ペードロ・デ・アルカンタラと署名したにすぎない。

リスボアではドン・ペードロは一八三一年四月に別れた継母アメリアを真先きに訪れた。一八三六年のドン・ペードロ一世の死以来、寡婦となったドーナ・アメリアはリスボアの”緑の窓の家”に住んでいた。当時の彼女は齢六〇、それから二年後に他界した。

ドン・ペードロはポルトガルでは歴史学者アレシヤンデレ・エルクラノとの面会を期待していたが、それが遂げられたことが満足であった。ドン・ペードロはポルトガルは後に再び訪れることにしてスペインに向った。マドリードに着いたドン・ペードロは王アデマウ一世に謁見し、ついでプライド博物館を見学した。

マドリードからフランスに入ったのは六月二六日で、当時のフランスは晋仏戦争に敗れた直後であり、ナポレオン三世はドイツに捕虜となっていた。フランスではパリ、ヴェルサイユ、ルアンに短期間留っただけで、これもまた再度の訪問を予定してイギリスに向った。

ロンドンでビクトリア女王に迎えられて、オースボン宮の賓客となった。ロンドン滞在中は博物学者チャール

ス・ダーウインを訪問したが不在であった。ダーウインは一八三二年にリオに滞在して科学調査をした。当時のドン・ペードロは七才であった。

七月下旬、ドン・ペードロはスコットランドのエジンバラーに着き、アボットフォードの文豪ウォルター・スコット（一七七一〜一八三二）の城閣を訪れ、令姪に会って暫し語り合い、在りし日の文豪を偲んだ。

八月二日、ドン・ペードロはロンドンを出発し、ドヴァー海峡を渡って一五日にベルギーのブルッセルに到着し、直ちにワートルローの古戦場に臨んだ。ラツケンでは皇帝レオポルド二世の晩餐会に招ぜられた。

ブルッセルからベルリンに着いたドン・ペードロはウイルヘルム一世と対談したが、それは鉄血宰相ビスマークの政治的成功でドイツ統一が遂げられた後であった。またドン・ペードロは作曲家リビアルト・ワグナーにも会い、『タンホイザー』の演奏を聴いた。

その後はブタペスト、トリエステ、ヴェニスを経由してミラノに至り、老詩人アレサンドロ・マンゾニと面談した。

エジプトには一五日を費やし、アレキサンドリアからカイロに到着、ピラミッドの麓で全員記念撮影をした。エジプトからはイタリアに渡り、ナポリに上陸したのが

一八七一年一月一五日であつた。ローマにおいては教皇ピオ六世と国王ビトリオ・エマノエルに謁見した。その後はフロレンサ、ピザ、ジェノヴァ、トリノーに短期間滞在した。

再度のパリ訪問では文学者バルザック、アレキサンダー・デューマ（父）、科学者クロード・ベルナー・パストゥールと面談した。特にドン・ペードロには科学者パストゥールとの語り合いが無上の歓びであつた。

ドン・ペードロはパリ二ヶ月をすごし、一八七二年に南仏に入り、マルセイユ、ニース、カンヌから古都モンペリエールに大学を訪れた。

最後にポルトガルに戻つたドン・ペードロはポルトで文学者カミロ・カステロ・ブランコに会い、二人の語らひは尽きるところがなかつた。ポルトからはブラーガを経てコインブラを訪れ、大学で学生の大歓迎をうけた。

ポルトガルを去るに当り、ドン・ペードロはリスボアのサン・ビセンテ・デ・フォーラ教会のブラガンサ王家の霊廟に葬られている父ドン・ペードロ一世の柩に別れを告げた。

第二回ヨーロッパ旅行

ドン・ペードロ二世は第二回のヨーロッパ旅行を思い立ったが、それは妻テレザ・クリスチナの健康のために転地療養を必要としたことが主な理由である。いま一つは一八七六年はアメリカ合衆国の独立百年に当り、その記念博覧会がフィラデルフィアで催され、グラント大統領から招待をうけたためである。

ドン・ペードロの念願はアメリカからヨーロッパに渡ることであつた。その第二回外国旅行はアメリカ合衆国とカナダ、イギリス、ベルギー、オランダ、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、ノールウエー、ロシア、トルコ、ギリシャ、イタリア、オーストリー、スイス、フランス、ポルトガル、パレスチナ、エジプトで、一年六カ月が予定された。

一行はドン・ペードロ夫妻、ボン・レチロ子興、宮廷女官ジョゼフィナ・ダ・フォンセツカほか数名であつた。

一八七六年三月二六日に汽船『ヘヴェリユース』でリオを出発、ニューヨークに向つた。この航海に二〇日を要したが、イギリスの哲学者ハーバート・スペンサー（一八二〇〜一九〇三）と同船し、語り合うことができた。

四月一五日にニューヨーク到着、國務長官ハミルトン・フィッシュに出迎えられたが、前回のヨーロッパ旅行

と同じく特別の配慮を辞退した。

ドン・ペードロはニューヨークからボストンの近郊都市ケンブリッジに詩人ロングフェロウを訪れて長時間の対談をした。

一八七六年六月四日、アメリカ独立記念日より三〇日前にフィラデルフィアの博覧会開会式が挙げられ、ドン・ペードロ夫妻が臨席した。各国の国賓のうちでドン・ペードロが最も人気があったが、それは彼がブラジル皇帝であるとともに学者的な風格にある。

長身で白髪の哲学者のようなドン・ペードロが現われるや、万来の拍手がおこった。

グラント大統領は恭しくドン・ペードロ夫妻を貴賓席に導いた。

当日ドン・ペードロの采席を誰よりも待ち望んでいた一人の青年があった。その青年はグレハム・ベルであり、彼は博覧会の一隅に磁力通話器と称するものを展示し、緊張のうちにドン・ペードロの現われるのを待っていた。

青年の希いはドン・ペードロに彼の発明した磁力通話器の試験を乞うことであった。グレハム・ベルの熱意に動かされたドン・ペードロは快よく磁力通話器を試験することになった。ドン・ペードロとグレハム・ベルの距離は約一五〇メートルあったが、ベルがいうハムレット

の独語の TO BE OR NOT TO BE がそのまま耳に聞こえた。

ドン・ペードロは『マイ・ゴット、イット・スピークス』と驚嘆の声を発した。これがアレギサンダー・クレハム・ベル発明の電話器のおこりである。

アメリカ合衆国とカナダに三カ月をすごしたドン・ペードロはイギリスに渡り、ロンドンのクラリッジ・ホテルに投宿した。彼は直ちにドイツに向い、ボンからラインを上り、フランクフルト、ハイデルベルグ、ミュンヘン、ザルツブルグを経てガステーンに二月いっぱい滞在した。それは医師の奨めで、良質の水がテレザ・クリスチナ皇后の病氣療養に特効があると知ったからである。ついでドン・ペードロはスウェーデンを訪れ、ストックホルムで王オスカルに面謁し、ウプサラ大学を見学した。ストックホルムからはフィンランドに渡り、さらにペトログラード、モスクワ、キューを訪れ、南下してオデッサ、セバストポリ、リヴァジアに立寄ったが、オデッサでは小麦の大貯蔵庫を見て一驚を喫した。

黒海沿岸のルヴァジアに着いたドン・ペードロはロシア皇帝アレキサンダー二世との面会の予定を早めて謁見した。その直後に同皇帝はニヒリスト団によって暗殺された。ドン・ペードロには何かしら予感があったようだ。

ギリシヤの訪問はドン・ペードロには長年来の希いであり、パルテノンの廢墟に立った彼は西洋文明発祥の歴史を回顧した。

十一月三〇日にドン・ペードロは聖地エルサレムに着き、一二月二日に彼はカルヴァリオ山で五十一歳の誕生日を迎えた。

一八七七年一月にはエジプトを経てイタリアに着き、シシリー、ナポリ、ローマ、フロレンサ、ヴェニスを巡訪した。フロレンサでドン・ペードロは遊学中の画家ペードロ・アメリコに会ったが、当時ペードロ・アメリコはパラグワイ戦争の史画『アバイーの戦闘』を完成し、その個展が催されていたからである。またミラノにおいては作曲家カルロス・ゴメスに面会し、激励した。

ミラノからはウィーンに赴き、ボン・レチロ子爵一行と合流した。

パリではドン・ペードロは数回にわたってアカデミア・フランセーザを訪問し、会長アレキサンダー・デューマ（子）と会談した。ほかにドン・ペードロは文豪ビクトール・ユゴーと三度面談した。当時のユゴーは七五才、上院議員で、フランス文壇の元老的存在であった。

一八七七年六月、ドン・ペードロはロンドンに滞留し、政府首相ウイリアム・グラドストーンと会談し、カキスト

ン博覧会の開会式に招待をうけた。つづいてドン・ペードロはオクスフォードで多くの学生に囲まれ、歓迎された。

イギリスからはオランダ、スイスを経由してポルトガルに入り、詩人カミロ・カステロ・ブランコに再会した。

しかして一八七七年一二月末、ドン・ペードロはポルトガルからリオに帰着した。

ヨーロッパから帰ったドン・ペードロはケストン・ドス・ビスボスといわれた司教問題に逢着した。それはレシフェとベレンの司教による秘密結社の弾圧に発した問題である。

一八八七年六月三〇日にドン・ペードロ二世夫妻は第三回のヨーロッパ旅行に出発したが、それは専らドン・ペードロの病氣療養のためであった。そのドン・ペードロの不在中の一八八八年五月一三日に、摂政イザベルによって奴隷解放令『レー・アウレア』が署名公布された。

日本を訪れたブラジルの皇族ドン・アウグスト・

レオポルド殿下

一八八九年は日本の明治二十二年に当るが、同年一月一五日の軍部クーデターによってブラジルの帝政が終

焉して共和制となった。

その直前、皇帝ドン・ペードロ二世の皇孫ドン・アウグスト・レオポルド殿下が、海軍士官としてブラジルの練習艦『アルミランテ・バローゾ』で世界周航の途次、日本を訪れている。

『アルミランテ・バローゾ』が横浜に入港したのは明治二十二年の三月だが、当時はブラジルと日本の外交関係がなかったので、ドン・アウグスト・レオポルド殿下と艦長クストジオ・デ・メーロ提督はポルトガルの公使に随伴して明治天皇に拝謁した。

当時横浜に住んでいた大武和三郎（葡和辞典の著者）は英語を話せるところから、ドン・アウグスト・レオポルド殿下の通訳をつとめて大いに気に入られた。それが動機となって、殿下からブラジル行きを奨められた大武和三郎は、両親を説得して承諾を得、『アルミランテ・バローゾ』に乗込むことができた。

同艦が長崎を出港し、コロンボを過ぎてから暴風に逢い、アデン港に避難中に入電があった。それはブラジルに軍部革命がおこり、デオドロ元帥によって共和制が宣言されたということであった。そこでレオポルド殿下は亡命のためにマルセーユで下船し、大武和三郎は艦長クストジオ・デ・メーロとともにブラジルに向った。大武

ガリオ・デ・ジャネイロに到着したのは一八九〇年の七月である。

マルセーユに上陸したレオポルド殿下は同じくブラジルから亡命中の実兄ドン・ペードロ・アウグストに会いともにパリに住んだ。

練習艦『アルミランテ・バローゾ』の艦長だったクストジオ・デ・メーロ提督は一八九三年の海軍反乱の主導者となった。この海軍反乱はフロリアノ・ペーシヨットの政府軍によって制圧された。

ここで日本を訪れたドン・アウグスト・レオポルド殿下について説明を加えるが、皇帝ドン・ペードロ二世には二人の皇女があった。第一皇女は奴隷解放をしたイザベルである。第二皇女レオポルジナは一八四七年にペトロポリスに生れ、一八六四年に一七才でオーストリーの王族ドン・ルイス・アウグスト・デ・サキセ・コブルゴ・ゴツタ公（一九才）と結婚した。当時のサキセ・コブルゴ・ゴツタ公はブラジル海軍の大尉の資格で遇されていた。同公とレオポルジナ皇女との結婚によって次の四人の男児が生れた。

長男ドン・ペードロ・アウグスト

二男ドン・アウグスト・レオポルド

三男ドン・ジョゼ・フェルナンド

四男ドン・ルイス

一八六六年三月一九日、リオの砲台から祝砲が轟き、皇帝ドン・ペードロ二世の第二皇女レオポルジナ（サキセ・コブルゴ・ゴッタ公妃）の長男ドン・ペードロ・アウグストの誕生が報じられた。それと同時にドン・ペードロ二世は四〇才で祖父となった。

第一皇女イザベルには未だ子がなかった。

一八六七年一二月六日にはサキセ・コブルゴ・ゴッタ公夫妻の二男ドン・アウグスト・レオポルドが生れた。ドン・アウグスト・レオポルド殿下が誕生した一八六七年は明治三年であり、それより二年前（慶応元年）にアメリカの第十六代大統領エブラム・リンカーンが暗殺された。ドン・アウグスト・レオポルド殿下は幼少から少年期にかけて、父サキセ公の祖国オーストリーのウィーンで教育された。ブラジルではリオの海軍兵学校を卒業して海軍士官となった。彼が練習艦『アルミランテ・バローゾ』で日本を訪れた時は二二才だが三十代に見られた。

ドン・アウグスト・レオポルド殿下は祖父ドン・ペードロ二世と父サキセ・コブルゴ・ゴッタ公に似て長身金髪で、いかにも貴公子の風格を備えていた。それは彼の母ドーナ・レオポルジナが美貌で高貴な気品を有してい

たことにもある。

レオポルジナ妃は二三才の若さでウィーンに病死した。当時のドン・アウグスト・レオポルドは三才であった。

ドン・アウグスト・レオポルド殿下は一九二二年一〇月二日に五五才でウィーンに逝った。それはブラジルが独立百年を迎えた直後である。

ドン・アウグスト・レオポルド殿下の日本訪問が機縁となつて、大武和三郎がブラジルに渡った。大武はブラジルに五年住み、日本に帰ってから、東京にブラジル公使館が開設されるとともに、その通訳官となつたのが一八九九年である。

ジョアキン・ナブコ（一八四九〜一九一〇）

政治家、文学者、外交官、奴隷解放の闘士ジョアキン・ナブコは金髪碧眼で、貴公子然たる風采は美男子の典型といわれた。

彼は教養高く、若くして弁論にすぐれ、十代で奴隷解放運動に投じた。

君主主義者だった彼はブラジルが帝政から共和制になるにおよんで政界を退き、外交官としてロンドン、ロー

マ、ワシントンに駐在した。



ジョアキン・ナブコ

ジョアキン・ナブコは一九四年八月一九日、ペルナンブーコのカーボス郡のマッサンガーナ砂糖農園に生れた。父は第二次帝政の政治家、上院議員トーマス・ナブコ・デ・アラウージョであつた。

ジョアキン・ナブコは養母によつて育てられ、一八六〇年にリオのドン・ペードロ二世高等学校に入学、一八六六年にはサンパウロ法科大学に入学し、学生新聞『自由論壇』を創刊した。

一八七二年には教会問題で、皇帝ドン・ペードロ二世を支持した。

一八七六年、ワシントンのブラジル公使館の書記官として赴任、次いで一八七七年ロンドンに転任。

一八八〇年には反奴隷制協会を創立す。

一八八四年、新聞人ジョゼ・ド・パトロシニオ、詩人ルイス・ガーマとともに奴隷解放の街頭運動をおこす。

一九〇五年、アメリカのブラジル公使館が大使館に昇格し、初代大使としてワシントンに赴任した。

ジョアキン・ナブコはワシントンに在る間、米州諸国の相互理解と親善につとめ汎米主義を提唱し、彼の提案によつてワシントンに汎米会館が建設された。

一九一〇年一月一七日ワシントンに死去、彼の遺体はアメリカの軍艦でブラジルに運ばれ、郷土レシフェに葬られた。

ジョアキン・ナブコの著書のうち特に有名なものに、彼の父トーマス・ナブコ・デ・アラウージョの政治家としての生涯を叙した『帝政一人の政治家』がある。

古生物学者ピーター・ルンド（一八〇一—一八八〇）

デンマーク人の古生物学者ピーター・ウイヘルム・ルンドは一八〇一年六月一四日にコペンハーゲンに生れた。彼は二三才で郷土の大学の医学部を卒業したが、自然科学に興味をひかれ、熱帯植物研究のためにブラジルに渡つたのが一八二五年、二五才であつた。

それは彼が探検家科学者のボンプラン、マルチユース、スピックス、サンチレールなどのブラジルの科学調査に関する著書に刺激されたためである。

ブラジルに着いたピーター・ルンドはリオ州のカンポスとノーバ・フリブルゴで植物と昆虫採集をした。

彼は一八三〇年に家庭の事情でデンマークに引揚げたが、コペンハーゲンの科学院会員に推挙されたのを機会に再びブラジルに移住したのが一八三三年であった。それ以後は祖国の土を踏むことがなく、ミナスを第二の故郷としてラゴア・サンタに住み、調査と研究に没頭した。

ピーター・ルンドは同じデンマーク人のクラウゼンに誘われ、リオ・ダス・ベériaヤスとサン・フランシスコ流域の石灰質土と各所に散在する洞窟を見て感嘆した。彼はノールウエー人のアンデレ・ブランドを助手としてラゴア・サンタに研究室を設け、地質調査と古生物の研究に当たった。彼が発見した石灰質の洞窟と鍾乳洞は数十分に達するが、特に有名なものはラゴア・サンタのラピーニヤ鍾乳洞とコルジスブルゴのマキネ鍾乳洞である。

ピーター・ルンドはリオ・ダス・ベériaヤスの流域で、四十数年間に約二〇〇点の古生物と原始人間の骨を発掘した。その大部分はコペンハーゲンの自然科学博物館に秘蔵されている。またその研究は五巻から成る彼の著書『メモリア』に収められている。

ラゴア・サンタのピーター・ルンドは名高い存在をなし、世界著名の探検家や旅行家、科学者が彼を訪れている。その中にはサー・リチャード・フランシス・バートン、オレステス・セントジョン、ジョージ・アーレン、

ジョージ・スチーブンなどがある。

考古学者レーンハートはラゴア・サンタに長期滞在し、ピーター・ルンドとともに古生物の化石発掘をした。

皇帝ドン・ペードロ二世も女婿デュー伯爵を伴ってピーター・ルンドを訪れたことがある。

ピーター・ルンドは地位や栄誉に捉われることがなく、科学者として調査と研究に終始し、一八八〇年五月五日、七九才でラゴア・サンタに骨を埋めた。

ミナス鉱山学校の創立者アンリ・ゴルソアー（一八四二〜一九一九）

ブラジルと世界に名高いエスコラ・デ・ミナス・デオーロ・プレート（オーロ・プレート鉱山学校）の創立者、初代校長はフランス人の地質鉱物学者アンリ・ゴルソアーである。彼は皇帝ドン・ペードロ二世の要請で一八七六年にオーロ・プレート鉱山学校を創設し、その経営に全身全霊をささげた。

『神は人間の必要とするすべての鉱物資源を備え給うた。しかし地下の鉱物資源を開発し、利用するためには、それに挺身する人相を育成せねばならない。すなわち地質学者と鉱山技師を育てるのは神の恩恵に応えることで

あり、本校設立の目的と使命はそこにある。』

これはアンリ・ゴルソアールがオーロ・プレート鉱山学校の開校式に述べた挨拶の一節である。

アンリ・ゴルソアールが皇帝ドン・ペードロ二世に提出した、オーロ・プレート鉱山学校の設立と経営の基本条件は、すぐれた教授陣を保持するための最大限の給与待遇であった。

彼の強調したところは、ほとんど未開発の状態のブラジルの地質調査と鉱業に挑む人材の指導育成に当る教師に対しては、物質的に後顧の憂いなく、それに精魂を傾倒せしめることであった。したがって当時としては異例ともいふべき給与ベースが打出された。

校長の年俸は一ニコント、鉱山、採鉱、冶金の担当教師は一〇コント、機械学、鉱炉建設の担当教師は八コントであった。

ドン・ペードロ二世はその提言を全面的に容れ、フランスから数名の専門教師が招聘された。

オーロ・プレート鉱山学校が設けられ、アンリ・ゴルソアールを初代校長として授業を開始したのが一八七六年である。アンリ・ゴルソアールは一八四二年一〇月一九日に、陶器の産地で名高いフランスのリモージに生れ、また同地に逝ったのが一九一九年九月六日である。彼の

オーロ・プレート鉱山学校の校長在任期は一八七六年から一八九一年までの一五年だが、その教え子から傑れた地質学者と鉱山冶金技師が出ている。

アンリー・ゴルソアの教授法は教室よりは実地指導で、大部分の時間を地質調査と採鉱地、製鉄所の見学に当てた。また彼は学生の教導に合せてミナスの地質調査と製鉄技術の改良に努力した。当時の彼の地質調査と製鉄技術の研究論文は貴重な資料となっている。

彼がブラジルを去った理由は、ブラジルが帝政から共和制に変わると同時にオーロ・プレート鉱山学校の予算に大幅の削減がされたことにある。アンリー・ゴルソアはドン・ペードロ二世と個人的にも親交があり、お互いによく理解するところがあつた。彼はオーロ・プレート鉱山学校の校長を辞任してフランスに引揚げるに際し、次のような言葉をもらした。

『ブラジルは進歩のために帝政から共和制となったが、その進歩とは何か。自分としては教え子の中から優秀な人材が現われることによって将来のブラジルに望みを託すのみである。』

アンリー・ゴルソアの学校経営と指導理念はオーロ・プレート鉱山学校の伝統的精神となり、数においては少ないながらも傑出する人物を生んでいることは同校の誇

りとなっている。現在ブラジル著名の鉱業、製鉄、重工業の取締役や代表人物でオーロ・プレート鉱山学校に学んだ人の多いことがそれを物語っている。それらの主な企業はサバラ、ブルニエー、カエテ、アセジタ、ベルゴ・ミネーラ、マンネスマン、ヴァーレ・ド・リオ・ドーセボルタ・レドンダ、ウジミナス、コジパなどである。

第一二章 第一次共和制

共和制宣言

一八八九年十二月一五日の早朝、リオに軍部クーデターがおこり、デオドロ・ダ・フォンセツカ元帥によって共和制宣言がされ、六七年におよんだ帝政が終焉した。それは言うところの無血革命であった。

皇帝ドン・ペードロ二世はペトロポリスの離宮でその急報に接し、早晩来るべき日の到来を知った。

このようにわずか数時間の軍部革命でブラジルは君主制から共和制にかわったが、その根源の共和思想はかなり以前から陸軍の中堅と知識層に胚胎していた。それが次第に表面化し、一八八九年一〇月中旬に数名の共和主義者がデオドロ元帥を説得して遂に共和制宣言となったのである。

デオドロ元帥は共和制宣言の後、直ちに共和国臨時政府を組織したが、閣僚は次のとおりである。

首相デオドロ・ダ・フォンセツカ

陸相ベンジュミン・コンスタン

海相エドワルド・ワンデンコルク

蔵相ルイ・バルボーズ

内相アリスチーデス・ローボ

法相カンポス・サーレス

外相キンチーノ・ボカユーバ

農相デメトリオ・リベロー

デオドロ臨時政府は連邦共和制を樹立すると同時に帝政期のプロビンシア（県）をエスタード（州）に改め、次の法令を公布した。

- 一、共和国国旗令（一八八九年十一月一九日）
- 二、ブラジル在住外国人の帰化法令（一八八九年一二月一四日）
- 三、憲法起草議会の召集（一八八九年一二月二一日）
- 四、国家と教会の分離ならびに民事結婚の認可令（一八九〇年一月七日）
- 五、刑法の改正（一八九〇年）

憲法起草委員は次の議員によつて構成された。

ルイ・バルボーズ
アメリコ・ブラジリエンセ
サントス・ウエルネック
フランシスコ・ランジェル・ペスターナ
マガリヤンエス・カストロ
プルデンテ・デ・モラエス

共和国憲法は一八九一年二月二四日に発布されたが、その内容はアメリカ合衆国憲法に相似し、起草担当のルイ・バルボーズと実証哲学信奉の議員の思想を反映する趣きがあつた。この一八九一年憲法は一九二六年のアルツール・ベルナルデス政府によつて部分的に改正され、

一九三〇年のヴァルガス政権までつづいた。

憲法発布の直後に大統領選挙（間接選挙）がおこなわれ、デオドロ・ダ・フォンセツカは一二九票、上院議員プルデンテ・デ・モラエスが九七票で、デオドロが当選した。副大統領にはフロリアノ・ペーシヨット元帥が、当選した。

デオドロ・ダ・フォンセツカ元帥（一八二七〜一

八九二）

マノエル・デオドロ・ダ・フォンセツカ元帥は一八二七年八月五日、アラゴアスに生れた。彼の誕生地は現在のマレシヤル・デオドロである。

父をはじめ兄弟八人が全部軍人だったところから名実ともに武人一家である。そのなかからマヌエル・デオドロをふくめて元帥三人、大将二人、州統領二人、上院議員一人、男爵一人が出ている。

マノエル



デオドロ・ダ・フォンセツカ

ンフォンセツカは八人兄弟の

三男で、陸軍兵学校の卒業間もなく、一八四八年のレシフェのプライエーラ革命の討伐に向った。レシフェから帰還したデオドロは中尉となり、一八六五年のウルグワイ戦争には大尉としてモンテビデオの包囲戦に参加した。当時彼はリオに帰る暇もなく、パラグワイ戦に出征し、オゾリオ將軍の第一部隊に配属された。

パラグワイ戦争でのデオドロは数度の戦闘に奮戦したが、彼の実弟二人がイトロロとクルハイチーの激戦で相次いで戦死した。

一八七〇年にパラグワイ戦争は終息し、デオドロは大佐となって帰還し、一八七四年には旅団長（少将）に昇進した。一八八三年に元帥となり、一八八五年にリオ・グランデ・ド・スールの防衛軍団長としてリオ・パルドに赴任した。そのころ、リオにセンナ・マドレーラ中佐の軍人問題がおこった。

一八八六年にパラグワイとボリビアは国交断絶をし、一触即発を思わせる両国のオブザーヴァーとしてデオドロはマット・グロツソに派遣された。彼がマット・グロツソからリオに戻るや、共和運動が最高潮に達し、軍部クーデターをおこして共和制宣言をするには彼が最適との意見が共和主義者の中で一致した。軍人に終始したデオドロには政治には不向きな態度を固持したが、成行き

上、彼は軍部革命を先導し、共和宣言をした。

直ちにデオドロは臨時政府を組織して首相となり、一八九一年二月二四日の憲法発布と同時に初代大統領に就任した。しかしその後の政局の悪化と健康がすぐれぬ理由でデオドロは大統領を辞任し、副大統領フロリアノ・ペシヨットによって政権を継がれたのが一八九一年十一月二三日である。当時、既に病体だったデオドロは九カ月後の一八九二年八月二三日にリオの私邸に没した。彼の遺言で軍服ではなく平服をまもって葬られた。

ブラジル共和国国旗の制定

デオドロ元帥によって共和制宣言がされ、臨時政府が設けられるや、直ちに内閣の互選で、国家の象徴である国旗の制定委員会が生れた。委員に選ばれたのは蔵相ルイ・バルボーズと陸相ベンジヤミン・コソスタンだが、実際に国旗図案を担当したのはライムンド・テーシエーラ・メソデスである。

テーシエーラ・メソデスは天文学者マヌエル・ペレーラ・レースに計って、十一月一五日午前九時のリオ市上空の星の所在を確かめそれをブラジルの二一の州になぞらえた。そのやや真中から上方斜めに帯状がひかれて”

オルデン・エ・プログレッツ”（秩序と進歩）の文字が書かれた。

帝政の国旗は中央の王家紋章の右側にタバコ、左側にコーヒーの根が配され、上方に王冠がつけられていた。

この国旗図案が共和制宣言から三日間に練られ、四日目の十一月一九日にブラジル共和国国旗令が公布された。

それ以来十一月一九日が “国旗の日” となった。

ライムンド・テイシェーラ・メンデス（一八五五～一九二七）

ライムンド・テイシェーラ・メンデスはブラジルのアテンといわれたマラニヨンのカシアスに生れた。彼はリオのジェズイット中学に学び、エスコーラ・セントラル（中央工科学校）に入学したが或る問題で校長リオ・ブランコ子爵と衝突して同校を中退、フランスに遊学した。彼はパリで医学を修めながら、当時ヨーロッパを風靡したコント学派の門弟となった。彼が考案したブラジル共和国国旗のオルデン・エ・プログレッツはコント学派の教典の標語 “秩序と進歩” を取入れたものである。テイシェーラ・メンデスはブラジルに帰国後もコント哲学に全身全霊を捧げ、リオ市に人道教会を設けた。

ベンジャミン・コンスタン（一八三六〜一八九一）

ブラジル共和国建設の代表人物ベンジャミン・コンスタン・ボテーリョ・デ・マガリャンエスは一八三六年一月一八日、リオ州の首都ニテロイに誕生した。父はポルトガル人のエンリツケ・ボテーリョ・デ・マガリャンエス、母はベルナルジナ・ジョアナ・ダ・シルバ・マガリャンエスで、私塾を経営して児童教育に当たっていた。

ベンジャミンは父母の慈愛をうけて健やかに成長し、一〇才で両親に代って教壇に立てるまでになった。彼が十三才の時に父が急逝し、しかも四人の幼い弟妹がおり、家事一切の責任が負わされた。それは少年ベンジャミンには余りに過重であり、失望の果て或る日にパライバ川に投身自殺を計ったが、一人の奴隷女に救助された。

ベンジャミンが後日に奴隷解放主義者となったのは、彼の人道観によるが、一つには自身の生命を放った奴隷女に対する謝恩表示であった。

一度死を決し、奇しくも奴隷女に助けられたベンジャミンの人生観は一変し、勇を鼓して敢然生活苦に挑戦した。年若いベンジャミンの刻苦勤勉に少なからず感動したりオ市の素封家アンドラーデ・ピントは進んで彼の学

資援助を約束し、その好意によって彼は陸軍兵学校に入
学した。陸軍兵学校を卒業したベンジャミンは更にリオ
工科学校に入学して数学と物理を専攻した。

ベンジャミンは二七才で彼よりも遥かに若いマリア・
ジョアキナ・コスタと結婚したが彼女は終生ベンジャミ
ンにとって理解と愛情に富むよき伴侶であった。彼らが
新家庭をもつや間もなくパラグワイ戦争となり、ベン
ジャミンは戦線に向った。戦地でのベンジャミンは果敢
な働きをしたが、沼沢地に発生する熱病に患り、野戦病
院に收容された。その報に接した妻マリア・ジョアキナ
は皇帝ドン・ペードロ二世の計らいで、臨時看護婦とし
て戦地に馳け参じ、夫の病床につき漂うことができた。

ベンジャミンの所属工兵大隊はカシアス総司官直属
だった関係で、同將軍の寛大な措置でマリア・ジョアキ
ナは病める夫を伴ってリオに帰還する恩典を得た。重体
だったベンジャミンは妻の手厚い看護で次第に健康を回
復し、再び教壇に立てるようになった。

その後のベンジャミンは岳父クラウジオ・ルイス・ダ・
コスタ死亡のために、その後継として少年盲啞学校の校
長となり、経営に当った。次いでベンジャミン・コソス
タンはリオのプライア・ベルメーリヤ陸軍兵学校の教官
となった。彼の教え子から幾多の人材が出ているが、エ

ウクリーデス・ダ・クーニャがその一人である。

ベンジャミン・コソスタンはコント学派の実証哲学の熱烈な信奉者であり、鼓吹者だったので、それが兵学校の学生に大きな影響をおよぼしている。また彼は共和主義者で、ルイ・バルボーズ、キソチーノ・ボカユーバ、アリスチーデス・ローボなどとともにデオドロ・ダ・フオンセツカ元帥を説得してブラジルの共和制宣言をなさしめ、臨時政府の陸相となり、次いで文相となった。

ベンジャミン・コンスタンはブラジル共和国の黎明期一八九一年一月三十一日に五五才で世を去った。

キンチーノ・ボカユーバ（一八三六～一九一二）

新聞人、政治家キンチーノ・ボカユーバはリオ市に生れてリオ市に逝った。彼の洗礼名はキンチーノ・アントニオ・フェレーラ・デ・ソーサだが、後にキンチーノ・ボカユーバと改名した。ボカユーバはブラジル北東部産の椰子科の一種である。

キンチーノ・ボカユーバは幼にして両親に死なれ、一四才まで叔父に養育された。

一八五〇年にサンパウロに出て印刷工場に働きながらサンパウロ法大に学んだ。

一八五四年に法大を中退してリオに帰り、新聞記者しながら詩作や劇作をした。

一八七〇年からサルダーニャ・マリニョに協力して共和運動に参加した。彼は新聞『ア・レプブリカ』を創刊し、共和主義者として論説を書いた。

一八八九年十一月一五日のデオドロ元帥による共和制宣言の背後にはベンジャミン・コンスタン、ルイ・バルボーザ、アリスターデス・ローボなどと共にキンチーノ・ボカユーバの多大の働きがあつた。

デオドロ臨時政府の組閣にキノテーノ・ボカユーバは外相となり、後に彼はブラジル特命全権公使としてブエノスアイレスに赴きパルマ領地問題の折衝に當つた。

デオドロ臨時政府の解体と同時に彼はジャーナリズムに戻り、新聞『オ・バイス』の主筆となつた。

一八〇一年にキノチーノ・ボカユーバは上院議員、一九〇三年にはリオ・デ・ジャネイロ州統領となつた。

一九〇九年、彼はピニエーロ・マツシャードとともに共和保守党を結成、同年上院副議長に就任した。

キンチーノ・ボカユーバは新聞人としての卓抜する風格と文筆によつて“桂冠新聞人”の称号をうけた。

彼の大杯はまことに素朴で、資産を積むこともなく清貧のうちに死去した。彼の遺書には質素な浅穴の墓に葬

るようにとあった。

アウギユスト・コント（一七九八〜一八五七）

アウギユスト・コントの全名はイジドール・アウギユスト・マリー・フランソワ・シャビエル・コントで、一七九八年に南フランスのモンペリエールに誕生した。

彼は実証哲学（ポジチブズム）の創始者で社会学の始祖でもある。

二八才でパリの理工学校に入学したが中退し、一八一八年にサン・シモンの弟子となり思想的に深い影響をうけた。

その後アウギユスト・コントは工科学校の数学の教師となったが公式の辞令を得られず長い期間にわたって個人教授をした。一八三七年のころ、彼の門下生にブラジル人のジョゼ・デ・アルメーダとアントニオ・マツシャド・ジーン・アスがいた。マツシャド・ジーン・アスは一八五二年からリオのドン・ペードロ二世高等学校の教授となった。

アウギユスト・コントは一八四五年に若き未亡人クロテルデ・デヴォールに実証哲学の講義をしたが、一年余の交遊をとおして熱烈なプラトニック愛をつづけた。

アウギュスト・コントは自らの証論を基礎にして人道主義宗教を打立て、フランス革命後の混乱する社会の再建に尽した。

彼は人智の進展を神学的、形而学的、実証的の三段階に分けて講義をし、著述をした。その代表著作には『実証政治体系』『人間教の司祭』がある。一九世紀後半にリオを中心とするブラジルの知識層にアウギュスト・コントの実証哲学ほど強く浸潤したものはない。

新聞人ランジェル・ペスターナ（一八三六～一九

〇三）

フランシスコ・ランジェル・ペスターナは一八三六年十一月二六日、プロビンシア・ド・リオ・デ・ジャネイロのイグワスーに生れた。彼は二〇才でサンパウロ法大に入学し、一八六三年に卒業した。同期生にはカンボス・サーレス、ベルナルジノ・デ・カンボス、プルデソテ・デ・モラエス、サルバドール・メソドンサがいた。

ランジェル・ペスターナは法大の学生時代一八六〇年にエソリツケ・リンボ・デ・アブレウとともに新聞『チンピラス』を創刊した。それが彼の新聞人の出発となった。

次いで一八六二年にセザリオ・アルビンとテオフィ

ロ・オトニに主宰される自由党の新聞『フツロー』とそれにつづく『エポカ』の編集を担当した。同時に彼はリオの官報『ジアリオ・オフィシアル』の編集長となった。それから三年を経て、一八六六年に新聞『オピニョン・リベラル』を創刊した。当時この新聞ほど卓絶する内容と論説をもって声価を高めたものはない。

ランジェル・ペスターナはリオに在るあいだ、一八六八年に自由党の新聞『コレーオ・ナシヨナル』の主筆となった。

一八七〇年に彼は健康のため転地を必要とし、リオからカンピーナスに住居を移した。

カンピーナスでは法律事務所を開設し、新聞『ガゼッタ・デ・カンピーナス』に寄稿した。当時彼はカンピーナスの名門キリーノ・ドス・サントス家の息女ダミアナと結婚した。

ランジェル・ペスターナの教育家としての活躍も目覚しく、カンピーナスに学校を設立し、貧家の児童のために無料授業をした。

また彼は女子教育の必要性を唱え、女子高等学校を設けた。

カンピーナスは偉材の揺籃といわれるが、特にランジェル・ペスターナの教え子から各界の著名人物が出て

いる。

一八七五年にサンパウロの共和主義者によつて新聞『ア・プロビンシア・デ・サンパウロ』が発刊された。その初代社長にアメリカ・デ・カンポスが選ばれ、編集長にはランジェル・ペスターナが推された。

共和党機関紙としての『ア・プロビンシア・デ・サンパウロ』の創刊号の出たのが一八七五年一月四日である。それが現在の『オ・エスタード・デ・サンパウロ』の前身である。

一八八四年にランジェル・ペスターナはサンパウロのプロビンシア議員に当選し以後三期にわたつて続いた。

一八八九年二月一五日、デオドロ元帥によつて共和制宣言されるや、ランジェル・ペスターナはプルデンテ・デ・モラエス、ソーザ・ムルサとともにサンパウロ臨時政府の三頭統領の一人となった。同時に彼は共和国憲法の起草委員に任命された。

後はサンパウロに新聞人としての余生を送り、一九〇三年三月一七日に死去した。

第一期大統領マヌエル・デオドロ・ダ・フォンセツカ
(自一八九一年二月二五日 至一八九一年十一月二三日)
一八九一年二月二五日から一八九四年十一月一五日ま

だが第一期大統領の任期であり、デオドロは組閣に当たって臨時政府の閣僚を起用せず、ルセナ男爵を主班とする内閣が生れた。

一八九一年十一月三日に議会が再会されたが、デオドロと議会は意見の相違から議事が紛糾し、険悪な空気がかもし出されたためにデオドロは議会を解散した。

また海軍は共和制宣言前からの陸軍の独断的な行動に反意を抱いていたが、デオドロの議会解散を機会に、クストジオ・デ・メーロ提督がリオ港のアキダバン艦においてデオドロ政府に反旗を掲げた。それに端を発してリオに暴動のおこる気配があり、それを避けるべくデオドロは健康を理由に大統領を辞任したのが一八九一年十一月二三日である。

第一期（後継）大統領フロリアノ・ペーシヨット

（自一八九一年十一月二三日 至一八九四年十一月一日）

大統領デオドロ・ダ・フォンセツカの辞任のために副大統領フロリアノ・ヴィエーラ・ペーシヨットが後を継いだ。フロリアノ・ペーシヨットが大統領に就任するや、デオドロを支持した州統領の罷免処分をとった。パラ

州統領のラウル・ソドレを除くほか全州の統領を更迭したことが地方の反感を買った。また大統領が就任二年未満で死亡或いは辞任した場合は新たな大統領選挙を執行することが憲法に規制されていたにもかかわらず、フロリアノ・ペーシヨットはそれを黙殺した。



一八九二年一月十八日、シルビノ・デ・マセド軍曹の陸軍部隊がリオのサンタ・クルース要塞に立籠って反乱をおこしたが直ちに抑圧された。同年四月六日に十三名の陸軍上層士官がフロリアノ・ペーシヨットに対して大統領選挙を強制するマニフェストを公表した。その責任者の数名の陸軍大将と文官が公職追放された。

リオ・グランデ・ド・スールのジュリオ・デ・カスチーリヨスもデオドロを支持した理由で州統領を罷免された。それが要因となりジョアン・ヌーネス・ダ・シルバ・タヴァレス大将による反乱が勃発した。

この南部の反乱はフェデラリスタ革命と呼ばれ、リオ・グランデ・ド・スールのピアモンに発してバジエー、

リオ・グランデ、ペロタス、リブラメントに拡大された。ジュリオ・デ・カスチーリヨスの後継大統領ジョゼ・アントニオ・カマラ大将（ペロタス子爵）はフロリアノ政府に援軍の派遣を要請した。

一八九三年九月六日、クストジオ・デ・メーロ提督は海軍部内で名声高いルイス・フィリップ・デ・サルターニャ・ダ・ガーマ大将の参加を得て第二回の反乱をおこした。この反乱はパラナ、サンタ・カタリナとリオ・グランデ・ド・スールに波及し、フェデラリスト革命軍と合流した。

フロリアノ・ペーシヨットはヨーロッパから数隻の新鋭艦を取寄せ数カ月を要して反乱軍の大部分を討伐した。反乱軍の残党はその後も革命戦をつづけ、一八九五年のプルデンテ・デ・モラエス政府によって完全に制圧された。

フロリアノ・ペーシヨットは鉄血元帥で知られたが、彼は海軍反乱の討伐に断固冷徹な処置をとり、主班将兵を銃殺した。

サルダーニャ・ダ・ガーマ大将はリオ・グランデ・ド・スールのカンポ・オゾリオで壮烈な戦死を遂げた。

残存の反乱軍の将校は主にアルゼンチンに逃れて保護を求めた。クストジオ・デ・メーロ提督はポルトガル船

の庇護をうけてリスボアに亡命したために、フロリアノ・ペーシヨットはポルトガルと国交断絶した。

フロリアノ政府には寧日とてなく、相次ぐ反乱を鎮撫し、デオドロ辞任後の三年の任期を果たした。

フロリアノ・ペーシヨット（一八三九～一八九五）

フロリアノ・ペーシヨットは一八三九年四月三〇日、アラゴアスのイピオカ、リアーシヨ・グランデに誕生した。彼は叔父のコロネル・ジヨゼ・ヴィエーラ・ペーシヨットによつて養育され、リオのサン・ペードロ・デア・アルカンタラ高等学校に学んだ。

一八六一年に陸軍兵学校に入学したが中退して軍籍に入り、一八六三年一二月に少尉となった。

一八六四年來、パラグワイ戦争の勃発と同時にウルグワイ川の防衛隊長として出征、一八七〇年のセロ・コラの包囲戦でフランシスコ・ソラノ・ローペスの戦死後、その馬の馬具を戦利品として持ち帰ったエピソードがある。

パラグワイ戦争終息後は再び陸軍兵学校に入学、工科を専攻して工兵技師となる。

一八七四年に大佐に昇進、一八八三年には少将（旅団長）となり、一八八四年にマット・グロツソのプロビン

シア統領に任命された。

一八八五年にコトジペ内閣の陸相となったが直ちに辞任して郷土アラゴアスの農園で甘蔗栽培に当る

一八八九年、フロリアノ・ペーシヨットは陸軍大将となり、次いで元帥府に入った。

一八九一年には副大統領に当選、同年十一月のデオドロの辞任のためフロリアノ・ペーシヨットは後継大統領となった。

その後は陸軍の暴動を生じ、フロリアノ・ペーシヨットは鉄血元帥と呼ばれた。

彼は一八九五年七月二四日、リオ州のバラマンサに死去した。

クストジオ・デ・メーロ提督（一八四〇～一九〇二）

クストジオ・デ・メーロ提督はバイアのサルバドール出身で、リオ市に長逝した。

彼は豊かな学識と高い教育を備えた海軍軍人で知られた。

一八五六年に海軍兵学校に入学、卒業後にパラグワイ戦争が勃発し、戦艦『バローゾ』の副艦長としてクルパ

イチーの戦闘に赫々たる戦功を立てた。

戦後はブラジル公使館付き海軍武官となってロンドン、パリ、ウィーン、ベルリンに駐在した。特に彼のパリ駐在中の文化的功績が認められ、フランス政府からリジョーン・ドヌール文化章を授与された。

一八八九年には海軍練習艦となった『バローゾ』の艦長として世界巡航に上った。当時クストジオ・デ・メーロ提督は同乗の皇孫ドン・アウゲスト・レオポルド殿下（ドン・ペードロ二世の令孫）と横浜寄港中に明治天皇に拝謁している。

『バローゾ』は長崎を出港、アラビアのアデン寄港中にブラジルに軍部革命がおこり、帝政が崩壊した朝に接した。

ドン・アウグスト・レオポルド殿下は亡命のためにマルセーユで下船し、クストジオ・デ・メーロ提督は航海をつづけてブラジルに帰着した。

共和制となつては、クストジオ・デ・メーロ提督はデオドロ辞任後のフロリアノ・ペーショット政権に対し、憲法に則して大統領選挙を強制し、海軍反乱をおこした。この海軍反乱は一八九一年から一八九三年におよんだ。

リオに発した海軍反乱に呼応してパラナ、サンタ・カタリナ、リオ・グランデ・ド・スールにも反乱が起り、大

規模の海軍暴動と化した。

クストジオ・デ・メーロ提督がフロリアノ・ペーシヨツト政府に反旗を翻したのは私的感情からではなく、憲法の遵守を訴えたものであった。

ブラジル海軍は日本で建造された海軍輸送船に『アルミランテ・クストジオ・デ・メーロ』と命名し、同提督の名を永久に記念することになった。

第二期大統領プルデンテ・デ・モラエス

(自一八九四年十一月一五日 至一八九八年十一月一五日)

次期大統領選挙ではサンパウロ人の上院議員プルデンテ・ジョゼ・デ・モラエス・バツロスが当選した。彼は副大統領に当選したマヌエル・ビトリノ・ペレーラとともに一八九四年十一月一五日に就任式を挙げた。

プルデンテ・デ・モラエスはサンパウロのイツー出身の共和主義者で、彼が文官大統領の初登場をなした。

プルデンテ・デ・モラエスはデオドロ政府以来の財政難の打開調整に尽したが、彼の任期にはそれはなし遂げられなかった。

プルデンテ・デ・モラエスの大統領任期の最大の社会的事件にはバイアの奥地カヌードスの住民ジャグンソの狂信集団の反乱がある。それは路傍伝道の托鉢僧アントニオ・コンセリエーロをリーダーとする六〇〇〇人の邪教徒の暴動であり、その討伐に八〇〇〇の政府軍が派遣され、一年を要して平定された。

およそ天恵豊かで教養ある社会には邪教は普及されない。カヌードスの悲劇の原因は住民の無教育にある。加えて自然の猛威による早魃で彼らの生活は極度に疲弊し、はじめは神への嘆願が呪咀にかわり、遂には反逆的となって一揆に発展した。無知で迷信的なジャグンソには法を説く術もなく。プルデンテ・デ・モラエスは軍隊を差向け、多大の犠牲を払って征圧した。

カヌードス反乱の討伐に向った武名高いモレーラ・セザール大佐の一六〇〇人の部隊はジャグンソ軍に敗れ、モレーラ・セザール大佐は戦死し、大砲四門を分捕られた。

カヌードス戦には新聞『オ・エスタード・デ・サンパウロ』の特派員として軍属土木技師エウクリーデス・ダークーニャが従軍し、現地取材に当たった。そのカヌードス反乱戦の現地通信に加筆して後に刊公されたのが『オス・セルトンエス』である。

一八九七年二月五日、バイアから政府軍が帰還し、それをリオ埠頭に出迎えたプルデンテ・デ・モラエスは危く刺客に暗殺されんとした刹那、陸軍大臣マツシヤード・デ・ビッテンコウが身代りとなって倒れた。

プルデンテ・デ・モラエス政府の対外的事件にはブラジルとアルゼンチンの境界、ミッシヨネスといわれたパルマ領地問題の解決がある。それはリオ・ブランコ男爵の努力の結果、アメリカ合衆国のクリーブランド大統領の立会のもとに正当の裁決が下されてブラジルの勝利となった。



プルデンテ・モラエス

ほか、プルデンテ・モラエスはイギリス政府に強硬抗議して、エスピリト・サント海域のトリンダーデ島を占領したイギリス軍を撤退させた。

経済的にはコーヒーの市価暴落で深刻な不況となり、多くのコーヒー耕主はコロノへの支払いが不可能の状態、ヨーロッパ移民の導入が杜絶された。このような困難に遭遇しながらもプルデンテ・デ・モラエスは共和

国の基礎を固めた。

プルデンテ・デ・モラエス（一八四一〜一八〇二）

プルデンテ・ジョゼ・デ・モラエス・バツロスは一八四一年一〇月四日にイツーの一農場に生れた。プルデンテが幼少の時に父が奴隷に殺害され、母によつて養育された。

彼は小学と中学をイツーで終え、サンパウロ法大に入學した。一八六三年に法大を卒業し、コンスチツイソン（現在のビラシカバ）に弁護士事務所を開設した。

プルデンテは二四才でビラシカバ市会議員となつたのが彼の政界進出第一歩をなした。

一八七三年四月一八日にイツーで共和會議が開かれたが、当時にして彼は異彩を放っていた。同年、彼はサンパウロのプロビンシア議員に当選した。

一八八九年十一月一五日にブラジルが共和制となり、サンパウロの臨時政府が組織されるに当りプルデンテはジョアキン・ムルサ、フランシスコ・ランジェル・ペスターナとともに三頭統領に推された。

やがてブラジル共和国憲法制定議会在が召集され、議員の一人となつたのがプルデンテである。

憲法発布と同時に上院において大統領選挙がおこなわれ、デオドロ元帥が一二九票、プルデンテが九七票であった。デオドロ・ダ・フォンセツカとフロリアノ・ペーシヨット政府の四年が終了し、一八九四年十一月一日に第三代大統領に就任したプルデンテ・デ・モラエスは五三才であった。

エウクリーデス・ダ・クーニャ（一八六六〜一八〇九）

エウクリーデス・ダ・クーニャがブラジル史上有名な狂信集団の蜂起カヌードスの乱に取材し、『オス・セルトンエス』を發表したのが一九〇二年一二月である。

『オス・セルトンエス』はブラジル古典の最高峰としての評価は年を逐うて高まりつつあるが、既に三十数カ国語に訳されている。

『オス・セルトンエス』は記録文学の要素をもち、スケールが壮大で良心的な叙述はトルストイの『戦争と平和』に匹敵する。或る文芸評論家は『オス・セルトンエス』はフランス革命に取材したジツケンスの『二都物語』とビクトール・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』に似るものがあると述べている。しかも構想の雄渾と文体の壮麗、

逞しさは他に類を見ない。それは山上の巨巖を望むようである。

エウクリーデス・ダ・クーニャは彗星のように現われ、巨作『オス・セルトンエス』を残して四二才で世を去ったが、彼の名は時を経るにつれて強く浮き彫りにされつつある。



エウクリーデス・ダ・クーニャ

肖像写真に見るエウクリーデスは、世間に多い普通人のタイプである。顔面に神経質のところはあるが、それは英敏と駿才を表わしている。彼は性格的に臆病だった反面、ことに臨んで大胆且つ情熱的のところがあった。

彼がリオのプライア・ベルメーリヤの陸軍兵学校在学中のことである。共和主義者の惑星的人物ローペス・トロヴォンがヨーロッパの視察旅行から帰国した。兵学校の学生はそれを熱狂的に迎える準備をしたところ、当日は陸軍大臣トーマス・コエーリョの兵学校の公式訪問のため、学生の外出が禁じられた。それを不満とするエウクリーデスは陸相の面前でサーベルを地上に投げつける

という騒ぎをひきおこした。そのために彼は兵学校から追放処分を受けたが、それを機会にサンパウロに出かけ、新聞人ジュリオ・メスキータの面識を得て新聞『オ・エスクード・デ・サンパウロ』に寄稿することになった。

後にエウクリーデスは兵学校への復校を許されたが、その年（一八八九）の十一月一五日にブラジルは君主制から共和制にかわった。

エウクリーデス・ダ・クーニャは一八六六年一月二〇日にリオ州カンタガール郡のサンタ・リタ・ド・リオ・ネグロ農園に生れた。彼は幼くして母に死別し、前後して三人の叔母に養育され、その都度住居を変えている。彼が成育するにおよんでパラグワイ戦争が終息した。

エウクリーデスは感ずるところあって、リオの陸軍兵学校に入学し、有名な教官ベンジャミン・コンスタンの象陶を受けた。

ベンジャミン・コンスタンはコント学派の実証哲学の熱烈な信奉者だったので、兵学校の学生は多分にその影響を受けた。

一八九〇年にエウクリーデスは兵学校を卒業して中尉となり、同年の八月にアンナ・リベロと結婚した。彼は結婚後に陸軍大学に入学し、同時に中尉に昇進した。

一八九四年の海軍の反乱に彼はモーロ・デ・サウダーデ

の要塞構築を担当した。

一八九五年にエウクリーデス・ダ・クーニャはサンパウロ工務局技師に任命された。

エウクリーデスがサンパウロの公共工事の監督に当たりつつあるころ、バイア奥地のカヌードスに住民ジャグンソの反乱がおこった。

カヌードスの反乱は短期で平穩に復すものと見られていたが、次第に拡大され、反徒はジュアゼーロを襲撃するまでになった。そこで一八九六年二月にバイアの州兵団が領圧に当たったが反乱軍に敗れた。次いで中央政府軍のブエプロニオ・ブリト少佐の部隊が派遣されたが、これも失敗におわった。さらに一八九七年一月、武名高いモレーラ・セーザル大佐の部隊がカヌードスを攻撃したが、当のモレーラ・セーザル司令官が戦死し、犠牲のみ多くして効を奏さなかった。

エウクリーデス・ダ・クーニャがサンパウロの新聞『オ・エスクード・デ・サンパウロ』の特派員としてカヌードスの反乱現地に向ったのが一八九七年八月である。当時の彼の現地通信が『オス・セルトンエス』の第三部『戦闘』の主要部分をなしている。

エウクリーデスの通信にはあらゆる観点からカヌードス戦が解剖され、批判されている。彼は政府軍の猛攻撃

を眼前に眺めて、これほど残虐な戦いはないと述べている。それは二つの異なる社会とイデオロギーの闘争だが、むしろ反徒の社会に真実のブラジルの姿が見られると叙している。

一八九七年九月二二日に反乱のリーダーのアントニオ・コソセリエーロが病死した。それにつづく二四日のカヌードスの包囲戦と一〇月一日の政府軍の猛攻撃で反徒五〇〇〇が死滅し、生き残りは捕虜となった。この反乱討伐に政府軍は数門のクルップ野砲を用いたことから、その戦闘状況が想像される。

カヌードス戦の従軍によって、現実のブラジル奥地を直視し、感傷的な共和主義者の夢破れて人生社会観が一変した、とは後にエウクリーデスが洩らしたことである。

戦火の絶えたカーチンガ（不毛の乾燥地）に曝され、腐爛した反徒の死骸を見てエウクリーデスが感じたのは反乱戦の終局でなくして内乱戦の序曲であった。

バイア奥地からサンパウロに帰還したエウクリーデスはサン・ジョゼ・ド・リオ・パルドの鉄橋架設の監督に当たった。当時彼は河畔に設けられた小屋で『オス・セルトンエス』の原稿を書いた。同書の第一部はブラジルの中央高原から北東部の地理的記述で、第二部は住民セルタネージョとその社会、第三部がカヌードス戦である。

ほかにも彼は外相リオブランコの要請でブラジルとペルー国境の現地調査に赴き、重大使命を果たした功績は大きい。

このように公人としてのエウクリーデス・ダ・クニャは非凡の傑物だが、家庭では変人で偏屈のところがあった。彼は妻を愛しながらも、妻の挙動に疑心をもって苦悩するという悲劇的人物であった。そのため或る士官候補生（後のジレルマンド・デ・アシス大将）がエウクリーデス夫人に同情を寄せたことが、エウクリーデスの疑惑を招き、彼は暗殺される結果となった。

一九〇九年八月一五日、エウクリーデスは士官候補生を撃つべく、リオ郊外のピエダーデに向ったが、反対に相手の弾丸に倒れたのである。その士官候補生は射撃の名手であった。

アントニオ・コンセリエーロ（一八二八〜一八九七）

アントニオ・コンセリエーロの本名はアントニオ・ビセソテ・メンデス・マシエルで、一八二八年にセアラのケシヤラモビンの一旧家に生れた。父ビセンテ・メンデス・マシエルは一つの小商店を経営していた。母マリア・

ジョアキナ・ド・ナツシメントはアントニオが幼少の時に死亡した。

父の死後、アントニオは父の商店を継いだが直ちに失敗し、町役場の書記となった。

一八五七年にアントニオは父の従弟フランシスコ・ペレーラ・デ・リーマの娘ブラジリナと結婚したが、その結婚がアントニオに不幸をもたらした。妻が彼を裏切り、一人の軍曹と失踪したことが彼の人生を一変させた。

それ以来アントニオは郷里を出てクラートの小学教師となった。或る日、彼が寄寓していた家のローレンソ・コレア・デ・リーマと口論し、ローレンソに傷を負わせた。

アントニオはロウレンソを殺したものと思いきんでペルナンブーコに逃れ、さらにセルジッペに入ったのが一八七四年のころである。

その当時から彼は托鉢僧となって路傍伝道をはじめた。彼は青色の僧衣を纏い、垂れ下った大型の帽子をかぶって革草履を穿き、マリアン派の僧侶のような袋を背負い、それに祈祷書とペンが入れてあった。彼は路傍伝道をしながら人々の喜捨を得たが、過分の恵みは辞退し、一夜の宿を乞うにしても寝台を用いず、床の上か地面に布を敷いて寝た。

このようにして伝道の旅をつづけ、バイア北部のイクビクルー・デ・シーマに達した時にアントニオ・コンセリエーロの名は広く知れわたった。

彼の風貌は全く手入れされない頭髪が一層まで垂れて髭も伸び放題、色浅黒く面長の顔をふるわせ、晶奮した眼で天を見つめながら説教するのが奇妙に人をひきつけた。彼はセルトンの住民から聖者と称えられた不思議な人物である。

一八七七年ごろから彼が奇跡をおこなうことが流布された。それはサン・フランシスコ流域の村落を歩く間に彼によって不治の病が癒された者があったためである。それ以来誰いともなく彼をアントニオ・コンセリエーロと呼び、メシアー（救世主）と崇めて人々は膝まづいて彼を迎えるようになった。

アントニオ・コンセリエーロの教理はキリスト教におかれてはいたが、その説教たるや四離滅裂で、徒らに予言者らしい言葉を弄し、眼を威からせて叫ぶ様は精神錯乱の症状を呈していたが、それが聴衆を感動させた。例えば一八九六年にはこの地上に大変動がおり河川の水が絶えてそれに血が流れるようになる。その時に人類のすべてが死滅して一人の天子だけが残るなどである。そして説教と予言を終えるや彼は詠歌を口ずさむのが常で

あつた。このような奇想天外の説教が人々に感銘を与え、彼を生き神としてそれに従う者が数千に達した。

一八七六年までのカヌードスはバザ・バリス川に沿う一つの牧畜村で、粗野な土壁の家が五〇戸ほどあつたにすぎない。しかも無秩序で犯罪者の巢窟をなしていた。ところが生き神アントニオ・コンセリエーロの出現によつて急激に人口を増し、タイパ作りの家が軒を連らねた。それらの住民の大部分はジャグンソ（カボクロ系の邪教徒）であつた。

カヌードスは丘に囲まれて外部からの攻撃防禦に好条件の地勢をなしていた。

アントニオ・コンセリエーロがカヌードスに宣教本陣を構えたために聖都カヌードスとなり、彼がジャグンソのリーダーとして反乱がくり広げられた。

第三期大統領カンポス・サーレス

（自一八九八年十一月一五日 至一九〇二年十一月一五日）

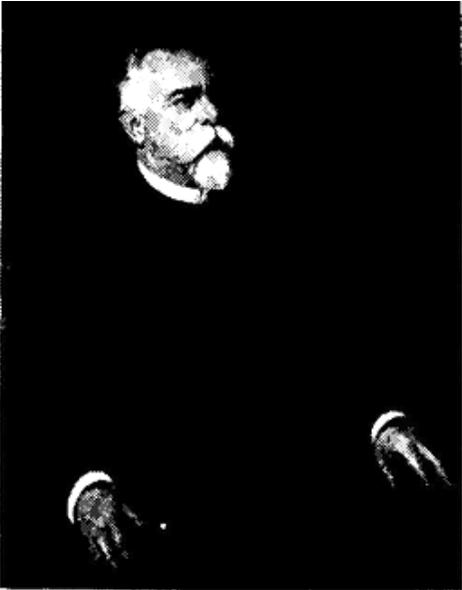
マヌエル・フェラース・デ・カンポス・サーレスは直接選挙で、ラウル・ソドレの四万票に対し四二万票という圧倒数で当選し、一八九八年十一月一五日に第三期大

統領に就任した。

カンポス・サーレスは財政通のジョアキン・ムルチーニョを蔵相に起用し、プルデンテ・デ・モラエスの経済政策を踏襲して財政立直しに全力を挙げた。

デオドロ政府以来、通貨は膨張するのみで対英為替は下落の一途を辿り、一八九一年には最低レコードを示した。

この状態はプルデンテ・デ・モラエス政府においても好転せず、カンポス・サーレスの就任当時は更に悪化した。



カンポス・サーレス

カンポス・サーレスはこの最悪の事態に対処し、外債と為替問題の折衝のためにロンドンに赴くことになった。当時彼がイギリスへの旅費として国庫から支出したのは一五コントスで、不足分は彼自身が補っている。

現職大統領自らの来訪とあって、ロスチャイルド財閥を主とするイギリス金融団のブラジル政府に対する態度

が改まった。

ロンドンにおいてのカンポス・サーレスは赤誠を披瀝して交渉に当った結果、彼の提案が容れられ、寛大な外債支払のほかに長期のフアンジング・ローン（基金借款）が成立した。

帰国したカンポス・サーレスは通貨膨張の防止と対外為替の安定に目標をおき同時に消費税の増率による歳入の増加を計った。ところが目先欲に捉われる民衆は猛烈な政府攻撃をした。これに対してカンポス・サーレスは明快な答えをし、『余はブラジル国民に愛国心を求めるのみである。』ブラジルが直面しつつある財政難を克服するには国民挙つての犠牲なくしては不可能であることを彼は強調した。当時彼は大幅な公費削減をしたために官界での不評を買った。

カンポス・サーレスの財政立直しの徹底政策は功を奏して対外貿易は増加し、為替は著しく好転した。ロンドン銀行のブラジル政府供託金は三〇〇万ポンドに達し、ここにおいてブラジル国家の財政が調整された。

カンポス・サーレスの任期にリオ・ブランコ男爵によって仏領ギアナとアマパ領地の境界問題がスイス政府の仲介で解決され、また英領ギアナとの境界紛争もイタリア政府の立会で解決を見た。

次にカンポス・サーレス政府の閣僚を挙げる。

副大統領アシス・ローザ・エ・シルバ

蔵相ジョアキン・ドアルテ・ムルチーニョ

法相エピタシオ・ダ・シルバ・ペッソア

外相オリント・デ・マガリャンエス

陸相ジョアキン・メデーロス

海相カルロス・バルタザール・シルベーラ

交通相ヴェリノ・ドス・サントス・ヴィエーラ

カンポス・サーレスはサンパウロのカンピーナス出身の共和主義者、政治家、新聞人、耕主としての生涯を送り、一九一三年六月二八日にグワル ज्याに長逝した。

第四期大統領ロドリゲス・アルベス

(自一九〇二年十一月一五日 至一九〇六年十一月一五日)

カンポス・サーレスの後継大統領として同じくサンパウロ人のフランシスコ・デ・パウラ・ロドリゲス・アルベスが就任した。

ロドリゲス・アルベスは傑出する人材によって組閣したが、外相にリオ・ブランコ男爵（ジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラニョス）を迎えて華々しい外交史がくり広げられた。特に一九〇三年のペトロポリス会議で、長年来の係争地だったアクレ領地がボリビア政府によって正式にブラジルに割譲された。その交換条件としてブラジル政府はアマゾンのマデーラ・マモレ鉄道を建設した。

またリオ・デ・ジャネイロの市長、土木技師フランシスコ・ベレーラ・パッソスによってリオ市の改良工事が断行され、アベニータ・セントラル（現在のアベニータ・リオ・ブランコ）や海岸通りが開設されて、市街の趣きを一変した。

さらにロドリゲス・アルベスの招請で科学者オズワルド・クルースがリオ連邦直轄区の衛生局長に就任し、黄熱病、天然痘、ペストなどの悪疫を撲滅してリオを世界に誇る文化都市とした。

海相ジュリオ・ノローニャはブラジルの艦隊を整備拡大し、交通相ラウロ・ミューレルはリオの港湾改良して大型船舶の入港を可能とした。

ロドリゲス・アルベスは一九〇六年にタウバテでコーヒー会議を開催し、コーヒー市価維持のために政府の滞貨買い上げを決定した。

ロドリゲス・アルベス（一八四八〜一九一九）

フランシスコ・デ・パウラ・ロドリゲス・アルベスはサンパウロのグワラチンゲタの名門の出である。彼はリオのドン・ペードロ二世高校に学んで後にサンパウロ法大に入学し一八七〇年に卒業した。彼の同期生にアフオンソ・ペンナ、ルイ・バルボーズ、カストロ・アルベスなどの逸材がいた。

ロドリゲス・アルベスは郷土グワラチンゲタの市会議員を振出しにサンパウロ・プロビンシア議員（一八七二〜七五）、一八八七年にサンパウロ・プロビンシア統領となった。



ロドリゲス・アルベス

選出下院議員として登場

共和制となつ

し、プルデンテ・デ・モラエス政府の蔵相に起用された。一八〇〇年にはサンパウロ州統領に当選した。当時ロドリゲス・アルベス政府（州）の認可によってカナダ系資本のサンパウロ・ライト電力会社が設立された。

一九〇二年、カンポス・サーレスの後継として大統領に就任、リオ・ブランコ男爵を外相に登用するほかパウロ・フロンタン、オスワルド・クルースなどの人材を得てリオ市の市街改良と衛生改善の実績を挙げた。

一九〇六年に大統領の任期を了え、郷里グワラチンゲタに引退したが一九一八年から、第二十二期大統領に再び当選した。

しかし病気のため就任せずして一九一九年に死去、グワラチンゲタに葬られた。

科学者オスワルド・クルース

オスワルド・クルースは四五才で世を去ったが、その比較的短い生涯に科学者としてブラジルの社会に残した功績は絶大である。

彼が創設したりオのオスワルド・クルース研究所は永久にその名を記念するとともに細菌学研究所として世界に権威ある存在をなしている。またその他の文化施設でオスワルド・クルースの名のつけられているものが多い。

リオ・デ・ジャネイロが世界三大美港の一つとして外国の観光客が訪れるようになったのは今世紀となってからである。前世紀末までは黄熱病やマラリア、ペストな

どの悪疫の巢と見られ、外国の船舶はリオ寄港を避けていた。それは強ちリオばかりではなく、サントス、バイア、レシフェなども同様であった。当時はブラジル以外の中米諸国にも黄熱病やマラリアが発生し、特にパナマとキューバは人々の恐怖の的となっていた。その実例を挙げるに、パナマ運河の掘鑿工事で倒れた無数の労働者は黄熱病とマラリアによるものであった。

黄熱病がリオ市に発生したのは一八一七年で、それが猖獗をきわめたのは一八五〇年以後である。したがってグワナバラ湾の美景も悪疫のために外国人の魅力ともならずブラジルは未開の野蛮国と見なされていた。

ところが少壮科学者オスワルド・クルースがフランスの遊学から帰国し、大統領ロドリゲス・アルベスの要請でリオ市の衛生局長となり、悪戦苦闘の結果、リオから悪疫を一掃して世界に誇る文化衛生都市とした功績は多大である。

オスワルド・クルースの洗礼名はオスワルド・ゴンサルベス・クルースで、サンパウロ州パライバ平原のサン・ルイス・ド・パライチンガ（現在のオスワルド・クルース）に一八七二年八月五日に誕生した。彼の父は素朴な臨床医で、子息オスワルドの成長を楽しみながら業務に精励し、人々から尊敬されていた。

オスワルド・クルースは少年のころから勉学を好み、特に細菌学に興味をもち、十数才で自宅に小さな研究室を設けて種々の研究をした。彼は長じてリオ市の医大に入学し、一八九二年に卒業した。彼は医大卒業と同時に結婚し、岳父の援助を得てフランスに遊学した。

オスワルド・クルースは学徒の憧れの都パリのパスツール研究所に学ぶことになったのは一八九六年、二四才であつた。当時のパストゥール研究所長エミール・ルーは口を極めてオスワルド・クルースを称讃し、細菌学界の至宝とまでいわしめた。



オスワルド・クルス

他方、ブ
態となり、リオ市の衛生局からパリのパストゥール研究所長に優秀な細菌学者一名の斡旋が依頼された。ところが意外にもパストゥール研究所長の返信に日く『ご依頼の細菌学者派遣の件、現在貴国から当研究所に遊学中の少壮科学者オスワルド・クルースを最も優秀、且つ適材として推薦申上げる』とあつた。

オスワルド・クルースがパリで三年の研究を積んでブ

ラジルに帰国するや、ロドリゲス・アルベスが第五代大統領に就任した。

ロドリゲス・アルベスの最大の希いはリオ市を世界に誇り得る衛生都市たらしめることであつた。ロドリゲス・アルベスはリオ衛生局長に科学者として名声高いサーレス・グエラを招増したところ、同氏はそれを辞退し、若年の科学者オスワルド・クルースを推挙した。さすが慧眼のロドリゲス・アルベスは初対面にしてオスワルド・クルースの人物を信頼し、彼を衛生局長に任命すると同時に悪疫撲滅の重大責任を負わせた。その折のロドリゲス・アルベスの質問に対するオスワルド・クルースの返答は『もし政府が必要とする予算と協力を憎しまぬ限り、向う三カ年にしてリオ市から悪疫を一掃してお見せいたしましょう』と。大統領ロドリゲス・アルベスとオスワルド・クルースは固い握手を交わした。

オスワルド・クルースは細菌学研究所を設立し、悪疫予防と治療薬の調製に着手することになった。その場所はリオ近郊のマンギーニョと呼ばれる一つの農園であつたが、それが世界に名高い現在のオスワルド・クルース研究所の発端である。

オスワルド・クルースはパリでの研究と中米諸回の実例に徹し、黄熱病はエステゴミア・ファチアタ蚊によつ

て媒介されることに確信を得、鋭い蚊の撲滅に努め、そのために市民住宅の訪問部隊を組織した。それはペスト菌を媒介する鼠退治も兼ねるものであった。

ところが市民は協力はおろか、オスワルド・クリースの衛生計画は狂気の沙汰として家庭訪問部隊に妨害を加える有様であった。当時は蚊と鼠の撲滅部隊を揶揄する歌までが巷に流行した。遂には政府に非難の声がおよびロドリゲス・アルベス大統領は狂人科学者と結托して社会の安寧秩序をみだすとまでの痛罵が流布された。それがリオの陸軍兵学校に波及し、一部教官と学生の政治的策動がからみ、市民暴動に発展した。そこで側近者が大統領に一時何処かに避難するように進言した時に、ロドリゲス・アルベスは泰然として『自分はここを一步も退かぬ』といい放った。

しかし民衆の政府を誹謗する声があまりに高く、大統領の進退問題にまで至ったことを知ったオスワルド・クリースは衛生局長辞任の意をロドリゲス・アルベスに告げた。

大統領は言下に『貴下はあくまでも現在の職責遂行に努められたし。自分も大統領として最善を尽して貴下と共に倒れるであろう』。ここでロドリゲス・アルベスとオスワルド・クリースは再び握手し、固く決意するとこ

があつた。

大統領の言に感動したオスワルド・クルースは絶対の確信をもち、勇を鼓して再活動をはじめた。

黄熱病やマラリアの病菌媒介の蚊の撲滅、ペスト予防のための鼠退治、天然痘予防の種痘などの民衆教育に尽したオスワルド・クルースの努力はまさに超人間的であつた。やがて彼の犠牲的努力の結果が現われはじめた。

一八九一年から一八九四年までのリオ市の黄熱病その他の悪疫による死亡者は一五万人、年間三七五〇人を示したが、一九〇二年には九八四人となり、一九〇三年は五一四人に減少した。更に一九〇四年は僅か四八人、一九〇八年には四人の病死者を出しただけである。

こうした事実の前に市民はようやくオスワルド・クルースの業績を認め、彼に対する悪評と痛罵は感謝に変わった。かくしてオスワルド・クルースの苦闘は遂に酬いられたのである。それによって他の都市においてもリオ市と同様の方法で悪疫が絶滅された。

しかしオスワルド・クルースの苦闘たるやあまりに過度にして、身心ともに疲労の極に達し、後年ペトロポリスの市長となったが、心臓病のため一九一七年二月十一日に四五才で他界した。

医学者カルロス・シャーガス（一八七九〜一九三
四）

ミナス人の医学者カルロス・ジュスチニアノ・シャーガスがシャーガス病の病原発見の学説を発表したのが一九〇九年四月二三日である。当時この学説はドイツ医学会の機関誌に掲載され、世界の熱帯病研究家の注目をひいた。それまではシャーガス病は病原が不明のまま医学界の研究課題となっていた。それが俗名バルベローの錐虫によって媒介されることが判明された。当時のカルロス・シャーガスは三〇才の青年医学者であった。

カルロス・シャーガスは彼の師の科学者オスワルド・クルースに敬意を表して、シャーガス病の病原の錐虫バルベローにトリパノゾモ・クルジの学名をつけた。

カルロス・シャーガスは一八七九年七月九日にミナスのオリベローラに誕生した。一九〇三年にリオ医大を卒業したが、彼はそれ以前からオスワルド・クルース研究所で研究活動をしていた。

一九〇七年にカルロス・シャーガスはミナス奥地の衛生調査班長に任命された。当時ミナス奥地の住民が原因不明の疫病に債かされている事実を目撃し、それに彼の研究が集中された。

彼の熱心な実地調査の結果、その病気はバルベローと呼ばれる錐虫によって病原菌が媒介されることが立証された。

バルベロー虫は昼間は家屋の土壁の割れ目や天井に隠れ、夜間に睡眠中の人間を刺すことによってシャーガス病原菌が伝播されるのである。

シャーガス病の症状は罹病者によって一様ではないが、およそ徴候としては、眼瞼に浮腫が現われて高熱を発する。その熱は長くつづく場合と間歇的におこることがある。

患者は著しく衰弱して体色は蒼白となり、頸部や関節部に神経炎を併発し、肝臓を侵して赤血球を破壊するがこの病気の特徴である。

一九一一年から一九一二年にかけて、カルロス・シャーガスはアマゾン地域の風土病の調査を担当した。その彼の調査報告は莫大なもので、いまも医学界の貴重な資料となっている。ほかにも彼はリオのフルミネンセ低地の衛生調査に当たっている。

一九二九年にカルロス・シャーガスはリオ医大教授となり、熱帯病と予防医学の権威として名声を高めた。

カルロス・シャーガスは一九三四年一月八日に五五才で死去した。

農科大学ルイス・デ・ケーロスの創立者

ルイス・ビセンテ・デ・ソーザ・ケーロス（一八

四九〇一八九八）

ピラシカバの農科大学ルイス・デ・ケーロスはブラジル最初の農学校で、南米に名高い存在をなしている。

同大学はサンパウロ大学の農学部だが、創立者の名を冠し、エスコーラ・スペリオール・デ・アグリカルツール・ルイス・デ・ケーロスとなっている。その創立は一八九〇年六月三日で、最初は単なる農学校から発足した。

創立者ルイス・ビセンテ・デ・ソーザ・ケーロスはブラジルの国柄から農業教育の重要性を感じ、農学校の設立を思い立ったが二十代であった。彼の父ビセンテ・デ・ソーザ・ケーロスは帝政期の豪農リメーラ男爵である。また祖父は有名なブリガデーロ・ルイス・アントニオである。

ルイス・ビセソテは一四人兄弟の一人であり、八才でフランスのグリーンノン農学校に入学し、次いでスイスのチューリッヒで同じく農学を修めた。

一八七二年に父リメーラ男爵が死去し、遺産分配でピラシカバの農園を相続し、その土地を流れるピラシカバ

川の沿岸に水力応用の紡績工場を設けた。

彼は一八八八年に再びヨーロッパに渡り、各国の農学校と農事試験場を見学した。

ヨーロッパから帰国した彼はピラシカバのサン・ジョアン・ダ・モンクニーヤ農場を買収し、農学校の建設を計画した。

彼は親戚と友人知己に経済協力を求めたが得られず、独力で農学校の設立に着手したのが一八九二年一月であつた。

しかし当時の政治事情と世間の無理解による妨害があつて農学校の工事は進歩せず、それらの焦心と失望過労が原因で、一八九八年一月二二日に彼は四九才で他界した。

彼の死後、その農学校設立の熱意と必要性が認められ、中央政府によって工事が進められて一九〇一年一月一五日に開校式が挙げられた。それには大統領ロドリゲス・アルベスをはじめ、元大統領プルデソテ・デ・モラエス、科学者ルイス・ベレーラ・パレット、ソーザ・ケーロス未亡人ほか多数の政界人、教育家、新聞人が列席した。

やがてジョルジ・チビリツサがサンパウロ州統領に就任してからは、カルロス・ボテーリョ（日本移民導入の功労者）を農務長官に任命し、農学校ルイス・デ・ケー

ロスを増築して同校の面目を一新した。

ルイス・ビセンテを最もよく理解し、内助の功を積んだ妻エルメリンダは帝政第二期のコソセリエーロ・ベネジット・クリスチアノ・オトニ（セントラル鉄道会社の創立者）の息女である。

農学校ルイス・デ・ケーロス初年度の入学生は一五名で、そのうちの七名が卒業して最初の農業技師となった。その後の同校の卒業生で著名の農学者、政治家、大企業の経営者になった者が多い。

ブラジルの大学で創立者の人格と理想が校風と伝統となつてつづいていることでは農科大学ルイス・デ・ケーロスが唯一であろう。

同校が一農学校からはじまる点が、明治九年（一八七六年）に札幌農学校から発足した北海道大学を思わせる。

またルイス・ビセンテ・デ・ソーザ・ケーロスの人柄と風格は札幌農学校の初代教頭ウイリアム・クラーク博士を彷彿させる。

ルイス・ビセソテ・デ・ソーザ・ケーロス夫妻は大学本館の前庭に葬られている。そのバラ色の花崗岩の墓碑には彼の名とともに『この学院は汝の像である』と刻まれている。

ブタントン研究所の創立者

ビタル・ブラジル博士（一八六五〜一九五〇）

毒蛇研究所で知られるブタントン研究所はブラジルはもちろん、世界に有名である。同研究所は毒蛇の血清のほか天然痘の予防痘種、毒クモとサソリの血清、黄熱病、コレラ、破傷風、小児麻痺などの予防薬の調製に当たっている。

ブタントン研究所は一八九七年に当時三三才の青年科学者ビタル・ブラジルによって創設され、今世紀の初頭、（一九〇一年）に毒蛇血清第一号が出された。それはリオ州カンポスで毒蛇に咬まれた一康夫に試験されて生命を救うことができた。

ビタル・ブラジルは一八六五年にミナスのカンパニーに生れた。彼の家は貧しかったので、苦学でリオ医科大学を卒業した。

当時ブラジルの主要都市には黄熱病、マラリア、チブス、ペストなどの悪疫が流行し、また農村では毒蛇の犠牲となる人の多い事実を知ったビタル・ブラジルは毒蛇の血清とペスト、チブスの予防薬調製の目的でブタントン研究所を設立した。その場所はサンパウロ、ブタントン区の一つの農場で、面積一六〇ヘクタール、その中に

研究所本館と牧場が設けられた。牧場には一五〇頭の馬と数十頭の牛が飼育された。それらの馬や牛は血清の培養に用いられたのである。

ここで毒蛇血清の調製のあらましを述べるが、まず最初に毒蛇から毒を抽出する。その毒素を健康体の馬に注射することに血清の培養がはじまる。馬への毒素注射は極く微量から次第に分量が増される。そのために馬は毒に対する免疫体となる。

およそすべての動物には外部から侵入する害毒と闘う自然の力をもつが、注射の度に毒の量が増されるので、馬の体内に毒に対する戦闘力が養われるのである。その馬の体から血液が抽出されて調製されたのが毒蛇血清である。その血清を毒蛇に咬まれた人に注射すれば、体内の毒を消滅する作用をなし、その人の生命を救うことができる。

毒蛇血清の研究に成功したビタル・ブラジルは世界に知られ、ヨーロッパやアメリカ合衆国の医学会議に出席したことは数回ある。

或る時、国際医学会議で一科学者がビタル・ブラジルの研究について、その実験を見ないかぎり、学説のみでは信じられないと述べた。そこでビタル・ブラジルは人々の面前で数羽の鳩に毒蛇の毒を注射し、一定の時間

を経るとそれらの鳩は瀕死の状態となった。やがてビタル・ブラジルは一部分の鳩に血清を注射したところ、その鳩だけが元気となり他のものは死滅した。

ブタントン研究所はリオのオスワルド・クルース研究所と相ならんで世界に誇る存在をなしている。

第五期大統領アフォンソ・ペンナ

(自一九〇六年一月一五日 至一九〇九年六月一四日)

サンパウロ人の大統領が三代つづいた後にミナス人のアフォンソ・アウグスト・モレーテ・ペンナが第五期大統領となった。

彼は就任前に各州を訪れて地域的問題を検討した。

組閣には慎重を期し、土木技師ミゲル・カルモンを交通相に、ダヴィ・カンピスタを蔵相、エルメス・ダ・フォンセツカ元帥を陸相、リオ・ブランコ男爵をロドリゲス・アルベス政府にひきつづいて外相とした。

アフォンソ・ペンナは鉄道と通信網の拡充に最大限の予算を当て、ロンドン中佐(後のロンドン元帥)を電信線架設班長に任命してリオとアクレをつなぐ電信線を架設した。

ノロエステ鉄道の第一期工事が成り、バウルーとジャクチンガ（プレシデンテ・アルベス）の開通したのはアフォンソ・ペンナの任期である。

一九〇七年にはオランダのヘーグで第二回世界平和会議が開催され、ブラジル全権公使としてルイ・バルボーザが出席して空前の成功を収めた。それ以来ルイ・バルボーザはヘーグの鷲といわれた。

アフォンソ・ペンナは外国移民を積極的に導入したが、日本の第一回移民（笠戸丸）の入られたのは彼の任期の一九〇八年である。

アフォンソ・ペンナは任期終了前、一九〇九年六月一日に病没し、副大統領ニーロ・ペサーニヤが後を継いだ。

ルイ・バルボーザ（一八四九〜一九二三）

博学の代名詞ルイ・バルボーザは一八四九年にバイアのサルバドールに誕生し、一九二三年にペトロポリスに没した。

彼は政治家、法学者、教育家、思想家、著述家、新聞人で稀有の論客であった。

一八六六年にレシフェの法大に入学したがサンパウロ

法大に転校した。当時の同期生にカストロ・アルベス、アフォンソ・ペンナ、ロドリゲス・アルベス、ジョアキン・ナブコ、ジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラニーヨス（リオ・ブランコ男爵）がいた。

ルイ・バルボーズは共和主義者、奴隷解放の闘士であり、デオドロ元帥による共和宣言後の臨時政府の蔵相となった。



ルイ・バルボーズ

フロリアノ・ヘーシミット政府の一八九三年の海軍の反乱に、彼が反乱軍を支持したかどで告発され、アルゼンチンを経てイギリスに亡命した。その間イギリス便りをリオの『ジヨルナル・ド・コメルシオ』に連載した。それにはフランスのドレーフス大尉事件や極東問題を論じて広く注目をひいた。

一八九五年に帰国し、上院議員に当選した。一九〇七年にはオランダのヘーグにおいての第二回世界平和会議にブラジル全権として臨み、ブラジルと小国のために熱弁を揮って名声を博した。

ブラジルに帰ってはアフォンソ・ペンナの後継大統領

候補として、エルメス・ダ・フォンセツカ元帥と相対し、カンパーニャ・シビリスタの熱烈な選挙戦を展開したが遂に敗れた。

ルイ・バルボーザの博識は読書によって養なわれたが、彼は蔵書家として名高く、三万冊の蔵書があつた。リオの彼の旧邸は『ルイ・バルボーザの家』として博物館となっている。また十一月五日の彼の誕生日はブラジルの『文化の日』となっている。

第二回世界平和会議

一九〇七年六月一五日から一〇月一八日にわたり、オランダのヘーグで第二回世界平和会議が開催された。同会議への参加国は四十四ヶ国で、中南米からはアルゼンチン、ボリビア、ブラジル、チリー、コロンビア、キューバ、ドミニカ共和国、エクアドール、グワテマラ、ハイチ、ホンジュラス、ニカラグワ、パナマ、パラグワイ、サン・サルバドル、ペルー、ウルグワイ、ヴェネズエラの代表が出席した。

ブラジル全権はルイ・バルボーザで、随員をふくめ十数名から成るものであつた。

六月一五日に開会式が挙げられ、会議が進むにつれて

小国代表はほとんど発言もせず、五大列強（イギリス、ロシア、フランス、ドイツ、アメリカ）代表の提議に無条件で追従する有様であった。

会議は日を重ねて七月一二日となり、商船の武装問題に及ぶや、ロシア代表は尊大の態度をもって、小国の立場を無視した提議と論調に終始した。そこでルイ・バルボーザは静かに小軀を壇上に運び、おもむろに国際法の平等を説き、小国とてもその権利に変わるところなしと述べ、海軍力保持の問題を論ずる時は理路整然、最高潮に達するや、舌端火を吐く感があった。ルイ・バルボーザは国際法の権威であり、彼の名演説は全部フランス語でされた。各国の代表は期せずして一斉にルイ・バルボーザの弁論に魅せられ、彼の演説が終ると同時に場内に万来の拍手が湧きおこった。彼と真先きに固い握手を交わしたのはドイツ代表のマーシャル男爵であった。

ヘーグ会議の記念行事としては、アメリカのカーネギー財団の寄附による平和会館の建設礎式があった。当日はロシア代表のネリドゥフが祝辞を述べ、次いで数百人のオーケストラとコーラスによるヘンデルの『ハレルヤ合唱曲』が奏された。ルイ・バルボーザは壮麗な音楽に聴き入りながら、ブラジルの名においてヘーグ会議に最善の努力を尽し得たことを感謝した。

第二回世界平和会議でブラジル全権の使命を果たしたルイ・バルボーズはブラジルに帰り、カテテ宮に大統領アフォンソ・ペーナを訪れ『自分は祖国の名誉のために微力を尽したにすぎないが、ブラジルの国際的地位を高め得たと信ずる』と述べた。

ルイ・バルボーズとアフォンソ・ペーナはサンパウロ法大の同期生だったのである。

第五期（後） 大統領ニール・ペサーニャ

（自一九〇九年六月一四日 至一九一〇年一月一五日）

アフォンソ・ペーナ死亡のために副大統領ニール・ペサーニャが後を継ぎ、第五期大統領の任期を果たした。ニール・ペサーニャの大統領在任は一年余りにすぎないが、すぐれた農業政策をとって好評をうけた。彼はリオ州カンポスの出身で連邦議員、リオ・デ・ジャネイロ州統領の経歴があり、大統領任期を終えてからは上院議員となり、一九一七年にウエンセスラウ・ブラス政府の外相に就任した。

第六期大統領エルメス・ダ・フォンセツカ

(自一九一〇年一月一五日 至一九一四年一月一五日)

エルメス・ダ・フォンセツカは初代大統領デオドロ・ダ・フォンセツカの甥に当り、リオ・グランデ・ド・スール生れである。

彼は政界に勢力を占める上院議員ピニエーロ・マツシャードの支持を得、ルイ・バルボーザの二二万二〇〇〇票に対する四〇万三〇〇票で当選した。

エルメス・ダ・フォンセツカ政府の社会は騒擾そのもので暴動と反乱が頻発し、しかも財政難のためにイギリスのロスチャイルド財閥に第二回の借款を申込む状態となった。

このような情勢に地方のオリガルキア（寡頭政治）と結んで政界を牛耳っていたのがピニエーロ・マツシャードである。当時からエルメス・ダ・フォンセツカ元帥麾下の少壮士官グループに、国家を窮地から救うための寡頭政治打倒と汚職追放の氣勢が起りつつあった。

リオの或る海軍部隊は数隻の優秀艦を分捕り、政府施設を艦砲射撃する体制をとったが政府軍に征圧された。主導者は特赦をうけたが、またしても反乱を企て、その

余波がバイア、ペルナンブーコ、セアラ、アマゾナスまでおよんだ。

一九一二年二月一日、ロドリゲス・アルベス政府以来、十年間外相の任にあつたりオ・ブランコ男爵が他界し、ラウロ・ミューレルが後継外相となつた。

一九一三年から一九一四年にかけてはアメリカ合衆国の第二六代大統領セオドール・ルーズベルト（一八五八～一九一九）がロンドン大佐の協力を得てアマゾンのマデーラ上流地域の科学探検をした。

またエルメス・ダ・フォンセツカの大統領任期にセラにシセロ神父が現われ、乾魃地難民の救済者と崇められた。エルメス・ダ・フォンセツカは政治社会の動揺のうち四年の任期を終了した。

次期大統領選挙にはルイ・バルボーズが自由党から立候補したが、ミナス人のウエンセスラウ・ブラス・ペレーラ・ゴメスが五〇万票以上をもって当選した。その選挙にはピニエーロ・マツシャードの蔭の政治工作があつた。

シセロ神父（一八四四～一九三四）

シセロ神父（ロモソ・バチスタ・シセロ）は一八四四

年三月二四日、セアラ南部のクラートに生れた。彼は一八七〇年にパーデレの資格を得て路傍伝道を開始し、ジュアゼーロ・ド・ノルテに小教会を設けた。当時のジュアゼーロ・ド・ノルテは土壁の貧家二〇戸ほどの一村落であつた。

シセロ神父は素朴な僧侶だったが、その熱烈な信仰と説教はセアラの乾魘地の難民をひきつけた。彼は半神的存在をなし、神の使徒、予言者、救世主と讃えられ、ノルデステ各地からの巡礼者が小教会に列をなした。

兇賊ランペオンまでがシセロ神父を訪れて教えを乞うたほどである。

事実、シセロ神父は幾多の奇跡もおこなっている。

シセロ神父は政治的にも勢力を占め、セアラ州統領と施政上の意見を異にする理由で罷免させ、別の州統領を任命して彼自らが副州統領となった。次いで彼はセアラ州議員の連邦議員にも当選した。

彼は布教とともに産業の指導にも当つた。そのおかげでジュアゼーロ・ド・ノルテは一九一四年に人口三万の都市に発展した。

シセロ神父の信奉者には無教育の狂信者が多く、彼の教義は迷信と神秘性に満ちているとて、カトリック教会から離脱されたこともあつた。

セアラの有力政治家はシセロ神父の狂信宗教と政治勢力を防圧すべく、軍隊を差向けたが反対に彼の率いる私兵に撃滅された。

シセロ神父は一九三四年七月二〇日に死去した。ジュアゼーロ・ド・ノルテには彼の像が建立され、ノルデステの難民救済のシンボルとして参詣者が絶えない。

セオドール・ルーズベルトのアマゾン探検（ルーズベルト・ロンドン科学探検）

アメリカ合衆国の第二十六代大統領セオドール・ルーズベルト（一八五八～一九一九）は一九一三年から一九一四年にわたって、アマゾンのマデーラ上流の探検をした。それに協力したのがロンドン大佐（後のロンドン元帥）である。したがってルーズベルト・ロンドン科学探検と称された。



ロンドン元帥

この探検はマデーラ上流の七〇〇キロにおよび、当時

は謎の川といわれて人跡未踏の地であった。後にブラジル政府はルーズベルトの名を記念してリオ・ルーズベルトと命名した。

ルーズベルトのアマゾン探検隊は彼と令息ケルメット（アフリカの探検家で知られていた）ほか数名の博物学者から成るものであった。

この探検で二五〇〇の禽類と五〇〇の哺乳動物が捕獲されたが、それらの標本は主にニューヨークの自然科学博物館に所蔵されている。

ルーズベルトは猛獣狩りを得意としたが、彼は愛用のウエンチスター銃で巨大な斑点オンサを射止めて写真に収まっている。

彼は探検中に熱病に患ったが探検は中止されることなかつづけられた。

ルーズベルトは探検を終えてアメリカに帰り、”

through the Brazilian wilderness”の題名のアマゾン探検記を刊行した。

セオドル・ルーズベルトはニューヨーク市に生れ、ハーバートとコロンビア大学に学び、ニューヨーク市長を経て一八九七年に海軍長官となった。次いで副大統領となったが一九〇一年のマッキンレー大統領の暗殺のため到大統領に就任し、次期選挙に当選したので大統領在

任は七年となった。

ルーズベルトは日露戦争の調停の功勞で、一九〇六年度のノーベル平和賞を受けた。

第七期大統領ウエンセスラウ・ブラス

(自一九一四年十一月一五日 至一九一八年一一月一五日)

ウエンセスラウ・ブラスはミナス人で、温容の大統領といわれたほど穏健着実で人選の宜しきを得た組閣をした。内相と法相にカルロス・マキシミアノ、交通相にタヴァーレス・リーラ、蔵相にアントニオ・カルロス・デアンドラーデ、農相にジョアン・パンジア・カロジェラス、外相にはエルメス・ダ・フォンセツカ政府以采のラウロ・ミューレルを当てた。

ウエンセスラウ・ブラス政府の初年度一九一四年に第一次世界大戦が勃発したが、ブラジルは厳正中立を堅持した。一九一五年一〇月二六日には”大統領製造者”といわれたピニエーロ・マツシャードが各州への内政干渉が害してか、暴漢に暗殺された。

一九一七年四月四日、ブラジル商船『パラナ』がフラ

ンス海域でドイツ潜水艦に撃沈された。そのためにブラジルはドイツと国交断絶し、駐伯ドイツ大使に旅券を交付して中立国アルゼンチンへの退去を勧告した。それにつづいてラウロ・ミューレルが外相の辞表を提出した。ラウロ・ミューレルはサンタ・カタリナ出身のドイツ系ブラジル人で、リオの陸軍兵学校に学び、サンタ・カタリナ州統領、連邦議員、交通大臣を歴任している。

ドイツと国交断絶したブラジルはドイツの封鎖線を破りながら連合国への物資輸送に当った。ところがそれらの商船の『チジュカ』『ラバ』『マカウー』が連続的にドイツ潜水艦に撃沈されたので、ブラジルの参戦が不可避となった。議会で投票の結果、満場一致でドイツに対する宣戦布告が決定された。

大統領ウエンセスラウ・ブラストラウロ・ミューレルの後任外相ニーロ・ペサーニヤが対独宣戦布告に署名したのは一九一七年一〇月二七日午後三時である。当日は興奮した民衆がリオやサンパウロのドイツ系商館の焼打ちをする騒ぎとなった。

かくしてウエンセスラウ・ブラスの大統領任期が終り、次期選挙では再びサンパウロ人のロドリゲス・アルベスとミナス人のデルフィン・モレーラ（副）が当選した。

ピニエーロ・マツシヤード（一八五一〜一九一五）

政治家、上院議員ジョゼ・ゴメス・マツシヤードは一八五一年にリオ・グランデ・ド・スールのクルース・アルタに生れた。一八六五年にリオ・パルドの陸軍兵学校に入学したが、義勇兵としてパラグワイ戦争に従軍した。しかし、戦地でマラリアに患い、療養のためリオ・グランデ・ド・スールに引返した。

一八六七年には第七騎兵連隊に入隊して再びパラグワイ戦に赴いたがマラリアが再発したために郷土に帰還すると同時に軍人を断念し、一八七四年にサンパウロ法大に入学した。

彼は法大在学中に共和運動に参加し、学生新聞『ア・レプブリカ』を創刊した。

一八七八年に彼はサンパウロ法大を卒業し、リオ・グランデ・ド・スールのサン・ルイス・ゴンサーガにジュリオ・デ・カスチーリヨス、エルネスト・アルベス、ヴェナシオ・アイレス、アシス・ブラジルらとともに『リオグランデンセ共和党』を結成した。

共和制が宣言されると同時にピニエーロ・マツシヤードはリオ・グランデ州議員に当選した。

海軍の反乱に発したフェデラリスタ革命（一八九三〜

九五)にピニエーロ・マツシヤードは名誉旅団長として二〇〇〇の兵士を率い、イポリト・リベール大将の部隊とともにリオ・グランデ・ド・スールからサンタ・カタリナのイタジャイに進軍した。

フェデラリスタ革命が終始するや、彼はリオに出で、上院議員となり共和保守党を結成した。ついで彼は上院副議長の椅子を占めて政界の権力者となった。

ピニエーロ・マツシヤードはエルメス・ダ・フォンセツカ以来の歴代大統領候補を支持し政治工作をしたため”大統領の製造屋”といわれた。そうした彼の政治活動は他州への内政干渉ともなり、それが害して一九一五年九月八日、リオのホテル・エストランジェーロの玄関でフランシスコ・マンソ・デ・パイバの兇刃に倒れた。

彼はポルト・アレグレの慈善病院附属墓地に葬られた。

アルベルト・サントス・ズモン（一八七三〜一九三二）

飛行機の発明家アルベルト・サントス・ズモンは一八七三年七月二〇日にミナスのジョアン・アイレス（現在のサントス・ズモン）のカバンダー莊園に生れた。

父エンリツケ・ズモンもミナスのジアマンチナ生れで、フランスに学んだ機械技師であった。祖父フランス・アー・ズモンはフランスの貴金属商だったが、ミナスの宝石探索の野望を抱いてブラジルに移住し、ジアマンチナに住んだ。

エンリツケ・ズモンは鉄道の建設工事を受請って産をなし、サンパウロ州のリベロン・プレート管区に大面積の土地を購入してコーヒー栽培をし、有名なズモン耕地を形成した。

エンリツケ・ズモンは耕地のすべての生産設備を機械化し、鉄道を敷設してアメリカから機関車ボールドウィンを入れた。

見渡すかぎり渺望たる緑の海のようなコーヒー耕地に少年期をすごしたアルベルトは将来の発明家たる夢をもち、フランスの科学冒険小説家ジュール・ヴェルヌ（一八二八〜一九〇五）の小説を熟読した。それは『月世界の探検』『海底二万マイルの旅』『八〇日の世界一周旅行』などであった。

一八九一年にアルベルトは父とともにフランスを訪れてパリの工業展を見学し、内燃エンジンによる自動車を一台購入してブラジルに帰った。

一八九二年、父エンリツケが耕地巡回中に落馬して怪我

したことが原因して、ズモン耕地をイギリスの資本団に売却し、子息九人に資産分配をした。同年父エソリックが死去した。

アルベルトは多額の資産分配をうけてパリに遊学し、工科学校に入学した。彼は学校卒業と同時に航空の研究に没頭し、最初に製作した軽気球に『ブラジル』と名づけた。

アルベルトは軽気球第二号から第五号までを連続的に製作して試験飛行をしたが、或る時には墜落して九死に一生を得た。

第六号からは飛行船とし、一九〇一年一月一二日にパリのエツフェル塔上を旋回飛行し、その成功によってデウィッチ科学賞を授与された。それは飛行船にモーターを附けたものであった。それによって確信を得た彼は西洋タコに似た飛行機をつくり上げ「ヤービス」の名称をつけて一九〇六年一月二三日にパリ郊外のバガテールで試験飛行をした。その飛行機は長さ一〇メートル、翼幅一二メートル、重量一六〇キロ、二十四馬力のエンジンがつけられていた。

サントス・ズモンは悠然と飛行機に乗り、プロペラの音とともに滑走し、離陸するや数千メートルを飛んで人々の熱狂的喝采を浴びた。その時速は三九キロ、四〇

○メートルであった。

一九〇八年には『デモゼール』の名称の単葉機を製作し、いとも快調な試験飛行をおこなって観衆を狂喜させた。ここにおいてサントス・ズモンは年来の飛行機発明の夢を実現した。

やがて第一次世界大戦となり、飛行機が破壊と殺戮に用いられるのを見てサントス・ズモンは憂悶やるせないものがあつた。彼が飛行機発明のために長年住んだパリからブラジルに帰つたのは一九三一年であり、翌一九三二年七月二〇日の自身の誕生日にサントスのグワルジャで自殺を遂げた。

第八期大統領ロドリゲス・アルベス（就任前死亡）

ロドリゲス・アルベスは選挙当時に病体だったが、大統領に当選して就任前に死亡し、副大統領のデルフィン・モレーラが一時的に大統領を代行した。

第八期大統領代行デルフィン・モレーラ

（自一九一八年十一月一五日 至一九一九年七月二八日）

デルフィン・モレーラはミナス出身で、サンパウロ法大卒、ミナス選出連邦議員、ミナス州統領を歴任している。一九一八年の選挙で副大統領に当選したが、ロドリゲス・アルベス死去のために大統領を代行し、憲法に基づいて新たな大統領選挙を執行した。この選挙にはルイ・バルボーザが立候補し、パライバ人のエピタシオ・ペツソアとの対決となった。結果はペツソアの勝利となった。それは選挙の大勢を左右するサンパウロとミナスが両州の系列外の有能政治家の出馬を望んだからである。

当時、エピタシオ・ペツソアは大審院総裁でブラジル全権としてヴェルサイユの世界平和会議に出席して不在だったが、彼は全権をパンジア・カロジェラスに委任して帰国し、大統領就任式をあげた。

第八期大統領エピタシオ・ペツソア

(自一九一九年七月二十八日 至一九二二年一月一五日)

エピタシオ・ダ・シルバ・ペツソアの大統領任期はロトリゲス・アルベスの急死のため副大統領デルフィン・モレーラの大統領代行をへて、一九一九年七月二八日から一九二二年一月一五日までの三年五カ月である。

彼は就任するや、北東部の干害対策にのりだし、各地に道路を

建設し、アスーデ（人工沼）を建設した。それは彼が北東部のパライバ人だったからである。

一九二二年にはブラジルのルネッサンスともいふべき「近代芸術週間」がサンパウロで開催された。

政府の最大の行事は一九二二年のブラジル独立一〇〇周年の記念祝典である。ベルギーの皇帝アルバート一世を国賓として迎え、リオのエスプラナード・カステルに万国博覧会会場をもうけた。

独立一〇〇年の祭典にはポルトガルの大統領アントニオ・ジョゼ・デ・アルメーダが臨席した。

日本政府はその祝賀のために博覧会に日本館をもうけ、また軍艦「浅間」「出雲」を派遣した。

また九月六日にフランシスコ・マヌエル・ダ・シルバ作曲、ジョアキン・オゾリオ・ズッケ・エストラーダ作詩の現在のブラジル国歌が法令によって公表された。

サンパウロのイピランガに独立記念塔が設けられた。祝典にさきだち次期大統領の選挙運動が開始された。

政府の擁した候補はミナス人のアルツール・ベルナデスと副にリオ人のニーロ・ペサーニャであった。

結果は軍人がおした候補が破れて、ベルナデスが当選した。それを不満とする将校グループは強硬な反対氣勢を上げ、二二年七月五日のコパカバーナ要塞の反乱となった。

彼ら少壮将校は軍人クラブ総裁のエルメス・ダ・フォンセツカ

元帥の出馬を願っていたのである。

彼らが決起した理由の一つに、選挙運動の最中に、ベルナデスが有力者のソアールスにあてたという偽の手紙が公表され、その内容が陸軍を侮辱したものだだったからである。

しかし、反乱の根本原因はサンパウロとミナスを中心とする大地主勢力に支持される寡頭政治の打倒にあった。

反乱将校一八名はブラジル国旗を一人に裁断し、それぞれ一片を体に巻き付け、アトランチカ海岸で政府軍と戦い、一六人が死んだ。シケーラ・カンポス大尉とエドアルド・ゴームス中尉の二人が生き残った。

彼ら少壮将校たちは政治の腐敗を一掃し、清廉な政府の出現を望んでいたのである。それには武力行使による流血もやむをえないとして反乱に踏みきったものである。

一九二二年のコパカバナ要塞の反乱は一九二四年のサンパウロのイジドロ革命の前哨戦となった。またコパカバナの反乱はテネンチズモの発生をなした。

ジョアキン・オゾリオ・ズツケ・エストラーダ（一八七〇～一九二七）

ブラジル国歌の作詩者ジョアキン・オゾリオ・ズツケ・エストラーダは一八七〇年、リオ・デ・ジャネイロ県の

ヴァソースに生れ、一九二七年にリオに他界した。

彼は洗礼をうけるに当ってオゾリオ将軍が代父となり、
ジョアキン・オゾリオの洗礼名が与えられた。

彼はリオのドン・ペードロ二世高校に入学し、五年生の時に最初の詩集をシルビオ・ロメロの序文をもって出版した。高校卒業と同時にジャーナリズムに進み、新聞人ジョゼ・ド・パトロシニオとともに奴隷解放運動に参加した。

一八八九年にサンパウロ法大に入学したが二年で中退し、外務省に入って外交官となりパラグワイのアスンシオンに駐在した。一九〇二年にはリオに戻り、師範学校の教師となり、傍ら新聞『コレーオ・ダ・マニアン』と『ジオルナル・ド・ブラジル』に執筆した。

一九〇九年、ズツケ・エストラーダはブラジル国歌の作詩をし、一九二二年九月六日にエピタシオ・ペッソア政府の法令によって公認された。

ズツケ・エストラーダはリオのテアトロ・リリコ・ブラジレーロ（ブラジル歌劇々場）の場長で、ブラジル文学院会員であった。

(自一九二二年十一月一五日 至一九二六年十一月一五日)

アルツール・ダ・シルバ・ベルナルデスは不穏な空気のうち大統領に就任した。それから一年数ヶ月をすぎ一九二四年七月五日を期してサンパウロにイジドロ革命が勃発した。

イジドロ・ジーアス・ローペス將軍はサンパウロ州警兵团長ミゲル・コスタ少将ほか数十名の陸軍將校の参加を得て革命軍を結成した。その中には一九二二年のコパカバナ要塞の反乱の下士官も見られた。

イジドロ革命軍の兵力は三〇〇〇で、七月八日にサンパウロ州統領公邸カンポス・エリゼオス宮を包囲した。州統領カルロス・デ・カンポス（ベルナルジノ・デ・カンポスの子息）は事態の成行きを感知し、直ちに公邸を革命軍に明け渡してサンパウロ近郊に退去した。

イジドロ革命軍は大砲二〇門と機関銃一八〇挺をもってジョアン・メンデス広場に陣營を張り、イピランガ区に待機する政府軍に応戦した。

イジドロ革命には他の州警兵团も参加する手順だったが、七月五日に整然と革命戦に突入したのはサンパウロだけであつた。サンパウロ市内の要所には塹壕が築かれ、

随所に弾丸が炸裂して多くの家屋が破壊された。

革命戦一二日目には食糧と燃料が欠乏し、水道と電線は切断され、電車は運転不能で非常な混乱を生じた。

アルツール・ベルナルデス政府軍の偵察機はサンパウロの上空を飛んで無数の風船を落下した。それは陸軍大臣セテンプリーノ・デ・カルヴァーリョの伝達として、革命軍を徹底的に撃滅するから市民は速やかに安全な場所に避確するようにとの警告であった。当時のサンパウロ市の人口は七〇万だったが、約三十万人が避難した。

イジドロ將軍はサンパウロ市長フィルミアノ・ピントをはじめ政界の代表人物カルロス・マセド・ソアーレス、新聞人ジュリオ・デ・メスキータ、サンパウロ大司教ドン・ドアルテ・レオポルド・エ・シルバの協力を得て市内の秩序維持に努力した。

サンパウロにおいての革命戦二三日をイジドロ將軍は良心的かつ賢明迅速に行動し、避難民に対しては能うるかぎり便宜を計った。

ソロカバナ鉄道は政府軍に占領されたので他の鉄道は革命軍に利用され、避難民の輸送に当てられた。

イジドロ革命によるサンパウロ市民の犠牲は死者六〇〇、負傷四〇〇〇である。

サンパウロ市内で特に被害をうけたのはリベルダーデ、

ビラ・マリアナ、アクリマソン、イピランガ、カンブシー、ブラス、モーカ区であった。

二三日におよんだ革命戦に利あらずの悟ったイジドロ將軍は停戦命令を發し、西部に向けて撤退した。その時にリオ・グランデ・ド・スール反乱軍の司令官ルイス・カルロス・プレステスによってプレステス部隊が編成され、それにマラニョンとピアウイ部隊を加えて、全行程二万四〇〇〇キロの奥地行軍を敢行した。それは革命戦に敗れたとはいえ、彼ら革命児のブラジル朝野への抗議を意味するものであった。

アルツール・ベルナルデスはほとんど戒嚴令を布きつづけて四年の任期を終えた。

第一〇期大統領ワシントン・ルイス・ペレーラ・デ・ソーザ

(自一九二六年十一月一六日 至一九三〇年一〇月二四日)

アルツール・ベルナルデスの次期大統領選挙には、リオ州生れのサンパウロ人と見なされていたワシントン・ルイス・ペレーラ・デ・ソーザが当選し、一九二六年一月一五日に就任した。副大統領にはミナス人のメー

ロ・ビアンナが当選した。

ワシントン・ルイスは組閣に当って、外相にオタビオ・マンガベーラ、交通相にビクトール・コンデール、蔵相にはリオ・グランデ・ド・スール選出の連邦議員ジエツリオ・ヴァルガスを起用した。

ワシントン・ルイスの清廉剛直な人柄からして厳正な政治を布き、健全財政を目指して為替とコーヒー市価の安定に努力した。好条件の外債を成立させ、財政面では好調の二年がすぎた。

ワシントン・ルイス政府はミルレースをクルゼーロへの貨幣制改革案を立てたが実施には至らなかつた。

ワシントン・ルイスは国家の発展は道路の開設にありを施政のローガンとし、車道建設に挑んだ。彼は自動車時代の到来を予見していたのである。リオ・ペトロポリス道路とリオ・サンパウロ国道の開設されたのは彼の大統領任期である。

ワシントン・ルイス政府三年目の一九二九年にニューヨークの株式暴落に発した経済恐慌が全世界に波及したアメリカ向けのブラジル・コーヒーの輸出が杜絶し、不況のために多くの企業が倒産し、工場は閉鎖されて失業者を続出した。しかも皮肉な現象としてコーヒーの大豊作で、買手がないままコーヒーの滞貨が山と積まれた。

このような状況に次期大統領の選挙運動がはじめられた。それ以前、ワシントン・ルイス政府の蔵相ジェツリオ・ヴァルガスは彼の郷土リオ・グランデ・ド・スールの州統領ボルジェス・デ・メデーロスの後継候補たるべく、蔵相を辞任してリオ・グランデに去った。

当時のミナス州統領は名声高いアントニオ・カルロス・リベロ・デ・アンドラーデで次期大統領の有力な候補であった。それはサンパウロとミナスにはカフェ・コン・レーテ（コーヒーと牛乳）の原則があり、サンパウロとミナスから交互に大統領を出すことが暗黙のうちに決められていたからである。コーヒーはサンパウロ、牛乳は農牧州のミナスを意味している。

ワシントン・ルイスは厳正にはリオ人だが公人としてはサンパウロ人と見られていた。したがって皿まわしの原則からすれば次期大統領はミナスから出るべきである。

ところがワシントン・ルイスの推した公けの大統領候補はサンパウロ共和党のジュリオ・プレステス・デ・アルブケルケであった。当時のジュリオ・プレステスはサンパウロ州統領で、ワシントン・ルイスの朋友であった。

ことの成行きからアントニオ・カルロスとワシントン・ルイスは敵の立場におかれた。

アントニオ・カルロスは大統領候補を断念して、地元

のミナスとリオ・グランデ・ド・スール、パライバの政府反対派によってアリアンサ・リベラル（自由同盟）を結成し、リオ・グランデ・ド・スールの州統領ジェツリオ・ヴァルガスを大統領、パライバ州統領のジョアン・ペッソア（エピタシオ・ペッソアの甥）を副大統領候補に推し、支持することになった。

自由同盟に参加した主要人物はアントニオ・カルロス、オスワルド・アラニーヤ、マウリシオ・デ・ラセルダと元大統領アルツール・ベルナルデスであった。

選挙は一九三〇年三月一日に執行され、ジェツリオ・プレステスは九五万票以上、ジェツリオ・ヴァルガスは五五万票で敗北した。

ジェツリオ・プレステスは就任前に悠々としてアメリカ合衆国とヨーロッパへ旅行した。

そのころパライバの州統領ジョアン・ペッソアがレシフェで暗殺される事件がおこった。

それは選挙に関連する政治問題からではなく、全く個人的且つ地域的事業のことであった。

しかし反対派はそれを利用し、ジョアン・ペッソアの遺体を船に乗せて各港に寄りながらリオに運び、反ワシントン・ルイス政府の氣勢を煽った。そのジョアン・ペッソアの暗殺がヴァルガス革命の導火線となった。

ヴァルガスは選挙に不正ありを理由に革命の煙火を挙げたのが一九三〇年一月三日である。ヴァルガスを総司令官とするリオ・グランデ・ド・スールの革命軍とゴエス・モンテロー部隊はパラナを経てサンパウロ州境のイタラレに集中された。ヴァルガスはほとんど戦わずしてサンパウロに入って市民の歓迎をうけリオに向った。

またセアラのジュアレス・タボラはプライバ部隊を率いて北東部の各州を制圧しつつリオに到着した。

リオの連邦軍の過半が革命軍に参加し、新興中産階級は一斉にヴァルガスを支持した。

こうした状況にワシントン・ルイスは絶対に政権を渡さない態度を固持したが、軍首脳部とリオ大司教ドン・ジャイメ・カマラの勅言があり、流血の惨事を避けるべく政権を退き、一九三〇年二月三日にコパカバナ要塞に居を移した。それはワシントン・ルイスの大統領任期終了の一二日前のことである。

次いでワシントン・ルイスはヨーロッパに亡命した。これをもって第一次共和制の終幕となる。

ワシントン・ルイス（一八六九〜一九五七）

ワシントン・ルイス・ペレーラ・デ・ソーサは一八六

九年一〇月二六日にリオ・デ・ジャネイロ県のマカエーに誕生した。彼の父ジョアキン・ペレーラ・デ・ソーザはリオ・デ・ジャネイロ県の守備兵団の中佐であった。

ワシントン・ルイスは一八八四年にリオのドン・ペードロ二世高校に入学した。彼の同期生にブラジル国歌の作詩者ジョアキン・オゾリオ・ズツケ・エストラーダがいた。

一八八九年にサンパウロ法科大学に入学、一八九一年に卒業してリオ州バラマンサの検事として赴任したが、間もなくサンパウロのバタタエスに移転し、法律事務所を開設した。



ワシントン・ルイス

一八九七年にバタタエス市会議員に選ばれたのが彼の政界進出の第一歩をなし、次いでバタタエス市長に就任した。

一九〇五年にはサンパウロ州議員に当選、一九〇六年にサンパウロ州統領ジョルジ・チビリツサの要請で司法長官となり、自動車の普及に努力した。

ワシントン・ルイスは親友アントニオ・プラード・ジュニオール、シルビオ・ペンテアードとともにサンパウロとサントス間の自動車旅行をやったのはその当時である。また彼は航空界の先駆者サントス・ズモンとサンパウロ・カンピーナスの自動車旅行をして人々の話題となった。

その後ワシントン・ルイスはサンパウロ市長、サンパウロ州統領、上院議員を歴任して一九二六年に大統領の印綬を帯びた。

一九三〇年のヴァルガス革命で彼はヨーロッパに亡命し、ポルトガル、スペイン、フランス、イギリス、スイスを転々の旅をし、愛妻を失ってから単身アメリカに渡り、ズトラ政権となって一七年ぶりにブラジルに帰った。彼は長い亡命生活にブラジルの過去の政治については一言も語らず、沈黙を守りつづけた。リオに入港した船の甲板に立つ彼の姿は永年の風雨霜雪に耐える老木の壮厳さがあつた。

ワシントン・ルイスはブラジル歴史地理学会会員で、歴史家でもあり幾つかの著書がある。亡命の旅から帰った彼はサンパウロのハドック・ローボ街に質素な住居を構えていたがそこで一九五七年八月四日に長逝した。

ジュリオ・プレステス（一八八二〜一九四六）

ジュリオ・プレステス・デ・アルブケルケはサンパウロ、イタペチニングアの名門プレステス家に生れた。父はフェルナンド・プレステスである。

彼はサンパウロ法大卒業後、サンパウロに法律事務所を設け、四期連続してサンパウロ州議員となった。

一九二四年に連邦下院議員に当選、一九二七年にはサンパウロ州統領に就任した。

ジュリオ・プレステスのサンパウロ州統領任期に農務長官フェルナンド・コスタとの名コンビで農事教育を普及し、畜産の改良と小麦栽培を広めた。サンパウロにアグア・ブランカ畜産局を設けたのもジュリオ・プレステスである。

一九三〇年の大統領選挙にジュリオ・プレステスは当選したが、ヴァルガス革命で彼は就任せずして国外追放となった。

一九三四年に特赦を得て帰国し、次期選挙にエドアルド・ゴメスを支持した。その後は一切の政治活動を避け、イタペチニングアの農園（アララス耕地）に引きこもって農夫としての生活に入った。

ジュリオ・プレステスは詩人でもあり、彼はカボクロ

詩人で知られた。

ジュリオ・プレスデスはアメリカのペンシルバニア大
学から名誉学位をうけている。

第一三章 ブラジル外務省の

巨人リオ・ブランコ男爵

ブラジル外務省の巨人リオ・ブランコ男爵

一四九四年にポルトガルとスペインの間に結ばれたトルデシラス領土協定によれば、ブラジルの領土は現在の三分の一にすぎなかったが、バンデランテスの奥地探検によって次第に領土線が拡大された。しかし後のリオ・ブランコ男爵の外交政治の成功がなければブラジルは現在の国土を保持し得なかったであろう。

リオ・ブランコ男爵の本名はジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラーニョスで、彼の父は第二次帝政の大政治家リオ・ブランコ子爵である。

以下リオ・ブランコ男爵、ジョゼ・マリア・ダ・シル

バ・パラニーヨスを執筆の都合上、単にリオ・ブランコとする。

リオ・ブランコの外相任期はロドリゲス・アルベス政府にはじまり、アフォンソ・ペンナ、ニーロ・ペサーニャ、エルメス・ダ・フォンセツカの四人の大統領におよんでいる。その間アルゼンチン、ボリビア、ペルー、仏領ギヤナ、英領ギヤナとの境界問題を解決して、正式にブラジル領となった面積は七〇万七〇〇〇平方キロである。このようにリオ・ブランコの功績は隣接国との境界問題の解決は一滴の血を流すことなく平和裡にブラジルに有利の裁決を見たことにある。

リオ・ブランコはリオ市に生まれ、ドン・ペードロ二世高校を経てサンパウロ法大に入学した。彼は法大生時代に丹念に資料を集めて『ラプラタ戦史』と『ブラジル陸軍史』を著述したことは若くして史家の素質をもっていたことを物語っている。

彼は二二才で法大を卒業した時、ロテリア（富籤）で一二コントスを得たのでヨーロッパ旅行を企て、ポルトガル、スペイン、イギリス、ドイツ、フランスを見学したことは、将来の外交官たる彼にとって幸いであった。

ヨーロッパの旅から帰った彼は母校ドン・ペードロ二

世高校の地理歴史の教師となった。しかし間もなくリオ州ノーバ・フリブルゴの判事として赴任した。それは僅か三カ月で辞任し、政界進出の機会を待った。当時彼の父は外相であった。

リオ・ブランコはマット・グロツソ選出議員として政界に登場することになったが、自由党に所属して、父の保守党と対立したことは皮肉である。

一八七〇年にはパラグワイ戦争の平和会議に父シルバ・パラ・ニヨスがブラジル全権として出席するに際し、リオ・ブランコは秘書となって同行した。

父シルバ・パラ・ニヨスはアスンションから帰るや、子爵に叙された。

一八七三年、リオ・ブランコはリヴァプールの領事として赴任した。一八八四年にはブラジル・コーヒー宣伝使節としてロシアを訪れ、ペトログラードで開催された万国博覧会で、ブラジルの宣伝に非常な成果を見た。彼はロシア政府から名誉章をうけ、またフランス美術会の会員に推挙された。彼は教養人としてイギリスの上流社会に知られ、ロイヤル・ジェオグラフィック・ソサイチーの会員に推された。当時彼はフランス語の LA GRAN DE ENCYCLOPEEIE を出版し、パリの国際博覧会開催のため同じくフランス語の『ブラジル史』と『ドン・ペード

ロ二世伝』を刊行した。

リオ・ブランコがイギリス駐在一三年を経た時にブラジルの共和制が樹立され、それを機会に彼は新聞『ジョルナル・ド・コメルシオ』に、ブラジルの植民期以来の史的回顧録を執筆した。それが後にブラジル外務省から出版された『ブラジル年代史』である。



リオ・ブランコ男爵

ところでブラジル政府はアルゼンチンとの境界問題の立会裁判をアメリカ合衆国政府に要請した。それはミッソンエス領地問題といわれ、一八五七年のラプラタ会議以来、アルゼンチン政府と交渉をしていたが、何等の解決もなくして時が過ぎていたものであった。

ミッソンエスのブラジル領と見なされるべき面積は三万五千平方キロで、昔スペイン系ジェズイットが大規模の土民教化村を設けていた地域である。

ブラジル政府はミッソンエス領地の所有権を立証する史料と外交記録を可能限り多く且つ短期に整える必要があった。リオ・ブランコはかつて父リオ・ブランコ子爵

に同行してラプラタ会議に臨んだ関係からも、ミッソンエスの領地問題に糟通していた。

リオ・ブランコはフロリアノ・ペーシヨット大統領の電報に接して、リヴァプールからリオに着き、ミッソンエス領地に関するあらゆる証拠書類を集めるために忙殺された。

一八九三年四月、準備の成ったリオ・ブランコはアメリカ合衆国へ出発した。

ワシントンに到着したリオ・ブランコはブラジル政府特使の信任状を國務長官バセット・ムーアに提出して会談した。その後、彼は沢山の書類を印刷する都合上、ニューヨークに住んだ。

最初にポルトガルとスペイン政府との間にミッソンエスの領土境界が協定されたのは一七五〇年で、それはウルグワイ川に沿い、西方をコンフェデラソン・アルゼンチナ領、東方をポルトガル領（ブラジル領）とするという、きわめて漠然たるものであった。しかもそれはアルゼンチン政府の提議であったにもかかわらず、調印に至らなかった。その後再びポルトガルとスペイン政府代表の立会のもとに、ペピリ・グワスー川とサント・アントニオ川をもってアルゼンチンとブラジル領の境界とする

決定がされた。しかし数年をすぎてアルゼンチン政府はシヤペコ川とシヨピン川が境界であるとの提議をしたために、ミッソンス領地の係争を生じた。ミッソンス領地はパルマ領地とも呼ばれ、正確な境界図も作られぬまま、ブラジル政府の頭痛の種となっていたものである。一七五〇年に発したミッソンス領地間境は、一七七七年のサント・イルデフォンソ会議でも調停が成らずして百数十年も持越され一八九〇年のモンテビデオ会議では、ミッソンス領地はアルゼンチンとブラジルに分割されるべしと提議された。これではブラジルに属すべき面積が半減されることになる。

当時ブラジル臨時政府の外相キンチーノ・ボカユーバは不本意ながら一応この提議承認の署名をしたが、それは議会で否決され、アメリカ合衆国政府の立会裁判を求めることになった。そこで特使としてリオ・ブランコがワシントンに派遣された。リオ・ブランコが持参した莫大な書類はクリーブランド大統領によって数ヶ月を要して検閲された。かくしてリオ・ブランコにとって栄光の日が到来した。それは一八九五年二月五日であり、クリーブランド大統領がミッソンス領地問題の立会裁決を下した日である。

クリーブランド大統領の左側には國務長官が控え、そ

れにつづいてブラジル代表リオ・ブランコとアルゼンチン代表エスタニスラウ・ゼバロスが着席した。その緊張した空気に裁決書が読み上げられたが、それによってブラジルの全面的勝利が決定された。

クリーブランド大統領はリオ・ブランコと握手し『マイ・コングレッツユレーション・バロン』と述べた。またアルゼンチン代表のエスタニスラウ・ゼバロスはリオ・ブランコの手を固く握り真心から祝福した。ホワイト・ハウスの玄関には三人のブラジル人がリオ・ブランコを待っていたが、彼らの眼には感激の涙があった。

クリーブランド大統領の立会裁判によってブラジル領となったミッソンスの面積は三万六千平方キロで、リオ州の五分の四の広さに相当する。それは領土侵略ではなく、リオ・ブランコの厳正な調査と正当な主張の勝利である。

ミッソンス領地問題が解決されたのは一八九五年だが、それより三年前の一八九二年に、仏領ギヤナの隣接地アマパの係争問題のために現地調査委員会が組織された。ギヤナは一七世紀初頭からフランス、イギリス、オランダの植民や軍隊が争奪戦を繰り返した地域で、それぞれの領土境界が判然とせぬまま時を経過していた。

仏領ギヤナの首都カインは一六三三年に創設されたが、

一六五五年にオランダ軍に占領され、それから二年後にはイギリス人に攻略され、一六七四年に再びオランダ人がイギリス人を駆逐した。一六七六年となってはフランス人がカインを奪回するという、目まぐるしい紛争の地であった。

フランス軍はオイアポック川左岸のオランダ軍の要塞（フォルテ・デ・オランジェ）を陥落させ、その侵略の手が次第に南方に伸びつつあったので、ポルトガル人はアマゾン地域の防衛のためにフランス人と戦うことになった。

アマパは一八四一年以後、ブラジルとフランス政府の協定によって中立地域となったが後に金鉱が発見され、その探索に各国の冒険児が侵入するようになって闘争が絶えず、争乱の地と化した。

一七一三年のユトレシユト条約では、仏領ギヤナとブラジル領の境界はオイヤポック川と決定されたが、ナポレオン一世の治世にそれが否定された。それ以後は画然たる境界が定められずして、ナポレオン三世の治世にアマパは中立状態におかれた。しかしアマパ現地の争乱は依然としてつづき、その険悪な情勢はフランスとブラジル政府の速やかな処決を必要とした。フランスとブラジルにはアマパ係争地の立会裁判をスイス政府に委任した

それがスイス政府によって正式に受理されたのは一八九七年であった。同年六月にブラジル政府の任命でアマパ領地問題調査委員会が設けられた。そこでまたしてもリオ・ブランコにアマパ領地問題折衝の重責が負わされることになった。

一八九八年一月、リオ・ブランコはパリを陣営として縦横の活躍を開始した。先きにミツソンエス問題で実地に経験を積んだ彼は一糸乱れない計画のもとに、アマパ領地に関する一切の書類と地図が集められた。それに動員された各々の専門家は七〇名に達した。このようにしてパリの本営に集められたアマパの史的記録と文書資料はブルッセルで印刷された。それにリオ・ブランコ自身のメモリアルを添えてスイス政府に提出した。

スイス政府の厳密な審査の結果、ブラジル政府の提議を正当とする裁決が下された。これによってブラジル領となったアマパの面積は二六万平方キロで、アラグワリー川北方、オイヤポック川までの地域である。このスイス政府の裁決を見たのは一九〇〇年一月一日という、一九世紀の最後にリオ・ブランコはブラジルのために輝やかな勝利を得た。

リヴァプールの領事以来二六年の在外生活を送ったり

オ・ブランコは第五代大統領ロドリゲス・アルベスの要請で外相に就任した。それは一九〇二年十二月一日で、アマパ領地問題の解決一年後である。

リオ・ブランコの外相就任によってイタマラチーの空気が一新された観があった。

イタマラチー宮は一八七六年にイタマラチー子爵邸として造られ、後にブラジル政府によって買収されて外務省となった。

リオ・ブランコの外相就任以後は、事務的能率をあげるには省内の雰囲気を刷新する要ありとて、予算の許すかぎりイタマラチー宮の内部を改装した。

イタマラチーの巨人といわれたリオ・ブランコは飽くなき精力をもってアクレ領地の調査に当った。それはミッソンスエスやアマパ問題と同様に超人間的な努力と根気を要するものであった。当時のイタマラチーにはアクレに関する資料、文書、地図、参老文献が少なく、彼はミッソンスエスとアマパ問題以上の苦心をした。

アクレはボリビアとペルー国境にまたがっているので、その境界確定には両国との交渉を必要としたが、はじめにリオ・ブランコはボリビア政府との折衝に当った。

一七七七年のサント・イルデフォンソ会議で結ばれたスペインとポルトガルの条約ではアクレ領地の大部分はボ

リビアに属すべきだが、その境界が判然とせぬ上に、多くのブラジル人が良質の天然ゴムの採集にこの地帯に侵入したために闘争がおこった。

アクレがブラジル人に注目されたのは一九世紀中期で、奥アマゾンにつづく天然ゴムの野生林地帯が大きな魅力となった。アクレに侵入したのは主にセアラ人で、ガイオラという河舟でアマゾンを遡航してアクレに達したのである。それ以前のアクレはほとんど人跡未踏の地で、誰の所有にも属さない土地であった。

記録によれば最初にアクレに入ったのはポルトガル人のジョアン・ロドリゲス・カメタで一八四七年である。次いでブラジル人のセラフィン・サルガードが一八五七年にアクレを探検した。一八六〇年にはバンデーランテの後裔のマヌエル・ウルバーノがアクレの大探検をして世評に上った。

ブラジルとボリビアとの間に成立した国境協定は一八六七年で、当時ブラジルはパラグワイと交戦状態にあった。それはアヤクチョ協定といわれ、ブラジルの全権公使はロペス・ネット、ボリビア政府代表はマリアノ・ムニョスであった。同協定によるブラジルとボリビアの境界は南緯10・20度のマデーラ川に発して斜線を描き、

南緯7度のジャブリ川に達するとある。同時に両国間に親善条約が成立し、ボリビアへの物資輸送のためにアマゾン川の自由行航も認められた。かくする間に多くのブラジル人がゴム採取のためにアクレに侵入してボリビア政府を刺激した。

アクレ問題が表面化したのは一八九五年でブラジルとボリビア政府の合議による、アクレ領地境界画定委員会が発足し、現地調査がはじめられてからである。当時奥アマゾンとアクレのブラジル人の間で様々の憶測がされて混乱を生じたために現地調査は一時中絶された。

一八九九年にリオ駐在のボリビア政府代表のホセ・パラペンはアクレのポルト・アロンソに税関設置を提議した。それは明かにブラジル人のアクレ侵入防止の手段と見られ、アクレ在住のブラジル人は反乱をおこしてアクレの独立を宣言した。ブラジル人はあくまでもアクレの土地を固守して一歩も退かず、そのためには戦火も辞せずという勢いであった。ブラジル政府はしばし傍観の態度をとった。このようにブラジルとボリビアの国境は不明瞭のまま二年が過ぎて一九〇一年となった。その時に重大問題となったのはボリビア政府がアクレのブラジル人駆逐策として、アメリカの一有力会社とアクレの貸与契約を結んだことである。一九〇一年六月にボリビアン

シンジケートが組織され、五〇〇万ポンドの資本金をもつてアクレのゴム事業に着手することになった。同時にアクレ産のゴムの二五パーセントはユナイテッド・ステートス・ラバー・カンパニーに優先的に販売する契約も調印された。そのポリビアンシンジケートの首脳部の一人にセオドル・ルーズベルと大統領の子息がいた。

ポリビア政府の計画に対してブラジル政府は強硬抗議をし、一八九六年の親善通商協定とそれに附随するアマゾンの自由航行権を破棄する旨を通告した。この情報に接したブラジル人はアクレ南部に侵入してポルト・アロンソを占領する騒ぎを生じた。こうした騒乱の最中にリオ・ブランコが外相に就任した。

リオ・ブランコはラパスのブラジル公使を介し、ポリビア政府に対して、一八六七年度の境界協定に基づいて直ちにポリビアとブラジル国境画定を再検討されたし、との電報を發した。

リオ・ブランコは一七七七年のサント・イルデフォンソ会議によるアクレの境界協定の記録を点検して感じたのは、マデーラ川とジャブリ川の間地域をアクレとする、というすこぶる不明瞭なところに双方の見解の差と誤算の根源のあることであつた。

リオ・ブランコのポリビア政府にあてた電報は爆弾的

の通告であった。

リオ・ブランコの手もとに集められたアクレ領地に関する旧外交記録によれば、ブラジルとボリビアの境界線は南緯10・20度であるべきで、これによつてブラジルに属すべき面積は一四二、九〇〇平方キロで、ポルトガル、ベルギー、オランダの本土を併合したものに相当する。

リオ・ブランコの希うところは武力を行使せず、厳正な調査に基づいて平和のうちにボリビア政府との折衝を進めることであつた。この旨を彼は数回にわたつてボリビアのブラジル公使に打電した。しかしアクレ現地での騒乱は依然としてつづくところから、その鎮圧のためにリオ・ブランコはやむなく軍部に命じて派兵した。それはボリビア政府との交戦ではなく、アクレ現地の秩序維持のためであつた。リオ・ブラシコの誠意を理解したボリビア政府は、アメリカの企業団とのアクレ貸与契約を破棄し、ラパスでブラジルとの外交会議を開くことに同意した。この外交会議はリオ・ブランコの提案によつて、一九〇三年一〇月二一日に決定された。それにひきつづいて開催されたのが史上名高い一九〇三年一月一七日のペトロポリス会議である。

ペトロポリス会議がミツソンエスやアマパ領地問題と

異なる点は、ブラジルとボリビア政府双方が好意的に交換条件を提出したことである。もともとアクレ領地問題はボリビア政府の好意的譲歩がなければ円満な解決は望まれなかった。

アクレ問題の解決はリオ・ブランコ外交の徹底的勝利を意味するもので、それには彼の人格が大きく影響している。

ペトロポリス会議の結果、正式にブラジル領となったアクレの面積は十九万一千平方キロで、このうち四万八千平方キロはボリビア政府が好意的にブラジルへ割譲したものである。これに対しブラジル政府は二〇〇万ポンドを賠償形式で支払い、またマデーラ上流、ボリビア国境にマデーラ・マモレ鉄道の建設が約束された。ほかにブラジルの首都とボリビアの首都をつなぐノロエステ鉄道の建設計画も立てられた。マデーラ・マモレ鉄道はポルト・ヴェーリョを起点とし、グワジャラ・ミリンを終点とする全長三八〇キロで、その建設工事には多大の犠牲が払われ、”悪魔の鉄路”といわれた。

アクレ領地問題を円満に解決したリオ・ブランコは、ひきつづいて英領ギヤナとペルー国境問題の調査に当り、彼の不眠不休の努力によって解決された。

英領ギヤナの境界問題の交渉には駐英公使ジョアキン・ナブコをそれに当らせ、イタリア国王の立会を得て解決された。

更にアルト・ペルーの境界問題だが、これは一七七七年のサント・イルデフォンソ会議以来の領土係争で、未解決のまま六〇余年をすぎ、一八四一年のブラジルとペルーの外交会議でそれが討議された。しかし同会議では肝心の境界問題は解決されずして、両国政府に友好通商協定が成立し、ペルーに対してはアマゾンの自由航行権が認められた。

その前一八五三年にペルー側から国境問題についてブラジル政府への提議があつた。ペルー政府はサント・イルデフォンソ条約に基づいてペルーとブラジル国境の再検分を主張した。リオ・ブランコはサント・イルデフォンソ条約の旧記録を調べるために想像外の苦心と時間を費やした。ペルー国境もアクレ領地問題と同じように一八九七年にジュルアミリン地帯でブラジル人とペルー人との闘争があつた。一九〇二年にペルー政府から派遣された奥アマゾン調査員カルロス・ヴァスケス・クワドロが、ジュルア川の右岸地帯をペルー政府の名において占有し、ブラジル人と衝突した。

リオ・ブランコは外相就任三年を迎え、一九〇四年に

ペルー国境問題と対決することになった。同年七月一二日にリオ・ブランコの提案により、アルト・ペルーの係争地は後日の再調査まで、一時的にペルー・ブラジル両国の統治中立地域となった。

リオ・ブランコはイタマラチーにあつて、ペルー国境問題のために猛烈な活動を開始し現地調査に軍属土木技師エウクリーデス・ダ・クーニャを派遣した。このペルー国境調査団はブラジル人とペルー人で編成された。

数年にわたるリオ・ブランコの厳正綿密な調査とエウクリーデス・ダ・クーニャの現地報告が功を奏し、一九〇九年九月八日の領土会議で、ペルーとブラジルの国境が確然となり、二十五万一千平方キロがブラジル領に認められた。

これまでの記述では、リオ・ブランコは専ら隣接国との境界問題に没頭したかに思われるが、その他あらゆる外交問題を処理した。一九〇五年にはワシントンのブラジル公使館を大使館に昇格させ、初代大使としてジョアキン・ナブコを赴任させた。

イタマラチーにおいてのリオ・ブランコは精力絶倫、巨大な卓上には常に書類や地図が山と積まれていた。常時必要な資料や文献を一カ所に集めておけば、省内を探

し回すこともなく能率的というのが彼の考え方であった（リオ・ブランコはミツソンエス領地問題以来の膨大な調査記録を印刷すべく、原稿をインプレッサ・ナショナル（国営印刷局）へ回す直前、同印刷局が火災で全焼した。それは彼が稀に見る幸運児だったことを物語っている。いま一つは彼が一八八四年にロシアを訪れた時、何かしら予感があったらしく、急いでニコライ二世の謁見を得たが、その後間もなく革命となり、ロマノフ王家は絶えたことが挙げられる。

リオ・ブランコの外相任期の大きなできごとでは一九〇五年八月にリオで開催された、ラテンアメリカ科学会議がある。当時ブラジル大使としてワシントンに駐在したジョアキン・ナブコが同会議の議長として光彩を添えた。同年一二月一日、ローマ教皇ピオ一〇世によってブラジルのリオに枢機府が設けられたこともリオ・ブランコ外交の成功である。

一九〇六年七月、リオにおいて第三回汎米合議が催され、その準備にリオ・ブランコは忙殺された。彼はイタマラチー宮内部の美装に意を用い、玄関のガレリーにブラジル歴代の名外交官の胸像を配置した。

リオ・ブランコは風采堂々として巨漢を思わせるところがあったが、事務的にはあらゆる面に留意する緻密さ

があつた。

一九〇九年、ニーロ・ペサーニヤの大統領任期にはウルグワイとの協約によつて、国境のジャグワロンの領地を好意的にウルグワイに割譲した。

進んで一九一〇年、エルメス・ダ・フォンセツカ元帥の大統領就任となり、その組閣に當つてリオ・ブランコは三たび外相に留任した。

一九一二年には政情が極度に悪化し、次期大統領選挙をめぐつて政界の勢力者ピニエーロ・マツシヤドが暗躍當時リオ・ブランコは自身の健康すぐれぬ理由で辞表を提出したが受理されなかつた。しかし彼の病状は進み、一九一二年二月五日に外務省の一室で永眠した。それはまさに栄光の死であつた。

第一四章 第二次共和制 (一九三〇～一九四五)

三頭軍事評議会

(自一九三〇年一月二四日 至一九三〇年一月三日)

ワシントン・ルイスから政権をうけ継いだのはアウグスト・タツソ・フラゴーズ大将、メンナ・バレット大船とイザイアス・ノローニヤ提督の三頭軍事評議会である。それは三頭執政政府ともいわれ、一九三〇年一月三日にジェツリオ・ヴァルガスに政権を渡し、臨時政府を設けてヴァルガスを政府元首とした。それ以来一九四五年までが第二次共和制であり、次の三期に分けられる。

一九三〇～三四ヴァルガスを元首とする臨時政府

一九三四～三七ヴァルガス立憲政府

一九三七～四五エスタード・ノーボ (新国家体制)

臨時政府元首ジエツリオ・ドルネレス・ヴァルガス

(自一九三〇年一月三日 至一九三四年七月一七日)

ヴァルガスは臨時政府の閣僚にアフラニオ・メーロ・フランコ(外相)、レーテ・カストロ大将(陸相)、イザイアス・ノローニャ(海相)、オスワルド・アラニーヤ(法相)、ジョゼ・マリア・ウイタケール(蔵相)を起用した。

ヴァルガスは一八九一年憲法を無効とし、上院、下院、州議會を解散して彼の腹心の人物を各州の執政官に任命した。特にヴァルガス革命を支持した少壮將校を執政官に登用した。サンパウロの執政官にはジョアン・アルベルト・リンス・デ・バツロス大尉が任命された。ジョアン・アルベルトは行政の才能に欠け、失策をして辞任した。その後任の第二代執政官ラウド・フェレーラ・カマルゴと第三代執政官マヌエル・ラベロも他州出身の軍人だったことがサンパウロ人にとって多大の屈辱であった。そこで他州出身の軍人ならないサンパウロ人を執政官に任命せよの叫びを挙げることになる。

ヴァルガスは後にサンパウロ執政官にサンパウロ人で老齡の元外交官ペードロ・デ・トレドを任命したが、時既に後く、護憲革命の氣勢が高まりつつあった。

ヴァルガスは旧政権の根を絶やすべく、それらの主要人物を政治追放したが、或る者はヨーロッパに亡命した。特に政治追放の対照となったのがサンパウロ共和党の代表人物である。

ヴァルガスは教育衛生省を設けてミナス人のフランシスコ・カンポを大臣に、また労働商工省を設けて彼の同郷人のリンドルフオ・コロールを大臣に任命した。

財政面でヴァルガス臨時政府が最も苦慮したのはコーヒー恐慌の対策である。ワシントン・ルイス政府以来コーヒー市価は暴落をつづけ、輸出は減少するのみであった。政府買い付けのコーヒー滞貨は二〇〇〇万俵に達し、倉庫に入れきれないものは野外に積まれた。

コーヒー政策の行詰りが主な原因で、ウイタケールは蔵相を辞任し、オスワルド・アラニーヤが代った。

オスワルド・アラニーヤはコーヒー滞貨の焼却を案出し、コーヒー生産地サンパウロの要所に焼却場を設けた。当時はコーヒーを焼く焰が夜の空に反映して凄絶な光景を呈していた。

ヴァルガスは政権を掌握するに当って、速急に憲法を制定して議会政治を布くことを公約したが、それが果たされずに一年余がすぎた。しかもヴァルガス臨時政府は多分に独裁の性格を帯びるものであった。

サンパウロ人が挙ってヴァルガスに憲法を強制して革命をおこしたのが一九三二年七月九日である。それは護憲革命または三二年革命といわれる。革命軍総司令官は一九二四年革命と同じくイジドロ・ジーアス・ローペス将軍だったが、ベルトルド・クリンゲル大将と代った。三二年革命にはミナスとリオ・グランデ・ド・スールの参加が予定されていたが、ほとんどサンパウロのみの革命戦となった。

護憲革命にサンパウロ人は老若男女、職業階級の別なく一丸となって闘い、多くの犠牲を出した。壮丁から白髪の人までが銃を担え、女性は結婚指環や宝石を州政府に献納した。

当時の革命戦士の過半は故人となったが、残存の古兵によつて“三二年老兵会”が組織された。その老兵会にはM M D Cの略記号がつけられているが、それには次のような由来がある。

一九三二年七月九日のサンパウロの蜂起に先立ち、五月二三日にサンパウロで市民集会が開かれた。会場はバロン・デ・イタペチニンガ街とレプブリカ広場の角であった。

当日はヴァルガス政府の蔵相オスワルド・アラニーヤ

とサンパウロ前進派の代表者との会談がされることになっていった。

サンパウロはヴァルガス政権からうけつつあった屈辱に対して強硬抗議をするべく、論客イブライン・ノブレをはじめシルビオ・カンポス、セザリオ・コインブラなどが熱烈な街頭演説をした。その野外会場に集合した群衆がヴァルガス政府の軍督隊の機関銃の掃射を浴びて四人の学生が死んだ。それはエウクリーデス・ブエノ・ミラガイア（二一才）、マリオ・マルチンス・デ・アルメーダ（二〇才）、ドラウジオ・マルコンデス・デ・ソーザ（一四才）、アントニオ・アメリコ・デ・カマルゴ（三二才）であった。彼ら四人の姓名の頭文字M M D Cが三二年革命老兵会の名称となったのである。この四人はサンパウロのイビラプエラ公園の護憲革命戦没者霊廟に葬られている。

イビラプエラ公園の護憲革命記念塔は高さ七七メートルで四角形をなし、四面それぞれにサンパウロの歴史が刻まれ、一六の浮彫りで象徴されている。塔の全面積は八〇〇平方メートル、イタリア大理石のトラヴェルチーノで覆われている。この記念塔の下部に設けられている霊廟は正面一一〇メートル、奥行き八一メートルで、三〇〇人が葬られているが三〇〇〇人を葬り得る容積があ

る。ここに詩人ギレルメ・デ・アルメーダと新聞人ジュリオ・デ・メスキータ・フライリヨが葬られている。

一九三二年五月二三日のサンパウロ市民集合は七月九日の護憲革命の前奏曲であり、サンパウロの中心とイビラプエラ公園をつなぐ大通り（アペニダ・ビンテトレス・デ・マイオ）の名称となっている。

護憲革命にサンパウロは武力では敗れたがヴァルガスは一九三三年に憲法制定審議会を召集し、一九三四年六月一六日に憲法が發布されたのでサンパウロがおこした革命の目的は究極において達成された。

憲法制定審議会では移民制限案が打出され二歩制限法が可決された。それは過去五〇年にブラジルに導入された各国の移民総数の二パーセントを年間に割当てるものであった。

憲法が發布された翌日、六月一七日に議会で大統領選挙がおこなわれ、ボルジェス・デ・メデーロスの五九票に対する一七五票でヴァルガスが当選し、同日就任式を挙げた。

第十一期大統領ジェッリオ・ヴァルガス立憲政府

(自一九三四年六月一七日 至一九三七年十一月一日)

一九三四年憲法は多くの面で革新を見られたが、特に選挙法が改正せられて女性の投票権の認められたことが挙げられる。また共和制樹立以来のプレシデンテ・ド・エスタード（州統領）をゴヴェルナドール・ド・エスタード（州知事）に改め、各州の自治制を原則としながらも中央集権の強化がうかがわれた。

更に一九三四年憲法では政党と政治結社の結成が容認されたために共産主義者のアリアンサ・ナシヨナル・リベルタドール（国家解放同盟）や全体主義者のアソン・インデグラリスタ・ブラジレーラ（ブラジル全体主義行動）などが猛烈な活動を開始した。アリアンサ・ナシヨナル・リベルタドールの党首はルイス・カルロス・プレステスで、アソン・インデグラリスタ・ブラジレーラの主宰者はプリニオ・サルガードであった。

それらの極右極左の政治結社と他の政党との相克や競争が熾烈をきわめ、ヴァルガス立憲政府の政局と社会は激動混乱した。

一九三五年一月にはナタルとレシフェに共産主義者

の反乱がおこり、またリオではプライア・ベルメーリヤの第三歩兵連隊の共産分子が反乱をおこしたが直ちに制圧された。この一九三五年の赤化分子の反乱討伐と共産主義者の弾圧にはヴァルガス政府の陸軍大臣ジョアン・ゴーマス・リベロ大將は強硬処置をとった。

ヴァルガスは反乱の根源であるアリアンサ・リベルタドーラ・ナシヨナルに解散を命じ党首ルイス・カルロス・プレステスを逮捕した。このような事態で一つアソン・インテグラリスタ・ブラジレーラが優位におかれた。

新憲法の規制によればヴァルガスの大統領任期は四年だから一九三八年六月に終了することになる。そこで二人の有力な次期大統領候補が現われた。それはパライバ州統領ジョアン・ペッソアの盟友だったジョゼ・アメリカ・デ・アルメーダであり、ミナス州知事ベネジット・ヴァラダーレスをはじめ各州の強い支持があつた。他の一人はサンパウロ州知事アルマンド・デ・サーレス・オリベラでこれまた大統領候補としての確固たる地盤を有し、個人的にはヴァルガスと親交があつた。

一九三七年九月、新聞とラジオは一斉に共和主義者の恐るべき反乱陰謀を報道した。それはコーエン文書事件ともいわれ、共産党の地下運動の目論書がふとしたことから軍部の手に渡つたのである。

ヴァルガスは社会動揺の原因は一九三四年憲法にあるところから憲法改正を考慮しつつあることを洩らした。同時に社会の秩序維持の非常手段として軍事令を布き、次いで抜き打ち的にクーデターを行使して議会を閉鎖し、エスタード・ノーボ（新国家体制）を宣言した。それは一九三七年十一月一〇日で、それから一九四五年一〇月二九日までがヴァルガス独裁である。

エスタード・ノーボ（新国家体制）

（自一九三七年十一月一〇日 至一九四五年一〇月二九日）

ヴァルガスはエスタード・ノーボの樹立と同時に一九三四年憲法を廃し、上院と下院、各州の議会を閉鎖して執政官を任命した。

エスタード・ノーボはその名のとおり、ブラジルの新時代を画したといつてよく、ヴァルガスは群雄割拠の地方分権を抑えて中央集権を固め、近代化を推進した。

エスタード・ノーボにおいてヴァルガスは国粹主義政策をとり、労働者保護のための労働法規を制定し、各地に労働裁判を設け、労働組合の設立を奨励した。最低賃銀制と社会福祉局が設けられ、すべての企業の使用人の

三分の二以上をブラジル人かブラジル国籍人に限定する発令もされた。

ヴァルガスは労働者の父といわれ、全国の労働階級から親しまれたのは終始一貫、労働者の保護政策をとったためである。

政党と政治結社の解散が命ぜられ、新しい政治団体の結成が禁じられた。

政治犯罪を審裁するための特別裁判所が設けられ、言論統制機関のDIP（デパルタメント・デ・インプレッサ）も設立された。

教育面では小学校の外国語による教育が禁止され、外国語の学校が閉鎖された。ほかに外国語の刊行物が発禁された。

一九三八年五月十一日、インテグラリスタは大統領公邸グワナバラ宮を襲撃したが、直ちに鎮圧され、党首プリニオ・サルガードは検挙された。

一九三七年から一九三九年にかけてはリオ・サンパウロ鉄道が電化され、アンシエタ国道、リオ・バイアとサンパウロ・クリチバ・ポルト・アレグレ道路が開設された。またリオ・サンパウロ国道の改良工事がおこなわれた。

一九三九年に第二次世界大戦が勃発し、当時ブラジルは

絶対中立を表明した。

一九四一年二月、日本軍のハワイ真珠湾攻撃を機会にヴァルガス政府は汎米外交条約に基づいて米州連帯防衛を声明した。

開戦以来ブラジルは中立を堅持したが、ブラジル商船一九隻がドイツ潜水艦に撃沈されたために連合国側に加盟し、ドイツ、イタリア、日本の枢軸国と国交断絶し、参戦したのが一九四二年八月二二日である。

一九四四年七月にはマスカレーニヤス・デ・モラエス將軍を総司令官とする二万五〇〇〇人のヨーロッパ遠征軍がイタリア戦線に向い、モンテ・カステロ、モンテ・ゼ、カステルヌオボで連勝した。

第二次世界大戦のため工業原料の輸入杜絶に刺激されて国内工業が隆盛となり、特にサンパウロはラテンアメリカ第一の工業都市に発展した。

一九四二年にはミナスの鉄鉱開発のためにヴァーレ・ド・リオ・ドーセ会社が設立された。同社の前身はイギリス系のイタビラ・アイロン・オーア会社である。

一九四五年にはアメリカの資本と技術参加を得てヴォルタ・レドンダの国立製鉄所が設立された。

ヨーロッパ戦線での連合軍の勝利が決定的となりつつある一九四五年三月、ヴァルガスは議会再開と新憲法制

定の意向を発表した。

またヴァルガスは政党の結成を承認したためにUDN（国家民主同盟）、PSD（社会民主党）、PTB（ブラジル労働党）、PST（社会労働党）、PDC（キリスト教民主党）、PRP（進歩共和党）とアデマール・デ・バ羅斯を中心とするPCP（社会進歩党）が結成された。ほかに特赦をうけて釈放された共産主義者のルイス・カルロス・プレステスはPCB（ブラジル共産党）を組織した。

次期選挙にはヴァルガス政府の陸軍大臣エウリコ・ガスパール・ズトラ將軍がPSDから、エドアルド・ゴメス空軍少將がUDNから立候補した。

ヴァルガスは三選を画してケレミスタ運動を展開した。それは“ヴァルガスを欲する”というスローガンを掲げたヴァルガス支持運動で、主導者がヴァルガスの実弟ベインジャミン・ヴァルガス（リオ警視總監）であった。

ヴァルガスは彼の手飼いの労働党と、共産党のルイス・カルロス・プレステスとの接近をはかり、その支持を期待したようである。そのようなヴァルガスの行動に疑惑を抱いた軍首脳部はヴァルガスに辞任を迫った。

ヴァルガスは一〇月一九日に下野し、八年におよんだ彼の独裁が終末する。

ヴァルガスから政権をうけ継いだのは最高裁判所総裁
ジョゼ・リニャールレスである。

臨時大統領ジョゼ・リニャールレス

(自一九四五年一〇月二十九日 至一九四六年一月三
一日)

下野したヴァルガスは彼の郷土リオ・グランデ・ド・
スールのサン・ボルジャに去り、エスタンシア(牧場)の
生活に入るが、労働党を動かして、次期選挙候補のエウ
リコ・ガスパール・ズトラを支持した。

選挙は一九四五年一二月二日におこなわれエドアル
ド・ゴームスの二〇〇万票に対する三〇〇万票でガス
パール・ズトラが当選した。

この選挙でヴァルガスは上院議員に当選したが、彼は
ほとんど国会に出席することがなかった。

第三次共和制（一九四六）

第一二期大統領エウリコ・ガスパール・ズトラ

（自一九四六年一月三十一日 至一九五一年一月三十一日）

ガスパール・ズトラは一九四六年一月三十一日に就任し、二月二日に議会を再開した。

同年九月一日に新憲法が發布されたが、内容は一九三四年憲法と大差はなく、大統領任期が従来の四年から五年となった。

ズトラ政権の五年間は政変も内乱もなく、いわば平穩無事であった。

ズトラ政府はサンパウロのクバトンとバイアのマタリペに国立石油精製所を設け、サン・フランシスコ電力社を設立してパウロ・アフォンソ発電所を設けた。

リオにマラカナン・サッカー場が設けられ、リオ・サンパウロ国道が新たに開設されて『ズトラ国道』の名称がつけられた。

第一三期大統領ジエツリオ・ヴァルガス

(自一九五一年一月三十一日 至一九五四年八月二十四日)

ヴァルガスはブラジル労働党と社会民主党の支持を受け、一九五〇年一〇月の選挙で史上最高の三八四万九〇〇〇票で当選した。次位はエドアルド・ゴームスの二三四万票、三位はクリスチアノ・マツシヤドの一六〇万票であった。当時のヴァルガスは六八才であった。

この選挙でヴァルガスは返り咲いたわけだが、彼の大統領就任のころからインフレが著しく昂進し、労働者は生活苦のため賃金値上げを要求してストライキをおこした。その背後には共産勢力があり、ヴァルガス政権は共産党の支持をうけているからその弾圧は不可能だとの説が流布された。また政府要人の汚職が相ついで摘発された。

そのような政治社会情勢は軍の中堅を刺激した。以前にヴァルガスを支持した陸軍将校はヴァルガスに不信を抱くようになった。

一九五四年にヴァルガス政権の労働大臣ジョアン・ゴラールは労働賃金の倍増要を出した。そのためにジョアン・ゴラールは策謀政治家であるとして陸軍将校から非難の声がおこった。

ヴァルガスはゴラールを罷免したが、そのようなヴァルガス政権の内紛を取上げて執拗に批判し、弾劾したのが新聞人カルロス・ラセルダである。

カルロス・ラセルダの主宰する新聞『ア・トリブーナ・ダ・インプレッサ』のコラムにヴァルガス攻撃の載らないことがなかった。それに加えて野党のUDZ（国家民主同盟）は軍の一部と組んでヴァルガスを窮地に追いこむ策動をした。このようにして一九五四年八月五日夜、トネレーロ事件を生じた。

カルロス・ラセルダが或る集会に出席しての帰宅に、空軍少佐ルーベンス・フロレンチノ・ヴァスと自動車に同乗し、ルア・トネレーロの自宅に着いた時に暴漢に狙撃された。カルロス・ラセルダは軽傷だったが、フロレンチノ・ヴァス少佐は死亡した。

暗殺されたのが空軍将校であるところから空軍特別捜査部の捜索の結果、犯人は大統領官邸カテテ宮のヴァルガスの護身隊長グレゴリオであることが判明した。グレゴリオはヴァルガスの郷土サン・ボルジャ以来の部下だったが、ヴァルガスに忠実のあまり二名の隊員に命じてラセルダを襲わせたのである。それが当のラセルダではなく同伴のフロレンチノ・ヴァスを殺害した。

ことの重大性から陸海空三軍の会議が開かれ、また閣

議も催されて重い空気が流れた。

三軍会議の結果、ヴァルガスに辞任を勧告することになった。

八月二四日早朝、ヴァルガスはカテテ宮の寝室で自決した。彼の遺書には『……自分がブラジル国民に与えるのはわが血液のみである……』とあった。

ヴァルガスの大統領任期終了は一九五六年一月三一日だが、彼はそれ以前の一九五四年八月二四日に自らの生命を絶った。つまりヴァルガスは辞任よりは死を選んだのである。

ジェツリオ・ドルネレス・ヴァルガス（一八八三

～一九五四）

一八八三年四月一九日、リオ・グランデ・ド・スールのサン・ボルジャに誕生。

父マヌエル・デ・ナッシメント・ヴァルガスはカウジールヨの権勢者でエスタンセーロ（牧畜家）であった。

ヴァルガスは軍人を志望してリオ・パルドの陸軍兵学校に入学したが、中退してポルト・アレグレの法科大学に学び、一九〇七年に卒業、ポルト・アレグレの検事となった。

一九一三年に州議員に当選、一九二三年には連邦議員として中央に進出、一九二六年にワシントン・ルイス政府の蔵相となった。



ジェツリオ・ヴァルガス

蔵相は一年で辞任して郷土リオ・グランデ・ド・スールの州統領ボルジエス・デ・メデーロスの後継となり、一九二八年一月二五日に就任した。

一九三〇年に革命をおこしてワシントン・ルイス政府を打倒し、政権の座について一五年、多くの政治改革をなし、中央集権を固めた。またブラジルの近代化を推進した。

一九五〇年の選挙では史上最高の三八四万九〇〇〇票で当選、四度目の大統領就任式を挙げた。しかしその大統領就任が彼の命取りとなった。政局の行詰りから、軍部の圧力をうけ、一九五四年八月二四日、カテテ宮で自決した。

(自一九五四年八月二四日 至一九五五年十一月九日)

ヴァルガスの自決のために副大統領のジョアン・カツフェ・ファイリヨが大統領となった。

カツフェ・ファイリヨはリオ・グランデ・ド・ノルテのナタル出身の新聞人、政治家で一九三丘く三七と一九四六く五〇の二度連邦下院議員となり、社会進歩党から立候補して一九五〇年の選挙に副大統領に当選した。篤実な彼の人柄して短期間ながらも政治の混乱に善処し、健康のために一九五五年三月九日に辞任した。

カルロス・ルス (連邦下院議長)

(自一九五五年十一月九日 至一九五五年十一月二日)

ネレウ・ラームス (連邦上院議長)

(自一九五五年十一月二日 至一九五六年一月三一日)

一九五五在十月の選挙には社会民主党とブラジル労働

党のジュセリノ・クビチェツクが大勝した。次位が社会進歩党のアデマール・デ・バツロス、三位は国家民主同盟のジュアレス・タボラ將軍であつた。

第一四期大統領ジュセリノ・クビチェツク

(自一九五六年一月三一日 至一九六一年一月三一日)

ジュセリノ・クビチェツクの大統領就任を阻止せんとする一部空軍將校の動きがあつたが、それはロット陸軍大臣とジニス第一軍団長によつて防圧された。

クビチェツクは就任と同時に”五〇年を五年で”のスローガンを掲げて壮大な開発計画を公表した。外資を積極的に導入して自動車工業をはじめ製鉄、化学工業、電源開発、幹線道路の建設と取組み、猛烈な活動をつづけた。特に一七八九年のミナス革命以来の懸案だったブラジルの首都移転を実現して世界の視聴を集めた。それは世紀の偉業といふべきブラジリアの建設である。

クビチェツクは新首都のブラジリアの建設設計を、都市設計家ルシオ・コスタに委ね、公供建築は建築設計家オスカー・ニーマイアーに一任した。

さなきだに財政難のブラジル政府はブラジリアの建設

のために、赤字財政はさらに膨張し、異常のインフレを誘発して国民は非常な生活難に苦しむことになった。また急速な工業化は貧富の格差をより大きくし、農村人口の都市集中をうながしたことも否めない。

一九六〇年一〇月の選挙ではジャニオ・クワドロスが独走の形で当選した。

ジュセリノ・クビチェツク（一九〇二～一九七六）

ジュセリノ・クビチェツクは一九〇二年九月一二日にミナスのジアマンチナに生れた。父はジョン・セザール・デ・オリベiraで母ジュリア・クビチェツクは小学校の教師であった。

クビチェツクの姓からしてスラブ系が想像されるが、ブラジルのクビチェツク家は一八三〇年に旧ボヘミア（現在のチェコスロバキアで、オーストリー・ハンガリーの旧属領）からブラジルに移住したジャン・ノポムカヤ・クビチェツクに発している。ジャン・クビチェツクはジュセリノの母方の曾父に当る。後に二代にわたってポルトガル人とイギリス人の血が混入されて現在のクビチェツク家となった。したがって厳正にはジュセリノはチェコ・ポルトガル・イギリス系である。

ジュセリノは三才で父に死別し、母によって養育された。母ジュリアはジュセリノの勉学のために貧しい家計の中から多大の犠牲を払った。ジュセリノの不屈魂は母から受けているといえる。

彼は郷里の中学を終え、ベロ・オリゾンテに出て中央郵便局の電信技手となったのが一九二一年、一九才であつた。翌年ミナス医科大学に入学して一九二七年に卒業、一九三〇年には医学研修生としてベルリンに赴き、ミナスに帰っては憲兵隊の軍医となった。

一九三三年、ベネジット・バラダーレスがミナスの執政官に任命され、その官房長になったのがクビチエックの政界進出の動機をなした。

一九三四年から一九三七年に、クビチエックはミナス州議員の席を占めたが、エスタード・ノーボのために、彼は再び医師となった。

一九三九年、ベロ・オリゾンテの市長に任命され一九四五年までつづけた。その間、当時無名の建築設計家オスカー・ニーマイアーの天分を認め、パンプリーヤ地区の設計を一任した。

一九四六〜四九年、連邦下院議員となる。一九五〇年にミナス州知事に当選し、電力と運輸網強化に主力を傾倒した。彼の州知事就任当時のミナスの舗装道路は二〇〇

キロ、設備発電力は二〇万キロワットだったが、舗装路全長三〇〇〇キロ、設備発電力は六十万キロワットとなった。ミナス中央電力とフルナス電力会社の創立されたのも彼の州知事任期である。

クビチェツクの大統領在任中は北東伯開発庁を設け、またアメリカの大統領ジョン・ケネディを訪ねて、進歩のための同盟を結びラテンアメリカの社会経済文化の向上に尽した。

一九六四年の革命政府の樹立当時、クビチェツクは上院議員だったが、カステロ・ブランコ政権の政治追放でヨーロッパに去った。

クビチェツクの公人としての批判は人によってまちまちだが、彼の超人間的の努力、非凡の実践力と勇氣、科学的な聡明さは誰もが認めざるをえないであろう。

彼は人との対談に抽象論を避け、問題の核心にふれて即断即決するところがあつた。しかも彼は敵に寛大であつた。クビチェツクに初対面した人は誰も彼の手柄に魅され、この人のためなら一と肌を脱ぐ気特になつたようである。それなればこそ五年の大統領任期にあればどの偉業を完適したのであろう。

(自一九六一年一月三一日 至一九六一年八月二五日)

一九六〇年の大統領選挙にジャニオ・ダ・シルバ・クワド罗斯は空前の多数票で当選し一九六一年一月三一日に就任した。

副大統領にはジョアン・ゴラールが当選した。

大統領当選までのジャニオ・クワド罗斯は稀に見る幸運児で、一と筋に順調の道を進んでいる。

彼はサンパウロ州知事当時から官紀の肅正をスローガンに挙げ、断固それに挑んだ。それはジャニオ旋風といわれ、清掃を意味する帯が彼のトレード・マークとなった。

ジャニオ・クワド罗斯は大統領に就任するや、ブラジルを破産状態から救うべく、有能官吏を任用し、合理的な経済政策をとった。特にインフレ抑制に強硬手段を構じ、輸入小麦をはじめ新聞用紙、鉄道など政府の補助で赤字を補填していたものを断つたためにそれらが一齐に値上りして国民の不評を買った。

また彼はキューバと接近し、ブラジルを訪問したチェ・ゲバラに勲章を贈ったりした。彼にはそのような社会主義国家との外交の行き過ぎがあり、アメリカを刺

激した。それに加えて副大統領のジョアン・ゴラールが軍部に人気がなかった。

ジャニオがとった経済政策は正当ではあったが独断的のところがあつて、政局にひずみを生じた。そこで当時のグワナバラ州知事のカルロス・ラセルダが以前にヴアルガスを攻撃した同じ筆法でジャニオの施政を批判し且つ糾弾した。ラセルダはラジオによつてジャニオ・クワドロスにクーデターの陰謀のあることを告発した。それが議会に響き、険惑な雲行きとなつた。

八月二五日には例年のとおり“軍人の日”の記念式が挙げられ、それに臨席した直後ジャニオ・クワドロスは大統領は辞表を下院議長に提出した。

それには『内外の圧力のために自分は辞任する』とあつた。彼は大統領在任わずか七カ月で辞任して大きな疑問を残した。ジャニオの辞任は彼の打った芝居らしく民衆がひきとめることを期待したが、それが外れたともいえる。

当時、副大統領のジョアン・ゴラールは中国を訪問中だったので、下院議長パスコアル・ラニエリ・マジリが政権を継いだ。それは一九六一年八月二五日から九月八日までの一四日間である。

ジャニオ・クワドロス（一九一七〜）

ジャニオ・ダ・シルバ・クワドロスは一九一七年、マツト・グロツソ州カンポ・グランデ郡のフォルモーゾに生れた。

彼は少年期にサンパウロに出て中学を了え、一九三五年にサンパウロ法大に入学し、一九三九年に卒業した。その後はダンテ・アリギエリ高等学校の教師となった。一九五四年、サンパウロ州議員に当選、ついでサンパウロ市長の椅子を占めた。市長任期中にサンパウロ州知事に立候補して当選した。彼のサンパウロ州知事在任中の一九五八年六月にサンパウロで日本移民五〇年祭があり、三笠宮殿下夫妻が国賓としてサンパウロを公式訪問された。当時州知事公邸のカンポス・エリゼオス宮で盛大なレセプションが催された。

同年、ジャニオ・クワドロスはカルヴァーリョ・ピントとサンパウロ州知事を交代し、パラナ州から連邦議員に立候補して当選した。彼は連邦議員就任前に日本とソ連を訪問している。

一九六〇年の大統領選挙に当選したジャニオ・クワドロスは四三才であった。これまでの彼は稀に見る幸運児というか、すべてが順調そのものであった。

ジヤニオ・クワドロスはポルトガル語の文法学者であり、数冊の著書がある。

議会制大統領ジョアン・ベルシオール・マルケス・ゴラール

(自一九六一年九月八日 至一九六四年三月三一日)

ジョアン・ゴラールは急遽中国から帰って就任したが、彼の就任には軍部の反対があり、波瀾を生ずるかの様相を呈した。

大統領の権限を大幅に削減する議会制のもとにジョアン・ゴラールは政権についた

ジョアン・ゴラールははじめから左翼的の態度を示した。インフレは悪性化して一九六三年には前年度の八〇パーセントを越え、外国の投資は著しく減じた。労働者のストライキが頻発し、政治と社会は混乱動揺して不安きわまりない状態となった。

遂に一九六四年三月一九日、サンパウロに”家庭と自由を守るため神とともに歩む”のデモ行進がおこり、数万の市民がそれに参加した。三月三十一日、ミナス駐

屯中の第四軍団の司令官モーロン將軍がゴラールの政權追放を叫んでクーデターをおこし、それに各州の陸軍部隊が歩調を合わせた。

政權を追われたジョアン・ゴラールはリオからポルト・アレグレに向い、さらにウルグワイに亡命した。

臨時大統領には再び下院議長パスコアル・ラニエリ・マジリが就任した。

革命政權

革命政權はアット・インスチイシヨナル（軍政令）第一号を発令し、数十名の政治家と議員の政治追放或いは参政權の剥奪をした。その中には元大統領のジュセリノ・クビチエックとジャニオ・クアドロスほかゴラール政權の閣僚、革命反対派の上下院議員が多くふくまれていた。

一九六四年四月一五日、国会は新大統領にウンベルト・デ・アレンカール・カステロ・ブランコ元帥を選出した。一九六五年一〇月二七日には軍政令第二号が発令されて、政党の解散が命じられた。しかして政府党のARENA（国家革新党）と野党のMDB（ブラジル民主運動）が新たに結成された。

カステロブランコ政権はクビチェック政権以来のインフレ抑制の措置として国民総生産を減ずることなく財政緊縮の一見矛盾した政策をとった。それが次のコスタ・エ・シルバ政権において結果が現われ、ブラジルの奇跡を生んだ。

一九六六年一〇月の国会の大統領選挙ではカステロブランコ政府の陸相アルツール・ダ・コスタ・エ・シルバ元帥が選出され、一九六七年三月一五日に就任した。同年、憲法の大改正がされ、ブラジルの国体はレプブリカ・フェデラチーバ・ド・ブラジル（ブラジル連邦制共和国）となった。

コスタ・エ・シルバはカステロブランコ政権の経済政策を踏襲し、蔵相にサンパウロ大学の経済学教授デルフィン・ネットを登用し経済成長に顕著の成果を挙げた。反面、コスタ・エ・シルバ政権にはサンパウロの左翼学生や左翼のテロ活動を発し、陸軍の憲兵によって弾圧された。また国会でも反対派から政府攻撃がこり物情騒然たるうちに軍政令第五号が発令された。同時に言論機関の検閲がおこなわれた。

一九六九年八月三十一日、コスタ・エ・シルバ大統領は脳出血で倒れ、陸海空の三大臣が政務を代行した。同年一〇月、三軍の主脳部はエミリオ・ガラスタズー・メジシー

將軍を大統領に選出し、一〇月三〇日に同將軍は就任した。

メジシ―政権には第一次国家開発計画が発足し、電力、基幹産業の開発が積極的に進められた。また教育制を改革し、衛生と技術開発に著しい実績を挙げた。

しかし社会は動揺してギャング団の横行、財界の著名人や外交官の誘拐事件がおこった。

メジシ―大統領はアメリカを公式訪問した。

メジシ―政権は一九六九年一〇月三〇日から一九七四年三月一五日までである。

次期大統領にはエルネスト・ガイゼル將軍が選ばれ、一九七四年三月一五日に就任した。副大統領はアダルベルト・ペレーラ・ドス・サントス大将であった。

ガイゼルは蔵相にヴァルガス大学のエンリツケ・シモンゼン教授を迎え、オイルショックの難問題に善処した。

ガイゼル將軍はカステロブランコ政権の情報庁総裁、また五カ年ペトロブラス総裁の任にあった人である。

ガイゼル政権において第二次国家開発計画が公表され、パラグワイ政府との合弁によるイタイプ―発電所建設契約が調印された。

ガイゼル大統領はフランス、ドイツ、イギリス、日本を公式訪問している。

カステロ・ブランコ元帥（一九〇〇～一九六七）

ウンベルト・デ・アレンカール・カステロ・ブランコ元帥は一九〇〇年にセアラのメセジャナに誕生し、一九六七年に同じくセアラに航空事故で死去した。

カステロ・ブランコはリオのレアレンゴ陸軍兵学校卒業後にフランスの陸軍大学とアメリカのフォート・リヴエンウオース陸軍兵学校に学んだ。彼は中佐、大佐、旅団長、師団長、リオ陸軍兵学校長、参謀総長を歴任し、元帥府に入ると同時に予備となった。

第二次世界大戦には中佐としてヨーロッパ遠征に参加し、イタリア戦線に向った。

カステロ・ブランコは一九一八年に軍籍に入ってから、軍人としての最高の教育を受けている。一九六四年三月三十一日の軍部革命によるジョアン・ゴラールの政権追放で大統領に就任し、ここに軍事政権が樹立された。

カステロ・ブランコ政府は混乱と破綻状態にあったブラジル経済の調整に短期にしておどろくべき成果を挙げ、ブラジルの奇跡を生んだ。

ブラジルの軍人でカステロ・ブランコほど学問を積んだものは少なく、数冊の著書がある。

第十五章 産業文化概史

コーヒーの歴史

コーヒーが仏領ギアナからブラジルに移植されたのは一七二七年だが、プランテーションとして木格的に栽培されて一つの産業となったのは一九世紀に入ってからである。はじめパラで栽培されたコーヒーがバイアとエスピリト・サントを経てリオ・デ・ジャネイロ（県）に入れたのが一九世紀初頭で、当時は観賞用に植えられたにすぎない。

リオ県にコーヒー耕地が現われたのは第二次帝政の一八五〇年ごろである。その後コーヒー栽培区はパライバ平原に移り、さらにサンパウロのテーラ・ローシヤ地帯に延びてコーヒー黄金期を現出した。

コーヒーの歴史をたどるに、コーヒーの原産地アビシニア高原の東南にカツファという県があった。カツフェの語原はそれに発している。もともとコーヒーは野生のもので、日光が樹間からもれこむ森林のなかに散見された。その野生のコーヒー苗がアラビア人によってアビシニアからアラビアに持ちこまれ、紅海の東沿岸に植えられた。当時イスラム教徒はアルコールをふくむ飲物を禁じていたので、コーヒーを刺激剤として飲んだ。後にコーヒーはオランダに入れられ、イタリア、イギリス、フランスに普及したのが一七世紀末から一八世紀にかけてである。特にフランスではコーヒーは上層知識人の嗜好品となった。

アラビア人のほかにコーヒーを栽培したのはオランダ人で、一七世紀末にジャバ島で栽培されたのが最初である。つづいて一八世紀初期にフランス人がマダカスカルの島の東方のレウニオン島でコーヒーを栽培し、さらに新世界のマルチニークにコーヒーを移植した。それがコーヒーのブルボン種のおこりである。一七二〇年にはマルチニークから仏領ギヤナにコーヒーが移植された。

それから七年後の一七二七年にブラジルのグロン・パラの長官ジョアン・ダ・マイア・ガーマが、ブラジルと仏領ギヤナの境界調査のために、フランシスコ・デ・

メーロ・パリエタ伍長を現地に派遣した。パリエタ伍長は探検家で、アマゾン地域の地理的事情に精通していたからである。当時メーロ・パリエタは仏領ギヤナの首都カインを訪れ、フランス総督夫人の好意で約一千粒のコーヒー種子と五本の苗を与えられたと伝えられている。そのコーヒー種子はメーロ・パリエタによってパラーに植えられ、一七三二年にパラーから七アローバのコーヒーがポルトガル王室に送られた。

一七五〇年にはパラーから四八三〇アローバのコーヒーが生産されたと記録されている。それから一〇年がすぎ、リオの裁判所判事ジョアン・カステロ・ブランコがパラーからコーヒー苗を取入れ、庭園に植えた。それが次第にリオ市街の周辺に広がり、小規模のコーヒー園が形成されるようになった。そのころコルコヴァド山麓から現在の競馬場、サントス・ズモン広場にかけて約三万本のコーヒー樹が見られた。またカリオカ山の北方マタ・ポルコ（現在のエスタシオ広場）からチジュカの森にわたってフランス人がコーヒー園を設けて黒人奴隷を使った。このようにしてコーヒー栽培はジャカレ・パグワからペードラ・ブランカを経てサンタ・クルース盆地に拡大された。

リオ市街の北方にイニヤウマ耕地があつたが、そこからパーデレ・アントニオ・コート・ダ・フォンセツカがメンダーニヤ農園にコーヒー苗を移植した。数年後にはパーデレ・フォンセツカの農園から沢山のコーヒー苗がリオ州とミナス南部に移植され、あたかもコーヒー栽培基地の観があつた。当時アングラ・ドス・レースとパラチーにもコーヒーが栽培されたが、土地の傾斜度が強く、水蝕のために中止された。

リオ市の東部ではサン・ゴンサロ、イタボライ、マリカ、サクアレマ、アラルアマ、サン・ペードロ・デ・アルデア、カーボ・フリオにもコーヒー園が見られた。ソルミネンセ低地ではサン・ゴンサロがコーヒー栽培の中心をなし、そこからカンタ・ガロ郡に広がつたのが一八四〇年のころである。

ブラジルのコーヒー栽培の繁栄はヨーロッパの産業革命後の工業の発展に負うものである。多くの工業労働者が刺激飲物としてコーヒーを求めた時に、ブラジルのコーヒー輸出がはじまつたのである。ブラジル産コーヒーの消費国ではアメリカが第一だが、それについてはインドの茶との因果関係がある。イギリスのインド征服後は植民政策のために、インド産の茶の消費普及につと

め、アメリカのイギリス植民地に茶の消費を強制し、しかも高率の課税をした。

アメリカの一三のイギリス植民地は本国の商業政策に反抗し、独立戦争に発展した。アメリカでのコーヒー消費はいわばインドのお茶に代り、そのころにはじまったのである。

その後のアメリカのデモクラシーの風潮は全社会に普遍し、家庭と職場を向わずコーヒーが一般の飲物として歓迎されるようになった。ブラジルのコーヒーはその潮時に登場したわけである。

コーヒーは前述のパーテレ・フォンセツカの農園からリオ州の各地に移植されたが、北西部はサン・ジョアン・マルコス、ピライー、レゼンデが主であった。北部はトレス・リオス、ノーバ・フリブルゴ、カンタガロー、イタオカ、サン・フィデリスに拡大された。

パライバ平原にコーヒー栽培が盛となった要因はミナスの鉱業の衰微にある。

コーヒー耕主は所有地内に大邸宅を構え、生活は豪奢をきわめた。或る者は数十の客間を擁する宮殿のような邸宅を造営し、宴会を道楽とした。家具調度は贅をつくし、銀製品、クリスタル、カーペット、陶器一切はヨ

ロッパから輸入し、シャンパンや葡萄酒はフランスとポルトガルから取寄せた。

その代表人物がジョアキン・ジョゼ・デ・ソーザ・ブレヴィスであった。彼はリオ州のサン・ジョアン・マルコス、ピライー、リオ・クラークにコーヒー耕地を形成し、六〇〇〇の奴隷を所有していた。マンガラチーバには専用の埠頭があつて、毎年二五万アローバのコーヒーが積出され、また奴隷の荷揚げがされた。

貴族の大耕主には初代ノーバ・フリブルゴ男爵アントニオ・クレメンテ・ピントがある。彼は一八六五年に当時の巨額である八〇〇〇コントスを投じて、リオ市にパラシオ・ド・カテテを建設した。それが後に中央政府によつて買収されて歴代の大統領公邸となった。

ほかにも多くくの奴隷を所有することでも有名だったコーヒー耕主にヴァッソーラ郡とヴァレンサ郡のテーシエーラ・レーテ、オリベーラ・ローシヤ、ラセルダ・ウエルネックなどがある。

パライバ平原のコーヒー産業はブラジル経済の新機軸を生んだ。特に一八三〇年から一八四〇年の十年間にブラジルはコーヒー輸出国としての地位を決定的にした。一八三七―三八年度のコーヒー輸出は全輸出の五三、二パーセントを占めた。

第二次帝政のブラジルの財政はコーヒーによって維持されたといつてよく、一八八〇年から一八八五年のコーヒー生産は世界全生産の五六パーセントに当った。

コーヒー栽培がリオ州のパライバ平原からサンパウロ州のパライバ平原に伸びたのは一八六〇年以後であり、バナナル、カシヨエーラ、ロレーナ、グワラチンゲタ、ピンダモニャンガーバ、タウバテにコーヒー耕地が現われた。その中心をなしたタウバテはパライバ平原の首都といわれ、コーヒー全盛期にはヨーロッパから一流オペラを招んだほどである。

しかし、パライバ平原のコーヒー耕地は地力の消耗のために生産を減じて衰退期に入った。かつて全盛を誇ったコーヒー耕地で見える影もなく残骸をさらし、豪華な大邸宅で廃墟と化するものが見られるようになった。当時の有様がパライバ平原出身の文学者モンテローロ・ロバットの著作『シダーデス・モルタス』（死せる町）に叙されている。パライバ平原のコーヒー栽培が衰退期に入ると同時に、カンピーナスからリベロン・プレートラのテーラ・ローシヤ（赤土）地帯に大規模のコーヒー耕地が現われ、再びコーヒーの黄金時代が到来した。

コーヒー産業の隆盛に伴って鉄道が建設され、モジヤ

ナ、パウリスタ、アララクアラ、ソロカバナ鉄道の沿線に続々とコーヒー耕地が形成された。

奴隷解放の前後にはイタリア移民を主とするヨーロッパ移民が入れられ、コーヒーと移民時代を現出する。

一九二〇年代にコーヒー栽培はパラナ北部に広がり、未曾有の生産過剰となる。しかも一九二九年の経済恐慌のためにコーヒー輸出は杜絶した。不況のために多くの工場は閉鎖されて失業者を続出した。こうした状況に、ワシントン・ルイス政府の次期大統領選挙がはじめられ、一九三〇年のヴァルガス革命となる。

鉄道の歴史

ブラジルの鉄道史はイリネウ・エヴァンジェリスタ・デ・ソーザ（マウア子爵）の創意によるリオ・ペトロポリス鉄道の建設にはじまる。同鉄道はリオのエストレラ海岸を起点として一八五二年八月二九日に着工され、一八五四年（安政元年）四月三〇日にペトロポリス山麓のライス・ダ・セーラまでの一四キロ半が開通した。

一八五五年六月二日にはドン・ペードロ二世鉄道（後のセントラル鉄道）の建設工事が開始され、一八五八年三

月二十九日にリオ・ケマードス間の四八キロが開通した。次いでサンパウロ側のカシヨエーラまでの開通を見たのが一八六〇年である。

イリネウ・エヴァンジェリス・デ・ソーザはリオ・ペトロポリス鉄道につづいて、一八五八年二月にレシフェ・サンフランシスコ鉄道のカーボまでの二六キロを建設した。

レシフェ・サンフランシスコ鉄道の建設創案者はイギリス人のモウネー兄弟（兄はチャールス・モウネー）で、彼らがブラジル政府から獲得した鉄道建設権をマウア子爵に譲渡した。またマウア子爵がカーボまでの鉄道建設をした後に、イギリスのグレート・ウエスターン鉄道会社によって建設権が買収された。

一八六一年にレシフェ・サンフランシスコ鉄道の全長一二五キロが完成された。

グレート・ウエスターン鉄道会社はレシフェ・サンフランシスコ鉄道の完成と同時にセントラル・ペルナンブーコ鉄道の建設に着手し、全長二六〇キロを開通して糖業地の発展に寄与したことは多大である。

一八七二年には同じくイギリス系資本によるレオポルジナ・レールウエー・カンパニー（レオポルジナ鉄道会社）が創立され、一八七三年に起工し、一八七七年にリオ・レ

オポルジナ間が開通してリオとミナスの諸都市がつながれた。

サンパウロ鉄道

サンパウロ鉄道の建設を回顧するに、一八三五年公布の執政官ジオゴ・フェージョの鉄道建設案に最も興味を示したのはアギアール・ビウバ・エ・フィリヨ会社であった。同社は奔走の結果、サントスを起点にサンパウロを経てジュンジャイ、カンピーナス、ピラシカバ、イッー、ポルト・フェリスに通ずる鉄道の建設権を得たのが一八三八年である。しかし肝心の資金募集が成功せず、起工に至らずして沙汰やみとなった。そこで現われたのがエリネウ・エヴァンジェリスタ・デ・ソーザである。彼はリオ・ペトロポリス鉄道建設の経験に徴し、慎重な検討の末、サントス・サンパウロ鉄道の建設に踏みきることになった。

ここに九〇年の長い期間、サンパウロ・レールウエー・カンパニー・リミテッドの名においてブラジルの鉄道王国を築いたサンパウロ鉄道会社の歴史がはじまる。

サンパウロ鉄道ほどその建設中に困難をきわめたものはなく、それは人間の英知と勇氣に加うるに資本と技術の極致を動員して完成されたものである。しかもその工事中にパラグワイ戦争があつた。そのような悪条件と闘いながら一九世紀の偉業といわれたサンパウロ鉄道を建設したことはマウア（当時は男爵）の畢生の努力に合せイギリス人の不屈魂と強靱性を物語っている。

サンパウロ鉄道の開通はサントスをブラジル第一の商港とし、サンパウロを南米随一の工業都市とした。

サンパウロ鉄道の建設に関連し、マウア男爵とともにその推進力となつた二人の政界の代表人物がある。それはジョゼ・ダ・コスタ・カルヴァーリョ（モンテアレグレ侯爵）とジョゼ・アントニオ・ピメンタ・ブエノ（サン・ビセンテ侯爵）である。マウア男爵のサンパウロ鉄道建設権の獲得から、その実現に最大限の協力をしたのがこの二名の政治家である。

ブラジル帝国法令第一七五九号をもって、マウア男爵にサンパウロ鉄道の建設と経営権を与えられたのが一八五六年四月二六日である。それは向う九〇年の期限であつた。

サンパウロ鉄道会社は資本金二七五万ポンドで組織され、マウア男爵を主とする三割のブラジル側の出資に対

して年七歩の利子が保証された。他の七割はイギリスの資本団の出資によるもので、サンパウロ・レールウエー・カンパニーの名称で本社がロンドンに設けられた（鉄道工事はサントスを起点としてはじめられ、アルト・ダ・セーラ山麓までは比較的順調に進んだが、それから先きは非常な難工事となった。山麓とアルト・ダ・セーラ頂点の標高の差は八〇〇メートルで、山脈の横断には八キロの距離がある。それが鉄路建設の技術上の大問題であつた。そこでサンパウロ鉄道ロンドン本社 of 技術部長ジェームス・ブランリーの指名で、当時二五才の鉄道技師ダニエル・マキンソン・フォックスが現地の技術責任者としてブラジルに派遣された。

ダニエル・フォックスはアルト・ダ・セーラの実地調査によつて、ヨーロッパの山岳地で好績をあげつつあつたインクライン式のシステムを応用することになつた。それは山頂に動力室を設け、そこから鋼鉄ワイヤーによつて上りと下りの列車を連結し、相互繋引力を用いることであつた。

アルト・ダ・セーラの横断工事には一三のトンネル（全長一三〇〇メートル）が掘削され、一八の鉄橋が架設された。それに要した鉄材は三九四〇トンである。最も難工事だつたのはグロタ・フンダといわれる地点であつた。

このようにして一八六四年七月二八日にサンパウロのプロビンシア統領オーメン・デ・メーロ男爵の臨席のもとにサントスとアルト・ダ・セーラ頂点までの鉄道竣工式が挙げられた。更にサンパウロまでの開通が一八六七年二月一六日であり、次いでジュンジャイまでの全長一三九キロの開通したのが一八六九年八月である。

ブラジル帝国政府からマウア男爵に与えられたサンパウロ鉄道の建設と経営権は、一九四六年四月二六日で期限が終了し、同鉄道はブラジル連邦政府の所有に属し、サントス・ジュンジャイ鉄道と改称された。

サンパウロ鉄道の最終年度一九四五年の輸送貨物は七〇〇万トン、乗客数は二一〇〇万人と記録されている。

サンパウロ鉄道会社の創立から一九四六年までの現地歴代総支配人は次の人物である。

- 一八六〇―一八六六 ジェームス・アルベチン
- 一八六六―一八八〇 ダニエル・マキンソン・フオツクス
- 一八八〇―一九一〇 ウイリアム・スピーア
- 一九一〇―一九一四 チャールス・ソンキンス
- 一九一四―一九二一 ジョン・オーウエン
- 一九二一―一九二六 エリック・ジョンソン

一九二六—一九四六 アレキサンダー・ウエリントン

サンパウロで名高い時計塔をもつルース駅（ビクトリア建築）の完成されたのは一九〇〇年である。

パウリスタ鉄道

アメリカの南北戦争の影響でサンパウロ綿の需要が激増し、一八六六年から一八六七年にかけてはその輸出高は八五〇〇トンに達した。ほかにコーヒーと砂糖の輸出も増され、サンパウロの豪農、耕主は好景気を謳歌した。それ以前、一八五〇年のカンピーナス地帯は二〇万アローバのコーヒーと一六万アローバの砂糖を生産した。コーヒーの栽培区域はサンパウロ州の西部に拡がり、一八六九年度の輸出高は三三四万三〇〇〇アローバを示した。

カンピーナスは地理的にコーヒー積出しの拠点であったが、サンパウロ鉄道の終点ジュンジャイまでの輸送路は悪条件そのものであった。そのためにカンピーナス地帯の耕主には生産物の輸送が重要問題であった。サンパウロ鉄道を建設したイギリス人にはジュンジャイから先きは鉄道延長の計画がなかった。

他方、サンパウロ人がパラグワイ戦争で、兵員と物資輸送に多大の困難があつたのは完全な陸路がないためであつた。しかしながらサンパウロの歴代プロビンシア統領で、交通運輸問題を真剣に考究したものはなかつた。

ところがサンパウロ人ならないペルナンブーコ出身のジョアキン・サルダーニャ・マリーニョ（一八一六—一八九五）がサンパウロの第三十四代プロビンシア統領に就任して事情が一変した。彼の統領任期は一八六七年十月二四日から一八六八年四月二四日のわずか六カ月だが、その期間に彼によってジュンジャイトカンピーナス間の鉄道建設が提案され、その会社設立が決定された。

サルダーニャ・マリーニョがサンパウロのプロビンシア統領に就任するや、直ちにカンピーナス地帯の実地調査をなし、カンピーナスに集積されるコーヒーは年間二四〇万アローバであることを知つた。ほかに砂糖と穀物がある。もしそれが従来の騾馬（らま）と馬車による運搬でなく、鉄道を利用するなれば遙かに能率的で、運賃がずっと格安となる確証を得た。

サルダーニャ・マリーニョは熱烈な共和主義者にして愛国者であつた。彼は早くからサンパウロの発展性に着眼したが、それはブラジルの産業経済の心臓部となるのがサンパウロだと信じていたからである。

彼は厳密な調査に基づいて、サンパウロの経済発展と鉄道の必要性をサンパウロのプロビンシア議会に提議したのが一八六七年末である。当時の彼の提案に日く、『サンパウロが豊饒の処女地に恵まれながら、その開拓と利用に後れているのは生産物の搬出路のないことが要因をなしている。サンパウロが泥道に依存するあいだはサンパウロの経済発展は望まれない。サンパウロ人はいまこそ運輸問題の解決と取組むべきである。それにはまずイギリス人の鉄道建設の実例をみるがよい。彼らイギリス人はサントス・ジュンジャイ間の鉄道を完成し、着々実績を挙げている。われわれは国家的見地から純然たる内国資本でジュンジャイ・カンピーナス鉄道を建設すべきである。それが特にパウリスタ（サンパウロ人）によって実現されることを切望する。』

サルダーニャ・マリーニョの熱意こもる演説は人々に強い感銘を与えた。

パウリスタ鉄道会社の創立はサルダーニャ・マリーニョの創意と英知、実践力に負うものである。

一八六八年一月三〇日を期してサンパウロの政界財界の代表人物の列席のもとにジュンジャイ・カンピーナス鉄道会社の設立が決議され、取締役会が組織された。その場所はサンパウロの発祥地パテオ・ド・コレジオのサ

ンパウロ政庁であった。当の創立総会に出席した主要人物は次のようである。

イタペチニング男爵、ソーザ・ケーロス男爵、マルチーニョ・ダ・シルバ・プラード、ピラシカバ男爵、リメーラ男爵、ベルナルド・アベリーノ、ガビオン・ペーショット、タレメンテ・ファルコン・デ・ソーザ、コロネル・アントニオ・ラセルダ。以上のうちでクレメンテ・ファルコン・デ・ソーザが選挙によって取締役会会長となった。

ジュンジャイ・カンピーナス鉄道会社の株は額面二〇〇ミルレースで募集を開始し、間もなく八六〇〇株の応募を得た。会社名はジュンジャイ・カンピーナス鉄道会社だったが後にパウリスタ鉄道会社 (COMPANHIA PAULISTA DE ESTRADA DE FERRO) と改称された。

このパウリスタ鉄道会社の設立と定款がブラジル帝国政府ならびにサンパウロのプロビンシア統領ビセンテ・ピーレス・ダ・モッタによって認可されたのが一八六九年五月二九日である。

パウリスタ鉄道会社は純然たる内国資本、とくにサンパウロ人の出資で組織された。鉄道工事そのものにはイギリス人の技師が動員された。

ジュンジャイからカンピーナス向けの鉄道工事は一八七〇年三月一五日に着手されて、一八七二年三月一五日

に四五キロが開通した。その工事は予定よりもかなり後れたが、それはサンパウロ鉄道のアルト・ダ・セーラ山崩れのため不通となり、資材の運搬に手違いを生じたためである。

ジュンジャイ・カンピーナス間の鉄道開通式には当時のプロビンシア統領フランシスコ・シヤビエル・ピント・リーマ、元統領サルダーニャ・マリーニョをはじめ政府高官と民間の代表人物が多数出席した。

その後のパウリスタ鉄道の発展は目覚しく一八八〇年にポルト・フェレーラ、一八八一年にはデスカルヴァードに鉄道が延長された。また一八九一年にサンタ・ヴィルジニア支線を完成し、一八九二年にはリオ・クラーロ・アララクアラ間の二一七キロが開設された。更にアララクアラとジャウーの一四〇キロが開通した。一八九三年はジャボチカバルまで開通し、翌一八九四年にサン・カルロス・リベロン・ボニート線が完成した。進んで一八九九年にドイス・コレゴス線がカンポス・サーレスまで開通し、一九〇一年にリンコンとマルチーニョ・プラード間が開通した。

一九〇二年から一九一〇年にかけてはアグードス、ボンタル、ピラチニンガ、ベベドウロ、バレットス、ペデルネーラス、バウルー線が完成された。

一九四〇年現在のパウリスタ鉄道の全長は二一九五キロで、このうち二八二キロが広軌（二、六〇メートル？）である。

同社の歴代社長ではアントニオ・ダ・シルバ・プラードが名高く、その任期は一八八〇年から一八八一年と一八九二年から一九二八年の二度にわたり三七年におよんでいる。

パウリスタ鉄道会社直属または傍系企業は十幾つあるが、特に有名なのはオルト・フロレスタル（林業場）である。リオ・クラークを主とする一八の林業地の面積は一万八〇〇〇アルケレスで、一九三〇年までに生産されたユーカリ材は八五五立方メートル、そのほか電柱と建築用材三四五万本、四万五〇〇〇キロのユーカリ種を生産している。

一九三〇年度現在のユーカリ樹数は二七三〇万本である。この植林事業はエドムンド・ナヴァロ・デ・アンドラーデ博士の熱意と努力に負うものである。

ソロカバナ鉄道

パウリスタ鉄道のジュンジャイ・カンピーナス間の開通に刺激されて、イツー鉄道の建設されたのが一八七五

年である。そのイツー鉄道をソロカバまで延長する提案のされたのが、ソロカバナ鉄道誕生の動機となった。

ソロカバナ鉄道の建設を最も強く主張したのがハンガリー人のルイス・マテウス・マイラスキーであった。彼の強調したのはイツー・ソロカバ間の鉄道建設ではなく、ソロカバとサンパウロ間の鉄道建設であった。当時のソロカバは馬市で知られていたが、はじめソロカバとイパネマ間に鉄道を敷設し、ついでソロカバとサンパウロとつながれたのが一八七五年七月である。

その後のソロカバナ鉄道会社は順調に鉄道を延長し、一九四〇年現在の鉄道全長は二三八〇キロに達している。それはポルト・エピタシオを終点とするソロカバナ本線のほかにイタラレ線、ボツカツー・バウルー線、マイリンク線、サントス・ジュキア線がふくまれている。

モジアナ鉄道

初期の日本移民に縁故の深いモジアナ鉄道会社は一八七二年一二月に創立した。資本金三〇〇〇〇コントスで、カンピーナスを起点にモジー・ミリンに向けて鉄道建設工事に着手されたのが一八七二年十二月二日である。それは皇帝ドン・ペードロ二世の誕生日を期しておこなわ

れたもので、当時の皇帝は四七才であった。

一八七二年は日本の明治五年に当る。それから三年後にカンピーナス・モジー・ミリン間の鉄道が開通した。皇帝ドン・ペードロ二世はその起工式と開通式に臨席した。

帝政第二期にサンパウロ鉄道をはじめ、ドン・ペードロ二世鉄道（セントラル鉄道）、スール・ミネラ鉄道などが開通して鉄道時代を生んだ観があつた。

一八七二年三月二一日付のサンパウロ・プロビンシア法令第一八号によつて、モジヤナ鉄道会社の設立が認可された。創立当時の取締役会はアントニオ・デ・ケーロス・テーレス（パルナイバ伯）を筆頭にジョゼ・イジデオ・アラニーヤ（ジャラグワ男爵）、アントニオ・ウシヨア・シントラ、ジョアキン・キリーノ・ドス・サントスなどの錚々たる顔ぶれであつた。このうちアントニオ・デ・ケーロス・テーレスは耕主であるとともにサンパウロ・プロビンシア統領とサンパウロ移民収容所の創設者で名高い。

またイタリア移民を主とするヨーロッパ移民がサンパウロに導入されて、移民全盛期を現出したのはアントニオ・デ・ケーロス・テーレスのプロビンシア統領の任期である。

豊饒無比のテーラ・ローシヤ地帯を貫ぬくモジアナ鉄

道の沿線には多くのコーヒー耕地と町が形成された。同鉄道の工事は順調に進み、モジー・グワスーを経てリベロン・プレートトまで開通したのは一八七七年（明治一〇年）であつた。それ以来のモジアナ鉄道の歴史には移民とコーヒー産業の栄枯盛衰が反映している。

一九世紀末のコーヒー恐慌はモジアナ鉄道に大きな打撃を与えた。一八九九年にはサントスの港湾ストで、輸出コーヒーが貨車に積まれたまま埠頭に停滞する状態であつた。ところが一九〇一年にモジアナ鉄道は創業以来の最高の輸送記録をつくり、一二パーセントの配当をした。

一九一〇年にはまたしても輸送コーヒーの減少で、同鉄道の歳入は激減した。それにもかかわらず、当時二五〇万ポンドの融資を得て、車輛と鉄道その他の設備を改良した。

一九三四年以後はモジアナ鉄道ほか全部の鉄道が道路網の拡充によるトラック輸送の影響をうけた。更に第二次大戦となって輸出入の減少を采たし、鉄道の輸送量が著しく減じた。

モジアナ鉄道の過去を見るに順調にあつた期間は比較的少なく、文字どおり苦闘の連続である。このような状況で、モジアナ鉄道がコーヒー産業を勃興させ、一世紀に

わたってコーヒーと移民を運んだ功績は大きい。

その後はモジアナ鉄道はサンパウロ州政府の経営にかわった。州営となってからは各都門に改良が施こされ、カンピーナス・リベロン・プレート間の所要時間が三時間半に短縮された。一九六八年四月二日にはカンピーナス・ブラジリア線の開通式が挙げられた。

モジアナ鉄道沿線の都市ではモジー・グワスー、サン・シモン、クラビーニョス、サランデイ、リベロン・プレート、ズモン、セルトンジーニョ、セラーナ、プロドウスキー、バタタエス、サン・ジョアキン、イツベラバ、カーザ・ブランカ、フランカ、サン・ジョゼ・ド・リオ・パルド、モコカなどが旧移民には懐かしい思い出となっている。

西部開発とノロエステ鉄道

サンパウロ出身のバンデーランテ、パスコアル・モレーラ・カブラルが、クヤバとコシポ流域に踏みこんだのが、白人のマット・グロッソ探検の最初である。その後には西部開発と国防的見地からノロエステ鉄道の建設が度々議題となった。

はじめにノロエステ鉄道の建設が提議されたのは一八

五二年である。その後は一八七〇年にリオ・ブランコ子爵を議長とし、政界と財界の代表人物によってノロエステ鉄道の建設が検討されたが直ちには実現されなかった。いずれにせよ首都リオからサンパウロを経てゴヤスとマツト・グロツソに通ずる陸路開設の必要性を切実に感じた直接の動機はパラグワイ戦争である。

一八五〇年二月二五日にブラジル政府はパラグワイ政府から、ブラジル商船のパラグワイ川の通航権を得た。

当時はリオ、サンパウロから南部マツト・グロツソに通ずるにはミナスとゴヤスを迂回するボイアデーロ道（牛馬を運ぶ間道）と複雑きわまる河川路よりなく、パラグワイ川の航路によるのが最好の方法であった。ところがパラグワイの独裁者フランシスコ・ソラノ・ロペスはプラタ帝国建設の野望実現のために、ブラジルのマツト・グロツソとリオ・グランデ・ド・スール攻略の機をねらい、ブラジル政府に対してパラグワイ川の航行権を破棄したことがパラグワイ戦争の勃発となった。

パラグワイ川の通航権を失ったブラジルは南マツト・グロツソへの通路を遮断され、パラグワイ戦線に派兵するに非常な困難があった。

五カ年にわたったパラグワイ戦争はブラジルの勝利でおわったが、直ちにノロエステ鉄道の建設に着手された

のではない。かくして一九〇三年のペトロポリス会議となり、アクレ領地は正式にボリビア政府からブラジルに割譲された。その交換条件としてブラジル政府は、マデーラ上流にマデーラ・マモレ鉄道とサンパウロからボリビアに通ずる国際鉄道の建設を約束した。それはパウルーを起点としてパラナ川を横切り、パラグワイ川に到達する大工事であり、サンパウロから南マツト・グロツソを経てボリビアの東南部とパラグワイ北部とをつなぐ文字通りの国際鉄道である。

この鉄道建設の技術的企画は鉄道技師エミリオ・スクーナーによって発表された。このようにして一九〇四年にブラジルとフランス、ベルギーの共同出資にバンコ・ウニオン・デ・サンパウロの融資によるコンパニア・エストラーダ・デ・フェロ・ノロエステ・ド・ブラジル（ノロエステ鉄道会社）が設立された。

それにテーシユーラ・ソアーレス・エ・ペレーラ・ダ・クーニャの資本団が参加して、鉄道建設の着工されたのが一九〇五年十月一五日である。それはパラグワイ戦争の終息から三五年目で、第一期計画のバウルー・ジャクチンガ間（プレジデンテ・アルベス）の開通したのが一九〇六年九月二七日である。その開通式には大統領アフォンソ・ペンナと交通大臣ラウロ・ミューレルが臨席

した。

ノロエステ鉄道の建設が最終的に決定されたのは第五代大統領ロドリゲス・アルベスに負うところが大きく、そのためにジャクチンガ駅が後にプレジデンテ・アルベス駅と改称された。

ノロエステ鉄道の起工された一九〇五年七月一日にソロカバナ鉄道がバウルーまで開通し、また一九一〇年にはパウリスタ鉄道のバウルー支線が完成した。その後のバウルーは三鉄道の分岐点として発展したが、はじめはミナス人のアントニオ・テーシエーラ・ド・エスピリト・サントによって開拓された一村落であった。ついで同じくミナス人のジョアン・バチスタ・アラウージョーレーテがコーヒー樹五〇万本のヴァーレ・ダス・パルマス耕地（後のヴァル・デ・パルマ耕地）を設けたのが一九〇九年である。それにつづいてサンパウロ人のコロネル・ジョアキン・デ・トレド・ピーザがリオ・フェーオの上流にファカ耕地を創設した。当時多くの労働者がマラーリアその他の風土病で集れ、または土人に襲撃されて犠牲となった。土人はカインガング族で、鉄道工事とは別に和解のための土人教化を必要とした。それは著名のセルタニスタのロンドン少佐の指導でおこなわれた。

特にカインガング族とコロアドス族の猛烈な襲撃が

あつたのはビリグイとアラサツーバ地域で、技師をはじめ多数の労働者が犠牲となり、それらの墓標が各所に見られた。

鉄道技師の或る者は火あぶりにされ、または胴体を八つ裂きにされた例もある。一時は土人の襲撃があまりにひどく、またマリアが猖獗を極めたために鉄道工事を中断したことがある。このような困難と闘いながら、アラサツーバまで二八〇キロの開通を見たのが一九〇八年である。アラサツーバに木造の仮建築の駅が設けられたのは一九〇六年だが当時すでにコンパニア・デ・テーラス・マデーラス・エ・コロニザソン（土地木材拓殖会社）がビリグイとアラサツーバの拓殖に着手し、二〇〇〇家族の移民を入れた。その拓殖企業の代表人物にはプラテス・ダ・フォンセツカ、トレド・ピーザ、フランシスコ・レーテ、フランシスコ・シュミット、モーラ・アンドラーデなどがいた。

ノロエステ鉄道はアラサツーバから更にイタプーラに向けて工事を進め、チエテ河岸の各所に労働者の屯所が設けられ、軍隊の野営の観があつた。パラグワイ戦争当時のイタプーラのコロニア・ミリタール（軍隊村）の発見されたのはそのころである。

一九〇五年に起工されたノロエステ鉄道はアラサツー

バ、ルツサンビーラを経てイタプーラまで到達したのが一九一〇年で、同年末にはサンパウロとマツト・グロツソ州境のパラナ川に鉄道が伸びた。しかし全長一〇二四メートルのパラナ川の鉄橋架設は一九二八年にようやく完成した。この鉄橋の工事中は貨車をそのまま積みこむフェリー（渡し船）が用いられた。パラナ川対岸からトレス・ラゴアス、カンポ・グランデ、アキダウアナ、ミランダを経てポルト・エスペランサまでの一二七二キロの鉄道工事は間断なく進められ、一九一七年に開通した。次いでコルンバまでの七八キロが開通し、ここにブラジルの首都とボリビアが鉄道によって完全に結ばれた。一九四七年には全長二〇〇九メートルのパラグワイ川の鉄橋が竣工した。

他方、一九一九年に先駆者マヌエル・ベント・ダ・クルースはアグアペエーの高陵地を伝ってトレス・ラゴアスに通ずる道路を開設したが、それが一九二二年に起工されたアラサツ―バ・ジュピア変更線となった。ノロエステ鉄道は一九一七年に連邦政府によって買収され、エストラダ・デ・フェロ・ノロエステ・ド・ブラジルとして、本営はバウルーにおかれた。

ノロエステ鉄道の建設は第五代大統領ロドリゲス・アルベスの任期にはじまって、アフォンソ・ペンナ、エル

メス・ダ・フォンセツカ大統領の任期におよんでいる。またリオブランコ男爵、ミゲル・カルモン、バルボーザ・ゴンザーガ、ラウロ・ミューレルなどの政治家が鉄道建設の推進力となっている。

鉄道建設の技術面での功労者にはエミリオ・スクナー、サンパイオ・コレア、ルイス・ゴンザーガ・デ・カンボス、カルロス・エウレル、エートル・レグラーなどがあ

る。ノロエステ鉄道歴代の総裁では親日家で知られたリーマ・ファイゲレード將軍の任期に同鉄道は著しい発展を見た。

マデーラ・マモレ鉄道

一九世紀末から今世紀はじめにアマゾンの辺境に建設されたものにマデーラ・マモレ鉄道がある。それは旧グワポレ領地（現在のロンドニア領地）の首都ポルト・ベリョからグワジャラ・ミリンまでのマデーラ上流に沿う三六〇キロの鉄道で“悪魔の鉄路”と称されたものである。

同鉄道の建設工事には延べ数二万数千人のあらゆる国籍の労働者が動員されたが、その九割が風土病（マラリ

ア、黄熱病、脚気など）に患い毎日数十人が死亡した。

当時は鉄道の枕木一本当り一人の生命が失なわれたと言われた。それこそ文字どおりの人柱である。

一説にはマデーラ・マモレ鉄道工事の犠牲者は第一次世界大戦のベルダン戦の戦死者に匹敵すると。

マデーラ上流は岩礁と瀑布、激流のために航行が不可能で、アクレ地帯の生産物の搬出に非常な困難があった。またボリビアからアンデス越えをして太平洋岸に出るのも容易でなかった。そこでマデーラ上流に沿う鉄道の建設案がおこった。

最初マデーラ・マモレ鉄道の建設に着手されたのは一八七二年で、工事受講はイギリスのパブリック・ワーク・コンストラクション会社であった。ところが工事現場で多くの従業員が風土病で続々倒れた。

パブリック・ワーク・コンストラクション会社は契約を破棄し、それに代ってアメリカのファイリップ・アンド・トーマス・コリンズ会社が二〇〇万ポンドの予算をもって工事をはじめたのが一八七七年一〇月であった。

当時、同社の現地本営サント・アントニオに病院が設けられ、数百人の患者が収容され、一日平均一〇人が死亡した。このような状態が一八七九年までつづき、遂にコリンズ会社もマデーラ・マモレ鉄道工事の請け請負契

約を破棄した。

一九〇三年にはペトロポリス会議が開かれボリビア政府は好意的にアクレ領地の大部分をブラジルに割譲した。その交換条件としてブラジル政府はマデーラ・マモレ鉄道建設を約束した。

マデーラ・マモレ鉄道の工事請負はアメリカのメイ・ジェキル・アンド・ランドルフ会社によって落札された。一九〇七年五月に着工された。

一九〇八年には二四五〇人の労働者が入れられたがその大部分は中米での鉄道工事に経験あるスペイン人、イタリア人、ギリシヤ人であった。次いで一九〇九年にキューバから四〇〇〇人の労働者が到着した。

一九〇七年から一九一二年までに入れられた労働者の合計は二万人を超えた。

労働者の国籍別にはスペイン、イタリア、ギリシヤ、ポーランド、キューバ、ポルトガル人が多く、ドイツ、ロシア、スイス、スイーデン、トルコ、コロンビア、カナダ、スコットランド、ヴェネズエラ、アメリカ、ヒンズー、ハンガリー、支那のクーリーなど、世界各国の労働者が網羅されていた。

アメリカ人の鉄道技師で病没した者が三十数名あるが、それらの墓標が今も散見される。

言語にも絶する困難と犠牲によって建設されたマデラ・マモレ鉄道は数年前にレールを引き抜かれ、現在は一部分が観光用に当てられている。

移民史

アソーレス移民

ブラジルの移民史は一七世紀初頭のアソーレス移民の導入にはじまる。ポルトガルがスペインの統治下にあった一六一七年にブラジル総督ドン・ルイス・デ・ソーザはスペイン王室を介してポルトガル政府に対し、ブラジルのパラートマラニヨンの開拓のためにアソーレス島民を入れることを提案した。

一六一〇



リオ・グランデ・ド・スールの牧童ガウーショ

は移民がアソーレスからマ

ラニヨンのサン・ルイスに着き、つづいて一六二一年に四〇夫婦が同じくマラニオンに到着した。

一六四八年には五二夫婦がアソーレスのサンタ・マリア島からマラニオンに着き、一六七六年に五〇夫婦がファイアル島からパラーに到着した記録がある。それらのアソーレス島民のブラジル移住に関しては史家フランシスコ・アドルフオ・デ・ヴァルニャーゲンの『ブラジル全史』第一巻の三三三ページに記述されている。それによればアソーレス移民は一六二一年六月一三日付のポルトガル王室令でマラニオンとセアラに送り出されとある。一六二一年から一六七七年までにマラニオンに入れたアソーレス移民は四二〇夫婦と推定される。当時のアソーレス移民の平均年齢が二三才だったところから、ブラジルの拓殖と防衛のために特に壮年層を選抜したことが想像される。彼らアソーレス移民は身体強健で、男子は軍事訓練をうけていた。

アソーレス移民は農夫のほか鍛冶、石工、大工、武器製造、皮革工、製パン工、造船工などあらゆる技術者が網羅されていた。

アソーレス移民のブラジルへの送り出しに当ってポルトガルの海外領評議会が厳重な選考をしたことが注目される。

一八世紀となつてはサンタ・カタリナとりオ・グランデ・ド・スールに多数のアソーレス移民が導入された。それは一七三六年にリオ・デ・ジャネイロの長官ゴームス・フレレーレ・デ・アンドラーデがポルトガルの王ドン・ジョアン五世に、ブラジル南部の開拓と防衛のためにアソーレス移民の送り出しを提言したためである。

アソーレス島民は拓人と軍人の素質をもっていたからである。

一七四七年にアソーレスは飢饉のために島民が生活に窮したので、ポルトガル政府は救護策としてブラジル移住を奨励した。

移住を許可された者は船賃無料のほか多くの恩典が与えられた。但し男子は年齢四〇才、女子は三〇才を限度とした。

このようにして一七四八年にサンタ・カタリナ島のデステロ（現在のフロリアノポリス）にアソーレス移民一二六家族（四六一人）が到着した。当時のサンタ・カタリナとりオ・グランデ・ド・スールの長官はジョゼ・ダ・シルバ・パエス少将であった。彼が後日ポルトガル政府に送った報告書によれば、一七五二年までにサンタ・カタリナ島に上陸したアソーレス移民は一〇七八家族で五九九〇人となっている。

サンタ・カタリナに入った初期のアソーレス移民は主にサンタ・カタリナ島に定住したが、後に同島近くの大陸に四散した。或る移民グループは島の対岸にポルト・ベロ村を開拓した。それが現在のサン・ジョゼである。リオ・グランデ・ド・スールにアソーレス移民が入れられたのはサンタ・カタリナと同じく一七四八年であり、それはシルバ・パエス少将の努力に負うところが大きい。彼は軍人の立場から、リオ・グランデ・ド・スールの海岸線とプラタ地域防衛強化のために拓人と軍人の素質をもつ移民導入を力説し、それにはアソーレス島民が最適であることを強調した。

最初にリオ・グランデ・ド・スールに入れられた八〇家族のアソーレス移民はカペラ・グランデ・デ・ビアモン、リオ・グランデ・デ・サン・ペードロとサント・アントニオ・デ・バトルーリヤに定住した。その後二年を経て血気盛りの二〇〇〇夫婦がアソーレスから到着した。それらの子孫が現在のリオ・グランデ・ド・スールのポルトガル系人口の大部分を占めている。ポルト・アレグレの旧称はポルト・ドス・カザエス（夫婦者の港）だが、それは約七〇夫婦のアソーレス移民が現在のビアモンに定住して町の建設に当たったからである。また別のグループでジャクイ川をさか上つてトリウンプオ、タクワリー、

リオ・パルド、カシヨエーラに住んだものもある。

パンパス地域に移ったアソーレス移民は根本的に生活様式を改めて牧童ガウーシヨとなった。それとは反対にリオ・グランデ（港町）やポルト・アレグレに定住した者がアソーレス以来の生活風習を保持したことは面白い対照をなしている。

アソリアノは類型的にはポルトガル人だが仔細に観察すると、或るものはモーロー人やオランダ人の血をうけている。ガウーシヨに金髪のものがあるのはオランダ系アソリアノの後裔であることを物語っている。

およそアソーレス移民は牧畜を好んだが、中には農夫として小麦栽培をした者もある。

アソーレス移民は整然たる都市計画のもとに町を建設した。リオ・グランデ・ド・スールの都市が大小を問わずよく整っているのはそのためである。

ポルトガル政府のアソーレス移民の送り出しに、原則的に中年以下の既婚者を選んだために北東ブラジルに見るような性の問題がおこらず、土人や黒人との雑婚の弊害のなかったことが挙げられる。

アソーレス移民がリオ・グランデ・ド・スールに入れられて約五〇年後の一八〇〇年には、彼らによって一四の都市が建設され、その人口は三万六〇〇〇に達した。

スイス移民村の建設

摂政ドン。ジョアンはポルトガル王室をリオに移すと同時に外国人の土地所有権を認め、外国移民の導入が考慮された。

ドン・ジョアンはまずもってポルトガル本土からの移住者を募ったが、ナポレオン戦争の打撃が甚大で、その復興のためにブラジル向け移民の送り出しは不可能であった。

そこでドン・ジョアンはポルトガル移民とは別に外国移民の導入を計画し、最初の試みとしてスイスのフリプルゴ地方から移民が入れられることになった。場所はリオ・デ・ジャネイロ県のノーバ・フリブルゴ、カンタ・ガロ管区のモーロ・ケマードと決定された。

なぜノーバ・フリブルゴがスイス移民村の建設地に選ばれたかといえば、その気候風土がスイスのフリブルゴ地方に似ていたからである。この一帯はオルゴン山脈の一部を占める標高九〇〇メートルの高地で、リオ市から北方二〇〇キロである。

この新設されるべきスイス移民村の監督に任命されたのがマツシャード・ミランダ・マリユーロ神父であり、彼

は旧モーロ・ケマード耕地を買収し、それに政府からのセスマリア（無償分譲地）四地区を加えて村の建設に当った。コロノの住家と教会、病院、薬局、学校を設けてスイス移民の到着を待った。

ブラジル政府とスイス連邦政府に調印されたスイス移民導入の契約内容はおよそ次のようである。

一、スイス移民の祖国出発からブラジルのリオ・デ・ジャネイロ県、ノーバ・フriburgo到着までの旅費はブラジル政府の負担。

一、コロノの住宅、学校と衛生施設、生産設備はブラジル政府がなす。

一、ブラジル政府はスイス移民に土地を無償交付するほか、家族人員に応じて種子、農具、家畜を給与す。

一、入植第一年と第二年度半ばまでコロノ一人当り九四レースの日給を給与す。

一、神父二名、医師一名、薬剤士一名、獣医一名を駐在せしめ、その給料はブラジル政府が負担す。

一、耕地内に教会の建設をブラジル政府がなす。

一、スイス移民はブラジル到着と同時にブラジル帰化人たるべし。

一、スイス移民の入植から一〇年間は兵役義務を負わさ

ず、また免税の特典を与う。

一、耕地内の治安維持のためコロノの中より警備隊を組織すること。

最初のスイス移民一六一名が帆船『ダーフィン』によつてリオに入港し、ノーバ・フリブルゴに入植したのが一八一九年一月一五日である。次いで第二回と三回にわたつて移民が到着し、その合計が三六一家族で一六八二名となつた。内訳は男子八四六名と女子七三六名で、全部がカトリック教徒であつた。

ブラジル政府とスイス連邦政府の契約は移民一〇〇家族で八〇〇名と限定されていたがリオ駐在のスイス国外交官エコラウ・ガシユーの独断で予定の倍数が入れられたために、収容設備が不十分で非常な困難を生じた。また生産面でもスイスの農作法はブラジルには不向きで、しかも適切な指導者もなく、実績が挙げがらぬまま失望して他に転ずる者があつた。

ノーバ・フリブルゴの初期のスイス移民村が失敗した主な理由はドン・ジョアン六世がポルトガルへ帰還し、独立前後のブラジル政府は多事多端でスイス移民村を顧みる余力がなく、放置状態におかれたことにある。

一八二四年に六一家族、三〇二人のドイツ移民がノー

バ・フリブルゴに到着したが、その全部がプロテスタン
トであった。このドイツ移民の指導者として牧師フリー
デリヒ・サウエル・プロンと医師ヘンリック・デンクイッ
ツがいた。その後は歳月を経るにつれてスイス移民とド
イツ移民でミナスに移転する者が多く、それに代ってイ
タリア、ポルトガル、シリア移民が入って次第に繁栄し
た。

一八七二年のノーバ・フリブルゴの人口は六三〇〇人
で、その中の八九七人が黒奴である。

一八九〇年にノーバ・フリブルゴに市制が布かれ、佳
良無比の気候と相まってブラジル有数の優秀都市となっ
た。今世紀にはノーバ・フリブルゴの誇りともいえるべき
レース工業をはじめ皮革、ゴム、織物、金属工業が勃興
した。

ポルトガル移民

ポルトガル本土からのブラジル向け移民は一八四七年
に開始された。それ以前ブラジルに入国したポルトガル
人はいうところの移住者であり、コロニザードル（拓殖
者）、軍人、官公吏、貿易商が主でその数は不明である。

旧ブラジル連邦移民局の統計では一八四七年から一九

五〇年までにブラジルに導入されたポルトガル移民は一四八万七四〇〇人となっている。

ブラジル独立後の一〇年間はポルトガル人のブラジル移住が杜絶した。公認のコロノ移民としては、上院議員エコラウ・デ・カンボス・ヴェルゲーロがサンパウロ、リメーラのイビカバ耕地に導入したポルトガル移民九〇家族が最初である。当時から約二、三〇年はポルトガルでのブラジル移民は頗る不人気でブラジルが恰も地獄であるような宣伝がされた。事実、奴隷解放前にブラジルに入れられたヨーロッパ移民は、契約耕地での労働制や待遇に不満を抱いて争議をおこした例が多くその他のヌクレオ移民（小独立農移民）もほとんどが失敗の状態にあった。そのためにポルトガルに限らず、イタリア、ドイツにおいてもブラジルの移民は白人奴隷だといわれた。それに反して北アメリカへの移住は盛で、ドイツ、イタリア、ポルトガルからアメリカに移民した者は同時期のブラジル移民の数十倍を示した。そのころのポルトガルの新聞に『ブラジルを移民の理想郷と宣伝するのはエンガジャドール（募集人）の誇張説であって、ブラジル現地での各国の移民による拓殖事業は例外なく失敗している』と幾つかの事例が挙げられている。

このようなブラジル移民の悪宣伝がされたにもかかわ

らず、一八六四年から一八七二年の九年間にブラジルに入れられたポルトガル移民は五万六三五〇名を示した。また一八七三年から一八九一年までの一四年間では一〇、八九一名に達し、一八八七年（奴隷解放の前年）だけのポルトガル移民の入国は一万二〇五名である。

ブラジル政府が外国移民導入の宣伝を開始したのは一八五六年以後だが、一八七二年までは年間平均一万の移民が入国したにすぎない。しかし一八七三年以後は著しく増加した。特にポルトガル移民はヨーロッパ移民全数の三分の二を占めた。一八七六年からはイタリア移民がポルトガル移民を凌ぐようになった。

一八七三年にリオ・ブランコ内閣によって外国移民導入補助案が可決され、莫大の予算が計上された。当時フランス系のボンペアー・ロアン伯爵とエスタノレ・トゥネー上院議員の発起で政府代行機関の移民組合が生まれ、外国移民の導入と宣伝に拍車がかげられることになった。

奴隷解放の実施された一八八八年度にはヨーロッパ移民の導入が急増して三万一二六八名に達した。その中の五万六三五三はリオ上陸、七万四九一五はサントス上陸と記録されている。それらのヨーロッパ移民の大部分はリスボア、ナポリ、ジェノヴァ、ハンブルグ、アントワープから出発している。

ドイツ移民

ブラジルのドイツ移民の歴史は一八一八年にはじまっている。バイア南部のカラヴェラスから数キロ距るペルイベ河岸のコロニア・レオポルジナに数十名のドイツ移民が入れられた。それにつづいて同じくバイアのイリエウース、カシヨエーラ川の左岸に少数のドイツ移民が入植した。それを除いては一八二四年にリオ・グランデ・ド・スールのサン・レオポルドに入ったドイツ移民が最も古い。

一九世紀前半には自由の天地を求めてドイツからアメリカへ移住する者を続出した。



ドイツ移民の入植祭

ナポレオン戦争の打撃に加えて一八一五年のウィーン

会議後も、ドイツ連邦を形成するサキソニア、ハノヴァー、カッセル、ホルステンベルグ、オルチンベルグなどの王国の支配者である貴族に政治の実権が振られ、人口の大部分を占める農民は一顧もされない状態にあった。当時ドイツの各地にはそのような封建制を打破する運動がおこり、自由主義を唱える学生や青年の団体が現われた。このようなドイツ社会に海外移住熟がわきおこったのは当然である。

ブラジル帝国政府はブラジル南部にヨーロッパ移民による三つの官営植民地を企画したが、それはドイツ移民の導入を目的とするものであった。一八二四年に創設されたリオ・グランデ・ド・スールのサン・レオポルド、一八二九年建設のサンタ・カタリナのサン・ペードロ・デア・アルカンタラ、同年度開設のサンタ・カタリナとパラナ州境のリオ・ネグロ植民地がそれである。リオ・グランデ・ド・スールのサン・レオポルドに最初のドイツ移民三七名の入植したのが一八二四年七月二四日であるところから毎年その日が『コロノの日』として記念されている。

ドイツ移民によってシーノス河畔にサン・レオポルド植民地が設けられてから一八三〇年までに約五〇〇〇人のドイツ移民が入植した。

このサン・レオポルド植民地の建設は、当時リオ・グランデ・ド・スールのプロビンシア統領だったサン・レオポルド子爵（ジョゼ・フェリシアノ・フェルナンド・ピニユーロ）の提案によるものである。

サン・レオポルド子爵が一八三〇年一二月に皇帝ドン・ペードロ一世に宛てた報告書に『ドイツ移民はすぐれた拓殖民であり、彼らの農作法と牧畜、市街設計、家屋建築には範とするものがある』と述べている。

一八三〇年以後はドイツ移民の導入が中断したが、それはブラジル帝国政府が移殖民予算を削除して各プロビンシア（県）政府の負担にしたためである。しかも一八三五年から一八四五年までの一〇年はアラボス革命のため、リオ・グランデ・ド・スールの移民導入による拓殖計画に一頓挫を来たした。

アラボス革命の終息後、一八四九年にリオ・グランデ・ド・スールのプロビンシア政府はジャカイー川の航行終点にサンタ・クルース植民地を設け、ついで一八五五年にイジュイ・グワスー平原にサント・アンジェロ植民地を建設した。この二つの植民地建設に当たったのは主にサン・レオポルド生れのドイツ移民の二世であった。

同植民地にドイツ移民の二世が入れられた理由は、ドイツ本国でのブラジル移民の悪宣伝がされて移民が杜絶

したことにある。また一八七〇年の晋仏戦争のフランスの敗戦は、ゲルマン民族の国粹思想と軍国主義がブラジルの為政家に問題視されドイツ移民の導入に以前ほど好意がもたれなかったこともドイツ移民が減少した原因となっている。その時にイタリア北部にブラジルへの移民宣伝が起り、ドイツ移民に代ってイタリア移民が大挙入れられることになった。

ここでドイツ移民とその二世のブラジルに対する忠誠の実例を挙げるに、一八二七年二月のシスプラチナのパツソ・フンドの戦争にドイツ移民の壮丁一〇名がブラジルのために従軍した。アラポス革命にも多数のドイツ移民が革命軍に参加したが、それは彼らの第二の視國愛の発露である。

更に一八五二年のウルグワイ戦争のモンテ・カゼロの戦闘にドイツ移民がブラジル部隊に加わって戦っている。パラグワイ戦争には多くのドイツ移民の二世がブラジルの義勇兵として戦線に向い、一二〇名が戦死した。

イタジャイ平原の開拓

ブラジルのドイツ人コロニアの代名詞となっているサ

ンタ・カタリナは、土地が概して肥沃ではないが、そこにドイツ移民が根をおろして土地を耕作し、酪農を加味する集約農を営んで次第に発展した。

サンタ・カタリナのドイツ移民は小独立農から出発して家内工業を有ち、それが後日の工業都市の建設を促すことになった。

ブラジルのドイツ移民史を学ぶには特にサンタ・カタリナのイタジャイ平原の開拓の歴史を知る必要がある。

イタジャイ平原はヴァーレ・ド・イタジャイといわれ、面積は一五万平方キロで、ブルメナウ、ブルスケ、ガスパール、イビラマ、インダイアル、イタジャイ、イツボランガ、リオ・ド・スール、ロデーオ、タイオの一〇郡を擁し、サンタ・カタリナ州全面積の一三パーセントを占める。

そのイタジャイ平原の開発はヘルマン・ブルメナウ博士の努力に負うものである。

彼によってサンタ・カタリナのドイツ移民コロニアの基礎が築かれたといつて過言ではない。

ヘルマン・ブルメナウは一八四六年から二年にわたつてブラジル南部の实地調査をし、サンタ・カタリナのイタジャイ・アス―河口から六〇キロの地点を選定して植民地建設の計画を立てた。彼はブラジル政府との契約調

印を終え、イタジャイ平原拓殖会社の設立と移民募集のためにドイツに引揚げたのが一八四八年である。しかしドイツ本国での移民送り出しは北アメリカ、チリー、アルゼンチンを主とするものでブラジル移民は一顧もされなかった。



ヘルマン・ブルメナウ

ヘルマン・ブルメナウはあらゆる政治的圧迫と妨害に耐えながら二五〇名のブラジル移住の応募者を得たが、その大部分がチリー移民会社の代理人に横取りされた。結局わずか一六名がヘルマン・ブルメナウの甥に引率され、一八五〇年三月二〇日にハンブルグを出発してサンタ・カタリナに向った。

ヘルマン・ブルメナウは植民地開拓初年度にして多くの困難に遭遇した。やがて一八五二年となり、第二回のドイツ移民二八名が到着したが、その中に博物学者フリツ・ミュラーが加わっていた。

ヘルマン・ブルメナウは植民地の開拓以来幾度も資金

難や天災、植民者の争いを経験した。彼は植民者が如何なる困難にも屈しない剛健性を養うための信仰の必要性を切実に感じた。そこで植民地に茅ぶきの教会を設け、人々を集めて彼自ら聖書を読み、祈りをした。

一八六三年にはコロニア・ブルメナウの人口は二五五〇名に達し、蔑つかの製糖工場をもつまでになった。一八八〇年には都制が布かれ、人口は一万六〇〇〇を示した。

現在のブルメナウはブラジル有数の模範的工業都市で、特に織物工業で知られ、卓布、タオル、メリヤスの生産はブラジル全生産の五割を占める。

科学者フリツ・ミューラー（一八二二—一八九七）

サンタ・カタリナのドイツ移民史に特筆されるべき人物に博物学者フリツ・ミューラーがある。フリツ・ミューラーはダーウインの学説支持者として名高く、ブラジルの博物学研究につくした功績は多大である。彼の著で特に知られるのは一八六四年に出版されたFÜHRER DARWINである。

フリツ・ミューラーは一介の移民としてブラジルに移住し、ヘルマン・ブルメナウに協力してサンタ・カタリナの植民地建設に当たった。彼の人柄は素朴そのもので、

耕作に従事しながら博物学の研究をつづけ、田夫科学者といわれた。

彼の全名はヨハン・フリーデリヒ・テオドール・ミュラーで、一八二二年三月三一日にドイツのツーリンゲン地方、アーフルトに生れた。一八五二年にサンタ・カタリナに移住して以来は一度も祖国を訪れたことがなく四年をブラジルにすごして一八九七年五月二一日に愛するイタジャイ平原に骨を埋めた。

フリツ・ミュラーは一八五二年五月二〇日に妻と娘一人、弟夫婦による家族を構成してハンブルグを出発し、七月一八日にサンタ・カタリナに到着した。彼は先きにコロニア・ドーナ・フランシスカ（ジョインビール）を視察し、コロエア・ブルメナウに入植したのが八月二一日である。

彼はドイツの名門の出身であり、祖先数代にわたって知名の学者が出ている。ライプチヒ大学教授、法学者、医学者、サキソニア王室教師、化学者、新聞人、上院議員、ゴッタ科学院創立者などが父方と母方の祖先から現われている。特に有名なのがヨハン・バルトロメウ・トロンスドルフ（一七七一―一八三七）で、アーフルト大学教授、トロンスドルフ化学工業の創立者である。その子息の社長時代、一八四二年にヘルマン・ブルメナウが同製

薬工場で働き、博学著アレキサンダー・フンボルトと語り合ったことがブラジル移住の動機となった。

フリツ・ミュラーはブラジル移住前に、ベルリン大学で数学と天文物理学を学んだが究極は博物学者となった。

フリツ・ミュラーは一八五七年から一八六七年まで、サンタ・カタリナのプロピンシアル高等学校の教授となり、また一八七三年にはブルメナウ民事裁判所の判事に任命されたが、その間も博物研究はつづけられた。

彼の学説と論文はブラジルよりもヨーロッパの刊行物に多く発表されたために、外国によく知られている。

フリツ・ミュラーが住んだイタジャイ・アスー河畔の旧家は記念物として保存されている。またブルメナウには彼の田夫科学者風の銅像が設けられている。

ドイツ移民の裏面史・ムツケルスの反乱

リオ・グランデ・ド・スールのドイツ移民社会を震撼させたムツケルスの反乱が一八七四年にサン・レオポルド管区のシーノス盆地におこった。

このムツケルスの反乱はブラジルのドイツ移民の暗黒面ともいべきもので十九世紀のバイア奥地カヌードス

の反乱とともに社会学者の研究課題となっている。

ムツケルスの反乱はフェラブラスの暴動ともいわれ、一八七四年八月二日に反徒の討伐に派遣された政府軍司令官ジェヌイノ・オリンピオ・サンパイオ大佐（パラグワイ戦争の勇士）が戦死した。

政府軍と反徒双方の犠牲は大きく、シーノス盆地の民家の壁に印された血しぶきと弾痕が当時の凄惨な戦いを物語っている。

一八七四年から二十数年がすぎ、一八九八年にシーノス盆地のドイツ系住民二〇〇人が反徒の生き残り五人をリンチしてようやくムツケルスが絶滅した。

この世を騒かせたムツケルスはサン・レオポルド管区フェラプラス山麓に住む一ドイツ移民夫婦に発した。時代は一八七二年、モーロ・デ・フェラブラスを眼前に密柑の林に囲こまれる小さな白壁の家があった。それかドイツ移民ヨハン・ギョルギ・マウレールの住居であった。妻の名はヤコビナ・メンツで、持病はあったが、善良な一家の主婦で、農夫と大工を兼ねる平凡な夫婦であった。ヨハン・マウレールは毎日畑に出て汗にまみれて働いていたが、或る日のこと、奇跡の声を聞いた。

『ヨハン・マウレール、汝はそのような恵まれない仕事を

やめて医師として起つべきである』。それはヨハン・マウレールにとって靈感というか、神の啓示であった。それ以来彼は野良で鋤をとるのをやめた。そこへ現われたのがジョルジ・クレーンというアメリカからブラジルに再移住した偽牧師で、彼の策謀と煽動でヨハン・マウレールは医師として登場した。それがムツケルスの悲劇の発端である。

ヨハン・マウレールは怪やしげな薬草を処方してはクランデーロ（もぐり医）で有名となった。

医療施設や医者もない当時とて、マウレール夫妻はシーノス盆地での名医の存在をなした。病は気からというが、奇妙にマウレールのおかげで病の癒る者があり、遠隔地からマウレールを訪れる人を増し、門前列をなす有様であった。

妻のヤコビナ・メンツは看護婦として働いたが、非常に好評をうけ、彼らを訪れて診察を乞う人達は、必ず物品や相当の金を支払った。そのためにマウレール夫妻はたちまちにして資産を積んだ。

彼ら夫妻は文盲だったが、元来が伶俐なヤコビナは読み書きを習い、聖書を読めるまでになった。そして夫の助手よりは、彼女自らが聖書を片手に説教をした。

ヤコビナ・メンツの持病は癲癇（てんかん）で、時に

は発作をおこし、または夢遊病者になる状態が神がかりだと流布された。時を経るにつれてヤコビナ・メンツの家を訪れて集會に出席し、その信者となる人を増し、一つの宗派をなす盛況を呈した。それは教養ある冷静な人には狂信だが、信ずる者には立派な宗教であつた。

ヤコビナ・メンツは神の使徒、予言者として崇められ、理解し難い彼女の口籠り（口供）がこの上もなく有難く、それが神のお告げだとされた。

およそヤコビナ・メンツの説くところは、自身の宗教の信徒のみが恵みをうけ、他の者は神の怒りで不幸を招き、自滅するということであつた。

或る日の集會で、ヤコビナは口述するに『この世界はやがて消滅する。汝らは子を学校にやる必要はない、また他の教会に行くことを止めよ。汝らはわが教会に所属することを至上の使命とし、もし妻や夫、子がそれに反対するなれば離別すべし、わが教会こそ総てである。』ヤコビナの唱えるところは独善、排他的で他に対してはまったく破壊的であつた。

ヤコビナ・メンツの宗教は狂信と邪教の権化だが、それが次第に勢力を得、反対する者の家庭はあらゆる手段で迫害された。住家には放火され、畑は荒され、家畜は失なわれ、家族が暗殺される事件が相ついでおこつた。

一八二四年にはじまるシーノス盆地のドイツ移民集団地の人口は一八七二年に一万を越えた。その大部分はプロシヤ出身の農夫であった。いかにゲルマン民族とはいえ、祖国での教育とてなく、初期移民の苦闘のうち何物か精神のよりどころを求め、或る者はヤコビナの狂信宗教にひかれた。

ムツケルス集団の狂気めいた殺傷沙汰は次第に拡大され、問題の重大性からサン・レオポルドの警察は騒乱の張本人であるマウレール夫妻を逮捕すべく数名の署員を派遣したがヤコビナの教会には多くの信徒が集合して反抗氣勢を示したので、如何ともする術がなく引揚げた。そこで軍隊を差向けて強引にマウレール夫妻を連行したが、ヤコビナは癲癇の発作をおこして訊問もできず、空しく釈放した。警察から戻ったヤコビナは救世主の帰還とあつて信徒の大歓迎を受け、連日の集会があつた。教会でヤコビナのお告げを聴く人達は茫然自失の境地にあるようであつた。

ヤコビナの命令は神聖にして絶対的のものとなされ、信徒たちは無条件でそれに服した。

彼らムツケルスの邪教徒は己れの宗教活動に反対する人、一家を執拗に呪つて騒ぎをかもし、目指す相手を徹底的に害いなむことに全力を挙げた。或る家庭では就寝

中の夫婦と幼児が斧で頭を割られ、手足が切断されて惨状眼を覆うばかりであった。そのような残殺事件がシノス盆地の各所におこった。

やがて一八七四年七月二五日のドイツ移民五〇年祭が盛大に挙行されることになった。

その日を期してムツケルス討伐の政府軍がサン・レオポルドに派遣された。司令官はサンチャゴ・ダントラス中佐であった。政府軍は数においてムツケルスの反徒よりはすぐれていたが非常な苦戦をした。それにつづく八月二日の戦闘ではジェヌイノ・サンパイオ大佐が戦死した。その場所に記念碑が建てられている。

このように二回の軍隊の攻撃にムツケルスの反徒が頑強に闘ったことはその狂信の根強さを物語っている。

ムツケルス (MUCKERS) はドイツ語で、狂的信心、擬聖人を意味する。

イタリア移民

イタリア移民が本格的にブラジルに導入されたのは一八七四年以後である。特に一八八一年から一九〇〇年までは奴隷解放の影響とイタリアの国情のためイタリア移民の全盛期を現出した。

厳正にはブラジル向けのイタリア移民が開始されたのは一八三六年だが、一八七四年までの入国者は少なく、一八七五年からはイタリア移民の水門が開かれたように急増した。

一八七八年にはサンパウロのプロビンシア統領アントニオ・デ・ケイロス・テーレス（パルナイバ子爵）がコーヒー耕主マルチーニョ・プラード・ジュニオールを伴ってイタリアを訪れ、ブラジルへの移民導入の可能性を調査した。イタリア南部からのブラジルへの移民が増加したのはパルナイバ子爵とマルチーニョ・プラードに負うものである。

次にサンパウロの移民収容所が設立された一八八七年から一九五八年までにサンパウロ州に導入された移民を国籍別に挙げる。

イタリア	一、〇三三、七三一
ポルトガル	五六三、一〇一
スペイン	四五一、二八四
日本	二〇五、〇〇〇
ドイツ	七六、九三一
オーストリー	四一、一〇六



カシアス・ド・スールの移民記念塔

ア移民の入国が著しく減じたのは、ブラジルのコーヒー政策の破綻と経済恐慌のため多くの耕主は財政難でコロノ移民への支払い・が不可能となったことにある。いま一つの理由は、サンパウロ州では一九世紀末までは、耕地の契約コロノから出発して土地を獲得し、自営農となることがほとんど不可能だったこともある。このようなブラジルの実状を知ったイタリア政府はブラジル向け移民を禁じた。そのイタリア移民の不振が動機となって日本移民の導入が考慮され、同時に移民の土地獲得が可能となり、小独立農の道が開かれた。いわば日本移民はイタリア移民に代って入れられたのである。

それにしても一八七五年から一九五六年までにブラジルに導入されたイタリア移民は一五〇万で、数においてまさに筆頭である。一八七五年からのイタリア移民は主にリオ・グランデ・ド・スールに集中された。

イタリア移民がリオ・グランデ・ド・スールに入植し

たのはドイツ移民に後れること五〇年である。イタリア移民はドイツ移民とは異なり、起伏のはげしい山岳地を開拓した。それを如実に物語るのがカシアス・ド・スール、ガリバルジ、ベント・ゴンサルベスなどである。初期のイタリア移民はカンポ・ドス・ブーグレスに入植した。カンポ・ドス・ブーグレスは後にカシアス・ド・スールと改称された。

カンポ・ドス・ブーグレスに最初に入ったイタリア移民は一八七五年一月にジェノヴァを出発し、三カ月を要してリオに到着した。その後ポルト・アレグレに数日を経ずし、小舟でカイ川を上航してポルト・ギマランセス（現在のサン・セバスチオン・ド・カイ）に上陸した。そこから山脈の間道を徒歩で辿りついた場所が現在のノバ・ミラノである。

彼らイタリア移民はあまり肥沃でない土地を耕作して葡萄、小麦、トウモロコシを栽培し、食糧を自給自足すると同時に家内工業をおこした。それは葡萄酒、小麦粉、豚脂、製革などである。それを基礎に織物、金属工業に進んだ。

リオ・グランデ・ド・スールの著名工業でその昔素朴なイタリア移民によつて創始されたものがすくなくない。リオ・グランデ・ド・スールの初期のイタリア移民は

ドイツ移民の例にもれず、幾多の困難と闘い、風土病やブーグレの襲撃で多くの犠牲者を出している。

リオ・グランデ・ド・スールに入ったイタリア移民の大部分はイタリアのベネト地域の出身者であり、次いでトレンチノ、ジュリア、ピエモンテ、エミリア、ロマーナ、トスカーナ、リグリアからの渡来者が多い。

リオ・グランデ・ド・スールのイタリア移民は小独立農から出発して成功した好模範をなしている。開拓の苦闘期には質朴な生活に耐えながら家庭は常に明るく、快活でよく食べ、よく飲んで談笑する。彼らはおしなべて抱擁力に富み、宗教祭日を厳守する習わしがある。

イタリア移民には子福者が多く、夫婦だけでブラジルに移住して十数人の子を産み、その後数代にわたって百人以上の大家族となった実例は多い。

現在ブラジルの人口は一億三〇〇〇万だがそのうちの一割の一三〇〇万はイタリア系である。

ブラジルのイタリア系の著名財閥にはマタラゾ、クレスピ、ガンバ、マルチネリ、スカルパ、ミネッチ、プラテス、ピナテリ、シシリアノ、モルガンチス、ルナルデリ、ジョルジスなどがある。

食物の例をみるにポレンタ、リゾット、スパゲテ、ピッツアなどはイタリア移民によってブラジルに普及された

もので、現在は完全にブラジル料理となっている。

ポーランド移民

フランス革命後のヨーロッパ各国は農業本位の経済機構から工業に移行し、大きな社会的変革を招来した。それは進歩ではあったが大多数の農民には空腹をかかえて凱歌を聞くようなものであった。

特に長年の動乱と革命戦に疲れ、パンと自由を渴望したのはロシアの占領下にあったポーランド人であった。そこで甦生の新天地を求めてポーランドからブラジルに移住する者の現われたのが一八六七年である。

しかし公認のポーランド移民が入れられる以前にブラジルに渡った数名のポーランド人がある。その主なものは土木技師アンドレ・プルゼウドウスキー、アマゾンの地理地質調査をしたフロレスタン・ロスワドウスキー、鉄道技師プロドウスキーなどである。

一八六七年にエドモンド・ウォルサボルスキーを団長とするポーランド移民がパラナのパラナグワに到着した。

エドモンド・ウォルサボルスキーはポーランド移民の父といわれている。

一八七一年にはクリチバ郊外に官有地の払いさげをう

けてコロニア・ピラルジーニョが設けられたが、これがパラナの最初のポーランド移民村である。

ポーランド移民の最高潮は一八九〇年から一八九四年で、その間六万二五〇〇人が入国し、リオ・グランデ・ド・スールの或る地域は新ポーランドといわれたほどである。当時ポーランドにおいてのブラジル移住熱は盛んで主に北部ポーランドの農民がドイツ、白系ロシア移民とともにブラジル南部に入れられた。

一八九二年から一八九五年にかけてポーランドの連邦運動が革命に発展した。時あたかもリオ・グランデ・ド・スールの土着人の盗賊団がポーランド移民村を荒しまわって、多くの婦女子を虐殺した惨事が人々を戦慄させた。その盗賊団にポーランド移民の過激分子が参加し、祖国ポーランドの連邦主義を高唱しながら平和な移民村を襲うという不祥事件をひきおこした。わけでも当時はサン・マルコスがポーランド移民の集団地だったので被害が大きかった。

このポーランドの連邦革命の期間はブラジル向け移民は杜絶したが、一八九五年から一九〇〇年にかけて再びポーランド東部と中央部から多くの移民が渡来した。当時ブラジルに導入されたポーランド移民は六五〇〇人でウクライナと白系ロシア移民は一万七五〇〇人に達した。

一九〇〇年から一九〇六年までは一時的現象としてポーランド移民は激減し、一九〇七年には多量の移民が到差した。そのころサンパウロとリオ・グランデ・ド・スールの鉄道建設工事に多くのポーランド移民が働いた。

一九一四年から一九一八年の第一次世界大戦にはまたしてもポーランド移民が中断し、一九一八年のポーランドの独立後に少数の移民が送り出されるようになった。

リオ・グランデ・ド・スールのカシアス・ド・スールから北方三〇キロの高地にサン・マルコスサン・マルコスの町がある。

昔はサン・マルコ・ドス・ポロネーゼスと呼ばれ、剛健で進取の気象に富むポーランド移民によって建設されたものである。この町は一八八五年にイタリア移民が開拓したが、後に多数のポーランド移民が入植してからはポーランド移民村の観を呈した。

一八九四年までにコロニア・サン・マルコスに入ったポーランド移民は六〇〇〇人に達したが、その大部分はポーランド中央部出身の農夫であった。開拓初期はイタリア移民によって葡萄栽培がはじめられ、次いでポーランド移民が葡萄酒の製造をした。その後は養豚が盛となり、豚脂工業がサン・マルコスの主産業となった。

リオ・グランデ・ド・スールのポーランド移民の耕作面積は比較的すくないが、それは土地の自然条件と祖国

ポーランド以来の営農方式によるものである。彼らはオランダ移民と同じように集約農を強いられてきたことが習慣となったのである。ポーランドの農民は小面積の土地を死守するといわれたほど愛土に徹し、その伝統的精神がブラジル移住後までも固持された。

一八七〇年から一九二〇年までにサンパウロと南三州に入れられたポーランド移民は一〇万三二〇〇人だが、それは次の数字に見るとおりである。

サンパウロ	一九、五〇〇
パラナ	四三、〇〇〇
サンタ・カタリナ	六、七〇〇
リオ・グランデ・ド・スール	三四、〇〇〇

ポーランド移民と白系ロシア移民が同時期に導入されたので、この両者はややもすれば混同されがちだが、前者の宗教はカトリックと新教であり、後者はオルソドックスで、その教会もビザンチン型が特徴をなしている。

パラナに導入された外国移民の明細な統計はないが、一八五三年から一八八九年の三六年間におよそ二万七〇〇人のヨーロッパ移民が入れられている。それらの移民は主にクリチバ平原とカンポス・ジェライスに定住した

が、イタリア移民とスラブ系移民が大部分を占めていた。かなり正確な資料によって推定されるところでは、一八二九年から一九二九年までの一〇〇年を通して一二万八九〇〇人のヨーロッパ移民がパラナに入れられている。そのヨーロッパ移民はドイツ、イタリア、ポーランド、シリア、イスラエル移民の順位である。

パラナのポーランド移民の代表的集団地にコロニア・カンジドニア・アプレウとコロニア・アプカラナがある。特にコロニア・アプカラナは三一〇〇名のポーランド移民を主とし、ウクライナとドイツ移民によって開拓されたものである。

クリチバ管内のポーランド移民村には次のものがある。

名称	創立年度
コロニア・ピラルジーニョ	一八七一
コロニア・ドン・アウグスト	一八七六
コロニア・ドン・ペードロ	一八七六
コロニア・リビエラ	一八七七
コロニア・オルレアンス	一八七五
コロニア・サンタ・カンジダ	一八七五
コロニア・サン・ジョアン・バチスタ	一八八二

アラウカリア部のコロニア・トーマス・コエーリヨは一二七四名のシレジア地方出身のポーランド移民によって一八七六年に創設された。またサン・ジョゼ・ドス・ピニャエス郡のコロニア・ムリシは一八七八年に三五七名のポーランド移民によって開拓された。その近傍のコロニア・カルヴァーリヨとコロニア・ザカリアスもそれぞれポーランド移民とイタリア移民によって建設された。

イピランガ郡のコロニア・タイオは五二〇名のポーランド移民によって創設され、コロニア・イバイーには現在三〇〇名以上のポーランド移民とウクライナ移民が見られる。

ウニオン・ダ・ビトリア郡は一七七〇年に西部開発の軍略的拠点として開拓されたが、その管内のコロニア・クルース・マツシャードは五〇〇〇名以上のポーランド、白系ロシア、ドイツ移民によって創設されたパラナの代表的植民地である。

カストロ郡内に散在するコロニア・ブラジリオ・マツシャド、サンタ・クララ、イアポ、アゴスチーニョスなどはポーランド移民を主とし、白系ロシアとイタリア移民によって開拓された。

ウクライナ移民

ウクライナはポーランドの隣接国だが、昔から他国の侵略をうけ、相つぐ迫害のために住民がヨーロッパの各地に逃避し、外国に移住したことでポーランドに似ている。

ウクライナはソビエト連邦の一独立国で、一九二〇年一二月にその自治制が認められた。

一九五〇年度の人口は三二三〇万で、十二世紀から十三世紀にかけてはモロコ人に侵略された。一八世紀以後もウクライナ人は動乱を避けてアメリカ合衆国、カナダ、アルゼンチン、パラグワイ、ウルグワイ、ヴェネズエラに移住した。

ブラジルに移住した最初のウクライナ人はポーランドを経て一八五四年にパラナに着いたズルスキーである。

その子孫は現在のシルバ・ズルスキー家としてパラナの名高い存在だが、初代ズルスキーはパルメーラの小学校教師のかたわら農業に従事した。そのズルスキーのブラジル便りの影響でウクライナ人がブラジルに移住するようになった。

ウクライナ移民が大挙ブラジルに導入されたのは一八九五年以後であり、それが一九一二年までつづいた。そ

これらの移民の大部分が農夫であった。

ブラジルに移住したウクライナ移民のほとんどはパラナに集中されたが、パラナ東南部の気候がスラブ系移民に最適だったので、期せずしてこの地帯がウクライナ移民の集団地となった。それらの地名を挙げるとウニオン・ダ・ビトリア、パルマス、クルース・マツシャード、パウロ・フロンチン、リオ・アズール、イラチー、ボンタ・グロツサ、イピランガ、グワラプアバ、アントニオ・オリントなどである。

後にはパラナの北部と南部にもウクライナ移民が定住し、ピタンガ、ハト・ブランコ、アブカラナ、マリंगा、カンポ・モウロンなどにその集団村が見られた。

今世紀はじめにウクライナの騒乱を逃れてブラジルに移住した知識人があるが、その代表人物がヴァレンチン・クツツである。彼はロシアの社会主義政府に反抗してシベリアに流刑されたが、脱走を企ててブラジルに渡ったものである。彼はパラナに四〇年住みつけ、一度も祖国を訪れることなくブラジルに骨を埋めた。

ウクライナのキエフで創刊された最初の民間新聞『RADA』の主筆フェリップ・バックもロシア政府の弾圧を避けて一九〇五年にブラジルに移住し、パラナの二、三の小学校で教鞭をとった。彼は新聞人、教育家である

とともに気象学者であった。

同じく新聞人のオセツフ・ステファノヴィッチはウクライナ政府の外交問題についての糾弾記事を根強く書きつづけたために数回も収監された。彼はブラジルに亡命してクリチバ、ポルト・アレグレ、リオの新聞社に働き、渡伯間もなくポ語で新聞記事を書き、小説も発表した。

第一次世界大戦前のウクライナ移民の大部分が農夫だったところから、彼らはパラナの処女林を拓いて小麦、ミーンリョ、フェーションを生産し、野生のエルバ・マテを採集して産業開発につくした。特に小麦栽培はウクライナ移民にとって父祖以来の聖業であり、それに励むことに生き甲斐を感じた。

ウクライナ移民がパラナの開拓につくした一例として、馬八頭から一二頭曳きの大型車で物資輸送をやったことが挙げられる。

ウクライナ移民はその大型車をもってウニオン・ダ・ビトリアやパルマスからアルゼンチン国境までの長距離を突破して農産物の運搬をやった。それは祖国ウクライナの昔を偲ばせ、『チェコック』という馬車隊をもって黒海沿岸の旅をし、農産物と塩と交換して再びわが村に帰るようなものであった。

ウクライナ移民はウクライナの生活様式をそのままづ

ラジルに入れたが、それがすこしの不自然もなく融けこんでいることが注目される。

現在ブラジルのウクライナ系人口は約一四万である。そのうちの二万はパラナに存在する。またブラジルのウクライナ移民の八割が農業に従事していることは日本移民に似ている。しかも開拓初期にも子弟教育に熱心だったことも日本移民と同じである。

ブラジルのウクライナ移民の八〇パーセントはカトリック・ウクライナ教会の信者で、他の二〇パーセントはオールドドクサ・ウクライナ教会に属している。

オランダ移民

ブラジルに導入されたオランダ移民は大体二つの期間に分けられる。一八八四年から一九四〇年までと、第二次世界大戦から現在までである。その第一期（一八八四―一九四〇）のオランダ移民の導入数は八二〇〇人である。

ブラジル向けオランダ移民の最高潮は一九〇四年から一九一三年で、この期間に三四六〇人が入国している。しかも一九〇八年の一〇三六人と一九〇九年の一三三〇人がきわ立っている。それらの移民の大部分はロッテ

ルダムの港湾労働者であった。彼らは一九〇八年のストライキに参加したために職を失ない新生の地を求めてブラジルに移住したが不成功におわり、その半数がオランダ政府の援助を得て本国に引揚げた。

当時の残留者でパラナのカランベーに入植したものである。

ブラジルのオランダ移民村ではパラナのコロニア・カランベーが最古で、一九一一年の創立である。それから三七年を過ぎて一九四八年にサンパウロのカンピーナス管区にコロニア・オランブラが設立された。

コロニア・オランブラはクリスチャン村ともいうべきもので、カトリックとリフォームド教会の信徒が植民者の大部分である。

コロニア・オランブラは創立から数年間は非常な財政難に逢着した。一九五四年にブラジル政府からの借款によつて難関を突破したが、生産設備を整えるにはどうしても借款返済の可能性がなかった。そこでオランダ政府が責任をもつてその借款の返済をした。このようなオランダ政府の援助がなかったなればいかに優秀な農民によるコロニア・オランブラとても現在の発展は見られなかったであろう。

オランダ本国には海外事業を促進するための調査機関

や研究施設が多く、その大部分は宗教団体に所属している。

コロニア・オランブラをはじめ、パラナのモンテ・アレグレ、カストロランダア、トロコンコ、リオ・グランデ・ド・

スールのコロニア・ノン・メ・トツケはいずれも宗教団体が主となって移民を募集し、キリスト教徒によって建設されたものである。

オランダ移民の農業経営は酪農を加味して旧地を開墾し、高度の生産をあげるのが特徴である。

植民期のイギリス人

植民期のブラジルに入った外国人は正規の移住者ではなく、ほとんどが不法入国者であった。

ブラジルに來航した最初のイギリス人は海賊で、一五二一年から一五三〇年にかけてのヒュー・ロジャースとウイリアム・ハウキンスが挙げられる。

有名なキャプテン・ドレークの子海賊団が現われたのは一六世紀後半のカリブ海である。ドレークの子海賊団がブラジルを襲撃した形跡はない。

一六世紀半ばから一七世紀にブラジル北東部の砂糖農園

に多くの黒奴が入れられたが、その黒奴輸送船でブラジルに渡った少数のイギリス人がある。

一七世紀の後半には旅行者としてリオ、バイア、ペルナンブーコに滞留したイギリス人はあるがその実数は不明である。いずれにしても前世紀に移民としてブラジルに入ったイギリス人は三〇〇人程度である。

一九世紀をとおしてブラジルの港に上陸したイギリス人は一万三〇〇〇人と概算されるが、それは貿易商、海運業者、鉱山技師、鉄道技師、科学者、探検家、宣教師、旅行家などである。

一八世紀中期から一九世紀初期までにブラジルに入国したイギリス人は四〇〇〇人と推定されるが、このうちブラジルに定住した数が不明である。

イギリス人は本国の海外政策に協力して早くからブラジルとの通商貿易に着手し、港湾と鉄道建設、ガス、海底電信、鉱業などの基幹産業に先鞭をつけている。

特にブラジル北東部の鉄道建設にイギリスのグレート・ウエスタン鉄道会社の資本が投下された関係で、ブラジル現地に派遣された技術者とその家族は数百名あった。

前世紀末のグレート・ウエスタン鉄道会社所属のブラジル北東部の鉄道全長は一六一四キロに達した。その

内訳は次のようである。

鉄道名	鉄道距離（キロ）
レシフェ・サンフランシスコ	一三一
セントラル・ベルナンブーコ	二六九
スール・ベルナンブーコ	一九四
ナタル・インデペンデンシア	一六四
レシフェ・リモユーロ	二七〇
リベロン・ボニート	二九
コンデ・デュー	一九〇
リベロン・バレーロ	五五
セントラル・アラゴアス	一九四
パウロ・アフォンソ	一一五

次いでイギリス人の拓殖事業を語るとしてパラナに眼を向けねばならない。

パラナでの最古のイギリス人植民地には一八六〇年に創設されたクリチーバの北方、セーロ・アズール郡のコロニア・アスングイーがある。ここにははじめ二〇〇名余りのイギリス人が入植したが、開拓初期には非常な困難があった。後にフランス移民とドイツ移民が入って次第に発展し、一八九七年にはコロニア・アスングイーに

町制が布かれた。今世紀となつてのイギリス人の拓殖事業には北パラナ土地会社の国際植民地の建設がある。北パラナ土地会社の本社はパラナ・プランテーション・リミテッドと称してロンドンに置き、一九二八年に創立された。同時にパラナ州政府から三〇〇万エーカーの豊饒地を買収し、その小口分譲を開始したのが一九三〇年である。またサンパウロ・パラナ鉄道会社を設立して、第一期計画のオウリーニョスとロンドリーナ間の鉄道建設を進めた。

北パラナ土地会社がパラナの雄都ロンドリーナをはじめ各地に都市を建設したことは世界に類を見ぬものである。

アメリカ移民

移民としてのアメリカ人のブラジル移民は南北戦争後の一八六六年にはじまっている。南軍の敗戦による失意と打撃から、新しい境地打開のために旧軍人とその家族がブラジルに移住した。

南北戦争前にブラジルに住んだアメリカ人はあるが、それは貿易業者や単なる旅行家の短期滞在にすぎなかった。それらの通信と旅行記がアメリカ南部の人達のよい

指針となった。それには例外なくブラジル人がホスピタリティに富み、しかも気候佳良、土地は肥沃ですべての作物に適すが、特に農民の生活に欠くべからざるトウモロコシと綿の栽培に最適であることが記されていた。

アメリカ南部の人達にはブラジルの土地が綿作に適すということが大きな魅力であった。

戦争に疲れ果て、すべてのものを失った南部アメリカ人が更生の地をブラジルに求めてそれぞれの郷土を出發した。

そのアメリカ移民の送り出し以前にブラジルに渡った二人のアメリカ人がある。それは南軍所属の牧師だった。バーラード・ダンと同じく南軍の大尉フランク・マツクミュランで、彼ら二人はサンパウロ西南の海岸地帯を調査し、イグアペとカナネーア、シリリーカ、パリケラ・アスーをアメリカ移民村の候補地に挙げた。

当時既にイギリス人のアルバートン（全体の名が不明）がサンパウロ西南部の綿栽培の可能性を調査し、彼自らが試栽培をしていた。

アルバートンが綿栽培をはじめたのは一八六四年だが、アメリカの南北戦争のために南部の綿花生産が激減し、市価は五倍にも暴騰していた。イギリスは世界有数の綿の消費国であるところから、アルバートンはブラジル産

の綿をもってアメリカ綿に代用する計画を立てた。そのころの農作法はすこぶる原始的だったので、もし進歩的な栽培法によれば、ブラジルではアメリカ以上の綿の収穫を挙げ得るとというのがアルバートンの結論であった。

それを如実に見た牧師バーラード・ダンとフランク・マックミュランはサンパウロ西南地帯調査の報告と移民募集の準備のためにアメリカへ帰還した。そして一八六六年一〇月にフランク・マックミュランに引率される移民一六〇名が汽船『ダービー』でガルベストーンを出発した。しかしキューバ沖で難船し、犠牲者は一人も出なかったが物的損失は大きく、ブラジル到着前のこの災禍は非常な痛手であった。アメリカ移民はイギリス船に救助されてブラジルに着き、イグアペ郡に最初のコロニアを開拓した。それにつづいてサウス・カロライナの移民数十名が到着した。

牧師バーラード・ダンは真つ先きに蒸気動力の製材所を設けて植民の住宅を建築した。

当時アメリカにサウザン・コロナイゼーション・ソサイティ（南部拓殖組合）が組織され、二人の調査員が派遣されて主にサンパウロ州が視察され、その報告によつてアメリカ移民が大挙送り出されることになった。大挙とはいってもイタリア移民の全盛期との比較ではな

く、便船当り二〇〇名が限度であった。しかしその少数のアメリカ移民ほどブラジル政府から厚遇されたものはない。

ブラジル帝国政府はアメリカ移民の船賃の三分の二を補助し、耕作地を無償交付するほかあらゆる恩典を与えた。特に牧師バーラード・ダンがブラジル政府からイグアペ郡の官有地一五〇平方キロの無償交付をうけたことは破格の特典である。その時の牧師ダンのブラジル便りがアメリカ南部の人達を狂喜させた。或る新聞はそれを妨害すべく、ブラジル移住に関する一切の記事掲載を拒否したが、時勢には抗し難く、南部アメリカ人のブラジル移住熟は一層高められた。

一八六七年にはニューオリンズの三つの船会社がブラジル移住者の輸送に参加した。

南北戦争後にブラジルに導入されたアメリカ移民は四〇〇〇人と推定されている。それはアラバマ、テキサス、ジョルジア、ルイジアナ、サウス・カロライナ、テネシーの出身者である。四〇〇〇人の移民は四〇〇〇人がパラのサンタレン、六〇〇〇人がエスピリト・サント、バイア、ペルナンブーコに入植し、二八〇〇〇人がサンパウロ（州）に定住したと見られている。

移民資料の豊富なワシントンの国会図書館にもブラジ

ルのアメリカ移民に関する記録は見られない。一九四〇年に週刊誌『サタデー・エヴニング・ポスト』の記者ジエームス・エドムンドがブラジルのアメリカ移民の跡をたどって各地を遍歴したが、僅かの資料集めに非常に苦心したようである。

サンタ・バルバラのアメリカ移民

サンパウロ西南部の海岸地帯に入植したアメリカ移民は所期の成績が挙げられぬまま四散した。

サンタ・バルバラ（現在のサンタ・バルバラ・ドエステ）に入った移民が苦闘のうちにも次第に発展し、現在のアメリカーナ繁栄の根源をなした。

一八六七年から一八七五年にわたってサンタ・バルバラに入植したアメリカ移民は一八〇〇人と概算される。

最初の九六家族が到着したのは一八六七年一月一日で、引率者はアラバマ出身のウィリアム・ハッチンソン・ノリス大佐であった。

彼らアメリカ移民はアメリカ式のログ・キャビン（丸木小屋）を建て、馬に農耕機（プラオ）を曳かせて注目をひいた。またアメリカ移民は陸稲栽培の先鞭をつけ、アップランド種の綿を栽培をした。

石油ランプと手過しのミシン（裁縫機）を入れたのもアメリカ移民である。

一八八三年にはペルナンブーコのアメリカ移民によってシーアイランド種の綿の栽培が普及された。

このようにサンパウロを主とする綿の生産が軌道に乗った時に世界の綿の市価が下落した。それはアメリカの綿生産が回復したためと、各国の綿生産が増加したことにある。

そこでアメリカ移民は綿以外の作物を考えねばならなかった。その時に南軍の中尉だったヨセフ・ウイタケールがトム・ワットソン種の西瓜の種子を持ちこんで、サンタ・バルバラで栽培したところ、それが当たった。これが西瓜サンタ・バルバラのおこりであり、数年後にはサンタ・バルバラは西瓜の名産地となった。

ところが一八九八年に黄熱病が発生し、カンピナスからサンタ・バルバラ方面に漫延したので、衛生当局は西瓜がその原因ををすものと見なして、アメリカ移民が収穫した西瓜を押収する騒ぎがおこった。アメリカ移民はその問題をアメリカ領事に持ちこんで衛生局に抗議した。

一九〇六年にはアメリカの國務長官エリウー・ルートがブラジルを親善訪問した。ルートはカンピナスの

コーヒー耕地を視察の折サンタ・バルバラのアメリカ移民の代表者ウイリアム・パイレスと面談した。パイレスはサンタ・バルバラ在住の六〇〇名のアメリカ移民の名簿を持参して、彼らの生活の実状を語った。パイレスはサウス・カロライナの出身で、三六〇名の移民とともにブラジルに渡った。当時のアメリカ移民の斡旋をしたのがニューヨークのブラジル領事キンチーノ・ポカユーバであった。パイレスとともにブラジルに移住した三六五名の移民はリベいら盆地のシリリーカに入植し、後にサンタ・バルバラに移転したものである。

サンタ・バルバラのアメリカ移民は家内工業として一、二台の織機を据えて織物をつくったが、それがアメリカカーナの紡織工業の基礎をなしている。

サンタ・バルバラの初期アメリカ移民の入植した場所はマツシヤド農園といわれたところで、そこには先駆移民の墓地があり、約三〇〇人が葬られている。それらの墓標にはアンダーソン、アームストロング、バークストン、ブラックフォード、ブツクウォルター、カーリントン、バートン、バイントン、チェンバーレン、コック、コッチンハム、ジックソン、フォスター、フアンレー、ガーナー、グレハム、ハスチング、ヘンダーソン、ホールランド、ジョンソン、ケネディ、マックナイト、モリ

スン、モートン、ニューマン、オリヴァー、ターナー、マツクフアデン、レーン、トムソン、タウンセンド、ターナーなどの名が見られる。

墓地の近くにはアメリカ移民博物館があり、その博物館長はジュジス・マツクナイト・ジョーンズ女史である。同女史は先駆移民の引率者ウイリアム・ハッチンソン・ノリス大佐の子孫であり、アメリカ移民史『ソルダード・デスカンサ』（兵士よ、安らかなれ）の著者である。アメリカ移民の多大の功績は子弟教育のために各地に学校を設けたことであり、それが次の大学や高等学校である。

学校名	所在地	創立年度
インターナショナル高校	カンピーナス	一八六八
エスコーラ・アメリカーナ（マツケンジー大学）	サンパウロ	一八七〇
モートン高校	サンパウロ	一八八〇
ピラシカバナ高校	ピラシカバ	一八八一
ベンネット高校	リオ	一八八八
グランベリー高校	ジュイス・デ・フォーラー	一八八九
アメリカーノ高校	タウバテ	一八九〇
インターナショナル高校	ラプラス	一八九二

ペトロポリス高校 ペトロポリス 一八九八
イザベラ・ヘンドリック高校、ベロ・オリゾンテー一九〇〇
エスコーラ・アメリカーナ クリチバ 一九〇九

日本移民

日本人で最初にブラジルの地を踏んだのは一八〇三年（享和三年）一月、ロシア船の『ナジエタ』（四五〇トン）と『ネヴァ』（三五〇トン）で、サンタ・カタリナのデステロに寄港し、上陸した太十郎、津太夫、儀平、佐平の四人である。この四人は若宮丸のロシア漂流者だったもので、ブラジルへの来航は遇然の成行きである。

次ぎは一八七〇年（明治三年）、イギリス軍艦でバイアを訪れ、強度のノイローゼのために割腹自殺した鹿児島藩の海軍練習生前田十郎左衛門がある。これもブラジルに移住すべくしてバイアに着いたものではない。

移民地としてのブラジルの調査に当たったことでは代議士の根本正が最初である。彼は一八九四年（明治二七年）に外務省の命をうけてブラジルを視察した。根本正はブラジルは日本人の移住に好適の地であることを報告している。

次ぎは一八九〇年七月にブラジル軍艦『アルミラン

『デ・バローゾ』でリオに到着した大武和三郎（葡和辞典の著者）がある。

移民以前にブラジルに渡った日本人には軽業師の竹沢万次（一八八〇年のころ）ほか二人ある。

一八九五年（明治二八年）に日本とブラジルの国交修好条約が結ばれ、一八九七年には吉佐移民会社によるブラジルへの移民送り出しの準備中にブラジルのコーヒー市価の下落のために中止された。

一九〇六年に宮城県人の藤崎三郎助がサンパウロに商店を開設した。同年、鈴木貞次郎（南樹）が船中で識り合った水野龍の勧めでチリからアルゼンチンを経てブラジルに着き、移民の見本となってサンパウロ州のコーヒー耕地に働いた。

一九〇七年一月にサンパウロ州政府と水野龍との契約が成立し、一九〇八年、皇国植民会社扱いの第一回移民七八一名が笠戸丸によってセントスに到着した。それに先立ち、移民の通訳として東京外語スペイン語科出の平野運平、仁平嵩、嶺昌、大野基尚、加藤順之助の五人がロンドン経由でブラジルに着いた。

一九〇八年の笠戸丸から一九二九年までを第一期（試験期）として四〇〇〇〇の移民が入れられ、それらは契約コロノとなってコーヒー耕地に就働した。

一九二五年から一九四二年までを第二期とし、一五万人の移民が入れられ、サンパウロのコーヒー耕地以外にパラナ、アマゾナスのヌクレオ・コロニアル（移住地）に分散した。

一九四一年―一九五三年が戦争による空白期で、戦後の一九五三年から現在までを第三期とし、六万人（単独移住者をふくめる）が入れられた。したがって笠戸丸以来の合計（概算）は二六万人である。

ブラジルに導入された外国移民

次に一八七四年から一九七二年までに導入された各国の移民を挙げる。

移民国籍	人数	百分率
ポルトガル	一、五七四、六一七	二九、六
イタリア	一、五一〇、〇七八	二八、四
スペイン	六九九、九一八	一五、〇
日本	二四九、一五七	四、六
ドイツ	二〇一、二七二	三、七
ロシア	二〇、〇九四	二、〇
オーストリー	八九、二七三	一、五

トルコ	七八、八四〇	一、四
ポーランド	五四、二一四	〇、八
アメリカ合衆国	四六、八一二	〇、八
フランス	四三、五八四	〇、八
シリア、レバノン、アルメニア	四二、九七二。	〇、七
ルーマニア	四〇、三〇四	〇、六
イギリス	三一、九一〇	〇、五
リトアニア	二八、六六五	〇、五
アルゼンチン	二八、一七二	〇、五
ユーゴスラビア	二四、四一八	〇、四
パラグワイ	一九、一六一	〇、三
オランダ	一四、八三八	〇、二
ハンガリー	一三、四九〇	〇、二
その他	四〇五、七五四	六、七

合計 五、三〇七、五四三

一〇〇

イタリアとドイツ移民の歴史は旧いだけに現在のイタリア系人口は六〇〇万、ドイツ系は二五〇万、また日系人口は七五万と推定されている。

二人のコーヒー王

移民から出発してコーヒー王となった者にイタリア出身のジェレミア・ルナルデリとドイツ生れのフランシスコ・シュミットがある。

ジェレミア・ルナルデリ

ジェレミア・ルナルデリは奴隷解放二年前の一八八六年に、生後一年で父母に抱かれてブラジルに着いた。彼の生地は北部イタリアのトレピゾである。

ジェレミア・ルナルデリがブラジルに渡った一八八六年にサンパウロ著名の政界人によって『移民導入促進会』が設立され、ヨーロッパ移民の導入に拍車がかけられて大挙イタリア移民が入れられた。奴隷解放の前後にサンパウロ（州）に導入されたヨーロッパ移民は十一万八〇〇〇だが、その大部分がイタリア移民であった。

一介のイタリア移民の子のジェレミア・ルナルデリは刻苦努力の結果、サンパウロ、パラナ、マツト・グロツソ、ゴヤスに大面積の土地を所有してコーヒー王となった。

彼の出発点はサンパウロのリオ・クラーロ郡、コルン

バタイのボア・ビスタ耕地で、少年期に契約耕地で間作に玉葱をつくり、木炭焼きをやって小資本を得た。一九才でモジヤナ線のセルトンジーニヨに移転し、カロセーロ（馬車使い）をしながら広漠たるコーヒーの海原に胸を躍らせ、コーヒー産業の有望性に着眼した。

彼は少年期に学校教育をうけられなかったもので、二〇才から夜学で勉強した。当時彼は同じイタリア移民との共同出資で五万本のコーヒー園を買収したが失敗し、解散した。

カロセーロをしながら商才に富む彼は豚や農産物の売買をやって八コソトスを貯蓄した。それを資金に叔父と共にコーヒーの仲買をはじめたがこれも期待した成績が挙らなかった。そこで彼は弟と共同でコーヒー仲買をはじめサントスのコーヒー輸出商ベゼラ・ダ・パス商会と提携して繁昌した。同時に彼は既成コーヒー園を買収したが、これも運よく当たった。

ところがベゼラ・ダ・パス商会の破産で彼は一五〇コソトスの損害を被り、シヤバンテスの所有耕地を売却した。しかしコーヒー業に確信をもっていた彼は失望することなく、サントスのブラジリアソ・ワーラント会社から九コソトスのクレジットを得、さらにコーヒー精選工場を一五コソトスで売り、それを資金としてリベロン・プ

レートでコーヒー仲買をはじめたのが一九一四年であった。それによつて彼は産をなし、オリンピアに移転してパオ・ダーリヨ耕地を買収した。つづいてイギリス人ウイリアム・レハロウ所有のレクレオ耕地を三四〇コントスで買収した。

一九一八年の霜害では彼の所有耕地は全滅したが、ブラジリアン・ワラント会社のおかげで最悪の状態から立上ることができた。

それから後のジェレミア・ルナルデリのコーヒー耕地の経営は天空馬の奔馳するかのようになり成功し、拡張さらに拡張で、所有耕地四つで一二〇万本に達し、ほかにノロエステ線のアグアペエーに大耕地の建設に着手した。

しかし一九二九年の経済恐慌にはさすがの彼も困窮のどん底に落ちこんだが、これも対外信用で持直すことができた。

やがてパラナのコーヒー・ブームとなり、パラナ・プランテーションの創立者ロバット脚の経済的援助を得て、パラナの模範耕地ともいうべきカスカッタ耕地を形成した。

ジェレミア・ルナルデリはサンパウロ州に六耕地、パラナの九耕地を合せてコーヒー樹数は一五〇〇万本にマツト・グロツソとゴヤスに四六〇〇アルケールスの土

地と牛三〇万頭を所有するブラジル最大の豪農となった。

フランシスコ・シュミット

フランシスコ・シュミットは一八五〇年一月一三日にドイツのライン左岸、ウオーム市近くのオストロフエソに生れた。

一八五七年、八才の時に父母に連れられてサントスに上陸し、ヴェルゲーロ上院議員の所有耕地に入った。

後にシュミットの家族はピラスヌガのアントニオ・レオカジオ・マツトスの耕地に移転した。当時フランシスコ・シュミットはドイツ系ブラジル人のアルベルチナ・コールと結婚した。ついでコロネル・ラファエル・トピアス・デ・オリベーラの耕地に働いた彼は絶大の信頼を得、耕主の不在中はその代理をつとめた。

一八七六年には六コントスの貯蓄をもつてデスカルバードスに商店を経営、つづいて小耕地を購入した。

一八八九年にフランシスコ・シュミットの名声は高まり、コーヒーの取引でサントスのコミツサリオ（コーヒー輸出商）や銀行に相当のクレジットをもつようになった。彼はデスカルバードスを本営としてパッサ・クワトロスやサン・シモンに耕地を拡張した。一八九〇年に

はりベロン・プレートートのモンテ・アレグレ耕地を買収、リベロン・プレートを中心に大小合せて三四のコーヒー耕地を所有し、コーヒー樹数は二八〇〇万本に達した。

フランシスコ・シュミットのコーヒー収穫の最高記録は二七万五〇〇〇俵である。

彼は非常に厳格な半面、温情家でコロノや使用人から父として親しまれた。

彼はブラジルに帰化し、独学でリベロン・プレートートの市議員とサンパウロ州議員になった。彼はコーヒー王国を築き、社会公益事業に多大の貢献をした。

サンパウロの移民収容所

一八五〇年に黒奴貿易禁止令が公布されて以来、早晩来るべき奴隷解放に備えて外国移民導入の必要性が唱えられた。一八八六年にはサンパウロの大耕主によって移民導入促進会が生まれ、マルチーニョ・プラード・ジュニオール、ニコラウ・デ・ソーザ・ケイロス（ピラシカバ男爵）、ラファエル・デ・バツロス、アントニオ・デ・ケイロス・テレースが代表者として名を連らねた。

当時のアントニオ・デ・ケイロス・テレースはサンパウロのプロビンシア（県）統領であった。彼は統領就

任前にマルチーニョ・プラード・ジュニオール（グワタパラー、サン・マルチーニョ、アルベルチナ働地の創立者）を伴ってイタリアを訪れ、移民募集の可能性を調査した。

サンパウロの移民収容所は一八八六年三月に起工し、奴隷解放直前の一八八七年一月に一部分を竣工した。

建設予算は四〇七コントス六〇〇ミルレースで、移民の収容能力は三〇〇〇人であった。

敷地は九〇八八平方メートル、建物の面積は六五三六平方メートルで、五〇〇人の食堂と一時間当り一〇〇〇人の食事を賄うことでは世界最大の移民施設であった。

同移民収容所が開設された一八八七年から一九六二年までの七五年間にサンパウロ州に導入された外国移民は二、七四八、八八二でその内訳は次のとおりである。

イタリア人	二、〇二五、二六八
ポルトガル人	五七五、二八七
スペイン人	四六五、四九七
日本人	二三一、八九五
ドイツ、オランダ、ハンガリー、その他	四五〇、九三五

計 二、七四八、八八二

サンパウロの旧移民収容所は現在サンパウロ州政府の

社会厚生局となっている。その一部分を占めて移民博物館が設けられている。

文学史

ブラジルの発見から一六〇〇年までの百年を植民第一期とし、当時ブラジルに生れた文学はポルトガル人の航海記またはジェズイットの土民教化の報告書であった。

カブラルのインド探検隊のパイロットだったペロ・ヴァス・カミーニャの『ブラジル航海日記』がブラジルについて書かれた最初のものである。次ぎはマルチン・アフォンソ・デ・ソーザの実兄ペロ・ローペス・デ・ソーザの書いた『ブラジル探検記』で、一五三五年にポルトガルで出版された。それから四〇年を経て、一五七六年に出版されたものにカモンエスの友人、マガリヤンエス・ガンダヴオの『新天地ヴェラ・クルース』がある。史家カビストラノ・デ・アブレウはこの書を植民初期のブラジルを叙した巨篇と評している。

一五四〇年にポルトガルに生れて一五六七年にブラジルに移住し、バイアの砂糖農園主となったガブエル・ソアレス・デ・ソーザが一五八七年に発表したTRATADO

DESCRITIVO DO BRASIL (ブラジル風土の叙述)が名

高い。彼は砂糖農園主よりは詩人文学者で知られた。

外国人では一五五六年に『ブラジルの冒険旅行』を出版したドイツ人のハンス・スタデンと一五七八年に『ブラジル旅行記』を書いたフランス人のジャン・デ・レリーがある。

その他ジェズイットのマヌエル・ダ・ノブレガ神父の書翰集、ジョゼ・デ・アンシエタ修道士の詩作が植民初期のブラジル文学と見なされている。

一七世紀となり、北東部の砂糖産業の発展に伴って生粋のブラジル人の詩人や散文家が現われたが、それはポルトガル文学の影響を多分にうけていた。特に傑出するのがベント・テイシエーラで、彼の詩集が一六〇一年にポルトガルで出版された時に、ペルナンブーコのカピタニア長官ジョルジ・デ・アルブケルケ・コエーリョ（ペルナンブーコの初代カピタニア長官ドアルテ・コエーリョの息）が最大の讃辞を与えた。ベント・テイシエーラはポルトガル生れだが、幼年期にブラジルに移住した準二世的の存在であった。それに次いで一六一八年に出版されたDIALOGO DAS GRANDESAS DO BRASILの題名の書は植民初期のブラジルを描いたものだが、匿名で発表されて、真の著者が不明である。文学評論家ジョゼ・

ヴェリツシモはこの書を植民初期のブラジル文学の高峰と評している。

一六二七年にはバイア出身のビセンテ・ド・サルバドール僧が『ブラジル史』を書いたが、ブラジルの自然や動植物が主に叙されていて史書よりは風物誌が適切である。

少年期にブラジルに渡ってジェズイットの布教に参加したシモン・デ・ヴァスコンセーロス僧は『ブラジルのジェズイット』（一六六三年）と『聖僧アンシエタ』（一六七二年）を公けにしたが、これはブラジルのジェズイット史の好個の文献となっている。

マラニョンの聖賢といわれたジェズイットのアントニオ・ヴィエーラ僧は卓絶する説教師で、その雄弁は古今比類なしとされている。彼はポルトガル生れで、少年期にブラジルに移住して九〇年の生涯を終えたが徹底して養国ブラジルを愛した。彼の代表作は一五巻から成る『説教集』である。

アントニオ・ヴィエーラに比肩する植民第二期の文学者にはグレゴリオ・デ・マツトス（一六三三〜一六九六）がある。彼の父はポルトガル王室に仕えた貴族で、ブラジルに移住してバイアの豪農となった。

グレゴリオ・デ・マツトスはバイアに生れてコインブ

ラ大学に学び、ブラジルに帰国しては経済的に恵まれ、飽くなき創作力をもって詩作に没頭した。彼は諷刺詩人で”地獄の口”と評されたほど毒舌をもって終始し、当時のブラジルの社会事象にふれてブラジルのポルトガル語を縦横潤達に駆使したことで評を高めた。著者各々の性格と文体を全く異にするが、アントニオ・ヴィエイラ僧とグレゴリオ・デ・マツトスは植民第二期のブラジル文学の双壁といえるであろう。

植民第二期、一七世紀末までのブラジル文学は詩がほとんどであり、文学者とは詩人を意味した。

一六二四年から一六五四年までブラジルの北東部はオランダの侵略を受けたが、その影響でブラジル人の間にサナチビズモ（土着意識、自主思想）が発生し、それを表現する詩が見られるようになった。それらの主な詩人にはフランシスコ・マノエル・カラード、フランシスコ・ラファエル・デ・ジェズス、ドアルテ・デ・アルブケルケがある。以上の詩人が皆バイア出身で、爾後連綿としてバイア人の著名詩人が出てグルーポ・バイアーノ（バイア派詩壇）を形成したことが注目される。

一七世紀後半のバイア派詩人で特に知られたものにポテリョ・デ・オリベiraがある。彼はコインブラ大学

に学んでポルトガルの政界に活躍した。ラテン、カステリアーノ、イタリア語に通じ、ブラジルに関する詩作や世評を高めた。

一八世紀初期のブラジルの文壇は沈滞気味を帯び、たが一七二〇年以後にようやく活況を呈し、アントニオリョゼ・ダ・シルバのような惑星的詩人、劇作家が現われた。彼はリオに生れ、ユダヤ系であるために迫害をうけながらも驚くべき深刻且つ雄渾な作詩をした。彼は青年期にポルトガルに渡ってコインブラ大学で法学を修め、弁護士となった。三四才の時に捕縛され、宗教裁判をうけて火刑に処された悲劇的の人物である。アントニオ・ジョゼ・ダ・シルバはジル・ビセンテ以後の名劇作家といわれている。

アントニオ・ジョゼ・ダ・シルバと同時代の詩人にジョアン・アントニオ・アントニルがある。彼はイタリア人だが、四九才でジェズイットの布教師となってブラジルに渡り、一七一一年にポルトガル語の CULTURA O PLENICIA DO BRASIL (豊潤なブラジル文化) の書を出した。それと同時期にバイア生れのヌーノ・マルネス・ペレーラの著書『アメリカの巡礼』がリスボアで出版された。

一七三〇年から一七五〇年にかけては、リオの名長官
ゴームス・フレレーレ・デ・アンドラーダが文学を奨励鼓
吹したためにリオを中心に多くの詩人文学者が現われた。

ブラジル文学がようやく緒についた一八世紀中期、一
七五九年にポルトガルのドン・ジョゼ一世の政府首相ポ
ンバル侯によるジェズイット追放で、同教団に学び且つ
その流れを汲む詩人文学者の文学活動に中絶を采たした。

そうした文化的衰凋期に倫理史学者のマチアス・アイ
レスが現われたことはブラジルの文壇に巨弾を技じた観
があった。マチアス・アイレスの代表作には『アント
ニオ・ヴィエーラ』がある。

マチアス・アイレスに次ぐ歴史文学者にはセバスチョ
ン・ダ・ロシヤ・ピッタがある。彼は一六六〇年にバイ
アに生れて、コインブラ大学に学び、ブラジルに帰国し
ては富裕な家庭の雰囲気ペンを執った。彼の史書は記
述の正確さと精緻において定評がある。彼は一八世紀ブ
ラジルの史学者として白眉的な存在をなした。

またサンパウロ人の著名の史家、家系学者にはペード
ロ・タツケス・デ・アルメーダ（一七一四〜一七七七）が
ある。

一八世紀に入ってはミナスの黄金熱がわきおこった。北

東部の砂糖産業が衰微してブラジルの経済活動はミナスに移った観があった。

金鉱業の隆盛に伴ってミナスに冒険児や人材が集中して政治的策源地となった。

一七〇九年のエンボアバスの乱を契機として、ブラジル人の間に勃然として自主思想がわき出た。次いで一七一〇年のペルナンブーコのマスカッテの乱、また一七二〇年のフェリッペ・ドス・サントスを主導者とするミナスのビーラ・リーカの反乱は後のミナス革命の序曲をなした。

このような気運に愛国の情熱に燃える詩人が現われ、謂うところのミナス派文学が生れた。その代表人物がジョゼ・デ・サンタリタ・ヅロン僧（一七二〇—一七八四）である。彼はミナスのマリアナに生れ、九才でポルトガルに渡って教育を受けたために、その文学著作にはポルトガル色が感じられる。彼は大史詩『カラムルー』の著者で名高い。

同じくミナス派詩人のジョゼ・バジリオ・ダ・ガーマ（一七四〇—一七九五）はサン・ジョゼ・デルレー（現在のチラデントス）出身でポルトガルに渡り、詩集『ウルグワイ』をリスボアで出版して一躍有名となった。

ミナス革命陰謀者の一人クラウジオ・マヌエル・ダ・コ

スタはマリアナ生れのジエズイット僧、法学者、詩人で、代表詩作には『ビーラ・リーカ』がある。

詩人、教育家イナシオ・アルヴァレンガ・ペーシヨットは一七四四年にリオ市に生れ、生涯の大部分をミナスにすごした。彼の詩は感情の表現に欠けるところはあるが、風物の形容の妙と色彩的豊かさがある。彼の弟マノエル・イナシオ・アルヴァレンガ（一七四九〜一八一四）はビーラ・リーカ出身で、作品には恋愛詩が多く、肉感的ではあるが純ブラジルの感覚が現わされている。トーマス・アントニオ・ゴンザーガ（一七四四〜一八一〇）はポルトガルに生れ、大学を卒業してブラジルに移住した。チラデンテスとともにミナス革命の陰謀に参画し、アフリカのモザンビークに流刑された。彼の代表作はビーラ・リーカに残した婚約者マリア・ドロデーア・デ・セーシヤズを詠った『マリリア・デ・ジルセウ』であり、ポルトガルで出版されて有名となった。

フランシスコ・デ・カルダス僧（一七六三〜一八二九）とソーザ・カルダス僧（一七六二〜一八一四）はともにリオ出身だが、ミナスに大半をすごし、宗教的詩作を残した。彼らの晩年は浪漫主義文学の黎明期であった。一七九二年のチラデンテスの殉国はブラジル独立の気運を高揚し、それが当時の文学に反映した。

ドン・ジョアン六世の移住当時のブラジルは深刻な経済恐慌にあった。その原因は北東部の砂糖座業の不振上ミナスの金鉱業の衰退にあった。このようなブラジルにとって、ドン・ジョアン六世によるポルトガル王室の移転は頻死の病人に輸血するに等しいものがあつた。

ドン・ジョアン六世の来伯によつてリオ市街はその趣きを一変して経済的にも恵まれ、且つ文化的空氣が漂うことになつた。ナポレオン戦争はブラジルに幸をもたらしつたといえる。

ドン・ジョアン六世が設立したりオの図書館は世界有数のものといわれた。

一八二八年には一五のブラジル人経営の新聞と二つの外国人経営の新聞があつた。その主なものは一八〇八年創刊の『ガゼッタ・ド・リオ・デ・ジャネイロ』と一八二二年のブラジル独立後に刊行された『ジアリオ・ド・リオ・デ・ジャネイロ』『レヴェルベロ・コンスチツイシヨナリスタ』『ジョルナル・ド・コメルシオ』『アウロラ・フルミネンセ』などである。当時の著名新聞人にはベルナルド・ペレーラ・ヴァスコンセーロスとカルネーロ・デ・カンポスがある。この二人は政治家であり、後者は急進黨の機関紙『オ・タモヨ』の主筆であつた。

一八二七年にはエヴァリスト・ダ・ヴェーガの主宰する新聞『アウロラ・フルミネンセ』が発刊された。

ブラジルの独立とともに言論の自由が高揚され、操觚界に傑物が現われて百花繚乱の観があつた。

サンパウロではリベロ・バダロによつて『オブセルヴァドール・コンスチツイショナル』が創刊され、それと時を同じくしてミナスで『ウニヴェルサル』が発刊された。またバイアでは『オ・バイアーノ』が刊行された。

一九世紀中期の名高い新聞人にはローペス・ガーマ（一七九一―一八五二）、ジャヌアリオ・ジョゼ・ダ・ローシャ（一八一二―一八六二）、サーレス・ド・トーレス・オーメン（一七八二―一八七六）、ジョアン・フランシスコ・リスボア（一八一二―一八六三）がある。この中でトーレス・オーメンはオドリコ・メンデスの筆名で知られ、ユーモア作家でもあり、ホーマーの『イリエード』を葡訳した。

一八五〇年には浪漫主義文学の全盛期を出現したが、ヨーロッパに二〇年後れる観があつた。それ以前一八三六年にゴンサルベス・マガリャンエスの詩集『歓声』がパリで出版されて評判に上つた。

一九世紀中期のブラジル詩壇に彗星のように現われた

詩人のほとんどが早逝している。それらはゴンサルベス・ジーンアス、オストロ・アルベス、ファグンデス・ヴァレラ、アルヴァレス・デ・アゼヴェド、ジュンケイラ・フレレー、カジミロ・デ・アブレウなどである。

浪漫主義詩人の巨星的存在をなしたアントニオ・ゴンサルベス・ジーンアス（一八二三〜一八六四）はマラニョンに生れてコインブラに学んだ。彼の作品で特に知られるのが『カンソン・デ・イジリオ』（流離の歌）、『チンビラス』『カンソン・ド・タモヨ』などである。



ゴンサルベス・ジーンアス

カストロ・アルベス（一八四七〜一八七一）はバイア出身の詩人で、彼の二大巨作といわれるのが『奴隷船』と『アフリカの声』である。それは黒人奴隷の境涯を謳ったものである。それに加えてジョアキン・ナブコとルイ・バルボーザの街頭演説、ベルナンド・ギマランエスの小説『奴隷イザウラ』が奴隷解放の世論喚起の主動力となった。

ファグンデス・ヴァレラ（一八四一〜一八七五）は生涯を謳いつづけたと行って過言でなく、その牧歌的な詩は多くの人に愛読された。

サンパウロ生れの天才詩人アル・ヴァレス・デ・アゼヴェド（一八三一〜一八五二）の代表作は『二〇才の七絃琴』で、彼は惜しくも二一才でリオに夭折した。

カジミロ・デ・アブレウ（一八三九〜一八六〇）はリオ出身で、ポルトガルに遊学し、その郷土愛に徹した情熱は彼の詩を読む人に少なからぬ感銘を与える。彼の代表詩作には次のものがある。

PRIMAVERA（春）

CANTOS E FANTASIAS（唱歌と幻想）

EVANGELHO NAS SERVAS（蛮地の福音）

セアラ人のジョゼ・マルチニアノ・デ・アレンカール（一八二九〜一八七七）はマラニョンのゴンサルベス・ジューアスと好一対をなし、一九世紀の代表的浪漫主義文学者で、インジアニズモ（土民文学）の創始者でもある。

主な作品は『オ・グワラニー』『イラセマ』『ミーナス・デ・プラタ』『オ・ガウーシヨ』『オ・セルタネージョ』『ウビラジャラ』『オ・トロンコ・ド・イペ』であり、土民に

取材し、豊かな地域色を描き出したものが多い。

ジョゼ・デ・アレンカールは文学者であるとともに政治家であり、司法大臣、上院議員を歴任している。



ジョゼ・デ・アレンカール

以下、主要詩人・文学者と代表作品を挙げる。

前期浪漫主義

ジョゼ・ゴンサルベス・マガリャンエス（一八一―
一八八二）詩『歎息』『タモヨの結盟』

アラウージョ・ボルト・アレグレ（一八〇六―一八七
六）詩『カッサドル』（獵師）『コルクヴァドの飛翔』

浪漫主義

ルイス・カルロス・マルチンス・ペンナ（一八一五―
一八四八）詩『田舎町の判事』『土曜ハレルヤのジューダ

ス』

ジョアキン・マヌエル・デ・マセド（一八二〇～一八八二）純粹のブラジル文学を生んだ一人で、小説『ア・モレニーニャ』は非常な評判に上り、現在もよく読まれ、演劇や映画となっている。ほかに短篇『四つの物語り』と『盲目』がある。

ベルナルド・デ・シルバ・ギマランエス（一八二五～一八六五）ミナスのオーロ・プレート出身で、ミナスの歴史と風物を題材としたものが多く、代表作は『奴隷イザウラ』と『サン・ジョアン・デルレーのパウリスタ』『リオ・ダス・モルテスの盗賊』である。この中で『奴隷イザウラ』はアメリカのバリュット・ビーチヤー・ストウ夫人の『トム叔父の小屋』に匹敵するといわれている。

アルヴァレス・デ・アゼヴェド（一八三一～一八五二）アルヴァレス・デ・アゼヴェドは情熱の詩人といわれ、主に学生に愛読された。特に詩集『居酒屋の夜』が有名である。

ジュンケーラ・フレレー（一八三三～一八五五）カストロ・アルベスと同じくバイア出身の詩人で、代表作には『修道院回廊の靈感』がある。

ジョアキン・アウレリオ・ナブコ（一八四九～一九一〇）ペルナンブーコ生れの政治家、外交官、文学者で、代

表作には自伝『わが生い立ちの記』と彼の父の伝記『帝政期の一人の政治家』がある。

ルイス・ピント・ダ・ガーマ（一八三〇〜一八八二）バ
イア出身の詩人で、父がポルトガル人、母が黒人奴隷
だったために彼は半黒であった。少年期に父によって奴
隷として売られ、サンパウロに出て刻苦勉強、苦学で法
大を卒業し、詩人、新聞人として活躍した。

ルイス・ガーマは奴隷解放運動の闘士で知られたが、
彼の詩のいずれもが奴隷解放の叫びである。

写実主義

マヌエル・アントニオ・デ・アルメーダ（一八一五〜
一八六一）ブラジル写実主義文学の魁けをなすマヌエ
ル・アントニオ・デ・アルメーダはリオに生れ、マカエー
沖航海中に難船して犠牲となった。彼の小説『メモリア
ス・デ・ウン・サルジエント・デ・ミリシアス』（或る国
軍軍曹の回想）はブラジルの文壇で高く評価され、いま
にして多く読まれている。

カピスラノ・デ・アブレウ（一八五三〜一九二七）ジョ

アン・カピスラノ・デ・アブレウはセアラに生れてリオに没した。彼は歴史家であり、教授、ブラジル植民史の権威である。

主な著作には『植民史の点検』『ブラジル発見と開発』『ビセンテ・ド・サルバドール僧』がある。

トウネー子爵（アルフレド・デスクラノレ・トウネー、一八四三〜一八九九）。トウネー子爵は画家フェリス・エミール・トウネーの子息で、リオ陸軍兵学校出の軍属土木技師であり、パラグワイ戦争に従軍して『ラグーナの退却』と小説『イノセンシア』を書いた。この二つはフランス語で書かれ、後に各国語に訳されて有名となった。ほかに数冊の作品がある。

ジョアキン・マリア・マツシャード・デ・アシス（一八三九〜一九〇八）マツシャード・デ・アシスはリオの貧民区モーロ・ド・リブラメントに生れた。父は半黒の塗装工で母はポルトガル系であった。したがって彼は生れながらの半黒であった。実母は彼の一〇才の時に死亡し、その後は半黒の継母によって養育された。

彼は小学教育よりうけなかったが、或る出版会社の植字校正係りとなり、独学で英語とフランス語を覚え、一六才で最初の詩集を出版した。三〇才でリオの旧家の教養高い婦人（ドーナ・カロリナ）と結婚し、その内助を

得たことが彼が文壇に名を成す要因となった。



マツシャード・デ・アシス

マツシャード・デ・アシスは文学者ではあるが、生涯の半分を農務省の役人をはじめとして官界にすごした。

彼は一八九六年にブラジル文芸院を創立し、死に至るまでその総裁の任にあつた。マツシャード・デ・アシスは最も著名の小説家で、主な作品は各国語に訳されている。

彼は沢山の詩、小説、短篇、劇作を書いたが非常に独創的で、ユーモアに富み、風刺的である。代表作には『メモリアス・ポスマス・デ・ブラス・クーバス』（遺稿ブラス・クーパスの回想）『ドン・カズムロ』『キンカス・ポルバス』『メモリアル・デ・アイレス』（アイレスの手記）などがある。

マツシャード・デ・アシスの小説とコントはいずれもリオの中産階級を描き、良心的で人生に忠実ながらも、社会に反抗的で厭世的な人物が主人公として登場する。彼の小説は皮肉に一貫し且つ尽きない諷諷があり、一見

平凡で哲学的の深みがある。

ジョゼ・ヴェリツシモ（一八五七〜一九一六）ジョゼ・ヴェリツシモ・ジーアス・デ・マツトスはパラ―生れでリオに死去した。

彼は文学評論家で『エスソードス・ブラジレーロス』ほか『ブラジル文学史』と『ブラジル文学の研究』が主要作品である。

自然主義

トピアス・バレット（一八三九〜一八八九）トピアス・パレット・デ・メネゼスはセルジッペに生れ、生涯をレシフェ法大の教授に終始した。彼は法学者、思想家でドイツ哲学の権威であり、トピアス学派を形成した。彼の教え子から有名な法学者、文学者が多数出ている。

著作には『ドイツ哲学の研究』がある。

アルイジオ・デ・アゼヴェド（一八五七〜一九一三）アルイジオ・タンクレド・ゴンサルベス・デ・アゼヴェドはマラニヨンのサン・ルイスに生れ、ブエノス・アイレスに死去した。

彼は外交官、文学者で一八八〇年に処女作『女の涙』を発表し、ついで一八八一年に『オ・ムラト』を出版して

世評を高めた。更に一八九〇年には『オ・コルチツソ』を出して彼の名声は全ブラジルに聞えた。

『オ・ムラト』はその題名のとおり、小説の主人公はポルトガル人と黒人女との混血児で、ポルトガルの大学に学び、帰国して一人の乙女（彼の従妹）と恋仲となる。物語りの背景はマラニョンの一都市で、その熱帯気候に展開される男女の恋愛と人種問題をめぐる人間関係が風刺的に描かれている。

次いでアルイジオ・デ・アゼヴェドはリオに移転して『オ・コルチツソ』を書いた。コルチツソはファヴェラとは異なり貧乏長屋または百軒長屋だが、そこに住むポルトガル系移民や黒人系女との交わり、情痴沙汰が様々の面から叙されている。

アルイジオ・デ・アゼヴェドの小説はブラジルの社会と人類学の研究に合わせて興味深いものがある。

アルイジオ・デ・アゼヴェドは外交官として短期東京に駐在したことがある。

ジュリオ・セーザル・リベロー（一八四五～一八九〇）ジュリオ・セーザル・リベローはミナス人だが、サンパウロに長く住み、小説家、新聞人で知られている。

彼の作品は少なく『パーデレ・ベルシオール』と『ア・カルネ』の二つが有名である。特に『ア・カルネ』（肉）

はカトリック教会で問題となった小説で、サンパウロのパラナ・バネマ盆地の一農園が物語りの背景となっている。

高踏主義

ライムンド・コレア（一八六〇—一九一一）ライムンド・ダ・モッタ・アゼヴエド・コレアはアルイジオ・デ・アゼヴエドと同じくマラニョン出身の小説家で、『プリメーロス・ソーニョス』（初夢）と『シンフォニア』（交響楽）のほか幾つかの詩集がある。

オラヴオ・ビラック（一八六五—一九一八）オラヴオ・マルチンス・ドス・ギマランエス・ビラックはリオ人で、彼の詩集は主にフランス系のガルニエー出版会社とフランススコ・アルベス書籍会社から出版されている。オラヴオ・ビラックの詩では『ブラジル国旗讃歌』が名高い。彼は徴兵義務制の提唱者で知られている。

ビセンテ・デ・カルヴァーリョ（一八六六—一九二四）サントス生れの詩人で、海洋詩人といわれたほど海を謳ったものが多い。詩集には『恋のバラ』と『海の歌』がある。

ビセンチ・デ・カルヴァーリョは企業人でもあり、リ

ベーラ川運輸会社の社長だったことがある。

エンリツケ・コエーリヨ・ネット（一八六四〜一九三
四）コエーリヨ・ネットはブラジルのアテンといわれる。

マラニヨンのカシアス出身で、コント作家として著名
である。彼は生涯をリオに送り、パイサンズー街に住み
つづけた。

代表作品には『ミラージエン』（蜃気楼）『スフィンク
ス』『セルトン』（奥地）『冬初花盛り』『ア・トルメンタ』
（苦惱）『旋風』『オリーブの園』などがある。

印象主義

ラウル・ポンペーア（一八六三〜一八九五）ラウル・ダ
ヴィラ・ポンペーアはリオ・デ・ジヤネイロ州に生まれリ
オ市で自殺した。

代表作品には『アマゾナスの悲劇』と『オ・アテネウ』
がある。

オリベーラ・リーマ（一八六七〜一九二八）マヌエル・
デ・オリベーラ・リーマは外交官だが、文学者、史家で
知られ、ワシントンに死去した。彼の主な作品には『ブ
ラジル植民期の文学』と『ブラジル帝政史』がある。

ジョアン・リベーロ（一八六〇〜一九三四）ジョアン・リ

ペーロ・フェルナンデスは史学者で、『ブラジル全史』（五巻）ほか『ブラジルの古典』と『ブラジルの寓話』がある。

象徴主義

ジョアン・ダ・クルース・エ・ソーザ（一八六一〜一八九八）サンタ・カタリナのフロリアノポリス出身の黒人系詩人で、主な詩作には『鎮魂』と『燈台』がある。

エウクリーデス・ダ・クーニャ（一八六六〜一九〇九）エウクリーデス・ダ・クーニャはリオ州のカンタ・ガーロ郡に生れ、プライア・ベルメーリヤの陸軍兵学校と陸軍大学出の軍属衛生土木技師で、バイアのカヌードス戦に現地取材のために従軍した。その現地報告に加筆して後に出版されたのがブラジル古典の最高峰『オス・セルトンエス』である。

『オス・セルトンエス』は土地、人、戦闘の三部から成り、ノルデステの地理と自然、住民セルタネージョを描き、凄惨残酷なカヌードスの反乱討伐戦が具さに叙されている。その文体の逞しさと社会哲学的な叙述は他に類を見ない。

ジョアン・ギマランエス・ローザ（一九〇八〜一九六

七）ミナスのコルジスブルゴ生れの作家、外交官で、エウクリーデス・ダ・クーニャと同じように主にミナスの奥地を題材に小説を書いた。彼独自の文体でブラジル奥地の土着語を駆使し、一九四六年に『サガラナ』を発表した。一九五六年に『コルポ・デ・バイレ』つづいて『グランダ・セルトン』と『ヴェレダ』を書いた。

ジョアン・ギマランエス・ローザの作品はエウクリーデス・ダ・クーニャの『オス・セルトンエス』とマリオ・デ・アンドラーデの『マクナイマ』を彷彿させるものがある。

新高踏主義

アマデウ・アマラル（一八七五～一九二九）カイピラー作家で知られたアマデウ・アマラル・レーテ・ペンテアードはサンパウロのカビヴァリーに生れて、サンパウロ市に死去した。彼の主な作品には『古いランプ』『サンパウロ電卓の乗客の回想』と『ブラジル文化』がある。

マルチンス・フォンテス（一八八四～一九三七）ジョゼ・マルチンス・フォンテスはセルジッペ人で、一九三七年にリオ市で原因不明の自殺をした。

彼は華麗な詩を書いたが、詩集『真夏』が最も多く読

まれている。

ウンベルト・デ・カンポス（一八八六～一九三四）ウンベルト・デ・カンポス・ヴェラスはマラニョン人のコント作家で、多くの短篇と文学評論を書いた。

ウンベルト・デ・カンポス全集は一九四一年にリオのジャッソン出版会社から出版された。

地域主義

モンテローロ・ロバット（一八八二～一九四八）ジョゼ・ベント・モンテローロ・ロバットはサンパウロのタウパテ出身の作家で、農園主、出版会社社長、雑誌社社長、官僚、企業家、石油試堀会社社長など変転きわまりない生涯をすごしている。

代表作にはカボクロをテーマとした『ウルペス』と『ネグリーニャ』『シダーデス・モルタス』（死せる町）などがある。

モンテローロ・ロバットはブラジル児童文学の生みの親であり『サシー・ペレレ』『シャーカラ・デ・ピカバウ・アマレーロ』ほか多くの作品があり、最も多く読まれる作家である。

市井文学

グラサ・アラニーヤ（一八六八～一九三一）ジョゼ・ペレーラ・ダ・グラサ・アラニーヤはマラニョンのサン・ルイスに生れ、一四才でレシフェ法大に入学してトピアス・パレットの教えをうけた。大学卒業後は外交官としてロンドン、パリ、ローマ、ヘーグ、ニューヨークに駐在した。

彼がエスピリト・サントの初期ドイツ移民を題材とした小説『カナーン』を発表したのは一九〇一年である。それは二人のドイツ移民の移住地への適応過程を描いたもので、非常を評判に上った作品で、現在もよく読まれている。

エンリツケ・デ・リーマ・バレット（一八八一～一九二二）リーマ・バレットはリオ生れの半黒の作家で、非凡の文才に恵まれながらも、黒人系であるための社会の偏見に対する悩みとアルコール中毒で、精神病院において哀れな死を遂げた。彼の性格には虚無的などころもあった。

代表作には『ポリカルポ・クワレズマの悲しき最後』と『書記イザイアス・カミーニャ』がある。彼の作風にはマツシャード・デ・アシスに共通するところがあり、リ

オの中産階級に取材してまことに風刺的で皮肉に富んでいる。

ミナス派近代主義

カルロス・ズルモン・デ・アンドラーデ（一九〇二—）ミナスのイタビラ出身の詩人で、沢山の詩作があり、『書籍の友』『世界の感傷』『人民のバラ』『空の農園主』が有名である。

北東部文学

ジョゼ・アメリコ・デ・アルメーダ（一八八七—）パライバ人の作家、政治家で、代表作には『ア・バガセーラ』と『ボケローン』がある。

バガセーラは甘蔗の搾り汁の貯蔵場であり、北東部の原始的な砂糖農園と早魃地を背景に哀れな一家の物語りが展開される。

ラケル・デ・ケーロス（一九〇〇—）セアラのフォルタレーザ出身の女流作家で処女作の『オ・キンゼ』で一躍有名となった。それにつづく『カミーニョ・ド・ペーダラス』（石の道）と『サン・ミゲル』でノルデステ文学

の指がない地位を築いた。

ジルベルト・フレレー（一九〇〇―）ジルベルト・デ・メーロ・フレレーはレシフェ出身の社会史学者で、『カーザ・グランデ・エ・センザーラ』（大邸宅と奴隷小屋）の著者で名高い。ほかに『ノルデステ』『ソブラードス・エ・カンボス』など数十の著作がある。

ジョゼ・リンス・ド・レーゴ（一九〇一―）パライバ人の作家で、ノルデステの砂糖農園と早魃地の難民に取材した作品『メニーノ・デ・エンジェーニョ』『バンゲ』『フォーゴ・モルト』『モレツケ・リカルド』などがある。

グラシリアノ・ラーモス（一八九二―一九五三）アラゴアス出身のノルデステ文学の代表的作家で、主な作品に『カエテス』『サン・ベルナルド』『ビーダス・セツカス』（乾いた生活）、『アングスチア』（苦悩）などがある。いずれも早魃地の難民の姿が深刻に描かれている。

近代主義

マリオ・デ・アンドラーデ（一八九三―一九四五）マリオ・ラウル・デ・アンドラーデは生粋のサンパウロ人で、音楽家、作家、芸術批評家、民俗学者としての幅広い活躍をした。

一九二二年の『近代芸術週間』の創始者でヨーロッパの影響を脱した純粹のブラジル文学を生むための叫びを挙げた。彼の作品の主なものにツピー土人の神話に取材した『マクナイマ』がある。

メノッチ・デル・ピツキア（一八九二―）マリオ・デアンドラーデとともに『近代芸術週間』の闘士の一人で、『ジエカ・ムラト』と『モンテロー・ロバット』が代表作品である。

マヌエル・バンデラ（一八八六―一九五九）マヌエル・カルネーロ・デ・ソーザ・バンデラはペルナンブーコ人で、リオのドン・ペードロ二世高校とサンパウロのポリテクニカ大学に学んでいる。彼は肺結核のために長年スイスで療養生活をし、帰国後はリオの新聞社に働き、翻訳などをした。

マヌエル・バンデラは八つの詩集を出したが『朝の星』と『五〇年の七絃琴』が多くの人に愛読されている。ギレルメ・デ・アルメーダ（一八九〇―一九七二）サンパウロのカンピーナス出身の詩人で、一九三二年の護憲革命にサンパウロ人の士気高揚の詩を書き、不朽の名をとどめた。

詩集には『ダンサ・ダス・オーラス』と『失なわれた笛』がある。

アルカンタラ・マツシヤード（一九〇一〜一九三五）サンパウロ人の作家で、サンパウロの巷情緒を叙したものが多く、『ブラス』『ベシーガ』『バーラ・フンダ』などが親しく読まれている。

ジョルジュ・アマード（一九一二〜）ジョルジュ・アマードはバイア派文学の惑星的存在で、おそらくブラジルで最も多く読まれている作家であろう。

彼の初期の作品には『カカオ』『スオール』（汗）、『ジュビアバ』がある。その後の作品は『マール・モルト』（死者の海）、『デーラ・ド・セン・フィン』（果てしなき地）、『バイア・デ・トードス・オス・サントス』（バイアの観光案内）、『オス・ベリーヨス・マリニエーロス』（老いた船乗り）、『セーラ・ベルメーリヤ』（赤い山脈）、『ドーナ・フローラ・エ・セウス・ドイス・マリードス』（ドーナ・フローラと二人の夫）、『ガブリエラ・クラブ・エ・カネラ』などがある。

ジョルジュ・アマードの作品にはバイア南部のカカオ生産地が背景をなすものが多く、『サン・ジョルジ・ドス・イリエウース』や『ガブリエラ・クラブ・エ・カネラ』がそれである。

後期近代主義

エリコ・ヴェリツシモ（一九〇五〜一九七四）エリコ・ヴェリツシモはリオ・グランデ・ド・スールの中央部クルース・アルタ出身の作家で、処女作『野の百合を見よ』につづいて沢山の短篇と長篇小説を書いた。彼の巨作はリオ・グランデ・ド・スールの史的叙事詩ともいうべき大河小説『オ・テンポ・エ・ベント』（時と風）である。これは三部作をなしリオ・グランデ・ド・スールの植民期から今世紀にわたる或る一家の記録に貫ぬき、壮大な物語りが展開される。エリコ・ヴェリツシモは北のジョルジュ・アマードとともに最も多く外国に知られる作家である。

浪漫派詩人アントニオ・ゴンサルベス・ジーン
（一八二三〜一八六四）

アントニオ・ゴンサルベス・ジーンはマラニョンのカシアス郡、ボア・ビスタに生れた。父はポルトガル人で、ナチビスタ運動に熱中したために政府から弾圧され、カシアス近くの農園に逃れ、黒人女と同棲中にアントニ

才が生まれた。

アントニオが六才の時に父は彼の母親である黒人女と離別し、それ以後は継母によって養育された。

アントニオは十三才となり、父は彼をコインブラ大学に入学させるべくポルトガルへの旅行の準備中に急死した。

継母はアントニオを実子同様に愛し、彼のポルトガル遊学を実現させた。

アントニオは一八四五年までポルトガルにすごしたが、コインブラ大学で法学を修めるとともにヨーロッパ文学を学んだ。

彼は第一回のポルトガル滞在中に詩集『プリメーロ・カント』を出版した。

彼はブラジルに帰国し、一八四六年にリオに移転してドン・ペードロ二世高校の教授となり、ジャーナリズムにも活躍した。

一八五四年に政府の委嘱で再びヨーロッパに旅行し、一八五九年に帰国してセアラとアマゾンの科学調査に当たった。

当時彼は或る名門の乙女アンナ・アメリアと相愛の仲となったが、彼が混血児であるために、乙女の母親の反対で婚約が拒否された。そのころの彼に肺結核の徴が現

われ、一八六二年に病氣療養のために第三回のヨーロッパ旅行をした。しかし一八六四年に彼に対するブラジル政府の援助が絶たれたことと、病状が却て悪化したので彼は帰国を決意した。

その彼の便乗船『ビーレ・デ・コーロン』がマラニョン沖を航海中に難破した。彼は郷土を眼前に望みながら船と運命をともにした。彼は四一才であつた。

ゴンサルベス・ジーン・アスはブラジル浪漫派詩人の巨峰といわれるが、彼の作品には第一、第二、第三、第四の『ウルチモ・カント』と合わせて『ジュカ・ピラーマ』『チンビラス』と『流離の歌』がある。

ゴンサルベス・ジーン・アスは小説家ジョゼ・デ・アレンカールと相並んで【ブラジル土民文学】の創始者である。また彼は『ツピー・グワラニー語辞典』の編纂著で知られている。

史学者カピストラノ・デ・アブレウ（一八五三—一九二七）

ジョアン・カピストラノ・デ・アブレウはセアラ出身の史家だが、ブラジルの古今を通じ彼ほどブラジル史の研究に情熱をかたむけ、深く学んだものはない。

カピストラノ・デ・アブレウは史家、教育家、新聞人、著述家で、その博識は五十余年の勉学で養われたものだ。特に地理、動植物、人類、考古学の造詣が深く、それが彼の歴史の叙述の裏づけをなしている。

彼の代表著作は『ブラジル植民史篇』『ブラジル発見史』『ブラジル拓殖の道』『歴史の探求』などである。

カピストラノ・デ・アブレウは無類の変人で醜男だったが、それが却て人間的魅力となっている。

彼の生活はきわめて質素で華美と贅沢を嫌った。風宋のあがらない彼は身なりに無頓着で、常にだぶだぶした古服を着用し、歩きながら読書に熱中して道を聞達えることが度々あった。

彼は一八八三年にリオのドン・ペードロ二世高等学校の史学教授となり、その就任式には礼服を着用するのが習わしだったが、古びた平服で臨んだ。列席した人々は啞然となったが、皇帝ドン・ペードロ二世の白くに『いやそんなことは構わない。わが校の求めるのはカピストラノ・デ・アブレウその人で、礼服ではない。礼服を整えるのは彼の教授の俸給が入ってからのことだ。』

彼は高校で講義をしながらもブラジル史の研究をつづけ、史実の探究と史料の蒐集に没頭した。しかも歴史の講義にはあくまで厳正を期し、教壇に立つ彼の姿は崇高

そのものであった。

彼の歴史の叙述は史実の正確に合せて文体が優麗で、語学的にも正しく、科学的考証も見られた。

カピストラノ・デ・アブレウは美文家であるとともに話術にもすぐれ、その豊富な話題と諧謔、比喻を盛った談話に人々は陶然となった。

彼は意気投合する人とは徹宵議論するところがあった。その一人がマルチン・フランシスコ・リベロー・デ・アンドラーダ（三世）で、サンパウロを訪れる一つの楽しみはマルチン・フランシスコと語り合うことであった。カピストラノ・デ・アブレウは二十代でドイツ語を習得し、ドイツ哲学は原書で読みこなした。言論人としての彼の論説には思想的の深さがあった。それは彼に哲学の素養があったからである。

彼は家庭的には恵まれず、若くして妻を失ったことが、彼をして一層変人たらしめた。妻亡き後の彼は再婚することもなく、長い寡夫生活を送った。

彼は元来が頑健で病臥したこともなかったが、七〇を過ぎてから心筋症の兆候が現われ遂にそれが命取りとなった。

彼の病が嵩じてリオのボタフォーゴ区の自宅に永眠したのが一九二七年八月二二日、七三才であった。彼の遺

言はわずか数行の簡単なもので、自分の遺体は簡素な棺に納めて葬るようにとあった。

近代芸術週間

一九二二年の二月十三日から一七日にわたって、サンパウロ市立劇場で『近代芸術週間』が開かれた。それは芸術革新運動であり、創始者はマリオ・デ・アンドラーデを筆頭にオスワルド・デ・アンドラーデ（文学者）、グラサ・アラニーヤ（文学者）、マヌエル・バンデーラ（詩人）、パウロ・プラード（著述家）、ギレルメ・デ・アルメーダ（詩人）、メノッチ・デル・ピツキア（文学者）、ビートル・ブレシエレー（彫刻家）、ジ・カヴァアルカソチ（画家）、アニタ・マルファッチ（画家）などであった。

この芸術革新運動は植民期以来のヨーロッパの影響に温存する因襲性を打破し、ブラジル真実の芸術を創造する叫びであった。それは文芸のモダニスト運動とも呼ばれた。

『近代芸術週間』の初日（二月十三日）はグラサ・アラニーヤの开会講演にはじまり、詩人エルナニ・ブラーガとギレルメ・デ・アルメーダの詩の朗読があった。

第二日にはマリオ・デ・アンドラーデとメノッチ・デ

ル・ピッキアの文学講演があり、つづいて若きピアニスト、ギオマール・ノヴァエスの独奏があつた。

最終日はビーラ・ローボス指揮の交響楽で、ビーラ・ローボスほかアレシヤンデレ・レビー、エルネスト・ナザレー、アルベルト・ネポムセノなどの作品が演奏された。

音 楽 史

ブラジルの音楽史は植民初期のジェズイットの土民教化に発している。

ジェズイットが土民児童に唱歌を教えるために用いた楽器はポルトガルから入れたチャルメラ、フルート、トランペット、ハイション、コルネッタ、ファゴットであつた。中にはブラジルで作られたものもあつた。

ブラジルのインジオではツナピンバとタモヨ族が音楽を愛好し、歌いながら一日に数時間も踊る習慣があつた。ジェズイットはそれを巧みに利用した。

ジェズイットが土民教化をはじめたのが一六世紀中期だから、その当時にブラジル音楽が生れたとすれば四三〇年の歴史があるわけである。

しかし、それはポルトガルの音楽を土人向きに変曲し

たもので、ブラジルの土着音楽ではなかった。いずれにしてもジェズイットが音楽によって土民教化の実績を挙げたことは事実である。そのことはアントニオ・ブラスケス、ジョアン・ナヴァロ、フェルノン・カルジン、クリストヴァン・デ・ゴウベア神父のポルトガルに送った書翰にくわしく書かれている。

一七世紀となつてはアントニオ・ヴィエーラをはじめジオゴ・ダ・コスタ、バルタザール・アラゴン、フェルナンデス・ヴィエーラ僧なども音楽によって土民教化の顕著の成績をあげた。

一七世紀から一八世紀にかけてはフランシスカン、カルメリッタ派の布教活動も盛となったが、それも土民の音楽指導に重きがおかれた。その中心となったのがオリнда、バイアとミナスのオーロ・プレートである。

わけでもミナスは黄金景気のために各教会にヨーロッパ製のオルガンが備えられ、合唱団がつくられてミサや教会祭にはさながら音楽祭の観を呈した。それらの教会音楽はヨーロッパ音楽であつてブラジル音楽ではなかった。ようやく一八世紀末から一九世紀初頭にブラジル人の作曲家が主にミナスに現われた。

一八世紀前半にリオ郊外のジェズイットのサンタ・クルース農園に黒奴の子供の合唱団がつくられたことはブ

ラジルの音楽史に特筆を要する。

ブラジル音楽の発生はミナスのオーロ・プレートであり、次いでジアマンチナにブラジル人の作曲家が出た。それはクレオフェ・マツトス、フランシスコ・ゴームス・ダ・ローシャ、イナシオ・ペレーラ・ネーベス、マルコス・コエーリヨなどである。特に教会音楽の作曲家ではジョゼ・ジョアキン・エメリコ・ローボ・デ・メスキータを挙げねばならない。これらの音楽家はミナス派バロック音楽家と見なされているが、実際にはイタリア・ウィーン派ともいうべきもので、ペルゴレジとハイドンの影響をかなりうけていた。

ドン・ジョアン六世の治世の偉大な作曲家にはパーデレ・ジョゼ・マウリシオ・ヌーネス・ガルシア（一七六七〜一八三〇）がある。

一八一一年にヨーロッパで名声高いポルトガル人の作曲家マルコス・アントニオ・ダ・フォンセツカ・ポルトガル（一七六二〜一八三〇）がリオに到着し、一八三〇年の死に至るまでブラジルに永住したために、ブラジルの楽壇は彼から多大の影響をうけた。

また一八一六年にフランスの美術使節と同船でリオに渡来したオーストリア人の作曲家にシグモン・ネウコム（一七七八〜一八五八）がいた。彼はハイドンの弟子で、

タレーラン家のピアニストであった。ネウコムはジョゼ・マウリシオの音楽的天分に感嘆し、その作曲指導に当たった。

次に現われたのがブラジル国歌の作曲家フランシスコ・マヌエル・ダ・シルバ（一七九五～一八六五）である。

これによって聖樂の世紀が終ってイタリア歌劇の時代となる。そこでアントニオ・カルロス・ゴメス（一八三六～一八九六）が登場する。カルロス・ゴメスは皇帝ドン・ペードロ二世から奨学金を与えられてイタリアに遊学し、歌劇『オ・グワラニー』をはじめ『フォスカ』『オ・エスクラボ』などを作曲して有名となった。カルロス・ゴメスはヴェルディの影響をかなりうけている。

カルロス・ゴメスにつづくレオポルド・ミグエス（一八五〇～一九〇二）はワグナーに似るところがあり、またエンリッケ・オスワルド（一八五二～一九三一）はフランス派音楽家というにふさわしい。

ヨーロッパの伝統を脱した純ブラジル音楽の創始者はアレシヤンデレ・レビー（一八六四～一八九二）で、彼の交響楽『スイチ・ブラジレーラ』と『コマラ』は彼の没後に発表された。

アレシヤンデレ・レビーに次いでアルベルト・ネポム

セノ（一八六四〜一九二〇）が純ブラジルのテーマの『セリエ・ブラジレーラ』で成功を収めた。

折衷派音楽ではフランシスコ・ブラーガ（一八六八〜一九四五）が挙げられるが、彼はブラジル音楽の熱烈な普及者で、作曲家であるとともに音楽教師であった。彼の弟子にジョゼ・シケイラ（一八〇一〜）がある。

ブラジル現代音楽の普及者にグラウコ・ヴェラスケス（一八八四〜一九一四）があるが、現在彼の名はほとんど忘れられている。

年代的にフランシスコ・ブラーガに続く作曲家にはバローゾ・ネット（一八八一〜一九四一）、ルシアーノ・ガレー（一八九三〜一九四八）、ロレンゾ・フェルナンデス（一八九七〜一九四八）がある。

ここに列挙した作曲家のほかに彗星のように現われたのがエートール・ビラ・ローボス（一八八七〜一九五九）であり、彼によってブラジル音楽の新時代が画された観があった。彼は精力絶倫というか、尽きない創作力をもって純ブラジルのテーマの交響楽、協奏曲、合唱曲、室内楽、ミサ曲、ピアノ曲を作曲した。その作品は一〇〇〇を数える。

現存の作曲家にはフランシスコ・ミニョーネ（一八九七〜）がある。彼の作品は割合にすくないが、ブラジ

ルの社会風土をテーマとした作曲家で名高い。

またビラ・ローボスの作風を踏襲し、その後継者と見なされているのがカマルゴ・グワルニエリ（一九〇七―）である。彼はビラ・ローボスに似る多作家で作品は多く、いずれにもブラジルの豊かな地方民族色が出されている。代表作はピアノ曲『トカタ』と『ポンテーロス』、オペラ『ペードロ・マラザルテ』『ア・フロール・デ・トレメンベ』などである。

ほかにルイス・コスメ（一九〇八―）とクラウジオ・サントロ（一九一九―）がある。

ポプラール音楽ではモザート・デ・アラウージョ、アリー・バローゾ、シーコ・アルブケルケ、アルツール・ナポレオン、エルネスト・ナザレー、ペーシエ・グエラなどが挙げられる。

またポプラール音楽のボッサノバの分野ではビニシウス・デ・モラエス、ノエル・ローザ、カルロス・リラ、ロナルド・ボスコリ、カストロ・ネーベス、ラマルチネ・バボがある。

以上、専ら作曲家を挙げて演奏家と指揮者を省いた。

作曲家の巨星ジョゼ・マウリシオ・ヌーネス・ガ
ルシア（一七六七〜一八三〇）

ジョゼ・マウリシオ・ヌーネス・ガルシアはリオに生
れてリオに逝った。父はミナス出身で、母は黒人奴隷
だったので彼は半黒であった。

ジョゼ・マウリシオは少年期に独学で哲学歴史、地理、
ラテン、フランス、ギリシア語を学んだ。また彼は聖職
者たる勉学を積み、パーデレの資格を得た。その期間に
数名の学僧から音楽の指導をうけている。

彼は一七九八年に三十一才でリオのセー教会のオルガ
ニスト、聖樂指導者となった。

一八〇八年に摂政ドン・ジョアンがポルトガル王室を
リオに移すにおよんで、ジョゼ・マウリシオの非凡の音
樂的才能に感服し、彼を王室礼拝堂の聖樂指揮者に任命
した。当時ジョゼ・マウリシオは旺盛な作曲活動をした。

一八二八年にドン・ジョアンの母ドーナ・マリア一世
が逝去し、ジョゼ・マウリシオは『鎮魂曲』を作曲した。
同年、フランスの美術使節と同船でザルツブルグの作曲
家シグモソ・ネウコムがリオに到着した。ネウコムは
ジョゼ・マウリシオの傑れた音楽的天分に感嘆し、その
指導に当たった。

ジョゼ・マウリシオは多くの教会音楽と協奏曲、室内楽を作曲したが、それはバロック・ロマンチズムに属すべきもので、ハイドンとモーツァルトの影響を受けている。それらの作品に失なわれたものがあるがその発掘に努力したのが文学者トウネー子爵である。

ブラジル国歌の作曲家フランシスコ・マヌエル・ダ・シルバはジョゼ・マウリシオの指導を受けている。

ブラジル国歌の作曲家フランシスコ・マヌエル・ダ・シルバ（一七九五〜一八六五）

一八二二年九月七日にブラジルの独立宣言をし、同年一二月一日に帝位についたドン・ペードロー一世は、その後議會を無視した専制政治をとって閣僚や議員の反感を買い、遂に議會を解散した。そのころから国民のドン・ペードローに対する誹謗の聲が高まり、一八二六年のシスプラチナの敗戦は徹底的に彼の信望を失なわしめた。そして近衛兵団が反乱をおこすまでに事態が悪化した。そのような政情不安と社会の暗澹たる時にあって民衆は前途に希望と光明を求めるに切なるものがあつた。

フランシスコ・マヌエル・ダ・シルバは音楽家の立場から、ブラジル国民の士気を高揚するための作曲の構想

を練っていた。

一八三一年一月の或る日の午後である。リオのセニョール・デ・パツソス街のジョゼ・マリア・テイシエーラの雑貨店で数名の音楽家が雑談していた。それはこの店に集る常連で、例によって世間話に花を咲かせていた。

彼らの話題は皇帝ドン・ペードロ一世が宮廷楽団の解散を命じたことにおよび、その暴挙を非難して大いに気焰を挙げていた。

フランシスコ・マヌエルはふと席を外してペンとインキ壺を持ち来り、ポケットから取出した紙片にさらさらと五線をひき、楽譜を書きはじめた。他の仲間はまだはじまったかといわんばかりの顔つきをしていたが、店主のジョゼ・マリア・テイシエーラが『それは何かね』と訊ねた。フランシスコ・マヌエルは軽く『別になんでもないよ、新しいインノ（頌歌のテーマ）だよ。』と答えながら書きかけの紙片をポケットに入れた。

フランシスコ・マヌエルはドン・ペードロの退位の日が早晚到来することを察知し、作曲の機会をねらっていたようである。そのテーマが頭にうかぶままジョゼ・マリア・テイシエーラの店内で書き綴ったのである。それによって法学者新聞人オビジオ・サライバ・デ・カルヴァーリョが作詞し、ブラジル国民歌ができあがったの

である。しかし、当のフランシスコ・マヌエルはそれが後にブラジル国歌になるとは考えもしなかった。ドン・ペードロ一世の退位から十年が流れ、一八四一年七月一日にドン・ペードロ・デ・アルカンタラ（二世）の即位式となった。それ以前、フランシスコ・マヌエルは彼の創立した音楽院を訪れた当時一四才の王子ドン・ペードロ・デ・アルカンタラに謁見した。彼にはその時、金髪長身の貴公子そのもののドン・ペードロのために頌歌を捧げたい気が湧いた。そこでドン・ペードロ・デ・アルカンタラの即位式のために“戴冠式頌歌”を作曲した。それはジョアン・ジョゼ・デ・ソーザの作詞であった。この”戴冠式頌歌”と『ブラジル国歌』と混同され易いが、全く別のものである。現在のブラジル国歌は一八三二年四月七日のドン・ペードロ一世の退位の時に作曲された『ブラジル国歌』の楽譜である。

ここで数十年を飛躍するが、一八八九年一月十五日にデオドロ元帥によって共和制が宣言された翌年一八九〇年一月二〇日に、ブラジル共和国国歌の審査会が開かれた。それに先立って共和国臨時政府は作曲家カルロス・ゴメスにブラジル共和国国歌の作曲を懇請した。しかし、カルロス・ゴメスは皇帝ドソ・ペードロ二世の恩義を感じ、デオドロ元帥の要請に応じなかった。結

局は共和国国歌の候補となったのはフランシスコ・ブラーガ、アルベルト・ネポムセノ、レオポルド・ミグエスの曲譜であった。この三つの曲はリオのフルミネンセ劇場で演奏され、それぞれ会衆の拍手をうけた。最後にオーケストラに編曲されたフランシスコ・マヌエル・ダ・シルバの『ブラジル国民歌』が演奏されるや、会衆は万雷の拍手をした。デオドロ元帥は同席の補佐官に『これがよい、これがよい。』と大きく肯づいた。

このようにして法令第一七二号をもって、フランシスコ・マヌエル・ダ・シルバの楽譜がブラジル共和国国歌に決定された。進んで一九〇九年にオゾリオ・ズッケ・エストラーダの”独立の叫び”がブラジル国歌の歌詞となった。更に一九二二年九月六日付の法令第一五、六七一号によって現在のブラジル国歌最終的に決定された。

それはブラジル独立百周年記念日の前日である。

作曲家フランシスコ・マヌエル・ダ・シルバは一七九五年二月二日にリオに誕生した。彼の少年期の一八〇八年にポルトガル王室のブラジル移転によって、リオの文化的気風が高まった。特にドン・ジョアン六世の招碑で渡来した作曲家マルコス・ポルトガルとハイドンの弟子、クレーラン家のピアニストのシグモン・ノウコムによってリオの楽壇に新風がおこされつつあった。

フランシスコ・マヌエルははじめジョゼ・マウリシオ・ヌーネス・ガルシア僧から音楽の指導をうけ、つづいてシグモン・ノウコムに師事して作曲を学んだ。フランシスコ・マヌエルは宮廷楽団の指揮者に任命され、思う存分作曲に没頭することができた。

一八四六年にフランシスコ・マヌエルは永年ブラジルの楽壇に尽した功績によってカヴァレーロ（騎士）の称号をうけ、ローザ勲章を授与された。

彼は一八五一年にフルミネンセ劇場で自作のオペラを発表し、つづいて青年作曲家カルロス・ゴメスのオペラ『ア・ノイテ・ド・カステロ』（城の夜）を指揮して絶讃を浴びた。それから四年後の一八六五年一月一日に七〇才で長逝した。

カルロス・ゴメス（一八三六―一八九六）

アントニオ・カルロス・ゴメスは一八三六年七月二日、サンパウロ州のカンピーナスに生れた。彼の父マヌエル・ジョゼ・ゴメスはカンピーナスの音楽教師で、実兄ジョゼ・ペードロ・デ・サンタアナも有名なバイオリニストであった。

マヌエル・ゴメスは四回の結婚で二六人の子を得た

が、アントニオ・カルロス・ゴメスは三番目の妻の子である。彼は幼少から父について音楽の指導をうけた。二〇才の時に兄ジョゼ・サンタアナとともに郷土カンピーナスの音楽祭に出演し、次いでサンパウロに住んだが、当時彼は大学歌インノ・アカデミコを作曲した。これがサンパウロとリオの学生によつて歌われて評判に上った。その後カルロス・ゴメスは友人の奨めによつてリオに出て勉学に励むことになった。リオでは皇帝ドン・ペードロの計らいで国立音楽学校に入学した。当時の国立音楽学校長はフランシスコ・マヌエル・ダ・シルバであつた。

カルロス・ゴメスは国立音楽学校在任中にオペラ『ア・ノイテ・ド・カステロ』と『ジョアナ・デ・フランデレ』を作曲発表した。カルロス・ゴメスの非凡の音楽的素質に感嘆した皇帝ドン・ペードロ二世は彼のヨーロッパ遊学のための奨学金の授与を決定した。

イタリアに渡つたカルロス・ゴメスはミラノのスカラ劇場の作曲家ラウロ・ロッシに師事し、一八六六年には同劇場のマエストロ・コンポジトール（作曲・指揮者）となつた。

彼の最大の栄光は一八七〇年三月一九日のオペラ『オ・グワラニー』の初公演であり、それは空前の成功を

収めた。

オペラ『オ・グワラニー』はジョゼ・デ・アレンカールの小説に基づき、詩人アントニオ・スカルビニの台詞によって作曲されたものであった。名作曲家のヴェルディやロシニが全盛を誇った歌舞音楽の殿堂スカラ劇場で若いブラジル人の作曲家カルロス・ゴメスが歌劇『オ・グワラニー』を発表したことは至上の榮譽であった。『オ・グワラニー』がリオで初上演されたのは同じく一八七〇年で、特にドン・ペードロ二世の誕生日の十二月二日選ばれたのはカルロス・ゴメスの皇帝の恩顧に報いる気持ちの表われであった。一八七一年三月に彼は再びイタリアに戻り婚約者と結婚し、『フォスカ』『サルバドール・ローザ』『マリア・ツュードール』『オ・エスクラーボ』などのオペラを作曲した。

『オ・エスクラーボ』のスコア（全楽譜）はブラジルの奴隷解放の恩人イザベル皇女に捧げられた。

カルロス・ゴメスはイタリアで愛妻と愛児マリオを失ない。寂しい晩年を送っていたが、祖国ブラジルのパラ音楽院長として迎えられ、ベレンに着いて間もなく病死した。

エートル・ビラ・ローボス（一八八七～一九五九）

エートル・ビラ・ローボスはリオ市に生れて同市に逝った。

彼は現代作曲家の巨星、楽団指揮者、音楽教師として世界に知られた。

チェロ奏者だった父の影響か、彼は幼にして音楽的素質を規わした。

一七才で作曲をはじめ、半ばボヘミアンだった彼はリオのバーやカフェでオーケストラを指揮した。ビラ・ローボスは二〇代で数回にわたってブラジル奥地を旅し、地域的特異性と住民について学んだ。特にアマゾンの大自然に作曲の構想を湧かせた。

その後彼はヨーロッパに遊学してドビッシーとストラビンスキーに師事した。

一九二二年のサンパウロ市立劇場で催された『現代芸術週間』に彼は自作の数曲を発表して大好評をうけた。

ビラ・ローボスは旺盛な創作力と尽きない精力をもつて連続的に作曲した。その作品種目はオペラ、バレエ曲、ミサ曲、シンフォニー、協奏曲、オーケストラ、三重奏、四重奏、歌謡曲、ピアノフォルテ、合唱曲、ギター曲など一〇〇〇に達する。

特にバッハをブラジルのテーマによって編曲した『バキアナス・ブラジレーラス』と『シヨロス』が有名である。

合唱曲とミサ曲では『アマゾンの大自然』と『ブラジル発見』『聖セバスチオン』『アヴェ・マリア』がある。ビラ・ローボスのギター曲はアンデレ・サゴビアが好んで演奏し、ピアノ・フォルテはルビンスタインが口を極めて賞讃した。また声楽はアメリカの女流歌手マリアン・アンダーソンがその普及につとめた。

美術史（絵画）

ブラジルに現われた最初の画家はオランダ人のフランツ・ポスト（一六一二〜一六八〇）である。彼はブラジル北東部がオランダの西インド会社に占領された当時、初代オランダ総督マウリシオ・ナッサウ伯とともにレシフェに移住して七年をすごした。その間フランツ・ポストは主にペルナンブーコの砂糖農園や風景を描いた。それと同時にオランダ人の画家にアルバート・エックホートがある。

ドイツ人の画家リカルド・ピラール僧は一七世紀末にリオのサン・ベント修道院の壁画『受難のキリスト』を

描き上げた。

一八世紀のブラジルの画壇は北部（バイアとペルナンブーコ）とミナス、フルミネンセ（リオ・デ・ジャネイロ）の三派に大別される。

ペルナンブーコ著名の画家はカヌート・ダ・シルバ・タヴァーレス、バイアはジョゼ・ジョアキン・ダ・ローシャとジョゼ・テオフィロ・デ・ジェズスである。ミナス派ではマヌエル・ダ・コスタ・アタイデが挙げられる。

リオ人の画家にはジョゼ・ソアーレス・デ・アラウージョ、ジョゼ・デ・オリベira・ローザ、レアンドロ・ジョアキン、ライムンド・ダ・コスタ・エ・シルバとマヌエル・ジーアス・デ・オリベiraがある。ドン・ジョアン六世の招聘で一八一六年にリオ・デ・ジャネイロに渡来したフランス美術使節はネオクラシック芸術をもたらし、ブラジルの画壇は一段の向上を見た。特に歴史画家ジャン・バチスト・デブレーと風景画家ニコラウ・アントアソン・トウネーの弟子からマヌエル・デ・アラウージョ・ポルト・アレグレ、アゴスチーニョ・ダ・モッタ、アウグスト・ミューレルなどの優秀画家が出た。

これらはリオの国立美術学校の教師となり、ビートル・メーレレス、ペードロ・アメリカ、ゼファイリノ・ダ・コスタ、ジョゼ・マリア・デ・メデーロスなどの画家を育

てた。

アルメーダ・ジュニオール（一八五〇～一八九九）の出現によっては、ブラジル画壇にヨーロッパ・アカデミーの影響を脱して純ブラジルの画風を生むことになった。

アカデミック派の画家ではロドルフォ・アモエド、デシオ・ピラーレス、オスカル・ペレーラ・ダ・シルバ、チスタ・ダ・コスタ・カスターネットなどがある。このうちオスカル・ペレーラ・ダ・シルバは主に歴史画を描いた。エリゼウ・ビスコンチはアカデミー派の流れを汲みながらも新しい印象派の傾向を生んだ点ではブラジル唯一である。

ロシアからヨーロッパを経てブラジルに移住して帰化人となったラザール・セガール（一八九一～一九五七）とブラジル人の女流画家アニタ・マルファッチ（一八九六～一九五三）によってはブラジルにモデルニズモ画風が入れられた。

マリオ・デ・アンドラーデとともに一九二二年の『現代芸術週間』の発想者であるジ・カヴァルカンチをはじめカンジド・ポルチナリ、ギナルド・パンセツチ、イベレ・カマルゴはいずれも故人となった。

ビートル・メーレレス（一八三二～一九〇三）

ビートル・メーレレス・デ・リーマは一八三二年八月一日、サンタ・カタリナの古都テステロ（フロリアノポリス）に生れ、一五才でリオの国立美術学校に入学した。

一八五三年に『聖徒ヨハネ』を描いてヨーロッパ遊学賞金を授与された。

彼はヨーロッパではローマとパリで名匠に師事した。パリ滞在中の一八六一年にペードロ・アルヴァレス・カブラルのブラジル発見に囲む『第一回のミサ』を描いてパリのサロンに出品した（パウリスタ博物館所蔵）。

ブラジルに帰国しては国立美術学校の教授となり、パラグワイ戦争に従軍してパイサンズーの占領戦を目のあたりに眺め、更にリアシュエーロ戦の跡を訪れた。

ビートル・メーレレスは歴史画家で、特に戦争の場面を多く描いた。『リアシュエーロ戦』と『グワララペス戦』は国宝的名画となっている。彼の晩年の作品には宗教的テーマのものがある。

ビートル・メーレレスは一九〇三年二月二二日にリオに死去し、カツンビー墓地に葬られた。

ペードロ・アメリカ・フイゲーラ・デ・メーロ

(一八四三〜一九〇五)

ペードロ・アメリカは一八四三年四月二九日に、パライバ州のアレーアスに誕生した。彼は幼にして絵を描くことを得意とし、木炭片をもって家の壁や扉に人物や動物を描いて人をおどろかせた。

一八五二年にフランス人の科学探検家ブルネーに乞われ、当時一〇才のペードロ・アメリカは博物標本図の画家として参加し、北東ブラジルの奥地を旅行した。

ペードロ・アメリカは皇帝ドン・ペードロ二世の奨めでリオの国立美術学校に入学し、卒業後はフランスに遊学してソルボンヌ大学で哲学を学んだ。同時に著名の画家に師事して画業に励んだ。

一八七七年にペードロ・アメリカはイタリアのプロレンスでブラジルの歴史画『アバイの戦闘』を完成し、その個展を開いたが当時ヨーロッパ旅行中のドン・ペードロ二世夫妻はその開会式に臨んだ。

ペードロ・アメリカは『アバイの戦闘』につづいて『カンプ・グランデの戦闘』を描き更にイピランガ丘上の摂政ドン・ペードロの独立宣言の場面を二年を要して完成した。

ペードロ・アメリカは二度目のヨーロッパ滞在中、一九〇五年一〇月八日、フロレンスに逝った。

アルメーダ・ジュニオール（一八五〇～一八九九）

ジョゼ・フェラーズ・デ・アルメータ・ジュニオールは一八五〇年にサンパウロのイツーに生れ、一八九九年にピラシカーバで女性問題のために暗殺された。

アルメーダ・ジュニオールは一八六九年にリオの国立美術学校に入学して、ビートル・メーレレスに師事した。

一八七六年から一八八二年まで皇帝ドン・ペードロ二世の奨学金をうけてヨーロッパに遊学し、パリではカバネルの門に学んだ。

ブラジルに帰国した彼はヨーロッパ・アカデミーの影響をうけながらも、ブラジル純粹のモチーフを求めて彩管をとった。

アルメーダ・ジュニオールほどブラジルの風物と社会情趣を純正に表現したものはない。特に彼は土着人のカボクロとカイピラ、庶民の生活を多く描いた。縄煙草を刻むカイピラとビオロンを奏でるカボクロを描いたものが名高い。また庶民的のものでは『病氣上りの女性』と『時宜を得ぬ訪問』『モデルの休憩』が風刺的で爽やか

な諧謔味があつて人をひきつける。

アルメーダ・ジュニオールの大作は『モンソン隊の出発』である。河川によつてマツト・グロツソを探検した後期バンデーランデが家族に見送られながらチエテ川のポルト・フェリスを出立する場面を描いたもので、パウリスタ博物館に所蔵されている。

カンジド・ポルチナリ（一九〇三—一九六二）

カンジド・ポルチナリは一九〇三年一月二十九日にサンプアウロのプロドウスキに生れた。父ジョバニ・ポルチナリと母ドミニカ・トルクワルトはイタリア移民で、カンジドは十一人兄弟の二番目であつた。

カンジドは九才で郷土プロドウスキの教会の天井画製作の助手となつた。一九一八年にリオの国立美術学校に入学し、バチスタ・ダ・コスタとルシリオ・デ・アルブケルケに師事した。

彼の最初の作品は一九二一年の『田舎のバイレ』であり、翌一九二二年にはじめて画展に出品した。一九二三年にはサロン・ナショナルで青銅メダルを受賞し、一九二八年に詩人オレガリオ・マリアノの肖像画によつてヨーロッパ遊学賞金を獲得した。彼はイタリア、フラン

ス、イギリス、スペインに学んで帰国したのが一九三〇年である。

ポルチナリの名が世界に知られたのは一九三五年にニューヨークのカーネギー・インスチテートの国際絵画展に『コーヒー』のテーマの作品が入賞してからである。

その後は自由潤達の作風と独創力をもって連続的に大作を発表した。それは天賦の創作意欲の表われともいふべきものであった。

リオの旧文部省のアズレージョのパイネルをはじめ、一九三九年のニューヨークの国際絵画展に出品した三点の作品は広く話題に上った。

一九四〇年にデトロイトで個展を開き、一九四二年にはワシントンの国会図書館の壁面を完成した。ブラジルでは一九四三年のリオのラジオ・ツピー放送局の壁画があるが、惜しくも一九五二年の火災で焼失された。

彼のブラジルにおいての代表作品は一九四五年の『移民』『吊床の葬儀』『死せる男の子』があり、これはサソパウロの近代美術館に所蔵される。

ベロ・オリゾンテのポルチナリの作品には大聖堂とパンプリーヤ教会のパイネルがある。またリオのボア・ビスタ銀行の『プリメーラ・ミサ』とポルトガル銀行の『ブラジル発見』の壁面が名高い。

そのほかサルバドールのバイア銀行の『ドン・ジョアン六世の到着』、ミナス、カタグワゼス高等学校の壁画『チラデントス』がある。

サンパウロでは新聞『オ・エスタード・デ・サンパウロ』旧社屋の壁画（新聞『ア・プロピンシア・デ・サンパウロ』創刊当時の政界の代表人物を描いたもの）がある。

一九五四年のポルチナリの巨作ではニューヨークの国連本部の壁画『戦争と平和』を挙げねばならない。

ポルチナリは一九五四年末に色具中毒で臥床したことがある。おそらくそれが原因となったらしく、しかも彼の面道への過度の精進による精力消耗が死を早めたといえる。

ポルチナリの侍医シャビエル・デ・シルベーラは或る特殊の色具の使用を禁じたにもかかわらず、彼はそれに気をとられず、とりつかれたように製作を続けた。いわば色具中毒が彼の命取りとなったのである。

ヨハン・モリッツ・ルゲンドス（一八〇二—一八五八）

ヨハン・モリッツ・ルゲンドスはドイツ人の画家で、

オーグスブルグに生れてウエルヘーンに死去した。彼は父とともにミュンヘンで面道に修業を積み、一八二一年にラングスドルフ男爵のアマゾン科学探検に、博物標本図の画家として参加した。

彼はブラジルに住む間に沢山の風景や風俗画を描いた。特に黒奴の使役による金山での金の採集やコーヒー園、黒奴の処罰などの場面を描いたものが多く、それらは画帖となっている。

ルゲンドスはブラジルを去った後、一八二七年から一八二九年にかけてローマにすごし、一八三一年からは再びアメリカを旅行し、メキシコ、ペルー、チリを訪れている。彼は一八三五年に『ブラジルの旅』の書を刊会したが、それには多くのスケッチが挿入されている。

教育史の点検

一七五九年のポンバル旋風によるジェズイットの追放はブラジルの教育界に一つの変革というか、空白期をもたらした。ジェズイット追放当時のブラジル全土には二四のジェズイット高等学校と一七の神学校があつた。一七七二年にポルトガル王室令によつてブラジルに小学校と中学校が設けられることになったが、それはリオ・

デ・ジャネイロほかわずかの主要都市にのみ実施された。

一七八三年には第一三代副王ルイス・デ・ヴァスコンセーロスは単科大学の設立を提唱し、従来のポルトガル政府直属のブラジルの教育行政は副王の権限におかれることとなった。そこで副王が中学校の教師や視学官を任命したが、教師の大部分はフランスシスカンとカルメリツタの僧侶であった。

摂政ドン・ジョアンによるポルトガル王室のブラジル移転の一八〇八年に、リオに海軍兵学校が設立され、一八〇九年にはバイアに医学校（後のバイア医科大学）が設けられた。

リオに医学校が設立されたのは一八一三年である。やがて一八二二年のブラジル独立となり、政界では保守党に対して自由党が優勢を示し教育面にも刷新が画された。

一八二三年、国会で憲法第一七九条に即応した初等教育制が承認された。しかし予算不足のために小学校の設立と教師の養成が国会の決定に伴なわない憾みがあった。そうした時、一八二七年にオリンダとサンパウロに法律学校（後の法科大学）が設立され、人材養成の温床となった。

オリンダに設立された法律学校は一八五四年にレシ

フェに移され、名教授トビアス・バレット（一八三九～一八八九）によってレシフェ法大の新時代が生れた観があった。

サンパウロ法律学校の創立は一八二七年八月一日で、これまたラルゴ・サンフランシスコ大学の名声を高め、幾多の著名人物を輩出して現在に至っている。

時代的に逆転するが、一七七二年にポンバル侯によってコインブラ大学の学制と学科に改革がされ、それがブラジル人の留学生に新思想を植えつけることになった。彼ら留学生は自由思想を抱き、祖国ブラジルの独立を希う気に燃えた。加うるに一七七六年のアメリカの独立と一七八九年のフランス革命はミナスの革命陰謀をうながした。

また宗教家思想家アゼヴェド・コウチーニョ（一七四二～一八二一）が一八〇〇年にオリンダに設立した神学校はブラジルの教育界に新気風を生んだ。同校の教育要綱は旧来のジェズイットの教育理念を脱却したりベラルのものです、神学、哲学、倫理のほか物理、数学、地理、化学などの科目があった。このオリンダ神学校の自由思想が一八一七年のペルナンブーコ革命の根源をなしている。

一八三二年まではブラジルに工業学校はなく、リオの

陸軍兵学校に工科があつたにすぎない。それが一八七四年にエスコーラ・セントラルの名称で独自の校舎をもつたが現在のリオの工科大学である。

サンパウロでは一八三六年にラファエル・トビアス・デ・アギアール（一七九四〜一八五七）が工科大学を設立したが、わずか二年にして閉鎖された。それから半世紀を経て、フランシスコ・デ・パウラ・ソーザがインスチット・ポリテクニカとしての工業学校を設けた。それが後のサンパウロ・ポリテクニカ校である。

ドン・ジョアンがバイアとリオに設立した医学校が後に医科大学となったことは先きに述べたが、特にバイア大からは著名の医学者が出ている。その代表人物が精神医学と法医学の泰斗ライムンド・ニーナ・ロドリゲス、オスカル・フレレーレ、ジュリアノ・モレーラ、アフラニオ・ペーシヨット、アルメーダ・コートなどである。

リオ医大出の名医ではサーレス・トーレス・オーメン（第二次帝政の宮廷侍医）、ビセンテ・サヴオイア、アンドラーデ・ペルテンセ、ミゲル・コートが挙げられる。

ブラジルの独立後、宗教団体所属ならない高等学校には一八三七年にオリンダ侯爵（ペードロ・デ・アラウージョ・リーマ）によってリオに創設されたドン・ペードロ二世高等学校がある。同校はイギリスの名門校エート

ンやバーロー・コレッジにも匹敵する。

一八四二年には再びジェズイットがブラジルに入れられ、一八四五年にデステロ（フロリアノポリス）に高等学校が設けられた。ついで一八六七年にレシフェとサン・ルイスに神学校が設立された。

一八六〇年から一八九〇年までにジェズイットによって設立された高等学校には一八六七年にミナスに創立されたコレジオ・ダ・グラサ、コレジオ・カンポ・ベロ、コレジオ・コンゴニヤス・ド・カンポがある。

また一八五二年にニテロイに設けられたコレジオ・サン・ペードロと一八七四年創立のリオのコレジオ・アキノとコレジオ・プログレッソを挙げねばならない。

ほかにエスピリト・サントのアンシエタ中学校とリオ州ノーバ・フリプルゴの同じくアンシエタ中学校が有名である。この二つの中学校は一八七〇年の創立である。一八七五年には皇帝ドン・ペードロによってミナスのオーロ・プレートに鉱山学校が設立された。

師範学校としては一八三五年にリオのプロビンシア統領ジョアキン・ジョゼ・ロドリゲス・トーレス（イタボライ伯爵）によってニテロイに設けられたのが最初である。その後の師範学校は一八三六年にバイア（サルバドール）、一八四五年にセアラ（フォルタレーザ）に設け

られた。リオとサンパウロ師範学校が現われたのは一八八〇年以後である。

ブラジルの教育制が著しく改革されたのはベンジャミン・コンスタンの文相任期であり、特にリオ連邦直轄区の中学と高等学校の学制の大変革がおこなわれ、彼は教育制改革屋といわれた。それと同時期にサンパウロにおいても初等、中学、専門校の学制に大幅の改革がされた。

一八九三年十一月にサンパウロ州統領ベルナルジノ・デ・カンポスによつて新教育令（州令）が公布された。

一八九四年には教育家カエターノ・デ・カンポスと教育長官セザリオ・モツタによつてサンパウロのプラサ・ダ・レプブリカに女子師範学校が設立された。当時カエターノ・デ・カンポスの協力者に二人の女性がいた。一人はブラジル人のマリア・ギレルミナ・ロウレーロ・デ・アンドラーデでアメリカの大学で教育学を専攻した人である。他の一人はアメリカ人のマーシア・ブラウンでボストン師範学校の副校長だった人である。

ここでブラジルの初等と中学の教育普及状況を見るに、一八六七年度の人口（奴隷を除く）八八三万のうち一二〇万が学齡児童だが実際の就学児童は一二万にすぎなかった。

高等専門校の例を見ても、一八五六年創立のリオの工

業学校は、それより一〇年後の一八六五年に五三名の入学者があっただけである。またそれと同年のペルナンブーコの商業学校には二五名の在校生がいたのみである。

そのほかパライー、マラニヨン、バイア、セルジッペ、リオ・グランデ・ド・ノルテにして同様である。これは国民の教育への無関心と経済力の乏しさを物語るものである。ところが大学の入学志望者はむしろ多く、一八六四年度のレシフェ法大の入学志望者は三九六人、サンパウロ法大は四三〇人であり、一八五六年から一八六五年までの一〇年間にこの両大学の入学者は八〇三六名、同期間の医大入学者は二六二二名である。ここにも植民期以来の貴族豪農か然らざれば農奴の二つの階級から成るブラジル社会の特異性が現われている。

今世紀になつては一九一三年にサンパウロにパウリスタ医学校が設立された。それが一九二七年の新校舎建築と同時にサンパウロ医科大学となった。

一九世紀末のブラジルの学校建設にアメリカの宗教団体の活動が目覚ましい。一八七一年のサンパウロのエスコラー・アメリカーナと一八八一年のコレジオ・ピラシカバーノにはじまり、メソジスト教会やプレスビテリアン教会の牧師と牧師夫人の創意で設けられた中学校、高等学校、学院は十指を屈するものがある。

エスココーラ・アメリカーナはマツケンジュー大学の前身である。一八九六年に工学部を設けてコレジオ・マツケンジューとなり、更にマツケンジュー大学となった。一九〇二年にはサンパウロにアルヴァレス・ペンテアーノ商業学校が設立された。現在はブラジル各州の首都のほとんどに連邦大学があり、他の主要都市には単科大学がある。

サンパウロ法科大学

『ラルゴ・サンフランシスコの大学』で知られるサンパウロ法科大学の設立は一八二七年八月十一日付のブラジル帝国法令で決定された。同大学同窓会『オンゼ・デ・アゴスト会』の名称はそれに発している。

サンパウロ法科大学が法律学校として一八二八年三月一日に開校して以来、輝やかしい伝統を保持し、多くの人相を輩出して現在に至っている。ブラジルの過去現在を通じて政界と法曹界を主とする各分野の著名人の過半がサンパウロ法大出である事実からして、いかに同大学が当国の人材育成に寄与しているかがわかる。

サンパウロ法大がニーニョ・デ・アギア（鷲の巣）といわれる理由はそこにある。それは有為の人材の温床を

意味している。

サンパウロ法大がサンパウロ総合大学に所属した一九三四年にサンフランシスコ広場の校舎が改築されたが、それはバロック型建築の粋ともいふべきものである。特に昔から名高いアルカード（アーケード）は原型のまま保存されている。そこで愛国の熱血児が政治、社会、文化を論じた。そのアルカードに立つと詩人カストロ・アルベス、アルヴァレス・デ・アゼヴェド、法学者政治家ルイ・バルボーズ、ジョアン・メソデス・ジュニオール、外相リオ・ブランコ、大統領プルデンテ・デ・モラエス、カンポス・サーレス、ロドリゲス・アルベス、アフォンソ・ペンナ、新聞人ランジェル・ペスターナなどの風貌がうかび出るようである。

一九三二年のサンパウロ護憲革命にサンパウロ法大のアルカードは演説場と化した。

サンパウロ法大の沿革を綴るには順序としてサンフランシスコ修道院の創設からペンをおこさねばならない。サンパウロにサンフランシスコ修道院の建設が許可されたのはスペイン統治の一六二四年十一月である。はじめはサント・アントニオ教会の傍にサンフランシスコ修道院が設けられたが一六三〇年にサンフランシスコ広場に移された。同修道院と並んでサンフランシスコ教会の設

立されたのが一六四三年である。

それから数年を経て、サンフランシスコ修道院の一室が法律学校に当てられた。それがサンパウロ法大の発端といえる。

それから一〇〇年を飛躍し、一七七六年にポルトガルの政府首相ポンバル侯によって、サンパウロのサンフランシスコ修道院の法律学校の拡大計画が立てられた。それはポルトガルのコインブラ大学の法学部を模倣して、法学に併せて修辞学、ヘブライ、ギリシヤ語の学科を設けることであつた。

一八二二年のブラジル独立とともにジョゼ・ボニファシオ・アンドラーダ・エ・シルバは国会で、レシフェとサンパウロに法科大学の設立を提議した。そのボニファシオ案を強く支持したのがジョゼ・フェリシアノ・フェルナンデス・ピニエーロ（後のサン・レオポルド子爵）である。

ジョゼ・フェリシアノ・フェルナンデス・ピニエーロはジョゼ・ボニファシオの同郷人（サントス出身）で、コインブラ大学の法学部に学び、国会議員、リオ・グランデ・ド・スールのプロビンシア統領を歴任した人物である。

一八二三年十一月、レシフェとサンパウロの法科大学

設立委員会が組織され、ジョゼ・フェリシアノ・フェルナンデスが委員長に推された。委員として名を連らねたのはジョゼ・アロウシエ・トレド・レンドン、ペードロ・アラウージョ・リーマ（オリンダ侯爵）、ニコラウ・カンポス・ヴェルゲーロ、アントニオ・カルロス・リベロー・デ・アンドラーダなどである。

一八二七年十月十三日、ジョゼ・アロウシエ・トレド・レンドンがサンパウロ法大の初代総長に就任し、同時に開校式が挙げられた。

しかし、実際に授業が始められたのは一八二八年三月で、初期入学生は三三名であった。

その三三名の中にはジョゼ・アントニオ・ピメンタ・ブエノ、ビセンテ・ピレス・ダ・モッタ、マノエル・ジョアキン・アマラル・グルジェル、アゼヴェド・マルケスがいた。

サンパウロ法大の教授ではバルクザール・ダ・シルバ・リスボア（カイルー子爵の実弟）、ジョアン・メソデス・ジュニオール、スペンサー・ヴァンプレー、レーナルド・ポルシャール、ガーマ・セルケーラ、エルネスト・レーメ、アタリバ・ノゲイラ、ミゲル・レアレなどが有名である。

ブラジルの科学史を辿るにオランダ文化の浸潤がその萌芽をなし、第二次帝政に開花した観がある。

オランダのブラジル侵略は一六二四年にはじまり一六五四年までバイア、ペルナンブーコ、マラニョンにおいて数度にわたるブラジル軍との戦闘があった。その間、ペルナンブーコが西インド会社のオランダ軍に占領されるや、マウリシオ・ナツサウ伯が総督としてレシフェに赴任した。それは一六三七年から一六四四年までだが、この期間にレシフェを中心にオランダ文化が移入され、その影響でブラジルの自然科学が発生した。つまりブラジルはオランダから侵略されたが同時に科学成長の恩恵をうけている。

ナツサウ伯はオランダ本国から著名の科学者を伴ってレシフェに着任したが、その中にアムステルダムのものである。前者はブラジルの薬草と蛇類の研究者ウィルヘルム・ピゾとドイツ人の博物学者ギョルグ・マークグレーブがいた。前者はブラジルの薬草と蛇類の研究をし、『図解ブラジル博物学』の書を刊行した。これがブラジルの博物学の文献として最初のものである。

ナツサウ伯はオランダに天文台を設けて気象と天体観測をしたが、特に一六四〇年の日蝕観測は当時として画

期的のことである。

いま一つ注目を要するのは、オランダ人をブラジルに移住させるに当って、ヨーロッパ各地で迫害されつつあつたユダヤ人を一緒に送り出したことであり、それらの中に傑れた科学者がいた。

ナッサウ伯は野生のカジュ林の中に米州最初の天文台を建て、また動物園を設けてブラジル特産動物の研究をした。

博物学者マークグレーブはレシフェに死去し、一六四四年にはナッサウ伯もオランダに帰還した。ナッサウ伯が去つた後に反オランダ戦争がおこり、二回にわたつたグワララペス戦で、ブラジル軍はオランダ軍を撃滅追放した。

ペルナンブーコからオランダ人が追放された以後は一九世紀初期までほとんど外国の科学者の訪れがなく、少数の探検家と旅行家が来訪したにすぎない。

その主なものは、一七〇四年にバイアを訪れたフランス人のダンピエール、一七一四年に同じくバイアを旅行したラビナー、同年サンタ・カタリナの調査旅行をしたボーゲンビルなどである。

ボーゲンビルの『ブラジル旅行記』はフランスで出版されてヨーロッパ各国の評判に上つた。このボーゲンビ

ルの著書に刺激されてブラジルを訪れた博物学者にフィリップ・エマーソンとジョゼフ・バンクスがある。

フィリップ・エマーソンがブラジルで採集した植物標本はパリの自然科学博物館に収められ、ジョゼフ・バンクスの調査論文と博物標本はロンドンの自然科学博物館に寄贈された。

ここでヨーロッパの学会に眼を向けるに、一八世紀中葉まではスペインにしても純然たる科学者は存在もせず、特に物理学の面では寂寞たるものであった。

一七七一年の事実としてスペインの最高学府サラマンカ大学にニュートンの法則やデカルトの哲学がアリストテレスの哲理と相反する理由で容れられなかつたほどである。

ポルトガルのコインブラにしてもほとんど同様で、教育理念の根本をなすカトリック教理と神学が科学性の進歩を阻害していたことは否めない。そのようなポルトガルの保守的思想を多分にうけたブラジルの植民期にフラメンゴのナッサウ伯によって科学に根ざした進歩性が芽生えたのは空前のことといえる。

一七七〇年までにブラジルの各地に存在したジェズイットの学校の主要科目は文学、神学、倫理であった。

ポンバル侯によってコインブラ大学の学制が改革され

た三年後の一七七一年にブラジルのリオに科学学校が設立されたが七年で立消えとなり、モーロ・ド・カステロに小規模の植物園が科学的施設として存在しただけである。その後はラブラジオ侯爵の副王在任中に科学学校の設立が提唱された。それは物理、化学、農学、医学、薬学に重きをおくものであったがこれも実現されなかった。

時代的に逆転するが、一八世紀初めの科学的できごととしてはリスボアでおこなわれたブラジル人のジェズイットの学僧バルトロメウ・ロウレンソ・デ・グスモンによる航空実験がある。それにつづく地理学者フランシスコ・ラセルダ・デ・アルメーダと博物学者コンセーソン・ベローゾ、鉱物学者アレシヤンデレ・ロドリゲス・フェレーラの出現はあの時代のブラジルにとって大きな誇りであった。

フランシスコ・ラセルダ・デ・アルメーダは一七五〇年にサンパウロに生れ、コインブラに学んで一七七六年にブラジルに帰国しては西部から東部への地理的調査とともにアマゾンの水流盆地の調査をした。彼は一七九〇年に再度ポルトガルに赴き、ブラジルで作製した科学地図に研究論文を添えてポルトガル王室科学院に提出した。

また彼はポルトガル政府の委嘱をうけてアフリカのポルトガル領地の地理的調査に着手し、一七九八年一〇月

に病を得て他界した。彼のモザンビーク調査記はずっと後の一九三六年にポルトガルで出版され、一八七一年のリビングストーンとスタンレーのアフリカ探検記とともに貴重な文献となっている。

アレシヤンデレ・ロドリゲス・フェレーラは一七五六年にバイアに生れて、一八一五年にリスボアに没した。

彼は医学者、博物学者でアマゾン地域の動植物と地質調査をなし、綿密な研究を発表して学界に寄与したことはドイツ人の地理学者アレキサンダー・フォン・フンボルトに比肩するといわれる。

ジョゼ・マリアノ・コンセーション・ベローゾ（一七四二—一八一—）はミナス出身の学僧でコインブラに学び、ブラジルに帰ってはドン・ジョアン六世のポルトガル王室移転と相まって博物学者として多大の貢献をした。彼はポルトガルに在る間も王室の要請で鉱物調査をしたが、その点はジョゼ・ボニファシオに相似るものがある。

コンセーション・ベローゾと同時代のレアンドロ・ド・サクラメント僧（一七七九—一八二九）はペルナンブーコ人で、ブラジルの学校に植物学を取入れた最初の人物である。彼はドン・ジョアン六世が創設したリオの王室植物園の形成と維持に顕著の働きをした。

またフレール・クストジオ・アルベス・セロンも一八二

八年から一八四八年の死に至るまで、王室博物館長として生涯をかけた。

リオ医学校の名教授フランシスコ・フレレー・アレモン（一七九七〜一八七四）は医学者であるとともに植物学の泰斗で、ラテンアメリカ植物学界の第一人者といわれた。彼は一八六六年から一八七四年までリオの国立博物館長の任にあった。

フランシスコ・フレレー・アレモンの後の植物学者ではジョアン・バルボーザ・ロドリゲス（一八四二〜一九〇九）が有名な存在をなした。彼は一八八九年から一九〇九年の死まで、リオの王室植物園長をつとめ、二冊から成る『ブラジルの椰子科』の著述をした。

フランシスコ・フレレー・アレモンとジョアン・ロドリゲス・バルボーザはブラジルが世界に誇るべき科学者だが、他にも植物学者として知られるものにジョアキン・モンテロー・カミニヨラ（一八三六〜一八九六）、サルダーニャ・ダ・ガーマ（一八三九〜一九〇五）、アドルフ・ダック、アルヴァロ・ダ・シルベーラ、フランシスコ・ホーエンなどがある。

この中でフランシスコ・ホーエンはサンパウロのオスワルド・クルース植物園長とアルト・ダ・セーラ植物試験場長をつとめ、彼によって百有余の海岸山脈特有の植

物新種が発見された。

動物学の分野では植物学界ほど多くの著名人を輩出していないが、前世紀後半に傑出する存在をなしたものにパラ―、マラニヨンの動物調査に尽したアントニオ・コレーア・デ・ラセルダと甲殻類の研究で名高いカルロス・モレーラがある。また動物医学の大家ではアドルフ・オルツツ（一八五五―一九四〇）があり、彼の専門は劫ら物病理学であった。

ブラジル特産動物の研究で名高いものにロドルフォ・ヘリングがある。彼によって出版された『動物辞典』はブラジル最初のものである。比較的新しい出版書ではメーロ・レートン著の『蜘蛛図鑑』とオリベ―ラ・ピントの『鳥類図鑑』がある。

爬虫類の研究で著名なのはカンジド・マリアノ・ロンドン將軍の協力者アリピオ・ミランダ・リベ―ロで、著書に『ブラジル特産爬虫類と淡水魚』がある。

これまでに挙げた動植物学者は生粋のブラジル人または外国系ブラジル人だが、次いで外国の科学者でブラジルの動植物調査につくしたものを列举してみる。その過半がドイツ人であることが注目される。

皇帝ドン・ペードロ二世に招聘されたテオドール・

ピツケルトはブラジルの植物調査の功によって一八四七年に叙勲された。

アルフレド・ウイルヘルム・シュワーク（一八四八～一九〇四）は一八七三年から一八九一年までブラジル各州の動植物調査をなし、一八九一年以後はオーロ・プレート薬学校の教授となった。

ヘルマン・フォン・ヘリングは一八五〇年生れで、パウリスタ博物館の初代館長（一八九四～一九一五）であり、ブラジルの軟体動物の研究で世界に知られた。

フリッツ・ミューラーは著名の博物学者でダーウインの学説支持者で知られ、ブラジル移住後は専らサンタ・カタリナの開拓と博物研究に生涯を捧げた。

同じくドイツ人の植物学者フリーデリヒ・フィリップ・フォン・マルチュースは文字通りの科学の使徒で、動物学者ヨハン・スピックスの協力を得て数年にわたってブラジルの山野河川を跋渉し、植物調査に専念した。

マルチュースのブラジル特産植物の研究論文は膨大なもので、その著述はドイツに帰国後もつづけられ、晩年に発表されたものの他に彼の死後マルチュース科学院所属の科学者によって四〇巻から成る『フローラ・ブラジリエンシス』が出版された。

ドイツ系スイス人のエミリオ・ゲールジ（一八五九～

一九一七）はベレンのアマゾン博物館（現在のゲールジ博物館）の創立者で、著書に『アマゾンの哺乳動物と特産魚』がある。

フランス人の植物学者アルフレド・グラジオーは一八六一年から一八九五年まで三四年をブラジルにすごしたが、その間サンパウロのアクリマソン公園とリオのキンタ・ダ・ボアビスタ庭園を設計建設した。彼によって採集された植物標本二万点はリオの国立博物館に所蔵されている。

同じくフランス人の植物学者アウギュスト・サンチレール（一七七九〜一八五三）はマルチュースの以前と一八一六年の二度ブラジルを訪れ、六年間の調査旅行の全距離は一万五千キロに達している。主に中央部と南伯の調査をなし、採集標本の大部分はパリの自然科学博物館に保存されている。彼のブラジル旅行記は数冊から成り『ブラジリアナ文化叢書』に見られる。

スエーデン人の植物学者アルベルト・レオフグレン（一八五四〜一九一六）はブラジルに一五年滞留し、主に北東部の植物調査と早魅防禦の研究に当った。

イギリス人の科学者でブラジルを訪れたものはチャールス・ダーヴィンを筆頭に二三名ある。一九世紀の初期に来伯した動物学者にはスワンソンがあり、その著書に

はブラジルの鳥類に関するものがある。

植物学者ジョージ・ガートナー（一八一二〜一八四九）は三九才で世を去ったが、一八四六年までブラジル南部を踏査し、植物研究に当った。

アマゾン探検で拝に知られるものにアルフレド・ルツセル・ウォーレス（一八二二〜一九一三）とヘンリー・ウォルター・ベーツ（一八二五〜一八九二）がある。

ウォーレスはアマゾンからペルー、エクアドール、太平洋を経てイギリスに帰って著述に没頭した。ウォーレスはダーウインの協力者であり、彼とダーウインのアマゾン上流の探検が、一八五九年に発表された進化論『種子の起源』の骨子となっている。

ウォーレスはアマゾンの科学探検で一万四〇〇〇の昆虫標本作製したが、イギリスへの帰国に便乗船の火災で失なわれた。

天文地理と医学の進歩

ブラジルの独立から第二次帝政の半ばまでに渡来した外国の地理地質学者にドルビグニーがある。彼は一八二三年から一八三三年まで主にマツト・グロツソの調査に当った。

ほかにミナスの地質調査をしたデンマーク人のピーター・クラウゼン、サンタ・カタリナの地理的調査に献身したベルギー人のパリゴートとミナス、バイア、リオ、サンパウロの地質図を作製したフランス人のパッサーの名が挙げられる。

また第二次帝政の科学界に大きな足跡を残したブラジル人にエウクリーデス・ダ・クーニャとマヌエル・デ・ソーザがある。この二人はアマゾン地域の地理地質調査に尽した。

ほかに一八五七年に北伯の地理的調査を執行したブラジル人の一団がある。それはゴンサルベス・ジーン・アス（詩人）、シューツ・カパネマ、フレレー・アレモン、セーザル・ゴルラマキから成るもので、短期の調査でおどろくべき成果を見たが、採集標本と調査記録が汽船の沈没のために失なわれたことが遺憾である。

外国人の博物地理学者ではアメリカ人のチャールス・フレデリック・ハートはアマゾンの特産魚と爬虫類の研究をした。また彼の協力者にスイス人の博物学者ルイ・アガシス（一八〇七〜一八七三）がいた。その他にはアメリカ人の科学者でブラジルの地理地質調査で知られるものにオルヴァイル・ダービーとチャールス・プランナーがある。前者は地理学者と史家で名高く、その数多

い著書は貴重な文献となっている。

天文学者ではフランス人のエマノエル・リアーが皇帝ドン・ペードロ二世の招請で一八五八年にリオを訪れ、同年九月七日と一八七一年の二回、パラナグワで日蝕観測をした。当時、彼の協力者にブラジル人のカンジド・バチスタ・デ・オリベ이라とアントニオ・エマノエル・デ・メーロがいた。

エマノエル・リアーはミナス、バイア、ペルナンブーコの測地研究とサン・フランシスコ上流の水流調査をし、後にリオ天文台の場長に任命された。彼の助手だったベルギー人の数学者ルイ・クルース（一八四八〜一九〇八）もリオ天文台の天体観測に当った。

エマノエル・リアーがルイ・クルースとともに発表したハーレー彗星の観測論文は広く学界に認められ、パリ自然科学会から授賞された。

前世紀の前半にはブラジル人で天文学物理、数学に挺身する学徒は極めて少なく、数名の篤志家によって物理雑誌『ミネルバ』が発刊されたが僅か二号をもって廃刊された。皇帝ドン・ペードロ二世の理解と援助があったにもかかわらず、天文、物理、数学が振わなかったのは、この分野の科学者が研究をつづけるに強力な社会の後立ての必要を物語るものだ。

ここで一つ附言を要するのはリオ・ブランコ父子に関してであり、父リオ・ブランコ子爵と息子リオ・ブランコ男爵ともに保守党所属ながらも常に科学面の進歩に鋭意努力した。

一九世紀中期に現われたブラジル人の数学者にジョアキン・ゴームス・デ・ソーザがある。彼はリオの陸軍兵学校の出身だが医学と法学を修めた詩人でもあった。後日彼は専ら数学に情熱を傾け、一八八二年に音響測定の研究論文をパリ科学院に提出した。

ゴームス・デ・ソーザはマラニョン人で、三四才で夭折したが、彼が数学者としてブラジルの学界に残した功績は不滅である。

ゴームス・デ・ソーザに次ぐ物理数学者にセアラ出身のオット・デ・アレンカール（一八七四〜一九一二）がある。彼が一九〇六年に発表した『物理と電磁実験』は後にアインシュタインの『相対性原理』の学説に相通ずるところがあつて世評に上つた。

その後の数学者にはアモロージ・コスタ（一八八五〜一九二九）がある。彼は数学者に合せて思想家であり、その学理的根拠はアンリ・ポアンカレと一致するものがある。更に新しい数学者ではサンパウロ人のテオドロ・ラーモス（一八九六〜一九三六）を挙げねばならない。

このあたりで医学に移るが、法医学、心理学、人類学の分野ではライムンド・ニーナ・ロドリゲス（一八六二〜一九〇六）をはじめアルツール・ラーモス、オスカール・フレレー、アフラニオ・ペーシヨットが最も代表的である。

著名の衛生医学者としそはオスワルド・クルース、ルイス・ベレーラ・バレット、アドルフオ・ルツツ、エミリオ・リーバス、カルロス・シャーガスがある。

ルイス・ベレーラ・バレットの葡萄酒とビールの醸造原理に合せて黄熱病撲滅の研究は大きな貢献をもたらしている。彼の黄熱病の研究は一八七六年にはじめられ、アドルフオ・ルツツとエミリオ・リーバスが協力した。当時エミリオ・リーバスがサンパウロの隔離病院で犠牲を覚悟して黄熱病撲滅の試験台上ったことは有名なエピソードである。それと時を同じくして、パリのパスツール研究所に学んだサンパウロ人のオスワルド・クルースがリオ連邦直轄区の衛生局長に任ぜられ、黄熱病その他の悪疫一掃のために身命を賭して闘ったことは前章に述べた。

一九〇一年にリオのマンギーニョ研究所が設立されると同時にオスワルド・クルースが所長に推された。それが後にオスワルド・クルース研究所と改名されて現在に

至っている。

同研究所でオスワルド・クルースの協力者だったものにガスパール・ビアンナ、アルシーデス・ゴドイ、エンリツケ・アラゴン、アルツール・ネーパ、エンリツケ・ローシャ・リーマ、カルロス・シャーガスなどの科学者があ
る。

最近ではブラジルの医学、細菌学、生物化学の分野に傑出する人材が相次いで現われていることをつけ加える。

ポルトガル史年表及びブラジル史年表

ポルトガル史年表（一三八三―一七七七）

- 一三八三 第九代王ドン・フェルナンド死去。
- 一三八四 カステラのドン・ジョアンはポルトガル征服を企てる。
- 一三八五 ポルトガル国民は、アヴィス騎士団長ドン・ジョアンを王に顕揚。
- アルジュバロタの戦闘でドン・ジョアンはカステラ軍を敗る。
- 一三九四 ドン・エンリツケ王子誕生。
- 一四一一 ポルトガルとカステラの和平成る。
- 一四一五 セウタ攻略。
- 一四一六 マデーラ島の発見。
- 一四三一 ドン・エソリツケはアソーレスの拓殖を開始。
- ドン・ジョアン一世死去。
- 一四三二 ドン・ドアルテの治世はじまる。
- 一四三四 ジル・エネアスはアフリカのポジヤドール岬を突破。
- 一四三七 タンジェールの攻略。
- 一四三八 ドン・アフォンソ五世の即位。
- 一四四五 ヌーノ・トリストンはセネガンビアに到達。

- 一四五六 カダマストロはガンビア川で金鉱を発見。
- 一四六二 ペードロ・シントラはギネーで金を発見。
- 一四七一 ポルトガル人はタンジェールを完全に占領。
- 一四八一 ドン・ジョアン二世即位。
- 一四八二 ジオゴ・コソはコンゴ河口に到達。
- 一四八三 バルトロメウ・ジーンアスはアフリカ南端（喜望峰）への回航に成功。
- 一四九四 トルデシラス領土協定成る。
- 一四九五 ドン・マヌエル即位。
- 一四九七 ヴアスコ・ダ・ガーマのインド探検隊リスボアを出発。
- 一四九八 ヴアスコ・ダ・ガーマはカリカットに到着
- 一五〇五 フランシスコ・デ・アルメイダはインドに到着。
- 一五〇九 ポルトガル人はマラッカを探検。
- 一五一四 ポルトガル人は支那に到着。
- 一五二一 ドン・ジョアン三世即位。
- 一五四二 ポルトガル人は日本の種子島に到着。
- 一五四八 ポルトガル政府はブラジルに総督府の設置を決定。
- 一五五七 ドン・ジョアン三世死去。
- 一五五七 ドン・セバスチオン一世の治世はじまる。

一五七一 ポルトガル船以外の船舶によるポルトガル植
民地との貿易禁止。

一五七八 アルカセル・キビルでドン・セバスチオン戦
死、ドン・エンリツケ司教が後継王となる。

一五八〇 ドン・エンリツケ死去。

スペインのフィリッペ二世はポルトガルをス
ペインに併合、ブラジルはスペインの統治下
におかれる。

一五九八 フィリッペ三世の治世はじまる。

一六四〇 ポルトガルは革命をおこして自治権を復帰、
ドン・ジョアン四世が即位してブラガンサ王
朝の発生となる。

一六四二 海外領評議会が設けられる。

一七〇三 ポルトガルとイギリスのメスエソ条約締結さ
れる。

一七〇六 ドン・ジョアン五世の治世となる。

一七五〇 ドン・ジョゼ一世即位。

ポンバル侯政府首相となる。

一七七七 ドン・ジョゼ一世死去。

ドーナ・マリア一世即位。

ブラジル史年表（一五〇〇〜）

一五〇〇（四月二十二日）ペードロ・アルヴァレス・カブラルのインド探検隊はブラジルを発見、ヴェラ・クルース島と命名。

一五〇一 ブラジルの所在確認のために第一回探検隊が派遣された。

隊長アンデレ・ゴソサルベスは航海家アメリカ・ヴェスプッチを伴っていた。

一五〇三 第二回のブラジル探検はゴンサロ・コエリョとアメリカ・ヴェスプッチによっておこなわれた。

ポルトガルの豪商フェルノン・デ・ノローニャは染料パウ・ブラジル伐採のために三年契約でブラジルを借地した。

一五〇四 フランス人がブラジルの海岸に侵入してパウ・ブラジルの伐採をはじめた。

一五一六 ブラジルの海域防衛のためにクリストヴァン・ジャッケスが六隻の武装船をもって来航。

一五二一 ポルトガルの王ドン・マヌエル死去、ドン・

ジョアン三世即位。

一五二六 クリストヴァン・ジャツケス再度来航、パウ・ブラジルを積んだ数隻のフランス船を撃沈す。

一五三〇（十二月三日）貴族マルチン・アフォンソ・デ・ソーザのブラジル開拓団はリスボアを出発。

一五三二（一月二十二日）マルチン・アフォンソはサン・ビセンテ村を創設。甘蔗栽培に着手。

一五三四 ブラジルを一五に分割して世襲カピタニアを設け、それぞれの領主を任命。

一五四三 ブラズ・クーバスはサントスを創設。

一五四九（三月二十九日）ブラジルの初代総督トメー・デ・ソーザはバイアに到着。

マヌエル・ダ・ノブレガ神父ほか五名のジェズイットが参加していた。

（十一月一日）トードス・オス・サントス（諸聖人の目）を期してサルバドールの創設式を挙げる。

一五五一 サルバドールにカトリック教区が設けられ、

初代司教ドン・ペロ・フェルナンデス・サルジーニャが着任。

アフリカから黒奴の輸入はじまる。

一五五三 第二代総督ドアルテ・ダ・コスタ来任。

ジヨゼ・デ・アンシエタ修道士と五名のジェズイット同伴。

一五五四（一月一五日）マヌエル・ダ・ノブレガ神父はアンシエタ修道士の協力を得てサンパウロ・デ・ピラチニンガ村を創設。

一五五五 ニコラウ・デュラン・ヴィレガニョン率いるフランス軍はグワナバラ湾に侵入、セルジペ島を占領してフランス南極圏植民地の建設を企てる。

一五五六 司教ドン・ペロ・フェルナンデス・サルジーニャはポルトガルへ帰還のためサルバドールを出発、難船して土人に捕えられて食べられた。

一五五七 第三代総督メソ・デ・サーはサルバドールに着任。

一五六〇 フランス人と同盟を結んだ土人タモヨ族はポルトガル人を敵視し、サンパウロ村の襲撃をはじめた。

一五六三 ノブレガ神父はアンシエタを通訳としてウバツーバの土人部落を訪れ、和平交渉につとめる。

一五六五（三月一日）総督メソ・デ・サーの甥エスタシオ・デ・サーはボン・デ・アスーカル山麓近くに村を創設。

一五六七（一月二十日）エスタシオ・デ・サーと総督メソ・デ・サーの軍隊によつてフランス軍がリオから追放される。

当日の激戦でエスタシオ・デ・サーは顔面を毒矢で射たれ、三十日後に死去す。

一月二十日がサン・セバスチヨンの祭日とポルトガルの少年王ドン・セバスチヨンの誕生日であるところからサン・セバスチヨンド・リオ・デ・ジャネイロと命名されたのが現在のリオ市である。

一五七二 総督メソ・デ・サーが死去し、ブラジルは南北二つの総督区に分けられ北はサルバドル、南はリオに総督府がおかれた。

一五七七 二総督制が廃され、サルバドルが再び首都となる。

一五八〇 ポルトガルのドン・エソリツケ王が死去してアヴィス王朝が絶滅し、スペインのフィリッペ二世がポルトガルの王を兼ねる。ここにスペイン統治となり一六四〇年までつづく。

一五八五 最初のバンデーラ探検隊がサンパウロを基地として南部に向う。

イギリスの海賊ウイリアム・ホーキンスがサントスを攻撃す。

一五九一 イギリスの海賊トーマス・カヴェンジツシユはサン・ビセンテとサントスを襲撃して物質を略奪す。

一六一二 ダニエル・デ・ラトウシエーを司令官とするフランス軍がマラニョン島に侵入してサン・ルイス村を築き、フランス赤道圏植民地の建設を企てる。

一六一六 フランス軍はマラニョンから追放される。
フランシスコ・カルデーラ・カステロブランコはノッサ・セニョーラ・ド・ベレン要塞を構築。

それが現在のベレン市である。

一六二一 ポルトガル政府はブラジルをエスタード・ド・ブラジルとマラニョに二分する。

オランダの西インド会社が設立された。

一六二四 西インド会社の軍隊がサルバドールを占領。

一六二五 オランダ軍は一年の籠城でブラジル軍との戦いに敗れて降伏し、サルバドールから撤退

す。

一六二九 ラポーズ・タヴァレスとマヌエル・プレートのバンデiraはグワイラのジェズイット土民教化区を攻撃して数千の土人を捕獲し、奴隷とした。

一六三〇 西インド会社のオランダ軍はオランダとレシフェを襲撃占領す。

北東部の砂糖農園を脱走した黒奴はアラゴアスのパルマーレスに大規模のキロンボを築き、パルマーレス黒人共和国と呼ばれた。

一六三六 ラポーズ・タヴァレスはパラナとリオ・グランデ・ド・スールのミツソンエス地域を探検。西インド会社はブラジルの占領地の総督としてマウリシオ・ナッサウ伯をレシフェに派遣。

一六三八 オランダ軍はサルバドルを攻撃したが失敗におわる。

一六四〇 ポルトガルはスペイン統治を脱して自治権を復歸し、ドン・ジョアン四世が即位してブラガンサ王朝の発生となる。

一六四一 ポルトガルの王朝復歸を機に、サンパウロのスペイン系住民はアマドール・ブエノを王に

頭揚したが、当のアマドール・ブエノはそれを拒絶してポルトガル王への忠誠を誓い、サン・ベント修道院に隠れた。

一六四八 第一次グワララペス戦。

一六四九 第二次グワララペス戦。

ポルトガル政府はブラジル総合貿易会社を設立。

一六四八―五一 ラボーゾ・タヴァレスのバンデーラは一万二〇〇〇キロを踏破、ペルー・アンデスを征服。

一六七三 バルトロメウ・ブエノ・ダ・シルバ（アニヤンゲラ）はゴヤスの探検に当る。

一六七四 フェルノン・ジーアス・パエスの探検隊は宝石エメラルドの探索のためにミナスに向う。

一六八〇 リオの長官マヌエル・ローボはラプラタ川左岸にコロニア・ド・サクラメントを建設。

一六八二 ポルトガル政府はマラニョン貿易会社を設立。

一六八四 マラニョンのサン・ルイスにマヌエル・ベツクマンを主導者とする革命おこる。

一六九四 パルマーレス黒人共和国が撃滅される。

ミナスで金が発見され、バイアに最初の貨幣製造所が設けられる。

一七〇三 ポルトガルとイギリスのメスエン条約が締結される。

一七〇五 - 一七〇七 スペイン人はコロニア・ド・サクラメントを一〇年にわたって占領。

一七〇七 ミナスにエソボアバスの乱おこる。金山をめぐってサンパウロ人とポルトガル人の闘争が生じ、リオ・ダス・モルテス沿岸の原野でサンパウロ人三〇〇人が殺された。

一七一〇 レシフェにポルトガル人の商人とブラジル人との闘争マスカッテの乱を生ず。

一七一〇 デュガリ・トロウアン司令官のフランス軍がリオ市を侵略す。

一七二〇 ミナスにフリッペ・ドス・サントスの謀叛おこる。ミナスはサンパウロから離脱して独自のカピタニアとなる。

一七二七 仏領ギヤナからコーヒーがパラーに移植される。

一七四六 アソールレスから六〇家族の移民がブラジル南部の拓殖のために入れられる。

一七五〇 マドリード会議によつてコロニア・ド・サクラメントはスペインに、ミッソンエス地域はポルトガル領となる。

一七五九 ドン・ジョゼ一世の政府首相ポンバル侯は
ジェズイットをポルトガルの植民地（ブラジ
ルを含める）から追放。

一七六三 ブラジルの古都がバイアからリオに移され、
副王が任命される。

一七七七 サント・イルデフォンソ条約によってコロニ
ア・ド・サクラメントは依然としてスペイン
領とされ、ポルトガルはセーテ・ポーボス・
ダス・ミッソンエスの領有権を失なう。

一七八五 ドーナ・マリア一世はブラジルの工業禁止を
発令。

一七八九 ミナス革命の陰謀が発覚し、チラデデスほ
か二十数名の主謀者が逮捕される。

一七九二（四月二十一日）チラデデスはリオのサン・ド
ミンゴ広場で処刑される。

一七九七 バイアにフランス革命の影響をうけた社会革
命（仕立屋革命）の陰謀を発す。

一八〇八（一月二十二日）ドン・ジョアン（六世）のブ
ラジル移住団一万五〇〇〇人がバイアに到着。
ブラジルを友好団に開港。

（九月十日）ブラジル最初の新聞『ガゼッタ・ド・
リオ・デ・ジャネイロ』発行される。

ブラジルの工業解禁令公布。

バイアとリオに医学校が設立される。

一八一〇 ブラジルとイギリスの通商条約を調印。

リオの王室図書館開設。

一八一五 ブラジルはポルトガル・アルガルベス連合王国に昇格。

一八一六 フランス美術使節を招聘、王室美術学校設立。
ドーナ・マリア一世逝去。

一八一七 ペルナンブーコに共和革命おこる。
ドン・ジョアンの長男ドン・ペードロはオー
ストリーの王女マリア・レオポルジナと結婚。

一八一九―二〇 ポルトガルに憲法革命おこる。

一八二一 ドン・ジョアン六世はポルトガルに帰還。

長男ドン・ペードロをブラジルの摂政として
残す。

一八二二（一月九日）ドン・ペードロはブラジルに留る
べく、フィコ宣言をなす。

ドン・ペードロは組閣をし、ジョゼ・ボニファ
シオは内、外、司法の三大臣を兼ねる。

（九月七日）ドン・ペードロはサンパウロのイピ
ランガ丘でブラジルの独立宣言。

（十二月一日）ドン・ペードロは皇帝に即位。

一八二四（三月二十五日）ブラジル帝国憲法発布。

アメリカ合衆国ブラジルの独立を承認。

一八二五 ペルナンブーコに赤道連盟革命勃発。イギリスとポルトガルがブラジルの独立を承認。

（十二月五日）ドン・ペードロ・デ・アルカンタラ（ドン・ペードロ二世）誕生。

一八二六（十二月十一日）レオポルジナ皇后逝去。

一八二八 シスプラチナ県はウルグワイ共和国として独立。

一八二九（八月二日）ドン・ペードロ一世はバヴアリアの王女アメリカ・デ・ルーヒテンベルグ姫と再婚。

一八三一（四月七日）ドン・ペードロ一世は皇帝を退位。当時五才のドン・ペードロ・デ・アルカンタラに帝位を譲る。三人制執政官の統治となる。

一八三五 パラーにカバナーダの乱、リオ・グランデ・ド・スールにフアラポス革命おこる。

ジオゴ・アントニオ・フェージョ執政官となる。

一八三七 バイアにサビナーダの乱発生。

一八三八 マラニョンにバライアーダ革命おこる。

一八四〇（七月二十三日）ドン・ペードロ・デ・アルカ
ンタラ成年式を挙げる。

一八四一（七月十八日）ドン・ペードロ（二世）皇帝に
即位。

一八四三 ドン・ペードロ二世はイタリアのトレス・シ
シリー王家の息女テレザ・クリスチナと結
婚。

一八四八 ペルナンブーコにプライエーラ革命起こる。

一八五一 ウルグワイ戦争勃発。

一八五四 マウア男爵によってブラジル最初の鉄道（リ
オ・ペトロポリス鉄道）開通。

一八六四（十一月）パラグワイはブラジルに宣戦布告。

一八六七 イギリス資本のサンパウロ鉄道竣工。

一八七〇 パラグワイ戦争終息。

サンパウロのコーヒー耕主を中心に共和党が
結成される。

一八七一 ドン・ペードロ二世ヨーロッパ旅行に出発。

ベントレ・リーブレ令が公布され、ブラジル
生れの奴隷の子の自由が認められる

一八七六 ドン・ペードロ二世アメリカ訪問、次いで再
度のヨーロッパ旅行に向う。

一八八五 六〇才以上の奴隷の自由を認める法令が公布

される。

一八八七 ドン・ペードロ二世、第三回のヨーロッパ旅行に出立。

一八八八（五月十三日）イザベル皇女によって奴隷解放令公布される。

一八八九（十一月十五日）デオドロ・ダ・フォンセツカ元師は共和制宣言をなす。

（十一月十七日）ドン・ペードロと家族はヨーロッパに亡命。

一八九一 ブラジル共和国憲法発布、デオドロ元師は初代大統領に就任。

（十一月二十三日）デオドロ・ダ・フォンセツカは大統領を辞任、副大統領フロリアノ・ペーショットが後継大統領となる。

（十二月五日）ドン・ペードロ二世パリに逝去。

一八九三 リオ・グランデ・ド・スールにフェデラリスタの乱がおこったが、フロリアノ政府軍によって制圧された。

一八九四 プルデンテ・デ・モラエス大統領に就任。

一八九七 バイアのカヌードスにアントニオ・コソセリエーロをリーダーとする邪教徒の反乱勃発。

一年にわたって数千の政府軍が派遣されて平

定された。

一八九八 カンポス・サーレス大統領に就任、財政立直しに全力を挙げる。

一九〇三 大統領ロドリゲス・アルベスは科学者オズワルド・クルースをリオ連邦直轄区の衛生局長に任命して悪疫一掃に当る。

一九〇六 タウバテにおいてコーヒー生産者会議が催される。

一九〇七 アフォンソ・ペーナ大統領の任期にオランダのヘーグで第二回世界平和会議が開かれ、ブラジル全権としてルイ・バルボーザが出席した。

一九一二（十一月十五日）エルメス・ダ・フォンセッカ元帥大統領に就任。

一九一七 ウエソセスラウ・ブラス大統領の任期に第一次世界大戦となり、ブラジルは厳正中立を固持したが、ブラジル商船五隻がドイツ潜水艦に撃沈されたためにドイツに宣戦布告した。

一九二二 エピタシオ・ペツソア政府はブラジル独立百周年祭を挙行。

リオに陸軍将校の決起によるコパカナ要塞の反乱おこる。

アルツール・ベルナルデス大統領に就任。
サンパウロにおいて『近代芸術週間』が開催された。

一九二四 サンパウロにイジドロ・ジーアス・ローペス
將軍を司令官とする革命勃発。

一九二七 サンパウロに民主党が結成される。

一九二九 ニューヨークの株式暴落に生じた経済恐慌の
ため、ブラジルのコーヒー輸出は杜絶し、未
曽有の不況となる。

その時に次期大統領の選挙運動がはじまる。

一九三〇 ワシントン・ルイスの推した次期大統領候補
に端を発してヴァルガス革命となる。

ヴァルガスは軍中堅の支持を得て革命に成功
し、ワシントン・ルイス政権を打倒する。

ワシントン・ルイスはヨーロッパに亡命。

(十一月三日) ジェツリオ・ヴァルガスは臨時政
府元首となる。

一九三二 (七月九日) サンパウロに護憲革命起る。

一九三三 憲法制定審議会が召集される。

一九三四 外国移民二歩制限案が可決される。

(六月十六日) 憲法発布。

(六月十七日) ヴアルガス立憲政府発足。

一九三五（十一月）ナタルとレシフエに共産主義者の反乱おこる。

一九三七（十一月十日）エスタード・ノーボ（新国家体制）樹立。

一九三九 第二次世界大戦勃発。

一九四二（八月二十二日）ブラジルは連合国に加盟して参戦す。

一九四四（七月）マスカレーニヤス・デ・モラエス將軍を総司令とするヨーロッパ遠征軍がイタリアの戦線に出発。

一九四五 ヴオルタ・レドンダの国立製鉄所設立。

（十月二十九日）ヴァルガス下野。ヴァルガス独裁おわる。

一九四六（一月三十一日）エウリコ・ガスパール・ズトラ將軍は大統領に就任。

一九五〇（十月）ヴァルガスは史上最高の三八四万票で大統領に当選。

一九五一（一月三十一日）ヴァルガス大統領に就任。

一九五四（八月五日）トネレーロ事件おこる。

（八月二四日）ヴァルガスはカテテ宮で自決す。
副大統領ジョアン・カツフェ・フィーリヨ大統領に就任。

一九五六（一月三十一日）ジュセリノ・クビチエツク大統領就任式を挙げる。

一九六〇（四月二十一日）ブラジルの首都がブラジリアに遷される。

一九六一（一月三十一日）ジャニオ・クワドロスは大統領に就任。

（八月二十五日）ジャニオ・クワドロス大統領を辞任。

（九月八日）副大統領ジョアン・ゴラルが大統領に就任。

一九六四（三月十九日）サンパウロに”家庭と自由を守るため神とともに歩む”の市民のデモ行進がおこる。

（三月三十一日）軍部はジョアン・ゴラル政権を追放す。

（四月十五日）革命政権が樹立され、国会は大統領にウンベルト・デ・アレンカール・カステロ・ブランコ元帥を選出。

一九六七（三月十五日）アルツール・ダ・コスタ・エ・シルバ元帥が大統領に就任。

一九六九（八月三十一日）コスタ・エ・シルバ大統領は脳出血で倒れる。陸海空の三大臣が政務を代

行。

(十月三十日) エミリオ・ガラスタズー・メジ
シー将軍が大統領に就任。

一九七四(三月十五日) エルネスト・ガイゼル将軍は大
統領に就任。

参考文献

佐藤常蔵 愛土ブラジル

ブラジル風物記

ブラジルの移民史

鈴木南樹 埋もれ行く拓人の足跡

Alexandre de Herculano, *Historia de Por-
tugal*

Sergio Buarque de Holanda, *Historia Geral
da Civilizassao Brasileira*

Joao Capistrano de Abreu, *Capitulos de
Historia Colonial*

Fernando de Azevedo, A Cultura Brasileira
Americo Jacobina Lacombe, Historia do Brasil

Afonso de Taunay, Historia das Bandeiras
Paulistas

Brasil Bandecchi, Orgem do Latifundio no
Brasil

Oliveira Lima, O Imperio Brasileiro
Gilberto Freire, Ingleses no Brasil

Nelson Werneck Sodre ' Introdussao a
Revolussao Brasileira

Artur Ramos, O Negro na Civilizassao
Brasileira

Manuel Diegues Jr, Populassao a Assucar no
Nordeste do Brasil

Vianna Moog, Bandeirantes e Pioneiros

Heitor Lyra, Historia de D. Pedro III

Jose Virrissimof ' Historia da Literatura
Brasileira

Luiz Heitor, Musicas e Musicos do Brasil

Helio Vianna ' Historia Diplomatica do Brasil

Othon Henry Leonardos ' Geociencia do Brasil
(A Contribuissao Britanica)

Maurillio da Cunha ' Guerra do Paraguai

Aluizio Napoleao ' Centenario do Barassao
do Rio Branco

著者略歴

一九〇七年（明治四十年）北海道函館市に生れる。

一九二二年（大正十一年）ブラジルに移住。

農業、雑誌記者、会社員、工業家を経て現在に至る。常にジャーナリズムとの関係を保ち、新聞に寄稿をつづけた。世界史とブラジル史の研究は過去四十年にわたる。

サンパウロ歴史地理学会会員

ブラジル系譜学会会員

著書 『ブラジルの風味』『愛土ブラジル』『ブラジル風物記』『ブラジルの移民史』『ブラジル歴史の旅』その他

ブラジル全史

1985年3月 初版発行

著者 佐藤常蔵

発行者 奥山啓次

発行所 トップ・プレス印刷出版会社

Rua Muniz de Souza, 645, Cambuci

CEP 01534 Sao Paulo Brasil

Fone (011) 279 1 5522